
悪役令嬢は旦那様を痩せさせたい

はいあか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<https://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪役令嬢は旦那様を瘦せさせたい

【Nコード】

N8091EB

【作者名】

はいあか

【あらすじ】

第二王子の婚約者争奪戦に敗れた伯爵令嬢カミラ。王子は男爵令嬢を婚約者を選び、世間は二人の恋を運命と祝福した。その一方でカミラは恋の悪役に仕立て上げられた挙句、罰としてひどく太った醜い男。その容姿から、『沼地のヒキガエル』と呼ばれる辺境の領主アロイスと結婚させられる羽目に。

醜いカエル男の慰み者として、悪役令嬢は悲惨な末路を辿りました。なんてことにさせるもんか！ このまま大人しく結婚なんてし

ない。絶対に痩せさせていい男に磨き上げ、目に物を見せてやるんだから　！

／めげない少女と、見た目と裏腹に理知的な男の、ダイエットと食事と、手のひらで転がしてるんだか転がされているんだかな恋の話。ラブコメタグは外しました。

序章 1

シュトルム伯爵家令嬢、カミラ・シュトルムは悪役である。

ゾンネリヒト王国の第二王子ユリアンと、男爵令嬢リーゼロッテ・エンデとの、身分違いの恋。王国中を沸かした運命の恋は、人々の記憶に新しい。

数々の苦難を乗り越えた二人を、国中が祝福した。物語よりも物語のような二人の恋が、人々の口に上らない日はない。

そんな二人の恋物語に欠かせないのが、カミラ・シュトルムであった。

カミラはユリアン王子に横恋慕し、二人の恋路を邪魔し、苦難を与えた張本人である。彼女は王子の想い人であるリーゼロッテに嫉妬し、苛め抜いてきたのだ。

その悪事は、枚挙にいとまがない。

カミラはリーゼロッテの醜聞を社交界に流した。

『リーゼロッテは王家の権力だけを求めて、ユリアン王子に近付いている。本当は男好きで、毎晩男の元を渡り歩いている』

そんな偽りを、まるで事実のように吹聴した。

あるいは、カミラは権力でリーゼロッテの周囲を脅し、社交界から孤立させた。

さらには荒くれ者たちを雇い、リーゼロッテを襲わせようとまでしたらしい。幸い、ユリアン王子が助けに入ったために事なきを得たが、リーゼロッテはショックを受け、何日も寝込んでしまったらしい。

それ幸いと、カミラは伯爵家の力で、強引にユリアン王子との婚

約を結ぼうとした。リーゼロッテの醜聞を盾に、彼女は王家にふさわしくない。清廉潔白な自分こそが相応しいと、社交界から第一王子エッカルト、さらには国王陛下までもを丸め込み、この婚約が成り立つ直前までこぎつけた。

だが、そうまでしてもユリアン王子とリーゼロッテの仲は引き裂けなかった。

ユリアン王子とカミラの婚約が成り立とうとするまさにその時、ユリアン王子自身によって、カミラの罪がすべて白日の下にさらされたのだ。

カミラが流したリーゼロッテのおぞましい醜聞は、すべてカミラ自身のこと。

清廉潔白などんでもない、カミラこそが穢れた女であること。

リーゼロッテを執拗にいじめ、悪漢に襲わせるなどという、もはや人として許されない行為をしでかしたこと。

ユリアン王子の告げた真実に、国王陛下は目を覚まし、カミラとの婚約を取りやめた。そして代わりに、リーゼロッテをユリアン王子の婚約者として認めたのだ。

一方のカミラは、罪のないリーゼロッテを貶めたことで、王家の怒りを買うこととなった。父であるシュトルム伯爵もカミラを見限り、彼女はあわや着の身着のまま、国外追放となるところだった。だが、心優しいリーゼロッテは、カミラの行為を咎めなかった。

「同じ恋に落ちた者ですもの。カミラ様のお気持ちもわかりますわ」
リーゼロッテの優しさに心打たれ、ユリアン王子はカミラの国外追放を取りやめた。

数多の罪も問うことをやめ、王子がカミラに課した罰はただ一つ。王子の決めた者の元へと嫁ぎ、もう二度と二人の前に現れないことだった。

王子が定めたカミラの結婚相手は、アロイス・モンテナハト公爵。王家の分家筋であり、王国の北端に位置するモーントン領を代々治める名家とあれば、シュトルム伯爵家の結婚相手としては申し分ない。いや、いつそ格上すぎる相手だ。

だが、これは罰。アロイス・モンテナハトはただ身分の高い、裕福な男ではない。

社交界で噂される、彼の通り名は『沼地のヒキガエル』。

沼地は、瘴気に包まれた湿地帯であるモーントン領を示す。ヒキガエルは、モンテナハト卿の容姿のことだ。

ぶくぶくに太った巨大な体。吹き出物だらけの肌は醜く、太って輪郭の崩れた顔とあわせてヒキガエルのように見えるのだ。体の重たさからか、いつも汗にまみれ、じつとりと湿っているところも、この名前の所以である。

性格は暗く、誰とも言葉を交わそうとはしない。王家の重要な式典の時のみ、彼は沼地から上がり、この王都まで赴く。その際も誰もが遠巻きから眺めるのみだった。

遠目からでも、彼の異常さは際立っていた。大の大人の三倍はあろう横幅。沼地に浸ったような、常に湿った灰色の長髪。その髪の場合間からのぞく彼の目は、まるで感情のないカエルのよう。魔力を宿した赤い瞳は、見つめると心を抜かれてしまうと言われ、誰も目を合わせようとはしなかった。

そんなモンテナハト卿は、今年で二十三になる。そろそろ結婚を考えるべき年だ。社交界では、いったい誰が彼の結婚相手となって

しまうのか。王宮の幽霊に並ぶ『怖い話』として、貴族の令嬢たちの間でささやかれていた。

要は、厄介者をまとめて処理したのだ。

ユリアン王子の決定を、人々は歓迎した。

不気味で醜いモンテナハト卿と、貴族の令嬢たちは結婚をせずに済む。権力をかさに着て、リーゼロッテをえげつないほどいじめてきたカミラもまた、悪役にふさわしい末路を辿った。

王都の新聞各社は、この恋物語の文句なしの結末こそって書き連ね、号外を飛ばしたと言う。

序章 2

どうしても認められない。

いったいどうして私がこんな目に遭わなければならないのか。
見渡す限りの沼地を眺め、カミラは震える手を握りしめた。

確かに、王子の婚約者になりたかった。

だけど、それは年頃の娘ならみんな思っていたことだ。社交界で話をしていて、王子に憧れない人間なんてほとんどいなかったし、なにしろユリアン王子は、王家の中でも特に見た目が良かった。それに、堅物の第一王子に比べて、彼は気さくでユーモアがあつたし、なんというか、いかにも女性受けする性質だった。

確かに、『リーゼロッテ・エンデは男好きである』などという噂が流れたのはカミラのせいだ。

それだって、別にわざと流したわけではない。カミラはただ、リーゼロッテが王子以外の男と歩いている姿を見て、それを社交の場で話題に出しただけ。その話に尾ひれがつき、背びれもつに、ついに足までついて歩き出してしまったのだ。きっかけはカミラでも、えら呼吸から肺呼吸に進化し、自立して歩き出した噂話の責任までは取らなくなつていいだろう。

確かに、家の権力は使った。ガンガンに使った。

誘われていないお茶会への参加も、舞踏会で王子と最初に踊る権利も、両親に頼めば全部なんとかしてくれた。でもそれも、あるものを使ってなにが悪い。見目が良い人間が、美貌を武器にするようなものだ。歌や踊りが上手い人間が、それを使って王子に近付くの

はよくて、権力のなにがいけないというのか。

確かに、ちょっとやりすぎた。リーゼロッテと対立し、彼女を泣かせたのも、王子を怒らせたのも、両親を困らせたのも事実。

だけど、それもすべてカミラだけが悪いわけでもない。リーゼロッテの涙は嘔泣きだったし、カミラだって散々リーゼロッテに煮え湯を飲まされてきた。

大人しそうな顔をして、リーゼロッテは結構なものだ。カミラがリーゼロッテの悪口を言えば、彼女は五倍くらいにして罵り返してくる。リーゼロッテの噂以上に、カミラの悪い噂はそこかしこに流れていた。社交界を味方につけてカミラを孤立させたのも、リーゼロッテの方が先にしたことだ。それをやり返そうと、権力やら財力やらを使っただけに過ぎない。

それに、リーゼロッテの敵はカミラだけではない。カミラ以上にみんなさんリーゼロッテを悪しざまに罵っていた。むしろカミラは、言い過ぎだと咎めるくらいだった。それなのに、形成が悪くなると一転。みんなリーゼロッテの味方をし出した。いつまでも王子を諦められないカミラだけが孤立して、最後までリーゼロッテと対立してしまった。

確かに カミラは賢い行動をとれなかった。だけど、新聞に書き連ねられるほどの悪事をしたことなんてない。王子と男爵令嬢の運命的な恋物語の、体の良い悪役として仕立て上げられたただだ。

なのに、世間から鼻つまみ者になり、見るもおぞましい醜い男と結婚する羽目になり、今でも面白おかしく社交界で語られる。

こんな現実、とうてい認められるものではない。

だけど、世間の醜聞よりも、王都から追放されたことよりも、いまカミラの目の前にいる彼のことが、なにより認められない。

「カミラさん、いかがです？ 西の森で獲れた猪ですって。今の時期は脂がのついていて美味しいですよ」

モントン領、モンテナハト邸。丘の上から領土を見下ろす屋敷の中庭で、モンテナハト卿ことアロイスは、口に肉をほおばりながら言った。

アロイスの前には、猪一匹持ってきたのではないかという山のような肉が積まれていた。肉は骨が付いたまま、濃い焦げ色が付くまで焼かれている。アロイスの言う通り、見るからに脂が多く、その表面はてらてらと光っていた。

その山を、アロイスはナイフとフォークで器用に崩しながら食べる。首から垂らしたナプキンには、肉汁が跳ね、いくつもの染みを作っていた。だが、そんな些末なことなど気にならず、アロイスは実に美味しそうに肉を平らげていた。

カミラは、そんなアロイスから心持ち少し距離を取り、彼の巨体をじっとりと見やった。太陽は、西に傾きつつある昼下がり。今は朝食の時間でも、昼食の時間でも、もちろん夕食の時間でもない。

「アロイス様……私、お茶会だと言うから来たんですけれども」

「お茶、ああ、ありますよ！ お砂糖はいくつにしますか。五個、六個？」

カミラとアロイスは、一つの大きなテーブルをはさみ、向かい合って座っている。そのテーブルの上には、肉の影に隠れて、紅茶のポットと角砂糖の入った小瓶があった。

「アロイス様……私、言いましたよね。あなたとは結婚できないって」

「ええ、ええ。伺いました。もう何度も……」

カミラの言葉に、アロイスはしゅんとうなだれた。だからと言ってその巨体が小さくなるわけではなく、手が肉を離すわけでもない。「今の私相手には、とうてい誓いのキスなんてできない。だから、

痩せるまでは結婚できないと」

「そうです。それで、アロイス様。あなたはそれを聞いてなんと答えたか、覚えていらっしゃいますか？」

「もちろんです！ あなたのために、私は痩せてみせましょう。必ず、あなたと結婚してみせる」と

熱のこもった沼地のヒキガエルは、半ば立ち上がりながらそう言った。彼が動けばテーブルも揺れる。地響きみたいなその振動を前に、カミラは口元をほころばせた。

「だったら」

否、口元は笑みを作っていても、その顔は仮面のように無表情であつた。

「少しは痩せる努力をしろ、この肉ガエル　　！！」
カミラはそう叫び、肉とアロイスを引き離そうと、彼の腕をつかんだ。

その瞬間の、手のひらに感じるぬちよつとした感覚は忘れられない。肉とアロイス本人のどちらの油脂かわからないが、生粋のラードの感触であつた。

カミラにはどうしても認められない。

こんな肉厚なカエルと、どうやって神の前で誓いのキスなどできるものか。

他人の決めた相手と結婚することは致し方ない。もともとカミラも貴族の娘。政略結婚は、うすうす覚悟をしていたことだ。

だが一方で、カミラも十八歳のうら若き乙女。恋した相手との結婚は無理でも、最低限、カミラの中で譲れない一線がある。

そして相手のカエル男は、カミラの一線の外側にいたのだ。

だからそう、せめて、カミラがキスをできる容姿になるまで。太った体に荒れた肌、手入れをしない荒い髪。それと、まるで人

目を気にしない服装。すべて正してやらねばなるまい。

人並みになるまで、私が教育してやるわ……！！

おののくアロイスを見ながら、カミラは強く心に誓った。

沼地の広がるモーントン領。

濃い瘴気に包まれ、年中湿度の高いこの土地は、一方で魔石の産出地でもある。

沼地の底からあふれる瘴気は、強い魔力から発せられる。強い魔力は年月を経て結晶化し、魔石と呼ばれる宝石へと変化するのだ。ゆえに、瘴気の濃さは魔石の採掘量とも比例する。

魔石は、夜の明かりや夏の冷氣、冬の暖に利用される。あるいは船の推進力。最近では、歯車を動かすための動力としても使われる。人々の生活には欠かせないものだ。

モーントン領の魔石は魔力も高く、質も良い。沼地と呼ばれ避けられる一方で、魔石の人気は高く、その収益は領土を豊かにさせた。

その結果が、罪深い美食の文化である。

○

「アロイス様！ またそんな、肉の素を！！」

そう叫ぶカミラの前で、アロイスが嚙り付いたのは、肉の素こと炭水化物。小麦粉のかたまりを油で揚げた上、その表面を砂糖で塗り固めた凶悪極まりない食べ物。その名もドーナツである。

「い、いやしかしカミラさん。今日は夜まで仕事ですし、栄養を取らないと体が」

「体に栄養を余らせているじゃないですか！！」

全身の余剰な栄養を震わせて、アロイスがひえつと肩をすくめた。縮こまると、首周りの肉に顔が埋もれ、肉の襟巻のように見える。その襟巻の間から、じっとり汗がにじみ出るのを見て、カミラは内

心でうめいた。

「アロイス様、あなた一日に何食食べているかわかります？ 朝起きて食べて、朝食を食べて、昼食前に間食して、昼食食べて、おやつを食べて、夕食食べて、最後に夜食して！ 七食！ 普通の人の倍以上食べているんですよ！？」

しかも食べるものは、味付けが濃くて脂っこいものばかり。菓子は砂糖まみれで、菓子を食べているのか砂糖のかたまりを食べているのかわからないくらい。

カミラも裕福な生まれで、それなりに豊かな食生活を送ってきたが、こんな生活は初めてだ。むしろこれは、豊かというより、食暴力と言った方が近い。

濃い味と脂は暴力的で、重く挟るようにカミラの腹を殴りつける。おかげでカミラは、食が細ったくらいだ。

しかしアロイスは、カミラの想像の上に行く。

「カミラさん、それは違います。寝る前に簡単な食事をとっているので、正しくは八食です」

「このお肉！！！！」

当たり前のようなアロイスの発言に、カミラは思わず声を荒げました。それから、はつとして口を押える。これまでさんざん肉だの力エルだのと言ってきたカミラではあるが、時々ふと我に返って、「言い過ぎた」と手遅れ気味に自覚することがあった。

相手はこれでも、王家の血を引く公爵閣下だ。本来であれば、伯爵家の生まれで、そのうえ五つも年下のカミラが口答えをできる相手ではない。

しかし、アロイスはカミラの暴言をもともとせず、笑いながら二口目をかじっていた。まあまあ、などとなだめるように、砂糖で汚れた肉厚な手を振る。カミラはめまいがした。

「せっかく作ってくれたものを、残すのも忍びないじゃないですか。今日のところは見逃してください。明日から気を付けますから」

アロイスが笑えば、全身の肉が震える。まるきり、腹を膨らませ

たヒキガエルだ。

こんな男が、カミラの未来の夫なのである。

思い返せば、最初からアロイスはこんな調子だった。

七日前。カミラがモントン領に来たばかりのこと。彼の余りにおぞましい容姿に顔をそらしたときも、挨拶のキスを断ったときも、彼はカミラを咎めなかった。

カミラが、「結婚できない」と言ったときも同様だ。これほど醜い男と結婚するくらいなら、殺された方がましだ。そんな覚悟を決めてまで告げた言葉さえ、アロイスは困ったように笑うだけで、受け流したのだ。

よく言えば、器が大きく寛容であるとも言える。だけど悪く言えば、気が小さく、押しに弱い。カミラが怒れば、アロイスは困ったように肩をすくめ、嵐が過ぎるのをやり過ごすように黙る。カミラの言葉に、アロイスは一切怒らず、反論もほとんどしない。うんうんと頷き、「努力します」と返すだけだ。

しかし、その努力をカミラは目にしたことがない。努力すると言った口で、湯水のように肉を飲み、菓子を食べることをやめられない。その姿は、獣とどこが違うのか。カミラにはわからなかった。

あんな男と、どうやって結婚できるというの。

アロイスの執務室から出ると、カミラはうつむいて息を吐いた。閉まりきった扉に背を向けて、一人肩を落とす。きっと部屋の中では、ようやくカミラを追い出せたと喜びながら、アロイスがドーナツを食べているのだろう。

砂糖まみれの手。食べかすで汚れた床。吸い込まれるように消え

ていくドーナツ。思い返すだけで、カミラの身が震える。

距離を置き、言葉を交わすだけならまだ良い。アロイスは噂ほど暗い性格ではないし、気が弱くても、受け答えははつきりしている。けど夫婦となるなら別問題だ。

夫婦になれば、いずれはあの分厚い手が、ドーナツでも掴むかのように、カミラに触れるのだ。ヒキガエルのような顔で、カミラにキスをするのだ。彼の脂の光る肌に、カミラは触れなくてはならないのだ。

自分の想像に背筋を寒くし、カミラは慌てて首を振った。

太ったままで結婚なんて、絶対にしないわ……！！

カミラがアロイスと結婚したと知って、高笑いするリーゼロッテや社交界の人間たちの姿が頭に浮かぶ。最初から仲の悪かったリーゼロッテはさておいて、はじめは伯爵家のカミラに媚びながら、えげつない手のひら返しを見せた者たちに、笑い者にされるのは度し難い。あんな奴ら思い通りになんてなるものか。

「諦めたりなんかしない。ぜったい、目に物を見せてやるわ……！」

アロイスも、あれで王家の血を引く一人。王家の人間はみな、容姿に優れた者ばかり。となると、アロイスだって痩せればもしかするかもしれない。

特に、彼の灰色の髪も、強い魔力を帯びた赤い瞳も、王族だけが持つ特殊なもの。分家ではあるものの、王家の血を色濃く引いているとも言える。

「そうになると、とにかくまずは痩せさせないと……。健康にも悪いし、あれだけ肉がついていたら、元が良くても台無しだわ」

「なにが台無しですって？」

「ひいっ」

不意に割って入った声に、カミラは思わず悲鳴を上げた。慌てて辺りを見回せば、ほの暗い燭台に照らされた廊下の先に、一人の中年の女が立っていた。

「アロイス様に、いったい何の文句があるのです」

長年モンテナハト家に使える、侍女長のゲルダだ。アロイスとは打って変わって痩身で、きつちりとまとめた髪と、眉間に寄せられた深い皺と相まって、きつい印象を与える。

「夜遅くまで仕事をされるアロイス様の邪魔をしていたのですか」

「い、いえ」

「勤勉なアロイス様の数少ない楽しみを奪うつもりでしたか」

「そういうわけでは……」

ゲルダは厳しい視線でカミラを見据えていた。枯れたような濁った緑の瞳には、あらわな不快感が宿る。

「あなたはご自分のお立場を理解されているのですか。ユリアン王子殿下に懸想し、殿下の想い人を貶めた、悪女」

カミラの肩が跳ねる。反射的に顔を上げ、ゲルダを睨みつけるが、彼女はまるで意にも介さない。死にかけた虫を見るように、カミラを瞳に映すだけだ。

「ユリアン殿下が慈悲を与え、アロイス様が寛大であつたから、あなたは今、自由が許されているにすぎません。さもなければあなたなど、どこかで野垂れ死んでいたことでしょう。ここにいられることを感謝し、出過ぎた真似は慎みなさい」

「な……っ」

反論しようと口を開くが、続く言葉は出てこなかった。確かに、カミラの立場はゲルダの言う通りだ。世間の人々にとって、カミラはすつかり『悪役』で、国外追放まで望まれた身の上。今こうして自由に生きていられるだけで、感謝をしなければならぬだろう

カミラが、本当に『悪役』であるならば。

「決して、余計なことをしてはいけません。アロイス様に見捨てられれば、あなたは生きてはいけません。そのこと、ゆめゆめお忘れのなきように」

ゲルダはそう言い切ると、啞然とするカミラを横目に執務室の扉を開け、中へと入って行ってしまった。

ゲルダの消えた部屋の前。呆然と一人立つカミラの横を、屋敷の侍女二人が通り過ぎる。彼女たちはカミラに一瞥をくれると、挨拶をするでもなく足早に去っていった。

「ね、今のがあれ？」

その去り際、二人の侍女の囁き合う声が、カミラの耳に届く。

「噂の悪役女つてやつ？ やっぱり悪そうな顔してるのね」

「アロイス様もおかわいそう。いくら見た目に難ありでも、もうちょつといい娘をお嫁にできるでしょうに」

「じゃあ、あなたがお嫁になりなさいよ」

「やだあ、冗談きついわ」

夜の静まり返った廊下は、うかつな侍女たちのおしゃべりが思いのほか響く。気が付かない侍女たちは、くすくす笑い合いながら屋敷の奥へと消えて行った。

少女たちの嘲笑をかき消すように、湿った夜の風が吹き抜ける。
カミラは一人、啞然とその場に立ち尽くしていた。

親愛なるお従姉さまへ

カミラお従姉さま、お久しぶりです。

モーントン領での暮らしはいかがですか？

王都では、今もお従姉さまの噂でもちきりです。新聞では、すでにお従姉さまに懐妊の兆しあり、などと書かれています。すが、本当でしょうか。本当なら、とても素晴らしいことですね。

いったい産まれてくるのは……………人間でしょうか。それとも、オタマジャクシ？

それにしても、お従姉さまがモーントン領へ行かれてから、もう七日も経ったのです。この手紙が届くころには、さらに三日ぐらいが過ぎていくでしょうか。

そのころには、ユリアン王子とリーゼロッテさんの正式な婚約が行われているでしょう。リーゼロッテさんはユリアン王子からドレスや飾りを送られているそうで、お会いするたびにため息が出るほど美しくなっています。きっと、愛される喜びが、より彼女を引き立てているのでしょうね。

愛されると言えば、お従姉さまも同じですね。モンテナハト卿との生活はいかがでしょう。きっと、さぞや愛されて美しくなれていることでしょう。いくら沼地に住むヒギエルみたいなお姿とはいえ、愛は愛ですもの。お従姉さまも今は、沼地にふさわしい美貌を手に入れられているでしょう。本当に羨ましいと、お友だちとみんなで、いつもお話ししています。

王家の血を引かれ、公爵の地位まで持たれるモンテナハト卿と結婚されるなんて、お従姉さまは幸せ者ですね。ユリアン王子には嫌

われてしまいましたし、伯父さまや伯母さまには縁を切られてしまいましたけれど、それでよかったのだと思います。お従姉さまは、お従姉さまに本当にふさわしい相手と出会ったことができたのですもの。

ご容姿に乏しいモンテナハト卿と、世間からの嫌われ者であるお従姉さま、どちらも欠けたもの同士、お互いがお互いを補い合えるような関係で、誰も間に入る隙なんてないでしょう。ユリアン王子は今も、お従姉さまを許してはいらっしゃらないようですが、モンテナハト卿がいらっしゃる今となつては、些細なことですよ。

そうそう、わたくしも羨んでばかりではいられませんわ。実は、わたくしも先日、婚約をすることが決まりました。

相手はギンター伯爵家のダミアンさま。モンテナハト卿に比べて、ずっと地位が低いので恥ずかしいですが、ギンター伯爵家の跡取りでいらっしゃいますの。優しく、少し痩せ気味の、涼しげなお顔をお持ちの方です。素敵な方なのだけれど、とても女性に人氣があつて、わたくし、いつもやきもきしてしまいます。モンテナハト卿みたいに、そんな心配がなければと思うことがあります。

……ごめんなさい、またお従姉さまを羨んでしまいましたわ。いつも、ついついお従姉さまの話にばかりなつてしまうの。お従姉さまが今、沼地でどんな幸せな暮らしをしているのか、いつも氣になつて仕方がないせいでしょね。

いずれ、わたくしが結婚をしたら、お従姉さまのもとへ遊びに行つても良いでしょうか。積もる話が山のようにありますの。夫も連れて、顔を合わせてお話がしたいわ。そのときは、モンテナハト卿をヒキガエルと見間違えないよう、名札を付けていただくようお願いしておいてくださいね。

あなたのかわいい従妹　テレゼより

追伸

伯父さまと伯母さまからお手紙は届きましたか？ お二人ってば、いつも私ばかり気にかけられて、まるでお従姉さまを忘れてしまったのではないかと思うほど。お手紙だけでも書くようにってお伝えしたのだけれど……まさか、届いてないなんてありませんよね？

久々に王都から届いた手紙を、カミラは丁寧に破り捨てた。

そもそも、手紙を開いたこと自体が間違いだった。昔から、従妹のテレゼはなにかとカミラを敵視していたのだ。カミラの趣味や、やることなすこと逐一馬鹿にしてきた彼女が、今の状況に高笑いをしていることくらい、わかりきっていたはずだった。

それなのに、差出人の名前を確認したにもかかわらず手紙を開けてしまったのは、王都を懐かしく思ってしまったせいだ。

まだ、王都を離れてから十日。モンテナハト邸でのカミラの立場は、保留中の花嫁候補という、実に中途半端なものだった。客室を居室にと与えられ、日々不自由なく、それなりに丁寧に扱われてはいるものの、よそよそしいというか、遠巻きにされているというかなんだか壁を感じる。

それに、王都での悪い噂は、この遠いモーントン領にも伝わっているのだ。

年配の使用人たちは眉をひそめ、若い使用人たちは見世物でも見るような視線を向ける。おしゃべりな侍女たちが、カミラを見ながらこそそ笑い合っているのは知っている。誰が今日、カミラの世話をするのか、押し付け合っているのも知っている。ゲルダのよう

に直接、カミラに嫌悪を向けてくる者も、少なくはない。

このモントン領には、カミラの親しい侍女も、友人もない。質はよいけど寝慣れないベッドと、自分のものは何一つない部屋。初めて袖を通す服。湿気の強い、異郷の風。

窓の外を眺めても、王都は遠く、影さえも見えない。カミラの心を慰めるものは、どこにもいないのだ。

そんなカミラに、従妹の手紙は追い打ちをかける。

テレゼはカミラのことをよく知っているはずなのに　いや、よく知っているからこそ、この手紙なのだ。小さなころから、カミラのことが大嫌いなテレゼは、きつと今頃、笑いが止まらないことだろう。

甘え上手で、誰からかわいがられる従妹のテレゼ。カミラの両親でさえ、カミラよりもテレゼをかわいがっているくらいだった。一方で、敵とみなした相手には容赦なく、人好きのする容姿と懐に入り込む話術で、相手の周囲から人を奪っていく。テレゼの敵はいつも、最後は孤立し、耐えかねて逃げていく。

彼女にとって、負けん気が強く、いつまでもテレゼの目の前に居座るカミラは、さぞや目障りだったことだろう。リーゼロッテ以上に、彼女はカミラの処遇を喜んでいるに違いない。

手紙にある通り、両親からの手紙はカミラに届いてはいない。きつと、テレゼに夢中なのだ。

カミラは誰からも惜しまれず、嘲笑され、新聞記事には、悪役女の痛快な末路として描かれる。カミラの心中なんて、誰も知らない。哀れにも思わない。

「ぐ」

カミラは目を閉じた。カミラに与えられた、モンテナハト邸三階の客間。その窓辺で、沼地の風を浴びながら、息を吐く。

「ぐっ……」

唇を噛みしめ、少しの間。吐いた分だけ、ゆっくりと吸う。それ

から、破った手紙を握りしめた。

「ううあああああ！　悔しい

！！」

窓辺から外に向けて、カミラは叫んだ。手に持った手紙は、そのまま窓の外へ投げつける。ちぎれた破片が風に乗る、ほうほうに散っていった。

「私のなにが悪いっていうのよ！！　そこまで悪いことしてないでしょ！？」

ユリアン王子に憧れた。それでリーゼロッテと対立した。多少は悪口も言ったし、権力を使って、王子に近付こうとした。だけど、それだけだ。

人を傷つけるようなことはしなかった。リーゼロッテを暴漢に襲わせたなどと世間で言われているが、そんなことしたことも、考えたこともない。

悪口や対立は、住み慣れた土地も追われ、両親や友人たちとも離され、想い人の手によって、沼地で醜い男と結婚をさせられそうになるほど、悪いことなのだろうか。こうして人から馬鹿にされ、笑われるだけのことなのか。

「今に見てなさいよ！　このまま結婚なんてするものですかー！」

客間から見える景色は、午睡の庭と、街へ続くなだらかな丘。庭師の男が遠くに見えるが、人の姿はそれだけだ。きっと、カミラの声は誰も効いてはいないだろう。

だけど、聞こえていたって構うものかとカミラは思う。この胸に渦巻く震えを、叫ばずにどうやって止められると言うのだろうか。もちろん、後先なんて考えてはいない。

「みんな、逆に笑いものにしてやるんだから！　リーゼロッテも、テレーゼも　ユリアン殿下だってー！」

そのためであれば、あの梃子でも動かない鈍重なアロイスを動かして見せる。なにを言ってもまるで聞かず、言い訳ばかりの男だろ

うと、諦めるものか。

人並みなんて甘いことはもう言わない。みんなが悔しがるくらい、カミラをアロイスの元へやったことを後悔するくらい、いい男に変えてやるんだから。

「負けるもんか

！！」

異郷の空に向け、カミラはひととき大きく叫んだ。

アロイスを痩せさせるために、まず何をすればいいか。
正直、するべきことが多すぎて、カミラは頭が痛くなる。

アロイスの食事は日に八食。朝早く起きて食事をし、カミラが起きたころにもう一度朝食。昼までは仕事をしながら間食、昼ご飯を食べた後は、訪問客の相手をしながらお茶をする。陽がくれれば夕食を食べ、夜食とともに仕事をした後は、就寝前にもう一度食べる。人間の体に収まる食事量とは思えない。逆に言えば、それだけ食べるからこそ、アロイスの体は人間とは思えないほど大きいのだ。

それに、その八食で出される食事は、冗談みたいに量が多く、どれもこれも脂っこいものが多い。おまけに味付けもやたらに濃い。野菜も少なく、肉ばかりだ。カミラはアロイスと同じ食事がとれず、給仕に頼んで早々に別メニューにしてもらっていた。

そのときも、「旦那様と同じものは食べられないと言つのですか」と嫌味を言われてしまったが、舌がしびれるような味を食べ続けるほうが異常だろう。

間食で出される菓子の類は、砂糖のかたまりだ。素材の味も料理の腕も、すべてを破壊する甘味は、もともと甘いものが好きなカミラでさえ、一口以上食べられないほどだった。

さらに、そんな生活をしているにも関わらず、アロイスはほとんど家から外へ出ない。せいぜい、カミラとお茶会をするために中庭に出るか、領内の魔石産出現場を視察しに行くくらいだ。趣味と言えば、食えることと本を読むこと。見た目通り人と話すことは苦手らしく、王都から夜会や舞踏会の招待状が来ても、丁寧にお断りの

手紙を返すだけだった。

ふむ、とカミラは自室でひとり息を吐く。

まとめるとつまり、こういう感じだろうか。

一、食事を減らす。

八食は多すぎる。多すぎる、などと言でくくっていいのかわからないくらいに多い。絶食しろとは言わない。まずは一食でもいいから、減らしてみる。それから徐々に、人並みの量に合わせていくべきだ。

二、食事の内容を変える。

脂ばかり食べていれば、体が脂っぽくなるのも当然。砂糖も多すぎる。塩も辛すぎる。カミラから言わせれば、あんなものは料理も失格だ。甘すぎ、辛すぎ、脂すぎで、味なんてわかったものではない。

だいたい、甘いものを食べたなら太るなんてことは、子供だって知っている。目標は脂半分、砂糖半分、ついでに塩も半分。これだけでもだいぶましになる。

三、運動をする。

言わずもがな。引きこもって食べ続ければ太るのは自明の理。まずは外に出る。歩く。そのうち走らせてみよう。

四、人前が出る。

人前に立つとなれば、自分を飾らなければならない。人前に出ても恥じないように、容姿を整えるものだ。太った体は引き締めるだろう。その上で、脂ぎった髪を整え、何年も着古したシャツを着替えてくれるようになったら言うことはない。

すぐに思い浮かぶのはこんなところだろうか。

それより絶食させて外を走らせた方がいいのでは？

などと内心で思いはしたものの、カミラはすぐに却下した。

自制心のない体に、我慢を強いる無理な減量は禁物。すぐに音を上げるに決まっている。

我慢ができないからこそそのだらしない肉なのである。

徐々にでいいわ。成果は急がないわよ。

先が長いのは覚悟の上。

まずは一枚、あの分厚い肉の皮を剥がしてやるのだ。

そういうことで、まずは『一、食事量を減らす』から。

「アロイス様、今日のおやつは止めましょう」

カミラがアロイス減量の作戦を練った翌日。モンテナハト邸に来てからはすっかり日課となっていた、午後のお茶の時間。カミラは用意された茶菓子を上げ上げてそう言った。

今日の菓子は、以前の茶会で出された肉とは打って変わって、ちゃんとした菓子だった。砂糖だらけのドーナツでもない。きつね色の焼き目が美しく、少し形の不揃いな、ごく普通のバスケットだ。大きなバスケットに、溢れるほどに詰め込まれているのは。

いくら普通のバスケットでも、バスケットいっぱい食べれば太るに決まっているわ。

抱えるほどの大きさの、カミラの頭がまるごと入るほどのバスケット。アロイスから遠ざけるために手に持ってみて、その重みに気付かせられる。

全部食べようだなんて、正気の沙汰ではない。だが、アロイスはその狂気の沙汰をやつてのけるのだ。

「私と結婚するために、痩せるおつもりはあるんですね？」

「も、もちろんです！」

アロイスの返事だけはいつもよい。

「なら、こんなものは食べてはいけません。このまま厨房まで持つて帰ります」

「ええっ、し、しかし」

カミラの断言に、アロイスは戸惑ったように顔をしかめた。所在なさそうな手が、近くにあった角砂糖の山を掴み、自身のティーカップに落とす。

「しかし、それではせっかく作ってくれた料理人に申し訳が立ちません」

「料理人は作ることが仕事なんですから、気になさる必要なんてありません！」

料理人のすることは、料理を作るまでだ。そこから先がどうなるかは、料理人の範疇ではない。そもそも、食べきれない量を作る料理人が悪いのだ。いや、アロイスなら食べきれから、この量を作ってしまうのか？

「いえ、いえ、カミラさん。それは違います」

そろそろ、バスケットの重みに耐えかね、少し手が震えてきたカミラに対し、アロイスは妙にまじめな顔で首を横に振った。

「料理を作ることが仕事だからこそ、その仕事の結果に敬意を払わなければなりません。料理を作るだけなら誰でもできます。だけど、彼らはそれを仕事にし、対価を得ている。その違いは、作り上げたものの価値です。彼らの作る料理には価値がある。捨ててしまうことは、料理人としての価値を無下にすると同じことです」

「え、ええと……」

「食べてみてください。今日のお菓子は、特別なんです。あなたの口にも合うと思いますよ」

そう言われて、カミラは少しのためらいの後、バスケットを茶会のテーブルの上に戻した。それから、ビスケットを一枚手に取り、かじってみる。

「……………素朴な味だわ」

たしかに、カミラ好みの味である。砕いたナッツが、荒く曳かれた小麦の生地混ぜていて、ざっくりとした歯ごたえの良さを与えている。

「そうでしょう。なんだか、どこかで食べたことがあるような味で、妙に気に入ってしまったんです」

「でも、料理人の味じゃないわ。まるで、自分で作ったみたい」

カミラの感想に、アロイスは微笑んだ。

「よくわかりましたね。これは料理人の料理ではありません。モーションで孤児院を営むおばあさんが作ったものなんです。おじいさんに先立たれて、一人で切り盛りされているんですよ」

だが、その孤児院も経営は芳しくない。もともと、老夫婦が捨てられた幼い子供を憐れんで、拾って育てると言うことを繰り返して、いつの間にか子供が増えたと言うだけの施設だ。採算なんて度外視だった。だが、子供が増えた今になって、「みんなを育てられない」なんて言えない。

困り果てていたところへ、アロイスが寄付を申し出た。

老婆はしかし、寄付を拒んだ。対価なしに金をもらっては、子供たちに示しがつかない、と。孤児院を出た子供たちの未来は厳しい。だが、施しを受けて生きようにはなつてほしくなかったのだ。

だからアロイスは、老婆の作ったビスケットに対し、金を払うことにした。寄付を申し出に孤児院を訪問したとき、茶請けに出されたものを気に入った。金を出す価値がある。そう老婆を説得した。

ビスケットは、孤児院の近くの森で獲れた木の実を練り込んでいる。老婆が老いた手で生地をこね、子供たちが形を作っているのだと言う。

「だから、形が不ぞろいなね……」

ビスケットを手にしたまま、カミラは唇を尖らせた。きれいな丸い形ではなく、ときどき兎や犬のような、耳のついた形があるのも子供らしい。

きつと大騒ぎしながら作ったんだろうなあ。ときどきしながらビスケットをアロイスに渡して、お金の価値を知るんだろうなあ。などと想像してしまうと、とてもビスケットを捨てられない。万が一にも、食べられることなく碎かれ、ゴミとして捨てられたビスケットを子供たちが見てしまったら？

小さな料理人たちの成果物。その価値は味や見た目の巧拙だけではない。その心、その手が作ったという事実もまた、一つの価値なのだ。

「納得いただけましたか？」

アロイスは丸い体で苦笑して、バスケットに手を伸ばした。そしてバスケットをわしづかみ、まとめて口に放り込む。思わず顔をしかめたくなる食べっぷりだ。

カミラが何も言えずにいると、アロイスは小さく「ああ、なるほど」と、なにか心得たようにつぶやいた。

「あなたが存外、素直な方で助かりました」

肉に埋もれた目を細め、アロイスは飲むようにバスケットを食べる。笑っているようで笑っていない。その一瞬の表情に、カミラはおや、と思った。

もしかして私、丸め込まれたのかしら……。

まさか。とカミラはすぐに首を振る。見た目からして理知とは無縁の、鈍重な男だ。小心者だし、カミラが怒ればすぐに首を縮めて震えあがる。

そんな男が、カミラをいのように転がしたりなどできるものか。

懲りずに次。『二、食事の内容を変える』だ。

モントン領は豊かとはいえ、砂糖も脂もぜいたく品であることには違いない。特に真っ白に精錬された砂糖は、まず庶民の手には入らない。

カミラの実家も伯爵家。シュトルム伯爵ほどの家格であれば、不自由な程度に砂糖を使うことはできたが、それでも高価なものという認識があった。

それを、アロイスは湯水のように使う。湯水。比喻ではない。紅茶に溶かし込む砂糖の量は、元の紅茶の体積よりも多いくらい。茶葉の味を無視した暴挙である。

味付けは暴力的に濃い。沼地のモントン領には塩の産出がなく、領外からの輸入に頼っているにも関わらず、惜しげなく料理に注ぎこまれている。あれでは塩のかたまりをかじっているのと変わらないだろう。

以前、アロイスはカミラに、料理人の価値は料理の価値だと言った。が、冷静になって考えてみれば、こんな味付けでは誰が作っても変わらない。味も感じない塩辛さに、料理が泣いているだろう。

モンテナハト邸に来た当初。アロイスと同じ料理を出されたカミラは、そのあまりの味の濃さに腹を下したことがある。これでは、体にだって悪いはずだ。

しかし、食事の内容を変えるためには誰に言えばいいのだろう。アロイスに言おう、と真っ先に考えたが、ふとカミラは思いとどまった。先日のがあったせいで、どうせ、アロイスに言っても無駄ではないかと思ってしまうたのだ。

アロイスでなければ、厨房の料理人か。あるいはアロイスの生活を取り仕切る　　侍女長のゲルダだろうか。

嫌だ。

すごく嫌だ。話しかけたくない。

だって、カミラを敵視しているゲルダのことだ。話を聞いてくれるはずがない。

だが、料理人に話をすれば、自動的にゲルダにも伝わるだろう。料理のメニューも材料も、料理人一人で管理しているわけではない。急に砂糖の消費量が減ったら怪しむだろうし、メニューが変われば給仕の使用人も気がつく。

なにより、ゲルダに黙ってアロイスの生活に口出しをするのが恐ろしい。ゲルダのことだ。必ずあの空恐ろしい態度で、カミラに詰め寄るに違いない。

それなら、はじめから打ち明けた方がいくらかマシというものだ。

……致し方ないわ。

尻込みしていても、アロイスが痩せることはない。これもひとえにカミラ自身のため、やらねばなるまい。

それに、ゲルダはモンテナハト家の忠実な侍女。アロイスの爛れた食生活に少しは思うところはあろう。もしかしたら、あつさりカミラの要求を受け入れてくれるかもしれない。

「最高のものを、惜しむことなく使うように。これが今は亡き旦那様と奥様のお言葉です」

もちろん、あつさりとはいかなかった。

アロイスの食事について注進したカミラに対し、ゲルダはいつものように冷徹な態度を返した。

「最高の脂、最高の砂糖、最高の塩。ふんだんに使い、誇りあるモンテナハト家として、食に決して困らせることのないように。旦那

様と奥様は、いつもそう仰られていました」

モンテナハト家の先代。アロイスの両親は、すでにこの世にはいない。アロイスが十五歳のころに、事故で亡くなったのだと言う。それからはアロイスがモンテナハト公爵の地位を継いだが、亡くなつて八年たった今でも、ゲルダのような古参の使用人たちからは、『旦那様』『奥様』と呼ばれ続けていた。

先代も、アロイス同様、ほとんど領地から外に出なかったため、王都ではその人物像についてあまり知られてはいない。アロイスからも特に話を聞いたことはなく、カミラはせいぜい、使用人たちから慕われていたらしい、ということくらいしかわからない。

でも、きつとめちやくちやに甘やかしたんだわ。

そうでもなければ、あんな体型にはなるまい。食べたいものを食べたいだけ食べさせた結果、自制心なく食べ続ける精神を育んでしまったのだ。

「ふんだんにと言つても限度があるでしょう？ あんな味付けじゃあ、材料がかわいそうだわ。あれなら、私の方が」

言いかけて、カミラは慌てて口をつぐむ。危うく、妙なことを口走りそうになった。ごまかすように首を振る。

「先代様だつて、アロイス様の今のお姿をご覧になったら、嘆かれるんじゃないかしら」

「あなたになにがわかると言つのです」

ゲルダはぴしゃりとそう言った。ただでさえ冷たい態度が、余計に固く強張ってしまったようだ。

「アロイス様がモンテナハト家の当主として、恥じることのないように。食事は、旦那様と奥様が残されたご意思　いわば、親から子への愛です。あなたはそれを、無下にするといつのですか。望まれてもいないのに他所から来た、あなたが」

ぐう……。

そうまで言われては、ぐうの音も出ない。

かたくななゲルダにはそれ以上言葉を次げる余地もなく、カミラ

はすごすごと退散するほかになかった。

そうになると、次は『三、運動をする』だろうか。

正直、あの巨体が運動する姿をカミラは想像ができない。ほぼ樽と変わらない体型で、歩いていることが不思議になるくらいだ。アロイスが重たげに歩くとき、彼の周囲はかすかに揺れる。はじめのうちは地震かと怯えていたカミラも、今では本物の地震のときさえ、「ああ、アロイスが歩いているのだ」と思うようになってしまった。しかし、痩せるためには運動は不可欠。しかも、テレーゼが羨むような男にするためには、適度な筋肉も必須だ。動かざる山を、動かさざるを得まい。

アロイスとカミラが対面するのは、だいたいが食事の時だった。

食事の時と言っても、アロイスは四六時中ものを食べている。その中で一緒に過ごすのは、常識的な食事の時間。すなわち、朝、昼、夜と茶会だ。

もつとも、アロイスとカミラの生活はそこまで合わない。カミラは半客人扱いのため、日々ほとんどすることがないが、公爵であるアロイスはなにかと予定が入るのだ。

そんな中で、茶会の時間だけはどうにかしてカミラに合わせてくれるのは、アロイスなりに気を使っていることなのだろう。

そんなところに気を遣うくらいなら、体型に気を使ってほしいとカミラは思う。

「アロイス様は、体を動かす趣味はお持ちです？」
よく晴れた日の茶会で、カミラは尋ねてみた。直球で「運動しろ」と言わないのは、カミラなりの工夫である。カミラだって学習するのだ。

今日の菓子は、砂糖を塗り固めたケーキだ。スポンジもクリームもすべてが砂糖の味しかない。一切れ食べて早々にギブアップしたカミラをよそに、アロイスは大きな塊を食べている。

「体を動かすのは、私は苦手で。趣味は本を読むことですかねえ」
アロイスは期待を裏切らない。答えはカミラの想像した通りだった。

「貴族のたしなみとして、乗馬や剣術くらいはされませんか？」
ゾンネリヒトの貴族は、たいてい騎士と同義である。もちろん前線に出て戦うのは、下級貴族やさらに下の、腕の立つ庶民である。だが、名目上は騎士として、戦争があれば戦いに赴く。そのための馬であり、剣術だった。

公爵ほどの身分となると、さすがにそこの貴族と一緒ににはできないが、まあ剣も馬も習うものだ。領地が侵されたときは、一応は指揮官となるのだし、そんな人間が馬にも乗れなければ話にならない。

「おそらく、昔はやっていたと思うのですけれども……」

アロイスは困ったように頭を掻いた。昔というと、痩せていた時だろうか。そんな時期があったのだろうか？

生まれたとき以外はすべて太っていそうだと、カミラは胡乱な目を向ける。

「もう一度してみたいと思いませんか？ 体を動かすと気持ちが晴れるでしょう？」

「いやあ、私は………」

もともと言い訳のような言葉を口にしながら、アロイスは目を

逸らした。それから少し瞬きして、ふと思い出したようにカミラを見る。

「そういうカミラさんこそ、なにかご趣味はあるんです？」

「え」

「思えば、そういう話を伺ったことがなかったもので」

たしかに。

アロイスとカミラの普段の会話は、主に食べ物に終始している。カミラはアロイスの食事を止め、アロイスが必死に言い訳をする。そればかりだ。それもこれもすべてアロイスの、どうしても目に入る体型が悪い。あの体を見ると、普通の男女がするような、趣味やら家族やら、最近の出来事やらの話をする気がなくなってしまう。だが、この質問はカミラの口を淀ませるものだった。対人用のカミラの趣味、観劇や刺繍などと言う回答も、不意打ちのせいで咄嗟に出てこない。

「……………り」

「り？」

ぼろりと出たカミラの言葉を、アロイスが繰り返す。そこで初めて、カミラは自分の失言に気が付いた。

「あ、いえ、私の趣味は別に、いいじゃないですか。面白い話でもないですし！」

「そんなことはないですよ。カミラさんの話でしたら、なんでも伺っておきたいんです」

カエルのくせにぐいぐい来る。巨体が身を乗り出したおかげで、テーブルが傾き紅茶のカップが滑る。慌ててカップを取り上げて、カミラは目を泳がせた。

「屋敷にいる間は退屈でしょうし、ご趣味があれば気も紛れるでしょう。必要なものがあれば準備もいたしますよ。ぜひ教えてください」

「いえ、いえいえいえ！ お気になさらず！」

「ご遠慮なさらなくても結構ですよ」

テーブルを挟んで、アロイスの顔がぐつと迫ってくる。上天気の下、暑い日でもないのにアロイスの顔は湿っていて、近づくとその熱気を肌を感じる。

思わずカミラは目を逸らした。逸らしてもアロイスの巨軀は目に入るし、逆光のせいか妙な威圧感さえある。そして、その威圧感でもって「ぜひ教えろ」と迫るのだ。

ぐぬぬ……。

内心でカミラは唇を噛む。この男、どうしても引きそうにない。趣味から切り出そう、などと余計な知恵を働かせたのが、そもそもの運の尽きだったのだろうか。

致し方ないわ。あっちの趣味よりは、こっちの方がまだましなもの。

深く息を吐くと、カミラはついに観念した。

「……………料理をするんです」

罪を告白するような心地で、カミラは小さく呟くように言った。

「あまり、大きな声では言えないのですが　その……普通の菓子とか、食事とか……料理をするのが好きなんです。伯爵家の娘としては、はしたない趣味でお恥ずかしいのですが……………」

ゾンネリヒトでは、料理を貴族がすることはない。料理は命を切り、血に触れる仕事だ。血に触れるのは男の仕事。その中でも、死体を刻むのは下層の男のことだった。

貴族の男たちは馬を駆り、狩りに出たとしても、必ず侍従を連れて行く。貴族の狩りは、獲物を仕留めるところまで。その後の血抜きや解体は、侍従に任せるのだ。

血に触れない菓子やパンを作ることも推奨されない。料理をする厨房に入ることすら不浄であるし、なにより火や刃物に触れること自体、貴族の娘のすることではないのだ。

もちろん、平民はこの限りではない。男も女も料理をする。菓子も作る。料理人にだってなれる。それを、咎められることもない。

カミラの趣味が目覚めたのは、彼女がまだ七つのころ。悪い侍女にそそのかされ、こっそり厨房で菓子作りを手伝ったのが最初だ。作ったのは他愛もないビスケット。それを人に食べさせたのが、すべての始まりだった。

もつとも、この一件でカミラはさんざん両親に眉をひそめられ、テレゼにはいまだに笑われている。大昔のことを引っ張り出してまで、『カミラ従姉^{ねえ}さまったら、むかし料理なんてされましてよ。ご不浄が身に染みていないようにお祈りしてますわ。祈り続けているのに、天には届いていらっやらないようですけれど』なんて言われ続けたら、趣味も恥じるようになるものだ。人前では絶対に言わない、やらないを心に決めていた。

が、どうにもカミラは咄嗟のことに弱い。上手い誤魔化しの言葉が出なくなる。それが悪役として、王都を追放された一因でもあるのだ。

「料理ですか」

アロイスは、しかしたいして気にも留めたようでもなくうなずいた。

「いい趣味ですねえ」

彼の言葉が、本心であるのか嫌味であるのか、カミラには即座に判断が付かなかった。相手がテレゼであるなら、「いい趣味」なんて馬鹿にしているとしか思えないが、相手はアロイス。見た目からしていかにも愚鈍なアロイスが、そんな含みのある事を言うだろうか。

「……本当に、いい趣味だと思われます？　あまり、その、貴族として褒められた趣味ではないでしょう？」

カミラが疑い半分に尋ねてみれば、アロイスは首をひねった。それから少しして、「ああ」と納得したようにつぶやく。

「ここは食事を愛するモーントン領ですよ。王都ではあまり褒められた趣味ではなくとも、この土地は違います。美味しいものを作る

ことのできる腕は、誰であつても称賛されます」

「……貴族の娘でも？」

「もちろんです。貴族も平民ありません。料理はたしなみであり、美德です。誇ることはあつても、恥じることはありませんよ」

カミラは口を閉じ、無言でうつむいた。いつも人目を忍び、こそこそ隠れてしていた趣味を、同じ貴族の人間に認められたのは初めてだ。

こ、こんなカエル男に言われても、私は別に……！！

うれしい。

うれしいと思つてしまふのが悔しい。

見た目はあれだし、弱気だし、愚鈍そう。だけどちょっといいところあるじゃないか、などと思つてしまふ単純な自分自身に、カミラは首を振つた。

い、いえ、こんなことで懐柔なんてされるもんですか……！

「屋敷の厨房は、いつでもお貸ししますよ。もしなにか作られましたら、ぜひ私にも食べさせてください」

「お召し上がりになつていただけるのです？ え、ええ、こちらこそぜひ！」

頬を手で押さえ、反射的にカミラはそう答えていた。

だって、人に食べてもらえとは思つていなかったのだ。カミラが王都で暮らしていたころは、お得意先というべきか、当てはあつた。だが、今はもう遠い土地。カミラは料理の趣味を、永遠に封印する覚悟さえしていた。

作ることも好きだけれど、やはり食べてもらえればこそ。

ビスケット、捨てようとしてごめんなさい。

料理をする人間がしてはいけないことだった。カミラは内心で謝罪すると、うれしさをかみ殺すように、口を結んで顔を上げた。

「楽しみにしていますよ」

アロイスはいつも通り穏やかに笑つて、カミラにそう告げた。

さぞやよく食べてくれそうだ、などと思つていたカミラは、その

時はまだ気付いていなかった。

「これ以上食べさせてどうするのよ　　！！」

アロイスと別れてしばらく。すっかり日も暮れたころに、カミラはやっと気が付いた。

痩せさせるつもりが、危うくさらに肥えさせるところだった。

「く、口車に乗るところだったわ……カエル男のくせに！」

不覚。あんな愚鈍そうな男に丸め込まれるとは。

いや、しかしここで気が付いたということは、まだ丸め込まれきってはいないということ。

ギリギリ、どうにか、カミラの方が賢かったと言える　　だろう
か？

食事を減らすのも、食事内容を変えるのも、運動さえも駄目だとなれば、最後は『四、人前に入る』だ。

貴族の仕事には、社交場での人付き合いも含まれている。

昼のお茶会は、派手すぎず楚々に、しかし人目を惹くセンス。夜の音楽界は、上品に知的に。舞踏会なら大胆に思い切った服を。

貴族の集まる場所は、いつだって厳しい査定の目に晒される。少しの乱れも失笑を買い、場違いな格好の人間は嘲笑と共に追い出される。なにを着ても追い出されそうなアロイスだが、それで少しは自分の姿を見つめなおすかもしれない。

多少酷かもしれない。今のアロイスと並んで外に出たならば、カミラ自身もきつと嘲笑にさらされるだろう。本音を言えば、まだこの作戦は封印しておきたかった。

だが、他のすべてが失敗した今、もう残った手段はこれしかない。いつか見返すため。一時の恥は呑んでみせよう。

アロイスを痩せさせるためには、強引な手に出るほかにないのだ。

覚悟を決めたカミラに、アロイスは困ったように首を傾げて見せた。首と言っても、どこからどこまでが首で、どこが顎で、どこが肩なのかわからないありさまなのだが、とにかく曲がっているのはわかる。

「モンテナハト家の人間は、あまり人前には出ないのですよ」

どこでもいいからサロンに参加しろ！ と意気込み、アロイスの部屋まで乗り込んだカミラに返ってきたのは、思いがけない言葉だ

った。

「モンテナハト家は少し変わった家系でして　カミラさんはご存じないですね。わりと有名な話だと思っていたのですが」

アロイスは小さく息を吐き、首を振った。結婚するというのは、そんなことも知らないのか。と言われたわけではないが、カミラはばつの悪さに目をそらす。

たしかにカミラは、アロイスのこともモンテナハト家のこともよく知らない。王都にも来ないし、あの見た目だ。悪口なら散々聞いたが、結婚相手の品定めとして、家系や人柄を社交場で話し合うようなことはなかった。

「私の家系は王の影。分家として、表でできない仕事を、王の代わりに行っていました」

昔の話ですが、とアロイスは肩　と思しき場所をすくめた。肩らしい肉の盛り上がりを、カミラは渋い顔で見つめた。

「人に言えないような王家の裏の仕事を、一手に引き受けていました。そんな一族が、人のいる場所に何度も出て行くのはおかしいですよ。もちろん今は平和で、影の役割もだいぶ昔になくなったと聞きます。ですが今も、しきたりみたいに残っているんです」

アロイスの亡き父、先代モンテナハト卿も、思えば人前に出ないと評判だった。アロイスがあまり王都に來ないのも、そういう所以があったのだろうか。

なるほど、しきたりか　それなら仕方ない。

と思いかけ、カミラは慌てて首を振った。危うく、またしても丸め込まれるところだった。ここで納得しては、立てた作戦すべて失敗。アロイスを瘦せさせると言うカミラの野望も無に帰してしまう。

「それは、昔の話ですよ」

ゾンネリヒトの有事なんて、もう百年以上も昔のことだ。外国との戦争も内紛もない。跡目争いもなく、物騒な話は、それこそ影も形もない。王の善政のもと、王国は長らく平和そのものだった。

「今は今です。だいたいアロイス様、そのお姿で影なんて」

シルエットだけでも別人だとわかる。本体より影の方が圧倒的に大きい。そんな隠れようもないなりで、今さら影がどうなどという言い訳がきくものか。

「とにかくお外に出ましょう。人前に！ 着替えて！ どこでもいいですから！」

「どこでもいいんですか？」

「とりあえず、外に出ればいいです！」

カミラが強く肯定すれば、アロイスがうなずいた。

「なるほど、では出かけましょうか」

「そうやって適当なことを言っても誤魔化されませんよ！ 痩せよう痩せようと言つくせに、いつも言い訳ばかりで

はい？

なんですって？」

「出かけましょう。ちょうど近々、出かける用事があつたんです」

カミラはアロイスを見つめ、瞬いた。

これはまた、なにかに丸め込まれようとしているのだろうか。いい加減、丸められすぎてだいぶ尖ったカミラの角も、そろそろ滑らかになってしまふのではなからうか。

そうして出かけた先は、魔石の採掘地だった。

目的は、現場の視察と採掘量の調査。それから、新規採掘地の探索だ。瘴気の強い沼を回り、魔石の放つ魔力を検知する。これは、魔力の強いアロイスだからこそできる仕事だった。

そう。要するに仕事なのだ。

どうせ、そんなことだろうと思っていた。

モーントン領は広い。辺境ゆえということもあるが、やはり王族の分家という理由もあるのだろう。魔石の採掘地は、そんなモーントン領の北端にあった。

採掘地から少し行けば、大きな川が流れている。これが隣国との国境だ。川には跳ね上げの橋があり、ここから互いの国を行き来する。かつてはこの川を挟んで戦争をしたこともあり、物々しい砦が兩岸に建てられているが、今は使われていない。代わりに川沿いにはずらりと商人のテントが並ぶ。跳ね上げ橋は跳ね上げられる暇もなく、商人や旅人を行き来させ続ける。かつて戦争をしていたこの場所が、今は貿易の要所なのだ。

モンテナハトの本邸は、領の南側に位置する。北端である魔石採掘地までは、馬車で半日以上はかかった。

馬車は、アロイスとカミラで別々だった。これは、「狭い馬車にアロイスと二人きりで乗りたくない」などとカミラがわがまを言ったわけではない。物理的に、アロイスと同じ馬車には乗れなかったのだ。

カミラは二頭引きの馬車。アロイスは四頭引きの馬車。それで同じくらいの速さで走るのだから、アロイスの重さも推して知るべき。同じ距離を走ったはずなのに、アロイスの馬車を引いた四頭は息も荒く、ひどく疲れて見えた。かわいそうに。

「ここでしばらくお休みください。遠出をなさらないのであれば、好きに出歩いて構いませんよ」

採掘地にある別邸で、アロイスはカミラにそう告げた。

「私はこれから仕事がありますので。終わりましたら、少しお時間をいただいてもよろしいですか？」

「構いませんけれど……」

カミラはむすつとしていた。
それも当然。外に出ると言ったのはカミラだが、こういう外ではない。

採掘町グレンツェ。

モントン領では、モンテナハトの本邸がある領都りょうとの次に大きい町である。

領地全体に広がる湿地帯の中でも、特に瘴気しょうきが強く、沼の深い土地でもある。この沼の底から魔石を掘るのが、採掘夫さいくつふたちの仕事だった。

グレンツェは、モントン領でも最も魔石の採掘量が多い。加えて国境に近く、店を構えて国外と取引をする商人の他、行商をする商人たちも多く滞在する。

彼らは、沼を囲むように築かれた町に住んでいる。町の周囲をさらに森が取り囲み、その森を抜けた先が、国境である川に続いているのだ。

商人と採掘夫の町は、活気にあふれている。町の中心部では毎日のように市場が開かれ、異国情緒あふれる品々が並ぶ。

肉体労働の採掘夫たちは、明るく血気盛んで、いささか乱暴者だ。町に響くのは、笑い声だけではない。怒鳴り声、喧嘩の音。そしてそれをはやし立てる声が、いつも町のどこからか聞こえていた。

粗野で荒々しい町の気質。そのうえ隣国との行き来も盛んで、人の容姿も多種多様とあれば、他人の容姿を細かく気にする人間はほばいない。外見と行儀作法ばかりに口うるさい貴族文化とは、対極に位置する土地だった。

「アロイス様には私の言いたいことを、くみ取っていただけなかったみたいですね」

「まあまあ、機嫌を直してください。戻りましたら、一緒に外に出ましょう」

外。その「外」という言葉が、どれほど信じられるものだろうか。どうせ、舞踏会とか観賞会とか、カミラの期待しているような場所ではないのだろう。

「どこに行くんです？」

「……もしかしたら、カミラさんには面白くない場所だとは思いますが」

アロイスはそう前置きをしてから、カミラに視線を向けた。カミラの瞳の奥を覗くような、反応を伺うような目つきだ。

「前にお話ししました、おばあさんの孤児院。この町のはずれにあるので、様子を見に行こうかと思ひまして」

「孤児院ですか」

やっぱり、そんなことだろうと思った。

わかつてはいても、無意識にカミラの声は低くなる。そんなカミラに対し、アロイスは困ったように頭をかいた。

「お嫌でしょうか。やはり、カミラさんはそういう場所に足を運ぶことはないのですか？」

「嫌というわけではないですけども。王都にいたころは、よく孤児院に行きましたし」

孤児院が嫌というわけではない。

そういう問題ではないのだ。というカミラの気持ち、やはりアロイスはくみ取らなかった。カミラの不機嫌な顔つきよりも、その言葉に反応する。

「『よく行きました』？」

首をかしげるアロイスから、カミラは目をそらす。言われて初めて、失言したと気が付いたのだ。

カミラは王都に住んでいたころ、友人とともに孤児院に行くことがよくあった。だが、その理由もそこでしていたことも、『貴族令嬢』としては絶対に秘密だ。アロイスに見た目を気にしろ、変われ変われと追い立てながら、実はカミラがあんなに『はしたない』なんて、なにがなんでも知られるわけにはいかない。

「ええと……じ、慈善活動で、よく慰安に行きました。その、こ、子供が好きなんで……」

「子供がお好きで。なんとなく、そんな感じはしていました」

アロイスは、カミラの言葉にうなずいた。カミラを疑っている様子は無い。

内心で、カミラはほつと息を吐く。カミラにとって、料理の趣味以上に『あの姿』は知られてはならないことだった。

「では、日暮れ前には戻りますので、それから一緒に向かいましょうか」

まだ一緒に行くとは言っていない。

そんなカミラの内心の反発より先に、アロイスは言葉を続けた。

「実は、その孤児院のおばあさんが体調を崩されたみたいで、そのお見舞いも兼ねているんですよ」

「あら」

前に聞いた話では、孤児院はその老婆一人で経営していたはずだ。体調を崩したと言うと、どの程度なのだろうか。子供たちはどうしているのだろうか。

心配だわ……。

もちろん、カミラが見ず知らずの老婆の見舞いに行く義理はない。義理はないが、そんな話を聞いてしまっただけで「行くな」と言えない。断るのも感じが悪い。それに、なんとなく様子も気になってしまっただけではないか。

「……わかりました。お供しますわ」

「ああ、ありがとうございます！」

途端、アロイスは喜びに目を細めた。安堵したように、緊張していた顔の肉が緩む。

「きつと、あなたはそう言ってくださると思っていましたよ。」

本当に、あなたは素直な方で助かります」

巨軀に似合わず、アロイスは小さく、鼻で吐き出すように笑った。

アロイスが仕事に行くと、カミラは一人になった。

窓を開けると、瘴気を含んだ風が流れ込む。カミラの黒髪が湿った空気を含んでふくらみ、風に触れた肌はちくりと痛む。

瘴気は、人の体に害となる。小さな痛みや肌の荒れ、髪が軋んだり湿疹ができたり、その影響は人によってさまざまだ。

魔力が強いほど、特に瘴気の影響を受けやすい。カミラは痛む程度だが、強い魔力を持つアロイスであれば、この比ではないだろう。特に、魔石の豊かな産出地であるグレンツェの風は、他よりもずっと瘴気を孕んでいるのだ。

その割に。そこまでひどい顔の人間はいないのね。

窓から町を見下ろしながら、カミラは首を傾げた。

これから数日滞在する予定の、グレンツェの別邸。カミラに与えられた部屋からは、町を行き交う人々が良く見える。

本邸は、町の中心から離れた丘の上にあったが、別邸はほとんど町の中心部に建てられている。庭もそれほど広くないため、町の通りが近いのだ。

カミラの部屋は二階にある。少し遠目にはなるが、外を歩く人の顔も判別できるし、耳をすませば会話も聞こえてくる。

そんな外の景色を、退屈しのぎに見るともなしに眺めていたカミラは、通りを歩く様々な人々の顔つきに違和感を覚えていた。

通りを行き交う人々は、よく日に焼けた艶やかな肌を晒している。痛ましい肌荒れを見せるのは、せいぜい旅慣れなさそうな、若い異国の商人くらいだ。

沼地と称されるモーントン領は、交易は盛んであっても、観光地としての人気はほとんどない。商人くらいしか行き来のないこの暗黒の土地は、王都では言われない放題だった。

いわく、全員がアロイスのように醜い顔であるとか。瘴気の風に吹かれ、肌が見る間に爛れていくとか。モーントン領から帰った人間は、みなカエルのような姿に変わってしまったとか。

特に、モーントン領の代表格がアロイスであるからして、その偏見は相当なものだった。カミラも噂をまるごと信じていたわけではないが、「多少はそういうこともあるだろう」程度に思っていたものだ。

だから、目に映る光景は不思議だった。

なのであの人だけ、あんなにひどい肌になるのよ。

原因は、よほど魔力が強すぎるのか、あるいはよほど肌が弱いのか。それとも別の理由でもあるのか。まったく難儀な男である。

そんな男を色男に仕立て上げようとするカミラもまた、難儀な道を往く人間だ。肌荒れ以前に、痩せさせようということ自体、カミラは今のところ何一つ成功していない。

運動もしない、食べるものも減らさない、脂っこいものばかり食べるのもやめない。

外に出ても、結局領地の中だけ。カミラは重たいアロイスの腰を動かすことができないまま。立てた作戦はことごとく失敗している。

どうして上手くいかないのかしら。

知らず、一人カミラはため息を吐く。自然とうなだれ、うつむいていた自分に気が付き、カミラは慌てて首を振った。

「まだひと月も経ってないのよ……！！」

簡単に落ち込んでやるものか。先が長いのはわかっていること。

いずれ王都の人間たちに、吠え面をかかせてやるためには、カミラは茨道だつて越えていける。

「だいたい、結婚したい、痩せたいって言っているのはあっちじゃないの。それなのに、どうして私がこんなに苦労しているのよ！あいつが自分でやるべきことでしょうが！」

沈みかけた頬を軽くたたくと、カミラは一度ぎゅっと目を閉じた。それから、息を吸い込んで顔を上げる。

目を開けると、明るい空の色が映る。活気あるグレンツェの町並みから、風が吹き込んだ。

瘴気の風は湿つて肌にひりつくが、同時に初秋の心地よさもはらんでいた。

「こんなところで一人にいるから、くさくさしちゃうんだわ！」アロイスはしばらく戻らない。一人の部屋は、湿気た空気でじめじめとして薄暗すぎる。

外に出てみよう、とカミラは思った。

一人でアロイスを待ち続けるより、よっぽど気分転換になるだろう。

侍女を道案内にでも立てて、町を歩いてみよう。

そう思つて侍女を探したが、誰も捕まえられなかった。

みんな、「忙しい」とか「することがある」とか言つて断るのだ。暇そうな侍女に声をかけても変わらない。この後予定があるから、などと言われ続ければ、カミラだつて察するところはある。

だからといって、すぐ引き下がるのも癪に障る。いつそカミラは躍起になつて、屋敷を歩き回っていた。

「ねえ聞いた？ あのうわさの悪役女、今この屋敷にいるんだって」
「聞いた聞いた。よく外を出歩けるわよねえ。あんなことしておいて」

「旦那様も、本当にあんなのと結婚するつもりなのね。ちょっと引いちゃうわ」

屋敷の一階。北側の突き当りの部屋は、侍女や女性使用人の休憩室として使われている。

暇そうな侍女を狙って部屋の前まで来たところで、カミラは楽しげな声を聞いた。半開きの扉の隙間から中を覗けば、三人の侍女たちが談笑している。

「やっぱり意地悪そうな顔をしてるんでしょ？ あなた、顔は見た？」

「見たわ。実はさっき声かけられたのよ。外に出たいから、一緒に来いって」

「うそー！ それで、どうしたの」

「もちろん断ったわよ。これから仕事があるって言って。あんな女と外を歩いたら、あたしも変な目で見られちゃうもの」

中の一人に、カミラは見覚えがあった。

少し背が低くて、栗毛色の髪を高めにまとめた少女。カミラよりは、少し年下だろうか。一見すると気弱そうだが、同僚の侍女と話している姿は、なかなか堂々としたものだ。

先ほどカミラが声をかけたとき、うつむきがちにぼそぼそしゃべっていたのが嘘みたいだ。

「あんだ、ひどいわね。一応旦那様の奥様になるんでしょう？ ばれたら大変よ」

「仕事サボってこんなところに来てるくせにねえ」

「人聞きが悪いわ。サボってるんじゃないの。早めに終わったから、自主休憩中なのよ」

よく言う、などと言い合いながら、侍女たちは笑い合う。
扉の外にいるカミラなど、気がついてはいないようだ。

なによ。

外に出ようとむきになっていた気持ちだが、ずっと冷え込む。全身から血の気が引くのがわかる。

しかし、その冷たさも一瞬の感覚。すぐに別の感情が逆流する。
肩がこわばり、指先が震えた。

カミラはぐつと歯を食いしばると、指の震えを抑えつけ、扉の取っ手を強く握った。

「あんたたち、暇でしょう。外に出るから付き合いなさい」

荒く扉を開けば、談笑していた侍女三人が、目を丸くしてカミラを見た。先ほどの談笑が嘘のように、部屋は静まり返る。呼吸音さえも、聞こえないように思えた。

「外に出る服の用意をして、道案内をしなさい。アロイス様が帰る時間は知っているでしょう？ 時間内に戻ってくるようにするのよ」侍女たちは三人、顔を見合わせている。怯えたような視線に、カミラは苛立った。さっきまでは言いたい放題だったくせに、本人を前にしたらなにも言えないのだ。

「え、えつと、私たち三人ともですか？」

しばらくの沈黙の後、侍女の一人がこわごわとそう尋ねた。カミラの顔は見ず、仲間の侍女たちばかり見ている。瞬きの回数が多く、落ち着きがない。

「当たり前でしょう」

カミラが何か言ったたびに、部屋に沈黙が落ちる。三人とも黙り、顔を見合わせ、それからいつも同じ侍女が最初に口を開く。カミラが一度声をかけた、背の低い侍女ではない。おそらく、三人の中では一番年長であろう、細身で背の高い侍女だ。

「あの、私たち、これから仕事がありまして……」

ね、と年長の侍女が言えば、肩を縮めていた残りの二人がこくと頷く。

「そ、そう、旦那様が戻られる前にやらなきゃいけないことがあつて」

「も、申し訳ないですけど、べ、別の者にあたっただけだと……」

「これから仕事？」

カミラは「は」と短く息を吐き出した。しらじらしい。さつきまで同じ口で何を言っていたか、自分たちでわかっているだろうに「仕事をサボってここに来たんでしようが。あんたのことよ!」

年長の侍女の影に隠れ、身を縮めていた侍女に、カミラは視線を向けた。栗毛色の髪、背の低い侍女。彼女はカミラに睨まれた途端、びくりと震えた。

「……………あ、あたしですか」

小動物めいた様子で、背の低い侍女は震えながら答えた。背丈にくわえ、まだ幼さの残る顔立ちと、黒目がちな目が、いつそう小動物を思い起こさせる。

「仕事があるから断っておきながら、こんなところにいるのね。私と歩くのが、そんなに嫌だっというの」

「い、いえ……あの……」

「ちよつと休憩したら、すぐ次に行くつもりだったんです。ね、そうでしょ」

口ごもる彼女を、別の侍女がかばう。年長の侍女ではないほう。やや太めで、人の好きそうな顔立ちをしている。

「ね、もう時間だし、次の仕事あるんでしょ？ おくさ　えー、カミラ様、すみません。あたしたち仕事があるので、失礼します」

太めの侍女がそう言つと、二人の侍女に目配せをする。侍女たちは心得たというようにカミラに会釈をすると、「失礼します」と口々に言つて、部屋を出て行こうとした。

「ちよつと」

三人はカミラの静止を聞かず、早足で部屋を出る。そのまま逃げ出そうというつもりだ。

一拍遅れて追いかけたカミラには、気が付いていないのだろう。去り際、背の低い侍女を真ん中にして、慰めるようにかける声が聞こえてくる。

「ねえ、大丈夫？」

「ひどいわ。立ち聞きしてたのよ。陰湿」

「噂通り嫌な女ね。大丈夫、あなたはなんも悪くないわ」

「本当よ、断らなかつたらもつとひどい目に遭つてたわよ」

二人の侍女に挟まれ、背の低い侍女はうつむいたまま何も言わない。

全部聞こえてるわよ！

このまま逃がすものか、と思った。

侍女たちは廊下を曲がる。その姿が見えなくなる直前、カミラは声を上げた。

「待ちなさい！」

場所は屋敷の最奥から、人の行き交うエントランス近く。ただならぬ三人の侍女の様子に、他の使用人たちが目を向けていた。人々の注目が集まる中、カミラの声はよく通った。

「出て行つていいなんて言つてないわよ！ 止まりなさい！」

三人の侍女は、竦んだように立ち止り、カミラに振り返る。三人でこわごわ身を寄せ合い、目配せをしあっていた。

そんな三人に、カミラは大股で近づく。カミラの背は高い方ではないけれど、震えて縮み上がる侍女たちと対峙すると、威圧感から大きく感じられる。

「陰湿なのはどっちよ！ 影でこそこそ悪口を言つて！ 聞こえてないとも思つたの！？」

「あ、あの、そういうつもりでは……」

最初に口を開くのは、やはり年長の侍女だ。太めの侍女は困惑に声が出ず、背の小さい侍女はずっとうつむき、震えている。

「じゃあ、どういふつもりだったっていうの。言うことを聞かず、仕事をサボつた言い訳が立つの？」

「その……」

「なにか言えることがあるの？ 言つてみなさいよ！」

カミラの剣幕に、侍女たちは黙り込む。年長の侍女は周囲の様子

を気にして、太った侍女はカミラと目を合わせようとしない。嵐が過ぎるのを待つようなその態度が、いつそうカミラを腹立たせた。「黙ればいいってもんじゃないわ！言うことがあるでしょう！あんたたち、本当に教育がなっていないわ！」

腹が立つ。黙ったままの三人にいららす。せめて一言でもあれば、カミラの気持ちも少しは変わるだろうに。

「何とか言いなさいよ！いい加減にしないと、アロイス様に言いつけてやるわ！クビにしてやるわよ！！」

「……………や」

カミラの怒声に紛れ、囁くような声が聞こえた。

見れば、背の低い侍女が小さくうめき声をあげている。彼女を囲む二人の侍女は、いつからだろうか。肩を叩いたり、手を握りしめたりして、心配そうに彼女の様子を見ていた。

「やだあ…………」

小さな侍女の声は震えている。

「『やだ』じゃわからないわ。なにか言いたいことがあるわけ？」

カミラが言えば、侍女はこわごわ顔を上げる。小動物のような顔は怯え、震え　瞳が潤んでいる。

彼女は何か言おうと口を開くが、結局は息を吐いただけだった。

二、三度息を吐くうちに、侍女の瞳はますます潤んでいく。

そして、そのまま目から涙が零れ落ちる。その涙を隠すように、彼女は何も言わないまま顔を伏せた。

「大丈夫？」

「平気？」

周りの侍女たちが慰めるように声をかける。聞こえてくるのは慰めの声と、小さな侍女のぐずぐずとすすり泣く声。それから、少しの間で周囲の囁き合う声。

あんなに怒鳴られて。そこまで言わなくても。かわいそうに。

リーゼロッテ！！

全身の血が逆流する。頭の奥が赤く染まる。舞踏会の日。カミラが泣かせたリーゼロッテ。金に近い茶色の髪を高く結わい、細い体を縮ませて、うつむきながら嗚咽する彼女。無数の視線が集まる中、カミラだけが気が付いた。

こらえきれないように、口元をゆがめて笑う彼女の表情に。

「泣けば同情を買えるなら、涙なんて安いものね」

目の前にいるのはリーゼロッテではない。

カミラの気の強さと向き合って、立っていられる相手ではない。したたかでしなやかで、決して折れないあの女ではない。

相手はただの侍女。小狡くても、本人を前にすれば何も言えない、気の弱い少女。涙の裏などなく、ただカミラを恐れ泣いているだけだ。

頭ではわかっていても、感情は収まらない。

「泣きたければ泣けばいいわよ。でも、私はそれで許したりはしないわ！」

カミラたちの周りに人だかりができている。ざわめきが耳に入る。騒ぎを聞きつけ、止めに入ろうと、屋敷の上級使用人が割り込んでくるのが見えた。それでもカミラは語気を弱めず、侍女に向けて足を踏み出す。

侍女たちは、竦んだ様子で動かない。カミラが何をするのかと、慌てて上級使用人が間に入るのも、構わずカミラは続けた。

「あんなたちは」

落ち着いてください！ と誰かがカミラの腕を取る。侍女たちをかばおうと、間に割って入る人間がいる。

「あんなたちは、けつきよく詫びの一つも言えてないじゃない！」

「落ち着てください、カミラ様！」

激情のにじむカミラの言葉は、上級使用人の静止にかき消された。

今にも侍女に掴みかかろうとしたカミラを無理矢理引き離し、それしか言葉を知らないように、「落ち着いてください」を繰り返す。カミラが使用人たちにとめられている間に、侍女たちはそっと人ごみの奥に隠された。

憤りの収まらないカミラは一人。無数の使用人たちの胡乱な視線に晒されながら、消えた侍女たちの背中を睨んでいた。

カミラは丁寧、しかし有無を言わせず、部屋へと連れ戻されることになった。

「旦那様が戻られるまで、大人しくしててください」

そう言われて、部屋に閉じ込められたところで、カミラの熱が冷めるわけではない。

部屋で一人になれば、先ほどの騒動がますます思い出される。

「ああああ！ 腹立つ　　！！」

結局あの侍女は、カミラの悪口を言った拳句、謝りもしない。泣いて周りの同情を買い、カミラを悪役に仕立てるさまは、まさにリ―ゼロツテそのものだ。わざとかわざとでないかは、悪役にされたカミラには関わりのないことだ。

「あの手の人間が一番腹立つわ！ 言いたいことがあれば直接言いなさいよ！ もう、絶対に言いつけてやるわ！」

別に、クビにしろ、と言うわけではない。目の前からいなくなつたところで、カミラの溜飲が下がることはないのだし、逃げられたような心地がするだけだ。それならきつちり叱られて、カミラの前で頭を下げさせる方が、よほどすつきりする。

「それに、周りの連中も！ みんな泣いてるだけで同情して！ 自分の立場が分かってるの！？ 全員教育が足りないわよ！」

怒りに震える手の行き場がなく、カミラの手は空を握っては離れた。大人しく座っていることもできず、部屋を行ったり来たりする。「だいたい、悪役悪役って、私のことを知りもせず……！！」

もう！ と近くの壁を叩きつけ、カミラは荒々しく息を吐いた。

「今に見てなさいよ！ 私は同情なんて求めないわ！ 絶対見返してやるんだから！！」

カミラは同情よりも、羨望が欲しい。悔しい思いをした分だけ、相手に悔しい思いをさせたい。かわいそうだななんて思われてたまるもんか。

あの侍女だって、絶対に頭を下げさせて、いずれは『カミラ様は素晴らしい！』って言わせてやるんだから！

日が暮れかけ、空が赤くにじみ始めたところに、アロイスは屋敷へ戻ってきた。

カミラはもちろん部屋でおとなしく待っていることなんてしない。真っ先に告げ口してやろうと部屋を飛び出した。

おそらく彼は、エントランスを通り、二階の端にある自室へ向かうだろう。アロイスの自室は、カミラの部屋と階段を挟んだ対局にある。だから、階段まで行けばアロイスと鉢合わせるだろうと思っていた。

主人の帰宅に、屋敷はにわかに忙しくなった。階下で使用人たちが駆けまわる音が聞こえる。一方で、二階の人気はなくなり、カミラが歩いているだけでも咎める人間はいない。おかげで、カミラは誰にも見つかることなく、階段まで来ることができた。

アロイスは使用人に囲まれながら、自室へ向かうところだった。カミラはちょうど、その背中を見送る形になる。アロイスも、彼に付き添っている数人の使用人たちも、背後のカミラの存在には気づいていないらしい。

声をかけよう、とカミラは小走りにアロイスに駆け寄った。

「アロイスさ」

「旦那様、あの女の話の話を聞きましたか？ 侍女を脅して泣かして、拳句掴みかかろうとしたんですよ」

しかし、カミラの足は止まる。アロイスの上着を預かりながら、執事の一人が吐く言葉を聞いてしまったのだ。

「気が弱くて何も言えない侍女に、『泣いても許さない』と、確かに言っただのを聞きました。あれだけの人の前で晒し者のようにして悪びれる様子ありません。やはり、噂通りの女ですよ」

アロイスを取り巻く人だかりは遠ざかっていく。だけど、会話はよく聞こえた。

大きな体でよちよちと歩くアロイスが、うんざりしたように顔に手を当てる様子も、見て取れた。

「……困ったものだ。侍女たちからは後で話を聞いておこう」

「侍女たちですが、旦那様、本当にあの女と結婚するおつもりですか？ あんな性格の曲がった厄介者を押し付けられて　いくらユリアン殿下からのお話でも、お断りしてもよかったのではないですか？」

「そこまで言ってしまったてはかわいそうだろう」

執事の言葉に、はは、とアロイスはため息みたいな笑いを返す。

「私が拾わなければ、あれは他に行く場所がなかった。哀れな娘なんだ。腹の立つこともあるだろうが、今は多少大目に見てやってくれ」

アロイスの声には、憐憫が滲んでいる。カミラをかばうような言葉には、彼の情け深さが見える。

「それに、気位は高いが、うまく接してやればそう難しい相手でもない。なかなか素直な性質たちのようだし、ここで暮らすうちに、きっと彼女も変わっていつてくれるだろう」

旦那様は甘すぎます、そんなことから　執事の声が遠く聞こえる。立ち尽くしたカミラから、アロイスたちはどんどん遠ざかる。けどもはや、追いかける気持ちもわかなかった。

なんですって？

頭の中に、アロイスの言葉が繰り返される。

かわいそう。哀れな娘。

同情されていたの。

無意識に、カミラは手すりにつかまり、もたれかかっていた。足元が崩れるような感覚に、一人で立っていられない。瞬きをするたびに、めまいのように視界がゆがんだ。

なにも本気じゃなかったんだわ。

第二王子に嫌われて、王都を追い出されて、国にいられなくなりそうなかミラを、アロイスは「拾ってやった」。心優しい領主は、カミラのすることなすこと、「大目に見ていた」。

結婚をしたいと言ったのも嘘。痩せると言ったのも嘘。ただ、気位の高いカミラを満足させるため。大目に見てやっていたからこそ、アロイスはカミラの言葉を怒りもせず、否定もせず、薄く笑っていたのだ。

「……………馬鹿にして」

ヒキガエルのくせに。嫌われ者のくせに。誰も結婚なんてしなならない醜い容姿のくせに。

なのに、カミラはそんな男にさえ、同情で結婚をされるような立場なのだ。

ぐ、とカミラは唇をかむ。

それからは、ほとんど反射的に。

カミラは震える足を叩いて、逃げるようにその場を立ち去った。

腹立つ！

大股で石畳を踏みながら、カミラは闇雲に歩いていった。

腹立つ！ 腹立つ！ 腹立つ！！

頭の奥が熱くて、それでいてひどく冷え切っている。目の前がちかちかするほどの怒りが、カミラの体をじつとさせてはいなかった。反射的に屋敷を飛び出してから、しばらく。空の色が赤から藍に変わり始めても、カミラは足を進めるのをやめなかった。

西日はいつの間にか沈み、深い影の落ちた町に、ぼつぼつと窓明かりが灯り出す。昼間は閉じていた店が開き、軒先のあちらこちらに赤ら顔の採掘夫たちが見える。刺激的な服の女が店の前に立ち、道を歩く採掘夫や商人たちに声をかけていた。

夜の顔になったグレンツエを、町中に張り巡らされた街灯が煌々と照らす。鮮やかな白い光は、火と油ではなく、魔石を燃料とした魔法ゆえ。売り物にならない屑魔石を使った、採掘町だからこそできる輝きだ。

魔石の明かりが先か、夜の町が先か。明かりの消えない町は、昼とは違う退廃した活気があった。

そんな中で、カミラのような女は異質だった。お高く留まったドレスを着て、髪はきつちりと結い上げて、ネックレスも髪飾りも、いかにも値が張るものだわかる。

見るからに貴族然とした彼女を、町の人々は時折ぎよつとしたように目を向けた。しかし、彼女の剣幕を見るとすぐに顔を背ける。

あんな男に！ どうして私が同情なんて！

腹の中に渦巻く感情の赴くまま、どれほど歩いたかわからない。

自分がいま、町のどこを歩いているのかもわからない。同じ場所をぐるぐる歩いた気もするし、ずいぶんと遠くまで来たような気もする。もちろん、帰り道もわからない。

見返してやるわ！

でも、どうやって？

アロイスを痩せさせることすらも、今となつては無理なのに。

それでも！

カミラは心の声に怒鳴り返す。負けてたまるか。傷ついてたまるもんか。

心の中で祈るように叫びながら、カミラは石畳を踏みつけた。

「いたっ！」

道半ばで、カミラは不本意に足を止めた。

胸よりも少し下あたりに、柔らかい衝撃を受けたせいだ。言葉とは裏腹に痛くはなかったが、くすぶつた怒りを止められたようで気分が悪かった。

「誰よ、こんなところで突っ立って！」

カミラの足を止めた正体は、すぐにわかった。目の前に、戸惑った様子の少年がいる。まだ、十数歳といったところだろうか。着古したシャツに、継ぎのあてられたズボン。さほど良い生活をしていないと見て取れる。

「なによあんた、子供じゃない！ こんな時間に出歩いていいと思ってるの！？」

「……なんだよ、そっちからぶつかってきておいて！」

カミラの怒声に、少年は怯えたように顔をこわばらせた。が、その表情は一瞬だった。すぐに生意気な顔つきで、カミラに言い返す。

「子供で悪いかよ！ 俺だって、帰れるもんなら帰ってーよ！」

「はあ！？ あんた迷子なの！？」

「ちげーよ！」

少年はむきになってカミラに怒鳴り返す。魔法の光の下。顔を真

っ赤にした少年の表情は、どこか疲れているように見えた。

「自分の家くらいわかるに決まってるだろ！　ただ、帰れないだけで……！」

「やっぱ迷子じゃないの！」

「ちげーって言うてるだろ……！」

少年は腹の底から叫ぶと、その反動のように深いため息を吐く。それから、一度迷うようにうつむいてから、渋い顔でカミラを見つめなおす。

「……まあいいや、お前で。なあ、ちょっと助けてくれよ」

「は？　お金なんて持ってないわよ」

「俺をなんだと思ってんだよ！」

浮浪児だと思った。金をせびられるものだと思っていた。だが、今のカミラは文無しだ。髪飾りやネックレスを売れば結構な額になるだろうが、もちろんそんなものを譲ってやる気はない。

「むっかつくなお前！　いいから助けるって言うてんの！　本当は、アロイス様のところに行くつもりだったのに……！！」

「は」

思いがけない単語に、カミラは「は」と開いた口のまま固まった。「アロイス様のところに行く途中で、ばーちゃんが倒れたんだ。助けてほしいのに、みんな信じてくれねーし、アロイス様に会いに行っても、俺一人じゃ追い出されるし……」

「倒れたって……大変なことじゃない！」

行く途中、ということとは、どこが道端で倒れているのだろうか。

驚いて周囲を見回すが、それらしき人影はどこにもない。代わりに、カミラと少年のやり取りを眺める人間が数人、『気の毒に』という顔で立っている。

なにその表情……？

違和感のあるその表情に、カミラは困惑した。首をかしげていると、親切な誰かがカミラに声をかける。

「おーい、そいつに近付かないほうがいいぜ、貴族のお嬢ちゃん」

「……どういうこと？」

「そいつは有名な悪ガキだよ。嘘で人の気を引いて、油断したところで金を^す掏るんだ。町の人間はみんな知ってるぜ」

誰かが言つと、周りがざわめき出す。「母親が急病だと、俺は三回は聞いた」「妹が死にかけてるとも言われたぜ。家族なんていなくせに」「狭い路地に連れて行くのが手口なんだ。その方が逃げやすいからな」

人々の声を聞きながら、カミラはちらりと少年に目を向ける。カミラの視線からは、うつむいた少年の頭と、握りしめた手だけが見えた。

「さつきから手当たり次第に声をかけてるが、あんた以外は誰も答えてないぜ。この町に住む人間は、みんなあいつには近づかないんだ」

笑いながら、周囲の人間の一人が言った。なるほど、道理で。カミラみたいな異質な人間に声をかけたのは、他に誰も引つかからなかったからなのだろう。

「あんたスリなの？ 最低じゃない」

「今は違う！」

思わずぼつりとつぶやいたカミラに、少年は悔しさをにじませた声で叫んだ。

「ばーちゃんに拾われてからは、一度も^す掏ってない！ 本当なんだよ……！ 家まで運んでくれるだけでいいんだ……助けてくれよ！」

真っ赤になつた少年の目の端が、微かに滲んでいる。だが、それを飲み込むように、少年は唇を噛んだ。

その表情が、なぜだろう。少し自分と重なってしまったのかもしれない。

「……まあ、いいわ。わかつたわ」

少しの間少年を見つめた後、カミラは軽く首を振った。自分で助けろと言っておきながら、少年の方がカミラの態度に目を丸くする。

「おいおい、本気か？ そいつはとんでもない嘘つきだぞ」

カミラたちの様子を見ていた誰かが、そんな野次を飛ばす。しかしカミラはつんと澄まして、声の方向に目すら向けない。

「私はまだ、この子に嘘をつかれていないもの。この子が嘘つきなのか、まわりが嘘つきなのかわからないわ。だから、とりあえず信じてあげる。おばあさんはどこにいるの？」

「……本当に？ 本当に信じてくれるのか！？」

「とりあえずってだけよ。これであんたの方が嘘つきだったら、ただじゃおかenいわよ」

少年はこくこくと頷く。「かわいそうに」と笑う声が聞こえるが、カミラはそのまま聞き流した。

「ばーちゃん、最近病気がちで……だから、家に戻れば薬があるんだ！ 路地裏の方で休ませてるから、こつち！ 案内する！！」

少年はカミラの手を握りしめ、急かすように引つ張った。カミラは少年にされるがまま、少年が向かう方向へぱたぱたと走り出す。うかつな行動だ、と思わないわけではない。いくらカミラでも、普段ならもう少しためらっていたかもしれない。

だけど、カミラは気がついていた。

少年の髪から、ふわりとほのかなビスケットの香りがする。

すっかり夜も更けたころ、老婆は口からかすかなうめき声を上げ、細く目を開けた。

それから、ここがどこだか確かめるように瞬きをする。目の前には見慣れた天井があり、背中には固いベッドの感触。それから、ぱちぱちと暖炉の火の燃える音。

自分の家だと、すぐに気が付いた。

老婆の記憶では、町の中にいたはずだ。家では年長の少年を連れ、今晚訪れるであろう領主のために、食糧の買い出しをしていたのだ。その帰り道。買い物を終えてさあ戻ろうときに、めまいがして動けなくなってしまった。

連れの少年は老婆を路地裏の日陰に休ませてくれた。それから、人を呼んでくると言って走り去っていった背中が、老婆の記憶に残っている。

そこから先は、覚えていない。

いつの間に戻ってきたのだろうか。

不思議に思いながら目を動かせば、揺らめく光に照らされた子供たちと　見慣れない若い女が見える。みんな老婆を、心配そうに覗き込んでいる。

だが、老婆が目覚めた気がつくと、一様にほっとした表情を浮かべた。

息を飲むように見守っていた部屋が、にわかに騒がしくなる。

「だから大丈夫だって言っただでしょう！ あんた、本当に私のこと信用してないのね！」

「だってお前、薬もどれだか分からないって言うし、飲ませ方もめちゃくちゃだし！ だいたい、結局ほとんど俺にばーちゃんを背負わせやがって！！」

「手伝っただけでも感謝しなさいよ！ あんた一人じゃおろおろ泣くだけで、連れ帰るなんてできなかったのよ！」

「泣いてねーよ！！」

古くて狭い部屋の中、布を引っ掛けただけのベッドの傍で、カミラと少年はぎゃあぎゃあど騒いでいた。

ただでさえ狭い部屋は、今は老婆の目覚めを見守っていた子供たちであふれている。十数人くらいはいるだろうか。老婆が起きたことに安堵し、泣き笑いの声が部屋に響く。だが、二人の言い合いの声はとりわけ大きかった。

「だいたい、薬があるならわざわざ運ばなくてもよかったじゃないの！ ひとつ走り薬を取りに戻れば早かったんじゃないの！？」

「たしかに……！」

少年ははっとしたように目を見開いた。気がついていなかったらしい。

「お前、性格悪い癖に意外と頭いいな……」

「馬鹿にしてるの！？」

思わずカミラは肩を怒らせる。そのまま続けて少年とやり合おうとしたとき、「あの」としわがれた声が止めに入った。

「あの……あなたは……？ あなたがここまで運んでくれたんですか？」

見れば、老婆が体を起こし、戸惑った様子でカミラと少年を見つめている。まだ体調は万全ではないらしく、その顔はやや青ざめていた。

「ばーちゃん、こいつぜんぜん役に立ってねーよ！」

カミラが答えるより早く、少年はベッドに身を乗り出して言った。

「助けるって言いたくせに、ばーちゃんを一人で運べないし、道も知らないし、口も悪いし！」

まくしたてる少年の言葉に間違いはない。老婆は小柄で痩せているが、カミラが一人で背負って運ぶには無理があった。カミラと少年で片側ずつ老婆の肩を支えるか、あるいは少年が背負うかして、どうにかこうにか連れ帰ってきたのだ。

道だって知らない。老婆の家は町の中心部からだいぶ離れた森のほとりにあり、町を照らす魔石の光も届かなかった。月明りを頼りに少年の道案内に従っただけ。なにもできないカミラを「無能」「役立たず」と少年が罵れば、カミラもさんざん言い返した。そんなこんなで、道中ずつと騒ぎながら、どうにかこの古びた家まで戻ってきたのだ。

「俺ひとりで運んだようなもんだぜ！」

身を乗り出して息巻く少年を聞き流し、老婆はカミラを見上げた。それから、丸まった背中をさらに丸めて頭を下げる。

「すみません。ご迷惑をおかけしました。あなたのご親切のおかげで助かりました」

「いいわよ別に。たいしたことしたわけじゃないわ」

カミラが言えば、言質を取ったというように少年が「ほらー！」と声を上げる。声を上げるが、その語尾は「ぐえ」という悲鳴に変わった。

老婆が少年の頭に握りこぶしを落としたのだ。老いて枯れたこぶしは、痛みを伴うものではないが、少年を黙らせるだけの効果はある。

「助けていただいたのに、その言い方はなんですか」

「……でも、結局は俺があ」

「結局、じゃない。この方がいたから、無事に済んだんでしょ。まずは言うことがあるんじゃないですか？」

少年は渋い顔で口を尖らせた。ひどく不服そうではあるものの、老婆の言うことにはおとなしく従うらしい。カミラの方を見て、ペ

こりと頭を下げた。

「……………ありがとうございます」

「しおらしいじゃないの」

ふふん、とカミラは笑いながら言った。それから、カミラに向けられた少年の頭に手を伸ばした。彼のくすんだ金髪を、くしゃりと軽くなでる。

「嘘つきじゃなかったのね。ちゃんと人を呼んで、おばあちゃんを助けられて、偉かったわよ」

「……子ども扱いするなよ。えらつそくに！」

「だって偉いもの　　ちよつと前まではね」

伯爵令嬢。いずれは公爵の妻。町はずれで暮らす平民よりは、ずっと偉い身分だった。少なくとも、カミラ自身はそう思っていた。

だが、それも少し前までの話だ。今のカミラは、行く当てのない哀れな娘でしかない。痩せる気のないアロイスとの結婚は永遠に成立せず、すなわち『公爵の妻』の立場もない。「うそつけー！」と否定する少年に、カミラは自嘲気味に口を曲げて見せた。

「偉い身分なら、どうしてあんなところを一人で歩いてんだよ」

「いいじゃない。いろいろあるのよ」

「そういう言い方、家出したやつがよくするぜ。お前もしかして、行く場所がないんじゃないのか？」

少年が心得たというような表情で、カミラを覗き込んだ。意外な鋭さに、思わず目をそらす。

「行く場所ないならさ　　ぐえ」

さらに言い募ろうとした少年は、また悲鳴を上げた。二度目の老婆のこぶしが、少年の頭にある。

「失礼なことをいうもんじゃありません。貴族様だって、見ればわかるでしょうが」

少年の視線は、恨めし気に老婆に向けられる。追及を逃れて、カミラは内心ほつとしていた。

そんなカミラの心は知らず、老婆はうかがうように問いかける。

「この町に滞在されているのでしょうか。きっとお連れの方が心配しているでしょう。すぐに町にお送りしたいのですが、私は動けませんし、他の子たちはまだ小さくて……」

「心配なんて」

「するような人間はいない。」

侍女たちはもちろん、アロイスだって。王都に住む両親や、かつてのサロンの取り巻きたちも、今のカミラがどうなろうと知ったことではないだろう。

口元を抑えてうつむいたとき、部屋にいる子供の一人が、カミラのドレスを引っ張った。

振り返れば、五つか六つほどの幼い少女が、丸い瞳にカミラを映している。少女は大きな目を何度かぱちぱちと瞬かせ、小動物じみた仕草で口を開いた。

「おなかへった」

きゅう、と少女は腹を鳴らす。だが、少女になにか答える前に、

別の手がカミラを掴む。

「おしっこー」

「えっ」

「おみず飲みたい」

「待って、待って！」

「うわあああん、お兄ちゃんが蹴ったー！」

堰を切ったように子供たちが騒ぎ出す。老婆の元気な姿に安堵したのか、そろそろ我慢の緒が切れたのかは、両手を掴まれドレスを引っ張られているカミラにはわからない。

と、とりあえずトイレが先？ でも喧嘩が始まっちゃったし……。
ああもう！ 手を離してくれない！

部屋に響く泣き声に目がくらむ。

老婆はおとなしくさせようと声をかけるが、ベッドの上では十人近い子供をさばききれない。年長であるはずの少年は「うるせーよ！」と余計に子供たちを泣かすありさま。

左右からはぐいぐいと手を引かれ、混乱するさなか。

追い打ちをかけるように、古い家の戸を叩く音が響いた。

その音は、何度が繰り返し叩いた後、誰も応答する気配がないことに気が付いたらしい。

「すみません、お邪魔いたします」

聞き慣れた声と、許可なく扉を開く音が聞こえた。

その直後、古い家が小刻みに揺れた。まるで地震みたいに。

どすんどすんという重たい足音は、カミラのいる部屋の前で止まった。

「ご無礼、失礼いたします」

その言葉は、扉が開くのと同時だった。

現れたのは想像通り　　荒く息を吐き、ひどく汗をかいたアロイスだ。彼らしからぬ険しい表情を浮かべ、部屋へと足を踏み入れてくる。

子供たちは、その異様な空気に怯えているらしい。先ほどまでの騒ぎが嘘のように静かになった。カミラを引っ張り合っていた子供たちは、口をつぐんで彼女の影に隠れてしまふ。少年や老婆さえ、目を丸くしたまま押し黙ってしまった。

アロイスは、まっすぐにカミラの前までやってきた。そして、立ち尽くすカミラをしばらくの間見下ろしながら、息を深く吐き、深く吸う。その後、目を閉じてもう一度深呼吸。

しかし、アロイスの感情は収まらないらしい。再び目を開いたときも、彼の顔は険しいままだった。

「……………あなたは」

思いのほか低いアロイスの声に、カミラは肩をこわばらせた。落ち着いているように見えて、滲む怒りは隠しきれていない。

「あなたは、知らない町を一人、誰にも言わず夜に出歩くような人間なのですね」

女一人で夜の町を歩く。それはよほどの間抜けか、あるいは娼婦のすることだ。ひやりと刺すような言葉に、カミラは顔を上げた。アロイスを睨みつければ、彼の冷たい視線と当たる。

「あなたが部屋にいないとわかって、どれほどの騒ぎになったかわかりますか。屋敷中の人間が町に出て探し回りました」

アロイスが戻ったら、孤児院へ行くと約束をしていた。おそらくは、カミラを呼び出そうと部屋を覗いたときに、その異常に気が付いたのだろう。町中でのカミラと少年のやり取りは、見ていた人も大勢いる。きつと野次馬たちから話を聞いて、カミラの居場所を知ったのだ。

「この町は、土地柄目こぼしをしているところもあって、治安が良くない。悪い人間に騙され、捕まっていたもおかしくはなかったんです。そのくらい想像していただけると思っ、黙っていた私も悪かったでしょうが」

「あ、アロイス様、お待ちください……！ この方は……」

カミラを責めるアロイスに、老婆がおそろおそろ口を出した。カミラをかばおうとするのだろう。しかし、彼女の勇敢な行動も、今のアロイスの前では冷たく切り捨てられてしまう。

「おばあさん。これは私とカミラさんの問題です。いきなりお邪魔した上に、大変ぶしつけなお願いで恐縮ですが、少しだけ黙っていただけないでしょうか」

慇懃でありながらも、アロイスの言葉は有無を言わさない。老婆はそれ以上言葉を続けることができず、両手を合わせて頭を下げると、それきり黙ってしまった。

「カミラさん。私はずっと、あなたが生活に不自由しないように尽くしてきたつもりです。ですが、あなたは文句と問題ばかり」

「……………なによ」

「拳句、あなたは自分がいなくなった後のことも考えず、騒ぎを起こして、迷惑をかけるだけかけて、誰が心配しているとも知らず、こんなところで楽しく過ごしていたんですね」

「楽しくって、なによ……！！」

カミラは手のひらを握り、絞り出すように吐き出した。

「『尽くしてきた』って、どの口が言うつもり！？ 本当は心配な

んてしてはいくせに！どうして私が、一人で町を歩くことになったと思っているのよ！」

日々暮らす場所だけ整えて、人形のように据えておけば、不自由がないと思っているのか。どんな気持ちで、カミラがアロイスのもとで暮らしていたのか。

感情を踏みにじられたような感覚に、カミラは耐えられなかった。「出て行きたくて、出たわけじゃないわ！　だいたいここにいるのだって、人を助けていたからなのよ！！」

「人助けは、あなたでなくてもできることです。他の誰かに頼ればよかったんです」

「私が！　助けてって言われたのよ！　放っておけっていうの！？」
「屋敷に戻って、人を呼べばいいんです。少なくともそれで、あなたを探して町中を走ることはありませんでした」

ぐ、とカミラは唇を噛む。

アロイスの言葉はその通り。少年から救いを求められたとき、素直に屋敷まで戻っていればよかった。そうすれば、老婆を運ぶのもわけではないこと。すぐに適切な処置ができていただろう。

内心、思い浮かばないわけではなかった。少年一人なら追い出されたという屋敷も、カミラがいれば話は違う。だけどカミラには、その選択ができなかった。腹立ちと、悔しさと、意地のせいだ。

「ま、待った、アロイス様！　俺が！　俺が手伝わせただよ！
こいつ、俺、アロイス様の知り合いだと知らなくて……！！」

言葉に詰まるカミラの前に、慌てた声の少年が飛び出す。少年はカミラをかばうように背に隠し、やや青ざめた顔でアロイスを見上げていた。

「怒らないでくれよ、悪いことしたわけじゃないんだから！」

「ロルフくん、そういう問題じゃないんだ。黙っていてくれ」

アロイスの低い声に、ロルフと呼ばれた少年は震え、しかしそれ

でも食い下がった。

「い、いいや、俺は黙らないぞ！」

「ちよつと、無理しないでいいのよ！」

肩を強張らせるロルフを、カミラが止めた。アロイスは寛容で温厚な領主として知られている。だが、それでも領主は領主。歯向かえば、モーントン領で生活できないようにさせることもできる。

特に、今のアロイスは平静と言い難い。領民が口答えをするには、恐ろしすぎる相手だ。

「俺、嘘つきだったから、助けてって言っても誰も信じてくれなかったんだ」

少年は唇をわななかせ、それでも黙らなかった。

「町でも知られた悪ガキだった。自覚あるよ。自分のせいで、ばーちゃんが倒れても信じてもらえなかった。でも！でも、こいつだけはアホだから信じてくれたんだよ……！『他の誰か』なんていなかったんだ！」

ロルフはカミラを指さして、矢継ぎ早に口走った。小さな体を見下ろすアロイスに、表情の変化は見られない。その体格も合わせ、異常な威圧感を放つアロイスに、ロルフは嘆願をするように言った。「こいつじゃないと、ばーちゃんはまだ路地裏で倒れたままだった。恩人なんだよ……！」

アロイスは無言のまま。ロルフを見下ろし続けている。ロルフも負けじと睨み返す。どちらも譲らず、部屋の中に沈黙が落ちる。

暖炉の火が燃える音。激情を押し隠すような呼気。夜の鳥の鳴き声。沈黙は、永遠に続くように思われた。

沈黙を破ったのは、「きゅう」という小さな腹の音だった。

音の方向へ、アロイスとロルフが同時に視線を向ける。彼ら二人だけではない。部屋にいた人間みんな、その違和感のある音の元を見ずにはいられなかった。

犯人は、カミラの影に隠れていた少女だった。最初に「おなかへ

った」と言った子だ。

少女は一斉に浴びた視線に戸惑い、きよろきよろと顔を動かした後、自分の腹に手を当てた。そして、大きな目を瞬いたと思うと、見る間に潤み出す。

「うあああああん、おなかへった　　！！」

空腹を我慢していたのか、緊張した空気に耐えられなかったのか。少女はそう言いながら、弾けたように泣き出した。アロイスが頭に手を当て、ロルフが深く息をはく。幼い子供たちは、少女の泣き声につられたように、ふにやふにやと泣き始めていた。

「おい、我慢しろよ。そんな場合じゃねーだろ！　ばーちゃん寝込んでるし、今日は夕飯なしだぞ！」

「やだー！」

ロルフが困った顔で、どうにか収集をつけようと少女を叱りつける。が、少女はいやいやと首を振った。むしろ、ロルフの怒鳴り声に、彼女はますます駄々をこねる。

「やだやだやだ！　おなかへった！」

「わがまま言うんじゃないぞ！　もっとチビどもがビビってんじゃないか！」

「やだー！！　おにいちゃんも領主さまも、こわいよ　　！！」

少女の泣き声が部屋に響き渡る。ロルフは少女を止めるどころか、余計に苛立ち怒ってしまふし、老婆はベッドの上から動けず、なだめようと声を上げて咳き込んでしまふ。アロイスは打つ手なく、天井を見上げているありさま。

カミラは流れ込む騒音の中、眉間にしわを寄せ深く息を吐いた。それから、奥歯をぐつと噛みしめ、今度は大きく息を吸い込む。

「　　わかった」

カミラの声は、怒鳴り声でも叫び声でもない。だけど、騒がしい部屋によく通る声だった。

「食事なら、私が用意する。ピーピー泣いてるチビたち！ 厨房まで案内しなさい！」

子供たちが、きょとした顔でカミラを見つめる。
いや、子供だけではない。ロルフも、アロイスも、虚をつかれたようにカミラを見ていた。

「……カミラさん、あなたがですか？」

アロイスは胡乱な目は、カミラのなに一つ信用していないことを告げている。何人もいる子供たちのために、貴族の令嬢が食事を用意する。そんなことお前にできるのか
表情が、口よりもわかりやすく語る。

「私、料理が趣味だつて、前に言いましたよね」

カミラはふん、と鼻で笑って言った。

「この人数ですよ？」

「一人分作るのも、十人分作るのもそう変りないですもの」
胸を張るカミラに、アロイスは眉をしかめた。そして、諦念を込めた息を吐く。

「……わかりました。私も手伝います。あなた一人では心もとない」
「アロイス様がですか？」

今度は、カミラが胡乱な目をアロイスに向ける番だった。太い腕をまくるアロイスの手は、いかにも不器用そうに見える。あの手で、あの味のわからない舌で、なにが作れるというのか。

「私もモートン領の男。多少は腕に覚えがあります」

モートン領では料理は美德であり、たしなみである。それは、貴族も平民も関係ない。

「前に言いましたよね」

アロイスは挑むような視線で、カミラと同じ言葉を口にした。

寝室の狭さに反して、厨房は広く、よく手入れされていた。

パンを焼くための大きなかまどがあり、鍋を火にくべるための小さなかまどが二つある。水をためる瓶かめが、簡素な流し場と隣接している。厨房の中央には、調理用のテーブルが一つ。壁には、調理具や食器を置いた棚が据えられており、食材を置く棚と、古い石櫃いしびつがある。

踏み台程度の大きさの、古い石櫃のふたは、ひやりと冷たい。開けてみれば、握りこぶし程度の光る小瓶と、ミルクや卵がいくつか納められていた。

小瓶は、魔石を入れると冷気を発する魔道具だ。王都でも広く流通しており、今は庶民も手にすることができる。ただし、燃料として魔石を絶やさないようにする必要がある、用途は生活に必要な最低限に絞られる。だいたいは、こうして冷気を逃がしにくい石櫃の中にに入れて、食物を冷やすことに使われていた。

石櫃の中身を確かめた後は、カミラは棚に目を向ける。

見てすぐにわかるのは、棚の中段に置かれた、表面が乾いて固そうな黒いパン。荒く引かれた小麦粉の詰まる麻袋。塩と、ごく少量の精錬されていない砂糖。その一段下には、木の実のジャムがいくつか。ちよつと痛んだトマトに、玉ねぎの束と人参とにんにく。辛子の種が瓶に詰められて置かれている。

棚の下段には、大袋に入ったジャガイモと、丸のままのキャベツ。棚の上段には、木の実や豆、ハーブの入ったかごがある。

棚の最上段で、カミラはようやく肉を見つけた。一年越冬してきたような、干からびたソーセージだ。それでも、無いよりはましだろう。

季節柄、それなりに食料があるのは助かった。カミラはジャガイモを袋から取り出すと、ばいばいとアロイスに押し付ける。

アロイスは受け取るたびに、調理用のテーブルの上に置いて行く。「なにを作るつもりですか」

「ジャガイモ、玉ねぎ、人参。全部煮てスープにします。パンが固いから、浸して食べるしかないでしょうし。それから豆とキャベツを塩でゆでて、あと卵もありますね」

鍋物なら、大人数分を一気に作ることができる。人参、玉ねぎ、にんにくもアロイスに渡すと、カミラは食器棚からナイフを二本取り出した。一本をアロイスに差し出す。

「皮むきくらいはできますよね」

「当り前です」

ナイフを受け取りながら、アロイスは言った。

「すぐに終わらせて、屋敷へ戻りましょう。あなたにはもつと言わなければならぬことがあります」

「お説教ですか。それとも、『結婚をやめる』とおっしゃるつもりですか」

願ったり叶ったりだ。ふん、と息を吐きながら、カミラはジャガイモにナイフを当てる。

「痩せるなんて言いながら、本心では痩せるつもりなんてなかったんですものね。アロイス様は、結婚をする気がないからそんなことを言えたんですね」

「……あなたが真つ先に、痩せなければ結婚をしないとやってきたんです。私が痩せると言わなければ、あなたは腹を立てたでしょう」アロイスも同様に、皮をむき始める。意外にも手慣れていて、見る間にジャガイモが裸になっていく。

裸になったものは、かごの中へ放り込む。むいた皮は、別のかごへ。こちらは後で、地面に埋めて捨てる。

「私のご機嫌取りをしていたって言うんです？」

「そうでなければ、あなたはここでの生活に耐えられなかったでしょう。思い通りにならなければ、あなたはすぐに癩癩を起すんですから」

「癩癩つてなによ!」

「それですよ」

声を荒げたカミラに、アロイスは冷ややかに言い放つ。たしかにその通りで、カミラは「ぐ」と言葉を詰まらせた。

「あなたは機嫌を悪くすれば、今日みたいに後先考えずに飛び出して行ってしまうだろうと思っていました。仮にも、ユリアン殿下からお預かりした方。万が一のことを起こすわけにはいきませんでした」

「……それはどうも、お優しい旦那様」

できるだけ落ち着いて見せるように、カミラは不自然に低い声で言った。しかし体は正直なもの。ジャガイモの皮ごと、身をむいている。

「でも、結局は私は飛び出して行ってしまうたわ。あなたのその不誠実な態度のせいで」

「私が不誠実ですって?」

アロイスが手を止め、顔を上げた。

「私はあなたを保護し、あなたに自由な生活を与え、あなたに歩み寄ろうとしました。今日まで、あなたのわがママを叱ったこともない……!」

「歩み寄ろうとした……!?!」

珍しく声を荒げたアロイスに、カミラもつられて大声を上げる。

「いったい、いつ、どこでそんなことをしましたか? 私の言葉なんて聞きもしなかったくせに!」

「あなたが私に向ける言葉は、『痩せる』、ただそれだけでしょ!」

「そんなこと」

「そんなことはない?」

そんなことは当たり前？

続く言葉は、カミラ自身にもわかりかねた。だが、言葉に詰まるよりも先に、子供の甲高い声が厨房に響いた。

「おしっこー」

アロイスとカミラが、そろって声の方向を見る。

厨房の入り口に、ぬいぐるみを抱えて半泣きの子供が立っていた。まだ四つくらいの男の子だ。彼の顔に、カミラは見覚えがあった。

「あなた、まだ行つてなかったの！」

ナイフとむきかけのジャガイモを投げ出し、カミラは子供の元へ駆け寄った。

近くで改めて見て、やはり寝室で、カミラに尿意を訴えた子供だったとわかる。

「こんな放っておくなんて、あなたのお兄さんたちはなにしてるのよ！」

カミラが言えば、子供は自分が叱られたような顔で、ぬいぐるみに顔を隠す。

「ごめんなさい……」

「いいのよ。よく我慢したわ。アロイス様」

カミラが呼びかければ、アロイスは渋い顔で、しかし素直に返事をした。

「なんでしょう」

「ちよつと、この子を見てください。そちらはお願いします」

「……はい」

アロイスが頷くを見ると、カミラは小刻みに震える子供の手を取って、早足でトイレへ向かった。

厨房へ戻ってきた時には、皮むきは終わっていた。

アロイスには続けて野菜を刻んでもらい、カミラはかまどに火を

入れる。浅い鍋の中に乾いたソーセージを並べ、じわじわと温めれば、それなりに脂がしみだしてくる。

「私は」

刻まれた玉ねぎを炒めるカミラに、背を向けたままアロイスは呟いた。

「私はあなたとの対話のために、毎日時間を割いてきました。忙しい日も、必ず対面して話をする時間を取りました」

それは間違いではない。毎日必ず、茶会の時間が作られた。どうしても忙しい日でも、昼か夜の食事は同席して、顔を見ない日はなかった。

「あなたを理解し、親しくなる努力をしてきたつもりです。あなたが痩せると訴え続けても、対話を打ち切る日はありませんでした」不誠実、という言葉がよほど堪えたらしい。アロイスの重なる言葉を聞きながら、カミラは笑い出すような不愉快さを覚えた。

「アロイス様が優しいことはわかりますわ」

親切で、穏やかで、いい主人であり、いい領主であるのだろう。

「だけどそれは、対等な人間に対する態度ではなかったわ。保護した？ 与えた？ 叱らなかった？ それは全部、上から目線の施しだわ！」

「私は、そんなつもりでは……！」

「私のこと、一度だって本気で見たことはありません！？ 私のこと、本気で知ろうと思いました！？」

振り向いて詰め寄るカミラに、今度はアロイスが「ぐ」と言葉を詰まらせる。

「ですが……ですがそれはあなたも同じでしょう！」

「アロイス様が、先に諦めて会話をしようとしなかったんでしょう！」

「私は……！」

アロイスが次の言葉を紡ぐより先に、カミラは不意に「あー！」と大声を上げた。カミラの視線は調理用テーブルの上。アロイスの

刻んだ野菜たちにある。

「切り方が大きすぎです！ もう半分でも大きいくらいですよ！」

「そんなことはどうでも……！ …………… もう半分ですか？ 小さすぎて食感がないでしょう」

「アロイス様ではなく、小さな子供が食べるものなんですから。それに、小さいほうが火が通りやすく、早く出来上がりますし」

「……………わかりました」

怒りの火を吹き消されたように、アロイスはおとなしく野菜を刻み始めた。

刻まれた野菜を入れて炒め、温まったところで水を入れる。

玉じゃくしで灰汁をすくう横で、アロイスは余った具材をまとめて炒めていた。並び立つと、やはりアロイスは幅を取る。

横目でアロイスを見ていたカミラは、味付けをする彼の手を止めた。

「あ、アロイス様待つて」

「なんででしょう？」

「辛子はいれないください。小さな子は苦手だから。それにハーブも、ちよつと癖のあるものは控えた方が良くかもしれません」

正直、とんでもない濃い味付けにされるのではないかと見張っていたのだ。だが、予想に反してアロイスの調味は常識的だった。ただ、少しだけ味覚が大人すぎる。子供相手なら、もっと単純でわかりやすい方がいい。

「……………そうですね」

思いのほかおとなしく、アロイスはカミラの言葉に従った。アロイスは辛子の種を脇に置き、塩と少量のハーブで味をつけ、卵を流し入れる。

アロイスはじわじわと焼けていく卵の端をまとめる。そうしながら、鍋にトマトを入れ煮詰めるカミラの様子をうかがった。

「……………ずいぶん手慣れているんですね」

「意外ですか？」

カミラはアロイスを一瞥すると、口を曲げて笑った。手入れは良くても古い厨房。多少歯のこぼれたナイフで器用に野菜の皮をむき、少ない調味料で味を付ける。肉もなく、砂糖もろくにない中で、カミラは器用に料理をした。

「気位の高い腹の立つ娘が、こんな場所で料理をするなんて思いま
せんものね」

カミラが言えば、アロイスが目をそらす。その横顔はうつむき、
ばつが悪そうにしかめられている。

おそらく、カミラが屋敷を飛び出した理由を悟ったのだろう。

「あの時の……聞いていたんですね」

つぶやくアロイスの視線の先。卵の泡が膨らんで、弾けてしぼん
だ。

食事は大騒ぎだった。

厨房に隣接した食堂。長テーブルに沿って子供たちが座る。

子供たちの前には、とろとろ煮込んだスープと、切り分けられたパン。テーブルの中央には大きなオムレツの皿があり、塩ゆでのキヤベツと豆が添えられている。

だけどそれも、今は見る影もない。

料理と配膳を終えてもなお、カミラとアロイスは忙しかった。

「うえー人参嫌い」

「わがまま言わない！ 小さくしてあるんだから、噛まずに飲み込んでんじやいなさい！」

人参を皿の外に捨てようとする子供を、カミラが咎めた。しかし人参嫌いは、「やだ」と生意気に口答えをしてくる。

さらに言い募ろうとしたとき、また他所で声が上がる。

「こぼしたー！」

泣き声と同時に上がった声に振り向けば、アロイスが重たい体で駆けていくのが見えた。その視界の中、たまたま、少年が隣に座る少女の皿に手を伸ばす姿が映る。

「あー！ おにいちゃんが私のパンとったー！」

「俺じゃねーもん」

「あなたでしよう！ 見てたわよ！」

そう言ってからカミラは少年の元へ駆け寄る。が、カミラが到着する前に、少年はとぼけた顔で奪ったパンを口に放り込む。

「俺知らねー。パンなんてないし」

口の中に隠し、もごもごとしゃべる少年に、少女はわーっと泣き

出す。

「お兄ちゃんが妹泣かせてどうするの！」

ぽこん、とカミラは少年の頭を小突く。が、少年は堪えない。

「なんで妹だからって優しくしなきゃなんーんだよ。だって年下だぜ？ 理由を言えよ、理由を」

「理由ですって？」

カミラは少年の頭に手を置いたまま、ぐりぐりと小突き続ける。

そうして不敵ににやりと笑えば、少年が少し怯んだ。

「妹に優しくないお兄ちゃんは、もっと年上にいじめられるのよ」

少年がカミラを見上げた。生意気な口をきいても、まだ幼い子供だ。カミラは十分に大きく、恐ろしく見えるのだろう。少年は肩をすくめ、身を縮めた。

「わかったら、ちゃんと謝りさない。謝れる子はいじめられないわ。それで、欲しいときは勝手に取らないの。わかった？」

「……ごめんなさい」

少年は泣きべそをかく少女に向けて、おずおずと頭を下げた。そうこうしているうちに、またどこかで声が上がる。

慌ててカミラが騒ぎの元を探していると、ふとアロイスが見ていることに気が付いた。だが、その視線は一瞬だ。アロイスもまた、子供の誰かに呼ばれて、慌ただしく駆けて行った。

かちやりと皿の当たる音。

水の流れる音が、静まり返った厨房に響く。

食堂もすっかり片付き、子供たちは寝静まった。老婆の元へ食事を届けた後、カミラとアロイスは、並んで厨房の片づけをする。

カミラが皿の汚れを水で洗い流し、アロイスが水をふき取って棚に納める。しばらくの間、黙ってお互いの役割をこなしていた。

夜はすっかり更け、もう大人も眠る時間だ。隙間風が、水で濡れ

た手を冷やす。

「……………子供の扱いに、慣れていらつしやるんですね」

ぼつりと、アロイスがつぶやいた。あまりにさりげなくて、少しの間、カミラは自分に向けられた言葉だと気が付かなかった。

「意外でした。料理をする姿も、子供と接するあなたも」

「はしたないところをお見せしましたね」

料理の趣味よりも、もっと人に言えないカミラの姿。なにかも晒したカミラは、すっかり諦めて笑った。

「私、孤児院に行っていたと言いましたでしょう」

「ああ」

アロイスは思い出したようにうなづく。グレンツェで、騒動が起る前に交わした最後の会話だ。

「慈善活動なんて言ったけど、あれは嘘なんです。本当は、厨房を借りていたんですよ。作ったら、子供たちが喜んで食べてくれるから」

「……………それこそ、慈善活動ではないのです？」

「そんな立派なことじゃないです。私は好きなことをしてただけですもの。孤児院だって、友達のお母様の運営されていたところですよ」

王都にある孤児院は、この古い家とは比べ物にならないくらいに立派ではあった。しかし、子供はどこでも変わらない。やんちゃで、生意気で、底なしに元気だ。上品な貴族令嬢では、一人二人の子供はさておき、大人数は相手にできない。

だからカミラは、すっかり声を張り上げ走り回ることに慣れ、品のない仕草や口調が身についてしまった。

「友達ですか」

「ええ。私の侍女なんですけれどもね。とても悪い娘でしたよ。いつもいけないことばかり教えられてきた気がします」

屋敷を抜け出す方法や、平民らしい変装。悪い口調も、だいたい

が彼女のせいだ。

「そもそも、私に料理を教えたのが、あの子のお母様ですもの。親子そろってとんでもない悪党ですわ」

それで、カミラが王都を追い出されるとき、最後まで反対して、悲しんでくれた。彼女は一緒に行くと言い張っていたが、王子の厳命で誰も連れて行くことはできず、結局は置いて行ってしまった。

懐かしい。もうずいぶんと遠いことのように思えた。みんな元気にしているだろうか。自分と親しくしたことで、不都合は起きていないだろうか。静けさの中、とりとめなく思考が零れ落ちる。

カミラは息を吐き、首を振った。視線を落とせば、流し台にはまだたくさんの皿がある。よし、とカミラは力を入れてつぶやく。

「さっさと終わらせちゃいましょう、アロイス様。もういい時間ですわ」

顔を上げてアロイスを見上げれば、彼のむくんだ顔とまっすぐに向かい合う。

うつむくカミラをずっと見ていたのだろうか。急に顔を上げたカミラを見て、彼は面食らったように瞬いた。

「え、ええ、はい」

歯切れ悪くそう言ってから、アロイスはまたカミラを見下ろしてしばし黙る。

「……………私は、あなたを誤解していたみたいです」

「誤解ですか？」

「ほぼ初対面で『痩せる』などと言う、礼のなっていない見栄えばかり気にした方だと。わがままで、自分の立場をわきまえられず、賢くもない。単純で扱いやすいけれど、短気で直情的なうえ、とても自分勝手なだけの方だと思っていました」

「そこまで思っていたんですか！」

思いつく悪口を丁寧を重ねられた気がして、思わずカミラは声を上げた。反してアロイスはまじめな顔で、淡々と言葉を続ける。

「…………でも、そればかりではありませんでした。話してみればす

ぐにわかることだったんですね」

「さっきの言葉の否定はしないんですね」

「は、とカミラは乾いた笑いを返した。羅列された悪印象は変わらず、それに別の印象が追加されただけなのだ。

別に、いいけれども。

「アロイス様つて、案外正直なんですね」

唇を尖らせて言えば、アロイスはおかしそうに目を細めた。そのまま少しの間カミラを見つめ、ふとため息を吐く。

「頬や額も、お嫌ですよね」

「はい？」

唐突な言葉に首を傾げれば、アロイスは首を振った。それから彼は、カミラから目を逸らす。逸らされた視線の先は、どこでもない虚空だった。

なにもない場所を見つめながら、アロイスは息を吐く。

「……カミラさん、私、痩せてみようと思います」

カミラは瞬いた。幻聴でも聞いたのかと耳に手を当てる。

「突然、どという風の吹き回しです？」

今までさんざん『痩せる』とカミラが言っても、耳を貸さなかったせに。自分から痩せるなんて、本当にこの巨体の口から出てきた言葉だろうか。いや、そもそも本気なのか。また適当にあしらわれているのではないだろうか。

疑り深いカミラとは視線を合わせず、アロイスはなにもない空間を見つめている。手はせわしなく、とつくに水気の切れた皿を拭いていた。

「なんとなく。なんとなくですよ。……痩せるために、なにから始めればよいと思いますか？」

「……………えっと、とりあえず、一食減らしてみればよいかと」

待ち望んだ言葉のはずなのに、思考が追いつかないまま、カミラはあまりに当たり前のことを口走っていた。

やはり八食は多い。

1 - 終章

「おい、悪役ババア。帰んのかよ」

夜も更けたころ。屋敷を無断で一晩空けるわけにもいかず、老婆に挨拶だけ済ませて、家を出ようというとき。アロイスを追って玄関に向かうカミラに、生意気な声がかかった。

「だーれがババアよ」

口の悪さに顔をしかめながら、カミラは声に振り返った。

視線の先にいるのは、不機嫌そうに唇を尖らせたロルフだ。くすんだ金髪が、廊下を照らす火に揺れる。睨むような彼の眼の中にも、燭台の火が揺らめいていた。

「お前、あの噂の女だったんだな。王子の恋人をいじめたって本当かよ」

「はあ？」

「それで、罰としてアロイス様と結婚するつても本当かよ」

「あんた、そんな噂信じてるの？ ぜんぶ嘘よ、嘘！」

というほど、嘘ばかりでもない。けれど、まああえて「これとこれは一部本当」なんて言う必要もない。

こずるく口を結んだカミラに、ロルフはにやりと笑った。

「やっぱそうだな。噂だとすげえずる賢くて、王様や王子まで騙したって言うもんな。お前、馬鹿だしアホだし、頭悪いもんな！」

「馬鹿にしてるの!？」

さあ去ろうというタイミングで寄越された怒涛の罵倒に、カミラは肩を怒らせた。ちよつと上向きになっていた気持ちに、ロルフの言葉がちよと刺さる。

「あつ、悪役ババア怒った！ 悪い噂流されるぞ！」

「そんなことしないわよ！ この、悪ガキ！」

頭をはたいてやろうかと、カミラはロルフに手を伸ばす。が、口

ルフはするりとカミラの手を避け、小馬鹿にしたようににやにやと笑っている。

「口悪いなー、お前。アロイス様には似合わねーな」

両手を頭の後ろに組み、ロルフは笑いながら言った。底なしの生意気さに、もう一度カミラが掴みかかるうとしたとき。

外の風が玄関から吹き込む。冷たくて穏やかな風が、悪童の髪を撫でた。

「……………お前さ、アロイス様に愛想つかされたら、またここに来てもいいぜ　ほら、お前みたいな口の悪い女、すぐに嫌われるだろうしな！」

一息に言い切ると、ロルフは前髪を誤魔化すように手で掻き乱した。

それから、「じゃあな」と言つて、廊下の奥へと走り去っていった。

そして翌朝である。

アロイスに夜中に連れ戻されたカミラを、使用人たちがひそひそと噂をする。

聞くとともにしに聞こえてくるのは、やはり昨日の騒動であった。

噂の悪女が侍女を責め立てた上に泣かせて、癪癪を起して無鉄砲に飛び出した拳句、夜の街で騒ぎ、最終的には旦那様自らが連れ戻した　と。

そんな話が元になり、尾ひれもつくし背びれもつく。当たり前のように、胸びれだってある。

昨日までとなにも変わらないわ……！

たった一日でアロイスは痩せないし、カミラへの評価も変わらない。屋敷の人々は、カミラに対して慇懃ではあるもののよそよしく、視線は冷たいままだ。いや、昨日の騒動のおかげで、いつそうカミラへ向けられる視線のとげは増している。

なんとなく屋敷に戻ってきてしまったけれど、これはもしかすると、孤児院に身を寄せていた方が良かったのかもしれない。

早まったか　などとカミラが、自室で苦々しく考えていたとき、不意に部屋の扉が叩かれた。

どうぞ、と反射的に答えながらも、部屋を訪れる人間に心当たりはない。夜遅くに帰ったと言うのに、アロイスは残った仕事を片付けに朝早く出て行った。彼の他にカミラの部屋を訪れる人間は、今のところ皆無だ。

「失礼します……」

遠慮がちな声と共に、扉が開く。

現れたのは、背の低い侍女

見覚えのある、小動物めいた

瞳の少女だった。

「……あなた」

「奥様、あの」

「あなた、昨日の侍女じゃない！　よくも私の前に顔を出せたわね！」

今回の騒動の諸悪の根源。カミラの命令を嘘で断った拳句、休憩室でサボり、悪口を言い、叱れば泣き出した問題侍女である。今日は、連れの二人はいないらしい。単身乗り込んでくるとは、いい度胸である。

「なにしに来たのよ！　あなたのせいで大変だったのよ！　料理はこぼすし、食事中に暴れるし、けつきよくは漏らしちゃうし……！」

「あの、あ、あたし……」

「それでも、私はあなたの主人なのよ！　教育がなっていないわよ！

今までどんな楽な仕事してきたの！ 自分勝手をした挙句、泣いて逃げて、無責任だっと思って思わないの！？」

「あ……うっ……」

侍女は何かを言おうと口を開いた。が、口から出たのはうめき声だった。カミラの見ている前で、侍女はうつむき、ぐずぐすと嗚咽を上げる。侍女の制服である黒いドレスを両手で握り、肩を震わせる。

「泣いても私は許さないわよ」

「わ……う……あの、あの……」

カミラは腕を組み、小さな侍女を見下ろす。昨日はここで邪魔が入ったが、今日は自分からカミラの部屋に飛び込んできたのだ。侍女を助ける人間は、どこにもいない。

「言いたいことがあるならはっきり言いなさいよ。ぐずぐず泣いたってどうにもならないわ」

「わ……わ、かってます……」

侍女は胸に手を当て、大きく息を吸った。それから、涙で潤んだ瞳のまま、カミラに向けて顔を上げる。

「あ、う、あたし、あの、奥様に言いに来たんです、あの………」
冷ややかなカミラの視線を、侍女は泣きじやくった顔で受ける。
呼吸は浅く、時折しゃっくりが混ざる。

「も………申し訳ありませんでした……！ あ、あたし、わかっていたんです。奥様のおっしゃることが、た、正しいって。あたし、あ、謝らなきゃって思ったのに」

のに、と言ってしゃくりあげる。言葉を吐きながらも涙は止まらず、喘ぎ声が混ざる。

「あ、たし、気が昂るとすぐに涙が出て……だ、黙っていれば、我慢、で、できるんですけど」

だから、カミラに責められてからずっとうつむいたまま黙っていたのだ。なにか言っていると泣き出してしまっから。

そうして黙っていると、他の誰かがいつもわかった顔で助け舟を

出す。侍女自身の内心とは裏腹に。本当に言いたいことは言葉にできないまま、『かわいそうに』で終わってしまうのだ。

「はあああ！？」 泣いちゃうから黙る、で許されるわけないでしょうが！！ しかも人のせいにして！！」

「はい！ そ、そのと、とおりです……！」

「かわいそうになんて思わないわよ！ さつさと謝ればこんなに怒らなかったのよ！？ それに、ぜんぜん泣いてないときの陰口も聞いてたのよ！ こっちは言い訳できるの！？」

「言い訳、は、あ、ありません！ ど、どんなご処分も、か、覚悟してます……！」

「泣いてもぺらぺら喋れるじゃないの！」

ぐずぐずの顔で、つつかつつかえながらも、侍女はよく喋る。傍から見れば、小柄な侍女を苛め抜いているようにも見えるだろうが、泣いていることを除けばただのお説教と変わらない。

「表情くらい繕えなくて、侍女なんて務まらないわよ。向いてないんじゃないの？」

とはいえ、すぐに泣いてしまつて務まる仕事もそうそうあるまい。むしろ、グレンツェの別邸は大半が主人不在。不在中に使用人たちがすることと言えば、屋敷の手入れか、定期的に本邸まで送る、輸出入やら魔石の採掘量、商人の移動に関する資料をまとめることばかり。いわば、役所としての役割が強いのだ。

感情昂ることも少なく、いっそ向いているともいえる だろう
か？

「だいたい、処分って言つても、私にそんな権限ないわよ。アロイス様に頼み込めば別かもしれないけど、なんであなた一人のためにそこまでしないといけないの」

一介の侍女を辞めさせるためには、今度はカミラが頭を下げることになる。

アロイスに向けて、『あの侍女を辞めさせてください』なんて口が裂けても言えるものか。些末なことを気にして、いつまでも腹を

立っていると思われてしまったのは、それはそれでカミラのプライドが許さないのだ。

「あなた、叱られたでしょう。反省したでしょう。で、謝ったでしょう？」

「は、……はい」

「その次は？」

侍女は濡れた瞳を瞬かせた。

「謝って、それだけ？」

眉間にしわを寄せるカミラを見やり、少しの間悩むように首を傾げた。それから、腕で荒く顔をぬぐうと、息を吸い込んだ。

「……もうしません。仕事もまじめにしますし、態度も改めます」

震える声を抑え、侍女は一息に言い切る。

「言ったわね」

ふふん、とカミラは不敵に笑った。

「同じことをしたら、今度こそクビよ。私はこういうの、忘れないわ。次にグレンツェに来たとき、サボってないか確かめてやるんだから！」

はい！ と震えながら頭を下げる侍女に、窓から差すグレンツェの明るい陽射しが影をつくる。

もつじき離れる空の色は、鮮やかな青だった。

シュトルム伯爵家令嬢、カミラ・シュトルムは嫌われ者である。

ゾンネリヒト王国の第二王子と、男爵令嬢リーゼロッテの運命の恋を邪魔した悪役であり、わがままで勝手で、酷く執念深い魔女のような女である。

グレンツェからの滞在を終え、領都のモンテナハト邸に戻ってきた今も、依然そのことに変わらない。

若い使用人たちを中心に、カミラの噂は今日もひそやかに囁かれ続けている。

「ねえ、聞いた？ あの悪役女、グレンツェの侍女を泣くまで叱って、クビにするって脅いたらしいわよ」

「知ってるわ。旦那様がさすがにクビは止めたらしいけど、お給金下げて降格！ 今じゃ物置の掃除や洗濯をさせられているらしいわね」

「旦那様といえば、戻ってきてから様子がおかしいらしいわよ。以前よりも食が細ってしまっただけ……あの女、グレンツェでも騒動を起こしたみたいだし、きつとすっかり参ってしまわれたのよ」

「ええ、やだ……あの旦那様が？ 怖いわ、今日私、あの女の世話当番なのよ」

「あら、お気の毒。でもね、それならいい考えがあるわ」

前より状況が悪化しているわ……。

グレンツェから、領都にあるモンテナハト邸に戻ってきて数日。自室で従妹テレーゼの手紙を握りしめながら、カミラはわなわなと震えた。

使用人たちがよそよそしいのは変わらず。それどころか、グレンツェから戻ってきてからは、カミラが顔を向ければ、みんな目を逸らすようになった。

というのも、どこから伝わったのか、カミラの起こした騒動がすっかり使用人たちの間に広まってしまったらしい。アロイスの食事は無事に一食減って七食となったが、それもカミラの恐ろしさを伝える一助となってしまうている。

使用人たちは、以前に増して恐る恐るカミラに接してくる。仕事が済めばさっと消えるその逃げ足も、前より速くなった気がする。

さらに追い打ちをかけるように、テレーゼの手紙だ。

「ユリアン殿下とリーゼロッテさんの婚約は、無事に成されました。陛下やエツカルト殿下もこの婚約を、『中身のないつまらない女に惑わされず、素晴らしい女性を得ることができた』祝福なさっております　ですって？」

『中身のないつまらない女』とは、つまるところカミラのことだ。王都にいたころ。カミラが見ていた限り、第一王子エツカルトは、シュトルム伯爵家との婚姻の方に熱心だったように思う。生真面目で、恋や愛よりも王家と国の発展を第一としていた彼のこと。家格の低いエンデ家と第二王子ユリアンとの恋の噂には、眉をしかめることも多かった。

なにより、ユリアン王子とエツカルト王子は不仲で知られている間柄だ。祝福するなんてはずがない。

はずがない、と思っても、今のカミラには確かめるすべはない。

テレゼから飛んでくる手紙が、カミラを悪女と書き立てたゴシツプ紙の切れ端くらいしか、王都の様子を伝えるものはないのだ。

それに。

「お父様とお母様が、テレゼを養子にしたいと……！？」

カミラが追放されたことで、シュトルム伯爵家には子供がいなくなる。

カミラがユリアン王子と結婚をするのであれば、第二子あたりを養子に取るつもりでいた。それが難しければ、どこからか婿養子を迎える計画だったはず。

だが、カミラが世間から嫌われ、『沼地のヒキガエル』と結婚させられようという今、その子供は欲しくないということなのだろう。両親は、これから子供を産むにもいささか厳しい年齢だ。

どこからか跡継ぎを用意したいと思うのも当然。そこで目を付けたのが、シュトルム伯爵の弟こと、ノイマン子爵。その一人娘であるテレゼなのだ。

理屈ではわかる。家柄を保つためには必要なことだ。

でも、理屈じゃないのよ！

手紙をぐしゃりと握りつぶし、カミラは唇を噛みしめた。

頭には、勝ち誇ったテレゼの顔が浮かぶ。今頃はきっと、笑いが止まらないことだろう。容姿も人望も愛情も持っているテレゼが、唯一カミラに敵わないもの。それが、シュトルム伯爵の家柄なのだ。

……私、見捨てられたんだわ。

両親は、カミラが許されて王都へ戻る可能性を捨てた。そうでなければ、ノイマン子爵から、彼の溺愛するテレゼを取り上げるものか。

カミラの父シュトルム伯爵と、叔父ノイマン子爵は、たいへんに仲の良い兄弟だ。

幼いころから仲が良く、叔父がノイマン子爵家の婿養子となって

からも、親密に交流を重ねていた。伯爵は弟をかわいがり、子爵は兄を尊敬して、なにかと頼ってきたものだ。

問題を抱えた叔父が、何度も父の元を訪問する姿を、カミラは間近で見えてきた。一人っ子であったカミラは、ずっと二人の兄弟仲をうらやましいと思っていたくらいだ。

シュトルム伯爵が、なにかと不安定なノイマン子爵家の経済的危機を救ったことは、一度や二度ではない。病弱な子爵夫人についても、伯爵は夫妻そろって相談に乗り続けてきた。

子供を産むことは難しいと言われていた子爵夫人。そんな彼女が奇跡的に子を授かり、生まれたのがテレーゼだった。子爵夫妻にとって、テレーゼは奇跡そのもの。目の中に入れてもいたくないほどにかわいがっていることを、シュトルム伯爵が知らないはずがない。

それでも伯爵は、愛する弟から彼の大切な娘を取り上げると決めた。

そこには、相応な覚悟があるはずだ。

いえ。

カミラは息を吐くと、握りつぶした手紙を手の中で丸めた。

こんな手紙だけでは信じないわ。

手紙は、カミラを嫌うテレーゼが書いたものだ。父と母から直接話を聞くまでは、こんなものはテレーゼのたわごとと同じ。

保留！ 保留よ！ 素直に信じてたまるものか！！

「私は落ち込まないわ！ 今に見てなさいよ！！」

奮起するように声を上げると、カミラは丸めた手紙を暖炉に投げ込んだ。

「アロイス様を色男に仕立て上げて、絶対に王都に戻ってやるんだから……！！」

カミラは懲りもせず、何度も誓った決意を口にした。ちょうどその直後。

待ち構えていたように部屋の扉が叩かれる。

「奥様！」

叩音の後に聞こえたのは、やけによく通る女の声だ。いや、通るといふかなんというか。兵士たちの掛け声にも似た、腹から出した大声だ。

「メイドのニコル、奥様のお召し替えにただいま参りました！」

……また来た。

その声を聞いた瞬間、カミラの憤りはため息に変わる。

また今日も来た。グレンツェから戻ってからずっとカミラの身の回りの世話をする 問題メイドが。

「痛っ！ 力まかせに櫛を入れるんじゃない！」

「申し訳ありません！ 奥様の髪が絡まっていたので！」

「奥様じゃない！ じゃなくて、絡まっているからって、力でどうかしないでちょうだい！ 丁寧に梳けばほどけるわよ！」

「はい！ 丁寧に梳きます！」

「いたたたたた！」

力任せに髪を引かれ、カミラは痛みに悲鳴を上げた。

自室の椅子に座るカミラの後ろで、メイドのニコルは櫛を握りしめている。その櫛にはカミラの黒髪が巻き取られ、まさに引き抜かれるところだった。

「梳けました！」

「違う！ 抜いたっていうのよ！」

得意満面のニコルを、カミラが腹の底から否定する。カミラ自慢の というほどもないが、それなりに手入れをしてきた黒髪が哀れで仕方がない。

「あなた、不器用すぎるわ！」

「はい！ 不器用です！ でも一生懸命梳かします！」

素直！

思わず頭に手を当てて、カミラは呻いた。カミラの背後で櫛を持つニコルは、言葉通り一生懸命、やたらと力んでカミラの髪をひとつ掴む。

「待って、待ちなさい！」

「はい！ 待ちます！」

カミラの言葉に、ニコルは髪を掴んだまま止まった。カミラは頭を抱えたまま、ニコルに振り返る。

視界に映るのは、金色の髪を雑に束ねた、まだ年若い少女だ。下級貴族の血筋らしいが、彼女の両親は貴族の称号を持たない。丸い頬と低い鼻にはそばかすが散り、素朴な愛嬌を感じさせる。

特徴的なのは、彼女の生真面目な瞳だ。彼女の瞳は、とび色の虹彩と赤い瞳孔からなる。

赤い瞳は魔力の証。強い力を持つほど、その色は鮮やかになる。

虹彩まで赤くなるのは王家の人間だけだが、瞳孔のみであれば、王族以外にも赤い者はごく少数存在した。

ニコルの瞳孔は、遠目から見てもわかるほどに鮮やかな赤色をしている。これがまた、彼女を問題メイドと至らしめる一端であるのだが、今はとりあえずどうでもいい。

カミラはじつとりとニコルを見やる。

「今日は別の侍女が来るはずだったでしょう。どうして今日もあなたなのよ」

カミラの侍女は、基本的に日替わりの当番制だ。カミラの侍女になることを嫌がってか、それとも他の理由があるのか、カミラの専属侍女というものはモンテナハト邸には存在しない。グレンツェに行く前は、毎日違う顔の侍女が来て、及び腰でカミラの身支度をしていた逃げたものだ。

だが、戻ってきてからはずっと、この要領の悪そうな少女がカミラの部屋に訪れる。とうてい身の回りの世話を焼けそうにない、不器用で、自分の髪さえ乱れた下級使用人である『メイド』が。

モンテナハト邸では、上級使用人と下級使用人の立場は明確に分かれている。

上級使用人は、家格の低い貴族の子女や、裕福な商家の子女。あるいはよほどの有能で、かつ身元のはっきりとした人間だけになる。執事や侍女、アロイスの侍従などがそれだ。女性の上級使用人を束ねるのが、侍女長のゲルダ。男性の上級使用人を束ねるのが、モンテナハト家に使える使用人の中の最長老である、家令のヴィルマー

だった。

下級使用人は、上級使用人のさらに下に付く。女性であれば、掃除や洗濯、皿洗いなどをするメイド。男性ならば、荷運びや厩舎の手入れをする下男。いずれは上級使用人となる、侍従や執事なども見習いのうちは下級に分類される。

下級使用人は、身元がはつきりとしなくとも、信用できる人間からの推薦があれば採用される。あるいは主人であるアロイスが見込んで、屋敷に迎え入れる場合もあった。

侍女とメイドは、着ているものから判断できる。メイドは仕事柄、よく動きよく汚れる。だから、黒い服にエプロンが必須だ。スカートは動きやすく、膨らまないものを着る。

ニコルは、まさにメイドの格好をしている。下級貴族の血筋であれば、上級の使用人にでもなりそうなものだが、まあおそらくは、彼女の能力が侍女には向かなかったのだろう。

「どうしてメイドのあなたが来て、他の侍女は来ないの」

カミラの胡乱な視線を受けても、ニコルは背筋をきちつと伸ばしたまま、相変わらず腹から出す声で答えた。

「はい！ 私がどうしても奥様のお世話をさせていただきたいと、無理を言って代わっていたきました！」

「奥様って言うのやめて！」

アロイスとカミラは、まだ結婚していない。いずれはそうなるにしても、アロイスが痩せた後の話。

実際に結婚するまで、奥様扱いはお断りよ！

カミラの乙女心はかたくなで、おまけに諦めが悪かった。

「承知いたしました、奥様！」

「嫌がらせしてるんじゃないでしょうね!？」

などと叫ぶカミラを無視し、ニコルは改めて櫛を振り上げる。も

うその仕草から嫌な予感しかしていなかった。

「失礼いたします！」

「ひいつ、丁寧に！　丁寧に！！」

カミラの当然の願いを断ち切るように、ニコルの櫛は振り下ろされた。

こういう時は、告げ口に限る。

「アロイス様！ お話があります！」

勢いよく開けたのは、屋敷二階の中央。エントランスホールから伸びる階段の真正面にある、執務室の扉である。

執務室には、アロイスの他に誰もいない。背の高い本棚に囲まれた部屋の中央。執務用の机に向かい、特注の椅子に座るアロイスは、驚いたようにカミラを見やった。

存在感があるわね。

物理的に大きいアロイスは、うずたかく積まれた書類の中にあっても、すぐにその存在がわかる。もとの背の高さもあって、太ると圧巻の肉の山である。

グレンツェや他の採掘地の魔石採掘量。瘴気の濃淡や、魔力の流れ。各地からの報告を集めた書類の山よりも、アロイスはなお大きい。なんなら、机の幅からみ出している。

「カミラさん、どういたしました。お話でしたら、この後いつもの茶会でお聞きますが」

執務の手を止め、アロイスはカミラの剣幕に戸惑いながらそう言った。

アロイスとの茶会は、グレンツェから戻った今も続いている。

以前よりはいくらか和やかに、話し合うようになったと思う。共通の話題などあまりない二人だが、最近の出来事とか、王都にいたところの話とかを、ぼつぼつと語っている。カミラも、前よりは「痩せる」と言わなくなった。気がする。

茶会には変わらず山盛りの菓子が出るが、これも前に比べれば、

多少は控えめになっている　というのは、アロイスの弁だ。カミラには、変化がよくわからない。

とりあえず、自主的に減らそうと言う意思があることだけは、喜ばしいことである。寝る前の食事もやめて、七食生活を続けられていることだし、今はまだ見た目の変化はないが、痩せるのも時間の問題だ　　ろうか。

随所に若干の疑惑が残る。

が、今はそんなことはどうでもいい。

「アロイス様、ニコルというメイドを知っておりますか！」

「ニコル？」

「そばかすの、金髪の女！　あの女、いったい何者ですか！　ここ数日、侍女に代わってずっと私の身の周りの世話をしているんですよ！」

憤るカミラに、アロイスは面食らったように瞬く。それから、「ああ」と頷いた。ニコルが誰だか、思い当たったようだ。

「ニコルがあなたの世話を？　彼女には簡単な掃除くらいしかさせていないはずですが」

そう。本来のニコルの仕事は、廊下や物置の掃除である。

皿洗いは割るから外し、洗濯は服を破くから遠ざけ、料理や庭の手入れと言った、器用さを必要とする仕事もさせられず。結果として、掃除だけをするメイドとなっていた。

ちなみに、ニコルはまだ入って数か月の新人メイドである。しかし、彼女のやらかしは数知れず。屋敷では、すっかり問題メイドとして通っていた。

特に、今月に入ってからニコルは厄介である。皿という皿は割るし、壺という壺も割る。あのゲルダでさえ、できるだけ仕事を遠ざけようとしているのに、ニコル自身は妙に積極的で、いらぬことまでしかすから、なおさら厄介だった。

「今朝も私のところへきて、ひどい目に遭いましたわ。嫌がらせを

してるんじゃないかってくらい！」

「……ふーむ」

「どうしてあんな子を雇っているんですか！　どう考えても向いてないですよ！」

ニコルはメイドには向いていない。櫛が使えないと言う以前の問題として、不器用すぎるのだ。この仕事に付いていること自体、幸福とは言い難いように思われた。

魔力の強さを生かして、魔法や魔道具の研究員になったほうがよっぽどいいわ。

赤い瞳を持っていれば、一部の仕事では引く手あまただ。

魔力は、生きている人間ならば誰でも持っているものだが、強い魔力となるとぐっと少なくなる。瞳に顕現するほどの魔力であれば、何百人に一人という希少さであった。

人間の持てる魔力量は、生まれながらに定められている。魔石を使つて外側から魔力を補うことはできても、その人自身が持つ魔力の器を広げることはできない。時間の経過で回復する魔力。その含有量の大きさは、それだけで才能と言えた。

強い魔力持ちを必要とする仕事。それは、主に「魔法研究」と「魔道具開発」の二つだ。

魔法研究は、魔道具が普及した今でこそ若干廃れ気味だが、それでも根強い人気がある。長い歴史は魔道具とは比べ物にならず、その複雑さ、深淵さは人の心を未だ惹きつけ続けている。

人を介して放たれる魔法は、単純な動作しかできない魔道具とは異なり、無限の可能性を秘めている　とは、どこかの研究者の言葉だったか。

彼らは、新しい魔法を実践するだけの魔力を持った人間を常に求

めている。魔石を使うことで、魔力の底上げをすることはできるが、所詮は借り物の力。その人本来の魔力でこそ、真の魔法を操ることができるのだ。

一方で、魔道具の開発は、今やどこもしのぎを削る一大事業である。

魔道具の利点は、なにより誰でも扱うことができる便利さだ。

魔石を利用して効果的に、持続的に魔法を放ち続けることは、人間の操る魔法では決してできないこと。例えば、一晚中光を放つ魔石灯。人間が同じことをしようとすれば、一晚中街路に立ち、魔法の光を放ち続けなければならない。

冷気を放つ魔道具も、熱を発する魔道具も、複雑な動作こそできないが、それで一向に問題ない。魔道具目下の命題は、少量の魔力で作動と停止を切り替えられる機構を作り出すこと　だそうだ。

魔道具の開発は、常に失敗が付きまとうもの。試行錯誤の段階でいちいち魔石を砕くより、魔力持ちが直接魔力を注いだ方が、よほど経費削減につながる。というのは、魔法研究と違い、利益重視の魔道具開発ならではの考え方だ。

カミラにも、次の仕事の斡旋くらい、してやろうという心づもりはある。

無闇やたらに出て行け、などとは言わない。本人に悪気があるわけでもなし。推薦状くらいは書いてもいい。もっとも、嫌われ者のカミラが推薦したところで受けてくれる相手はいないだろうから、そこもまたアロイスに頼ることになるのだが。

「うーん……」とアロイスが呻く。

これは駄目な時の反応だ。と察してしまうのが悲しい。

「……彼女にも少し事情がありまして。縁あって少し預かっている身なんですよ。カミラさんの傍にはやらないようにしますので、こ

容赦いただけないでしょうか」

「勝手にあつちから来るんですよ！ 自分から！！」

そもそもニコルはメイドであつて、カミラを世話する身分ではない。

「だいたい、預かっているって、そんな大事な娘^こなんですか？ いったい、どんな身分なんです」

ニコルが下級貴族の血筋とは、カミラも聞いている。

下級貴族なら、たいがい公爵家が気にかかるような相手ではない。あまりないがしろにし過ぎると、他家から反発を食らうこともあるが、多少のことは握りつぶせるだけの力もある。

「カミラさんがお気になさるほどの身分ではないですよ」

はは、と軽く笑つて、アロイスはカミラから目を逸らす。そうして、何気なくつかんだ書類は、最近の天気と風向きについて。西向きの風に瘴気が多く、肌がしびれるとか、なんとか。

誤魔化そうとしているわ。

そういう態度が「誠実ではない」と、少し前に大喧嘩をしたばかりだ。思い出したら腹立たしく、思わずアロイスに詰め寄ろうとしたとき。

乾いた破裂音 ガチャンと、何かが割れる音が響いた。

音はさほど遠くない。まだ割れた音の余韻が消える前に、誰かの怒鳴り声が飛んできた。

「ニコルッ！ あなた また魔力を暴発させたわね！？ これで何回目だと思っているの！」

「はい！ これで七度目！ 今月に入ってから六回目です！！」

執務室にまで届いたその声に、アロイスが頭を抱えるのが見えた。

野次馬根性で執務室を飛び出してみれば、ちょうど階下のエントランスが見える。

玄関扉の横には、左右対称に大きな壺が飾られていた。が、今は壺は一つしかない。一方の壺は粉々に砕け、見るも無残な姿になっていたのだ。

ただ落として割っただけではないと、見てすぐにわかった。普通に落としただけならば、大小の破片があるだろうが、床に散らばる壺の破片は、すべて均一で細かい。

その破片の傍には、直角に腰を曲げたニコルと、それを叱りつけるメイド頭がいた。周囲には、仕事の手を止めて様子を見る、物見高い使用人たちの姿もある。

すぐに飛び出したカミラを追ってか、少し遅れて、アロイスがどすどすと執務室から駆け出てくる。そうして、エントランスを見下ろすカミラの横に並んだ。

「だいたい、どうしてあなたがこの仕事をしているの！ あなたには庭の掃き掃除をするようにと言ったはずよ！」

「はい！ 私がどうしても、やらせてほしいと言って代わりました！」

「自分以外の仕事をするなど、前も言ったでしょう！ あなた、ろくに自分の魔力も扱えないんだから！」

「はい！ 申し訳ありません！」

はつきりとしたニコルの言葉に、メイド頭はうんざりを首を振った。怒る気もなくなったように息を吐き、ざわめくエントランスでつぶやいた。

「……まったく、エンデ家の血筋ともあろう人間が、どうしても出来が悪いのかしら」

静かな声は、妙に良く通った。はっとしたようにニコルが顔を上

げる。なにか言おうと口を開く。が、彼女が何か言うよりも先に、メイド頭が言葉を続けた。

「もういいわ。今日は下がちなさい。このことはすべて、ゲルダ様に報告するわ」

「はい……！」

ニコルはもう一度、深く頭を下げる。それからすぐに身を翻し、エントランスから出て行った。

すべてを見ていたカミラの横で、アロイスがすべて諦めたように、額に手を当てた。

「エンデ……って」

「ご想像通りですよ」

「エンデ男爵家」

リーゼロッテ・エンデ。

王都でカミラと対立し、この辺境まで追いやった女の家。

憎いあの家の名を、辺境で再び聞くことになるとは思ってもいなかった。

エンデ家は、モンテナハト家の臣下の家柄だった。

もつとも、臣下であつたのは遠い昔。まだゾンネリヒトが他国とさかんに戦争をしていたころ。モンテナハト家はかつての影としての役割を果たし、その側近としてエンデ家があつた。

現在は、エンデ家はモンテナハト家からは独立している。小さいながらも領地を持ち、エンデ家独自に事業を立ち上げ、モンテナハト家の支援に頼ることもなくなった。

それでも、律儀にしきたりを守り続けるモンテナハト家のことだ。エンデ家とモンテナハト家の交流は今も残っている。取引をし、親密に交流をするだけではない。エンデ家の血筋のものを、モンテナハト家の従者として遣わすのが、長年の両家の習わしだった。

「エンデ家は魔法研究の大家でもありますから、取引先としても無視できない相手なんです」

アロイスの執務室に戻ったあと。彼は観念しきつた様子でそう言った。

自身の特注椅子に座る彼の体は、全体的にしつとりと汗をかいている。カミラの針のような視線を受け、彼の部屋だと言つのに、居心地悪そうに身じろぎした。

一方のカミラは、勧められた椅子に座ると、腕を組んでじとりとアロイスを見やるだけだ。口を結んだまま、深く息を吸い、吐き出す以外には何もしない。それでも、アロイスが怯えるだけの威圧感があつた。

王子を巻き込んだ、カミラとリーゼロッテの恋の騒動。その敗北者であるカミラのシュトルム伯爵家は、カミラともども嫌われ者となった。それでも、シュトルム伯爵家の主導する船舶事業は無視で

きず、領地の特産品であるワインも根強い人気を誇っている。

家同士の取引なんて、そんなものだ。カミラ当人がどう嫌われようと、家柄に眉をしかめられようと、実益には代えられない。長い間事業を続けてきた信頼も、早々には崩れなかった。シュトルム家の取引先は、今も変わらずひいきにしてくれている。らしいと、辺境に流れてくる新聞の切れ端から読み取れた。シュトルム家のワインは、今年も好評だそうだ。

カミラ一人のために、長年続いたエンデ家の交流を断つ。などと短絡的な行動を、公爵としてのアロイスは取らないだろう。カミラ一人と、一つの家。どちらの方が有益であるかは火を見るよりも明らかだ。

特に、少し前まで、アロイスはカミラに好感すら抱いていなかった。適当にあしらわれず、弁明の場を用意するようになっただけ、一歩前進というところだろうか。

「エンデ家の血筋は、魔力の強い人間が現れやすいんです。魔力は魔石の鉱脈探しにも有益です。魔石を優先的に卸す代わりに、強い魔力持ちの者を預かる。というのが、両家の伝統的なやりとりでして」

そうして預かったのが、ニコルというわけだ。多少能力に難ありでも、魔力が強ければそれだけで有用だ。強い魔力の持ち主は、自然と魔力や瘴気の流れに敏感になる。

だが、そういう実益的なことについては、カミラは興味がない。

「……………リーゼロッテのことは、ご存じなんです？」

あまり冷静ではない心を押して、カミラは尋ねた。すでに諦めきったアロイスは、言い訳をするつもりもなさそうだ。素直に頷く。「昔は頻繁に遊びに来ていたそうです。今は彼女とほとんど交流もありませんし、顔も覚えていませんが」

「昔……………」

「もう十年以上も前のことですよ」

最後に会ったのがいつだったか、アロイスはもう覚えていない。十年以上も会わない少女のことを、アロイスはもうすっかり忘れてしまった。エンデ家の人間と取引で会うことはあっても、リーゼロッテ自身はずっと王都に行つたきり。領地からろくに出ないアロイスには、会う機会もない。

そう語るアロイスの言葉は、乾いていて他人事じみている。思い出のある相手であれば、もう少し感情が滲むもの。何年也会っていないというのも、覚えていないというのも、おそらく本当のことなのだろう。

だが、カミラにとって二人が昔なじみだったという事実には変わらない。

「リーゼロッテは、昔からかわいらしかったんでしょね」

見た目は。と心の中で付け加える。

とげとげしい言葉になっていることが、カミラ自身よくわかった。リーゼロッテは確にかわいい。金の髪は柔らかく、背が低く華奢で、一見するとおとなしい少女。だけど、笑うと意外に快活で、少しだけいたずらっぽさが見える。目が覚めるほどの美少女ではないが、よく見るほどに整った容姿は、磨けば磨くほど輝く原石のようだった。

頭は悪くないが、良すぎるということもない。人の言葉に素直に頷き、感心し、褒めるのが得意だ。と、見せかけるのが得意だ。

涙を見せることはめったにないが、ここぞと言うときの涙は惜しまない。ときおり、はつとするほど大人びた表情をして、原石の輝きを見せつける。

「ユリアン殿下が一目で恋に落ちるような相手ですもの。覚えていないとおっしゃっても、アロイス様だって昔は心惹かれたりしたの

ではないですか？」

小柄で、ふわふわして、やわらかそうなリーゼロッテの容姿は、どうしようもなく男心をくすぐるらしい。守ってやりたいと思うのだそうだ。

背が高く、顔立ちのきついカミラとは正反対だ。まっすぐな黒髪も、勝ち気さを表したような吊り目がちな目も、誰かを威圧する役には立つても、守りたくなるようなものではない。

カミラ自身だって、誰かに守られたいなんて思ったこともなかった。誰かがなんとかしてくれる、なんて期待をするくらいなら、自分で足を踏み出した方がずっと良い。

そんな性格だから、誰もがカミラを「かわいげがない」と言うのだろう。それでもカミラは、「かわいげ」なんて不確かなものに負けるなんて、王都を追い出されるまで思ったこともなかった。

「……みんな、ああいう子が好きですもんね」

「……………ふむ？」

吐き捨てるようなカミラを、アロイスは少しの間黙って見ていた。重たげな頭を傾け、肉に埋もれた目を瞬かせる。

「私はリーゼロッテさんのことを覚えていないので、よくわからないのですが」

アロイスは顎に手を置き、カミラの顔を覗き見る。どこか、きょとんとしたような顔つきだ。

「私から見れば、カミラさんも十分にきれいな方だと思いますよ」

「は」

カミラはアロイスに向けて何か言おうと口を開き、しかし言葉が出ず、半端に息を吐き出した。

頭の中に、いろいろな反応が渦巻く。

「きれい」と「かわいい」は違う。だとか、お世辞は結構だとか、「きれい」とは要するに、近寄りがたいと同義ではないのか、とか。それに、「きれい」と言われて、うれしくないわけではない、だとか。

うれしくないわけではないけど。

「そういう言葉は、あと体重が半分になってからおっしゃってください」

今のアロイスの姿に比べれば、だいたいの人間が美人になる。そんなアロイスに言われも、カミラは素直に喜べなかった。

「……あなたって本当に、遠慮のない方ですね」

正直なカミラの反応に、アロイスは呆れ半分。慣れ半分に笑った。「半分でいいんですね？」

なんだ、その程度か　とも言うつもりか。その体で。

アロイスの言葉は感情が読み難く、まるで軽率にも思われた。

肉の体を揺らしながら、よくもまあ言えたものだ、とカミラは目を眇める。

「強気じゃないですか」

ほとんど条件反射的に、カミラは喧嘩を買うような口調で答えていた。負けん気が刺激される。

そんな簡単に痩せられるはずがないわ。

カミラは長期戦を覚悟していた。なにせ常人の三倍はある男。食事を徐々に減らし、人並みの量に慣れさせるだけでも、軽く一年は見積もっていたのだ。

痩せるために必要なことは、なにより強い精神力。食べないという心。我慢という心。痩せたいという思いである。

それらを何一つ持たずにヒキガエルにまで育った男が、なにを言うかという気持ちだ。ちょっと痩せてみよう、で痩せられたら、この体までは育たない。

この男、間違いなく心が弱い。意志薄弱に決まっている。

「いいでしょう。ひとまずは半分で構いませんわ！　できるもんでしたら！」

「努力しますよ」

喧嘩腰のカミラの視線を受け、アロイスは肩をすくめた。簡素なその仕草から、彼の感情は読めない。本気なのか、また誤魔化しなのか。わからないから腹が立つ。

ぜったい後で吠え面をかくわよ！

痩せてくれるなら大歓迎。の前提を忘れ、エンデ家のことも横に置き、カミラはアロイスを睨みつけた。

「あーあ、あの子がいたら、今日の当番も押し付けられたのに」

「だめだめ。あの子いま本当にやばいから。いくら相手がアレでも、傷つけたら洒落にならないわよ」

「魔力が余って、不安定なんだっけ？ ふうん……じゃあ、我慢させなければいいんじゃない。思いっきり使わせてあげるの。……ねえ、こういうのはどう？」

あれからひと月ほど経った。

アロイスの言葉通り、ニコルがカミラの元を訪れることはなくなった。今は嫌そうな侍女が日替わりで来て、ニコルよりは上手にカミラの髪を梳かす。

一方で、ニコルの破壊活動は激しさを増していた。魔力の暴走は著しく、触れるものをみな壊す勢いで、メイドたちはできる限りニコルを仕事から離そうとしていた。

彼女の魔力の暴走は、主に一人きりのとき。対象は、花瓶や壺といった陶器が主だが、たまにガラスや木材も破壊する。

そのうち、人にも危害を加えてしまうのではないか。

そう恐れるメイド頭や侍女長ゲルダが、彼女に長い休暇を与えるべきかと考えているらしい　と、アロイスはカミラに教えてくれた。

久々にニコルについて思い出したのは、若い侍女たちが噂しているのを聞いたからだ。くすくすと笑いながら、小声でささやき合う

言葉のいくつか、聞くとともに耳に入る。

こういうものは、意外と人に聞かれているものだ。カミラの陰口も相変わらず聞こえてくるし、ゲルダが怖いだとか、メイド頭は言いなりだとか、料理人に良い男がいるだとか。

アロイスが少し痩せてきたという話も近頃は聞こえる。しかし、カミラにはまだその変化がわからない。

顎の肉の層が、一つくらい薄くなったのだろうか？

「最近、瘴気の流れが不安定ですから。魔力も落ち着かないのは、私も同じなのでわかります」

すっかり慣例化したお茶会で、カミラがニコルの最近の事情を尋ねると、アロイスは相変わらずの巨体を揺らしながら言った。彼もなにか思うところがあるらしく、現在のニコルの状態だけではなく、もう少し踏み込んだことまで話してくれる。

「採掘地近辺では、特に瘴気が濃くなっているらしいと報告もあります。瘴気の濃さと魔力は断ち切れないもの。魔石の魔力も不安定で、よく魔道具が壊れると聞きます」

ぎしりと椅子の背もたれに体を預け、アロイスは少し考え込むように言った。

「この辺りは採掘地でもないのに、最近瘴気の風が強い。風の流れや天気の場合で、こういうことがないこともないのですが……」

そう言うアロイスの言葉を肯定するように、吹き込んだ風がカミラの頬を撫でた。

秋口の風とは思えないほど生ぬるく、頬がしびれる瘴気の風。今まで、微かにちくちく刺すような風が吹いたことはあったが、確かに最近、こういう風が続いている。グレンツェにいたころの空気に、少し似ている気がした。

空は高く、重たい曇り雲が風に乗って、北から南に駆けてくる。

今にも雨が降りそうな天気だから、今日の茶会は中庭ではなく、アロイスの私室だ。風は、開け放たれた窓から吹き込んできていた。

「瘴気が不安定な時は、ちょっとしたことで魔力が漏れ出てしまいます。腹を立てたり、緊張したり、落ち込んだりしてもそうですね。そういう時は、定期的に発散して、魔力がたまった状態にしないことが肝要です」

魔力がなければ、暴発することもない。定期的に魔法を使ったり、無意味に魔力を流したりして体の魔力を減らしておくのだ。

不便でしょう、と苦笑するアロイスに、カミラは頷く。

魔力がそう便利な力でないことは、カミラも他人事ながら知っていた。

カミラは魔力をほとんど持っていない。魔法は、幼いころに一つだけ、人から教えられたきり。カミラに魔法を期待するような人間は現れなかった。

それでも、カミラは魔力について多少の知識がある。

ユリアン王子が、強い魔力持ちとして知られていたからだ。

殿下も、魔力の強さで苦労されていたわ。

強すぎる力は人の力では操りきれず、人から恐れられるものだ。

ゾンネリヒト第二王子ユリアン。彼の魔力の高さは、幼いころから突出したものだっただけ。

瞳から滲む魔力は、幼い彼の力では抑えることができず、長らく彼の母　王の第二妃によって隠されてきた。

彼の魔力は、人の心を奪う。魔力を帯びた彼の瞳に、人々は抗うことができず、自らの意思に反して魅了される。そのあまりに強い力を恐れ、王妃は彼女自身が死ぬまで、王子を王宮の塔の中へ閉じ込め続けてきたのだ。

ユリアン王子は、王や兄王子　彼の家族ともほとんど顔を合わせる事がなかった。それが、現在の第一王子エッカルトとの確執

とも言われていた。

もちろん、今ではユリアン王子は自身の魔力を操ることができるようになった。鮮やかな赤い瞳は変わらないが、そこから魔力が溢れることはない。今の彼が人の心を奪うのは、ひとえにその優雅な物腰と、線の細い優しい面立ちのせいだ。軟弱で男らしくない、などと男性諸氏からは不満も上がっていたが、そんなことはカミラの知ったことではなかった。

柔和なしぐさも、かげろうのような儚さも、ユリアン王子だから素敵だった。それだけの話だ。

「カミラさん？」

柔和さとも儚さとも違う体格が、カミラの目の前でぶるんと揺れた。

「どうされました？ ぼうつとされて」

「い、いえ」

アロイスの大きな顔が、テーブルをはさんで向かいで傾いている。痺氣が不安定だと言った通り、彼の顔はいつもに増して荒れて見えた。そういえば、魔力が強いらしい他の使用人も、肌を掻いている姿や、湿疹のようにぼつぼつ腫れている姿を見た。

そんな彼の手元にあるのは、大きな皿に切り分けられたバターケーキ。クリームをたっぷり添えたそれは、胸焼けするほどの甘さを視覚的に放っている。

だが、それだけだ。いつもならばおかわりの皿があるのに、今日は一皿きり。

いや、今日だけではない。ここ最近はずっとそうだ。一日の食事、さらに減らして六食になったという。常人の倍量。とはいえ、以前のアロイスに比べればかなりの変化である。

本気で痩せるつもりなんだわ。

喜ばしいことではあるが、同時になんと不安になる。

そんな簡単に上手くいくだろうか。こういうやつは、後々でしつぺ返しが来るものだ　というのが一つ。

痩せたら、もしかして私は結婚するのかしら。

というのがもう一つ。

たしかにカミラはアロイスを痩せさせて、色男にしたいと思った。今でも、それは間違いない。痩せて美男子となったアロイスを連れて王都に戻り、リーゼロッテにテレゼ、ユリアン王子にまでくまなく見せて回りたい。カミラを悪役と書き立てて、アロイスとの結婚を嗤った新聞記者たちに見せつけてやりたい。

これが、お前たちが馬鹿にした相手なのだと、言ってやりたい。そうして一泡吹かせ、悔しがる姿を見て、笑って、笑って、溜飲を下げたい。

だが、溜飲を下げた後。

その先が想像できない。

カミラはアロイスと、結婚して　　どうなるのだろうか？

頭の中ではわかつている。

公爵と結婚をするとなれば、それなりにすることがある。

女主人として屋敷を取りまとめなければならぬし、公爵とともに人前に立つこともあるだろう。他家との仲をとりなしたり、縁を結ぶために、人と会うことも増えていく。

だが、それよりも大事なものは、跡継ぎを産むことだ。最低一人。望むなら男児。産んで、育てて、世継ぎにしなければならぬ。

跡継ぎを産む。

ユリアン王子が無理でも、できれば魅力的な男が良いと思っていた。

だけでもし、アロイスが痩せて顔の荒れも治り、キスができるほどの美男子になったとして。カミラはアロイスを受け入れられるのだろうか？ 彼と結婚し、子供を育てる未来を認められるだろうか？

まだ先のことよ。

内心の不安を打ち消すように、カミラは心の中でつぶやいた。

今のアロイスは、まだまだ見た目に変化がない。ほんのひと月で脱ぎ切れるほど、彼の肉の皮は薄くない。彼の肉の年輪には、それだけの年季が入っているのだ。

痩せさせてから考えるべきだわ。

まだ痩せられるとも決まったわけではない。上手くいつていきほど、簡単に躓くものだ。どこから湧きだしたのか、突然現れた「痩せたい」という思い。ひとまずはその減量心を阻害しないように、カミラは細心の注意を払うべきだった。

頭ではわかっているのだ。

思考に沈むカミラの耳に、ガチャンと荒い破壊音が響いた。

最近はずっかり慣れたもの。何度叱られても、日に日に悪化しているニコルの破壊の音に、今は誰も驚かなくなっていた。

カミラも、またいつものかど肩をすくめる。とりとめない思考が中断され、内心ほっとしたことは内緒だ。さも呆れて、「困った娘ですわねえ」などという表情を浮かべ、アロイスを見やった。

そこで、アロイスの驚愕の表情が目映る。瞬き、困惑した顔で何度もきよろきよろと首を回す仕草に、カミラの方が驚いた。

いつもなら苦笑しているだけなのに。

アロイスは鷹揚というべきか、無頓着というべきか、ニコルの失敗にはかなり寛容だった。相手が縁ある家の血縁というのもあるだろう。強い魔力持ちを手放したくないという気持ちもあって、普通であればクビになるような彼女の失態を受け入れ続けていた。

どうしたのかしら。

音は、普段より近い場所から聞こえた。一部屋ぶん、壁を挟んだような 隣の部屋から響いたように思われた。

今、カミラがいるのはアロイスの私室。隣の部屋は、片方が彼の執務室。もう一方は、確か物置か何かになっていたはず。アロイスの私的な物置で、本やがらくたがあるだけだと告げられたことがある。

カミラは、物置には入ったことがなかった。たいてい興味があったのが一番の理由だが、アロイス自身もカミラを入れたがらなかった節がある。「面白いものはありませんよ」と言われれば、敢えて物置に入ろうなどとはカミラも思わない。

疑問に思うカミラの前で、アロイスは慌てた様子で立ち上がった。そうして、重たい体で部屋を揺らしながら、外へ駆けだしていく。

一拍遅れて、カミラも立ち上がり、その背中を追いかけた。

アロイスにはすぐに追いついた。

なんなら、物置に入る前には彼を追いつき、一緒に扉を開けたくらいだ。急いた様子のアロイスは、扉が開くや中へと駆け込んでいく。

物置は、あまり頻繁に使用されてはいないのだろう。かすかな黴のにおいがした。人がいない部屋特有の、空虚で淀んだ空気が満ち、どこか辛気臭さもあつた。

アロイスの言葉通り、部屋の中にカミラの興味を引くものはほとんどなかった。壁を埋め尽くすように本棚が並び、その周囲に興味なのか仕事のためなのか、古い魔道具がいくつも転がっている。

部屋はさほど広くはない。衝立のように部屋を区切る棚が、余計に部屋を狭く見せていた。

窓は棚で埋め尽くされ、光はほとんど入っていないようだ。灯りは、壁から伸びる魔法の燭台　魔石灯だけ。その魔石灯の傍だけは棚がなく、代わりに大きな絵画が立てかけられていた。

これって……。

魔石灯に照らされ、おぼろげに絵が浮かび上がる。描かれているのは二人の男女と、一人の子供だ。

白い長髪を垂らした、背の高い男。線の細い美しい女性。それから、まじめくさった顔をして、背筋を伸ばして立つ正装の少年。古びて色褪せてはいるが、少年の頬は紅潮し、その瞳はうつすらと赤茶けているように見えた。

モンテナハト卿？　先代の？

背の高い男に、カミラはおぼろげな既視感がある。どこかで見たような気がするの、遠い昔にモンテナハト卿が王都へ来た時の記憶があるからだろうか。モンテナハト家の人間はほとんど外に出ないというが、王家の祝辞や弔辞であれば話は別だ。

ユリアン王子を閉じ込めていたという、第二王妃が亡くなったときは、今からおよそ十年前。モンテナハトの公爵位は、アロイスではなくこの男にあったはずだ。カミラがその姿を見たことがあったとしても、おかしい話ではない。

なら、この男の子は……。

細すぎる両親とは異なり、健康的な肉付きの、いかにも少年らしい少年は、もしかして。

いぶかしみながら目を凝らせば、絵の下に小さく文字が書かれているのを見つけた。『アロイス、十歳の記念』。となると、やはりこれはアロイスとその両親なのだろう。

はじめて見たわ。

思えば、アロイスから家族の話聞いたことはなかった。

アロイスが十五歳程度のとき、両親が亡くなっているとは知っている。事故だとも聞いたことがある。だが、それくらいしか知らない。カミラも深く追求せず、アロイスは自分からは語らなかった。肖像画も特に飾られてはいなかった。今後のアロイスの変化を予想するために、いつか見たいとは思っていたものの、なんだかんだと見る間もなくここまで来ていた。

悪くない顔立ちだわ。

少し細すぎるくらいがあるが、身長も顔も合格点だ。顔色の悪さは、アロイスには受け継がれなかったらしい。荒れ果てた顔に、はち切れんばかりの生気の宿るアロイスを思い浮かぶ。

そう、アロイス様！

すっかり目を奪われかけて、危うくカミラはアロイスを忘れるところだった。今は、部屋の奥へ行ったアロイスが先だ。

カミラは慌てて絵から目を離すと、アロイスを追って奥へと向かう。

部屋の奥は、小さな空間があった。相変わらず柵とガラクタに囲まれたその場所で、アロイスは膝をついている。やはり犯人だったらしい、ニコルがおるおると立ち尽くす。

その二人の視線の先には、装飾的な大きな皿の、無残な姿がある。

「僕の、父上の皿が！」

アロイスは皿の破片を手に、悲痛に叫んだ。瞬間、ぴり、と痺れるような空気が満ちる。アロイスの魔力が、動揺で滲みだしたのだが、すぐに収まるのはさすがである。

「も、申し訳ありません！」

横に立つニコルは、怯えたように頭を下げる。今までにないほど蒼白であるのは、相手がアロイスだからであろうか。

「ごめんなさい！ ごめんなさい！」

「……いや、いい」

何度も謝り続けるニコルに、アロイスは皿を手にしたまま、気落ちした声で言った。重たげに頭を振る姿だけが、カミラの目には映る。

見たこともないほどに沈んだアロイスの後姿を眺めながら、カミラは眉をしかめた。皿一枚に、どうしたというのだろう。いつも落ち着いたアロイスらしくない。

などと疑問は浮かぶが、なによりもまず頭を占めたのはこれだった。

……ぼくう？

結局、アロイスはニコルをほとんど叱らず、なぜあの場にいたのか追及することもなかった。ただ、ニコルをカミラともども部屋から追い出しただけだ。

扉の前で、カミラは青ざめたまま立ち尽くすニコルを、もう戻って休むようにと追い払った。それからしばらく、一人部屋の前で待っていたが、アロイスが出てくることはなかった。

翌日から、アロイスの食生活が戻った。
いや、悪化した。

完全にやけ食いである。

「アロイス様！ またこんなに食べて！！」

数日後の茶会。あれから、カミラはこの言葉を、もう何度言ったか分からない。

「もう痩せる気はなくなっただんですか！？ さつきから、ずっと食べ続けていますよ！」

カミラが叱りつけると、アロイスははっとしたように手で自分の口を押さえた。もう一方の手は、つまみやすい一口大の焼き菓子を掴んでいる。

かごいっぱい盛られた焼き菓子は、小さなカップケーキや砂糖をまぶしたスノーボール。アーモンドを練り込んだ丸い形のバター

ケーキ。砂糖で飾った色とりどりのクッキーたち。

鮮やかにアイシングされたクッキーは、料理人のいたずら心だろうか。クッキーに描かれた赤や青の花の、あまりのかわいらしさに、思わずカミラも手を取ってしまった。

が、一口食べて後悔した。砂糖のかたまりをかじるより、よほど甘いとはどういうことか。よくもまあアロイスは、こんなものを平気で食べられるものだ。

それを、アロイスは先ほどからずっと、つまんでは食べ、つまんでは食べていた。一度に多くを食べるわけではなく、少量をいつまでも食べ続けているあたりが、妙に痛々しい。

しかも、このありさまは今日だけではない。ニコルがアロイスの皿を割った日から、ずっとこの調子だった。

見ていられず、カミラはこれまで何度も静止をかけてきたが、まるでアロイスの心に響いていないのは、屋敷に來た当初以上に明白だ。一瞬だけ我に返るものの、しばらくすればすぐにまた思考に沈み、食べ続けてしまう。

「カミラさん、す、すみません。つい呆けていて……」

アロイスはつまんでいた焼き菓子を手放すと、しおしおとその手をひっこめた。うなだれたその巨体は、空気が抜けてしぼんでいるようにも見える。

「気を付けるようにはしていましたが……」

「昨日も同じことをおっしゃっていましたよ」

険しい目つきでアロイスを見れば、彼はしゅんと肩を縮めた。それからまた、無意識のように手を伸ばし、かごの中のクッキーを掴んだ。

「アロイス様！」

「はいっ！」

カミラの静止に、アロイスの手が止まる。まるで子供のしつけでもしている気分だ。

「いったいどうしたんですか。そんなに大事なものだっただんですか？」

あの時アロイスは、割れた皿の破片を掴みながら、『父上の皿』
と言っていたはずだ。アロイスの父はすでに他界している。となる
と、あの皿は形見といえるだろう。

皿。皿ねえ。

陶器の収集を趣味にする人間は少なからずいる。よほど良い一品
で、父からアロイスに譲り渡したのだろうか。それとも、なにか思
い出でもあるのだろうか。そうでもなければ、皿なんて厨房で管理
されるもの。あえて大事に抱えるようなものではないはずだ。

「……いえ」

アロイスはクッキーをつまみ、ぱくりと食べながら言った。

「大事にしていたわけではありませんよ」

目を伏せるアロイスは、見るからに痛ましい。大事なものでもな
ければ、どうしてこれほど落ち込めるというのか。

「父が亡くなったのも、もう十年近く前です。ちょっと、驚いた
だけです……」

言いながら、また一つ取って食べる。巨体を縮めてさくさくさく
さく食べる姿は情けなく、大きくせに小動物の感があった。

「アロイス様、しっかりなさってください。ほら、強い心をもって
！」

「はい。私は大丈夫です」

「気をたしかに！ 公爵がそれでどうするんですか！」

「はい。私は大丈夫です」

駄目だこりゃ。

茶会からの帰り際。カミラは中庭を歩きながら頭を悩ませていた。

アロイスは、まだ茶会の席に残っている。呆けがちな彼は、最近
は行動が一拍遅れ気味だった。それでも執務に影響を出さないあた
り、公私を使い分けられているということなのだろう。茶会にいる
ときに気が抜けてしまうのは、多少なりともアロイスが、カミラに
気を許しているからなのかもしれない。

なら、ずっと仕事をさせていればいいのかしらね。

そんなことをすれば、さらに心折れそうだ。頭に浮かんだ意見を
没にして、カミラはため息をついた。

そもそも、最近はずっと上手いきすぎだとは思っていたのだ。

なにかあるとは思っていた。これまで十八年の人生。順調に物事
が進んでいるときほど、大きな落とし穴があったものだ。王子との
婚約目前で辺境へと飛ばされたカミラは、そのことを身に染みて知
っている。

心が弱かったわ。

思いのほか打たれ弱かった。

アロイスは、十五のときに両親を亡くし公爵位を継いだけであつ
て、かなりしつかりとした人間だ。いつも落ち着いて、感情を見せ
ることはめつたにない。寛容　というよりも、無頓着な部分があ
り、他人に腹を立てることがあまりない。使用人を叱ることはまれ
にあるが、それも大声で頭ごなしに、ということはない。

グレンツェでカミラが屋敷を飛び出したとき。アロイスが声を荒
げたのは、あれ一度きりだ。なにかと衝突の多いカミラに対し、こ
れほど落ち着いて接する人間は珍しかった。

勤勉で、仕事に対して熱心で、常に穏やかな態度を崩さない。人
当たりも良く、失態らしい失態もしない。見た目以外、アロイスは
『良い子』の見本みたいな人間だ。

だから、いくら父親の形見とはいえ、人前で動揺を隠せないアロ
イスに違和感があつた。

なにかあったのかしら。

そう思えども、なにかあったであろう相手は、すでにこの世にはいない。アロイス自身に聞こうにも、今の状態ではためらいがあった。うっかり刺激して、悪化してしまいそうで怖いのだ。

もやもやとした考えはまとまらない。考えても、どうせカミラ一人ではどうにもならないのだ。諦めの心地で、カミラは頭を振る。

いいわ。過去よりも、今のアロイス様をどうにかしないといけないもの。

アロイスの過去。それから未来も、いつそ悩むのは後にしよう。結婚と、その先のこと。不安に思うのは、そもそもまだ早かったのだ。瘦せた後のことでごちゃごちゃ悩むなど、皮算用もいいところ。まずはなによりアロイスを痩せさせるのが先決だ。

初志貫徹！ とにかくアロイス様のやる気を戻さないとしてもどうすればいいだろう？

考え事に没していたカミラの目の前を、ふと誰かが横切った。ちょうど中庭を出て、屋敷へと入るところ。くすくすと笑う少女たちに、カミラは見覚えがある。

いつも、こそこそ噂している侍女たちだわ。

不遜な若い侍女たちだ。中の一人が金髪の巻き毛で、見た目が少しリーゼロッテに似ている。そのせいで、カミラは彼女たちの顔を覚えてしまっていた。

侍女たちはそのまま通り過ぎ、屋敷の奥へと行ってしまった。挨拶の一つもないのかと、少しむっとしたとき。

「……奥様」

聞き覚えのある声がかかった。

いつもは兵士のように腹から叫ぶくせに、今日の声は妙に小さい。不思議に思っただけを見て、背の低い少女がいる。

口を結び、唾をのみ、両手を握りしめたそばかすの彼女は、エノデ家に連なる血筋の娘。強い魔力を持つ問題メイドニコルだ。

「奥様って言わないでちょうだい」

カミラの注意に、ニコルはなにも答えない。代わりに赤い瞳でカミラを見つめ、震えるようにほんの少し揺らめかせた。

が、その表情はすぐに見えなくなる。彼女が腰を曲げ、深く礼をしたからだ。

「これは！ 私がすべて自分で決めたことです！ 異郷に來た奥様の心を、お、お慰めするために！！」

「は、なに？」

カミラの目の前にあるのは、ニコルの後頭部だけだ。

突然の言葉もまるで理解ができず、戸惑うカミラの見ている前で、ニコルは指を空に滑らせた。なにかを描くように指が動けば、ニコルの髪がふわりと浮かぶ。渦を巻くように、一瞬だけ風が起こる。

魔法……？

強い魔力の放出に、カミラの頬がしびれた。だが、それも瞬きの間に消える。風も、魔力の名残も　ニコルの姿もだ。

「……ごめんなさい」

かすかな声が、その口から洩れた。

カミラは目を瞬かせる。目の前にあるものが信じられないように、何度も瞬く。口を開く。なにも音が出ず、呼吸だけが薄く漏れた。

そこにニコルの姿はない。瞬きの間に消えた。

代わりにいるのは、長い銀色の髪を垂らした、柔和な青年。優雅で品があり、男性からは軟弱だと言われようと、カミラにとっては誰よりも魅力的だった人だ。

端正な唇を柔らかく曲げ、魔力の灯る瞳を優しく細める。

「ユリアン殿下……………」

喘ぐように、カミラはそれだけを呟いた。

本物ではない。わかっている。

目の前に先ほどまでいたのはニコルだ。カミラの弱い力でもわかるほどの、強い魔力の放出を感じた。魔法を使ったのだ。魔法で、今ニコルはカミラに幻を見せている。

なのに、胸が痛む。

足がすくむ。

「カミラ」

ユリアン王子の声がする。

「カミラ、俺が間違っていた。許してくれ」

ユリアン王子の声で、ユリアン王子の姿がカミラに近付いてくる。カミラは思わず足を引いた。肩を縮めて、息を吐く。冷静にならなければ。そう思うのに、思考が勝手に乱れていく。

遠くから、ユリアン王子をずっと見ていた。話をするだけで幸せだった。カミラの存在を覚えてもらえていないことに落胆した。それでも諦められず、家の力もどんな手も使って近づいて、やっと名前を呼ばれたときは嬉しかった。

リーゼロッテが現れて、対立して、破滅を告げたのはユリアン王子だった。モンテナハト家のアロイスと結婚するよう、命令を下したのもユリアン王子だった。

彼は、俺と年も同じだ。家格も悪くない。どうせ家柄が欲しいのなら、彼でも問題がないだろう。

冷ややかな視線に、カミラは絶望した。なにひとつ、希望なんてなかったのだと気付かされた。頭の奥がひやりと冷たく、なにもかも凍りつく。

それでも、カミラは今でも、まだ。

「カミラ、俺が本当に愛するべきなのは、リーゼロッテではなく」

「やめて！」

両手のひらを握りしめると、カミラは声を上げて叫んだ。ひやりと冷たくなった後は、熱を取り戻すように頭にカツと血がのぼる。足をしっかりと地面につけ、顔をそらさないのはカミラの矜持だ。アロイスとの結婚を告げられた時も、絶対に顔をそむけはしなかった。ただ、唇を噛みしめていた。

「それ以上言うのを止めなさい！ なにが目的なの！？」

「カミラ」

ユリアン王子が近づいてくる。緩慢な動きで、一歩ずつ距離を詰める。

そうしながらも、彼はカミラに手を伸ばす。少し骨ばった細い手。ついぞ、カミラに触れることのなかった手が、カミラの頬を撫でようとした。

その寸前。強い力が、カミラの腕を後ろへ引く。ユリアン王子とは、まったく違う大きな手だった。

「なにをしている！」

落ち着いた、しかし険しい男の声だった。少し前まで、力なく情けないとばかり思っていた声。その声の主が、カミラを背後に隠す。大きな体だ。カミラをかばい、一歩前に出るときに、どすんと地面が揺れる。

アロイス様。

一拍遅れて移動してきたときにちょうど出くわしたのだろうか。それとも、異常を察して追いかけてきてくれたのだろうか。結んだ長い髪からのぞく首筋に、じとりと汗をかいているのが見えた。

アロイスはカミラを背中に隠した後、空中に指を滑らせた。指先にはかすかな魔力を帯びている。魔法を起こす文字を書いているのだ。

カミラには、その指先の動きに見覚えがある。彼の描く魔法は、
解呪　すべての魔法を解く魔法だ。

指の動きが止まると、一瞬だけ魔力の風が巻き起きる。

そうして、風が消えたとき。ユリアン王子の姿は消え、ニコルだけが残っていた。

「どうしてこんなことをした、ニコル！」

「すつ、すみません！ わ、私が奥様をお慰めするために」

「お前ではないだろう！」

アロイスの強い言葉に、ニコルはびくりと震えた。怒りの形相を示すアロイスからは、先ほどの呆けた姿は消え失せていた。領主として、公爵としての顔で、ニコルを見据えている。

「こんなこと、お前が考えられることではないだろう！ 誰に言われてやった！ 答えなさい！」

「私……わ、私が」

ニコルは震えた指先を握り合わせる。赤い瞳が迷うように動く。何か言おうと口を開き、諦めたように閉じる。

それから、小さく頭を振った。

「私が、すべて、私の考えです。どんな罰も、私に与えてください。私一人が悪いんです」

いつものニコルの、澆刺とした口ぶりとは程遠い。感情をすべて殺したような声でそう言った。

ニコルには、ひとまず部屋に戻るようにと伝えた。

魔力の残骸が漂う中庭で、カミラはアロイスと二人取り残されることになる。

空は青く、風は強い。瘴気の風は肌を刺し、カミラの心を少しだけ落ちつけてくれた。

「すみません」

アロイスはカミラに振り返ると、呻くようにそう言った。

「不快な思いをさせてしまいました。二度とこんなことはさせないようにしますので」

「いえ」

カミラは短く答えると、小さく頭を振った。

「大丈夫です。私、こんなことで傷つきなんてしませんもの」

心折れたり、めげたりなんてしない。傷ついたりしない。

でも。

ユリアン王子の手で、王都を追放されてから、もうひと月以上が経過している。悔しがって、腹を立てて、仕返しを企てて、それで平気なつもりでいた。

「私は傷つきません。……………ですが」

それでも、王子の姿を前にして、カミラは言葉を失いかけた。無数の記憶に感情が揺れた。全身が冷え、頭が熱くなった。

そういうものなのだ。

「ですが……………私こそ、すみませんでした」

アロイスが首をかしげる。カミラの謝罪の意図がとれないようだ。少し渋いアロイスの顔を、カミラは少し気まずさをもって見上げる。

皿一枚。情けない。心が弱い。公爵のくせに。

ニコルの行為に落ち込むアロイスに、カミラは散々なことを思った。ところどころは口にも出した。実際、情けないし公爵らしくもなかった。

ただど公爵も人間だ。人の心だ。カミラだって同じ。わかっているはずだった。

「平気だと思っけていても、自分でもどうにもできないことってありますものね。……………私、無神経なことをしていました」

「……………ああ」

珍しくしおらしいカミラの視線に、アロイスは頷いた。カミラの言いたいことが分かったのだろう。少しばかり気恥ずかしそうに頭を掻く。

「あなたからそんな言葉を聞くなんて……ああ、いえ、すみません。思いがけなくて」

苦笑しながら若干失礼なことを言いかけて、ふと彼は言葉を止めた。そのまま少し口を閉ざし、王子よりもいっそう鮮やかな赤い瞳にカミラを映す。

うつすらと細められた目は、笑っているようでいて、どこか苦々しさがあつた。

「あなたは、本当にユリアン殿下のことを想っていらっしゃったんですね」

おそらくこれは、出会ってからこれまでのアロイスの発言の中で、一番失礼な言葉だった。

沈んだ後は怒りが沸いてくる。

一晩たった今、カミラの心にあるのは煮えたぎるような感情だけだった。驚き、戸惑い、悲しみまでもすべて飲み込んだ怒りは、カミラをおとなしくさせてはくれない。

明らかな悪意があった。

明らかにカミラを傷つけようとした。

それを見て、楽しもうとしていた。よく聞こえてくるつかつな陰口とは違う。もっとずっと狡猾で、底意地が悪い。

ニコルを手足に、悠々と高みの見物していたのは、誰だ。

落ち込んだままできてたまるもんですか。

心を沈ませるほど、相手は喜ぶ。立ち直れない期間が長いほど、相手の楽しい時間は続く。

だから、心なんて折られてたまるか。いつだってカミラは、自分の足で立ち、顔を上げてきた。

それが不器用なやり方で、結果的にたくさんの敵を作ることになったとしても。

ニコルを問い詰めてやるわ。

誰がけしかけたのか。なんのために人の傷をえぐる真似をしたのか。人を笑おうとした人間は誰だ。

自分だけ高みになんていさせないわよ。

アロイスは犯人を捜すと約束してくれたけれど、カミラは人に任せきりで、ただ待つてはいられる性分ではなかった。

誰になにをしたか、わからせてやる。

震える怒りを噛みながら、カミラは大股で、一人屋敷を進んでいた。

向かう先は、侍女たちの部屋だ。

屋根裏。一階。北向きの部屋。日当たりの悪い部屋。

屋敷の中のそういった部屋は、住み込みの下級使用人や、若い上級使用人たちの居室として使われる。多少年配になり、身分が上がればもう少し良い部屋があてがわれる。

メイドたちの住む屋根裏には、すでに乗り込み済みだ。仕切りだけで区切られた共同の部屋に、ニコルの姿はない。他のメイドに問い詰めれば、侍女たちに呼び出されたと吐いた。

ならば次は、階下の北部屋。侍女たちの住む場所だ。

侍女の部屋は、屋敷の北側、突き当りにある。若い侍女には一人に部屋が与えられず、数人の相部屋となっていた。それでもメイドたちよりは部屋も広く、待遇は良い。

一階にある北向きの部屋。並んだ三部屋は、すべて若い侍女たちの部屋だ。一つは扉が開いたまま。残り二つは閉め切っており、片方からは扉の隙間から、光が漏れている。

今はまだ昼過ぎ。灯りを付けるには早い時間だが、北向きの部屋はいつも薄暗く、明かりを絶やすことがない。

誰かがいるのだ。

周囲に人の気配はない。乗り込むべきか、様子を伺うべきか。逡巡する間に、声が響いた。

「ニコル！ あなたちゃんとされたとおりにやっただけでしょうね！？」

反射的に、カミラは息をひそめた。
立ち聞きは得意だ。

「旦那様が、犯人探しをしているのよ。あなた、余計なことは言っていないでしょうね？　ちゃんといつもみたいと言ったわよね？」

まだ若い少女の声に、ニコルは体をこわばらせた。背丈も体つきもそう変りないのに、長年の関係が、条件反射で恐怖を掻きたてる。「私がやりました」って、ちゃんと言ったんでしょね！　まさか、告げ口なんてしていないでしょうね。そんなことしたら、どうなるかわかっているものね？」

少女の柔らかい巻き毛は、ニコルと同じ金色をしている。そばかすがなくて、もう少しニコルの鼻が高く、いくらか目つきが鋭ければ、少女とそっくりだったかもしれない。

当たり前だ。ニコルと彼女には、同じ家の血が流れているのだから。

「なにか言いなさいよ、このグズ！」

少女はニコルの肩を押す。ニコルはよろめくが、なにも言わない。黙っていれば罵声を浴びせられるが、答えればもっとひどい罵声が来る。だったら、口を開かないほうがまだ。

黙ったまま、口を開きそうにもないニコルに、少女はいら立ったように髪を掻いた。少女の傍で、彼女と親しい別の侍女たちが「まあまあ」となだめる。

「落ち着いてよレオノーラ。あたしたちだってバレたわけじゃないんだから」

「そうそう。犯人探し、ってことはさ、要するに犯人が誰だかわかってないってことよ。今からいくらでもやりようがあるわ」

少女を宥める侍女たちも、ニコルの味方をしてくれるわけではない。腹立ちまぎれに、自分たちまで巻き込まれるのが嫌なのだ。

ふん、と少女は鼻を鳴らす。それで納得したのは知らない。ただ、いくらか落ち着いた様子で、またニコルを睨みつける。

その瞳は、髪色に似た透き通る金。この瞳の色も、ニコルとは違う。

「あーあ、あたしも魔力があればなあ。こんなところにはいなかったのに。こんなグズじゃなくて、あたしが魔力持ちだったなら、今頃王都で王子様に見初められていたところよ　　リーゼロッテみたいに」

ニコルに向けるのとは違う憎々しさで、彼女はリーゼロッテの名を口にした。

「昔は『アロイス様、アロイス様』ってうるさかったあの女が、本当に上手くやったものよ。今は王子の婚約者、それでゆくゆくは王妃様！　たいした器量でもないくせに！」

「王妃様って、相手は第二王子でしょう？」

少女の言葉に、他の侍女たちが顔を見合わせ、くすりと笑う。その様子を、少女はさらに嘲笑った。

「あれが、そんなもので満足するわけないでしょう」

吐き捨てるようにそう言うと、少女は再びニコルに目を向ける。

「あたしだって満足しないわよ。こんなところで侍女なんて。傷がつくわけにいかないの。わかるわよね、ニコル」

ニコルは黙ったまま肩をすくめた。少女は、お構いなしに話を続ける。

「今回のことは、全部あなたがやったのよ。王子様に捨てられたかわいそうな悪役女を慰めるため、あなたが考えて、あなたが一人で実行したの。いつもみたいにね。　　ねえ、返事は」

「……………はい」

いつも通り。ニコルはかすれた返事をした。指の先が、血の気を失って震えている。感覚が失せて、魔力の流れが見えなくなる。今にも漏れ出しそうで怖かった。

「旦那様も、悪役女も、あなたの言葉を聞いていなかったかもしれない

ないわ。今度こそ、しっかりと伝えなさい。旦那様の前で、ちゃんと自分がやったと伝えるの。自分が犯人だから、犯人探しは止めて、自分だけを罰するようにって。言えるわね？」

「……はい」

「魔力がなければ、あなたはエンデ家の末端にもいられなかったのよ。妾腹の子が、どうしてここにいられるか考えなさい。あなたの兄弟、家族、みんな誰が養っているのか、わかるわね」

「はい」

「じゃあ、繰り返し。あなたが全部やったのよ。言いなさい」

ニコルは手のひらを握りしめた。あふれ出しそう。感覚の失せた体が、魔力が制御できない。

「はい！ 私が自分の意思でやりました。全部　全部！」
ぱちり、と静電気のように、指の先がしびれる。

その手を、誰かが強く掴んだ。

勢いよく扉が開いたことに、ニコルは気が付いていなかった。

誰かが大股で、足音を立てて入ってきたことも気が付かなかった。少女たちが驚いた眼で、ニコルの手を掴む人物を見ていたことも。

「こっちに来なさい」

低く落ち着いたようできて、だけど確かに怒りのにじむ声でした。同時に、強く腕を引かれる。有無を言わせない力に、ニコルは逆らえなかった。

「……………奥様」

相手は、ニコルが魔法で傷つけた相手。王都から辺境まで、追放同然に嫁いできた女。いずれはこの屋敷の女主人になる　カミラだ。

顔を上げ、ニコルは背の高いカミラを見た。伺い見た横顔は険し

く、抑えきれない感情に満ちている。

さっきの言葉を聞いていたのかしら。

私がやりました。ニコルは確かに、自分の口で言ったのだ。

「私、怒っているのよ」

カミラはニコルを睨みつけ、一言だけ告げた。

背後で、少女たちがほっと息を吐く。怒りの矛先が、自分たちでないことに安堵したのだろう。

カミラはニコルだけを連れ、部屋の外へと連れ出した。

最後に、部屋に一瞥をくれたことも、常に感情的な彼女の、ぞつとするほど冷たい視線に、少女たちが言葉を失ったことも、青ざめたニコルは気がつかなかった。

ニコルを自室に連れ込むと、カミラは彼女に櫛を押し付けた。

「梳かしなさい」

それだけ言うと、カミラは編み込んでいた髪を自ら解き、椅子に座ってふんぞり返った。背後で、ニコルが櫛を持ったまま戸惑う気配がする。

「あの……」

「梳かしなさい」

カミラは同じ言葉を繰り返す。正面を見据えたまま、かみ殺すように息を吐く。まだ怒りが収まらない。本当は侍女たちの方を捕まえてやるつもりだったのに、反射的に手を取ったのはニコルの方だった。

賢い行動ではなかったと思う。だが、もう一度同じ場に立ってもカミラはニコルの手を取るだろう。言われない放題でうつむき、言葉もなく震える彼女に、どうしようもなく腹が立つ。

ニコルは、カミラの背後でしばらくためらっていた。だが、カミラを前に勝手に出て行くわけにもいかず、立场上命令に背くわけにもいかない。

「……………失礼します」

細い声でそう言うと、カミラの髪を手を取った。

ニコルの手は不器用だ。

力加減がわからない。髪の流れがわからない。櫛と髪を平行に、力を入れずに梳くことができない。

「いたっ！」

櫛に髪を巻き取られ、思わずカミラが声を上げると、ニコルの手が止まる。怯えが背中からも伝わってくる。いつもの無鉄砲な勢い

はない。こちらが、本来のニコルなのだ。

「す、すみません。やっぱり、私……」

「梳けないからって、櫛を回すのをやめなさい。髪の流れに逆らわないで、もう一回」

「……………はい」

従うことが身に染みているのだろう。ニコルは逆らうことなく頷いた。それから、こわごわとまたカミラの髪に触れる。

二人の間に、会話はほとんどなかった。たまに、カミラがニコルに注意をする。同じことを繰り返すと、少し怒る。怒らなくても、カミラは不機嫌を崩さなかった。

「あの」

その奇妙なやり取りに、ついに耐え切れなくなったようにニコルは声を上げた。手はカミラの髪を取ったまま、櫛を握りしめたまま、遠慮がちに言葉を落とす。

「……………怒っていらっやいます……………よね。私のこと」

「当り前よ」

「はい……………。罰なら、私が受けます。どんなことでも」

「だったら手を動かしなさい。止まっているわよ」

カミラの言葉に、はっとしたようにニコルは櫛を引く。反射的な行動に力加減が追いつかなかつたらしい。カミラの髪が強く引かれる。

「痛い！」

「す、すみません！」

「力を入れ過ぎ、って何度も同じことを言わせないで。そんなことで人の世話なんてできないわよ」

「はい」

ニコルは素直に頷くと、以前よりは少しましな手つきで、慎重にカミラの髪を梳かす。

「私の侍女になるんだから、それなりのことはできてもらわないと

困るわ」

「はい」

カミラの黒髪は、柔らかくもなければふわふわでもないけれど、よく手入れされて艶めいている。それを割れ物のようにこわごとと一梳き。二梳き。三度目の櫛を入れようとしたところで、顔を上げた。

「……はい？」

「いた！ って何度言わせるのよ！」

「奥様？ 私を、奥様の侍女に？」

「奥様って言わないでちょうだい！」

この言葉も、カミラは何度言ったかわからない。まだ奥様ではない。まだ決まったわけではない。もう少し、カミラには時間が必要なのだ。

「どうして………」

だが、カミラの内心をニコルは知らない。ただ、侍女という言葉が信じられないように瞬きをする。手は完全にお留守だ。

「どうしてもなにも、あの子たち、全員辞めさせてやるわ。その時に、あなたが責められたら腹が立つじゃない！」

カミラの立場は、一応はアロイスの客人。未来の妻だ。使用人たちに好かれていないとは知っているが、表立って悪口を言えるような相手ではない。

その侍女もまた同じ。今までのように、無理に仕事を押し付けることはできなくなる。ないがしろにはできない。少なくとも、カミラの傍にいない間は。

「辞めさせた後は、好きにすればいいわ。魔力持ちなんて、どこに行ってもやっていけるでしょう？ 家族がどうか考えているなら余計なことよ。エンデ家程度の家格、シュトルム家にも及ばないわ。

今は、アロイス様に頼ることになるけど」

そこだけ、どうにも情けない。しかしカミラに力ないのも事実。頼る先がアロイスしかないのだからしかたない。彼もおそらく、二

コルを無下には扱わないだろう。

いささか不服なカミラを見下ろし、ニコルはまた「どうして」とつぶやいた。

「どうして、そこまでしてくださるんですか？ 迷惑ばかりかけたのに、私のために……」

「あなたのためじゃないもの」

ふん、と鼻を鳴らし、カミラは胸を反らした。眉間にしわを寄せ、まっすぐに前を睨みつける。

「私が、腹が立ったのよ」

自分が痛むことなく、人を傷つけて笑う人間が嫌いだ。

やられるばかりで、ただ黙って耐えるだけのニコルにいら立った。それだけだ。

「わかつたら、手を動かさないさい！ 髪の毛一つも結べないなら、一時的でも侍女になんてなれないわよ！」

「は、はい！」

慌てて返事をする、ニコルは櫛を握りなおした。

何度も何度も繰り返しながら、ニコルの手つきは少しずつましになっていった。

カミラが怒る回数も減る。カミラの不機嫌をほどくように、ニコルは髪を梳く。

「上手いじゃない」

カミラの言葉に、ニコルは答えない。黙って手を動かす。

窓から差す日は、傾き始めている。昼からいつたい、どれほど繰り返してきただろう。途中で弱音を吐くかと思ったが、ニコルは何度も失敗しても、投げ出そうとは思わなかった。

無言のまま、ひとつ。ふたつ。髪の毛の束を梳く。

「奥様」

みつ。ニコルが櫛を流しながら、ぼつりとつぶやいた。

「私、エンデ家の妾腹なんです。それも、直系ではなくて」

「聞こえていたわ」

「使用人のお手付きなんです。母には夫がいて、兄弟もいたんです。それだけなら、放っておかれるだけだったのに」

家族、兄弟。それも聞こえていた。

「私に魔力があつたから……。私、家族の人質なんです。私を逃がさないために、家族はみんなエンデ家の下で働いています」

ニコルの故郷では、エンデ家に睨まれて働く先はない。領主であるモンテナハト家とも懇意の家柄。とても逆らうことはできなかった。逆らえば、仕事がなくなるだけではない。町自体にも居られなくなる。

髪を梳くたびニコルは語る。ぼつりぼつりと、こぼすような言葉だった。

「エンデ家のお嬢様方は、私に仕事を押し付けてきました。断ることはできませんでした。でも、それがだんだん変わって、わざと失敗するようなことを言いつけられるようになりました」

ニコルの手は止まらない。滑らかに手を動かしながら、ため息を落とす。

「そうするうちに、なんだか魔力が落ち着かなくて。最近はずけが強いせいもあって、自分でも抑えられなくて。でも、人を傷つけるわけにもいかないから」

ため息とともに、ぼとりとぬるいしずくが落ちる。カミラの髪に落ちたそれは、髪筋に沿って流れ、床に落ちた。

「部屋はみんながいるし、お屋敷にはたくさん人がいるし、それで私、それでも抑えられなくて」

腹を立てたり、緊張したり、落ち込んだり。魔力は感情によって左右されるという。

ニコルの魔力の暴走は、たいてい一人の時だった。

誰もいない場所。ニコルは一人きり。ああ、とカミラは、ぱたぱたと落ちる涙の音を聞きながら理解した。

「あなた、ずっと一人で泣いていたのね」
忍ぶような嗚咽が背中から聞こえてくる。
ニコルが手を止めても、もうカミラは怒らなかった。

2 - 終章

さらに翌日。アロイスが珍しくカミラの部屋へ来た。
実にはつの悪そうな顔である。

「ニコルから話を聞きましたよ」

アロイスはカミラに勧められた椅子に、少し腰を浮かせて座るなりそう言った。椅子に体を預けないのは、重みをかけると壊れてしまうからだという。

情けない。

とカミラが思うより早く、アロイスが自分で言った。

「私は自分が情けない」

「……………どうされました？」

カミラが尋ねると、アロイスがうつむきがちな視線を上げる。ニコルが皿を割った時よりも、さらに気落ちしたような様子だった。

「ニコルを侍女にされるそうですね。ニコルはエンデ家の縁者ですし、あんなことがあったのに」

エンデ家は、カミラの憎いリーゼロッテの一族だ。そのうえニコルは、自分の意思ではないとはいえ、カミラの心をえぐるような真似をした。そんなことがあってなお、カミラは彼女を自分の傍に置こうとしている。その姿は、アロイスから見れば奇妙に映るのかもしれない。

「それに、ニコルが全部話してくれました。彼女の立場や、これまでのこと。今まであんなに頑なだったのに」

「そうなんです？」

それはカミラも知らない。後でアロイスに告げ口しようと思っていたのだが、それよりも先にニコルが動いたらしい。朝、髪を下手に編まれて、カミラが一人で直している間の凶行だろう。

「あなただつて傷ついたのに。そういうものを、すべて蹴散らしてしまう。なのに私は、皿一枚でいつまでも落ち込んで……自分が恥ずかしいです」

そう言うと、アロイスはカミラから視線を逸らした。恥ずかしい、と告げる言葉も恥ずかしそうだ。

「でも、お皿はアロイス様にとつて大事なものだつたんでしょう」カミラはなにかをなくしたわけではない。王子の姿を見たことで動揺はしたが、それで終わりだ。対するアロイスの皿は、もう永遠に戻らない。落ち込み方も、多少は違ふと理解できる。

「大事ではないんです」

アロイスの即答に、カミラは眉をしかめる。アロイスはまだまだばつが悪いらしく、カミラを見る視線もどこか下向きだった。

「大事なものではないんですよ。……いや、大事なものかもわからないんです。覚えていないから」

「はい？」

アロイスの言いたいことがわからない。いぶかしむカミラに向け、アロイスは少しのためらいの後で口を開く。

「私の両親は、事故で亡くなったとはご存じでしょう？」

聞いたことがある。アロイスがまだ十五の時だった。以来、彼は八年以上、辺境であるが広大なモントン領を治め続けていた。

「あのとき、私もいたんです。魔石による魔力の暴走だったと聞いています。父と母はその事故で亡くなりましたが、私は死なず、代わりにそれまでの記憶をほとんど失くしました」

瞬きを一つ。一度で言葉の中身を理解しきれない。

記憶がない？

十五歳以前。例えば、たしかにアロイスの過去については、あいまいな言葉ばかりだった。

運動しろと迫ったときも、『昔はやっていたはずだ』と濁したり、リーゼロッテを覚えていなかったり。十年以上会っていないとはいえ、アロイスは現在二十三。十年前でも十三歳。まるっきり覚えて

いないほうが奇妙な話だった。

「まったく、なにもかも忘れたわけではありません。おぼろげに覚えていたこともあります。かすかに残る両親の記憶は、ですが、どれも優しいものではありません。昔は思い出したいと思っていたこともありますが、今はもうすっかり――」

忘れた気でいたのに。言葉の終わりをため息に変え、アロイスは苦々しく笑った。

「もう乗り越えたつもりだったのに、まだ未練があったんですね」

父と母の幻影は、記憶を失ってもなお、アロイスを追い詰める。父は厳しく、母も厳しかった。アロイスに良い領主であるようにと、ただ徹底して躡けていた。言葉、態度、食事、生活、興味の先まで、両親の手が入らないものはない。

だけでもしかしたら、どこかに愛情があつたのではないかと期待してしまう。例えば肖像画が描かれたとき。十歳を記念にしたいと、残しておきたいと思ったから、家族の絵が作られたのではないか。すぐるような気持ちだが、アロイスにあの、誰も入れない物置部屋を作らせた。

時がたち、成長し、両親のいない悲しみが遠くなってもなお、アロイスは皿一枚に揺り動かされた。乗り越えたと思つたのは、アロイスのただの願望だったのだ。

「すみません、こんな話」

とつとつと語る口を、アロイスは我に返つたようにおさえた。それから、カミラにいくらか弱気な視線を送る。

「ご不快でしたか？」

いえ、とカミラは短く答えた。不快ではないが、飲み込むのに少し時間がかかる。

横で聞いていたカミラでさえそうなのだ。十年前と言つたって、記憶がないのは今も同じ。アロイスはまだ渦中にいる。

「そう簡単に割り切れないのも、無理ないことですわ」

アロイスの感情を想像することを諦め、カミラは息を吐いた。

慰めの言葉が頭にいろいろ渦巻いたが、どれもこれもしっくりとは来ない。そもそも、カミラが優しく慰めるなんて、性分ではないのだ。

だから、思った通りのことを言う。

「本当に乗り越えたいのなら、これから変わっていくしかありません。今後、どうなさりたいのか。アロイス様次第のお話です」

「その通りですね」

アロイスは首肯すると、はっ、と笑うように息を吐いた。

「あなたのそういう割り切ったところ、とても好ましいです」

あんまりにもさりげなく、聞き逃してしまいそうなくらいあっさり、アロイスは言った。

もしかして、褒められたのかしら？

しかし、カミラがアロイスの言葉を反芻する前に、彼はさらに口を開く。

「ニコルはあなたの手で変わりました。あなたには、そういう力がある。人の心を変えていくような」

アロイスは語りながら、カミラを見つめる。

屋敷へ来たばかりの時とは違う、素直で正直で、誠実な視線だった。

「あなたの傍で、僕も変わりたい」

あまりにまっすぐな言葉に、カミラの方が落ち着かない気持ちになる。ん、と喉を詰まらせ、アロイスから視線を逸らし、だがこうも戸惑うのも癪で、逆にカミラはむきになる。

一度逸らした視線をアロイスに向けなおし、ぐっと手を握ってから言っただけだった。

「……そ、そういうことは、半分に痩せてからにしてくださいと言いましたでしょう！」

「半分でいいんですか？」

以前にも、同じような会話をしたことがある。アロイスの返しも同じだ。『半分でもいい』などと、常人の三倍はあろう体格の、どこから出てくるのだ。

反発心でもってアロイスを見やるが、彼の方はどこか態度がおかしい。強気の言葉のわりに、彼の表情はまるで、窺うような、恐れるような 不安さがあつた。

「本当に、半分だけでいいんですか？」

アロイスは確かめるように、もう一度言った。

「ユリアン殿下は、細身の方だったでしょう」

ああ、とカミラは心の中でつぶやく。

『半分でもいい』って、そういう意味。

『なんだ、その程度か』という意味ではない。簡単に痩せられると、カミラに挑んできたわけではない。

アロイスなりの、本気を込めた言葉だったのだ。

なんだか、すんと腑に落ちた。

アロイスは、気恥ずかしそうな顔でカミラから顔を逸らす。

その態度が、逆に気まずい。居心地が悪くなる。自分の部屋なのに、アロイスよりも落ち着かない気持ちになる。

だけど、悪い気分ではない。

アロイスに「きれい」と言われた時よりも、不思議とずっと、うれしかった。

それが釈然としない。

2 - 終章（後書き）

釈然としないから言っただけだ。

「アロイス様って、普段は『僕』っておっしゃるんですね」

「……………からかわないでください」

アロイスはすねたように顔を逸らした。荒れたヒキガエル顔でもわかるくらい、頬が赤く染まる。その姿に、カミラはにやりとしてしまう。

これは良いことを知った。今まで散々、偉そうに丸め込まれてきたのだ。しばらくはからかってやろう。

こつこつ恨みを、カミラは忘れないのだ。

カミラがニコルを侍女にしてしばらく。

ニコルが告発した侍女たちは、アロイスの手で解雇になった。

当の侍女はエンデ家直系の娘であつたらしく、エンデ家とは現在もめているようだ。おかげさまで、屋敷はどうにも落ち着かない。

今までは、貴族直系の娘が解雇されることなどなかった。アロイスはだいたいにおいて寛容で、一度二度の失敗は目をつぶってくれていたし、実際、解雇された侍女の働きぶり自体には問題がなかったはずだ。

それなのに、解雇を強行したのはなぜか。

使用人たちの間では、『実は裏でカミラが糸を引いていたらしい』とか、『アロイスは今やカミラの言いなりだ』とか、『やはりあの女は噂通りの悪女だ』などと、なんだかまた不審な噂が流れ出した。

が、それ以外は至って平和な日が続いている。

エンデ家との問題は、カミラにはどうすることもできない。不名誉な噂は気分が悪いが、それも今さらというもの。

そうになると、カミラの思い悩むところは一つである。

○

アロイスの食事は、現在六食。

朝食、昼前の間食、昼食、茶会でのおやつに夕食。それから夜食である。

やっとな通常の倍に収まった。

収まったものの、見た目はまだまだ変わらない。

カミラがモーントン領に来てから、およそ三か月が過ぎた。

痩せようと言いだしたのが二か月ほど前。二か月の間に、八食から六食へ減らしたのは結構なことだ。一度食事量が戻りかけたものの、なんとか奮起しなおして、現状の六食が続いている。近頃は、さらに一食減らすことを検討しているのだとか。

この調子でいけば、来月には五食。再来月には四食。その次でついに、人並みの回数になるはずだ。

一方で、まだまだ一度の食事は多すぎる。食事の内容も脂まみれで、甘すぎるし辛すぎる。運動もほとんどせずに、部屋の中で仕事ばかりしているし、見た目に気を配っているようにも見えない。要するに、いまだ巨大なヒキガエル。使用人たちは、アロイスが痩せ始めたとひそひそ噂しているが、カミラにはいまだ変化が感じられていない。

そろそろ次の手を打つべきだわ。

見た目はまだ手を打つには早いだろうし、少し駆け足するだけで汗だくになる状態では、運動も厳しいだろう。

となると、次なる目標は、食事量か食事内容。

ふむ、とカミラは一人、部屋の中で腕を組み、口を曲げた。

悪だくみの顔である。

モンテナハト家の厨房は地下にある。

地下から上がれば、食器やテーブルクロス、ナプキンなどが置かれた配膳室につながっている。そのさらに隣が、屋敷の主人や客人が食事する食堂だ。

使用人たちの食事をする部屋は、厨房に隣接した地下にある。食事はいつも主人の後。上級使用人の次に下級使用人が取るのが習わ

しだ。

とはいえ、昨今はそこまで厳密ではない。仕事の都合で、全員が一斉に食事をとれるわけでもなく、主人であるアロイスの食事時も一定ではない。年配の使用人は今も厳密に時間を定めているようだが、若い使用人たちはしばしば遅刻をする。

その厨房は、使用人たちの朝食時も過ぎ、皿洗いのメイドたちも仕事を終えたところ。料理人たちも一仕事終え、ひどく閑散としていた。

その閑散とした部屋の中。くつくつと鍋の煮える音がする。

壁一面を埋める大きなかまどには、心愈の大なべが一つ。弱火にかけられ揺れている。部屋の中央に並ぶのは、二つの長い作業台。そのうちの、かまどに近い台に、男が一人立っている。腕を組んだまま、考えるように鍋を見つめるその男は、厨房への侵入者に気が付いていないようだ。

他に人の気配はない。男が一人きり、気難しそうに眉をしかめているだけだ。

「坊ちゃんの食事が減った」

厳めしい顔をして、男は呟く。

年のころは四十半ば。角ばった顔立ちに、料理人の白い服が似合わない。まくりあげた袖からは、固い筋肉が見える。料理人というよりも、大工や採掘夫の方が似合うような男だ。

「いや、いや、今まで食べ過ぎてたんだ。いいことじゃねえかよ」
そんな男が、ナイフを片手にしおしおと呟いて、落ち着きなくかまどの前を歩く。

「でもなあ、どうして急にこんな。俺の飯が不味くなったのか？」
たまに、思い悩むように、乱暴に頭を掻く。手に持つナイフを気にする風もなく、まとめた髪をもみくちやにする姿は、見ているほ

うがはらはらする。

「いや、あんな塩辛くて、不味いもくそもねえか」

苦々しげにつぶやいて、それからさらに首を振る。どうにも情緒が不安定らしい。

「だけど、坊ちゃんも塩辛くてもちゃんと味がわかる人だ。やっぱり俺の飯が食いたくなかったのか……」

「ねえ」

「うおっ」

突然湧いて出た声に、男は野太い悲鳴を上げる。声はすぐ近く。

男の間に誰かがいる。

反射的にナイフを振り上げ、しかしそれを下す前に、その誰かの姿を捉えた。

「あなたがこの料理人？」

そう尋ねるのは、どこかきつめの女の声。振り上げたナイフに物怖じせず、胸を張るのは、まだ年若い女。少女といっても差支えない。

背丈は同じ年頃の女にしては高いが、男に比べればずっと小さく、細身だ。黒い髪を一つにまとめ、簡素なドレスを着ている。服装も、偉そうな澄ました態度も、典型的な貴族の娘だった。

「……なんだお前、どこかの侍女か。驚かせるなよ」

モンテナハト家で貴族の娘といえば、たいていは侍女だ。よほどの遠縁であるか、あるいは事情があるのなら、メイドの身分にもなるだろう。が、基本的にモンテナハト家は、家臣の身分をないがしろにはしない。そこそこの地位につけるのが慣例だ。

『侍女』と言った男に対し、女は少しだけ驚いたように目を見開いた。

しかし、少しの間で肯定する。

「そう、侍女。ちょっとあなたに聞きたいことがあるのだけど」

そう言って女は

カミラは、ふふんと笑った。

モンテナハト家の食事は美味しい。

普段のアロイスの食事はさておき、カミラに出されるものは文句なしに美味しい。

だから、料理人の腕に問題があるわけではないだろう。

となると、アロイスの食事はどうしてあんなことになってしまっているのか？

アロイスの生活を握っているのはゲルダだ。しかし彼女に聞いたところで、冷たい態度と言葉が返ってくるだけだろうし、より一層の敵意を受けるに違いない。

ならば、次は実際に料理を作っている料理人だ。いったいどこでまかり間違って、アロイスの食事だけひどいのか。その理由はなんなのか。

脅してでも聞き出してやるわ！

つまりは、こういうわけである。

「うそっ！ 美味しい！？」

「失礼な女だな」

作りかけのスープを一口飲ませてもらい、思わず声を上げたカミラに、厳めしい料理人の男は呆れた声で言った。

「いきなりアロイス様の料理を食べさせるなんて、俺じゃなければ叩き出してるぞ」

「ごもつとも。」

カミラは未だ、使用人の大半から避けられる身。会話をしようとしても、なにかと理由を付けて逃げられてしまっていた。ならば少しでも話をしやすくしようと、相手の勘違いに便乗して侍女のふりをしたものの、元の性格は変えられなかった。

侍女としてはかなり強引に、アロイスの食事を食べたいと言ったカミラに対し、一口でも味見させてくれた男はかなり寛容だろう。

が、今のカミラには、そんなことはどうでもよい。

大なべの中は、淡く透き通るスープ。その表面は、ぷくぷくと薄い脂の輪が浮かぶ。味付けには塩と胡椒しか使われていないように思われた。

しかし、ほのかに甘みがある。香りにはかすかに癖がある。あっさりとした飲み口だが、塩だけでは出せない奥深さがある。

「……よく煮込んであるわ。鶏肉で出汁を取ったのね。この香りはなに？ 癖はあるのに、味には全然出てないし……ああもう、全然わからない！」

「当たり前だろう」

ふん、と鼻を鳴らしながら男は言った。顔には、隠しきれない笑みが滲んでいる。どうやらカミラの反応にご満悦らしい。

「この俺の料理が、そこらの小娘にわかってたまるか。こっちはこれで食ってるんだからよ」

「ぐぐぐ……」

ぐうの音が出てしまう。偉そうな男の態度が少し悔しい。しかし、わからないものはわからないし、美味しいものは美味しい。

あのアロイスの食事ということで、覚悟をして口を付けただけに、なぜだか奇妙な敗北感がある。

「ここから、どうしてあんな味付けになるのよ……！」

スープはまだ作りかけ。これから仕上げが待っている。そこで塩辛くするのだろうか？　だが、料理人の大味な顔に反して、この繊細な味。下味でここまで丁寧に作っておきながら、わざわざ台無しにする真似を、この男がするのだろうか？

頭に手を当て唸るカミラに、男が首をかしげた。

「お前、もしかして新人か？」

男はそう言つて、改めてカミラをまじまじと見やった。無遠慮な視線に眉をしかめるが、男はまるで気にした風はない。

「最後の味付けは、俺がやってるんじゃない。俺が作るのは最高の料理までだ。恩のあるアロイス様に、不味いもんなんか作れねえかな」

「……どうということ？」

カミラが問えば、男は苦々しさを顔に浮かべる。諦めにも似た苦笑とともに、彼は肩をすくめた。

「最高の脂、最高の砂糖、最高の塩。当主たる人間は、誰よりも豊かに使わなければならない。モンテナハト家の教えにならつて、配膳係がぶち込んでんだよ」

男の名前はギュンター・ブラント。

モンテナハト家の雇われ料理人だという。

アロイスが見出した料理人らしく、屋敷の使用人たちとはどうにも馬が合わないらしい。

まあ、見るからに粗野であるし、口ぶりからして実際に粗野だ。彼のような人間は、貴族の家で働くよりも、町の料理屋で働いている方がずっと似合うだろう。

実際、町ではそこそこの名の知れた人物である。とは本人の談だ。「俺の一声で、周辺の飯屋がほぼ動く」などと彼はうそぶいた。もちろん、カミラは信じていない。

「お前みたいな若い女が、こんな地下までどうしてアロイス様の食事なんて気にかけるんだ」

カミラを無害と判断したのか、ギンターは一人で料理を続けていた。アロイスの朝食と昼食の間の一食を作っているのだという。

現在彼は、玉ねぎを細かく刻んでいる最中だ。ざくざくと、二人きりの厨房に音が響く。

「俺はてつきり、またあいつに会いに来た連中かと思ったぜ。まああいつはサボリ魔だから、ここより中庭でも探した方がいいだろうけど」

ギンターはなかなかおしゃべりな人間らしく、よく動く手と同じくらいに、口も動く。おかげさまで、背後に立って調理の様子を見ていたカミラは、料理人たちの知らない情報を仕入れてしまった。どうやら、この時間帯は、料理人たちはみんな出払っているらしい。理由は様々で、片付けが終わってから休憩だったり、町へ買い出しに向かっていたり、鶏の首を絞めていたり、あるいは単にサボっていたり。特にこのサボリ魔が厄介で、料理の腕は天才的だが、性格と女癖に難有りだとか。そのサボリ魔を目当てに、若い侍女たちが押しかけてくることもあったらしい。たしかに、侍女たちが「料理人にい男がいるらしい」と噂しているのを、カミラも聞いたことがあった

「いいところの長男で、顔も良い。頭も良い。性格に問題はあるが、悪い男でもない。お前くらいの年なら、みんな気になるんだろうな」
「興味ないわ」

まったく本心から、カミラはそう言った。おそらく絶世の美男子が相手でも、カミラは興味を引かれない。カミラにとって気になる相手は、今も昔も一人きりだった。

そして、気に掛けなければならぬ男もまた、一人きりである。

「アロイス様の食事の方がずっと気になるわ。てっきり、最初から塩辛く作るものだと思っていたのに。どうしてわざわざ、不味くするよ様な真似をするの？」

「お前、正直な女だな。人から嫌われるだろう」

ギュンターは笑いながら軽率にそう言った。びっくりするほど無礼な男だ。あまりに当たり前に言われたので、カミラは一瞬、怒ることさえ忘れてしまった。

「特に、この土地の人間からは好かれないだろうなあ。ここは伝統としたりでがんじがらめだから。当たり前の疑問も抱けない。おかしいと思う方がおかしい。そういう場所なんだ」

それから、彼は少し首を曲げ、背後のカミラを一瞥する。かすかに同情の見える視線に、カミラは眉をしかめた。

「お前、この土地の生まれじゃないだろう。いったい、なにをやらかしてこんな場所に來たんだよ」

「やらかしてなんかないわよ！」

むっとして、カミラは強い言葉を返す。カミラは悪いことはしてないし、後悔するようなこともしていない。ただ、ユリアン王子への恋にいくらか盲目的であり、少しばかり賢くなかったただけだ。
「だいたい、どうして私がよその人間だってわかるのよ」

反発心でもってカミラが言えば、ギュンターは振り向くことなく、親指だけをカミラに向けた。

「その髪。黒髪の貴族は、この土地にはいない。ここの貴族は血統を守るからな。罪人の血を入れないために」

「……………なに？」

罪人？

聞きなれない不穏な単語に、カミラは思わず問い返した。苛立ちの感情に、すつと水を差されたような感覚だ。

いぶかしむカミラに、なんだ、知らないのか、と一言前置き、ギョンターの背中では語る。

「ここはもとと、罪人の流刑地なんだよ。 もう、ずっと

昔のことだけだな」

ひやりとした。

カミラの耳には、相変わらず場にそぐわない。ざくざくと刻まれる玉ねぎの音が響く。

罪人。流刑地。昔とは、どれくらい前のことだろうか？

ユリアン殿下は、このことを知っていたの？

いや、彼が知らずとも、あの女なら知っているはずだ。

リーゼロッテなら。

今から数百年前。モートン領はかつて、罪人の流刑地であった。考えてみればそう。緑芽吹くゾンネリヒトにあつて、モートンは異質な土地。

常に湿気で生ぬるい風が吹く。瘴気の強い沼地など、人の好んで暮らす場所ではない。瘴気にあてられれば肌を病む。強い魔力に近づけば、魔力の暴走事故も起こるだろう。

罪人たちは、そんな沼地に身を浸し、爛れた肌で魔石を掘る。今より採掘環境も整っていない時代。魔石採掘は、体を痛め、時に危険を伴う仕事だった。

魔石採掘で、多くの人間が死んだ。いくら死んでも、魔石は掘り起こさねばならなかった。戦争、魔法の研究、貴族たちの権威と脅迫のため。多少の犠牲を払ってでも、必要なものだった。

だから、死んでも困らない人間が魔石採掘をした。

そんな罪人たちを取りまとめていたのが、モンテナハト家と、エ ندا家を筆頭とした貴族の家系だ。これも王家の裏の顔。影としての役割だった。

誇り高い王家の分家たるモンテナハト家は、その血統を保つために近親での婚姻を繰り返したという。他の貴族も主家にならい、同様に血筋を保ってきた。

もちろん、昔の話だ。

カミラは、モートン領についてほとんど知らない。

知っているのは、領土一帯が瘴気立ち込める沼地であること。魔石の豊かな採掘地であること。領主が王家の分家であること。そして、人の出入りがほとんどなく、領主でさえもめったに外に出てこないことくらいだ。

モーントン領の過去について、カミラは興味を抱くこともなかった。おそらくは、王都の若い娘たちの大半がそうであろう。不気味で謎めいた暗黒の沼地。領主は醜い沼地のヒキガエル。瘴気に吹きつけられれば顔が爛れるとさえ言われるその土地に、誰が関心を抱くだろう。

特に、カミラが王都にいた当時は、モンテナハト家との結婚を押し付け合っていたような時期だった。下手な関心を見せればすぐに、「それなら嫁いで、実際に見てくればいいじゃない」とからかわれ、結婚の意志ありなどと裏で噂をされてしまうのだ。

モンテナハト家に行くを決めた後も、カミラは相手の家や土地についてを知ろうとはしなかった。これはただの意地だ。自分の意思ではない。好き好んで嫁ぐわけではない。いつかは、許されて王都へ戻れるのではないかという、微かな期待も込めて、モーントン領に寄り添うような真似はしなかった。

だけど、さすがに勉強不足だったかもしれない。

「……私は罪人ではないわ！」

「当り前だろ。何百年前の話だと思っているんだ」

ギューンターはフライパンにバターを落とし、丹念に溶かしながら、憤慨するカミラの言葉を切り捨てた。

「今は、罪人は捕まっておしまいだろ。でもまあ、理由がないとわざわざ他所からこんなところへは来ないだろうが。こんな辛気臭いところ」

熱いバターの上に、先ほどまで刻んでいた玉ねぎを放り込む。ジュツと心地よい音が厨房に響いた。

「時代は変わったのに、いつまでもここは古いままだしよ。閉鎖的だし、陰気だし、罪人の土地だからって、明るいこと、楽しいこと、祝いごとなんかも禁止だ。この辺りでは、祭りの類も一切ないんだ。知ってるか？」

知らない。

背を向けたギウンターには見えていないと知りながら、カミラは反射的に首を横に振る。陰気で閉鎖的であるのは、屋敷にいるとよくわかる。

だが、少し引つかかるところもある。

「グレンツェは陰気ではなかったわ」

領都以外で、カミラが唯一知っている町。モントン第一の都市グレンツェ。豊富な魔石採掘量と、国境近くの交易で発展したグレンツェは、荒々しさと活気に満ちていたはずだ。

町を歩く人の姿は様々で、異国からの訪問も多い。市場から響く声は明るく、快活だった。ギウンターの言葉とは、真逆に位置しているように思う。

「あそこは特別だよ」

言いながら、鶏肉、刻んだ香草、茸をフライパンに放り込み、ギウンターはさらに炒める。

「グレンツェが大きくなったのは、ここ何年くらいのことだぜ。アロイス様の代になってから、国境を開いて無理矢理人を流し込ませたんだ」

火が通るにつれ、良い香りが漂い始める。ギウンターの言葉を聞きながら、内心カミラは「あれくらいなら私でもできる」と思っていた。問題は次だ。

刻んで炒めて　それからどうする？

「だからグレンツェはアロイス様に信頼がある。あそこでは、アロイス様はよく慕われていただろう？」

「そうかもしれないわね」

グレンツェで出会ったロルフや、孤児院の老婆の口ぶりには、ア

ロイスへの親しみがあつた。戦争みたいな食事時、孤児たちがアロイスを振り回す姿も見た。

舐められているのではないかしら？

と頭の片隅に浮かぶものの、それも信頼がなければできないことだろう。

「でも、周りからは大反発だった。アロイス様はまだ領主になつたばかりで、若造すぎたんだ。上手いこと躲すこともできず、それで心折れたんだろうなあ」

ギューンターは振り返り、調理台に置かれた麻の袋を掴んだ。抱えるほどの袋の中には、大麦が詰まっている。それをひと掴み。彼はフライパンの中に放り込む。

「なにをするにも、一人では限界があるからな。あの人には、味方がいなさすぎたよ」

言いながら、今度は鍋に手をかける。鍋の中からスープをすくい、フライパンの中へと流し入れる。それからまた調理台に振り返り、水差しを取る。水差しの中身は水ではなく、濃い目のミルクだ。スーパがくつつく煮えるまで待ってから、男はそっとミルクを回し入れる。

ミルクを入れる直前、フライパンで煮立つスープから、またかすかに癖が香った。

ふうん。

かわいいもなく腰に手を当て、カミラは目を眇めた。ギューンターの言葉には、他人事じみた憐みがある。

「あなた、アロイス様に同情的みたいね」

「そりゃあな。言っただろう、恩があるって」

「恩を受けたのっていつくらい？」

「そうだなあ……グレンツェのときとちょうど同じくらいだったよ。あの頃のアロイス様には、見過ごせないものがたくさんあつたんだ」
「へえ」

息を吐くようにカミラは言った。

強気で迷いない瞳は、ギョントアの背中が映っている。カミラには、彼のこと上手く理解できない。

「それじゃあ、アロイス様が一人でいたとき、あなたはなにをしていたの？」

はつとしたように、ギョントアは振り返った。

目を見開いたギョントアの表情は、次第に涙みを増していく。

眉間にしわを寄せ、口を曲げ、苦々しさをあらわに首を振った。

「俺はただの料理人だぞ？　なにつて、料理しかできねえよ」

「料理だけをしていたの？　あなたは数少ない味方だったんじゃないの？」

「お前なあ……。料理だけつて、俺はせめて美味しいものだけとは……！」

ギョントアのいかつい顔に、苛立ちが滲む。それは料理をないがしろにされたことへの怒りかもしれないし、図星をさされたことへの反発かもしれない。ただ単に、初対面でありながら、あまりに無礼なカミラに腹が立っただけかもしれない。

だが、その怒りも飲み込むように、カミラは胸を張った。怖気づかないのは　カミラにも自信があるからだ。

「料理なら、私だってできるわ」

「ああ？　さっきまで、俺のスープで頭抱えてたくせに」

「それももうわかったわ」

ギョントアの馬鹿にした言葉にも、カミラはふふんと笑った。

「あの癖、あの甘み　　うちで作ったワインね」

シュトルム伯爵家の名産。今年も好評を博したワインは、遠いモントン領にも卸されているのだ。

カミラの顔に宿るゆるぎない自信に、ギョンターは呆氣にとられていた。

あまりの堂々とした態度に怒りも失せる。ぽかんと口をあけたまま、しばらく見つめ　しばらく待っていたが、カミラから次の言葉は出てこなかった。

ワインは合っている。大鍋の中に数滴だけ落とした風味に、良く気がついたものだ。

合っているが。

「……………ひとつしかわかってねえじゃねえか」

ワインしか合っていない。

なのにどうして、そこまで胸を張れるんだ？

2・5・4（終）

「だから！ ミルクを沸かすんじゃない！ 味が飛ぶだろうが！」
「ちゃんとギリギリで止めたでしょう！ 吹きこぼれてもいないわ！」

「それは俺が声をかけてやったからだろうが！ さっき失敗しておいて、なーにを偉そうに！！」

「止めたのは私だわ！！」

「だから！ なんでお前は！ そんなに偉そうなんだよ！！」
「偉いもの！！」

昼過ぎ。昼食時の忙しい時間を終え、料理人たちも出払った後。いつも静かな厨房が、今日はやけに騒がしい。

重たい体を抱えて、人目を忍びながら厨房まで出向いたアロイスは、響き渡る声に首を傾げた。

険しい二つの声は、どちらもアロイスにとってなじみのあるものだ。一人は、長年勤める料理人のギュンター。もう一人は。

「……カミラさん？ どうしてこんな場所に」

「ああ、アロイス様！ ちょうどいいところに！！」

背後から呼びかければ、カミラは勢いよく振り返る。それから、「ちよつとそこで待っていてください！」とアロイスに命じると、どこからか二つの皿を取り出した。そうして、アロイスの存在を疑問に感じる様子もなく、彼女はそれぞれの皿になにか盛り付ける。

粥？

カミラの背中越しに、アロイスはかまどを覗き込む。二つの皿と、二つのフライパン。大きな匙で、白くとろんだかたまりを、すくい取るカミラの姿が見えた。

これから何が起こるのか、アロイスには皆目見当もつかない。

この時間、ギウンターはいつも、アロイスのために軽食を用意してくれている。軽食と言ってもアロイスのこと。かなりの量があるのだが、それはさておき。

それを配膳前にこっそりと味見するのが、アロイスの密かな楽しみだった。

あまり品のある行動ではないこの楽しみ。人目を盗んで不定期に訪れるアロイスに、ギウンターの方も気を遣い、昼過ぎにはいつも厨房の人払いをしてくれていた。

だから、騒がしいのは珍しい。それも、騒いでいるのがカミラとは。

いったいなにがあったのか。

そう思つてよくよく周囲を見回せば、荒れ果てた調理台が目に入る。切り捨てられた食材が転がり、口の開いた麦の袋がある。こぼれたミルクの滴が、そのまま台の上で丸くなっている。

かまどには、荒い調理の跡が見える。繊細な腕のギウンターらしくない。彼が調理する時はいつだって整然として、調理の終了と共に片付けも終わっているくらいなのに。

首をかしげるアロイスに、カミラは二つの皿を突きつけた。

湯気と共にミルクが香り、優しい味が想像される。二つの皿に盛られた粥は、見た目に大きな違いはない。しかし、どうやら別々のフライパンで作られたものらしい。

「どっちが美味しいか！ 食べてみてください！」

眼前に迫る麦の粥に、アロイスは瞬いた。

ギウンターもまた、カミラを見て瞬いている。

「……カミラ？」

黒髪。貴族。よそ者。ワイン。ぶつぶつと呟きながら、彼はカミラの顔を、胡乱な目つきで覗き見た。まさかという表情である。

「シュトルム家のご令嬢？」

ギョントアの言葉に、カミラはつんとあごを逸らし、口を曲げてにやりと笑った。

固唾をのんで見守るカミラに対し、アロイスは居心地が悪そうだった。

片付けも済んでいない調理台の上。カミラはどうかきれいな場所を作り出し、アロイスを座らせた。そして、二つの皿を彼の前に置いたのだ。

アロイスから見て右の皿は、カミラが作った。左の皿はギョントアが作った。だが、このことをアロイスは知らない。

スプーンを手に片皿ずつ粥をすくい、アロイスは用心深く口に運ぶ。口にして、少しでも反応を示すと、調理台の対面で見守るカミラの表情も動く。二口目を食べようとすれば、カミラが身を乗り出してくるのだ。アロイスとしては、まったく落ち着かないだろう。

カミラも落ち着いてはいられなかった。

二つの皿は、片方がカミラの作ったもの。もう片方がギョントアの作ったものだ。大見栄を切った手前、相手が玄人とはいえ、負けるのは癪に障る。それにカミラの作るものだって、孤児院ではなかなか好評を博していたのだ。多少なりとも腕に覚えはある。

皿に盛られた二つの粥は、見た目に大きな違いはない。材料も全く同じだ。作り方も、ギョントアがいちいち口を出したおかげで、ほとんど同じになってしまった。

味付けは、アロイスのいつもの食事に比べて、ずっと薄い。普通の人にとっては当たり前の濃さだが、相手はアロイスだ。勢いで判定役を任せてしまったものの、一抹の不安が残る。

「……ちゃんと違いがわかるかしら」

ぼつりとつぶやいたカミラの声を、ギンターが拾う。

「お前、アロイス様の舌の良さを知らないな？」

「初耳だわ」

しびれるほどの甘みか塩みしか感じないのかと思っていた。だが、よく考えれば孤児院での料理の時も、普通の味付けをしていたものだ。

アロイスの様子が気になりつつも、ギンターの言葉も気になる。どっちつかずにちらちら見やりながら、カミラは小声でささやいた。

「普段あんなものを食べているのに、味がわかるのね」

「当たり前だ。なんでアロイス様がわざわざこんな厨房まで来ている
思っているんだよ」

「なんで？」

そう問われてはじめて、カミラはアロイスがこの場にいることの違和感に気が付いた。屋敷の主人が、わざわざ人の少ない時間、一人で厨房まで来る理由はなんであろう。

自分で料理をするため？

だけど、この土地では料理は美德という。王都にいたころのカミラと違って、堂々と料理ができるのだ。誰もいない時を狙う理由はない。

「こっそり俺の料理を食うためだよ」

「はあ？」

自慢だろうか。むっとしてギンターを睨むが、彼は喧嘩を売ったつもりはないらしい。カミラの視線に、肩をすくめて苦笑する。

「他の連中だと、塩を盛られるからな。俺の料理で、味を忘れないようにしているんだ」

諦念の見える顔で、ギンターはこぼれるようにつぶやいた。

「きつと、忘れたくない味があるんだろっなあ」

「忘れたくない味って？」

「なにか、思い出でもあるのだろうか。」

「俺の料理の美味さだろうな」

迷うことなく言つてのけたこの男を、なんとしても負かせなければ気が済まない。

そうこうするうちに、かちやりと匙を置く音がする。

カミラとギウンターが、そろって音の方を振り向いたのは、アロイスがちょうど食べ終わつた瞬間だった。

それで、どっちの方が美味しかったのか？

カミラの問いに対し、アロイスは悩んでいるようだった。

困つたような笑みを浮かべ、カミラとギウンターをそれぞれ見比べる。

「材料は同じですね。元となるスープは、ギウンターが作ったものでしょう？ 香草を詰めた鶏肉に、玉ねぎ、人参セロリ、牛の骨。オリーブと、あとは赤ワインですか」

「相変わらず、完璧です」

参つたようにギウンターは両手を上げる。もうこの時点で、カミラは悔しい。カミラだって、上級貴族の娘。十分に良いものを食べてきたはずなのに。

「作り方もおそらく同じ。バターで炒めて、ミルクで煮詰めて……うーん」

それぞれの皿に目を落とし、アロイスはうなつた。評価に迷っているのか、悩む時間が長い。傍で待つカミラは、焦れて仕方がなかった。

「どっちも美味しい、なんて結果では許してくれませんかね」

「当り前です」

白黒つけねば気が済まないのだ。挑むようなカミラの目に、アロイスは息を吐く。ついに観念したらしい。

「……………どちらも十分に美味しいですが……強いて言えば、左の皿は、ひどく丁寧です。火を通し過ぎず、味を損なわず。とても上手い。右の皿は素朴で、柔らかい味がします。一生懸命さがにじみ出るような　　こちらが、カミラさんが作ったものですね」
そう言つて、アロイスは右の皿を示す。たしかに、右がカミラだ合っている。

「料理の腕だけで言えば、やはり長年それを仕事にしてきた分、差が出てしまいます。ですが、美味しさは腕前だけでは決められません。……カミラさんの料理を食べたのは、初めてでしたね」

孤児院の時は、なんだかんだと駆け回った結果、お互い食事をとることもできなかった。だから、アロイスがカミラの手料理を口にしたのはこれが最初だ。

カミラの料理は下手ではない。好んでするだけあって、それなりに何でもできる。だけど、玄人の料理人と張り合つて、比較できるほどの腕前でもない。孤児院で子供を喜ばせることはできても、本当に味を知った人間の口には、明確な違いが出てしまう。

それでも、アロイスの視線は右の皿へ向かう。

「あなたが作ってくださったものに、負けをつけさせるわけにはいきません」

カミラが目を見開く。

ギョンターも啞然と口を開く。

もちろんどちらも、穏やかなものではない。

「そ」

二人の声が揃つて出る。

アロイスはそれだけで、自分の判断が誤りだと悟った。

「そうじゃない！　そういうことじゃないわ！！」

「そりやないですよ！　坊ちゃん！！」

同時にアロイスに向けられたのは、二人の罵声だった。カミラの顔は悔しさに染まり、ギョンターは傷ついたらしく、厳つい顔をし

おしおと歪める。

「要するに、私の方がまだ下手だってことでしょう！ 鼻屑で勝ちたいわけじゃないのよ！」

「坊ちゃん！ 俺とだって長い付き合いでしょう！ こんないきなり現れた女に、どうしてそんな！」

「うーん」

アロイスは苦笑するほかになかった。

おそらく、どちらも美味しいと言っても駄目だった。ギョンターの方が美味いと言っても、カミラは憤っただろう。カミラの方が美味いと偽っても、カミラが傷つくだけだ。二人の現場に居合わせた時点で、アロイスは詰んでいたのだ。

それでも、上手くまるめようとしたこの選択は、最悪だったかもしれない。

「このままじゃ済まさないわ！ ギョンター！ 私に料理を教えなさい！ 絶対に抜かしてやるわ！！」

「おい！ それが人に物を頼む態度か！？ 偉そうに、この悪役女！！」

「だって偉いもの！」

「厨房では俺の方が偉いんだ！ おう、こっち来い！ 実力見せつけてやる！！」

二人はやいやい騒ぎながら、またかまどに向かって行く。取り残されたアロイスは、もう目に入っではいけないようだ。

遠慮のない二人の喧嘩を聞きながら、アロイスはまた苦笑した。

アロイスの選択は最悪だったけれど たぶん間違っではい

なかったのだろう。

シュトルム伯爵家令嬢、カミラ・シュトルムは恐ろしい女である。

男爵令嬢リーゼロッテに対して行った数々の悪事。人を陥れる手腕。一度狙いを定めれば、決して逃がさないその執念深さ。第一王子エツカルトに取り入り、ユリアン王子へ近づいたその手腕。

厄介払いとしてカミラを押し付けられたモーントン領の人間たちは、みんな警戒していたはずだ。

だが、その領主たるアロイス・モンテナハト公爵が、カミラの手練れたその腕に落ちた。

彼女の恐ろしさに屈したのか、彼女の媚に、女慣れしていない公爵が参ったのか。

今や公爵は、カミラの言いなりである。あの温和で寛容な公爵が、些末な理由で使用人を処断し、そぐわぬ人間に地位を与えた。すべて、裏ではカミラが糸を引いているのだ。

いずれはこのモーントン領全域を乗っ取り、王都を再び狙っているのだと、近頃はもっぱらの評判である。

使用人たちは、カミラの機嫌を損ねないように、怯えながら彼女に接するようになった。

特にここしばらくは、カミラの機嫌が悪い。いつ癇癪を起し、クビにされるかわからないと、誰しも戦々恐々としていた。

モーントン領に来てはや四か月。
今日もカミラの機嫌は悪かった。

理由はほかでもない。

ここしばらく、妙に肌が荒れるせいだ。

沼地ゆえに、乾燥が原因ではない。日差しの強い日も少なく、気候だけなら王都にいた時よりも肌には優しい。

だが、モーントン領には瘴気がある。

カミラは魔力が少ないため、瘴気の影響を受けにくい。実際、モーントン領に来た当初は、たいして瘴気も感じてはいなかった。魔石採掘地であるグレンツェは、比較的瘴気が強いいため、肌がぴりぴり痛むことはあった。

それでも、半月程度滞在した後も変わらず、カミラの肌はつややかなままだった。たしかに、そのまま瘴気の風を浴び続ければ、多少なりとも支障は出たのかもしれない。しかしカミラは、毎日きちんと肌の手入れをしているのだ。石けんで丹念に肌を洗い、ハーブとミルクのクリームを塗り込み、オリーブから作った香油で保湿している。ここまですれば、瘴気などおそるに足らず。などと思っただものだ。

ところがここしばらくは、その丹念な手入れでもってしても、肌が荒れていくのが分かった。湿気た気候であるにも拘らず、肌の表面が乾燥している。関節にかゆみがある。先日などは、頬に小さな吹き出物ができてしまった。

とんでもないことである。

原因は、ここ一か月ほど、ずっと領都^{りょうと}に吹き付ける瘴気の風のせいだった。

領都は本来、魔石採掘地ではない。瘴気は決して強くないはずだ。風向きの加減か、気候の乱れか。原因は定かではない。

瘴気が強くなれば、乱れるのはカミラの肌だけではない。

魔力の強い人間は、自身の魔力の制御が甘くなる。

おかげさまで、最近カミラの侍女になったばかりの少女 ニコ
ルもずいぶんと難儀しているらしい。

「私も、アロイス様くらいきちんと魔力を操ればいいんですけど」
魔力を発散し、戻ってきたばかりのニコルが、申し訳なさそうに
そう言った。

言いながら、彼女の手は無意識に、長袖の上から腕を搔く。最近
よく、彼女がする仕草だった。

場所はカミラの部屋。今日は少しかり風が強く、肌を刺す瘴気
も強い。

こんな日は、ちょっとしたことで魔力が乱れ、暴発がしやすい。
だから、魔力の乱れを感じたら外へ飛び出し、安全な場所で魔法を
使うのが、強い魔力持ちたちの習慣だった。

しかし、一時的な魔力の発散は、根本的な解決には至らない。魔
力は体力と同様、休息によって回復するものだ。だいたい、一晩
眠れば元に戻ってしまう。

魔力の確かな統制は、その人自身の持つ技術。未熟なニコルは、
まだその力を操りきれてはいなかった。

「ご迷惑をおかけして申し訳ありません。最近、また瘴気が強くな
ったみたいで」

また、ねえ。

どうりで、ここ最近は肌荒れが悪化しているわけだ。カミラだけ
のことではない。アロイスの顔だってひどいものだ。吹き出物だら
けで、赤く膿んだ顔を見るのは忍びない。手入れているカミラで
さえこうなのだから、見た目に気を遣わないアロイスは、さぞや
。

そこまで思い当たって、カミラは頭に手を当てた。

「……ねえニコル、あなたは肌の手入れっしてしている？」

「えっ私ですか？ 私はそういうのはあんまり……」

言いながら、ニコルは自身の腕を掻く。その手を、カミラは思わず掴んだ。

ニコルはぎょつとして、体をこわばらせる。そばかすの散る顔には、うつすらと恐怖が浮かんでいた。

長年叱られ続けた経験から、ニコルは人に対して必要以上に怯える癖がついてしまっていた。だが、今の恐怖はそれ以上に、カミラの不機嫌に満ちた顔つきのせいだろう。

しかし、カミラはそんなことはお構いなしだ。

遠慮のかけらもなくニコルの腕をまくり上げると、「ああっ！」と悲鳴にも似た声を上げる。

「やっぱり荒れてるじゃない！」

長袖の下。ニコルの腕に広がるのは赤い湿疹だ。肘の内側や、手首のあたりを中心に、まばらに散る赤が痛々しい。普段から荒く掻いてしまっているのか、肌が傷つき膿んでいるものまである。

「お、奥様、お見苦しいものを……！」

ニコルは慌てて、反対側の手で腕を隠す。その隠した手で、また一掻き。肌を掻いたのをカミラは見逃さない。

「掻くんじゃない！ 跡が残るでしょうが！」

「は、はい！ ああ！ でも、かゆいときはどうすればよいでしょう！」

「我慢するの！」

カミラの断固たる言葉に、ニコルはおののいた。

しかし当然のことである。困難もなくきれいな肌が手に入るものか。

容姿とはすなわち、努力である。生まれついで美人だって、放っておけば荒れ果ててしまうものなのだ。

せつかくの金髪。

せつかくの リーゼロッテに似た、かわいらしい顔立ち。

なのに、そばかすを隠すこともなく、髪も飾らず。服なんて、侍女ともなれば自由が利くのに、いまだ支給された下級使用人のもの。「元がいくせに、適当するんじゃないわよ！」

ニコルも おそらくは、アロイスも。

要するにこれだ。

アロイスは肌の手入れなんて、確実にしていない。どう考えてもするような性格ではない。

瘴気だ魔力が強いだと言っ、どうせこれまでなにもしてこなかったのだろ。荒れるがままに任せていけば、ヒキガエル顔も必至。魔力を言い訳にするより先に、するべきことがあるのではないか。

ユリアン王子を見返せるほどの良い男のためには、荒れた肌などもつてのほか。ユリアン王子は白く、陶器のような肌なのだ。アロイスも変えて見せなければなるまい。

一日の食事回数も、この頃はさらに減らして五食になった。そろそろ次の意識改革に、手を伸ばしてもいいだろう。

ニコルの荒れた腕に、強引にクリームを塗りながら、カミラは次の行動を心に決めていた。

「なぜ、私に無断で侍女の処分をしたのですか」

肌荒れに効く薬を手に、アロイスの部屋を訪れようとしたとき、カミラは低い女の声聞いた。

中年に差し掛かった女の声は、落ち着いて威圧感がある。どこことなく硬質で、感情のにじまない語り口に、カミラは反射的に足を止める。ちょうど、アロイスの部屋の扉が見えるところ。扉の前で静かに言いあう二人が見える。

一人は、確かめるまでもない。ゲルダだ。

ゲルダに相對しているのは目当てのアロイスである。カミラからは、ちょうど彼の巨大な背中だけが見えた。

二人は、カミラに気がついてはいないようだ。静かな会話を続けている。

「私が屋敷に不要と判断したからだ」

「彼女はエンデ家直系の娘。一存で処分できる相手ではありません」
主人であるアロイスを前にしても、ゲルダの態度は変わらない。

細い背を伸ばし、白髪交じりの茶髪をきちんとまとめ、顎をそらし、立つ。両手は前で組み合わせ、顔はアロイスにまっすぐに向かう。カミラに向けるような明確な敵意はないものの、アロイスに向ける視線も、親しみのあるものではなかった。

「彼女は同僚をいじめ、屋敷に損害を出した。私の客人に、してはならないことをした。それでも理由は足りないのか」

「損害も、あの女へしたことも、すべて彼女自身がしたことではないはずです。いじめとは、エンデ家内での諍いでしょう。アロイス様が介入することはありません」

「私の屋敷で起こったことだ。私が介入するのは当然だろう」

二人の口調は、決して荒々しいものではない。だが、交わされる

視線は険しかった。

アロイスの言葉に、ゲルダは無言で視線を返した。アロイスもまた、無言で視線を受け取る。言葉を交わしている時よりも、なぜかずっとひやりとした。

先に視線を外したのは、ゲルダの方だった。

「あの女が……………」

言いかけて、続く言葉を飲み込む。ゲルダは視線をかすかに伏せ、諦念のこもる深い息を吐いた。

「以前のアロイス様は、もっとわきまえておられました。エンデ家がどれほど尽くしてきたか、お忘れではないでしょう」

「それとこれとは」

「彼女はエンデ家との架け橋でもありました。エンデ家との対話、歓待、調整を任せていました。彼女がいなくなつた今、代わりを見繕う必要があります。誰かをやめさせれば、穴埋めが要るのです。アロイス様はそこまで考えておられましたか？」

言葉を挟ませず、淡々とゲルダは語る。大きな声でもないのに、ゲルダの声は良く響いた。

「女使用人一人一人の役割を見て、采配するのは侍女長である私の役割です。些事に惑わされれば、屋敷の管理にも支障をきたすでしょう。今後は必ず、私に話を通してくださいますように。よろしく願ひいたします」

抑揚なく言い切ると、ゲルダはアロイスに一礼した。そして、これで要は終わりだとばかりに、アロイスの横を通り過ぎる。背筋を伸ばしたまま、表情を変えずに通る過ぎるゲルダに、アロイスは苦々しく顔をゆがめた。

が、カミラはその表情を見てはいない。

ゲルダが一礼して、顔を上げたとき。彼女の視線が、カミラを捉えたからだ。

ゲルダは、はじめからカミラのいる廊下の先に用があつたのか、それともカミラがいるからこちらに来たのか。まっすぐにカミラの方へと向かつてくる。

そして、すれ違いざま。立ち止ることなく、歩く速さを緩めることもなく、ただ一瞥だけをカミラに与えた。

静かで深い憎悪のこもった視線を受けたのは、ほんの一瞬だけだった。

言葉もない。足も止めない。呼吸さえもする間もない。

なのに、底冷えのするその目が、カミラの体をすくませた。

恨み、妬み、嫌悪、悪意。そういったものは、王都でいくらでも受けてきた。カミラには敵が多かった。人から嫌われ、疎まれることも少なくなかった。悪意を持って接する人間の顔を見てきた。

だけど、ゲルダのあの視線は 知らない。

とび色の瞳は暗い洞うらのように翳かげり、ただ闇だけが覗のぞいていた。

ゲルダの足音が遠ざかって、動けずにいるカミラに、少し遅れてアロイスが気付いた。

驚いたように目を見開くと、少しばつが悪そうに、彼はカミラに近付いてくる。巨体であることは変わらないが、その体がもたらす局地的な地震は以前よりもおとなしい。

おとなしいが、そのことにカミラは気が付いていない。ひやりと冷たいものが、胸の中にまだ残っている。

「カミラさん、もしかしてずっとそこにいらっしやいましたか？

お恥ずかしいところを……」

「あ、いえ」

はっとして、カミラは顔を上げる。

いつの間にやら、アロイスがカミラの目の前に立っていた。

昨今、痩せた痩せたと評判の巨体は、着る服がなくて難儀しているらしい。おかげさまで新しい服を新調し、以前よりも清潔感が増している。

しかし、カミラの目から見れば、依然として巨大である。変わったなどと気が付くのは、長年勤め、アロイスを見続けてきた使用人たちだからだ。ヒキガエルめいた爛れた顔も健在で、肉に埋もれた赤い目が、いつそうカエルを連想させる。まだまだ、カミラの理想には程遠い。

アロイスは、その射程外の顔をくしゃりと歪め、困ったように笑った。

「ゲルダにはなかなか頭が上がりなくて。長いこと、彼女が屋敷の使用人を取り仕切ってくれていましたから。……でも、それじゃあ駄目だったんでしょねえ」

どことなく悲しげに言うアロイスに、カミラは息を吐く。不本意ながら、アロイスの情けない発言と、目を奪う容姿のおかげで、気持ちが若干落ち着いてきた。

たかだか一瞬睨まれたただけだわ。

しかも、ただの使用人に。

なのに、どうして私が気後れしないといけないのよ！

落ち着くと、今度は腹が立つ。ゲルダの視線も遠くなれば、恐怖さえも幻のようだ。一介の中年使用人に睨まれて竦むなんて、馬鹿馬鹿しい。現状はアロイスの客人扱いで、よそ者に過ぎないとはいえ、カミラの方が身分としてはよほど上のはず。なにを怯える必要があるというのだ。

「アロイス様、あのゲルダって何者なんです？」

反動で妙に強気に、カミラはアロイスに問いかけた。

「まさか、あの女もエンデ家の人間なんですか」

この屋敷には、エンデ家の人間が多い。モンテナハト家との浅か

らぬ縁を持つエンデ家は、上級使用人から下級使用人。男性女性問わず、あちらこちらに見える。エンデ家の特徴である金髪は、だいたい四人いれば、一人は混ざっていると思っただけでなかった。

ゲルダの髪は金ではなく、明るめの茶髪だ。顔立ちもきつめで、愛らしい顔立ちが特徴のエンデ家とは、少し異なっただけに見える。しかし、エンデ家に対して妙にかばいだてをする。モンテナハト家の侍女長として、エンデ家の縁を重視しているだけなのかもしれないが、もしかしたら彼女自身がエンデ家にゆかりのある人物なのかもしれない。

そう思ったカミラの言葉を、アロイスは首を振って否定する。

「いえ、彼女はエンデ家ではありませんよ。同じくらい長く仕えてくれている家柄ですが……」

言ってから、ふとアロイスは言葉を切る。なにを思ったのか、カミラの顔をまじまじと覗き込み、少しの間悩むように瞬いた。

「カミラさん」

「な、なんででしょう？」

思いがけずまじめなその表情に、カミラは少し怯んだ。足を引くカミラに、アロイスは続ける。

「ちよつと、お勉強をしましょうか。モンテナハト家と、この土地について」

やだ。

嫁ぎ先の家について学ぶのは、貴族令嬢としては当然のことだ。

これから女主人となる家。その歴史、成り立ち、現在の情勢などを知らなければ、妻としての務めは果たせない。

だが、これまでカミラは、モンテナハト家についての知識をほと

んど持っていなかった。アロイスも、強いて教えようとはしなかった。

それは要するに、カミラに対して妻の立場を求めてはいなかったからだ。結婚相手として預かっておきながら、あくまでもカミラは客人。なにも知らないままでよい、と捨て置かれていたに過ぎない。だが、最近のアロイスは少しばかり様子が違う。グレンツェでの喧嘩、ニコルでの一件を経て、カミラに対する態度が変わってきている。

カミラを認め、客人扱いから 役割を求めるようになっていく節がある。

勉強をしようと言ったのは、つまりはそういうこと。
カミラが嫌だと思うのも、そういうことだ。

まだ、時間が欲しい。

こつぴどく失恋し、王都を追い出されてから四か月。短い時間ではない。

だけど、カミラの長い恋に対しては、あまりにも短すぎた。

モンテナハト家は、王家の分家であるのは知つての通り。

数百年前の王弟が、モーントン領を切り拓いたのが始まりだ。

かねてより流刑地であつたモーントン領の沼地を開き、魔石を採掘しながら町を作つた。これが、モンテナハト家の開祖。

開祖である彼には、仕える四人の忠臣がいた。王都を離れ、辺境を拓く彼についてきたその四人は、のちに爵位を与えられ、今でも四つの家柄としてモンテナハト家に仕えている。

一つはエンデ家。血脈に強い魔力を宿し、魔法技術に長けた家柄。一つはブラント家。器用な人間が多く、物作りに長けている。かつては魔石採掘の発展に尽力をしたという。

一つはレルリヒ家。政務に長けており、モンテナハト家の頭脳を務めていた。

最後に、マイヤーハイム家。武に長けた彼らは、現在まで変わらず、四つの家柄の筆頭でもあつた。

「……ブラント？」

昼を過ぎたアロイスの私室。いつもなら茶会の菓子が並ぶテーブルの上に、今は古い本が積まれ、筆が転がる。妙に饒舌なアロイスを前に、肌荒れを治しに来た、などとても言える様子ではなく、カミラは大人しく彼の講義を聞いていたところだった。

が、どこか聞き覚えのある単語に、カミラはついつい遮って声を上げる。

「ギュンター・ブラント？ あの料理人？ あれが貴族なんです？」
まさか、と思った。口は悪いし、粗野であるし、とうてい爵位を

持っているようには思えない。町で声を上げながら、食堂でもやっている方がお似合いだ。

アロイスはカミラの向かい側。モントン領の地図や家系図を広げながら、カミラの言葉にうなずいた。

「そう。元準男爵です。ブラント家はすでに没落しているので、爵位は返上していますよ。ギンターが生まれるより前の話ですので、あまり貴族という感じではありませんね」

「はあ……」

「没落したのは彼の曾祖父の代です。原因は、他家と揉めたためだと思います。それからブラント家は、ずっと不遇の時代を過ごしてきました。この辺境では、王都よりもずっと家柄が重いものですから」

今のギンターからも垣間見える通り、ブラント家は気風が良くて快活な性質だ。モントン領の伝統にも歯向かう気概がある。その一方で、政治的には明るくないのが致命的だった。

貴族の格も、他家に比べて一段落ちる。もとより、あまり他家から良い顔をされていなかったのだ。没落も、いつかは起こることだった。

モントン領では、ブラント家を除く三つの貴族の影響力を馬鹿にはできない。他家に睨まれたブラント家が、没落後にまっとうな暮らしができるはずもない。影に隠れ、息をひそめ、ひっそりと暮らしてきた。

ギンターを見出したのはアロイスだ。アロイスが領主の座を継ぎ、領地を訪ねて回った際、偶然立ち寄った町の食堂で、料理人をしていただいたのだという。

「この土地では、髪色でだいたいの家柄を察することができますからね。ブラント家の場合は、赤色がよく目立ちます」

アロイスはその料理の腕に感服して、料理人を呼びつけた。現れたのは、鮮やかな赤い髪に、ブラント家の特徴を宿した厳めしい顔

つきの男。

彼こそが、ブラント家直系の長男。ギユンター・ブラントだった。「埋もれさせておくにはあまりに惜しいと思いました。ブラント家はもとより、手先の器用さを誇ります。料理だけではなく、様々なものを作ることができるはず」

ところがどっこい。いつの間にやらブラント家は料理に傾倒していた。町々に潜み、隠れて料理をしていた一族は、アロイスの許可を得て独立し、表立って店を持つことが許された。アロイスの目論見は外れたが、ブラント家にとっての救世主であることには変わらない。

だから、恩があると言ったのね。

アロイスの話を聞きながら、カミラは厨房のギユンターを思い返す。もしかして、「町中の飯屋が動く」と言ったのもはったりではなく、事実なのか。ブラント家を動かすことができる、と。

ふむ、と頬に手を当て、カミラは息を吐く。どうやら興味が引けたらしい様子を見て、アロイスは安堵半分、満足半分に目を細めた。「ブラント家は準男爵ですが、他家はみんな男爵以上です。エンデ家とレルリヒ家が男爵。マヤ ハイム家は子爵。あまり血を合せない家柄なので、髪色も家独自に特徴があります。ブラント家は赤。エンデ家は金。レルリヒ家が明るい茶。マイヤーハイム家は栗毛色ですね。もちろん、例外もあります」

ふんふん、と頷きながら、カミラは屋敷の使用人たちを浮かべる。たしかに、使用人たちの大半はアロイスの言う髪色に分類ができる。特に、上級使用人たちにはほぼすべてが当てはまるだろう。割合でいうと、エンデ家の人間がかなり多い。次いでマイヤーハイム家。明るい茶色の髪をした人間は、ほぼ浮かばない。

いるとすれば。

いつも伸ばした背筋。カミラを見据えるとび色の目。憎しみを隠さない視線。きつちりと結んだ、白髪交じりの髪の色。深い皺を眉

間に刻んだ、一人の女の顔が浮かぶ。

「……となると、ゲルダはレルリヒ家の人間なんですね」

「はい。彼女は現在のレルリヒ家当主の姉でもあります。典型的なレルリヒ家の人間で、頭の回転が早く、政務に長けています。少し融通の利かなくて、固いところもありますが」

少しというには、カミラにはいささか異論がある。ゲルダは伝統と家柄に縛られた、がちがちの固形物だ。

カミラへの辛辣な態度は、伝統を重んじるモーントンの人間ゆえ。外部からの侵入者を疎んでいるせいだろう。血筋を守って近親婚を繰り返してきたくらいだ。いくら高位の貴族であろうが、領外の人間に対して良い顔はするまい。

でも、それにしても行き過ぎているわ。

他の使用人たちは、カミラを避けてこそこそ噂をする程度。だが、ゲルダは避けもせず、真正面から敵意をむき出しにする。本当に、『固い』という言葉で済ませられるものだろうか？

「興味がありますか？」

いぶかしむカミラを横目で見ながら、アロイスは広げた家系図をめくる。下から現れるのは、レルリヒ家の歴代当主と、その功績。細かい字がみっちり詰まった歴史書だ。慣れた様子で手繰りながら、アロイスはカミラに向けて微笑んだ。

「夜までお話ししますよ。なにぶん歴史が長いので、語ることは事欠きませんから」

ヒキガエル顔の肉に埋もれ、輝くアロイスの瞳を見ながら、カミラはそつと首を横に振った。

ごめん被る。

ごめん被れなかった。

カミラの拒絶もむなしく、その日からアロイスとの茶会は、勉強会へと変わってしまった。

モーション領には、領都を含めて五つの大きな町がある。

領地の南端に位置するのが、モーション領都。東のファルシュ。

西のブルーム。北のグレンツェ。そして、中央に位置するのがアイNSTとと呼ばれる町だ。これらの町を中心に、さらに細かい町や村、集落が広がっている。

五つの町にはそれぞれ、強い影響を誇る家がある。

領都は当然、モンテナハト家の力が強い。

ファルシュはエンデ家の拠点となる、魔法技術と研究が盛んな山間の町。

ブルームはレルリヒ家の庇護下の町。モーション領では最も穏やかな気候の町で、香水の名産地でも知られている。

グレンツェは、かつてのブランド家が支配していたが、今は面影もない。交易と魔石採掘で、十年足らずのうちにモーション第一の町にまで発展した。

アイNSTは、かつてのモーション第一の町だった。グレンツェと同様に魔石の採掘地として有名であり、マイヤーハイム家の主導の元、現在も盛んな採掘が行われている。

頭の中に地図を浮かべられるようになったのは、アロイスの教育のたまものだろうか。

ここひと月で、カミラは一生分の勉強をした気がする。

勤勉なアロイス様 と言ったのは、ゲルダであっただろうか。

癪であるが、まったくもって同意見だ。アロイスは勤勉すぎる。勉強をするのが、好きで仕方がないのだ。

その勤勉さを、もう少し外見を磨くことに向けてくれればよいのに。

などと恨み言を思いながら、気迫に負けてカミラは今日も、アロイスとの勉強会に参加していた。

窓から吹き込む風は冷たい。

いつの間にか冬を迎えたモンテナハト邸において、中庭でのお茶会は苦行に等しい。ゆえに、アロイスの私室にて茶会　もとい勉強会が開かれる。

モーントン領の始まりから現在に至るまで。アロイスの言葉通り、語ることはなくなかった。過去から順に語るため、なかなか現代まで時代が進まない。アロイスはできるだけ興味を引けるようにと、カミラの知ったことと絡めて話を進めてくれるが、何しろ覚える量が多すぎて、頭に入りきらなかった。

よくもそこまで記憶できるものだ。とカミラが愚痴交じりにこぼせば、アロイスはちよつと困ったように笑った。

「良い領主になれと、両親にきつく言われていましたから」
だから、領地について知らぬことがないようにと、学んできたのだ。

アロイスの両親はすでにない。遺言に従っているのだと思うと、たいそうな反発も気が引ける。

それに勉強会の間は、アロイスはカミラに教えることに夢中で、食べることをほとんど忘れている。間接的にアロイスの食事制限をできているのだと思えば、アロイスを色男にしたいカミラの思惑通りでもある。

と言えなくもないはずだ。

自分を誤魔化しながら、望まぬ勉強にいそしむカミラは、ふと吹き抜けた風の冷たさに顔を上げた。

しびれるほどに冷たい風だと思ったが、風が抜けた後も肌がしびれる。ピリピリとした感覚は、やけどをしたときと少し似ていた。

「……瘡気の風、一段と強くなりましたね」

しびれる頬に手を当て、カミラは渋い声で言った。

気候のせいだなんだと聞いていたが、ここ数か月、瘡気は一向に弱まる気配がない。それどころか、今では魔力のろくにならないカミラでさえ、瘡気を感じられるほどに強まっていた。

おかげさまでニコルは感情の揺れもなしに物を壊すし、他の魔力持ちたちの失態もしばしば見受けられるようになった。

なにより問題なのは、カミラの肌の傷みだった。瘡気に慣れないカミラは、モーション領出身の人間たちより、ずっと傷みややすいらしい。手入れに使う肌荒れ対策のクリームも、瘡気に対しては効きが悪く、ここしばらくのカミラの悩みの種であった。

こうなるともはや、アロイスの顔を気にしてはいられない。まずは自分が第一だ。

自分が荒れた肌を晒しながら、アロイスに偉そうなことを言えるものか。というのがカミラの考えだ。ひとまずは化粧で隠した吹き出物を、どうにかして治すのが最優先である。

などというカミラの内心を、アロイスは知らない。

「そうですね。早々に収まると思っていましたが、少し長引き過ぎです」

渋い声のカミラに対し、まじめに答えるアロイスの表情も渋い。彼の場合は、決してカミラのように自分の肌を気にしてのことではない。

「採掘地の方で、なにか起こっているのかもしれませんが。グレンツェとアインストでは、今は魔石採掘を中止し、魔石の鉱脈には近づ

かないようにと指示を出しています。周辺の小さな採掘町も含めて、じきに避難させる必要があるでしょうね」

魔石の鉱脈。と聞いて、勉強漬けのカミラの頭には、すぐにモーショントンの代表的な二鉱脈が浮かんでくる。

一つは、グレンツエの魔石鉱脈だ。グレンツエの鉱脈は沼地の底にある。沼のある場所がすなわち魔石の取れる場所であるため、はたから見えてわかりやすい。

もう一つは、アインストの魔石鉱脈。こちらもグレンツエと同様、沼の底に鉱脈があった。しかし、アインストはグレンツエと異なり、過去に採掘のため、いくつかの沼地を枯らしてしまっていた。こうなってしまうと、今では見た目だけで判断が付かない。過去の記録や現在の沼地の配置から、鉱脈の位置を推定するしかなかった。

「魔石が新たに作られるとき、瘴気の噴出が強くなります。瘴気から魔石が形成される際に、魔石と成れなかった瘴気があぶれて外に噴き出すのだというのが通説です。そういう瘴気は恐ろしく濃く、魔力を帯びた危険なものです。うかつに触れれば、暴発してしまうかもしれません」

大昔の魔石採掘では、多くの人間が死んだとカミラは聞いている。魔石のある所は、魔力の渦巻く場所でもある。魔力と魔力のぶつかり合いは、だいたいが危険な結果をもたらす。魔石同士の魔力であつたり、魔石に成れない瘴気の持つ魔力であつたり、あるいは人間自身の魔力であつたり。その力が触れ合い、爆発、周囲を巻き込んだでの死亡事故は、枚挙にいとまがない。

現在は、かつてほど瘴気の噴出も強くはなく、鉱脈もおおよそ特定がされている。魔石の採掘は魔力持ちを先導に、魔力の揺れを見ながら行うおかげで、事故も減った。それでも、完全になくすることはできていない。

「魔石は便利ですが、同時に危険なものでもありますから。

何事も起こらないと良いんですけれど」

吹き込む風に目を細め、アロイスは憂いを帯びた言葉を吐く。

彼の視線の先には、空を埋め尽くす曇り雲と、瘴気の立ち込める沼地が果てしなく広がっていた。

「グレンツェで災害ですって!？」

昼を過ぎたアロイスの執務室。突然告げられた言葉を、カミラは思わず繰り返した。

アロイスは忙しそうに資料をめくりながら、カミラを一瞥する。
「正しくは、グレンツェとアインストの間になります。ちょうど、二つの鉱脈の交点。どちらが被害の中心かはわかっていません」

アロイスの机に広げられているのは、早馬で知らされた被害の状況らしい。荒い字で書かれたその中身を読み取ることはできないが、ただ事ではないらしいとはカミラにもわかった。

災害が起きたのは、昨日の朝。同時刻、屋敷を揺らす地震に、驚いて目を覚ましたことをカミラは覚えている。一瞬、「アロイスかな?」と思いもしたが、その後の屋敷の慌ただしさから、ただ事ではないと気付いていた。

地震と共に、瞬間的に吹き抜けた瘴気の風から、アロイスはすぐに採掘地に向けて馬を出したらしい。それから丸一日。帰ってきた報告を、渋い顔でアロイスは見つめている。

「やはり、鉱脈内での魔石の暴発だったようです。ですが、まだ瘴気は消えていません。この後も被害が出る恐れがあります」

「暴発って……どんなものだったんですか!? グレンツェの町は!?! 孤児院は!?!」

「詳しいことはまだわかりません。ただ、ざっと見た限りですと、そこまで被害は出ていないようです。採掘地の崩落と、家屋の倒壊。数人の軽い怪我程度だと」

アロイスの言葉に、カミラは安堵半分、不安半分に息を吐く。家屋の倒壊、怪我。カミラの見知った人々が巻き込まれていないとは

限らない。

孤児院の老女と、生意気な顔ぶれ。腹の立つ侍女たちまで。なにもかも無事だろうか。

視線を落とすカミラに、アロイスは続けた。

「もう少し詳しい状況を見てから、私も慰問を兼ねて様子見に行きます。事故の発生現場も調べなければなりません。どちらの鉱脈が災害を起こしたのか見つけておく必要がありますから」

アロイスの魔力は、こういう時に役に立つ。

もともと、魔石の鉱脈探しは、強い魔力を持つ者の役割だ。魔力同士が感応するおかげで、瘴気の揺らぎや魔石のありかを探り当てることができる。

そのことを利用すれば、特に強く魔力や瘴気の渦巻く場所を特定することができる。昔から、魔石採掘のさなかに地下に誰かが閉じ込められた場合は、地下で魔石を割るのが定石だった。魔石を割ってあふれた魔力を、地上の魔力持ちが察知できるからだ。

逆に、地上の魔力持ちが魔法を放つことで、地下の人間たちを誘導することもできる。魔石採掘には、必ず二人。地上と地下に魔力持ちを配置するのが鉄則だ。

今回は、地中の人探しではなく、事故現場の特定だ。しかし、やることは変わらない。いまだ消えない瘴気の発生源を調べ、危険な場所を見つけ出さなくてはならない。

特に今回は、グレンツェとアインストの鉱脈の交わる場所で起きた事故。交わる二種の瘴気から、異常のある方がどちらかを見極める必要がある。

調査にあたって、魔力は強ければ強いほど良いのは当然のこと。それに加えて、瘴気の濃い場所においても乱れず、力を操ることのできる人間でなくてはならない。

適任であるのは、モーントン屈指の魔力持ちであるアロイスに他

ならなかった。

「出立は次の報告が戻ってきてから。あと数日後になるでしょう。出立した後は、しばらくは戻れないかもしれません。不便をおかけするかもしれませんが、カミラさんは留守の間を」

お願いします。というより先に、カミラは声を上げた。

「私も行きます！」

「……話を聞かれましたか？」

アロイスは胡乱な視線を返す。呆れやら苦々しさやらが入り混じり、言葉にしがたい渋い顔が出来上がっていた。

「被害は軽微とはいえ、まだ瘴気が残っていて、危険だと言いましたでしょう」

「聞いています。でも、アロイス様だつて行くのですしょう」

「私は調査と慰問のために行くのです。遊びに行くわけではありませんせん」

「私だつて、遊びに行くつもりじゃありません！」

アロイスの言い草に、思わずカミラは強く言い返す。カミラだつて、能天気になだ物見遊山に行こうというつもりではない。そのくらいはわかつているつもりだ。

「グレンツェは、私も知った町です。邪魔だてしようというつもりはありません。それに慰問というからには、立场上、私が行ってもおかしくはないはずじゃないですか！」

不本意ながら、カミラはいずれアロイスの妻になるとされる立場。夫婦そろつての被災地訪問は、珍しくない話である。

それにたいていは、夫婦での訪問の方が、土地の人間に対して心象が良い。それも、できるだけ早く。その方が、夫婦で駆けつけるほどに大事な土地であると思わせることができるためだ。

もちろん、大災害の時はまた話は別だ。ドレスを着た夫人は足手まといになるし、一人歓待するだけでも重荷だろう。そういう場合

は、少し落ち着いてから慰問をすることになる。

しかし、アロイスの話を聞くからには、被害はさほど大きくはないという。ならばカミラが行っても問題はない。むしろ喜ばれる話のほず。

そう思うカミラに対し、アロイスは渋い顔を崩さず首を横に振る。「行き先はグレンツェだけではありません。グレンツェの前に必ずアインストを寄ることになります」

グレンツェは北端。領都は南端にある。領土の中央にあるのはアインスト。地図上、二つの町を訪ねる際は、アインストが先、グレンツェが後になる。

だが、アインストが先になる理由はそれだけではない。

「カミラさんがグレンツェを尋ねるのでしたら、アインストも行かなくてはなりません。それも、必ずアインストが先です。さもなければ、アインストの老人たちは納得がしないでしょう」

アロイスは、苦々しさにさらに険しさを乗せて、カエルめいた顔をしかめた。

アインストは、モントン領第二の都市。

そして、かつての第一の都市。

マイヤーハイム家の影響下にある、歴史と伝統の根付いた町は、一言でいえば実に「ややこしい」。

魔石の採掘地としては、グレンツェよりも優れている。

町は禁欲的で、グレンツェのような荒っぱさはまるでない。かつて罪人の流刑地であった風習を踏襲し、大きな町だが祭りの類は一切ない。酒場もない。食堂はひっそりしていて、客たちは声を潜めて食事をする。服は色づいたものを禁じ、鮮やかな花も咲かない。

ただ採掘をし、ただ魔石を売るだけの町。それだけ愚直な町を築き上げておきながら、奔放なグレンツェに第一の座を奪われた。

そのことを、町の重鎮たちは快く思っていない。

グレンツェと取引をする商人。グレンツェの気風である、酒と騒ぎと喧嘩。グレンツェを発展させたアロイスのこと。すべてに眉をひそめていた。

だが、採掘地として無視はできない程度に、大きな町でもあった。モントン領は、結局は魔石採掘で成り立つ土地なのだ。アインストがへそを曲げれば、採掘量は半分以下になる。その時の打撃は計り知れない。

それに、アインストは、小さな町々にも影響を持っている。マイヤーハイム家とのつながりも深い。町の重鎮たちのほとんどは、彼らの息がかかっているといっているだろう。そうなると、うかつなことをすれば、マイヤーハイム家との仲をこじらせるはめにもなるのだ。

アインストはグレンツェに対し、劣等感と優越感を併せ持っている。

モンテナハト家は、アインストの方を重視しているのだ。グレンツェは、収益で第一となっても、あくまで領主に寄り添っているのはアインストの方なのだ、と。

だから、まかり間違っても、グレンツェを先に訪問してはいけない。グレンツェにのみカミラを行かせてはいけない。必ずアインストにも同じことを、グレンツェよりも先に行つてやらなければならなかった。

「アインストは閉塞的な町です。私に対しても良い印象を抱いてはくれいていません。カミラさんは、不快な思いをされるかもしれませ

んよ」

「そんなの！」

神妙に告げるアロイスに、カミラは迷いなく首を横に振った。今さらである。

「不快だからやめるなんて言うとお思いですか！」

不快でもともと。今まで、どれだけ不快な思いをさせられてきたことか。

だからって、嫌だ嫌だと逃げたって、なにも解決にはならない。そもそも、「アインストに行くのが嫌だから、グレンツェの慰問も行きません」などという考えが、カミラの頭に浮かぶはずがないのだ。

アインストなんて、このままカミラが結婚することになれば、いずれは付き合わなければならぬ相手。だいたい、この手合いは行っても行かなくても文句を言うに決まっている。

それに。

内心で、カミラは呟く。思い返すのは、料理人ギュンターとのやり取りだった。

アロイスはグレンツェを發展させたことで、大反発にあったという。アインストは、グレンツェの發展で割を食った町。アロイスに良い印象を抱いていないとなると、十年近い歳月が過ぎてもなおくすぶり続けていることになる。

きっとアロイスに向けられる視線は冷たいだろう。おそらくは、カミラが受けたもの以上に。

「アロイス様だって、不快な思いをされるのに訪問されるんではしょう？」

カミラの言葉に、アロイスは笑うでもなく口を曲げた。自嘲という表情が一番近いだろうか。吐き出すように彼は言った。

「……私は領主ですから」

「だったら、それを支えるのが私の役目です！」

カミラはアロイスを飲み込む声量で、断固とした言葉を返す。
アロイスが瞬く前で、カミラは腰に手を当てて胸を張り、ふん、と息を吐き出した。

それに。カミラはギョウターに大見栄を切ってしまったのだ。
アロイスが一人でいたときに、お前はなにをしていたのか、と。

まさか自分で言うておいて、アロイスを一人放り出すなど。
そんなこと、カミラの自尊心が許すはずがない。

大きな一つの沼を中心に、いくつもの小さな沼が広がるモーントン中央部。この沼のほぼすべてから瘴気が沸くと言われており、沼の表面は常にぼこぼこ泡立っていた。

沼は深く、よどんだ緑色をしていた。瘴気の強い沼地には、普通の草は生えないが、代わりに魔力を帯びた毒草が茂る。毒草の陰には、毒に強い泥色のヒキガエルがそこかしこに跳ねているのが見えるだろう。

この光景こそが、領外の人間が思い浮かべる代表的なモーントン領の姿であり、『沼地のヒキガエル』すなわち、アロイスの不名誉なあだ名の由来でもあった。

沼の周囲は湿地となっており、常に地面がぬかるみ、苔むしている。

山谷はなく、土地はひたすらに平坦だ。いくつもの浅い川が土地を横断して、湿地の形成に寄与している。地面にはところどころ亀裂が走り、川の水が地下へと流れ込んでいた。

アインストは、中心となる大きな沼地の一部を埋め立ててつくられた町だ。沼を仕切り、流れ込む水を断ち、乾燥した上に家を建てる。そうして出来上がった町は、楕円型の沼をかじり取ったような、奇妙な形をしていた。

町に並ぶのは、泥からできた土づくりの家々だ。四角四面な家には個性がなく、よそ者には見分けるすべもない。

大通りには声がなく、子供たちは騒がず、女たちはおしゃべりをしていない。沼地へ採掘に向かった男たちは、兵士のように統率の取れた動きで沼を掘り、地下を掘り、魔石を掘みだす。

それだけ生活を、この町は百年、二百年と続けてきた。

一見して厳格、生真面目。感情のない古い町。

だが、そこにも人の心はあり、誇りがあり、陰湿な楽しみがある。

異様だわ。

カミラはアインストの町を眺め、眉をしかめた。

空は暗い曇り空。瘴気は領都よりもいつそう強く、肌に触れる空気が痛い。石の家々に吹く風は冷たく、冬をより寒いものへと変えていた。

カミラが滞在しているのは、アインストにあるモンテナハト家の別邸。大通りに面した石の屋敷だった。要するに、アロイスはカミラに根負けしたわけである。

アインストで被災した人々を訪ねた後は、グレンツェへ向かう。グレンツェへ行ったあと、少し戻って魔石の鉱脈を探索する。ここで数日、あるいは数十日。アロイスの魔力を頼りに、災害に原因を探る予定だった。

そのアロイスは、今は町の重鎮たちからの挨拶を受けていた。部屋に通されるよりも早く、何人もの相手をさせられているのも、一種の慰めな嫌がらせのように思えてならない。

災害からは、すでに数日が過ぎている。見る限り、すでに被害の痕跡はない。

どうにも話を聞く限り、現場は鉱脈ではあるが採掘地ではなく、人の立ち入りのない森であつたらしい。魔力の暴発というが、起ったこと自体も地下での爆発と、それに伴う地震。それに、強い瘴気の噴出のみ。現場近くは木々が倒れたり、獣が巻き込まれたりと

なかなか凄惨だったらしいが、人の住む町までは距離があり、被害らしい被害は少ない。せいぜい地震で近隣の家が一棟倒壊し、瘴気の噴出で魔力持ちが数人、体調を崩した程度だったという。

大騒ぎした割には、なにやら呆気ない。しかしまあ、被害がないのは良いことだ。この調子では、グレンツェの方もたいしたことはないだろう。それだけは安堵できる。

しかし、それ以外は最悪だ。

「奥様！　ここの人たち、本当に無礼です！」

腹を立てているのは、カミラの侍女であるニコルだ。彼女はカミラの髪を梳かしながら、堪えきれないように言った。

「奥様が同行されることなんてとくに伝わっているはずなのに、『突然のことでお迎えのご用意ができていなかった』ですって！　それで、こんな粗末な部屋に通すなんて！」

日当たりの悪い北向きの客間。別邸にある客間の中では、最も質の悪い部屋だ。他の部屋は準備ができていないから、どうしてもここへ通されたとき、カミラ以上にニコルが腹を立てた。

「『まさか本当に来るとは思わなかった』なんて言っていましたよ！　もう！」

「いたたたた！！」

怒り任せのニコルの櫛は、カミラの髪を必要以上に強く引っ張る。せつかく近頃は上手になってきたというのに、まだまだ修行が足りていない。

「しかも！　この部屋だってきれいなんてしてないじゃないですか！」

痛みを訴えるカミラにも気が付かず、ニコルは荒い息を吐きながら言った。

ニコルの言う通り、部屋は見える限り手入れをした形跡がない。長い間使われていないらしく、ほこりと黴のにおいがする。どうか部屋の体裁だけでも整えたのか、ベッドだけはまだ使えそうだ。

しかしそれも、決して質の良いものではない。

冷遇されているのは明白だった。普段のカミラなら、一人で盛大に腹を立て、八つ当たり枕でも投げつけているところだ。

だが、今のカミラは違う。

「モンテナハト家の奥方にこんな態度！ 許せませ

ああっ

！！」

ニコルの悲鳴と共に、手に持っていた櫛が破裂した。木製の櫛が粉々に砕け、ニコルの手の中から破片がぼろぼろと零れ落ちていく。ニコルの不安定な魔力が、またしても暴発したのだ。

魔力の強いニコルは、瘴気の影響を受けやすい。濃い瘴気の前では、魔力が不安定になり、ちよつとしたことで揺らいでしまう。

ちよつとしたこととは、体調だったり体力だったり、あるいは感情だったりする。

怒り心頭に達したニコルに魔力の統制などできず、哀れな櫛が粉になったのだ。

ちなみにこれで三本目である。

「ニコル！ なにやってんのようもう！」

「はい！ すみません！」

「なんにでも腹を立てない！ 我慢しなさい、我慢！ 魔力制御も仕事の一環よ！」

自分のことを棚に上げ、カミラはニコルを叱りつけた。カミラ自身、今までさんざん腹を立ててきた身ではあるが、それとこれとは話が別だ。カミラは腹を立てても魔力が暴発することはなかったし、だいたい、自分ができないからって他人に許していたら、カミラが叱れるものなんて何一つなくなってしまう。

それになにより、今のカミラは、ニコルを叱れるだけの態度を示せていた。

たしかに腹は立つ。

いかにも「お前はなにしに来たのだ」という態度で出迎えられたとき。馬車から荷物を下すとき、アインストの下男が「予定にない仕事だから」と一切手を貸さなかったとき。侍女たちがカミラを避けて逃げるとき。この日当たりの悪い部屋に通されたとき。

カミラはおそらく、ニコル以上に腹が立った。そもそも短気なカミラだ。アインストのこの態度だけで、普段ならどれほど怒鳴っているかわからない。「全員クビだ」と吐き捨てて、アロイスにあることないこと告げ口していたことだろう。

だが、そんな苛立ちも、ニコルが先に怒り出すせいで、どうにも消化不良が否めない。ニコルが怒れば魔力が暴発。暴発すれば物が壊れる。ニコルを止める人間が自分しかいないとなれば、カミラは怒りをさておいて、ニコルを宥めるほかにない。

そんなこんなで、アインストに来てから、カミラはすっかりニコルの静止役となっていた。

しょんぼりと落ち込み、ニコルは砕けた櫛を片付ける。箒を手、床を掃くニコルを見ながら、カミラは眉間にしわを寄せた。

人選を誤ったわ。

瘴気が強いとわかっていて、ニコルを連れてきたのは失敗だったか。

だけど、カミラにはニコルの他に信頼できる侍女がない。領都からニコル以外の侍女を連れて行くとは、思いもしなかった。アインストの侍女たちも、この調子だとろくに働きもしないだろう。問題を起こすニコルと、問題はないが態度の悪い他の侍女たち。どっちがましか。

ニコルがいた方が、気は紛れるわね。

アインストでのカミラの扱いは、グレンツェよりも下手したら悪いかもれない。なのに、ニコルが大騒ぎするおかげで、くすぶるような怒りや苛立ちを、いつの間にか忘れてしまうことがある。それはいささか不本意で、気持ちとしては少し楽。そしておそらくは、まあ、悪いことじゃない。

だろうか？

「すつ、すみません！」

思考を破るニコルの謝罪と、ぱきんと乾いた破裂音が響く。

今度は落ち込みから、筭が犠牲になっただけらしい。

ニコルの手の中。砕けたほっきの破片を見て、カミラはため息をついた。

とはいえ、物事には限度というものはある。

「私はここに残れですって!？」

アインスト滞在二日目。

これから慰問に行こうとしていたカミラは、入り口に立ちほだかる使用人に向けて叫んだ。

アロイスとその従者は、すでに先に出ている。下見がいるだとか、訪問先に話を付けておく必要があるだとか、なにかと理由を付けられて、先に行かざるを得なかったのだ。

去り際、アロイスがどうにも不審そうな顔をしていたことを思い出す。「私は先に行きますが、どうか無茶はしないでください」などと言っていたのは、つまりはそう。アロイスにはわかっていただ。

腹は立てず、落ち着いて行動をするように。なにかあつたら人を寄越すように。もし瘴気の様子がおかしければ、町を離れて森の方へ向かうように。などと、よくも言えたものだ。出立前のごみごみしたアロイスの忠告は、今のカミラの状態を予期してのものだったのだ。

わかってたのなら、一緒に連れて行きなさいよ!!

それか、せめて一言でも警告を残しておいてくれれば、こんな土壇場にも対応できたかもしれないのに。どうにもアロイスは、他人に対して壁があるというか、距離を置くというか。ここぞというところで内心を隠す節がある。

しかし、アロイスへの怒りはいったん横だ。目の前にいる二人の

男性使用人と、中央に立つ老婆が、今一番の邪魔者である。

「私は慰問のために来たのよ！？　ここに残ったら来た意味がないじゃない！」

「あなたが訪れたところで、町の人間はあなたのことを知りません」
老婆が一人、しっかりとした声で言う。腰は曲がり、杖をついてはいるが、気はしっかりとしているらしい。皺だらけの顔には厳格さがあり、白髪は几帳面にまるく結ばれていた。

彼女は、町の重鎮の一人。町長の相談役であるマルタだ。マイヤーハイム家当主の義妹にあたり、モンテナハト家の家令・ウィルマーの伯母でもある。

「グレンツェの人間ならばあなたを知っているかもしれませんが。しかし、あなたがこのアインストを訪れたのは初めてのこと。顔も知らない女がいきなり現れても、町の人間は困惑するだけです」

「私がグレンツェに行ったことが不満なの！？」

そんなの、あんまりにも狭量すぎる。信じられない気持ちでカミラが睨むが、マルタは顔色一つ変えなかった。

「いいえ、私はただ、事実と町の者の心情をお話しているだけ」
マルタの口調は、淡々として抑揚がない。両脇に立つ男は、二人のやり取りにも無反応だ。まるで、人形でも相手をしている気分になる。

そのくせ、カミラに対する不快感だけは明確だから腹が立つ。

「我々はあなたの人となりを知りません。知っているのは、あなたが王都を追放されたことと、その経緯のみ。ユリアン殿下とリーゼロッテ嬢の恋の悪役であるあなたが見舞いに来たとしても、町の者は不信感しか抱きません」

「　　なんですって」

「あくまで、町の人間から見たあなたのお立場のお話です。私が思ったことではありません。しかし町の人間にとって、あなたは紛れもない悪女。リーゼロッテ嬢を虐めた女であり、王都を追放された悪人であり、女性に不慣れなアロイス様に取り入った狡猾な女です」

カミラは絶句した。あまりに真正面からぶつけられた悪意にわななく。不快な思いは覚悟のうえで来たが、それで腹を立てないかどうかは別問題だ。頭に血がのぼり、罵倒の言葉しか浮かばない。なんて狭量、なんて頑な、なんて命知らずで、なんて無礼な。

「無礼者！」

カミラが怒鳴るより先に、しかし高い声が割り込んでくる。カミラの背後から飛び出し、マルタにそう叫んだのは、控えていたニコルだ。彼女はそのまま、マルタに掴みかかるうとでもいうように足を踏み出し、手を伸ばす。

「モンテナハト家の奥方様に、よくもそんなことを

」

だが、その手はマルタの左右に控えていた使用人に掴まれる。無遠慮な力にニコルは顔をしかめ、微かにうめき声を上げる。

「野蛮な真似は、この町ではお控えください」

「ニコルを離さない！」

「承知しました」

カミラの怒鳴り声に、使用人の男は素直に従った。ためらいなくニコルを離すと、また元の立ち位置に戻っていく。その無機質な行動とは対極に、カミラの頭は熱を持つ。

突然の解放に、よろめくニコルを抱きとめながら、カミラは声を上げた。

「あんたたち、こんなことをして許されると思っているの!？」

腰の曲がった、皺だらけの老いぼれマルタ。体格の良い左右の使用人。マルタの髪の色は白。使用人二人は、マイヤーハイム家特有の栗毛色。二人とも無表情。右の男は少し背が高く、左は目元にくろがある。肌が白く滑らかなだけに、仮面めいて見えた。

三人の容姿を、カミラは目に焼き付ける。あとで必ず、アロイスに言いつけてやる。やられたことは、カミラは忘れないのだ。

「町の相談役風情が、ただじゃ済まさないわ! あんたたち、まとめて処分してやるんだから!」

「首をはねますか」

憤るカミラに、そう告げたのは当のマルタ自身だ。急に聞こえた物騒な言葉に、カミラは目をむいた。

小さなマルタは、杖に体を預けながら、カミラを見据えた。

「町の人間の意見を述べたにすぎなくとも、気が済まないのであれば致し方ありません。老いぼれの首くらい差し出しましょう。ええ、町の心情を伝えただけの私が、私の意思なく伝達の役目を負った私が許せないのであれば」

狭量である。とマルタは言葉にはせずに告げている。アインストが狭量である、と暗に非難したカミラへの、意趣返しだ。この底意地の悪さに、カミラは背筋がぞわぞわした。

「私の首をはねたところで、町の人間はあなたへの恐怖を増やすだけでしょう。私の口を閉じたところで、町の人間の感情は変わりません。この屋敷に働く者たちも、みんな同じ気持ちです」

マルタがくい、と顔を上げる。つられて背後を振り向けば、カミラは様子を伺う無数の目の存在に気が付いた。

廊下の奥、柱の影、扉の向こう。使用人たちが息をひそめ、マルタとカミラのやり取りを見守っている。

誰もなにも言わない。誰も身じろぎ一つしない。ある種の統率が感じられる。カミラに向かう視線は野次馬めいたものではなく、かといって敵意や憎しみでもない。淡々と、観察しているといった風だった。

寒気がした。

異様だわ……！

「あなたが噂通り恐ろしい人であれば、私を処分すればよいでしょう。そうして、慰問に行くのであれば、私は抵抗いたしません。血まみれの手で、町の者をお見舞いください」

「この………！」

話の飛躍が過ぎる。物騒すぎる。思うところは無数にある。

だけどカミラは、この老婆一人を処分したところで、無意味であることも察してしまった。

マルタがいなくなったところで、他の誰かが代わりをするだけだ。この屋敷の使用人は　あるいはもしかして、この町の住人すべては、誰もが訓練された兵のようなもの。恐れを知らず、命じられるがままに立ちはだかるのだ。

不気味で不愉快。気持ちが悪いけれど、とても勝てない。カミラが怒鳴っても、脅しても、なんなら本当に首をはねたとしても。彼らはこの場を引きはしないだろう。

マルタの言葉は、死んでもどかないという、カミラへの脅しなのだ。

「……………部屋に戻るわ」

両手を握りしめ、悔しさを噛むと、カミラは低い声でそう言った。「ご理解いただけて光栄です」

マルタは抑揚なく言って、会釈をする。左右の使用人は、どちらも最後まで表情を変えなかった。

「お部屋までご案内します」

経緯を見守っていた侍女の一人が、前へ進み出てカミラを導いた。彼女に従いついていくのは、ひどく癪だった。

あの老婆はなんなのか。

あの態度は誰の差し金か。

どうしてこんな無礼な態度が取れるのか。

案内をする侍女にさんざん文句を言っても、彼女は「存じ上げません」としか言わなかった。

彼女もまた、人形のようなと思った。栗毛色の髪に、仮面めいた無表情。頬は白く陶器のよう。細面な印象は、先ほどの二人の使用人のうち、左側に少し似ている。目元に同じほくろがあるのも同じ。兄妹だろうか。

侍女はカミラを部屋の前まで案内すると、無感情に頭を下げ、去っていった。

「ああ、悔しい　　!!」

「もう!　もう!!　悔しいです!!」

アインストの客室。侍女が去り、人の気配もなくなると、カミラとニコルはどちらともなく声を上げた。

「飛躍し過ぎなのよ!　　なによ、死ぬ死ぬって!　いつの時代の間よ!!」

「あんな態度ってあります!?　　仮にもモンテナハト家の奥様に!　　!」

「仮にもってなによ!?」

ニコルがすっかり漏らした言葉に、カミラが目を剥く。しかし、そんなことも気にならないくらい、ニコルは腹を立てているらしい。

「マイヤーハイム家って、ああいうところあるんですよ！ 死ねば満足だろって感じの！！」

マイヤーハイム家は武人の家系だ。それが、このモントンの風土と相まって、酷く時代遅れめいた性質を培ってしまっている。無個性な街並みも、無機質な生活も、無表情な人々も、ある種統率の取れた兵のように思われる。

一つの目的があり、一つの頭があり、それに従う人々は、感情を切り捨てる。一人がいなくなれば、代わりに他の誰かが入る。あの老婆にも代わりがいれば、あの侍女にも代わりがいる。

いえ。

内心で抱いた印象を、カミラは無意識に否定する。少し違う。あの老婆は、『底意地の悪い』意趣返しをしてきたのだ。感情がないわけではない。カミラに対して腹を立てるし、意地悪をしてやろうと思うだけの心がある。

「奥様、ずっとこんな扱いを受けていらっしやるんですか！？」

瞬間の思考は、ニコルの収まらない怒りに消える。水を向けられたカミラは、とんでもないと首を振った。

「ここまでのはないわ！ この町は異常すぎるわよ！」

グレンツェだって、直接的にカミラに嫌がらせをしたわけではない。領都では一度ひどい目に遭ったが、あれはきつちり処分したから良し。となると、せいぜいゲルダ一人くらいだ。

「町ぐるみのいやがらせってなに！？ こんな許されないわよ！ 絶対に後悔させてやるわ！！」

とはいえ、アインストは憎らしくもモントンの主要都市。反発する人間を処断していても、町の人間の不信感を買うただけだろうし、町ぐるみでこの態度では、いずれ住人全員を処断する羽目になりかねない。

数百年の間に凝り固まった町の人心を、ころりと変えること難しいだろう。既成概念を壊すためには、いったいなにをすればいい？ 一人二人をどうにかしても変わらない。もっと派手に、一気に、

ぶち壊してやらないと。

無理だなんて、絶対に思わないわ！

「あいつら全員、『カミラ様』って呼ばせて、頭下げさせてやるんだから　　！！」

「その通りです！！　目に物見せてやりましょう！　おー！」

ニコルが両手を握りしめ、そう言った瞬間。彼女の近くの花瓶が割れた。

「こら　　！！」

「はい！　すみません！！」

今日もニコルの魔力は不安定だ。

ニコルは一人、しよげた様子で花瓶の跡を片付ける。

盛り上がりの後始末は、一抹の虚無感があった。

「あなたって、怒るとあんな感じなのね」

ひとしきり騒ぎ終え、妙に冷静になったカミラは、ニコルを眺めながらそう言った。

少し前までのニコルは、虐げられても我慢をする人間だった。一人で溜め込み、すぐに自分が悪いと頭を下げ、言い訳もろくにしない。どちらかといえばおとなしく、内向的な性格をしていると思っていた。

あんな普通に、当たり前前に怒ることが、カミラにはちょっと意外だった。

「……はしたないところをお見せしました」

当のニコルは、ばつが悪そうである。魔力の放出と共に怒りも落ち着いたのか、いつも通りのニコルに戻っている。

「悪いって言ってるわけじゃないわよ。あんなの、腹を立てて当たり前だわ」

相手だって、怒らせようと思ってやっていたことだ。あんな態度を前にして、穏やかな心地でいられるのは、よほどの人格者でもなければありえない。

アロイス様は、こんな連中を相手にしていたのね。

相談役一人を相手にしてこれだ。何人も相手となると、想像するだけでうんざりする。カミラであれば、怒りの休まる暇はなく、切れる血管も一本や二本では済まないだろう。

こんな調子なら、心折れる気持ちもわかる。カミラとしては絶対に折れるつもりはないし、相手の方をへし折ってやる気で満ちているが、そうではない人間がいることも知っている。

アロイスはたぶん、カミラのような心の持ち方はできないのだろう。一人、悩みを告げる相手もいなければなおさらだ。

ため息をついたところで、窓から冷たい風が吹く。瘴気の濃い風に顔をしかめれば、ニコルが、慌てたように顔を上げた。

「窓をお閉めますか？ 風が強くなってきたようです」

「大丈夫よ、このくらい」

「でも、瘴気もずいぶん強くなってきたようですし、奥様のお肌が」

言いかけたニコルが、ふと言葉を切る。どうしたのかと尋ねるより先に、ひととき強い風が吹いた。

肌を焼くような、瘴気の風だ。

「奥様、様子が変です。瘴気が」

ニコルの言葉は、最後まででは聞こえない。

重たく響く爆発音が、続くニコルの言葉をさえぎったせいで、どおんと響く重低音は、その音だけで町全体を揺さぶった。

地面が揺れる。屋敷が揺れる。

カミラの足元も揺れる。立っていられず、尻から倒れたカミラは、窓の外に見た。

どこからかあふれ出す、濃すぎる瘴気が靄のように渦を巻き、町を覆い尽くす様子を。

なにかあったときは、森へ逃げるようにとアロイスは言っていた。理由は町の構造にある。

アインストの町は、一つの大きな沼地を埋め立ててつくられた。沼地の一部をかじるようにして、採掘地と隣り合わせになっている。埋め立てた沼地も、元は魔石の採掘地。採掘の終わった土地に家を建てたのがアインストの始まりだ。

だから、町の地下には魔石の鉱脈が走っている。すでに瘴気の消えた、枯れた鉱脈といわれているが、鉱脈は繋がっているものだ。隣には、生きた採掘地がある。

一方で、木々の生い茂る森は、町の外側にある。森には領都でも見たような広葉樹が生え、アインストでは数少ない動物や虫が暮らしていた。

一面の湿地であるアインスト一帯において、この森は一つの目安になる。

そこだけ、地面が乾いているのだ。

木々が根ざすだけの、しっかりとした土台がある。毒草ではなく、ヒキガエルでもなく、木々が茂り、生き物が暮らしていることは、瘴気に侵されていない証になる。

ただの湿地と、瘴気の湧く沼地。二つの境目はあいまいだ。沼地と繋がっているかもしれない湿地へ逃げるよりは、森へ逃げ込んだ方が危険は少ないとみていたのだ。

それは、アインストの人間も知っているはずだった。
まだ事故が起こる前に、アロイスが避難するように指示を出して
いたはずなのだから。

どおん、という音は、立て続けに聞こえた。最初の一度目は大きく、それから徐々に小さくなる。しかし、そのたびに地面が揺れ、瘴気はますます濃くなっていく。

町の外では、驚いた人々が家々から飛び出していた。無数の戸惑いとざわめきの中で、誰かが叫ぶ。

「魔石暴発だ！ 音が近い！！ 逃げる！！」

小刻みな揺れと、地下から響く重たい爆発音をかき消すように、その声は響いた。

「地下で暴発が連鎖している！！ 崩れるぞ！！」

堰を切ったように悲鳴が上がる。

収まらない揺れの中、逃げ出す女子供たちの姿を、屋敷から飛び出したカミラは見た。

石畳の引かれた大通り。等間隔な横道。整然と立つ幾何学的な家々。その整然さを、逃げ惑う人々が壊す。

大地の揺れと悲鳴にあふれた町では、言葉さえもろくにかかせない。瘴気は霧のように視界を奪い、人々の顔もわからない。

中年の女は声を張り上げ、子供たちを誘導する。足腰の立たない老人たちが、少し遅れてついて行く。誰かが転び、子供が迷い、鳴き声が響く。

おぼろな視界の中で見えるのは、老人か女子供ばかりだ。こんな

時に役に立ちそうな男衆の姿は見えない。なぜか、と思う間も与えず、また地面が揺れる。

「家から出る！ 広場へ向かえ！ ひらけた場所へ行くんだ！！」
数少ない若い男 カミラの前に立ちはだかった使用人の一人が、声を張り上げた。カミラが外へ飛び出たのと同じくして、屋敷の中から次々と使用人たちが逃げ出てくる。

マルタもまた、杖に縋りつきながら出てくる。おぼつかない彼女の足取りを支えるように、傍にもう一人の使用人の男が付いていた。彼らもまた、誘導される先に向かおうとしているようだ。大通りの先にある、町の中心部。蜘蛛の巣のように規則正しく伸びた道の交点へ。

広場？

怯え、困惑し、ばらばらに逃げていた人々の流れが、徐々に一つに定まっていく。悲鳴を上げながら、みんな同じ方向に逃げていく。
「カミラ様！ 私たちも逃げましょう！」
ニコルがカミラの袖を引き、人々の流れに加わろうとする。だけど、カミラは瞬間ためらった。行っているのだろうか。

だって、広場は町の中心部よ。

「……アロイス様は、森へ逃げると言ったわ」
屋敷の前で立ち止り、カミラがぼつりとつぶやく。その声をかき消すように、背後から誰かがカミラに怒鳴りつける。

「どいて！！」

ぐい、とカミラを押しつけて、屋敷の侍女が飛び出してくる。明るい茶髪の、やや目つきのきついその侍女は、そのまま人々の中に入ろうとしていた。

「待ちなさい！」

その腕を、カミラは思わず掴む。侍女が驚いて振り返り、カミラを見てもう一度驚いたらしい。瞬きをしてから、焦りと胡乱さの入りに混じった視線をカミラに向ける。

「なんです。手をお放してください。あなたたちも、逃げた方がよろ

しいのではないだろうか」

「逃げるなら、森ではないの？ アロイス様からそう言われているでしょう？」

「森なんて！」

まさかというように侍女が叫ぶ。

「木々が倒れたらどうするつもりです！？ 下敷きになれというのですか！」

「だけど、町の地下には魔石の鉱脈があるんでしょう！？ 下敷きにならなくても、地面が崩れるわよ！！」

「地面なんて崩れないわよ！！」

侍女が声を張り上げ、カミラの手を振り払った。相手にしてられない、とでもいいたげな態度だ。

実際、この急場でカミラの言葉など聞く余裕はない。まだ爆発音は響き、瘴気は濃くなるばかり。一刻も早く逃げるべきなのだ。

「百年以上もこの町はあるけど、地面なんて崩れたことはないわ！町のことなんて、領都のあなたたちよりずっと知っているのよ！！」

「駄目よ！ 待ちなさい！！」

再び逃げようとした侍女の手を、カミラはつかみ取る。それから、侍女だけではなく、人々の逃げる街道に向けて声を上げた。

「止まりなさい！ 逃げる場所が違いわ！」

「なにを……馬鹿なことを！」

カミラの声に反応したのは、手をつかまれた侍女だけだ。逃げる人々は足を止めることもなく、カミラを振り向くそぶりも見せない。それでも、カミラは諦めない。腹の底から、甲高く叫ぶ。

「森へ逃げなさい！！ 命令よ！！ 足を止めなさい！！」

「手を離して！ 馬鹿なことを言わないで！！ 広い場所に逃げるなんて、当たり前のことじゃない！ ずっと昔から、私たちはこうしているのよ！！」

侍女が暴れる。腕を引き、体をひねる。思わずよろめいたのは、

侍女に引つ張られたからか、それとも地面が揺れたせいなのか。カミラにはわからなかった。

「奥様」

揉めるカミラと侍女の横で、ニコルが怯えた声を上げる。ニコルの視線は定まらない。どこか、見えないなにかを探すようにさまよわせ、震える息を吐き出した。

「奥様、まずいです。近付いて……」

地震が止まない。地響きがする。強い魔力のはじける気配が近づいてくる。

視界がかすむ。むせかえるような瘴気に、ニコルは咳き込んだ。だが、それすらも喧騒がすべてかき消した。

「広場へ逃げる理屈があるの！？ 命が惜しければ、森へ逃げるの！ 伝統なんて、誰も守ってはくれないわ！！」

「よそ者が、知ったような口を！ あなたと一緒に心中なんてごめんよ！！」

「心中したくないから言っているのよ！！」

カミラの叫びは、一瞬訪れた静寂の町に響き渡る。地震が止み、地響きが止み、魔力の暴発が止んだ。

呆氣にとられるほどの静寂。時が止まったのかと思うような停滞。瞬きをするだけの間。

次の瞬間には、すべてがかき消された。

轟音が町を包み込む。地面の揺れは感じなかった。

代わりに、足元が崩れ落ちていく。地面が割れ、大地は町ごと人々を飲み込む。

カミラが最後に感じたのは、絶望めいた人々の悲鳴と、浮遊感だ

け
だ
っ
た。

指の先が、冷たい水に触れる。

どこか打ち付けたのだろうか。背中が痛む。細く目を開けても、周囲にはなにも見えない。ただ、滴るほどの濃い瘴気だけを感じられた。

カミラは横たわったまま、何度か瞬いた。それから、勢いよく体を起こす。

ここはどこ……！？

足元が冷たい。思えば、横たわっていた背中も濡れているようだ。さらにいうと、全身が濡れている。だが、水ではない。どこか重たい沼めいていて、触れた場所がひりひり。では済まないくらいには痛む。液体化した瘴気の泥たまりだった。

瘴気は通常、気体となって空気に紛れる。液体になるのは、相当に瘴気が濃い場合。これが固まり、純粋な魔力だけとなったとき、魔石と呼ばれる石ができるのだ。

つまりは、ここが魔石の鉱脈。瘴気が湧き、魔石を生み出す場所なのだ。

枯れたなんて嘘っぱちじゃない。

魔石が枯れても、まだ豊かな瘴気が残っている。長年放っておけば、瘴気は濃くなり、かたまり、魔石を作り出すのも当然のことだ。魔石を作り出す際に、暴発が怒るのもまた自然のこと。

やっぱり私が正しかったわ。

森へ逃げると言ったのは間違いではなかったのだ。そう思ったところで、カミラははっとした。そういえば、他の者たちはどうした？ あの大通里には、まだ人がたくさんいたはずだ。

「ニコル！ 誰か！ いる！？」

まわりつく瘴気の水たまりから這い出ると、カミラは声を上げ

た。返事の代わりに、どこか遠くから地響きが聞こえてくる。まだ、魔石の暴発は収まっていないようだ。

視界は暗く、ぼんやりと自分の近くが見えるだけだ。カミラは地面を這いながら、なにかにあたらないかと手を伸ばす。

「ニコル！」

指先が柔らかいものに触れ、カミラは声を上げた。どうやら人らしい。かすかなうめき声に近付いて、おそらく顔と思われるところを叩いた。ぱたぱたと叩くと、それは目を覚ましたらしく、うっとうしそうにカミラの手を払った。

「やめて　　ここ、どこ」

その声に、カミラは眉をしかめる。聞き覚えはあるものの、ニコルに比べて口調がきつい。声自体も女性にしてはやや低めだ。

「誰よあなた」

「それはこっちの言うことだわ」

もつともである。

カミラが倒れていたのは、地下のひらけた空間だった。いくつもの瘴気のたまりがあり、どうやら横穴がいくつかあるらしい。

天井は見えない。地下から落ちてきたのだから、空の一つも見えるだろうと思えども、地下に差し込む光はなかった。よほど深くまで落ちてきたのは、あるいは町を覆う瘴気が、光を隠してしまったのだろう。

周囲には、同じように倒れた人々がいた。多少の怪我人はいるものの、動けないほどの者や、死んだ者はいなかった。

原因は、一帯に広がる重たい瘴気の水たまりのおかげだろう。さほど深い水たまりではないが、落下時の衝撃を和らげてくれたらしい。

倒れていた人々は、カミラと、カミラに起こされた女とで、手分けして探し起こした。倒れていた中にはニコルもいた。起こしたばかりのニコルは、混乱と濃い瘴気の中にあつて、ひどい魔力の暴走を起こしたが、今は少し安定している。また暴走するのを恐れてか、彼女は現在、地下の隅で大人しく座り込んでいた。

一方で、大人しくないのはこの女だ。

「あなたが手を離せば、こんなことにはならなかったのよ！」

カミラを責めるのは、広場へと逃げようとしていた侍女だ。彼女は、カミラが一番最初に起こした女でもある。周囲の人々を叩き起こすまではお互い協力していたが、起こし終えればもう義理もない。なにより、彼女の言うことは間違いがなかった。

「あなたが引き留めるから、私は逃げ損ねたのよ！　こんな場所にいなくて済んだのに！」

彼女が叫ぶと同時に、どこかでまた地響きがする。先ほどよりも音が近い気がして、侍女は「ひっ」と声を上げた。

周囲の人々も怯えている。まだ暴発が続いているのなら、いつここも巻き込まれるかわからない。今いる場所だって、十分に瘴気は濃いのだ。

「どう責任を取るのよ！　このままじゃ、あたしたち全員生き埋めだわ！！」

全員、と言いながら、彼女は両手を広げる。カミラはその両手越しに、地下に落ちた人々の顔ぶれを見た。

闇に慣れた目が、人々のあいまいな輪郭を捉える。目に映るのは、ほとんどが女子供か老人。町の住人たちと、侍女が数人。使用人の男二人に、マルタの姿もある。

「……地上からの助けを待つしかないだろう」

使用人の一人が、諦めたような声でそう言った。

「魔石を割って魔力を出すことは難しいだろうな。ここは枯れた鉱脈だし、見たところ、魔石が露出している場所もなさそうだ」

魔石採掘で閉じ込められたときの、定番の救援要請。それは地上にいる魔力持ちに向けて、こちらから強い魔力を放つことだ。たいていは、魔石を割ることであふれた魔力を利用する。

もう一つの方法は、その人自身の魔力を放つことだ。これは、地上に届くほどの強い魔力がなければ意味がない。

使用人は、周囲の人々を見回してから尋ねた。

「魔力持ちは、地上に向けて適当な魔法を使ってくれ。それで地上の誰かが気が付くかもしれない。誰かいるか？」

「いないよ」

即座に、町の住人らしい中年の女が応える。彼女は暗闇の中、泣きじゃくる子供たちを抱えていた。

「魔力持ちはみんな採掘にとられる。この時間帯は魔力持ちなんてどこにもいない。男手もそうだ」

女は当たり前のように淡々と話す。だが待て、それはおかしい。

「採掘は中止するようにって、アロイス様から言われていたはずだわ」

瘴気が強まったところ、なにかあるといけなからと、アロイスはグレンツェとアインスト、両方の町で採掘を止めさせていたはずだ。だけど、そうか。気が付いてしまってから、カミラはそのいやらしさに顔をしかめる。

グレンツェとアインスト。採掘で栄えた二つの町。片方が中止している間は、もう一方にとっては好機になりうる。こと、グレンツェを敵視するアインストにとっては。

「この町は採掘で成り立っている。止めてどうする」

低い声で答えたのは、うずくまるマルタだった。老齢にこの騒動は堪えるらしく、すっかり疲れた様子だった。

「グレンツェと違って、この町は採掘より他にない。止めている間はどうかやって暮らす。いつまで止める。瘴気なんていつだって濃い。それなのに、瘴気が晴れるまで止めると？」

「アロイス様は、異常な瘴気だから止めたのよ！」

「領都にいる人間に、異常がなぜわかる。私たちはこの町で暮らしてきた。私たちの方が知っている」

「こんな状態で、よくも知っているなんて言えるわね！」

「なんとでも言え。私たちの方が、ここの暮らしは長い。それで誤っていたのなら、死ぬだけだ」

そう言うのと、マルタはカミラから顔を逸らした。これで話を打ち切るつもりなのだ。

暮らしが長い。だからなんだっていうのよ！ 実際、アロイス様の言うことの方が全部正しかったんじゃない！！

だけど、正しいか正しくないかは、この期に及んで彼女たちには関係のないことなのだ。よそ者の言うことは耳を貸す価値がなく、長い伝統と歴史だけが意味を持つ。

ばかみたい！

そんな考えでグレンツェを敵視して、アロイスを責めて、身を危険にさらしたのだ。どこかで暴発が怒るたびに子供たちが泣き、誰かが不安を口にする。震えながら「死にたくない」と誰かがつぶやく。

カミラを責める侍女も、声音は強くたって、怯えているのがわかる。マルタだってそうだ。顔を逸らし、うずくまっているのは怖いからなのだ。

ちゃんと感情があるじゃない。

無機質に見えても、仮面のようにも、こうなってしまうえばやはりみんな死にたくない。助かりたい。人々は生きていて、誰にだって心がある。

なのに、誰も動けないのだ。誰かの声に従うだけの生活を、唯々諾々と積み上げてきた月日が、彼らを縛り付けている。

カミラがぐつと両手を握りしめたとき、どこかで地響きがした。音が近い。天井が揺れ、壁が少し崩れた。がらがらと崩れる壁の音を聞くより早く、次の音が響く。

「……奥様、たぶん、ここを離れた方がいいです」

隅で座り込んでいたはずのニコルが、いつの間にかカミラの傍まで来て、そつと話しかけた。彼女もまた、怯えている様子だった。

「瘴気　じゃない、魔力そのものが、迫ってきている感じがします。ここは、安全な場所ではないです」

「……ニコル、あなたそういうのがわかるのね」

カミラが問いかけると、ニコルは自信なくうなずいた。

強い魔力持ちは、瘴気の気配に敏感だ。カミラや他の人々にはわからないことも感じ取れるのだろう。

「わかったわ」

カミラは短く答えると、細い体に大きく息を吸い込んだ。

誰かに従わなければ動けないのであれば、頭を務める役がいる。

その役割を果たすマルタは、命と共に思考を放棄している状態だ。

そうなれば、代わりがいる。

今この場で、一番偉いのはカミラだ。

「ここから離れるですって!？」

侍女が悲鳴に似た声を上げた。

「離れてどこに行くつもり!? こんな暗い中、怪我人だって、年寄りだっているのよ!」

「どこに行くか、ではないわ。ここが安全ではないから逃げるのよ。さつきからそう言っているじゃない!」

小刻みな揺れは、今も絶え間なく続いている。魔力の暴発音が上がるたび、ニコルは震えた。低い地響きは、次第に音が高くなってきている。ときどき圧迫されるかのように、壁がみしりと軋んだ。

「よその場所が安全なんて保障もないでしょう!」

だが、人々はカミラに懐疑的だった。ここを離れるということは、いくつか見える狭い横道に入っていくということだ。闇に目が慣れたとはいえ、足元はおぼつかない。年寄りや子供もいる。怪我人もいる。彼らを連れて進むのは困難だ。

なにより、侍女の言う通り。どこにつながるかわからない横道に入ったところで、生きて帰れる保証はない。袋小路につながっているかもしれない。逃げ場もないうちに、魔力の暴発に巻き込まれるかもしれない。

そうなるくらいなら、せめて広さの感じられるこの場所にいた方が、まだましだ。そう思うのも無理はなかった。

「俺も離れないほうがいいと思う」

使用人の男も、侍女に加勢する。

「俺たちは最初にここに落ちてきたんだ。崩れた場所とここがつながっているのかもしれない。下手に移動すると、誰かが助けに来たときも、すれ違う可能性がある」

使用人の言葉は冷静で、説得力がある。なにより数少ない男手だ。

無意識に、彼は人の信頼を集めている。

「採掘の時も、閉じ込められたときはその場から動かないのが鉄則だ。割れる魔石がなくても、いつまでも帰らないとわかれば、魔力持ちが地上から探してくれる。魔石の暴発なら、事故の場所で魔力が発せられるから、それを頼りに坑道を探してくれるんだ。待つていれば、必ず助けはくる。俺たちはずっとそうやってきた」

そうだ、そうだと微かな同調が聞こえる。カミラは、その同調をかき消すように叫んだ。

「待ち続けて、生き埋めになったら意味がないでしょう!!」

天井がきしみ、小石が落ちる音がする。小石が落ちて、泥沼のような瘴気のたまりに沈む。もはや瘴気は濃すぎて、カミラには濃淡の違いがわからない。だが、ニコルは怯えを増していく。

「ここは危険だって、魔力持ちが言っているのよ! 助けが来るまで待つて、全員死体で見つかりたいわけ!」

「子供の前でなんてことを言うのよ!」

甲高い声と共に、ばちんと異質な音が響く。侍女がカミラの頬を叩いたのだ。頬に感じる痛みと熱ともに、カミラは子供の泣き声に気が付いた。町の女が子供を抱きとめあやす。泣き声が響くほどに、人々も疲れを増しているように見えた。

それでもカミラは黙るわけにはいかない。暴発の音がする。また大きく、天井が軋む。だんだん音が近づいていることに、みんな気が付いていないはずがない。

「ここに居続けたら、子供が泣くことだつてできなくなるわ!」

「あんたについて行ったところで、それは同じよ! 行きたいなら、あんた一人で行きなさいよ!!」

叫ぶより先に地面が揺れる。侍女の顔にも怯えが見える。どこか近くで崩落が起きたのか、轟音が会話をかき消した。

その轟音まで消えると、空間が一瞬静かになる。子供の泣き声さえも引っ込んだらしい。呼吸の音が妙に響く。それが、妙に人々を冷静にさせた。

カミラは息を吸い、静かに吐き出す。

「死にたくないでしょう」

「……当り前だわ。特にあなたとなんてごめんよ」

「私もだわ。だから行こうって言っているの」

「あなたについて行っただって、死ぬかもしれない。誰か死んだらどうするつもり」

侍女の鋭い視線を受け止める。とどのつまりはそう。みんな、ここが危険だとは知っている。だけど先に進むことをためらうのは、確証がないからだ。

本当に大丈夫なのか。もっとひどい目に遭うのではないか。信じて進めるのか。

彼らの信用を得るためのものを、今のカミラは持っていない。命を預けられるだけ保証がない。ついて行って後悔しないと思えるだけの価値がない。

「死んだら、私を恨みなさい」

だからそのまま、受け止めるしかない。

「絶対に生きて帰れるとは言わないわ。もし誰かが死んだら、すべて私が悪いのよ。恨んで憎んでくれて構わないわ。道中の文句も、全部私にぶつけないさい！」

言いながら、カミラは暗闇の人々を見回した。侍女、使用人の男たち、マルタに町の人々。みんなカミラを見ている。

「責任は私が持つ！ 代わりに、生きて帰れたら感謝しなさいよ！」

それも、盛大に。カミラの前に首を垂れ、今までの非礼を詫びて感謝するべし。

洞穴に響くカミラの言葉に、人々は顔を見合わせた。会話はなく、束の間の沈黙と、小さいけれど近い轟音だけが響く。

大きな揺れが収まったころ、侍女が諦めたように言った。

「……………あなた馬鹿だと思っわ」

「なによ」

まだやる気？

思わずカミラは低い声で答えるが、侍女はまるで気にした様子がない。考えるようにうつむくだけだった。

「生きたいなら、一人で逃げればいいじゃない。その方が、変な責任だつてないし、恨まれたりもしないのに……………でも、そうね、あなたつて死んでも死ななさそうで」

侍女は疲れたように頭に手を当てた。悩みと迷い、それから覚悟が入り混じり、複雑な息を吐く。

「……………あたしが死んだら、あなたを恨むわよ」

じとりとした侍女の視線に、カミラは口を曲げる。
いいだろう、受けて立つ。

ニコルを先導に、瘴気の少ない場所を探りながら、カミラたちは横穴の一つに潜っていった。

老人と怪我人は使用人の男たちが支え、子供は女たちが導く。カミラが最後に横穴にもぐりこんだとき、今までで一番大きな地響き地下を揺らした。

同時に、目の前が明るくなる。

それが、魔力の光だと気が付くのに、しばらくかかった。

振り返れば、いくつもあつた瘴気の水たまりが破裂する瞬間が見えた。濃い瘴気が魔力に反応し、光を放ちながら爆発する。それに誘発されるように、隣の水たまりも弾ける。水たまりが消し飛ぶたびに、光が溢れ、洞穴の中を昼のように照らした。

明るい光の後の闇は、一層濃く見えた。

「　　行きましょう」

おののき、足が止まる人々を後ろから追い立て、カミラは鉦脈の奥へと進んでいく。

それからしばらく。誰もはぐれていないか、置いて行かれていないか、声を掛け合いながら進んだ。

横穴は自然にできたものなのか、整備された道ではない。足元はぬかるみ、不安定だ。天井は低く、時々ひどく狭い。

徐々に不安を覚えだすころ、ニコルがふと声を上げた。

「　　あ」

不意に足を止め、ニコルは天井を見上げる。彼女の視線の先にはなにもない。少なくとも、一行の中に見えるものはいなかった。

「カミラ様、上」

呼びかけられたカミラにも、ニコルの見ているものはわからない。だけど、ずっと怯え調子だったニコルの声に、少しの安堵が見えた。「誰かの　　たぶん、たぶんですけど、アロイス様の魔力の気配があります。出口を示してくれているみたい」

ニコルは言いながら、道の奥、少し右よりの斜め上を指さした。

あの先に進めば、出口がある。

先導するニコルのともす、おぼろな魔法の光が揺れる。

もうどれほど歩いただろうか。ほんの少しの時間にも思えるし、丸一日も経っている気もする。

地下の振動は収まらない。爆音と崩落の音は、近くから遠くから、断続的に聞こえ続ける。

不安の中、足元もおぼつかない闇の中を歩くのは、想像以上に疲弊する。時間の感覚のない地下は、なおさらだった。

「あつ」

ニコルが足を止め、困ったように言った。

「あの、すみません。こっちは行き止まりでした……」

ニコルの光が、どこにもつながらない横穴の奥を照らす。ぬるりと瘴気に湿った壁が、奥に行くほど狭くなっているのが見える。

「じゃあ引き返さないと駄目ね。さっきの曲がり角まで戻りましよう」

「で、でも、さっきの場所は瘴気が濃くなっていて……」

「それなら、余計に早く戻らないと。行き止まりで爆発に巻き込まれたら大変よ」

カミラが言えば、人々は反論もなく、疲れたため息だけを吐き出した。

一人一人の顔色はうかがえないが、不安が濃くなっているのは感じ取れる。足取りは重くなり、互いに掛け合う声も囁きのように小さくなっている。

無理もない、とカミラは引き返しなから思った。こうして引き返すのも、もう何度目かわからない。進んでは戻り、進んでは戻るうちに、彼らは「本当に大丈夫なのか」と疑問に思い始めているのだ。

アロイスの魔力を追うようになってから、ニコルは明らかに混乱していた。

これまでは、瘴気の薄い方向だけを探して進めばよかった。けど、今は違う。ただ瘴気を避けるだけではなく、そのうえで魔力の方角を追わなければならない。曲がり角のたびにニコルは迷い、恐る恐る方角を選択し、間違えるたびに人々の疑惑を向けられる。

ニコルが足を止めるたび、ため息が出る。誰も何も言わなくても、それだけでどんな目で見られているのかわかるだろう。

もとよりニコルは、気が強い方ではないのだ。ニコルはどんどんと自信を失い、選択を恐れていく。

だけど、進む先を決められるのはニコルしかないのも事実。歯がゆいけれど、カミラには彼女に任せるほかにない。

曲がり角まで戻ると、一行はまた足を止めた。

少しひらけたその場所からは、細い道が幾重に伸びる。一番大きな道は、最初にここへ来た時に通った。二つ目に大きな道は、瘴気が濃くて避けた。それで選んだのが、三番目に大きな道だった。だけどこれは行き止まりだ。

あとは、子供が一人くぐれそうな亀裂がいくつか。カミラはそれらを見回して、ニコルに尋ねた。

「どっち？ こっちに行ってみる？」

二番目に大きい道を示して、カミラは尋ねた。

「だ、だめです、そっちは魔力の方向には近いですけど、瘴気が濃くて」

「来た道に戻ったほうがいいかしら？」

「だめです！ あっちはもう、いつ爆発してもおかしくないです」

「じゃあ」

カミラが言いかけたとき、からん、と乾いた音がした。

地響きに紛れ、聞こえてきた違和感のある音に、カミラは振り返った。

目に映るのは、杖を投げ出しうずくまるマルタの姿だった。マルタを支えていた使用人の男が、傍で戸惑ったように声をかけていた。「マルタ様、どうされました」

「私はもう歩けん」

マルタは落ちた杖を拾う様子もなく、うつむいてそう言った。

「足が動かん。杖を持つ手に力も入らん。それなのに、私はどこに向かつて歩いている？」

「外に出るためです。もう少しの辛抱ですから」

男が励ますように言うが、マルタは首を横に振った。そして、うつむいたまま、ニコルに視線を向ける。

「採掘夫も入らない横穴を通り、道は行き止まりばかり。このまま進んで、本当に外に出られるのか？」

暗闇の中、マルタの表情ははつきりと読み取れない。だが、言葉には不信感がありありと表れていた。

ニコルは体を縮め、口ごもった。両手を握り合わせ、視線を落とす。

「あの……えっと」

「ニコル、アロイス様の魔力は近づいているのでしょうか？」

「は、はい。もう、そんなに遠くないはずです」

カミラの問いに、ニコルはどうか小声で答えた。何度も迷い、進みながら、ニコルはどうかアロイスの魔力に近付いていた。あといくらかもないほどには近いはずなのに、道がわからず、何度も行き来をする。それがさらに、ニコルを焦らせていた。

ニコルのその言葉を聞いても、マルタはふん、と息を吐くだけだった。

「その娘の言うことは、本当に信用できるのか？ 魔法が使えても、瘴気の濃さなんて本当にわかるのか？ そもそも、本当に地上で魔力を放っている人間がいるのか？ 誰もわからないのだろっ」

マルタは息を吸い、深く吐き、また息を吸う。呼吸音がやけに目立つのは、疲労ゆえだろう。高齡のマルタには、この道程はかなり厳しい。それが、彼女の不信感にもつながっているのだ。

もちろん、だからといって勝手な言い草に我慢ができるかどうかは別だ。

「もうちよつとくらい辛抱しなさいよ。今ここで、ニコルを責めたってどうにもならないでしょう」

「死ぬまで辛抱しろと言うつもりか」

「死なないための辛抱よ！ ニコルがいなければ、魔力の爆発に巻き込まれていたかもしれないのよ！」

「ずつと揺れや爆発が続いていた。魔力がなくなつてあの場所が危険だとわかる」

カミラが怒鳴るのは対照的に、マルタの声は静かだ。もとより声を荒げる性質ではないのだろうが、それ以上に大声を出す気力も出ないらしい。

「だったらニコルより先に、場所を移動しようって言つべきだったでしょうが！」

「私はお前たちより慎重だったただけだ」

「ああ言えばこう言う！ 口先だけじゃなんとでも」

カミラが苛立ちに大声を上げたとき、呼応するように地面が揺れた。

これまでで一番大きな揺れだ。悲鳴が上がる。

その悲鳴さえもかき消して、爆音が響いた。

爆音は、ここへ来るために通った、一番大きな道から聞こえた。

爆音の後に、崩落の音が聞こえる。逃げるように噴き出した瘴気の風が、カミラたちに吹き付ける。

それに合わせて、崩落と地響きが近づいてきていた。

「逃げろ！ 崩れる……！」

使用人の男が叫ぶ。マルタがはつと杖を取り、町の女が子供を抱

き上げた。だが、逃げる先をためらい、立ちすくむ。

瘴気の風の進む先は、二番目に大きな道だった。先ほど、ニコルが否定した場所だ。

風の流れ？

浮かんだその思考よりも先に、カミラは声を上げる。

「あつちよ！ 走りなさい！」

考える間もない。人々は弾けるように走り出した。爆発が連鎖し、地下を破壊し、どんどん追い詰める。

飛び出したのは、一つの大きな空洞だった。カミラたちが最初に落ちてきた場所と少し似ている。むせかえるような瘴気に満ち、泥のような水たまりが点々とある。

揺れと爆音は、まだ背後から追いかけてきている。空洞全体が揺れてきしみ、不穏な音を立てる。

「イルマー!!」

息を切らし、空洞の中央へ躍り出るカミラたちに向けて、誰かの声が響いた。

人の声だ。驚きに足を止め、周囲を見回せば、ニコルの光に照らされて、いくつかの人の影がある。

さほど広いとは言えない空洞に、十四、五人ほど。壁際に、身を寄せ合って座っている。何人かは伏せている。崩落の跡が見え、不自然に崩れた壁がある。

「フリーダ!? あなた、広場に逃げたはずでしょう!!」

茶髪の侍女が、荒い息を吐きながら叫んだ。その横で、疲れ切ったようにマルタが転ぶ。落とした杖を拾う気力もないらしく、そのまま再びうずくまってしまった。

「広場は崩れたわ! あなたこそ、どうしてこんなところに!？」

「崩れた……!？」

イルマと呼ばれた茶髪の侍女が、戸惑ったように立ち尽くした。人々の足はすっかり止まっている。だが、迫ってくる瘴気の風は収まらない。爆発がカミラたちに追いつき、逃げてきたばかりの道ではじけた。

まばゆい爆発の光に、人々がざわめく。いや、ざわめいている時間なんてないのだ。

「逃げなさい！　ここも崩れるわ！！」

「逃げるって、どこへ」

叫ぶカミラに、誰かが問い返した。空洞から伸びる道は、カミラたちが逃げてきた場所以外にも無数ある。どれが外へ続く道なのか、それともどれも行き止まりなのか、カミラにはわからない。おそらく、この場にいる誰も判断ができない。

「ニコル！　どっち！？」

「え、あ、あの、えっと……！」

ニコルは両手を握り合わせ、泣き出しそうな顔で空洞を見回す。視線がさまよい、定まらない。迷っているようだ。

その間も、地響きは止まない。地面が揺れ、目がくらむような瘴気の風が巻き起こる。

「わ、私……あの、こっち、いや、あっち」

ニコルは困惑したまま、あいまいに言葉を翻す。判断することに怯え、ためらうニコルにカミラは苛立った。地面が揺れ、泣き声上がる。空洞にいた人影も、伏せているもの以外は全員立ち上がり、怯えるように壁際から離れていた。

「ニコル！　早く！」

「え、ええと」

ニコルは集まる視線に怯えていた。期待と疑惑。ニコルの言葉一つで、ここにいる全員の命運が決まるかもしれない。

その責任の重さに耐えられない。

「ニコル！」

迷う間にも、爆発が起こる。空洞の中で、一番大きな水のたまり

が破裂して、まばゆい光を放った。近くの壁が崩れ落ち、伏せた人影の上に降り注ぐ。悲鳴が止まない。逃げないと思うのに、足がすくんだように、みんな動けずにいる。

だって、暗闇の中、どこに進めばいいのかわからない。ここよりもましな場所があるのか？ どこもかしこも瘴気に満ちた地下に、逃げ場なんてあるのか？

「あなたが決めるのよ！ ニコル！ あなたにしかできないのよ！」

「で、でも、奥様、わ、私が間違っていたら」

「そうしたら、私が責任を持つわ！」

死んでも恨まれるのはカミラ一人。最初に言い放った言葉だ。ニコルが間違っていたとしても、先導を任せたのはカミラ自身。だから、ニコルは決めるだけで良い。恨みや憎しみも、カミラが全部背負い込む。

それに。

「大丈夫よ、アロイス様もいるんでしょう。私は信じているわ」

それに、カミラは死ぬつもりなんてない。生きて帰ることができると思うから、ニコルに任せただ。

「そ、そうですね。あ、アロイス様がいますし……！」

「アロイス様だけじゃないわ」

カミラはニコルを見据え、地響きの中でもはっきりわかる、確かな声で言った。

「あなたもよ、ニコル。あなたの力を信じているの」

ニコルは息を止め、目を見開いてカミラを見つめ返した。

その間にも地面が揺れ、また一瞬の光が溢れ、消えると同時に悲鳴が上がる。がらがらと不吉な音が響き、我に返ったように人々が走り出す。こんな場所にはいられないと、めちやくちゃんな方向に逃げ出そうとする。

「先導しなさい、ニコル！ どこに行けばいいのかは、もう決められたわね！？」

「はい！」

震える声押し殺し、力強く返事をする、ニコルは逃げまどう人々の前に駆け出した。

空洞が崩れ落ちる。

悲鳴を上げながら、人々はニコルについて逃げていく。光が破裂し、岩が割れ、地面が砕ける。

「余裕があるなら、怪我人を運びなさい！ 子供をちゃんと見て！ 年寄りには手を貸すのよ！」

叫ぶカミラの横を、何人も駆け抜けていく。子供も怪我人も、どうにか助け合いながら走り去る。

「全員逃げた！？」

横を通り過ぎる人々がいなくなり、カミラは叫びながら空洞を振り返る。伏せつた人々は、もう連れてはいけない。他に動く人影はない。いや、ある。

「待つて、待つて！ 誰か助けて！」

岩陰の傍、動かない人影がある。その傍で、誰かが叫んでいた。

断続的な爆発の光の中で、その姿が見える。

イルマと呼ばれたあの女と、栗毛色の髪の少女。陶器のような

肌に、細面。目元にほくろのある、どこかで見た侍女だ。

「フリーダが、岩に足を挟まれたの！ 行かないで！ 助けて！！」

フリーダの足は、くるぶしから下を岩に挟まれていた。

一緒に逃げようとして、イルマはフリーダの手を取って走っていた。フリーダは少し足が遅いから、遅れないようにと思ったのだ。

だけど、二人で走り出したとき、間近で爆発がした。爆発はそれほど大きなものではないけれど、小さな岩を吹き飛ばすには十分だ

った。

爆発の正面にいたのはイルマの方だった。イルマは驚き、一瞬足がすくんでしまった。それを、フリーダは見ていたのだ。ほぼ反射的に、彼女はイルマの背中を押した。

倒れて、転んで、起き上がったときには、フリーダはすでに岩の下だった。

「フリーダ！」

イルマは慌ててフリーダの傍に駆け寄った。上に乗る岩をどけようと、力いっぱい押しても、ぴくりとも動かない。イルマ一人の力ではどうしようもなかった。

フリーダは痛みを顔をしかめる。岩の下がどうなっているのかは見えない。でも、想像もしたくない。

「誰か助けて！！」

岩を押しながら、イルマは必死に叫んだ。だが、逃げていく人々は誰も答えない。背中ばかりが遠くなる。地響きと爆音が、もうあまり時間がないことを告げていた。

「イルマ、だめよ。もう行って」

そう言ったフリーダの表情には、諦めたような悲しみがある。どうしようもない。動けない。自分の運命を悟ってしまったのだ。

だが、イルマは首を振った。

「いや！ 誰か、私の友達なの！ 助けて、助けて！！」

声を張り上げ、喉が枯れるほどに叫んだ。爆音よりも、さらに大きな声で叫んだ。逃げていったみんなが、誰かが、戻ってきてくれるはずなんてないのに。

「フリーダ！ いや！ 助けて、助けてよ！！」

押しつけようとする手のひらに、岩の冷たさが染みる。イルマにはもう、どうすればいいのかわからない。目の前が熱くて、だけど全身が凍り付いたように冷たくて、ただ得体のしれない恐怖があった。

「この、鈍くさ！」

憤りに満ちた声に、イルマは顔を上げた。岩を押す自分の傍に、人の影がある。細い手で、同じように岩をどかそうと手をつっ張る。その手。力仕事なんて知らないような、白い腕。

イルマは幻でも見たように瞬いた。

「なにやっているのよ！ 馬鹿じゃないのー！」

「……あ、あんた、あなた……どうして……どうして？」

「どうしてもなにも、あんたが助けてって言ったんでしょーが！」
その細い手の主は、イルマの方を見もしない。ただ岩に手を当て、体を当て、どうにかしてどかそうと踏ん張っている。

「だって、あ、あなたに助ける義理なんてないじゃない」

「じゃあ、私にあんたたちを見殺しにしろっていつもり！？」

「馬鹿じゃないの！ と彼女はいらいらしたようにもう一度叫んだ。
「私が責任持ったのよ！ あんたが死んだら、私のせいになるじゃないのー！」

押しても引いてもどうにもならないし、イルマという侍女と二人で力を合わせても、岩は動くどころか、傾く気配すらない。

周囲はどんどん岩にのまれていく。このままでは、責任もろとも押しつぶされてしまうのではないか。そもそも女二人でどうにかなるような岩ではなかったのだ。

もう、時間が……。

らしくない不安がふとよぎったとき、カミラよりもさらに上から、誰かが岩に向けて手を伸ばした。

「せーので力を入れますよ」

「えっ」

あまりに聞き慣れた声だった。崩れゆく空洞の中で響くそれは、一瞬、幻聴とさえ思った。

だが、戸惑うより先にその声が叫ぶ。

「　　せえのっ！！」

聞こえてきた掛け声に、カミラは反射的に、岩に体を当てて強く押す。全身全霊をかけて、祈りながら岩に向けて力を込めた。今までは、びくともしなかった岩が動く。ごろりと重たく転がって、近くの瘴気のたまりに落ちた。

全身を預けていたカミラは、思わず前のめりに傾く。岩をどかすことに夢中で、受け身を取ることなんて考えてはいなかった。無抵抗に傾ぎ　　転ぶ直前。

カミラは寸前で、腕を掴まれた。冷や汗をかきつつ、足で地面を踏みなおすと、カミラは改めて声に振り返った。

「　　アロイス様？」

目の前にいるのは、まぎれもない。地上からカミラたちを導き、追いつけたアロイスその人だった。

「ど、どうして」

　　どうしてここに？　　どうして一人で。

頭の中をめぐるカミラの疑問に、今のアロイスはたった一言で答えた。

「外はもうすぐです。みんなもう、安全な場所まで行きました」

「ほ、本当ですか！？」

「私たちも逃げますよ。ご自分で走れますね？　　彼女は私が連れて行きます」

　　もろ手をあげて喜ぶ時間はない。安堵が広がり、力が抜けそうになるカミラを制するようにそう言って、アロイスは倒れたフリーダを抱き上げる。それから、確かめるようにカミラに目を向けた。

「もうここは長くはもちません。他にもう、誰もいませんね！？」

「は　　」

はい、と言いかけて、カミラはもう一度空洞を見回す。伏せた人影は動かない。岩陰に誰もいない。もう、動く者はいない。

　　だけど、カミラは見つけてしまった。

空洞の半ば。転がる杖。うずくまったまま動かない、小さな人の影。ここに駆け込んできて以降、一度も言葉を発していない、老いた姿。

「もおおおお!!!」

ままならなさにカミラは叫んだ。

年老いた体には、もはや立ち上がるだけの体力もない。荒い息を吐いて、吸って、吐くことしかできない。

ここで死ぬのだとマルタは思った。それもまた、この町で生まれたからには致し方ない。魔石の採掘でなる町は、採掘に死ぬこともいとわれない。マルタの若いころは、そうやって何人も死んだ人間がいたものだ。そしてマルタは、町の権力者として、そういう人間を何人も処理してきた。死んだら補充し、入れ替えることを、まるで物のように当たり前にしてきた。

マルタも同じだ。マルタが死ねば、誰かがマルタの代わりをする。町はずっと、そうやって回ってきた。

ならばせめて、見苦しくないように。心を乱すことないように。アインストの誇りを忘れないように。

そう思っていたのだ。

なのに、なぜだろう。

「ちよつとは自分の足も動かしなさいよ！ こっちだつて重いのよ！」

「あんた、老人に向かってその言い草はなに！？ いたわりの心つてものがないの!？」

マルタは両脇から、二人の女に支えられて歩いていった。いや、歩くというよりは、引きずられるというほうが近い。一人は侍女のイルマ。もう一人はカミラ。あの憎い領主の妻となる女だ。カミラ

は手に、マルタの杖を持っている。

「だいたい、ずっと思ってたけど、あんた性格がきつすぎるのよ！子供に対しても、思いやりが見えないわ！」

「仕方ないじゃない！思いやっているうちに死ぬなんてごめんだもの！」

イルマが怒鳴れば、カミラがそれ以上に怒鳴り返す。普段はもつと優しいわよ、などとふてくされているようだ。

「……思いやりなどいらん」

マルタはかすれた声でつぶやいた。マルタを引きずる二人の女は、足を止めずにマルタを一瞥する。

「敵に助けられるくらいなら、死んだ方がまだ」

「だったらなおさら助けてやるわよ！あんたにはだいぶ腹が立っていたのよ！」

カミラが感情的に叫ぶ。それでも、マルタを放り出す気配はない。爆音を背に、空洞をどうにかこうにかやり過ごし、狭い穴を通り、前に進んでいく。

マルタたちの前には、魔法の光を手に、先導する男の背中が見える。時おりこちらの様子を窺いながら、励ましの声をかける。カミラたちは、彼について行っているらしい。

「だいたい、死にたいならなんであの場所まで、私に付いてきたのよ」

うるんな瞳を向けられて、マルタは口ごもる。

ひいひい言いながら、杖を頼りに、足が動かなるまでマルタはカミラについて行った。時に他の人間に支えられながら、這うようにしてでもしがみついたのは、なぜか。

マルタ自身もわかっている。老い先短い身で、恥ずべきことだった。

「……見苦しい真似をした」

「見苦しくてなにが悪いのよ。死にたいって思うより、よっぽど健全だわ」

カミラは前を向きながらそう言った。重たいものを運んだことなどないのだろう。額に汗が浮いている。思えば、顔も服もぼろぼろだ。髪は乱れ、化粧ははがれている。薄汚れて醜い、恥ずべき姿だ。見苦しい。

「生きたいなんて、当たり前じゃない。そんなの、誰だって同じよ」
見苦しいのは。

マルタは目を伏せる。今のマルタは、足が動かない。体を支えられ、運ばれ、生かされているだけだ。敵に助けられたくないと言いながら、助けられることに抵抗さえもしない。

見苦しいのは、私だ。

「杖を寄越せ」

マルタは短くそう言うと、カミラの持つ杖に目を向けた。

「助けはいらん。どうせ生きるしかないなら、自分で歩く」

マルタの言葉を聞くと、カミラはふふん、と不愉快に鼻を鳴らした。

「いいわよ。もう手伝わないわ。あとちょっとなんだから、自力で頑張rinaさい」

顔を上げた彼女の視線の先に、光が見える。

魔法の淡い光ではない。まばゆい、外の光だった。

太陽は天頂にある。

あれほど濃かった瘴気の靄は晴れ、空は青色に染まっていた。
風は吹き、雲は流れ、光あふれる。

地下を抜け出し、広場の外れに這い出たカミラは、そのままへたりと座り込んだ。

目の前に広がるのは、半壊したアインストの街並みだ。家々は半数近くが倒壊し、几帳面に整備された石畳はひび割れ、ところどころ亀裂が入っている。亀裂からは、勢いはないものの、今も瘴気が噴き出していた。

周囲には、たくさんの人々がいた。今もがれきの下や、崩落した地下の生き残りを探しているらしい。忙しくて、騒がしい。先に地下から出てきた人たちも、まだこの場所にいる。最後に出てきたカミラやイルマの姿を見て、歓声を上げていた。

「カミラさん、大丈夫ですか」

アロイスは、座り込んでしまったカミラに慌てて駆け寄ってくる。抱き上げていたフリーダは、すでに医者に引き渡したらしい。どこか日陰に連れて行かれるフリーダと、それに付き添う人々の姿が見えた。

「だ、大丈夫です」

そう言って立ち上がるうと地面に手を置くが、力が入らない。心配そうに見下ろすアロイスに、カミラは「はは」と気が抜けた声で笑った。

「な、情けないですけど、安心したら、腰が抜けたみたいです」
「情けなくなてありませんよ」

アロイスは立ち上がれないカミラに手を差し出すと、穏やかに微

笑んで見せた。

「あなたはとても勇敢で、立派でした」

真正面から来る飾らない言葉に、カミラは口を結ぶ。気まずい。気恥ずかしい。それでいて、ちょっとうれしい。それがまたちょっと悔しい。安堵と相まって、うつかり目の奥が熱くなりそうだった。カミラは慌てて顔を伏せ、目を瞬いてやりすごす。アロイスはたいては気にした風もなく、「どうしました、カミラさん？」などと言うものだから、ますます悔しい。

「なんでもありません。少し疲れただけです」

カミラはそう言つと、差し出されたアロイスの手を強く握り返した。

顔を上げると、アロイスの荒れたカエル顔が見える。強い瘴気の中にいて、ますますひどくなった顔の中、赤い瞳が目を細める。

悔しい。

悔しいけれど、認めざるを得ない。

地震が起きたとき、大通りに逃げる人々に向けて、森へ逃げると言つたこと。

地下をさまよっているとき、アロイスの魔力を迷わず追いかけたこと。

アロイスを見て、安堵していること。

いつの間にか、カミラはアロイスを信頼し始めている。

でも！ まだカエル男だわ！ キスできるにはほど遠いもの！
アロイスに助け起こされながら、カミラは内心で首を振る。アロイスはカミラの好みとは言い難い。カミラが好きなのは、筋肉質で頼りがいのある、しゃれた美男子だ。アロイスの顔は美男子とは言い難いし、服や髪にも気を使つてはいない。腕や体もぶにぶにの、筋のないただの肉。

だけど、正面に立ってみて、カミラはその違和感に気が付いた。

背の高い、大きな体に広い肩。人よりも大きい体なのは変わらない。だが、アロイスの肩越しに見える景色が、少し違う。青い空が、いつもよりも広く見える。

「……………アロイス様、もしかして、少し痩せました？」

カミラが瞬きながら言えば、アロイスも瞬く。面食らったようにカミラを見つめ、呆れたような、安心したような息を吐く。

「やっと気が付いていただけましたか？」

その言い草がまた、なんとも悔しい。

カミラが立ち上がると同じくして、誰かがよろよろと近づいてきた。

相手は、カミラよりも少し先に出ていて、同じく力尽きて倒れていたマルタだ。

彼女は町の重鎮だけあって、さすがの好待遇である。町の人々に取り囲まれ、汗を拭かれ、水を飲まされていた。少し息を落ち着けたら、もっと安全な場所へと移動する手はずとなっていた。

だが、そうした人々を押しつけて、マルタは杖を手に、自力でカミラの前までやってきた。

カミラの前で立ち止り、彼女はカミラを睨むように見上げた。

「……………なによ」

強い視線に、カミラも負けじと睨み返す。まだ文句を言うつもりなのかと、カミラは身構えた。

しかし、マルタは睨むだけだ。しばらくカミラを見やってから、力尽きたように崩れ落ちる。杖を転がし、膝をつき、体を伏せるマ

ルタに、カミラはぎよつとした。

「ど、どうしたの」

「……………カミラ、様」

「は？」

かすれたマルタの声に、カミラは胡乱な声を返す。カミラ様聞き間違いではない。たしかに聞いた。

「私は今日、あなたの人となりを知りました」

マルタは顔を伏せたまま、震える声で言った。マルタを囲んでいた人々が、驚いたように彼女の姿を見ている。広場にいる人々が、何事かとカミラに視線を向けていた。

「あなたは私を救い、多くの町の人間を救ってくれました。この町が、あなたを拒む理由はなにもありません」

マルタの言葉は、淡々とはしていない。押し殺すような感情が見える。それは喜びであるのか、苦しみであるのかはわからない。ただ、熱がある。

「これまでの非礼をお許してください。あなた方は、まぎれもない私たちの恩人です」

周囲で見守る人々の中に、カミラと共に地下を抜けた人間たちがいる。イルマがいて、使用人の男たちがいて、子供やその親がいる。泣いている。笑っている。生きている。喜んでいる。誰かを失い、悲しんでいる。

崩れた町の中、仮面にも似た人々の顔に、感情が見える。

厳格、生真面目、感情のない古い町。

だけど人の心はある。強い誇りと、熱がある。

カミラは息を呑み込んだ。束の間言葉を失う。カミラを取り巻く人々の視線は、どれもこれもが肯定的なものではないけれど、だけど認めてくれる者もいる。

空は明るく、光あふれる。風が街を吹き抜けたとき、カミラはぐっと手を握りしめた。

大きく息を吸い込むと、カミラは胸を張り、良く通る声で笑った。

「いいわよ。許してあげる。代わりに生きて帰ったんだから、盛大に感謝しなさいよ!!」

3 - 終章 (1)

災害による代償は大きい。

アインストの町は半壊した。

町の南側にある家々は、大半が崩れ、大通りには亀裂が走っていた。

北側は比較的被害は少ないが、油断ができる状態ではない。地下に魔石の鉱脈がないとは限らないのだ。

住む場所をなくした人々は、急遽町の外に小屋を作り、仮住まいとしていた。

この間に、町には魔力持ちたちの調査団が入り、魔石の鉱脈を調べることになる。安全な場所、危険な場所を判断し、町の再建はその後になる。「しばらくは戻れそうにありませんねえ」などとアロイスは申し訳なさそうに言っていたが、致し方のないことだろう。アロイスと共に、カミラもしくは早くは町に滞在することになる。カミラがいて役に立つことは少ないが、せいぜい炊き出しの手伝いくらいはできるだろう。

後は、まだ見つからない人々が無事であること。命を落とした人々のために、祈ることくらいだ。

が、それはさておき。

カミラ自身もこの災害で、個人的に被害を受けていた。

「かゆい！」

両手で体を抱きしめて、カミラは悶絶した。

昨日の未曾有の災害から、どうにかこうにか生き延びた代償である。

瘴気の泥水を全身にかぶり、さらに濃い瘴気の中を歩き回り、体に異常をきたさないわけがなかったのだ。

一晩眠り、疲れた心身が少しばかり癒えた途端、全身のかゆみが出た。体は正直なものである。おまけに、腕や首筋にぼつぽつと発疹まである。

なのに、隠すための化粧もままならない。カミラ愛用のクリームも、今はかゆみを増長させるだけだった。瘴気を落とそうと体を拭いても、痛しかゆしは収まらない。逆に布の感触で、身悶えする羽目になった。もはや服を着ているだけでも、生き地獄のような心地だった。

しかし、ニコルに偉そうに言った手前、カミラは自分の肌を掻くわけにはいかない。ぐつと奥歯を噛みしめ、カミラは忙しく歩き回っていた。

カミラが現在いるのは、町はずれの一軒家。災害から生き残った一棟だ。

森にほど近く、周囲は無事な家も多い。地盤も比較的安全だと判断され、今は仮住まいとして居座らせてもらっている。

テント暮らしの人々も多い中、きちんとした家に住まわせてもらっているあたり、現在のアインストでは、かなりの厚遇を受けているのだろう。

が、そんなことはもはやどうでもいい。このかゆみを抑えられるのなら、テントでも野宿でも構わないくらいには、カミラは追い詰められていた。

「か、かゆい、かゆい、ぐぐ……」

声も出さずにはいられないし、体は動かさずに入られないし、呻かずにはいられない。こんなとき、力尽きて未だベッドの中で寝て

いるニコルは、むしろ幸せ者だろう。彼女が起きていたら、きっとカミラの比ではない地獄を味わうことになっていたはずだ。

「ああもう！ 腹立つ！ かゆい！ 痛いかゆい！ これじゃ肌も荒れるわよ！」

哀れな自分の腕の湿疹を見ながら、カミラはどこへもぶつけられない怒りを吐き出した。

今まで、採掘地から離れた領都に住んでいたせいで、瘡気というものを見つけていた。魔力のほばないカミラでさえもこの状態だ。これでは、アロイスの肌もヒキガエルになるもの。魔力の強いアロイスは、今頃カミラの比ではないほどに苦しんでいるのかもしれない。

大丈夫かしら。

と心配が頭をよぎったが、すぐにかゆみがかき消した。人の心配をする余裕は、今のカミラにはない。

「かゆい　！」

当てもなく叫んだとき、カミラの部屋の扉が叩かれた。
なんと間の悪い。

「あまりお加減が良くないようですね」

苦笑しながらそう言ったのは、地下で生死を共にした男たち使用人のテオとレオンだ。テオは背の高い方、レオンは、目元のほくろのある方。アロイスに言いつけてやろうと顔を目に焼いただけあって、カミラはしっかりと覚えていた。

「時間を改めた方が良いですか？」

「いいわよ、話した方が気もまぎれるし。ただ、落ち着かないけど許さないよ」

言いながらも、カミラはその場をうろつくと歩き続ける。黙って座っていたら、頭がおかしくなりそうだった。歩いていれば歩いて

いるで、服が擦れてたまらないが、どっちかと言えば動いている方がまだ。

「あなたたちは平気そうね。腹が立つわ」

罪のない男たちを睨みながら、カミラは憎らしさにそう言った。

カミラがこんなことになっているのに、男たちは涼しい顔だ。かゆみも、肌の荒れもないように見える。肌は陶磁のように白く、以前と変わらず滑らかだ。同じように地下の時間を過ごしたはずなのに、これは一体どういうことか。

思えば、グレンツエでも疑問を抱いたものだ。瘴気はびこる採掘地。モントンの人間は、誰もがアロイスのような爛れた肌を持つなどと王都で伝え聞いた噂とは裏腹に、目に見えて肌の荒れた人間は少ない。アロイスこそが特殊な例で、せいぜい肌荒れが目立つのは、強い魔力持ちの人間くらいなものだった。

「あなたたちは、荒れたりかゆくなったりしないの？ 不公平じゃない」

カミラの理不尽な不服に、テオが苦笑した。初対面の無表情とはえらい違いだ。彼の視線には人間味があり、親しみが見える。

「俺たちはこの辺りの出身だから、比較的瘴気には慣れているんです。生まれたときからこの辺りに住んでいますし、体に耐性があるのかもしれない。地元の人間は平気な奴が多いと思いますよ」

ふむ、とカミラは不服を飲み込む。

たしかに、魔石採掘なんてしているくらいだ。魔石鉱脈に近付くことも多いだろうし、このくらいの瘴気に触れる機会もままあるのだろう。カミラのように、瘴気のない王都でぬくぬく育った肌だけが、これほどつらい思いをすることになるのだ。

「でも、それでもやっぱり荒れるときは荒れます。だからイルマが

おい、イルマはどうした？」

「……さっきまでそこにいたはずだが」

男たち二人が、周囲を見回しながら戸惑う。部屋にいるのは男二人だけで、イルマの姿などカミラは見えていない。慌てたようにテオ

が部屋の外へ出て行き、少しして戻ってくる。

部屋に戻ってきたテオは、不満そうなイルマを連れていた。きつい目つきはますますきつく、唇は曲げられ、眉間には皺が寄っている。彼女はテオの背後に体を隠し、カミラを睨みつけていた。

思わず睨み返しそうになるカミラを制して、テオが先に口を開く。「おいイルマ、なに恥ずかしがってんだよ。付いてくるって言ったのはお前だろう」

「恥ずかしがってないわよ」

イルマはぎつとテオを睨みつけると、意を決したように前に歩み出る。カミラの目の前までやってくると、足を止め、カミラを睨み上げた。やる気か？

穏やかでない睨みあいには、ほんの一瞬。イルマは不服そうな顔のまま、おもむろに袖から小瓶を取り出した。

それをカミラに突きつける。

「これ、地元でよく使われる軟膏。瘡気で荒れた肌によく効くの。痛みやかゆみを抑えて、肌の荒れを治してくれるわ。よそ者は瘡気に弱いから、こういうのがないと困るでしょう」

反射的に小瓶を受け取りながら、「えっ」とカミラは声を漏らす。内心身構えた分、拍子抜けした。思いがけなさに瞬くしかない。

「俺たち、礼を言いに来たんです」

ふてくされた顔のイルマを押し分け、テオが言葉を添えた。

「地下から生きて出られたのも、フリーダが助かったのもあなたのおかげです。俺たちはよそ者には冷たいけど、その分、受けた恩には尽くします」

胸を張って言うと、テオはちらりとイルマとレオンを見やる。視線を受けて、今度はレオンが口を開く。

「フリーダは俺の妹です。あなたが居なければ妹は生きてはいなかった。この恩は忘れません」

レオンはまっすぐにカミラを見つめ、生真面目そうに言った。その目元が、確かにフリーダに似ている。

「この町も一枚岩ではありません。あなたを不満に思つる者もいるでしょう。もし今後なにかあれば、俺が力になります」

言葉を切ると、今度はレオンの視線がイルマに向かう。テオとレオンに挟まれ、二人の視線を受けた彼女は、ついに観念したらしい。ぎゅっと目を閉じ、顔を上げると、彼女はカミラ一歩近づいた。

「……あのと、あなたがいてくれてよかった。フリーダを助けてくれて、ありがとう」

彼女はそう言うと、カミラに向けて深く頭を下げた。

手の中の瓶を握りしめながら、カミラは思わず息を吸い込んだ。

「こつ」

カミラの吐き出した言葉に、三人は顔を上げた。短い音の中にも、穏やかではない響きが含まれているとわかったのだらう。

もちろん、カミラは穏やかな気持ちではいられない。もう限界だった。

「こつというのがあんなら、早く言いなさいよ!!」

瓶を握りしめたカミラの表情は　かゆみに耐え兼ねた、苦悶が浮かんでいた。

3 - 終章 (2)

そういうわけで、カミラはアロイスを待ち構えていた。

「アロイス様、そこに座ってください」

「えっ。えっ……はい」

日が暮れ、魔石鉱脈の調査を中断して戻ってきたアロイスに、カミラのぶしつけな言葉が跳ぶ。

なぜ自分の部屋にカミラがいるのか。なぜきつい口調で座るように命令されるのか。アロイスはまるで心当たりがないままに、とりあえずカミラの言う通り椅子に座った。

アロイス専用、大重量でも大丈夫の特注の椅子　ではなく、ごく普通の椅子にごく普通に座ると、カミラが向かいに腰かけた。

「手を出してください」

「はい」

アロイスは素直に頷き、手のひらをカミラに向けて差し出す。彼女は迷わずアロイスの手をつかむと、無遠慮に自分の方へ引き寄せた。

驚くアロイスをよそに、カミラはなにやら小瓶を取り出し、中に詰まっている固いクリーム状のもの指先で掬い取る。そして、それをアロイスの手先に塗り付ける。

独特のにおいが、つんと鼻に付く。なにかの薬だろうか、と思うが、アロイスには判断ができない。

「……なにをしていますが？」

「見ての通りです」

カミラは顔を上げず、熱心にアロイスに薬らしいものを塗る。細い指に撫でられて、いたたまれないのはアロイスだけのようなのだ。

「かゆみを抑えて、肌の荒れを治してくれるそうです。イルマとい

う侍女にもらいました」

言いながら、カミラはアロイスを一瞥する。責めるような視線に、アロイスはますます居心地が悪かった。ここ最近で、責められるようないわれはあっただろうか。

災害のとき、カミラを置いて出て行ってしまったこと。そもそも、危険と知ってアインストに連れてきたこと。思い当たる節はいろいろある。

「アロイス様、きちんと肌の手入れをしますことあります？ どうして採掘地の人間の肌がきれいで、採掘しないアロイス様はこうなんですか」

「……あ、いえ。肌は、あまり気にしたことがなく」

「気にしないでいい状態ではないでしょう！」

カツと怒鳴りつけられて、アロイスは肩をすくめた。カミラはいらいらした様子で、しかし変わらず丁寧に、アロイスに薬を塗っていく。

「採掘地の薬屋なら、どこでも瘡気に効く薬が売っているそうですよ。瘡気に普通の薬は効きにくいんですって。『地元では常識だ』って教えてもらいましたよ」

ふん、とカミラは鼻息を吐く。カミラの毎日の肌の手入れは、瘡気にはなんの効果も発揮していなかった。それを知って不機嫌であることを、アロイスは知る由もない。

「効き目のいい薬も教えてもらったので、領都に戻る前に買い占めてやりましょう。それで、ちゃんとアロイス様の肌も治してください！ じゃないとかゆくて大変でしょう！」

そう言って、カミラはアロイスを睨む。

かゆみなんて慣れきってしまったアロイスには、肌が荒れようと爛れようと、さほど重要でもなかった。薬があるのも知っていたが、自分にはさほど必要とも思えなかった。

だけどきつと、カミラにとっては大事なのだろう。肌がきれいな男の方が好ましいのだろう。ユリアン王子も、白い陶磁のような肌

をしている。

アロイスは息を吐き、少しの間目を閉じた。カミラは片手を塗り終えて、もう一方の手をつかんでいる。

アロイスの手を引く指の細さ。弱い力。この手が、だけど地下から人々を救い上げたのだ。

「……土地の人間から、いろいろなことを教えてもらったんですね」「はい？」

「この町の心をひらかせることは、できないと思っていました」
細く目を開けると、いぶかしげなカミラの視線が目に映る。アロイスが彼女に向けて返したのは、羨望をはらんだ微笑みだった。

「この町は古くて、偏屈で、岩のように頑固です。一度嫌われれば、その感情が変わることはなく、私はただ、波風を立てない付き合いだけを考えていました。なのにあなたは、私が諦めたことを、一日で成し遂げてしまう」

かたくなな人の心を変えることは、アロイスにはできないことだった。カミラは無茶で無鉄砲で、酷く感情的で、だからこそ、相手の心に迫ることができる。

彼女が生み出す感情は、好意もあれば嫌悪もある。それは、当たり前の人の心だ。

その、当たり前の心を引き出すことの難しさを、アロイスは知っている。特に、アロイスのような人間であれば、なおさら。

「私はあなたが羨ましい。」

「あ、アロイス様……？」

アロイスの手を両手でつかんだまま、カミラは瞬く。無防備に戸惑った彼女の手を、アロイスは一瞬のためらいのあと、握りしめた。吐き出す言葉には、嘘偽りはない。ただ、少しだけ打算

的だった。

「私はあなたに憧れ、少し妬ましい。それでいて、心惹かれています」

○

反射的にアロイスの手を振り払うと、カミラは思わず身構えた。

アロイスは逃げたカミラの手を追うこともなく、惜しむ様子もなく、ただ座ったまま見つめているだけだ。

「ど、どうしたんですか急に！」

「思ったことを言っただけです」

「思ったことって、そんな、く、く」

口説き文句みたいな。そう言おうとした自分の言葉さえためらわれ、カミラは次の言葉が継げずに呻いた。

「ぐ……そういう言葉は、半分になってからと……」

そう言いかけて、カミラは続く言葉を飲み込んだ。

半分、なってる。

もともとが大きい故、半分になったところで人より大きめであることには変わらない。そもそも、元の体重をきちんと把握しているわけでもないため、本当にきっちり半分以下になったとも言い切れない。

しかし、以前に比べて明らかに痩せたのは間違いない。改めて見れば、首と顎がきちんと分かれて、肉に埋もれた目が見えるようになっていいる。ふつくらしているが、輪郭も力エルから人間になった。もしかして、半分以下に減っていることすらありうるのかもしれない。

「ぐう……………」

悔しさに唇を噛み、カミラは手のひらを握りしめる。逆恨みでアロイスを睨みつけるが、彼は悪びれた様子もなく、カミラを見つめ返すだけだ。

アロイスはたまにこういうところがある。素直というべきか、正直というべきか。あまりにまっすぐに言葉をぶつけられ、なにも返すことができなくなる。

いや、だがここで負けてなるものか。

「ま、まだ、半分なんて第一段階ですから……！」

首を振ると、カミラは断固として顔を上げる。

だって、結婚してキスをする相手としては、アロイスはまだまだカミラの好みからはほど遠い。恐ろしく太いカエルが、ちよつと太いカエルに変わった程度のものだ。

だいたい元はいえ、カミラはアロイスを色男に変えるつもりだったのだ。それで、アロイスを連れて王都へ帰り、カミラを笑った者たちに見せつけてやる予定だった。

今のアロイスは色男とは言えない。まだまだ直すべき部分がいっぱいある。顔の荒れも治さなくてはならない。傍から見ればまだ太い。髪や服も洗練されていない。

ぜんぶ直すまでは、まだ駄目だ。

「次は、残りの肉を筋肉に変えます！ その私よりも柔らかい腕の肉を固くします！ それまでは認めませんから……！」

カミラの宣言にアロイスは苦笑する。カミラはそれを睨みつけながら、自分の放った言葉の意味の分からなさに、内心で首をひねっていた。

認めない。

なにを？

なにを？

カミラはまだ、答えを持っていない。

アインストで起きた魔石災害から、ひと月ほどが経った。

町の地下の調査はすでに終わり、現在は復興の真っただ中にある。

がれきを片付け、張り巡らされた鉱脈を避けつつ、新しい土地を拓いていく。壊れた街道を作り直し、地盤とにらみ合いながら、簡易な住居を建てる。

今では人々の大半がテント暮らしを終え、新しい建物に移っている。急ぎで作った、大きいだけの簡素な集合住宅だが、それでも雨風がしのげ、腰を落ち着けられるだけ、テントよりはずっとましだ。

居場所が定まりはじめ、これからするべきことが見え始め、町の再建が本格的に始まる。

災害で崩れた町と、沈んだ人々の気持ちも、修復を見据え前を向き出す。

その立役者は、グレンツェから来た支援の人々だった。

「グレンツェから人を呼ぶですって!？」

ひと月前、最初にアロイスから話を聞いたとき、カミラは度肝を抜かれたものだった。

アインストとグレンツェの不仲は有名である。実際、アインストの町に来てから、カミラは特に実感した。

二つの町は、正反対の性質を持つ。明るく雑多で、荒々しいグレ

ンツェ。静かで几帳面で、生真面目なアインスト。不幸なのは、お互いに同じ採掘で成り立ち、モントンを支える都市であると言うことだ。

まったく関わりがなければ、互いに関心を抱くこともなかっただろうに。比較ができてしまえば確かに、特にアインスト側が、劣等感にも似たライバル心を抱くようになってしまっていた。

そんなアインストに、グレンツェから救援を呼んで、問題が起こらないはずがない。今のアインストはなおさら、災害の後で神経質になっている。よそ者を拒むアインストの気質もあり、喧嘩が絶えなくなるのではないか。

そうカミラが思うのも、無理はないことだった。

「アインストから一番近い町ですし、グレンツェの人間ならば、魔石や瘴気の扱いにも長けています」

おののくカミラに、しかしアロイスは平気な顔で言ったものだ。

「ファルシュは山岳で、こちらへ来るには手間がかかりすぎます。

ブルームは、今はちよつとごたごたしていますし。領都からも人を呼びますが、当面は距離的にもグレンツェから呼んだ方がよいでしょう。あの町は、採掘をしているだけあって、力仕事に長けた者も多いですから」

「うつん……その通りですが……」

アロイスの言うことには無理がない。同じ採掘町であるグレンツェの人間は、災害に対する心構えもある。だいが薄れたとはいえ、未だはびこる瘴気と魔石の暴発危機に対し、適切な行動をとれるだろう。

なにより、アインストに最も近いのがグレンツェだ。わざわざ遠くから人を呼ぶ必要なんてない。

わかる。頭では理解ができる。アロイスの選択は効率的で、おそらく一番理に適っているのだろう。

でも。

反論にならない、感情的ななにかがカミラをためらわせる。

渋い反応のカミラに対し、アロイスはにこりと微笑んだ。

彼がよく見せる、人を安心させるような穏やかな表情だ。

「それに、これがきつかけで、二つの町が上手くいつてくれるかもしれないです。こういう時でなければ、お互いに内実を知ることないですから」

アロイスの言葉は冷静で、落ち着いていて、間違いがない。

だけど、カミラは素直に頷くことができなかった。

まるで 弱ったアインストに、付け入るように思ってしまったのだ。

思えばアロイスは、めったに感情を荒げることがない。

怒ることもないわけではないが、感情的にそうすることがないのだ。おそらく、カミラが覚えている限り、彼がわかりやすく感情を見せたのは、グレンツェでカミラと怒鳴り合ったときと、ニコルに形見の皿を割られたときくらいなものだろう。

自制心が強いといえばそれまで。感情に揺れないのは、領主としての長所でもある。

実際、グレンツェから人を寄越したことは正解だった。

はじめのうちこそ些細な小競り合いはあったものの、この状況下では協力しあうほかにない。お互いに力を合わせて町を立て直しているうちに、今では笑い合う姿も見られるようになった。

町を歩けば、グレンツェの人間もアインストの人間も変わらない。上層部ではまだまだ悶々としたものを抱えているらしいが、実際に接して、言葉を交わす町の人々の気持ちは、変わり始めている。

良いことだわ。

同じ領地の中でいがみ合うなんて、馬鹿馬鹿しいとカミラは思う。特に、アインストの閉鎖的な空気は、カミラの肌には合わない。窓を開け、人々を受け入れ、変わっていくのは掛け値なしに良いことだと思う。

良いことだけど。

アインストはきっと、良い方向に変わっていく。たぶん、アロイスの思惑通りに。

だけどアロイスの思惑だって、この町を思つてのことだ。彼はいつだって、良き領主として土地のことを考えている。

それなのに、どうしてかカミラの心は煮え切らない。言葉にできないもやもやとしたものが渦を巻く。

多少の衝突は覚悟して、災害を好機と見たアロイスの判断は冷静で、間違いない。

いや。

冷静というより、冷徹だわ。

一人、アインストの与えられた部屋で悶々としていたカミラは、慌てて思考を追い出した。

アロイスも町の人々も、もちろんグレンツェの人々も、誰もが町を良くしたいと考えている。こんなことを考えてしまう自分自身の方が、カミラにはよほど冷徹のように思えた。

「ああもう！ 一人で考えていたって仕方ないわ！」

誰にともなく声を上げると、カミラは立ち上がった。

もとより、悩むことに向いていないのだ。

こういうときは、部屋を出て気が済むまで行動する方が良い。上手いこと気持ちが解消されるかもしれないし、さもなければカミラのことだ。いつのまにか他に興味が移って、忘れてしまえるかもしれない。

そついうわけで、現在カミラは厨房にいる。

もうじき昼を迎える時間帯。厨房は、炊き出しの準備をする人々でごった返していた。

再建途中の町に、厨房のある家はそう多くない。厨房どころかトイレもないし、浴室だつてももちろんない。臨時で建てられた仮設の家は、あくまで仮のもの。最低限の壁と屋根くらいしかなかった。そこで急遽建てられたのが、共用の施設だ。人々の多い土地の付近に大きく場所を取り、厨房、トイレ、浴室のある建物が作られ、誰でも自由に使えるようにしてある。

その中の一つが、カミラのいる厨房だった。いずれ解体予定のその厨房は、火のつきにくいかまどに、なかなか焼けないパン焼きの窯。立て付けの悪い作業台が並んでいる。

粗悪なかまどには、不釣り合いに立派な鍋が乗る。味を見ながら

鍋を煮るのは、食材と鍋をかついで領都から来た、モンテナハト家の料理人たちだ。

ひと月たった今、救援はグレンツェのみならず、領都からも来ている。グレンツェからは、災害初頭の救援と、肉体労働を。領都からは、主に食料と金を提供するのが、アロイスの当初からの想定だったらしい。

季節は冬に足を踏み入れたところ。ゾンネリヒト王国北部に位置するモーントン領。そのさらに北寄りのアインストは、初冬といえどもすでに寒い。採掘町の数少ない畑も枯れ、動物たちも冬眠をはじめている。食べられるものは、針葉樹の葉が、冬眠し損ねたヒキガエルくらいという状態。十分な備蓄もできずに災害に遭い、明日食べるものもない住民も少なくない。

ゆえに、アインストでは災害以降、人々に向けて炊き出しが行われていた。モンテナハト家の料理人が主導し、町の人々の手を借りながらの炊き出しを、カミラも何度か手伝ったことがあった。

魔力もない、力もないカミラがアインストでできることは、野菜を切るくらいだ。

はじめのうちは、カミラの参加に驚いていた人々も、何度か混じるうちに気にしなくなっていた。

今では、ナイフを持ったカミラの前に、他の人々と同じように野菜の束が差し出さる。カミラは当然のように、それを洗い、剥き、切り刻むのだ。

「……アロイス様ですか？」

麦の大袋を厨房に運んでいたテオが、そう言って隣のレオンと顔を見合わせた。

「そう。あなたたちはどういう印象を受ける？」

野菜を切るナイフを手にしたまま、カミラは見知った使用人たちに目を向けた。

唐突な質問に、テオもレオンも困惑した様子だ。なんと答えればいいのか迷った挙句に、彼らは当たり障りなくそつと答える。

「穏やかな方だなあ、と思いますけど。どうして急に」

「なんとなく。あなたたちからはどう見えているのか聞いてみたかったのよ」

アロイスに感じる、一種違和感のようなもの。それは、カミラが勝手に抱いているだけだ。アロイスが良しと思い、町の人々が良しと思えば、誰も不幸なことはない。だから、人から聞いて納得して、それで終わりにしようと思っていたのだ。

「……なるほど？」

テオは納得したような、していないような口ぶりで頷いた。黙々と麦を運ぶレオンを横目に、彼は一人腕を組む。

「アロイス様は、温和でまじめな方だと思いますよ。それに、いつも冷静で、落ち着いていらっしゃいます。この町の人間が言うのもなんですけど、アインストでの態度を受けても、あの方が怒る姿を見たことがない」

ふむ、とカミラは息を吐く。この町は、アロイスに対して厳しい態度を取り続けていた。カミラ自身は直接その様子を見たことはないが、自分へ向けられた態度を思えば、想像には難くない。

「怒ったらこっちの思うつぼでしたからね。頭の良い方ですよ。意地の悪い質問も、要求も、いつも上手かわしますし。なんと云いますか、すごい、間違いのない方なんですよね。こっちが文句をつけるのに苦心をするくらいで」

「文句を言わなければいいじゃないの」

カミラが言えば、ごもつともです、とテオが苦笑した。

「それでも、どうしてでしょうね。気に食わないと思う人間は少なくありませんでした」

そう言ってから、テオは慌てたように「あ、今は違いますよ」と

付け加える。しかし、カミラにとってテオの失言はどうでもよい。

「どうして気に食わないの？ 間違いないんでしょう？」

単純な疑問だった。間違いがない。文句が付けられない。人柄は温和で、穏やか。嫌われる要素などないように思える。

それでいて、なぜ嫌われ続けていたのか？

カミラの問いに、テオは渋い顔で首をひねった。

「うーん……そういう問題じゃあなかっただと思います。気に食わないと思うと、優秀なことも、間違いがないことも、全部気に食わなくなるんですね。たぶん、アロイス様は、隙がなさ過ぎたんです」

「……そういうもののなのね」

ため息を吐くように、カミラは言った。共感できないが、納得ができないわけでもない。

感情の部分を理屈で割り切ることは難しい。嫌いなものは嫌い。一度染みついた感情を取り払うには、『優秀』であるだけでは駄目だったのだ。

「でも、今は違います。本当に」

無意識に視線を伏せるカミラに、テオは励ますように言った。落ち込んだつもりではなかったが、テオの目にはそうは映らなかったらしい。ジャガイモにナイフを立てるカミラを覗き込み、テオは微笑んで見せた。

「俺たち、あの災害で先に地下から出ていたから、知っているんです。アロイス様が地下に飛び込んだときのこと」

あのとき。地上にいたアロイスは、魔力を地下に向けながら、逃げ出てくる人々を助けていた。まだ瘴気の濃い中、混乱する人々の指揮を執るアロイスは、声を張り上げることはあるものの、相も変わらず冷静そのものだったという。判断に間違いはなく、指示に誤りは無い。いつだって彼の言葉は最善手で、より多くの人間を救うためのものだった。

だが、地下からニコルが逃げ出てきたときだけは様子が違った。まだカミラが地下に知っていることを知り、しかしいつまでも出てこないことを知ったとき。

アロイスは誰よりも早く、その身一つで地下へと飛び込んだのだ。いつ崩れるかもわからない、危険な場所だとわかっていながら。

「血相を変えて、周りの静止も聞かなくて、あんなところもあるんだなって、びつくりしました。結果的には無事でしたけど、もしかしたらアロイス様まで、地下の崩落に巻き込まれていたかもしれないのに。そういうことをする方には見えなかったから」

「……そうなの」

そっけなく言いながらも、カミラは視線をさまよわせる。落ち着かない手が、ジャガイモを細かく細かく切り刻む。

そう、アロイス様が、私のために。

「あの人でも取り乱すんだって、なんでしょう、親近感ですかね。みんなちよっと、見る目が変わってきたんだと思います」

「そ、そう」

口元が勝手にゆるむ。嫌な気がしない。アロイスが、町の人たちに受け入れられはじめている。きつといずれ、この町の居心地が、アロイスにとって悪くなくなっていくのだろう。そう思うと。

って、どうして私が喜ぶのよ！

思わず力んだ手が、微塵になったジャガイモの破片を飛ばす。行方を追い、慌てて顔を上げたとき、少し苦い顔をしたテオを目が合った。

「まあ、そんなだからあいつもなあ。王子様に見えたんだろうなあ」
「おい」

テオの口をふさぐように、どこからともなくレオンの声がする。料理人に指示され、厨房奥に麦袋を運んでいたレオンが、慌てたようにテオの元へ向かってくるのが見えた。恐ろしい地獄耳である。

彼は太股でテオの前までやってくると、彼の肩を乱暴につかんだ。

「お前、人の妹だぞ。余計なことを言っくなよ」

「いや、別に、余計なことなんて」

しどろもどろに言い訳をしようとするが、手遅れである。彼の口は軽すぎたのだ。

「王子様ってどういうこと？」

カミラは腕を組み、テオとレオンを交互に見比べた。

昼時。厨房小屋にほど近い広場は、食事をする人々でにぎわっていた。

炊き出しの時間になると、誰もが作業の手を止めて、配られるパンとスープを受け取りに来る。

受け取った食事を持ち帰り、自分の家で食べるものの中に入るが、多くは広場の適当な場所に腰かけて、集まった人々と雑談を交わしながら食事をする。おかげで、はじめはなにもなかった空き地同然の広場が、今では食事用のテーブルが並ぶようになっていた。

アインストもグレンツェも無関係に、同じテーブルを囲み、笑いながら食事をするなど、少し前では考えられなかったことだ。

広間の端から、食事風景を見守っていたイルマは、改めて不思議な気持ちになる。あんなにもこじれていた確執の結末は、こんな呆気ないものか。良いとか悪いとかではなく　　なんだか拍子抜けしてしまう。

「……あ、イルマ、あそこ」

ため息を吐くイルマの名前を、なじみの声呼んだ。顔をしかめて声に目を向ければ、杖に体を預けたフリーダの横顔がある。彼女は人形めいた白い頬をかすかに染め、きらめく瞳で一点を見つめていた。

「アロイス様、みんなと食事をとっていらっしゃるわ。私たちと同じものをお召し上がりなのね」

フリーダの視線の先にいるのは、いささか体格の良い男。粗末な食事を品よく食べる彼こそは、領外から『沼地のヒキガエル』などと呼ばれる、このモーントン領の領主アロイスである。

太り過ぎた巨軀と、瘡気に荒れ切った爛れた肌からそんな呼び名

がついてしまっていたが、今の彼の容姿には似合わない。おのくほどの体は、かつての半分ほどに痩せ、この頃は肌の荒れも、少しましになっているように思える。

とはいえ、やはり人より太っていて、肌荒れが目立つのは変わらない。年若い娘に好まれるような容姿とは、とても言えないだろう。そんなアロイスを、しかしフリーダは一途に見つめている。兄と似て表情の変化に乏しく、寡黙だったはずの友人の姿に、イルマは顔をしかめた。

「フリーダ、あんた本当に行くの？」

イルマの低い声に、フリーダは頷く。それを見て、「あーあ」とイルマは何度目かわからないため息をついた。

「無謀すぎるってわかっているでしょう？ あの人が誰を助けに来たかなんて、考えなくてもわかるじゃない」

「そうだけど」

「まだ歩けないあんたの足に付き合って、ここまで付いてきたけど、あんたの無茶な告白に付き合えるほど優しい友達じゃないわ」

「だから、告白じゃないってば！ お礼を言うだけ！」

突き放すようなイルマの言葉に、フリーダは焦ったように首を振る。そんなに熱心に見つめて、そんなに頬を赤くして、告白以外になにがあるのかと、イルマは思う。

「助けられてぐっとくるのはわかるけど。好きになっていいことなんてないでしょう。あんた美人なんだから、もっといい男なんていくらでもいるわよ」

「……わかってるわよ」

フリーダは傷ついたようにうつむく。伏せた瞳が悲しげで、イルマは居心地が悪かった。

「でも、好きになってしまっただもの。ひと月の間、見ているうちにもっと好きになったわ。真面目で、誰にでも分け隔てなく、優しくて」

「誰にでも優しいのよ。あんただけじゃなく」

「……うん」

わかつている、と言ったフリーダの体がよろめく。まだ足を引きずる彼女を、イルマは慌てて支えた。イルマの一言は、彼女にとつて相当に痛い言葉だったのだろう。

だが、言い過ぎたとは思えども、悪いとは思っていない。フリーダの成就しない恋は、これくらい言っても諦めさせるべきなのだ。「だから言つの。お礼だけ言っ、それで、はっきりと思い知って諦めたいのよ」

「難儀だわ」

イルマは額に手を当て、呆れた声で言った。

いくら瘦せたとはいえ、これまでのアロイスの姿を思い返せば、恋する相手と見るには難しい。優しいと言っけれど、彼は当たり障りがなさ過ぎて、イルマにはそれほどいい男にも思えない。

なのに、好きになるってこういうものなのかしら。さっぱり理解できない。理解できないが、フリーダが本気だということは、わかってしま

うのだ。

「……仕方ないわね。お礼を言うだけよ。本当に、それで諦めるのよね？」

「うん。ありがとう、イルマ」

ひととき大きく息を吐くイルマに、フリーダは寂しそうに笑って言った。

昼が過ぎ、人のまばらになった広場の外れ。食事を終え、仕事に戻ろうとしたアロイスを、フリーダは呼び止めた。

その様子を、イルマは建てかけの家の影から、そっと覗いていた。少し離れてはいるが、さほど大きくないフリーダの声もきちんと聞

こえる。アロイスは背中しか見えないが、緊張したフリーダの顔も良く見えた。

フリーダは一人で平気だと言っていたが、どうにも心配でならなかったのだ。

「本当に大丈夫かしら」

「いやあ、駄目だろう」

イルマの独り言に、どこからともなく返事がくる。

「意外に大胆なことするなあ、あいつ。もっと大人しいやつだと思っていたけど」

「フリーダ……あの馬鹿」

「……なんとも言えない気分だわ」

聞き覚えのある声だ。声の方を振り返り、イルマは「げ」と声を上げる。

見知った男二人。見知った女一人。テオとレオン。それから、やりにもよってカミラだ。全員、イルマと同じように、アロイスとフリーダの様子を伺っている。

「なんでいるの……！」

「しっ！ 聞こえるだろう！」

そう言つて、テオがイルマの口を押える。なんで自分が叱られるのか。イルマには納得がいかない。

「カミラ様。すみません、うちの妹が」

「いいわよ。いや、よくはないけれど。……私も文句を言える立場ではないわ」

カミラとアロイスは結婚をしているわけでもない。それどころかカミラは、アロイスがキスできるほどいい男になるまで、結婚しないと宣言した身だ。そのくせ、妻気取りであれこれ口を出すなど。そんな見苦しい真似、カミラの美意識が許さない。

しかし、カミラとアロイスの事情を三人は知らない。

「怒らないんですね？」

テオの意外そうな言葉に、ん、とカミラは返事にも満たない言葉

を返す。

「……怒るかどうかは、アロイス様の返事次第だわ」
そう言って、カミラは少し離れたアロイスの背に目を向けた。

隠しきれない好意が入り混じりつつも、礼を告げたフリーダに、
今まさに、アロイスが返事をするところだった。

慎重に、言葉を選ぶように、アロイスが語る声がある。物陰の四
人はそろって口を閉じ、耳をそばだてた。

「フリーダ。ありがとう。でも」

「

3・5・4（終）

昼の片づけはすっかり終わり、夕食時には早すぎる。
人気のない厨房に、冬の冷たい風が吹く。

風に吹かれながら、アロイスは一人、黙々と人参の皮を剥いていた。剥いた後、どうするのかは誰も知らない。

「あの……アロイス様」

カミラは一人きり、無心に作業するアロイスの背に、いくぶんか遠慮がちに呼びかけた。

フリーダに言葉を返し、去っていく彼女を見送った後、彼はずつと厨房で、野菜の皮を剥き続けている。鬼気迫るその様子に、さすがのカミラも声をかけるのがためらわれたのだ。

「どうされまし」

「カミラさん」

カミラの言葉をさえぎって、アロイスは振り向きもせずと言った。口調は強くもなく、弱くもなく、淡々としているように思えた。

「僕は彼女に、誠実に答えられていましたか？」

「……気付いていらっしやったんですか」

「声が聞こえていました」

ぐ、とカミラは、後ろめたさと居心地の悪さに息を詰まらせる。考えてみれば当たり前だ。アロイスたちの声がかミラに聞こえていたと言うことは、カミラたちの声だって、アロイスには届くはずなのだ。

しかし、アロイスにはカミラを咎める気はないらしい。彼は一つ息を吐くと、囁くように続ける。

「僕は間違った答えを返していたんでしょうか」

抑揚のない言葉の中に、渦を巻くような不安が見える。カミラは

無言で眉を寄せると、意を決してアロイスの横に立った。

真横から見たアロイスは、伏し目がちで、どこか息苦しそうだった。人參を剥く手は止めないまま、一度だけ、横に立つカミラに視線を向ける。その表情は、まるで教師から与えられた問題に答え、正誤の判定を待つ子供みたいだ。

「……間違ってはいなかったと思います」

カミラは不安げなアロイスを見ながら、息を吐くように言った。フリーダにかけたアロイスの言葉は、優しく、諭すようであり、相手を傷つけることのないものだった。同じ状況に陥ったときに、頭の中で想定し得る、最良の答えだったと思う。間違いは一つもない。教師が出した問題であれば、満点を与えるような回答だった。「でも、正しい答えではなかったわ」

フリーダは、教師ではない。問題を出したわけでもない。彼女にとつて欲しいのは、満点の回答ではなく、アロイスの本心だ。宥められたいわけでも、諭されたいわけでもない。傷つくことだって、構わなかった。

アロイスにはそれが、わからなかったのだ。

アロイスはまた、無言で人參の皮を剥き続ける。傷ついた顔をしていることに、彼自身は気が付いているのだろうか。アロイスの伏せた赤い瞳は、底知れないようできて、ひどく浅い。

カミラはいつだったか、アロイスに向けて『誠実ではない』と言ったことを思い出していた。カミラの言葉に、アロイスはひどく腹を立てていた。あれは、自分自身を『誠実だ』と思っているからこそ、気に障ったのだと思っていた。

逆だわ。

気難しいアロイスの横顔に、カミラは口を引き結ぶ。

アロイスは優しい。アロイスは穏やか。誰もがそう言う。誰に対しても同じ。誰に対しても変わらない。それはなんだか、張りばてめいている。

誠実ではない自覚があるから、あんなにむきになったんだわ。

しよりしよりと、人参の皮を剥く音がする。

かける言葉もなければ、かけられる言葉もなく、風だけが二人の間を吹き抜けた。

剥き終えた人参を、どうするべきか。

我に返った頃には、取り返しのつかない量になっていた。カミラとアロイスは互いに顔を見合わせて、苦い顔をする。夕食の支度にとやってきた、モンテナハト家の料理人も交えて、不毛な作戦会議をしていた。

「やつぱり夕食かしら。人参だらけにするしかないわ」

「いやいや、さすがに一度の食事じゃ、この量は使い切れませんよ」カミラの言葉に、料理人が参ったように首を振る。アインストー帯の人々に配っても余るほどの量を、よくもアロイスは捌いたものだ。

「すまない。どうにも考え事に夢中になり過ぎていた」

アロイスは、めったにしない失態に肩を落としている。料理人はそんなアロイスの様子を、物珍しそうに見つめてから、腕を組んだ。「うーん。どうしますかねえ。すりおろして……………ケーキにでもして焼いてやりますか?」

「ケーキ?」

「そう。最近の子供連中が、甘いものが欲しいってよく騒ぐんですよ。砂糖が少ないから、どうしようかと思っていたんですけど。人参なら甘みがあつてちょうどよいんじゃないですかね」

なるほど。悪くない考えだ。アロイスも「良い考えだ」と頷いている。どうにか人参の行く先が決まりそうで、ほっとしているようにも見えた。

「それなら、私も手伝おう。カミラさんも、手伝っていただけますか？」

「あ、いえ。私は遠慮します」

水を向けられたカミラは、反射的に首を横に振った。

料理が趣味で、炊き出しにも積極的に参加する。ケーキ作りも、当然のように手伝うと思っていたのである。アロイスと料理人は、カミラの否定に意外そうな顔をする。

二人の視線を受け、カミラは顔をしかめた。

「私、お菓子は作れないんです」

らしくもなく、カミラは言葉を濁すようにそう言った。

シュトルム伯爵家令嬢、カミラ・シュトルムは危険な女である。

男爵令嬢リーゼロッテを押しつけ、ユリアン王子の婚約者に収まるうとした稀代の悪女は、やはりアロイス・モンテナハト公爵一人では飽き足らないらしい。

公爵の信頼を勝ち得ると、カミラは次に、モントン領のかなめ、アインストにまで手を伸ばした。災害に付け入り、人々を扇動し、忠実なアインストの民を惑わせたのだ。

アインストの人々は、歴史と伝統を捨て、誇りを失い、カミラに懐柔された。

それだけではない。アインスト攻略を糸口にしたのが、あの女はモントン領の若い、特に身分の低い者たちに、悪影響を及ぼしつつある。

あの女は、このままいずれ、このモントン領を奪うつもりでいる。そして、モントン領の次に狙うのは、王都だ。

稀代の悪女・カミラは、国を揺るがす危険をはらんでいる。

親愛なるお姉さまへ

カミラお姉さま、お久しぶりです。あなたのかわいい妹のテレゼです。

なかなかお手紙のお返事をいただけていませんが、いかがお過ごしでしょうか。お姉さまが沼地へお嫁に行かれてから、もう七か月。ご様子がわからなくて、お父さまやお母さまは気にしていらっしゃ

らないようですが、私はとても心配です。

もしかして、沼地暮らしが長くなりすぎて、人の言葉を忘れてしまわれたのでしょうか。それとも、沼地にこの手紙が浸されて、届くころには文字が消えてしまっているのでしょうか。

お姉さまがお手紙を読まれていないのではないかと、私は不安です。不安のあまり、これまでの手紙と同じ内容を記すことをお許しください。お姉さまには、知っておいていただくべきことですから……。

お姉さま。私、こうやってお姉さまのことを呼び出すことを、ずっと夢見ていました。

お父さまもお母さまも、想像していたとおり、本当に素敵なお方。実の子供以上にかわいがってくださいます。お父さまは、『今まで、貧しい子爵家で苦労しただろう。ここでは好きなように、自由に暮らして良い』とおっしゃってくださいました。お姉さまのことに気後れしていると、『もうあれは娘ではない。お前だけがわが娘だ』ですって。

お母さまも、『あなたのどんなわがままも聞きたい』なんて、私をとて甘やかしてしまわれるんです。

私、本当にうれしくて、今でも夢みたいな気持ちです。お姉さまは今ごろ、ヒキガエルのお嫁さまとして、慣れない暮らしに苦労されているはずなのに。こんなに幸せでいいのかしらって、ときどきとても申し訳のない気持ちになりますの。

……いえ、カエルにはカエルの幸せがありますものね。愛情深いお姉さまですもの。きっと今ごろ、カエルの卵を産まれて、カエル並みの幸せを得ていらっしゃるのでしょうか。

ああ、ついつい余計なことを書き過ぎてしまいましたわ。でも、許してくださいましね。私がお姉さまのことを『お姉さま』とお慕いできるのも、あとわずかなのですから。

お父さまは、お姉さまとの縁をお切りになるつもりでいらつしやるみたいなのですもの。

私がつい、お姉さまがリーゼロッテさんにされたことで、どれほどユリアン殿下に疎まれていらつしやるかを、お話ししてしまつたせいかもしれませんが。縁を切るなんておかawaiiそうだと止めても、もう心を決めてしまわれたようなんですの。私の話を聞いて、お父さまは顔を真つ赤にされて、それから真つ青にされて、『どうしてあんな娘が生まれてしまつたんだ』なんておっしゃいましたわ。

でも、嘘や隠し事はいけませんものね。お姉さまも嘘はお嫌いでしたし、私たち、似た者同士なんですね。

そうそう、リーゼロッテさんといえば、お話ししましたかしら。私、あの方とお友だちなつたんですの。

リーゼロッテさん、とても柔和で女性的で、お姉さまとは正反對の、とても素敵な方ですわ。お姉さまがお嫁に行かれた後、シュトルム家にお目をかけてくださつて、とてもよくしてくださるんです。お姉さまの悪評で、シュトルム家がづらい目に遭うのではと、心配してくださつたんですって。本当に、懐が深いお方で、私、感動してしまいました。

だから、ユリアン殿下が心惹かれるのも当然ですわ。国中のみんなが、お二人の結婚を、今か今かと待つているんですの。

でも、やつと……ああ、お姉さまのいらつしやるモーション領にも、お話は届いていらつしやるでしょうか。お二人の結婚のお日にも決まりましたの。冬が明けた、次の年の春。花盛りのころに執り行われる予定です。

きっと、モンテナハト卿にもご出席いただくことになるでしょうね。そうしたら、久々にお姉さまとお会いできますわ。

私、とても楽しみです。

とても、とても楽しみです。

お父さまとお母さまは、もう顔も見たくないなんておっしゃつて

いますけれど、家族でお待ちしていますわ。きちんと、私の口から言いたいですもの。

「お姉さま」って。

あなたのかわいい妹　テレーゼより

暖炉の火が、テレーゼの手紙を飲み込む様子を、カミラは黙って見つめていた。

手紙は黒く焼け、灰になって呆気なく消えていく。同じように手紙の内容も、頭から消えればいいのに、とカミラは思った。

両親がテレーゼを養子にしたこと。王子が結婚すること。カミラを追いやったリーゼロッテが、シュトルム家に近付いていること。読んでしまった手紙の文字たちが、頭の中で渦を巻く。

大丈夫。

息を吐くと、うつむく代わりに唇をかむ。視線を下げるなんてごめんだ。下なんて見ない。

泣いたりなんかしないわ。

ただ、悔しいだけ。腹が立つただけだ。だから、王子にもリーゼロッテにもテレーゼにも、両親にだって目に物を見せてやる。

アロイスを利用して、色男にしてみせて、後悔させてやるのだ。

そう思えども、カミラには理想の未来が上手く想像できない。

美男子に仕立てたアロイスに羨望の目を向け、そのアロイスを連れたカミラに齒噛みする。王宮の人々、社交界の令嬢たち、みんながあつと驚いている。両親はカミラに謝罪し、リーゼロッテは悔しがり、ユリアン王子はカミラを失くしたことを後悔する。

頭の中には、たしかに理想図がある。悔しい気持ちも、見返したい気持ちも間違いなくある。

なのに、以前のように鮮明に思い描けないのは、どうしてだろう？

4 (1) - 1 (後書き)

本章から、感想欄を一時的に閉じます。
これまでたくさん感想をありがとうございました。

カミラがモーントン領へきて、七か月目。モーントン領は、冬の盛りにあった。

ゾンネリヒトの北端に位置するモーントン領は、王都に比べて寒さが厳しい。領都周辺はさほど雪は多くないが、湿地帯が多く、湿度の高いモーントン領は、全般雪が多かった。

アインストは大丈夫かしら。

カミラがアインストから、領都の本邸へ戻ってきたのは、十数日前のことだ。

アインスト地下の魔石鉱脈を調べ終え、復興の足掛かりも整えば、アロイスがいる必要もない。グレンツェと領都の人員をいくらか残し、アロイスはカミラともども、アインストから引き上げた。

そのアロイスは、領都に帰ってからずっと執務室に閉じこもり、たまりきった仕事を片付けている。この冬が終われば、春と共に新しい年が訪れる。年の入れ替わる前に、始末をつけておかなければならないことが、この世には無数にあるのだ。

対するカミラは、さほどすることがない。もう半年以上もモーントン領にいるが、カミラの身分はいまだ曖昧なまま、アロイスの客人扱いだ。

やることと言えば、ニコルと話をするか、アロイスと気の進まない勉強会をするか。あるいは。

「おい！ 手元を見る手元を！ 焦げてんじゃねーかー！」

はっと気が付いたときには、すでに手遅れだった。カミラの手に

したフライパンが、不吉な煙を上げている。煮詰まったソースが黒く色づき、微かに焦げ臭い。慌てて火からおろしたところで、もはやどうにもしようがなくなっていた。

苦々しい顔をするカミラの横から、遠慮のない怒声が響く。

「料理中にぼーっとしてんじゃねえ！ 危ないだろうが！」

「ぼーっとなんて！ ……してたわよ！ 悪かったわー！」

「謝るんだったら、せめてしおらしい振りくらいろー！」

カミラを叱りつけるのは、赤い髪に四角い顔の中年男。見た目にすぐわぬ繊細な料理人、ギンターだ。

「俺が教えてやってるんだ、手元をおろそかにするんじゃねえ！ 材料だってただじゃねえんだぞ！」

「わかってるわよ！ だから、悪かったって！」
「胸張って言うことじゃねえだろー！」

素直に謝ったというのに、ギンターは不服そうだった。怒鳴り声が厨房に響けば、「きびしすぎ！」だの「言い過ぎだ！」などと周囲から野次が飛ぶ。

野次を飛ばすのは、ギンターと同じくモンテナハト家の料理人たちだ。

「料理長、せっかくの女つ気なのに、辞めちゃったらどうするんですか！」

「あいつ目当てじゃない女の子がどれほど貴重か、わかってるんですか！」

「うるせえ！ こんなんで辞めたら、いつそせいせいすらあー！」
そうだ、そうだ、と上がる声に、ギンターはうつとうしそくに一喝する。しかし、それでも軽口は止まらない。またすぐに、どこからともなく声が飛ぶ。

「手加減つてもんをしてくださいよ。相手は女の子なんですから！」
「手加減されるなんてごめんだわー！」

反射的に、カミラは野次に言い返す。厨房に響きわたるカミラの声に、ヒュウ、と口笛めいた音がした。

昼下がり。夕食には早い時間帯。人の少ない厨房には、夕食の仕込みをする数人の料理人たちがいる。彼らのほとんどがカミラの存在に慣れた様子で、気負う気配もない。

カミラが声を張り上げても、彼らは肩をすくめて笑うだけだ。「言うねえ」「かつこいいぜ！」などと手を叩く者たちまでいる。

それが不愉快だった。

馬鹿にするんじゃないわ。

「甘く見ないでちょうだい！ 本気で来たって、叩きのめしてやるんだから！！」

「じゃあまずは焦がさないようにしろ！」

苛立つカミラの頭をわしづかみ、ギョンターが怒り半分、呆れ半分に言った。それから、周囲の野次馬たちを睨み回す。

「てめえらも、遊んでんじゃねえ！ この女に抜かされなくなかったらまじめに手を動かせ！」

ギョンターが言えば、周囲は笑いながら顔を見合わせ、のろのろと自分たちの作業に戻っていく。仮にも料理長。厨房での地位はカミラよりも高い。それが、ますます腹立たしかった。

カミラがギョンターと出会ったのは、アインストへ訪問するより前のこと。彼を料理長と知らずに勝負を挑み、敗北して以降。カミラは時間を見ては、厨房に足を運んでいた。すべてはギョンターの料理の腕を盗み、彼の料理に勝利するためだ。

負けず嫌いなカミラを、ギョンターは、文句を言いつつも教えてくれていた。

そうこうするうちに、厨房の料理人たちに顔を覚えられてしまった。はじめはカミラの存在に驚いていた人々も、今はもう慣れたもの。カミラの怒鳴り声にもひるまず、軽口を叩くようにまでなっていた。

いや、軽口程度であれば良かった。

モンテナハト家の料理人は、ほぼすべてが男だ。モーントン領で

は、料理はたしなみ。男女区別なくするものだが、仕事となるとまた少し話が違う。

料理はモーショントンでは価値のあるもの。だからこそ、名誉ある仕事でもあった。女子供が遊び半分になれるものではない。

ゆえに、厨房に立つカミラの存在は、彼らの好機の的だった。

「おい、気にすんなよ。あいつらも悪気があるわけじゃないんだ」「わかつているわ」

カミラはそう言う、唇を引き結んだ。

相手は料理を仕事とする男たち。四六時中ナイフを握り、鍋をかき混ぜているのだ。時間の空いたときに、ちよつときてすぐに帰るカミラなど、「料理を習いに来たお嬢さん」に過ぎない。厨房の客人で、よそ者で、ギウンターの怒声を受けるのは、「かわいそうなこと」。

「……どうしたんだよ、元氣ねえな」

黙ったまま言い返さないカミラを見て、ギウンターはいぶかしそうに顔をしかめた。

「普段なら、もっとこう『見返してやるわ！ さっさと次の料理を教えなさい！』って言うところだろう」

「私をなんだと思ってるのよ」

「厨房にいる間は、お前は生意気で未熟な料理人だ」

渋い顔のまま、ギウンターはカミラの顔を覗き込む。厳めしい顔に見つめられ、カミラは「ぐ」と言葉を詰まらせた。

「下手くそには負けず嫌いだけが武器なんだ。それを失くしたらお前にはなんもねえぞ。どうしたんだ」

どうした　そう問われても、カミラ自身が答えを持たない。

考えるように、カミラが視線を伏せたときだった。

「あれー、珍しい。厨房に女の子がいるじゃん！」

厨房の入り口近くから、聞きなれない男の声が響く。軽薄そうな

その声とは対照的に、厨房の男たちの重たいため息が印象的だ。カミラの隣で、ギョウターまでが頭を抱えている。

なにごとかと、カミラは声の方向に目を向けた。

「へえ！ ちょっときつそうな感じ！ でも黒髪いいじゃん。ねえ君、俺のこと知ってる？」

「知らないわ」

視線の先にいたのは、明るい茶色の巻き毛に、同じ色の瞳の若い男。柔和で端正な顔立ちに、細い体の繊細な美貌は、たれ目であることを除けば、どこことなくユリアン王子を思わせる。だが、その容姿を台無しにするほどに、表情には軽薄さがあつた。

もちろん、カミラはこの男に面識がない。服装からして、厨房で働く使用人らしいとはうかがえる。しかし、これまでも何度も厨房に通ってきたカミラにも、この男には見覚えがなかった。

「そう。じゃあ覚えて帰って。俺、クラウド」

カミラの切り捨てるような返答にも怯むことなく、クラウドと名乗った男は笑いながら答えた。そして、うんざりとした厨房の空気をかき分けるように、悠々とカミラの前まで歩いてくる。

足を止めたのは、カミラの真正面。カミラのきつい視線をまっすぐを受けても、クラウドはへらへら笑い、あるうことがウインクまでしてきた。

「クラウド・レルリヒ レルリヒ家の長男で、将来有望な天才料理人。恋人は、今はなし」

よろしく、と言って、クラウドはカミラに手を差し出した。

クラウス・レルリヒ。

レルリヒ男爵家の長男で、しばしば話に出ていた、例の厨房のサボリ魔である。ギンターは、カミラにそう耳打ちした。

年は二十。その整った容姿と家柄、話しやすい性格から、屋敷の若い娘たちからはたいへん人気があるらしい。一方で、厨房に来る娘たちを片っ端から口説くため、同じ料理人たちからは蛇蝎のように嫌われているのだとか。

しかし、彼がどれほど仕事をサボろうが、女にうつつを抜かそうが、他の料理人たちは文句を言えなかった。その理由は三つある。

第一に、彼がレルリヒ男爵家の長男だからである。

モンテナハト家の使用人は、その大半が、力ある三つの貴族家につらなる。そして、それぞれの家のつながりも深い。順当にいけば、いずれはレルリヒ家の当主となるであろう男に、媚は売っても喧嘩などはそうそう売ることとはできなかった。

第二に、彼が天才だからだ。

彼の同輩に、技術で並び立つ者はいない。それどころか、菓子作りの腕前はギンターさえをしのぐ。彼が女遊びに励んでも、どれほど仕事をサボっても、惜しいだけの腕がある。毎日まじめに、熱心に料理に打ち込む人間の努力より、彼のほんの数時間の料理の方に価値がある。

彼の作る料理は、味が優れているのはもちろんのこと。見た目にも華々しく、人の努力をあざ笑うように美しい。

第三に、彼はアロイスのお気に入りである。

クラウドがレルリヒ家の放蕩息子であり、父親に勘当同然に家を追い出されたのは、誰もが知っていることだ。そのまま、モントンを領を離れようとした彼を引き留め、モンテナハト家に置いているのは、アロイスの意向である。

モンテナハト家に来てもお、その墮落した性質は治らず、アロイスにさえ無礼を働く始末だが、当のアロイスはほとんどクラウドを咎めない。どれほど周りがクラウドの横暴を訴えても、アロイスは彼を重用し続けた。

ひとえに、クラウドの作る菓子の美味さに参ってしまったせいだ。とは、もつぱらの噂である。

クラウドは焼き上げたビスケットに、卵白を混ぜた砂糖で色を描く。

赤、青、白、黄色。慎重に色を重ねながら、描いていくのは、鮮やかな花びらだ。ビスケットの形に合わせて花卉を描き、重ね、本物の花のように彩っていく。

それは、菓子作りというよりも、絵画に似ている。精緻な色の塗り重ねだった。

「きれいでしょ」

思わず目を奪われるカミラに、クラウドは軽率に笑った。描いたばかりの白い花をカミラに見せ、どことなく自慢げに口を曲げる。

「これ、ブルームの名産。ゼーンズフトの花。知ってる？」

「いいえ」
白い花には、うつすらと赤い色が滲んでいる。花びらの一枚一枚は細く、先端が丸い。華やかでありながら、どこか柔らかな印象を与えた。

王都ではあまり見ない花だった。モントン領に来てからも、同

じ花を見たことはない。

「春になると一斉に咲いて、香水の原料にもなる。ゼーンスフトの^{あこがれ}花。黒髪がきれいな君に、あげるよ」

そう言つと、クラウスは返事を待たずに、カミラにバスケットを押し付けた。

手のひらよりも小さな花を手には、カミラは眉をしかめる。

どうやったら、こんなものが作れるのかしら。

クラウスの態度は気に食わないが、作り出すものは本物だ。見ていてわかってしまう。才能というものは確かにあつて、それは本人の性質とは一致しない。

どうやらこれらのバスケットは、アロイスのために作られているらしい。

彼は気が向いたときに、ほんとうにたまに、アロイスのために料理をする。作るのはたいいてい、鮮やかな菓子だった。

こういうとき、クラウスは厨房の視線を一身に集める。彼の鮮やかな腕を盗み、その座を奪おうと思う野心深い料理人たちが、一挙手一投足を見守るのだ。

しかし、クラウスは視線を意にも介さない。盗めるものなら盗んでみる、とでも思っているのだろうか。薄く笑いながら、作り上げたバスケットを、底の深い皿に飾り付ける。

「それでこつちは」

カミラに渡した以外のバスケット。皿の上に彩られた、花畑のようなそれを見下ろして、クラウスは口を曲げた。

手近に置かれたメープルシロップの瓶を取り、おもむろにふたを開けると、そのまま花畑の上にひっくり返す。黄金色のシロップがなみなみと満ち、花は飲まれ沈んでいく。

クラウスは目を細め、嘲るように口ずさんだ。

「ほーら、あつという間に豚のエサ」

反射的に、カミラはビスケットを調理台の上に叩きつけた。

「なんですって……!？」

ビスケットは割れ、花模様も砕ける。惜しいとは思わなかった。美しいとも、もう思わない。

「あなた今、なんて言ったの」

「あ、怒るんだ？」

睨みつけるカミラに対し、クラウドは意外そうに肩をすくめた。

「ただど手は止めない。空になったシロップの瓶を置くと、今度は色づいた砂糖の粒を、さらに上から振りかける。」

「だってそうじゃん。こんなの、豚以外の誰が食べるの？ 君、食べたいと思うの？」

「あなたの主人が食べるものなのよ!？」

「だからなに？ 主人が食べるからって、こんな砂糖のかたまりが美味しくなるわけないじゃん。だいたい主人って言っても、俺あいつ嫌いだし」

「嫌いって！ だって……モンテナハト家の伝統なんでしょう!？」

モンテナハト家の主人には、最高の料理を提供する。最高の料理とは、高級品である砂糖と塩、そして油をふんだんに使ったものなのだ。

アロイスもゲルダも、そう言っていた。カミラ自身も、『おかしい』とは思っていたけれど。

以前のカミラであれば、クラウドの言葉に同意をしていたかもしれない。言っている内容だけであれば、カミラは同じことを思っている。アロイスの食べるものは、まともではない。人間の食べるものではないし、カミラだって食べたいとは思わない。

なのに、どうしてこんなに腹が立つの。

「でも俺、モンテナハト家じゃないし」

悪びれずに言いかけたクラウドの声が途切れる。

代わりに、彼の頭に拳が落ちた。

「いい加減に黙れ」

「いったー……料理長、手加減してくださいよ」

クラウスの軽口に、ギウンターは答えない。彼の頭に拳を置いたまま、厳めしい顔をこわばらせ、カミラに顔を向ける。

「お前はもう戻れ」

「私が！？ 出て行くのはあいつじゃない！」

「怒鳴るだけで手を動かさないやつは、厨房にはいらねえんだよ。お前今日、ぜんぜん集中もできてねえだろ。ちよっと頭冷やして来い」

「怒らせたのはあいつだわ！」

怒り任せにクラウスを指させば、彼はとぼけたにやけ顔のまま、カミラに向けて手を振った。出て行くのはお前だ、とでも言うつもりだろうか。

「だけど怒ったのはお前だ。とにかく一度落ち着いてこい。いくら怒鳴ったって、こいつは聞かねえんだから」

ぐつとカミラは唇を噛む。ギウンターはあくまで、カミラを追いつつも出ずつもりだ。

厨房の邪魔をしているのは、間違いなくカミラ一人だ。アロイスへの侮蔑に、他の誰も腹を立てない。クラウスはそういうものだとみんな割り切ってしまったている。

悪いのは間違いなく、クラウスだというのに。

出て行けと言うのなら、出て行ってやるわよ！

こぶしを握り締めると、カミラは苛立ちをかみ殺した。荒々しくきびすを返せば、今度は背後から挑発的な声が飛ぶ。

「またね。今度きたら、菓子作りを教えてあげるよ」

「菓子なんて作らないわよ！」

「なんで？ 俺が教えたらすごいよ。食べさせたい相手とかいないの？ すっげー男受けいいと思うんだけど」

相手は俺でもいいよ、などと笑うクラウドを、カミラはぎっと睨みつけた。

「食べさせたい相手はいるわよ」
それはもちろんクラウドではない。アロイスでもない。

そう、相手はアロイスでもない。
いつだって、ただ一人だった。

「だから、菓子は作らないの」
捨て台詞のようにそう言うと、カミラはクラウドに背を向けて、大股で厨房を出て行った。

「ああ、クラウスに会いましたか」

厨房を飛び出したその足で、告げ口に來たカミラに対し、アロイスは苦笑しながらそう言った。

場所は彼の執務室。アロイスは、どうやら書類仕事だったらしい。書類の束が山のように、アロイスの両脇に控えている。

しかし、現在仕事の手は止まっている。怒り心頭のカミラを前に、無視するのは得策でないとでも思ったのだろう。

忙しいアロイスの邪魔をするのは、カミラとしても心苦しい。申し訳ないと思わないでもない。思わないでもないが、二の次なのだ。「会いましたか、じゃないわ！ 私の話、聞いてました！？ アロイス様の食事を、豚のエサだって言ったんですよ！？」

豚。

カミラ自身も、さんざん肉だのカエルだと罵ってきた身。人のことを言える立場か、と言われれば反論の余地もないが、言われてないから問題はない。

少なくとも、カミラは豚とは言っていない。カエルよりも直接的な言葉のぶん、嘲りの意味も強く感じられた。

「だいたい、アロイス様はもう豚というほどの体じゃないのに！ちよつと人より肉厚なだけだもの！！」

アロイスと出会ってから七か月。もはや彼の首が肉に埋もれることも、顔が肉に隠れることもない。ヒキガエルと呼ばれた顔も、アインストで買い占めた薬のおかげで、少しずつましになってきている。

カエル脱出までは、あともう少し。その厚めの肉を全体的に削ぎ落し、むちむちの手足に筋肉をつけ、服装や髪形を、人目を気にして整えてくれればいい。肌は最悪、化粧で隠せる。

「ありがとうございます　　でいいんでしょうか」

アロイスはどこか自嘲気味に、しかし珍しく声を上げて笑った。傷ついた様子がないのは、カミラの性格を分かっているからだろうか。

いや　。

「よくない！」

カミラの性格を分かっているなら、笑ってはいけなかった。

「ありがたくななんてないわ！　こんなこと言われて、悔しくないんですか！　見返そうとは思わないんですか！？」

自分で言ったくせに、カミラは自分で腹が立つ。それなのにアロイスはけろりとしているものだから、一人で怒る自分が馬鹿みたいで、余計にしゃくだった。

「そうやって言うてくれるのは、あなたかクラウドくらいですよ」

アロイスは肩をすくめると、堪えた様子もなくそう言った。

「あれはいい男でしょう」

「いい男！？」

どこをどう見ていい男などと言えるのか。信じられない気持ちで、カミラは繰り返した。

たしかに、顔は悪くなかった。身なりも、アロイスに比べたらずっと気を遣っているのがわかる。巻き毛の髪をきちんと整え、いささか堅苦しすぎる使用人服を、だらしない程度に着崩して、なかなか洒脱な雰囲気もあつた。

色白で、どこことなくはかなげな容姿は、どこことなくユリアン王子に似ているとさえ思った。

だけど、態度でなにかも台無しだ。クラウドなど、不真面目で立場もわきまえられない無礼者でしかない。

それにそもそも、カミラは軽薄な男が大嫌いなのだ。

「いい男なんかじゃないわ！　あんな男よりも、ずっとア
ア。」

言いかけて、カミラは反射的に言葉を飲み込んだ。

先ほどのまでの熱が、ずっと冷めていく。勢い任せに出てきかけた言葉の違和感に、カミラは瞬いた。

息を吐くと、カミラは視線を伏せた。不自然な沈黙は、長いようで短い。わずかな間の後、カミラは妙に冷静な声で、言葉の続きを吐き出した。

「ユリアン殿下の方が、ずっといい男だわ」

内心は、きつとクラウドのことなど、もうどうでもよくなっていた。

「殿下と比べてはかわいそうですよ」

カミラの言葉に、アロイスはため息に似た笑い声を落とした。表情には、かすかな寂しさが見える。

「人柄も容姿も優れた方ですし　　なにより、あなたが恋した相手ですから」

「……………ええ」

恋をした。本当に好きだった。でも叶わなかった。失恋と同時に、手ひどい仕打ちを受けた。

それでも、今もカミラは忘れられない。

カミラにとつてのいい男は、いつだってただの一人きりだった。今までも、これから先も、ずっとそのはずだ。

未練がましくたって構わない。ずっと好きだったんだもの。

「ユリアン殿下よりいい男なんていないわ」

言い聞かせるようにそう言うと、カミラは両手を握りしめ、顔を上げた。

視線の先に、アロイスがいる。彼は目を伏せている間も、ずっとカミラを見ていたらしい。赤い目が、カミラを映して細められる。

「本当にお好きなんですね」

「そうよ。ずっと好きだったんだもの」

ふん、と顎を逸らして言えば、アロイスが言葉にしがたい息を吐く。それから、カミラから目を離さないまま、ためらいがちに尋ね

た。

「どうしてお好きになられたのか、お聞きしても？」

カミラは眉間にしわを寄せ、アロイスをじりとにらみつけた。

カミラがユリアン王子と出会ったのは、今から十と一年前のこと。
まだ、カミラが七歳の時だった。

出会ったのはほんの偶然。ちょうどカミラが、両親と共に王城を訪ねていた時だった。

あの頃からカミラは短気で、かんしゃくを起こしやすい性格だった。あの日もなにか些細なことで機嫌を損ね、両親の元を逃げ出したはずだ。

一人で王城を歩いていたときに、カミラはユリアン王子に出会った。当時は相手が王子と知らず、まったく物おじせずに声をかけた覚えがある。

ユリアン王子は一人きりだった。どことなく物憂げで、びっくりするほどきれいな男の子だった。それで、とても寂しそうだった。だからカミラは、手に持っていた菓子あげた。それはカミラが、生まれて初めて作ったバスケットだった。

ユリアン王子は少しのためらいの後、バスケットを受け取り、食べてくれた。

子供の手で作った、形の歪んだつたないバスケットを、おいしい、と言ってくれたのだ。

誰かに「おいしい」と言われたのは、それがはじめてだった。

「それだけですか？」

アロイスが瞬き、カミラを見やった。
だが、話の続きはない。

これがすべてで、カミラにはなによりも大切なことだった。

「それだけです」

カミラは言った。思いがけず強い言葉に、アロイスがはっとしたように目を見開く。

驚いた瞳がカミラを映す。アロイスがなにに驚いているのかは、カミラ自身も察していた。

「なにか、文句でもありますか」

不機嫌な声は、かすかに震えていた。

顔が赤くなっているのが、カミラ自身でもわかる。悔しさに両手を握りしめ、アロイスを睨みつける。

気の強いカミラの瞳が潤む。泣いてたまるかと唇を噛むほど、悔しくてたまらなくなる。

羞恥と怒りと胸の痛み。言わなければよかったという後悔。それから、捨てきれない恋情が、カミラの中でないまぜになっている。

たったこれだけで、カミラはもう十年以上もユリアン王子が好きだった。

そのの、なにが悪い。

幼い日のことを、カミラはこれまで、誰にも話したことはなかった。テレーゼにはもちろん、両親にも、友人にだって話したことはなかった。

些末なことと一蹴され、笑われるとわかっていたからだ。そんなことで人を好きになるのかと、カミラの恋を軽んじられるからだ。くだらないことだと、切り捨てられなくなかったからだ。

もしかして、中には真面目に聞いてくれる人もいたかもしれない。

それでもカミラは、話すことが怖かった。

カミラが生きてきた中で、一番大事な日のことを、笑われなくなかったのだ。

「いえ」

カミラの震える瞳を見つめながら、アロイスは否定した。

「うらやましいと思いました」

「うらやましいですって？」

眉根を寄せる不機嫌なカミラに、アロイスは頷いた。真摯な赤い目が、カミラをまっすぐに映して瞬く。

「私がその場にいても、同じことをしましたのに。あなたと出会えた殿下が、うらやましい」

アロイスは笑いもしないし、馬鹿にもしない。

真面目な顔をして、それ以上に真面目な声で、そんなことを言った。

「おつ。今日のご機嫌みたいだね」

翌日、カミラは厨房で軽薄な声をかけられた。

食料の買い出しだのなんなので、人の出払った時間帯。誰もいないと見越した厨房に人がいることは、カミラにとって予想外だった。「なにかいいことでもあった？」

声に顔を向ければ、気に食わない男の姿がある。昼寝でもしていたのだろうか、壁際にある食材を詰めた木箱の上に、彼は横たわっていた。

「なにも。でも、あなたの顔を見て機嫌が悪くなったわ」

カミラが眉根を寄せても、クラウスはあくびを返すだけだ。億劫そうに半身を起こし、根乱れた髪を無造作にかく。

「君って浮き沈みが激しいねえ。でも、そのうち俺の顔を見るだけで嬉しくなるよ」

ゆるく微笑みを向けると、クラウスは木箱の上に座りなおした。それから、作業台の前にいるカミラの様子をあらためて眺める。

カミラの前にあるのは、玉ねぎ、にんにく、キイチゴのジャム。ここ数日、ギョンターが厨房の若手に練習させているソースの材料だった。

カミラの手にはナイフ。かまどには火が入り、使い込まれたフライパンが用意されている。これから何をしようとしていたかは明白だった。

「秘密の特訓でもするの？ 勝手に食材使ったら怒られるんじゃない？」

あはは、と軽い調子でクラウスは笑った。

馬鹿にされているような気がして、カミラはどうにも気に食わない。ふん、と鼻で息を吐くと、クラウスを睨みつける。

「今までだって勝手にやってきたわ。でも、誰にもばれたことないわよ」

「そうかな？ 在庫が減ってたら気が付くでしょ。料理長は気にしないだろうけど、伯母さんは目ざといからなあ」

おばさん　と聞いてから、ゲルダと結びつけるまで、少し時間がかかった。

モンテナハト家の侍女長ゲルダ。カミラに憎しみめいた敵意を向ける彼女は、見た目からして生真面目、頑固、そのうえ陰気である。軽薄以外に形容のないクラウスとは、まるで正反対に思えた。

しかし、ゲルダはレルリヒ家当主の姉。そして、クラウスが当主の長男であるのならば、すなわち伯母と甥の関係にあるのだ。

「あの人、塩の一粒だって見逃さないって感じてしょ。食料の減りが早いのもすぐに気づくよ」

「でも、なにも言われたことはないわ」

「なら、見逃されてるだけだね」

クラウスの口ぶりに、カミラはむっとする。ゲルダの手の中で踊らされている、ということだろうか。

見逃されるってなによ。

相手は一介の使用人。カミラは　微妙な立ち位置だが、身分的にはゲルダよりも上である。カミラの行動に文句を付けられるのは、屋敷の中ではアロイス一人くらいのはずだ。

「それはありがたいことだわ。じゃあ、堂々とやらせてもらっわよ」
八つ当たり気味にクラウスを睨みつけると、カミラは胸を反らし、背筋を伸ばした。

冬場の食材を浪費することに、内心の罪悪感がないわけではないが、上達には致し方なし。練習に失敗はつきものなのである。

とまあ、開き直りは得意なのだ。

「……………なるほどねえ」

図々しいカミラの態度を眺めながら、クラウスはため息のように

言った。頭をひとかきすると、なにを思ったか立ち上がり、カミラの近くまでやってくる。

カミラは、それを無視して、野菜を切り始めていた。傍でクラウドが見ているのは落ち着かないが、できるだけ気にしないようにする。堂々と言ったからには、こんなことで動揺するわけにはいかないのだ。平常心である。

「あんだ、本当にアロイスと結婚するの？」

「はあ!？」

突然の言葉にカミラの肩が跳ね、甲高い声が口から出た。顔を上げ、思わずクラウドに目を向けてしまう。

「な、違、まだそうと決まったわけじゃ……!」

「そうなの？ でもあいつを痩せさせたのって、あんだだよね」
「そ」

そうなるのかしら。

アロイスを痩せさせようと、躍起になっていたのはカミラだ。だが、グレンツエでの一件以降、カミラからアロイスにどうこうしたことはない。カミラがなにも言わなくとも、アロイスは徐々に食事を減らし、自ら体重を落としていった。

カミラがアロイスに与えたのは、最初のきつかけ程度。これで、痩せさせたと言えるだろうか。

ぐるぐる悩むカミラの内心を、クラウドは知らない。止まった手を眺めながら、彼は腕を組み、微かに首を傾げる。

「あんだ、あいつのこと好きなの？」

「は、はあ!？ さつきからなんなのよ!」

無遠慮に投げられるクラウドの問いに、カミラは声を荒げた。無礼にもほどがある。

「あんだ、わかりやすいなあ」

動揺するカミラの前に、クラウドこそが堂々としたものだった。腕を組み、先ほどまでとは変わらない、軽薄さの見えるヘラヘラした顔で、カミラの顔を覗き込んだ。

「どこがいいの。あんな、なに考えてるかわからない男」

だが、言葉はひやりと冷たい。カミラは冷や水でも浴びせられたように、目を見開いてクラウスを見やった。

「なに」

「あいつ、簡単に痩せたでしょ」

カミラの視線を受け、クラウスは軽薄な笑みを深める。

「おかしいと思わなかった？　だってあいつ、やろうと思えばすぐに痩せられたんだよ。なのに、ずっと豚のヒキガエルでいたんだ。意味わかんないじゃん。なんのために、って考えなかった？」

カミラは目を眇める。口説くときと同じ口調で語るこの男こそ、カミラにとっては『なにを考えているかわからない男』だ。

そして、心底気に食わない。

理由は　きつと、この男がアロイスを侮辱しようとしているからだ。

「モンテナハト家の伝統なんでしょう。濃い味付けで、たくさん食べるのが」

「でも、破ってもなにも言われない伝統でしょ」

現に、アロイスは伝統を破りつつある。濃い味付けは変わらないが、食事はぐっと減った。八食だった食事が、今は三食と茶会の菓子だけ。量も、同じ年ごろの男よりも、少し多いくらいになっている。

そう、減らそうと思えば減らせた。アロイスはこれまでの食事を惜しむことなく、原料にありがちな、「やめようやめよう」と思いつつ、つい食べてしまう「みたいなこともなかった。

アロイスの食事を減らすとき、古い使用人たちは反発をしたらしいが、それでも主人の命には逆らえない。伝統を破るなんて、難しいことではなかった。

でも。

「おかしいとは思わないわ」

カミラはクラウスを睨みつけたまま、刻みかけの玉ねぎに、勢い

よくナイフを下した。ざくりとナイフの刺さった玉ねぎに、クラウド스가ぎよつと肩をこわばらせる。

「伝統を破ってでも 変わろうと思うことが、一番難しいんだもの！」

「う、うん」

怯んだようにクラウドスは頷いた。こくこくと頭を振りながら、カミラから離れるように足を引く。どうやら、カミラのナイフが自分に向くことを恐れているらしい。

「あんた、あいつのことちゃんと好きなんだな」

「違うわ！」

反射的に、カミラは否定する。たぶん、頭に血が上り過ぎていたのだ。

言わなくていいことまで口にしてしまうくらいには。

「誤解しないで！ 私が好きなのは、ずっと ずっとずっと、ユリアン殿下なのよ！」

「えっ」

「えっ」

戸惑いの声が一つ多い。

二つ聞こえた声のうち、一つは目の前のクラウドスが放ったもの。もう一つは、それよりももっと低い、中年男のものだった。

顔を向ければ、厨房の入りに、見覚えのある男が立っている。

驚愕に目を見開き、傷ついたように口を開く、厨房の主。ギョーターだった。

厨房の外で、カミラはクラウスを睨みつけた。

「あなたのせいで追い出されたじゃないの！」

「いやあ……あれは俺、悪くないと思うんだけど」

カミラと共に追い出されたクラウスが、伸びをしながら言った。
料理長たるギュンターに追い出されたというのに、たいして気にした風もない。

「あの料理長、真面目すぎるというか、潔癖なところがあるんだよなあ。そんなんだから、今も独り身なんだよ」

「あなたは不真面目過ぎだわ」

カミラは頭に手を当てて、苦々しさを吐き出した。

カミラのうかつな発言は、ギュンターをたいそう傷つけた。

ユリアン王子が好き、と言った時のギュンターの表情は、筆舌に尽くしがたい。厳めしい角ばった顔をゆがめ、呆けたように目を見開き、ぽかんと口を開けていた。威勢のいい赤い髪も、どこことなく暗く見えた。

彼は、繊細な料理の腕に見合った、繊細な心の持ち主であったのだ。自分自身のことでもないのに、見ている方が痛ましい様子で、「出て行ってくれ」と力なく言われては、図々しく居残ることは難しい。

おまけにカミラは、「しばらく厨房には来ないでくれ」とまで言われてしまったのだ。苦い気持ちにもなる。

カミラを追い出した厨房の扉は、今は閉め切られている。
中ではギュンターが一人きり。泣いているのか嘆いているのか、不気味に静まり返っている。その扉を一瞥し、カミラはため息をつ

いた。

それを、クラウドは意外そうに見やる。

「あんたって、意外とこういうの気にするんだね」

「どういう意味よ」

カミラが不機嫌に言えば、クラウドが目を細める。カミラの嫌いな、彼特有のへらへらした笑みだ。

「いや　かわいいなあと思って」

カミラは顔をしかめ、クラウドから顔を逸らした。あからさまな態度だが、クラウドは堪えない。声の調子を変えず、カミラに呼びかける。

「ユリアン殿下が好きって本当？　君を捨てて、エンデ家の娘を選んだやつだよな？　そんな目に遭っても、まだ好きなの？」

「私の勝手だわ」

「そう。へえ。ふーん」

クラウドは相槌を打ちながら、逸らしたカミラの顔を覗き込んだ。ユリアン王子に少し似た、線の細い端正な顔が、意地悪そうに歪む。軽薄な瞳の中には、どこか肉食獣めいた、狙いすました光が見えた。

「そんなひどい男、忘れちゃいなよ」

柔らかい声でクラウドは言った。言いながら、自分の胸に手を当てる。腰を少しかがめ、カミラの目を見ながらうそぶくその態度は、気障でありながら、よく似合っていた。

「一途な君に、そんな男は似合わない。俺の方がずっといい男だよ。優しいし、好きになった女の子は傷つけない。殿下に比べれば身分は低いけど、俺は天才だからね。生活に困るようなことはさせないよ」

女心をくすぐるような、柔らかい声。堂々と語る、恥ずかしいくらい言葉たち。冗談と本気の境にある、人を惑わすような表情。みよくに気取っているくせに、滑稽にならない仕草まで、クラウドはユリアン王子を彷彿とさせた。

人に見られることを知っている男だ。それに、相手がどう思うかも、よくわかつている。そういう計算高さまで含めて魅惑的で、娘たちは心を奪われてしまうのだ。

「黒髪の憧れの人。^{ゼンズフト}俺を選びなよ。ユリアン殿下でも、あいつでもなく」

だが、クラウドはユリアン王子ではない。
「結構だわ」

カミラは短くそう言うと、クラウドを置いて歩き出した。厨房から離れて、自室へと戻ろうと考えていた。クラウドなど、はじめから相手にするつもりはない。

「待つてよ」

後から、慌ててクラウドが追いかけてくる。早足で歩くカミラに追いつくと、並んで歩きだす。

「つれないなあ。ねえ、俺にも可能性はあるって思わせてよ」

「あるわけないでしょう」

カミラは足を止めず、前を向いたまま言った。

「あなた、自分の立場わかっているの？ 男爵家の跡取りなんですよ。そんな軽薄な態度でいたら、痛い目に遭うわよ」

王都にいる間も、火遊びが好きな子息令嬢はいたものだ。

たしかに、上手くやる人間は上手くやる。若いころは散々遊び回ったくせに、良い伴侶を得て、過去を帳消しにしてしまえる者もいる。

だが、失敗する人間だって山のようにいた。どこの馬の骨とも知れない相手の子を産んで、家を追い出された娘もいた。火遊びが過ぎていけない相手に手を出し、身を滅ぼした男もいた。

そして、そういう破滅は、家の醜聞にもなる。社交界の噂、そして嘲笑の種として、当人だけにとどまらない負債となるのだ。

カミラだってそう。傍から見れば、そうやって不相応の恋に興じ、家名に泥を塗り、身を滅ぼした人間の一人なのだ。

「俺はいいんだよ」

カミラの身を切るような説得も、しかしクラウドには届かない。

彼は柔らかなような巻き毛をかいて、無責任に笑った。

「跡を継ぐ気なんてないんだから。家のことは、まじめな弟がなんとかしてくれる」

「……あなた、長男でしょう？」

「関係ないね。親父だつて、ずっと弟を後釜に据える気でいたんだし、弟もそのつもりでいる。こういうのは、向き不向きだよ」

思わず、カミラは足を止める。ずっと前に向けていた視線を、わずかにクラウドに傾ける。

彼は何ということはないように、カミラに小首をかしげて見せた。「どうしたの？ 俺と遊んでくれる気になった？」

どうして立ち止まったのかは、カミラ自身にもわからない。

ただ、なんとなく。

髪色と同じ色の瞳には、享樂さが滲んでいる。何事にも本気ではない、遊び人の顔だ。

「そんな気になることは、永遠にないわ」

クラウドから目を逸らすと、カミラはつんとした声で言い捨てた。そして、今度はクラウドが付いてこないように、さらに早足で歩き出した。

カミラの後ろで、クラウドは肩をすくめただけだった。

なんとなく。

クラウドを置いて、一人。自室へ向かいながら、カミラは顔をしかめた。

仕草や態度は、ユリアン王子に似ていると思った。けどそれ以上に、彼はアロイスに似ている。

そんなはずはないわ。アロイス様はあんなふざけた男じゃないもの。

頭を振って思考を追い払うと、カミラは完全なる八つ当たりで、

強く床を蹴った。

レルリヒ家当主、ルドルフ・レルリヒには二人の息子がいる。

一人は放蕩息子・クラウス。

年は二十。ひねくれ者の遊び人で、ルドルフが手を焼く厄介者だ。いつも町へ出て遊び呆け、家へ帰らない日も多い。貴族としての勉強は投げ出すが、楽器や読書、詩歌といった、モントン領では禁忌の娯楽には熱心に手を出す。常に人を食ったような態度であり、それは目上の人間相手にも変えることはない。他家の貴族や年長者に軽薄な態度で接し、相手を怒らせるのが彼の得意技だった。

父であるルドルフが何度注意しても聞くことはなく、逆に彼を怒らせるばかり。ついに匙を投げられ、クラウスがレルリヒ家を追い出されたのは二年前。そのままモントン領を出ようとしたところを、アロイスに熱心に引き留められ、現在はモントン領にいる。

もう一人は、生真面目で勉強熱心な次男・フランツ。

クラウスより一つ年下のフランツは、兄を鏡にしたような性格をしていた。実直、勤勉、そして、貴族としての誇りを強く持つ。年長者を敬い、歴史と伝統を尊び、人の上に立つ者としての覚悟がある。

決断を迷わず、処断をためらわず、多数のために少数を捨てられる。親類からの信頼も厚い、貴族の理想的な跡継ぎだった。

実際、ルドルフはフランツを跡継ぎに据えたがっている。いささか我が強く、思い込みの強いところはあるが、それを差し引いても、彼はクラウスよりも優秀で、御しやすいように思われた。

だが、いまだフランツはレルリヒ家の正統な後継者とはなってい

ない。

ルドルフの姉・ゲルダが、強く反対をしているからだ。

厨房を追い出されてから数日後。

料理の練習もできなくなった現在。娯楽の類もほとんどないモーション領において、カミラができることはますます少なくなった。

自室でぼんやりするのは性に合わないし、ニコルとおしゃべりばかりしていても落ち着かない。そうになると、あとはアロイスから領地の知識を学ぶくらいしかなくなってしまふ。

おかげさまで、カミラはこのごろのレルリヒ家の事情に詳しくなった。レルリヒ家二人の兄弟や、彼らを取り巻く環境。人望やその他。アロイスはできる限り客観的に伝えようとしていたが、口ぶりからどうやら、クラウスに肩入れしているらしい、とわかってしまふ。

カミラには、どうしてアロイスがクラウスを気にかけるのかわからない。カミラから見れば、クラウスなどだらしないし、いい加減で無責任な男にしか思えない。

いくら跡を継がないからと言って、家名がある限り悪評は家に向かう。ふざけた態度でいれば、迷惑がかかるのは家族や、家に仕える者たち。そして、彼をかばうアロイスだ。

などと、カミラが人のことを言えた義理ではないのだが。

いやいや、あんな男のことを考えてどうするのよ！

アロイスとの勉強会を終え、自室へ向かう道すがら。アロイスから教え込まれたレルリヒの知識を反芻していたカミラは、慌てて頭を振った。

そもそも、どうしてこの土地の勉強なんてしているの！まだ、結婚すると決まったわけでもないのに！

アロイスがキスをできるほどいい男になるまで、結婚の話は保留だった。痩せたとはいえ、まだまだ人よりは太いアロイス。どうにかしてあの無駄な肉を、筋肉に変えなくてはならないのだ。

とにかく運動をさせないといけないわ。

七か月以上をモーントン領で過ごしたが、カミラは一度たりともアロイスが体を鍛える姿や、走り込んでいる姿を見たことがない。急いでいるときや慌てたときには、さすがのアロイスも走ることがあるけれど、すぐに息切れをしている印象だ。思えば、馬に乗る姿すらも見たことはない。これまでの体重では、そもそも乗れる馬が居なかったせいもあるだろう。

なんにしたって、アロイスは明らかに運動不足だ。勉強会で目を輝かせる姿を見るに、きつとそもそも、外に出るより部屋にこもる方が好きなのだろう。

もったいない、とカミラは思う。剣の一つでも振ってみれば、様になるかもしれないのに。いや、剣を振れるなら、あんな体にはならないか。

次に会うときに、散歩に誘ってみようかしら。

いきなり走り込みなんてしても体力はもたないだろうし、まずは外に出ることから始めるべきだろう。

それから、ゆっくりと体を引き締めていこう。時間をかけて、ゆっくり、ゆっくりと。

決断の時を、先延ばしにするように。

「だからあ、何度も言ってるじゃん。俺は跡を継ぐ気はないって」カミラの思考を破ったのは、いら立ったような男の声だった。

「そういうのは、弟に全部任せてきたの。あいつも継ぐ気にいるんだし、余計な口出すことないって」

「無能にレルリヒ家を継がせるわけにはいきません」

次いで聞こえた淡々とした声に、カミラは反射的に身を隠した。モンテナハト邸の廊下。人通りは多くないが、誰もが通りうる場

所で、堂々と話をするのは、クラウドとゲルダだった。

相手は使用人二人。カミラはその主人の　とりあえずは客人。隠れる立場ではまるでないが、苦手な人間二人を前に、口惜しくもつい怖気づいてしまった。

廊下の曲がり角の影、ぴたりと壁に張り付くカミラを、掃除をしているメイドが奇妙そうに見ている。

カミラ自身、傍から見ればおかしいことをしているとわかってる。別の道を通って自室に戻ればいいだけなのだが、なんとなくそれも癪なのだ。

こんなことをしているから、聞き耳ばかり立てる羽目になるのである。

そんなカミラには気が付かず、ゲルダとクラウドは険のある会話を続けていた。

「無能つてさ。伯母さんはただ、あいつは伯母さんの言うことを聞かないから嫌なだけでしょ。あいつは親父と違って、我が強いからね」

クラウドはいつものように薄ら笑いを浮かべているが、不愉快さを隠しきれていないようだった。対するゲルダの方は、カミラのいる場所からでは背中しか見えない。だが、伸びた背筋と、抑揚のない声音は、普段のゲルダと何ら変わりないように思えた。

「でも、俺が跡を継いだって、伯母さんの言うことは聞かないよ。

陰気な町なんてやめて、毎日お祭り騒ぎにしてやる」

「私の言うことを聞かなくても、お前なら上手くやれるでしょう」

「そりゃどうも」

へらへらと笑いながら、クラウドは嬉しくもなさそうに会釈をする。

それから、これで話は終わりとでも言いたげに、クラウドがゲルダの脇をすり抜けようとしたとき。

彼女は相変わらない、感情のない静かな声で言った。

「フ란ツはブルームで、内密に私兵の増強をしているそうです」
「は？」

「野心家の兄にでもそそのかされたのでしょうか。あれはブルームを恐怖で統治するつもりでいます。町の若者を脅して私兵に引き入れているとか、反対派は私刑をしているとの話も。表立った話ではありませんが、仮にもあれはレルリヒ家の人間。内密にするくらいの知恵はあるでしょう」

クラウスはゲルダに振り返ったまま、足を止めている。ゲルダの声音は落ち着き払っているが、饒舌さに彼女の感情が垣間見える気がした。

「あれはブルームをアインストに作り替えるつもりでしょう。魔石の利益と固い一枚岩を、長らくうらやんでいたようです」

「……あの町は、そういうの向いてないだろ」

「それがわからないから無能というのです」

会話の内容はひどくきわどい。人に聞かれて良いものだろうか。そう思うカミラとは裏腹に、クラウスもゲルダも声を荒げないものの、人目をはばかりはしない。実際、彼らの横を忙しそうな使用人が、何人か通り抜けていく。

告げ口が怖くないのかしら。

きつと、怖くないのだろう。クラウスを跡継ぎに据えたい彼女にとつては、現状は声を大にして反対を唱えるべき立場だ。今さら告げ口の一つや二つで、なにかが変わるわけでもあるまい。

それに、カミラに対する敵意だって、堂々としたものだった。モンテナハト家における盤石な地位を持つ彼女に、恐れるものはないのかもしれない。

「そりゃ、俺は天才だけどさあ。伯母さんの思う通りにはならないよ。あんたがなに考えてるかは知らないけど、納得しなければ対立だってしちゃうよ」

「構いません。私がいなくともレルリヒのためになるのであれば。」

……対立する有能はたしかに厄介ですが」

ゲルダが息を吐く。少しの間。背筋を伸ばしたまま、彼女はクラウドスに少しだけ振り返る。

陰気で光のない　　だけど覇気のある視線が、カミラの隠れる廊下の角をかすめた。カミラを睨んだ訳ではないが、それでも心臓が縮み上がる。

「私の強い無能はただの害悪です」

それだけ言うと、ゲルダはこれで話が終わりだと言うように、前を向きなおした。別れの挨拶もないまま、彼女は廊下の奥へと歩き出す。

残されたクラウドスは一人、ゲルダの背中を見て肩をすくめた。一息を吐くと、ゲルダとは反対方向に歩き出す。

つまりは、カミラのいる方である。

「……なにしてんの？」

曲がり角。逃げる機会を逸したカミラを見つけて、クラウドスは呆れたようにつぶやいた。

それはもう、ひどく気まずかった。

レルリヒの跡継ぎ問題がこじれているらしい。

冬の気配が色濃く、肌が痛むほどに寒い日。薄く雪の積もる中庭を散歩しているときに、カミラはアロイスからそんな話を聞いた。

「アロイス様、背筋を伸ばす！」

並んで歩くアロイスの背中を、カミラは手のひらで叩いた。枯れた庭に、ぱしんと乾いた音が響く。アロイスは、音に脅されたように、慌てて曲がっていた背筋を伸ばした。

「は、はい。それでですね、どうにも当主のルドルフでは

収めきれないと、泣きが入りまして」

「顎を上げる！ 視線は前！ 堂々として見せるんです！」

「はい！ ……私は、散歩とはもう少し穏やかなものだと思っていました」

戸惑ったようにアロイスがつぶやくのも、もつともであった。

思い立ったら即実践のカミラが、アロイスを冬の散歩に誘ったのは数日前のこと。アロイスは快諾し、以来、茶会の代わりに中庭を散策する日々が続いていた。

とはいえ二人の「散歩」は、言葉から受け取る印象とはかけ離れていた。アロイスは歩く姿の一挙手一投足を監視され、乱れがあれば逐一注意をされる。散歩とは名ばかりの、カミラによる「見せ方の指導」だった。

背筋が伸びれば腰回りも引き締まるし、傍から見ても印象がよくなるわ。

カミラの目的は、アロイスを痩せさせることだけではない。カミラ自身もほとんど忘れかけているが、いずれは王都に連れ帰り、美

男子になった姿を見せつけるつもりでいた。

立派な貴公子が、背筋を曲げていては様にならない。気品ある仕草や、優雅な物腰を身に着けてもらう必要があるのだ。

「アロイス様、肩が振れています！ 揺らさない！」

「はい　こんな感じでしょうか」

カミラの厳しい指導を、アロイスはさほど苦には思っていないようだった。カミラの忠告を素直に受け、すぐに歩く姿を正す。

さすが公爵と言っべきだろうか。彼は呑み込みがとても早い。あるいは太り過ぎていたがために、体重を支えることができず姿勢が悪くなっていただけなのだろうか。貴族としての身のこなしは、もとから身についていたのかもしれない。

この調子なら、すぐに見栄えの良い立ち振る舞いができるようになるだろう。誰の目に触れても、恥ずかしくなくらいに。

王宮に立つアロイスを想像しかけて、カミラは無意識に視線を伏せた。悔しがるリーゼロッテやテレーゼの妄想が、頭の片隅に追いやられる。代わりに浮かんでくるのは、これまで抱いたことのない感情だった。

カミラの中でもややと渦を巻くのは、薄暗い思いだ。アロイスが変わろうとするたびに、カミラのためになにかするたびに浮かんでくる。苛むようなこの気持ちは　なんだろう？

「カミラさん、どうしました？」

「あ……い、いえ」

カミラの絶え間ない監視の目が急に失せ、アロイスは不思議そうだった。自分に向けられた気づかわしげなの視線に、カミラは慌てて首を振る。

それから、内心を誤魔化すようにアロイスの様子を眺め、声を上げた。

「あ……アロイス様、歩幅が小さい！ 軟弱に見えますよ！」

「ああ、これは」

アロイスは珍しく、カミラの指摘にうなずかなかった。少し困っ

たよりに自分の足元に目を落とし、苦笑する。

「今は、カミラさんと歩いていきますから」

「……はい？」

いぶかしむカミラに、アロイスは頬をかく。

「並んで歩くには、これくらいがちょうどいいんです」

アロイスにつられるように、カミラも足元を見た。

ドレスに隠れているのは、カミラの細い足と、かかとの高い歩きにくい靴。横に並ぶアロイスの、大きな足。彼の足が刻むのは、体軀に不釣り合いな、小さな歩幅だった。

カミラは瞬いた。落ち着いて考えてみれば、すぐにわかること。歩く速さが、同じはずなんてないのだ。

私の歩幅に合わせていたんだわ。

「……ぐう」

飲み込み切れない感情が、カミラをうならせた。「どうしました？」と首をかしげるアロイスが憎らしい。

ううう……元はヒキガエルのくせに……！

奥歯を噛みしめ、カミラはアロイスを睨み上げた。

悔しい。少し嬉しいと思ってしまうことが、余計に悔しい。そして、それ以上に 辛かった。

なんでよ。

アロイスはカミラに歩幅を合わせたまま、ゆっくりと並んで歩く。ぽつぽつと、レルリヒの問題や、その膝元、ブルームの町の話をする。だけど、カミラの耳には、ほとんど入っては来ない。

望んでこんなところに来たわけじゃないのに。

王都に戻りたいと思っていた。自分を笑った人間たちを、見返したいと思っていた。そのために、アロイスを痩せていい男にするつもりだった。

私はユリアン殿下が好きなのに。

そもそも最初から、アロイスと結婚なんてしなくなかった。アロイスを痩せさせるのだって、彼のためではなかった。アロイスだってカミラを厄介者扱いしていたし、その時はなにも感じてはいなかったのに。

今は、後ろ暗い。

カミラのために、変わろうとするアロイスを見るたびに抱く。この感情の名前は、たぶん 罪悪感だ。

「カミラさん、よろしいですか？」

「え！ はい！ ……はい？」

アロイスの問いかけに、カミラは反射的に答えた。だが、なにに返事をしたのかわからない。不審なカミラの顔に、アロイスは呆れ半分に息を吐いた。

「ブルーム訪問の話です。レルリヒ家の跡継ぎ問題で、一度、ブルームのルドルフを訪ねようと思っています。それに、カミラさんにも同行していただけないかと」

「えっ私ですか？ いいんですか？」

アインストに行くときは渋っていたのに、こういう風の吹き回しだろうか。瞬くカミラに対し、アロイスは少しだけ言葉をためらった。

「……カミラさんに、モントンの主要な町を見ていただきたいと思ひまして。もうここへきて半年以上たちますが、まだグレンツェとアインストしか訪ねていませんから」

「はあ」

たしかに、半年以上もいる割に、カミラは引きこもりが過ぎたかもしれない。仮にも領主の結婚相手としてきた身。カミラの立場としては、早々に土地の主要な人々に挨拶をして、顔を見せて回るべきだったのだろう。

「表向きは新年の歓待という体裁なので、ブルームで春を迎えるこ

とになります。少し長い滞在ですが、そのぶん、ブルームの人々とも親しめるでしょう。この機会に、レルリヒ家の者たちも紹介しますよ」

遅まきながら、アロイスはそれをしようというのだ。

今さら？ どうして……………。

いや 理由など、考えるまでない。意味するところは、たった一つだ。

「来年 春の終わりに、私は二十四になります。そのころまでには、カミラさんの理想の姿になれるように、努力します」

いつの間にか、アロイスの足は止まっていた。カミラの行く手を阻むように、真正面に立っている。

背筋は伸びている。堂々とした立ち姿で、視線はしっかり前を向いている。

風になびく銀の髪は、ユリアン王子に少し似ている。

真摯な赤い瞳は、同じ色なのに、少しも似ていない。

「年が明けたら 春になったら、今度は正式に、私と婚約をしていただませんか」

カミラは呼吸を止め、無言で瞬いた。

頭の中をひっくり返しても、答えが出てこない。

4 (1) - 8 (後書き)

4 (1) 終わり

カミラを乗せた馬車は、ブルームへ向かう雪道を駆けていた。

馬車から窓の外を見れば、見渡す限りの雪景色がある。なだらかな丘陵と、枯れた広葉樹。凍った川の上までも、柔らかな雪が降り積もる。

それでも、他の土地に比べれば雪は少ない方だった。ブルームのあるモントン領西部は、領内では最も気候の穏やかな土地。冬の寒さは厳しくなく、夏の暑さは激しくなく、瘴気が濃くなることもない。瘴気を放つ沼地は稀で、あちらこちらに森があり、獣たちが暮らしている。モントンでは数少ない、農業地帯でもあった。

もつとも、今は田畑も枯れている。草木の芽吹く春までは遠い。延々と続く雪景色を見ながら、カミラは一人ため息をついた。

「ご気分が優れないみたいですけど、大丈夫ですか」

同じ馬車に乗るニコルが、心配そうにそう言った。尋ねておきながら、彼女はカミラの返事を待たず、荷物の中からひざ掛けを引っ張り出そうとしている。

「ああ、いえ、大丈夫。長旅だから疲れただけよ」

領都からブルームまでは、馬車でほぼ半日かかる。おまけにこの雪道だ。平時以上に時間をかけた旅は、旅慣れしない人間には辛いものがある。

領都を出たのが昨日。途中の町で一泊し、二日間かけた馬車の旅。腰の据わらない道のりに、疲れが出るのも無理はない。

しかし、ニコルはどうにも疑わしげだ。

「本当にそれだけですか？ 昨日の夜、宿に泊まった時も部屋にこもりがち、元気がありませんでしたし……」

「……そうだったかしら」

窓の外に目を泳がせながら、カミラはうそぶくように言った。じ

とりと見つめるニコルの視線が、どうにも痛い。

「そうですよ。いつもの奥様だったら、すぐにあちこち見て回るって言いだしそうなものなのに」

「奥様って言わないで！」

思いがけず口から出た言葉に、ニコルもカミラ自身も驚いた。慌てて口を押えるカミラを、ニコルは目を丸くして見ている。

今までも、ニコルはさんざんカミラのことを「奥様」と呼んできた。はじめのうちは否定していたカミラも、そのうち面倒になって否定する回数も減った。

最近では、もうすっかり慣れてしまい、ニコルの呼ぶに任せていたのだ。

久しぶりの否定の言葉は、思いがけず強い響きだった。ニコルは二度三度と瞬き、それから、先ほどよりもさらに気づかわしげな表情を浮かべた。

「本当に、ちょっとご様子がおかしいですよ。……ブルームに行くっていうお話をいただいたときくらいから。私に、『どうしてもついてきてほしい、ずっと一緒にいてほしい』なんておっしゃって。馬車だって、本当はアロイス様と乗るはずだったのに」

そう。本当はカミラは、アロイスと共に貴人用の馬車に乗るはずだった。それをどうしても拒んだ結果、カミラはニコルと馬車に乗り、アロイスは彼の従者とともに、男だらけの馬車に詰め込まれる羽目になった。悪いとは思っている。

ちなみに、アロイスの従者の中には、料理長のギンターもいる。一応、クラウスの上司ということで付いてきているそうだ。クラウスの口車に乗せられ、「ユリアン殿下が好き」と言い放ってしまつて以来、カミラは彼とも顔を合わせづらい。

「それは、あなたは私のたった一人の侍女なのだし」

カミラはばつの悪さを隠すように、眉根を寄せてニコルに顔を向けた。

「それに、なんというかこう、居心地が悪いというか……心細くて

誰かに傍にいてほしいのよ」

口を濁しながら、カミラは小声でつぶやく。ふやふやの語尾は、馬車の揺れで上手く聞き取れない。ニコルはますます顔をしかめ、心配さをあらわにした。

「やっぱり、いつもの奥様らしくないです」

む、とカミラは口をつぐんだ。カミラ付きの唯一の侍女として、数か月を過ごしてきたことはある。ニコルは良くカミラを見ていた。ニコルの、ともすれば無礼な言い草に、言い返さないことも、腹を立てないことも、普段のカミラならばあり得ない。それでもなにも言えないのは、彼女の言葉が的を射ていたからだ。

だって、どんな顔をすればいいのよ。

婚約をしてほしい　アロイスにそう言われたとき、カミラは返事ができなかった。否定も肯定もなく立ち尽くすカミラに対し、アロイスは「返事は今でなくとも良い」と言ってくれた。

だけど、今でないならいつ返事をすればよい？　返事をしないまま、アロイスと平気で顔を合わせられるのか？

なにより　カミラ自身は、どう答えるつもりでいるのか？

それが、一番わからない。

このまま、いつまでも返事をしないわけにはいかない。いつかは決断しなければいけない。答えを出さないまま、アロイスを待たせていることだって後ろ暗い。

いつだったか、カミラがアロイスに向けて行った「不誠実だ」という言葉。それが、そのままカミラ自身に向けて返ってくる。

今のカミラは、アロイスに対してひどく不誠実だった。

ぐるぐる悩み、逃げる自分が自分らしくないことは、カミラ自身でわかっていてる。

だけど体は自然とアロイスを避けるし、心はいつの間にか、ぐるぐると考えてしまっていた。

アロイスへの罪悪感。ユリアン王子への恋心。カミラ自身の激情と、良心の呵責。恨み。妬み。その先にひそむ心の奥底。収集のつかない無数の感情が、カミラの思考を惑わせる。ぐるぐるぐるぐる。めまいがしそうだ。

馬車の車輪が、石畳に乗り上げた。
その振動に顔を上げ、カミラは窓の外を見る。

白塗りの壁に三角の灰色の屋根。白と灰の二色の街並みが見える。一見簡素な造りの家々は、ただどよく見れば、実に瀟洒しょうしゃなたたずまいをしている。白と灰には、窓のガラスがアクセント。わざと塗り残した白漆喰から石のレンガが顔をのぞかせ、遊び心を見せている。単調なのに、ひどくセンスが良い。

屋根に積もった雪さえも計算されているのだろうか。屋根から下がるつららが光り、幻想的な空気を醸し出していた。

アインストの生真面目な画一さとも、グレンツェの雑多なにぎやかさとも一線を画す。こざっぱりとして軽妙な、洒落た町。

ここが、レルリヒ家の配下にある、花と香水の町　ブルーメだ。

レルリヒ家の屋敷は、町の中央部から外れた高台の上にある。屋敷の上階からは町を見渡すことができ、手のひらを広げたような町の形と、町に入り組む花の木々。そして、町の外に広がる花畑を一望できる。

とはいえ、今は冬の盛り。木々は裸で、花畑には雪が積もる。レルリヒ家の裏手に広がる花畑も同様で、寒々しい枯れ地があるだけだ。

花の町ブルーメモ、今は冷たい雪の町。町は冬の静寂に沈み、春一番の開花を待つばかりだった。

○

二階の客室で、カミラはぼんやりと外を見ていた。空の色は重たい鼠色で、雪は絶え間なく振り続ける。

同じ部屋で、ニコルが忙しく荷ほどきをしている。ときおり目の端に映るニコルは、相も変わらず不器用で要領が悪い。いつもなら、じれったさに「私にやらせなさい！」と仕事の横取りをすることろだが、今のカミラはどうにも気力がわかなかった。

原因は、到着早々に行われた、レルリヒ家との挨拶に違いない。

少し前に行われた顔合わせを思い出し、カミラは眉間に手を当てた。知らず、ため息も出てくる。

レルリヒ家は、ゲルダとクラウドを擁する、業の深い一族だ。顔合わせの際には、当主ルドルフと、彼に近い家族を紹介された。

当主ルドルフとその妻。二人の息子である長男クラウスと次男フランツ。ルドルフの姉であるゲルダと、兄であるルーカス。

たった六人と挨拶を交わすだけで、カミラはどこまでも疲れてしまった。

ゲルダがいるっただけでも気が重いのに……。

跡継ぎ問題をこじれさせる一端のゲルダは、現在は休暇をもらい、レルリヒ家に帰省中だった。アロイスが跡継ぎ問題を解消に来ているのに、主要人物たる自分が蚊帳の外になるわけにはいかない、ということなのだろう。ゲルダが預かるモンテナハト家の膨大な仕事は、家令のウィルマーと、ゲルダの腹心の部下たちが、目が回るような心地で処理しているはずである。

だが、ゲルダがこうにも力を尽くす相手は、放蕩者のクラウスなのだ。

カミラは眉間の皺を深くした。思い返すにつけ、憂鬱になる。

こじれるのもわかるわ。

クラウスは、あまりにもふざけ過ぎだ。あろうことかあの男、挨拶の場で　アロイスのいる前で、カミラを口説こうとしたのだ。

激怒するルーカスと、けろりとしたクラウス。フランツの嫌味に、嫌味を返すゲルダと、頭を抱える無力なルドルフの姿。うんざりしたような、アロイスの苦笑がよみがえる。

当主が当主としての役割を果たせていないんだわ。

代わりに力があるのが、彼の兄姉であるルーカスとゲルダなのだ。クラウスとフランツはいわば二人の代理戦争。兄姉に頭の上からないルドルフは、どちらを選ぶこともできずにいた。

これからしばらく、この状況の中にいないといけないのね。

これまでのような、カミラ自身に向けられる敵意とは、また別の居心地の悪さがあった。

声を上げても解決できない。単純な好悪では線の引けないこの状況は、カミラのもっとも苦手とするところだった。

○

ニコルの荷ほどきが終わった頃、カミラの部屋にアロイスが訪ねて来た。

「カミラさん、町へ下りてみませんか？」

アロイスは扉の前に立ったまま言った。中でゆっくり話をする気はないらしい。これから、すぐにでも出かけるつもりだろうか。着ている服も、すでに身軽なものになっている。

「ブルームは、他の町とはまた違った空気があります。普段の散歩の代わりに、いかがでしょうか」

「……ええと」

返事を濁しつつ、カミラはためらうように視線を迷わせた。町を歩いてみたいとは思う。知らない町を見て回るのは好きだし、気分転換もしたい。この屋敷にいと、息が詰まりそうだった。

だが、即答ができない。アロイスと二人で外を歩くとなると、どうしても思い出してしまうのだ。

婚約を考えてほしい　ここしばらくカミラを悩ませ続けている言葉を。

アロイスは、カミラの内心を察したように、口元を緩めた。

「大丈夫ですよ。クラウドに案内を頼みましたから。今は、外の空気を吸った方がよいでしょう」

「クラウドですって？」

思わずカミラは声を上げた。それはそれで問題があるのではなからうか。今回の騒動の中心人物である。

アロイスの立場的に、どちらかに肩入れをするのは良くないのではないだろうか。と真面目に思う一方で、実に個人的な事情で、カミラはクラウドの同行に気が進まない。

どうにもカミラには、クラウドに対する苦手意識があるのだ。

原因は、軽薄さや無礼さだけではない。クラウドの話し方や仕草が、どうしてもユリアン王子を彷彿させるせいだった。顔立ちも性

格も似ていないのに、ふとした瞬間の視線が、表情が、線の細い横顔が重なる。

外には出たい。断る理由もないし……でも……。

渋い顔で悩むカミラに、背後から救いの声がかかった。

「奥様、お出かけですか？ 外は寒いので、ちゃんと肩掛けを羽織ってくださいね」

ニコルだ。

どこからか引つ張り出した肩掛けを手に、駆け寄ってくるニコルの手を、カミラは反射的に捕まえた。助かった。

「ニコル！ ニコルも一緒にいいですか！」

「えっ」

驚くニコルには、悪いと思っている。しかし、今のカミラには救いが必要なのだ。

「荷ほども終わったでしょう。あなたも気分転換よ。 アロイス様、いいですか？」

「構いませんよ。人数が多い方が、にぎやかで楽しいですから」

快諾するアロイスに、カミラはほっと息を吐く。「ありがとうございます」と言ってアロイスに向けた表情は、安堵と後ろめたさがないまぜになった、カミラらしからぬ苦笑だった。

カミラに返したアロイスの笑みも、不安の混ざった固いもの。互いのぎこちなさに気が付いていながら、カミラにもアロイスにも、今はどうすることもできなかった。

ニコルだけが不可解そうに、アロイスとカミラを見比べていた。

そういうわけで、町へ下りたカミラたちは現在、地下への入り口を探していた。

○

しんしんと雪の降る昼下がり。どこからか、遠く讃美歌が聞こえてくる。

人通りの少ない町はずれにあるものは、狭い路地。古い家々の壁に、色褪せた店の看板。それから、壊れたまま打ち捨てられた魔石灯。

レルリヒ家の目も行き届かない、いかにも貧民街の裏通り。その片隅にひっそりと建つ、すでに廃屋となつて久しい小さな食堂の前に、カミラとアロイス、ニコル、クラウドの四人は立っていた。

「もう！ 奥様をこんな場所に連れて来るなんて！」

ニコルが店の中を睨み回しながら、何度目かの不満を口にした。

「まあまあ、ちびちゃん。そう怒らない」

「ちびつて言わないでください！」

小さい体を怒らせて、ニコルがクラウドに叫ぶ。しかし、当のクラウドはまるで気にした様子もなく、涼しい顔で店の中を覗き込む。両開きの店の扉は、どちらも蝶番が壊れていて、開け放たれたままになっている。店にはもちろん灯りなどはなく、開け放たれた入り口から差し込む光だけが、店の中をうすばんやりと浮かび上がらせていた。

向かつて右手に見えるカウンターには、深い埃が積もっている。朽ちかけた椅子やテーブルが転がり、床板が所々剥けていた。カウ

ンターの奥には、厨房へ続く扉が一つ。入り口から向かって真正面には、おそらくは住居になっているであろう、店の奥へ続く扉が一つある。

無人の家屋に入る後ろめたさから、入り口近くでまごまごする三人を置いて、クラウドはためらいなく屋内へ足を踏み入れる。興味深そうにあたりを見回し、どことなく浮かれた表情をするクラウドに、カミラは顔をしかめた。

「楽しそうね」

「こういう冒険は、男の子の夢ってやつだよ」

「冒険ねえ……。あなたが本当に貴族の息子なのか、疑いたくなるわ」

身軽すぎると言うべきか、軽率というべきか。こんないかにも怪しい場所に、護衛もつけずに足を踏み入れるなんて、まっとうな貴族令息のすることではない。

「それに、あなたって町の人とも……かなり親しいみたいじゃない」
カミラはそう言いながら、クラウドに案内され、町を歩いていた時のことを思い返す。

はじめ、クラウドはまっとうにカミラたちに町を見せて回っていた。ブルームの町の大通りや、商店の並び。通りに沿った並木には、春には一斉に花が咲くという。

だが、今は冬の盛り。枯れた木々には雪が積もり、にぎやかなはずの通りにも、ほとんど人はいなかった。

そんな中で、カミラたちがすれ違った、数少ない町の人々。その誰も彼もクラウドの知り合いだった。

偏屈そうな学者風情の男に、気風も恰幅もよい婦人。子供たちの集団から、浮浪者じみた老人まで。クラウドは誰に対しても親しげに声をかけ、かけられていた。

いや、ただ親しいだけであれば、カミラも言葉を濁したりはしない。アロイスにだって、グレンツェの孤児院のような、身分違いの交流はある。カミラだって王都にいたころ、平民の格好で町へ出て、

町の人々と親しんだりもしたものだ。

だが、クラウドスは、カミラやアロイスの行ってきた交流とはいささか違いがある。

相手が多岐にわたるというのももちろんだが。
「会う人会う人に『先生』なんて呼んで。あなた、町でなにしていたのよ」

町の人に出会うとき。クラウドスの第一声は必ず「先生」だった。大人でも子供でも、浮浪者だってお構いなしだ。どう見ても教師の類には見えない人間たちへ向けられた敬称に、カミラは違和感を覚えずにはいらなかった。

「うーん。教え子？」

カウンターの中を覗きながら、クラウドスは軽い調子で言った。一人家探しをするクラウドスに、ためらいは見えない。なにが出て来るかもわからないのに、呆れた怖いもの知らずである。

「……教え子って、なんの」

「最初にあったおじさんが、劇の脚本の先生。次のおばさんが踊りの先生。そのあとのがきんちよたちがいたずらの先生。で、最後のおじいちゃんが、詩と作曲の先生」

「禁忌だらけじゃないの！」

クラウドスの上げた言葉たちに、カミラはぎょつとした。どれもこれも、モントン領では禁じられた娯楽ばかりだ。演劇は領内での開場を禁じられ、舞踏会が開かれることもない。子供は恭順を良しとし、いたずらなどはもつてのほか。そして、モントン領において許される歌は、子守歌が王家への讃美歌のみだった。

禁じることができなかったのは、生活に根差した食事という道楽のみ。元流刑地という土地柄、罪を贖い、身を清めてきた風習が、未だ根付いているのだ。

こんな環境、カミラだって良いと思っているわけではない。しかしそれは、外から来たカミラだからこそ思うこと。土地の人間にとっては、当たり前のこと。だと思っていた。

「どんなに禁じて、人の心から楽しみを奪うことなんてできないよ」

そう言うと、クラウドは唇に手を当てて、いたずらっぽく片目をつぶった。

「でも、このことは内緒だよ。誰かに知られたら、先生たちに迷惑がかかるからね」

「告げ口する気はないわよ。……私も人のこと言えないし」

両親の目を盗み、隠れて料理をしていた身であるカミラに、彼らを咎める筋合いはない。

そもそもカミラには、彼らが悪いことをしているとも思えない。

カミラの料理とは異なり、歌や踊りなど、王都ではむしろ歓迎されているものだ。観劇、音楽鑑賞、文学をたしなんでこそ、優れた貴族とされていた。

アロイスだって、こんなことで腹を立てるほど、料簡りょうかんの狭い男ではないとカミラは知っている。わざわざ隠れてしていることを暴き出し、咎めたりはしないだろう。

となると、残りは。

「迷惑をかけられているのは、奥様とアロイス様の方ですが！」

口を曲げて怒るのは、ニコル一人だ。どうにもニコルは、クラウドと相性が悪いらしい。生真面目が過ぎるニコルと軽すぎるクラウド。水が合うはずがないのだ。

「その先生とやらのせいで、奥様がこんな寂れた場所に来る羽目になったんですよ！」

肩を怒らせて叫ぶニコルに、クラウドは薄ら笑いを浮かべた。その馬鹿にしたような態度が、ますますニコルをいら立たせる。

「なんで奥様が、地下の騒音さわぎなんて解決しないといけないんです！ 解決を押し付けられたのは、あなたじゃないですか！！」

そついうわけである。

○

すべての原因は、最後に会った浮浪者風情の老人が漏らした、地下から響く騒音の噂のせいだった。

ブルームの北端。貧民の住む寂れた路地裏で、奇妙な物音が聞こえるらしい。

それが、ここ最近、町の人々の間で密かに囁かれている噂だった。

物音は昼となく夜となく、不規則に響き渡る。音はくぐもつていて聞き取りにくい、どうやら地の底から聞こえてくるようだ。金づちで壁を叩くような音や、金属をひつかくような不快な音。誰かの金切り声に、耳を裂くような甲高い音。正体不明の音たちに、意味がある響きはない。ただただうるさく、不愉快なだけだった。

意味をなさないその物音は、地下に閉じ込められた幽霊の嘆きだとか、異形の化け物の鳴き声。あるいは町に潜む悪人たちの宴だとも囁かれていた。

不快な音に悩まされた、貧民街に寝床を持つその老人は、クラウドを捕まえるなり言った。

「どうせたいした理由じゃない。お前たちで調べて来い」

忠実な教え子のクラウドは、老人の指令を受け、面白半分に騒音の解決に乗り出した。町の人々を捕まえて、噂話を聞き出し、町のあちらこちらを歩き回る。

案内人がこうなった以上、しかたなくカミラたちも付いて行き

たどり着いた先がこの朽ちた店なのだ。

○

「奥様、やつぱりやめましょうよ。危険ですよ、こんな得体のしれない場所。あんな人ほうつて、アロイス様と戻りましょうよ」

ニコルはカミラを見上げ、すぐのように言った。カミラへの心配や、クラウドへの反発もあるだろうが、彼女は案外、なにより自分が怖いから帰りたいがっているのかもしれない。

だが、カミラはニコルの切実な視線に肯定を返せない。

だって屋敷へ帰るとなると、アロイス様と一緒にじゃない。

ニコルはアロイスの前では、使用人として一歩引いた態度をとる。賑やかしのクラウドがいなくなれば、アロイスの話し相手はカミラだ。どんなことを話せばいいのか想像もつかないし、逆になんも話さないのであれば、それはそれで気まずい。

それなら、クラウドと共に騒音さわぎを追いかけた方が、気持ち的に楽だった。それに案外、町の人たちに聞き込みをするのは楽しかったし、普段であれば行くことのない店や場所に赴くのも興味深かった。

カミラがまだ王都に暮らしていたころ。悪い侍女に連れられて、町を歩いていたときを思い出す。あのときは平民の姿をして、今よりももっと怖いもの知らずだった。思えば、危険なことをしていたものだ。

しかし、そんなカミラでも、廃墟に踏み込むのはためらわれた。カミラ一人だったらまだ良いが、いや良くないが、とにもかくにも自己責任。だが、今はニコルとアロイスがいる。怖がるニコルを無理に連れ込むのはかわいそうだし、なによりアロイスの身になにかあっては大変だ。ここは気まずさを耐えて、アロイスと共に戻るべきだろうか。

気持ちとしては、戻りたくはないけれど……。

「……アロイス様、いかがします？」

できれば戻りたくない。という気持ちを声に込めながら、カミラはそっとアロイスを覗き見る。アロイスはカミラに視線を返し、当

然と言わんばかりにうなずいた。

「行きましょう」

「はい…… はい？」

「地下室を探しましょう。この店にあるはずなんでしょう？」

カミラは瞬いた。てつきり、アロイスは「帰ろう」というとばかり思っていた。だってアロイスは領主である。おまけに今は護衛もなく、そもそもこんな寂れた店の前にいることだっておかしいのだ。「危なくないですか？ 下になにがいるかわからないですよ！？」

「まあ、なんとかなりますよ。騒音の元も気になりますし」

「なんとかなるって、もし変な人間でもいたら！」

軟弱なクラウスと、痩せたてのアロイス。どう考えても、いざというときになんとかできるとは思えない。もちろんカミラに身を守る力なんてないし、なんなら腕力だけであれば、ニコルが一番強いくらいだ。

「 そいつは帰らないよ」

困惑するカミラに対し、店の奥からクラウスの声がかかる。

「だって、俺の監視だもん」

「……監視？ どういうこと？」

理解の追いつかないカミラに、奥の部屋に入りかけていたクラウスが振り返る。遠目から、首をかしげるカミラと、困ったようなアロイスを見比べる。

アロイスの顔には、彼が良く浮かべる苦笑があった。なにかを誤魔化しているときの表情だ。

クラウスは、少しためらうように口を曲げた後、やれやれ息を吐く。

「そいつの目的は、あんたと町を見ることじゃなくて、俺の方。俺を安心させるために、わざわざ護衛も遠ざけたんだろ。そいつくらいの魔力があれば、多少の危険はなんとかなるし」

再び口を開いたクラウスの顔には、いささか底意地の悪さが見えた。

「監視は親父にでも頼まれたんだろう？　で、親父は俺の行動が当主にふさわしくないって、そいつに見せつけるつもりなの。自分じや伯母さんを説得できないから、もっと上の人間を引きずり出したってわけ」

カミラはクラウドから、ゆっくりとアロイスに視線を移した。彼はぱつの悪そうな顔で、申し訳なさそうにカミラを見ている。

「すみません。でも、カミラさんを外に連れ出したかったのも本当です。こういう機会でないと、今はなかなかお話をできませんから」「すっげー効率主義でしょう。俺も騙して、あんたも騙して。そいつはそういう奴なの！　だから俺は、そいつが大嫌いなんだよ！」吐き捨てるようなクラウドの言葉に、アロイスはくしゃりと顔をしかめた。その表情に浮かぶのは、寂しさや悲しさと、一種の親しみを孕んだ　　なんだろう。同情、だろうか。

「……お前は本当に、いい男だな」

「男に言われたって嬉しくねーよ」

けっ、と喉を鳴らすと、クラウドは一人で部屋の奥まで入っていた。

アロイスがついて行こうと店の中に足を踏み入れ、立ち止まってカミラに振り返る。

なにも言わないアロイスを、カミラもまた、黙って眺めていた。

気まずいと思っていた。

二人きりにはなりたくないし、言葉を交わすのも避けていた。

だけどたぶん、今のカミラは落胆している。

身勝手な自分の感情が、カミラには理解できなかった。

ユリアン王子なら、とカミラは考える。

ユリアン王子なら、カミラに対して申し訳なさそうな顔をしない。カミラを見ながら、自分も傷ついたような顔はしない。カミラの心を気遣ったりしない。なんということもない様子で、柔らかい言葉をかけてくるだけだ。

効率主義というのなら、ユリアン王子も同じだった。表向きの気さくな態度の裏側で、役に立つ人間と立たない人間を選別し、必要な相手にだけ必要な表情を向けていた。

アロイスみたいに半端なこととはしない。きちんと顔を使い分けてくれた。彼の本心など知らず、恋に夢中にさせてくれた。

「カミラさん」

アロイスの呼び声に、カミラは視線を落とした。いつもみたいに気を張って、胸を反らしたいと思うのに、体が思うように動かない。讚美歌が遠く聞こえる。あまり上手ではない歌は、誰かの祝婚歌らしい。障害を乗り越え結ばれた、運命の二人を歌う。こんな時に限って、歌声はいやに耳に入ってくる。

「カミラさん、帰りましょうか」

ユリアン王子なら、そんな優しい言葉はかけない。

アロイスが身じろぎをする気配がする。クラウスの監視を打ち切り、カミラを優先させようとしてくれているのがわかる。おろおろするニコルの所在ない手が、うつむいた視線の端に映っている。

顔を上げないと。

両手を握りしめ、カミラは息を吸い込んだ。
そのとき。

どん、と地面が揺れた。

同時に、女の金切り声が響く。金属をひっかくような不快な音に、金づちで壁を叩くような音。地響きにも似た低い轟音。不揃いな音が　店の奥、開け放した扉の先から響いてくる。

「な、なんです!？」

ニコルが戸惑いの声を上げる。地下からの音に怯えているのは、数か月前のアインストで、魔石の暴発に巻き込まれたことを思い出したからだろうか。

たしかに、同じ地下からの音。たしかに、地面を揺らす音量。だが、これが地震ではないと、カミラにはすぐにわかった。地震より、もっと不愉快な音だ。

地下からの騒音って、まさか……。

はつと顔を上げると、カミラは先ほどまでのためらいを忘れ、廃墟となった店に踏み込んだ。アロイスとニコルが、突然のカミラの奇行に驚き、少し遅れて付いてくる。

「どうしたんですか、カミラさん!？」

大股で歩くカミラに追いつき、アロイスが戸惑ったように尋ねた。しかしカミラは足を止めず、肩を怒らせて前を向く。

「アロイス様、これは紛れもなく騒音だわ!」

そう言うさなかにも、カミラの耳を裂くような、甲高い音が響く。いくつもの騒音が入り混じり、ひどい不協和音を生み出している。たしかにこれでは、眠れなくなるのも道理というものだった。

店の奥は、耳障りな音が一層強く響く。奥の部屋に先に入っていたクラウスは、耳を押えて「こりゃひどい」と苦悶の表情を浮かべていた。

顔をしかめる彼の傍らには、鉄の扉がついた、地下へと続く階段がある。おそらくは、クラウスが鉄扉を開けてしまったのだろう。地下からの音が、そのまま外へ流れ出してしまうていた。

カミラはその地下階段の前まで行くと、奥に向けてあらん限りの

声で叫んだ。

「その、めちゃくちゃな演奏をやめなさい!!」

王都では、音楽は礼賛される。

音楽鑑賞は貴族のたしなみ。良い音を聞き分けることは、貴族としての価値の一つ。

ゆえにカミラにも、音楽には一家言ある。下手とさえも言えないこの騒音に、憤りを覚えるくらいには。

○

モントン領で許される楽器は、讃美歌のためのオルガンと、その口で奏でる歌だけだ。

音楽を奏でられるのは、特別に許可された修道女だけ。楽譜は教会で厳重に管理され、市井に出回ることはない。

楽器を作ることは許されず、手に入れる手段はない。

とはいえ、今はグレンツェの市場が他国へ解放されている。「いけない」と禁じたところで、手に入れる手段はそれなりにあった。

乗り込んだ地下にいたのは、バイオリンを持った青年。フルートをとり落とした少女。小太鼓ドラムを叩きかけの大柄な青年に、オーボエに口を当てた細身の少年。それから、楽器を持たない娘が一人。

元は食糧庫だったのだろう。壁一面を棚に囲まれた、なかなか広い地下室に、五人の若者たちが、驚愕に立ち尽くしていた。年のころは、全員が十代の後半から二十代前半。貧民街の地下にいながら、身なりや顔つきは、さほど貧しいようには見えなかった。

棚の上には、古びた楽器がいくつか、恭しく置かれている。見たこともない譜面が、棚のあちこちに貼り付けられ、なにごとかこま

ごまと書き込まれている。同じようにして、床のあちこちにも楽譜が散らばっている。

真っ先に飛び込んだカミラは、うっかり楽譜を踏みかけて、慌てて足をどけた。

「なによこれ、楽譜がめっちゃくちゃじゃない！ それと、奏者が楽器を落としてどうするのよ！」

若者たちの視線が、声を荒げたカミラに一斉に向かう。フルートを落とした少女が、カミラの怒鳴り声に「ひっ」と悲鳴を上げた。化け物でも見たかのように怯えている。

「バイオリン！ 弦が緩んでいるわ！ ドラム！ 床に直で置かない！ 音が響かないでしょ！ それから」

「まあまあ、そんなに腹を立てない」

カミラに次いで、クラウスがのんびりと階段を下りてくる。まだ耳にあの演奏が残っているのか、彼は顔をしかめ、片耳を押えている。

「なーるほど。こりゃあ、作曲の先生としちゃあ騒音だなあ」

「クラウス様！？」

クラウスの姿に気が付くと、若者たちの誰かが悲鳴にも似た声を上げた。同時に、顔色が変わる。驚愕から恐怖へ。顔からは一斉に血の気が引き、青ざめる。

クラウスから遅れて、アロイスとニコルが降りてきたが、若者たちは見向きもしなかった。最初に飛び込み、今も腹を立てるカミラにさえ、彼は目を向けない。

彼らの目にはもはや、クラウスしか映っていなかった。

「く、クラウス様……こ、このことはどうか内密に」

「ん？」

バイオリンの青年の震える声に、クラウスは首を傾げた。すすけた茶色の髪の毛の、いかにもな好青年であるが、今は青ざめ、怯えきっている。

「もう二度としませんから！ どうか誰にも言わないでください！

お願いします!!」

バイオリンの青年が膝をつく、他の四人も次々に楽器を置き、跪いて許しを請う。その異常なほどの怯え方に、クラウドは戸惑ったらしい。

「いやいや、告げ口なんてしないよ。そんな怖がらなくても」

「ほ、本当ですか？ レルリヒ家のどなたにも、黙っていただけますか!？」

「うーん……?」

クラウドは腕を組んだ。跪く五人の姿を順繰り眺めながら、どうにも苦い顔でうなる。

たしかに、モントン領では音楽は禁じられている。

だけど、見つかったところで命を取られるわけではない。楽譜や楽器くらいは焼かれるだろうが、わざわざ隠れてするくらいだ。どうせまた、その手の輩はどこからか手にするもの。

ここにある楽器が、彼らにとって命より大切　という風にも見えない。

ならば彼らは、いったいなにに対してこれほど怯えているのだろう?
う?

バイオリンを持つ青年はヴィクトル。

フルートの少女はフィーネ。

ドラムはディータで、オーボエがオットー。

そして、楽器を持たない娘が、歌うたいのフェアラート。

五人は全員、ブルーム生まれの幼馴染だった。比較的裕福な家の生まれで、教養として、王都で流行っている芸術や娯楽についての知識を持っていた。

そのせいなのだろう。

知識を得れば、実践してみたいくなるのが人の性。^{さが}モントン領では禁忌とされる音楽を、自分たちでやってみたくなったのだ。

五人はそれぞれ、自分の興味のある楽器を調達し、この廃墟の地下で試行錯誤しながら奏でていた。

師もなく、見様見真似すらもできず、文字だけを頼りに行われたその演奏は、三か月ほど続けるうちに、すっかり立派な騒音として評判となってしまうていた。

「地下を見つけたのは俺です。もともと、ここはうちの実家が出資してた店で、何年か前に廃業になったきりだったんですけど……」

ヴィクトルは膝をつき、うなだれながら言った。聞いているのはクラウドだ。彼はヴィクトルの話に耳を傾けながら、床に転がる譜面を眺めていた。

「最初にバイオリンを見つけたのも、ここです。棚に置いてあるのがそれ。今は弦が切れて使えなくなっていますけど。他にも、よくわからない楽器がいくつかあって、それで俺が、みんなに声をかけたんです」

はじめのうちは、自分たちで演奏するつもりはなかったらしい。見たこともない楽器に対する単純な好奇心で、音を出す程度だった。だが、三か月ほど前に事情が変わる。

ヴィクトルが、結婚することになったのだ。相手は同じ町の娘。ヴィクトルの実家が重用している職人の娘だという。家の格に多少の差はあるが、どうにか両親からの許可も得られ、あとは結婚の日を待つばかりとなっていた。

「俺のために、祝婚歌を奏でたいって言うてくれたんです。この町だと、結婚のときだって讃美歌しか許されないのでから」

「……讃美歌だけ？」

しおしおと語るヴィクトルに、カミラは思わず口をはさんだ。ヴィクトルの言葉に違和感がある。

おかしい　だってカミラは、地上で祝婚歌を聞いたばかりだ。

「祝婚歌なら、教会で歌っているでしょう？　ついさっき聞いたばかりだわ」

「ああ、あれも讃美歌ですよ　あれは、王家の結婚を歌うものです。ユリアン殿下と、リーゼロッテ様の」

カミラの肩がこわばる。反射的にアロイスに目を向ければ、彼はさっと視線を逸らした。やっぱり知っていたのだ。親切で黙っていたのだからうけど、余計なお世話だ。

顔をしかめたカミラの様子に、ヴィクトルは気が付かない。カミラがカミラであることを知らない彼は、悪気もためらいもなく言葉を続けた。

「来年には結婚されるお二人ですから、最近はずっと練習をしているんです。町を上げて祝福をするために」

祝福、と言っても、にぎやかに祝うわけではない。教会や家の中で、静かに王家の発展と繁栄を祈るのだ。

モントン領の結婚式も同じ。盛大に祝うものではなく、儀式としての側面が強い。神に誓う姿を、人前に見せるためのもの。歌はなく、私語もなく、喜び合うのは家族と共にひっそりと。これがモ

ーントン領の伝統だ。

「みんなは、俺だけの祝婚歌を奏でてくれるつもりでいるんです。たまたま、地下の楽譜の中にそういうのがあったから」

「……ふうん」

と相槌を打ったのは、クラウドだ。彼は落ちていた楽譜を一通り眺め終えると、どこことなく感慨深そうに息を吐く。

「古いけど、先生の楽譜だ。たぶん、昔も似たような奴がいたんだろっな」

「そうかもしれませんが。ここって、扉を閉めるとほとんど音を通さないんです。普段は絶対扉を閉めるようにしているんですけど……誰かが出入りする時なんか、音が漏れてしまっていたんでしょうね」

ヴィクトルはそう言うってから、自分のうかつさを嘆くように、深く息を吐いた。

「やつぱり、もうやめた方がいいのかもしれない。みんなにも迷惑がかかるし、こんな危険なこと……」

「危険なこと？」

クラウドが問う。ヴィクトルの青ざめた顔に浮かぶ悲壮感とは、『楽譜や楽器を焼かれる』程度のものとは思えない。

「……クラウド様は、ここしばらく領都へいらっしゃったからご存じないんですね。最近の町のこと」

ヴィクトルはうなだれた顔を上げると、誰かを探すように周囲を見回した。誰も隠れていないと知ると、今度はカミラたちを順に見やる。口を開くのをためらっているようだ。

「そんなに怖がらなくても、告げ口なんてしないよ。だいたい、なにかするなら地下に下りた時点でやってるだろ？」

「……そう。そうですね」

安心させるようなクラウドの言葉に、ヴィクトルはおずおずと頷いた。しかし、怯えた様子は変わらず、声を落として言う。

「最近……町に自警団ができたんです。もともと、町の若い連中で

やってる自警団はあつたんですけど、そういうのとはまた別の集まりができて。誰も、なにも言わないけど、レルリヒ家が主導で作ったものだって、みんな知ってます」

「……ふうん」

「以前よりもずっと厳しく取り締まられるようになったんです。音楽や娯楽はもちろん、レルリヒ家のやり方に意見を言うようなことや クラウス様を褒めるようなことをしても、引っ張っていかれてしまいます」

静かな声が地下に響く。冷たい石室の中、アロイスとクラウスが揃って腕を組んだ。それぞれ、思うところがあるらしい。

「めったにないことですが、捕まるとき たまに、暴行を受けている人を見ることがあります。たいてい、人通りのある場所とか、広場とかで。『抵抗したから』なんて言っていますけど 俺には、見せしめにしか思えません」

ヴィクトルは跪いたまま、垂れた両手を握りしめる。恐怖の中に、血気盛んな若者らしい反発心がある。

「今の俺たちだって、見つかったら確実にしょっ引かれます。家族にも、ミア 俺の婚約者にも迷惑がかかります。せつかく俺のためにはじめてくれたことだし、続けたいと思うけど」

その先を言う前に、ヴィクトルの声は止まった。青ざめた顔が、さらに青ざめる。他の四人も同じだ。恐怖のにじんだ瞳が一斉に、地上へ続く階段に向けられる。

地上から、床のきしむ音がする。開け放したままの地下への扉を、ボタンと閉める音がする。

誰かが階段を下りてくる音がする。

「あれ。ヴィクトル、練習はもう終わり？」

軽い足音共に地下へ下りてきたのは、快活そうな若い娘だった。年はカミラと同じか、少し下くらいだろう。赤茶けた髪に、少し太めの眉。あまり美人とは言い難いが、好感の持てる顔立ちをしている。

はきはきとした彼女の声を聞いた途端、五人の若者たちの顔が弛緩する。中でも特に、ヴィクトルの緩み方は著しい。

「ミア！」

「ん。旦那様が探してたから呼びに来ただけ……お客さん？ 珍しいね」

言いながら、ミアと呼ばれたその娘は、好奇心の強そうな瞳をカミラたちに向けた。ヴィクトルたちよりも、さらに身なりの良いカミラたち四人組をいぶかしげに見つめて、それから驚いたように目を見開く。

「……もしかして、クラウド様！？ どうしてこんな場所に！？」

「うーん、探検？」

「はあ、そうですね……だから上の扉が開いてたんですね。もう、危ないなあ……今回はクラウド様で良かったけど、他の人だったら大変だよ？」

ため息をつきながら、ミアは咎めるような視線をヴィクトルに向ける。そして、その視線を離さないまま、まっすぐにヴィクトルの前まで歩み寄った。

「自分が危ないことをしてるって、ちゃんとわかってる？ 旦那様にも迷惑がかかるし、私だって」

「わかってる。ミア、わかってるわかってる」

ミアに詰め寄られ、ヴィクトルは焦ったように首を振る。しかし

ミアの疑い深い視線は変わらず。ヴィクトルは視線を逸らしながら、どうにか誤魔化そうと口を開いた。

「ミア、そ、それより、父さんが俺を探してるって？」

「……ん。そうだった。ヴィクトル、あなた夕方から商談があるの、忘れてたでしょう。もうじきお客さんがくるのにつて、旦那様がたが大慌てだったよ」

「げっ」

ヴィクトルは顔をしかめると、見るからに慌てた様子で立ち上がった。それから、先ほどまで向き合って いや、うなだれていた相手に気が付くと、これもまた慌てた様子で頭を下げる。

「クラウス様、すみません。お話の途中でしたけど、俺、急ぎの用で……！」

「……ああ、うん」

「すみません、失礼します！」

言い捨てるように断りを口にする、ヴィクトルはバイオリンを棚に戻し、大急ぎで地下を飛び出した。

「ごめんなさい、あのひと騒がしくて」

ミアは苦い顔で、地下に残る面々に会釈をする。かくいう本人も呆れた顔で、深い息を一つはいた。

「それじゃあ、私も戻らないといけないので。失礼します」

そう言つと、ミアもまた、ヴィクトルを追つて地上へ出て行つた。後には、呆氣にとられた八人が、気まずさの中に立ち尽くしていた。

「あれが婚約者のミアなのね」

嵐が去つた後の地下室で、カミラは一人つぶやいた。

職人らしいぶっきらぼうな喋りだが、はきはきしていて気持ちが良い。見るからに貴族の集団を前にして、物怖じしないところも気に入った。押しが弱そうなヴィクトルには、似合いの相手のように

思える。

「ミアねえ。服職人のトロストさんの娘かな。昔修行に行ったことがあるよ」

カミラのつぶやきをクラウドスが拾う。腕を組んだまま、思い出すように虚空を睨むクラウドスを、カミラは呆れ半分に見やった。

「あなた、なんでもやってるのねえ」

「好奇心が旺盛だからね」

自分で言うか。

半分だった呆れを、すべて呆れに変えて、カミラは息を吐いた。

○

「……やっぱり、もうやめた方がいいのかな」

ヴィクトルとミアが去り、階段の扉が閉まる音がして、しばらく。誰も言葉を切り出さず沈黙の満ちる地下で、はじめに不安を漏らしたのはフィーネだった。

「あたしたち、いくらやっても上手にならないし　そもそもどうやったら上手くなるのかもわからないし。いつまでもこんな危険なこと」

「……そうだなあ」

ディータがうなり、決断をしかねているようだった。救いを求めてオットーを見やれば、彼は重たく首を振る。

「はじめたころとは状況が違うし、少し考える必要があるかもしれない」

「私はやめないわよ」

渋い顔の三人に対し、フェアラートは断固とした声で言った。三人の視線　だけではなく、聞き耳を立てていたカミラたちの視線まで受けても、フェアラートの毅然とした態度は変わらない。

「ヴィクトルのためだもの。途中で投げ出したりなんかしないわ」
フェアラートは顔を上げ、前を向く。瞳に宿る光が、彼女の意志

の強さを表していた。

濃い茶色の髪は、女性にしては短く切りそろえられている。気の強そうな眉に、濃いめの紅を塗った唇。自信にあふれた表情。背中を伸ばし、まっすぐに立つ彼女は、凛々しい、という形容が良く似合う。凛とした美女だった。

「力を尽くしてこそその仲間だわ。だってみんな、彼の結婚を祝いたい、そうでしょう?」

「……お前はさすがだなあ」

データーが感心したようにフェアライトを見つめる。

「もともとは、お前もヴィクトルのこと好きだったのにさ。本当に、立派だと思うよ」

「昔の話よ。忘れちゃったわ。でも、一度は好きだった人だからこそ、祝福したいモノじゃない」

胸を張るフェアライトの言葉に、迷いはない。唇を曲げ、余裕のある笑みを浮かべたフェアライトを、フィーネが憧れるようにして見ていた。

「好きだからこそ、相手の幸せを祝うものでしょう。本当に好きなら、恨んだり妬んだりするはずがないじゃない。嫉妬なんてする程度じゃ、しょせんは子供の独占欲よ。恋なんかじゃないわ」

「すごいなあ、フェア。噂のカミラとは大違いだ」

「……………なに」

フェアライトとデーターの会話に、カミラは眉をひそめた。しかし、二人はカミラの方には見向きもしない。自分たちの会話を聞きとがめる人間がいると、思っすらもないようだ。

「カミラなんて、嫉妬して相手を呪って、さんざんリーゼロッテ様を貶めたじゃん? そういう人もいるのにさ」

「やだ、あんなのと一緒にしないでよ」

フェアライトは呆れたように顔をしかめ、鼻で笑った。『嫌なものに例えられた』とでも思ったのだろう。その表情には、微かに嫌悪感が滲む。

「そんな見苦しい女にはなりたくないわ。女がみんな、あんなものだと思わないでちょうだい。だってきれいでありたいじゃない。たいていの女は、あんな薄汚い、醜い姿なんてさらしたくないと思っているものよ」

「　　ちよっ」

と、言いながら、ニコルがフェアライトたちに向かって足を踏み出した。

前のめりな彼女の体を押しとどめたのはカミラだ。憤るニコルの肩を、痛むほどに強く掴む。

「奥様、止めないでください」

そう言いながらカミラに振り返り、ニコルは口をつぐんだ。

ニコルから一拍遅れ、フェアライトたちをたしなめようと口を開きかけたアロイスとクラウドも、声を発することは敵わなかった。

カミラの姿を見たせいだ。

静かなカミラの表情に、燃えるような苛烈さが浮かぶ。

気迫に圧され、静止の言葉をかけることさえためらわれた。

冷静さは、頭のどこを探してもなかった。

自制心も思考も一瞬のうちに、なにかもカミラの中から消え失せた。

「見苦しくて、なにが悪いのよ」

ニコルを押し分け、カミラはフェアラートたちの前に立つ。

突然割り込んできたカミラの存在に、二人は戸惑っているようだった。自分たちに向けられた明らかな敵意に怯え、困惑する。

「な、なんですか……？」

「好きな人に好かれたと思って、なにが悪いの。妬んで恨むことが、そんなに悪いことなの」

「ええ……？」

フェアラートもディータも震えあがっている。当たり前だ。見るからに身分の上の人間に、わけもわからないまま怒りを向けられているのだから。

だが、カミラに二人の様子は見えていない。背後から聞こえる誰かの静止の声も、耳に届かない。

頭の中に、激流のような感情だけが満ちている。冷たいくらいの熱が、カミラの唇を震わせた。

「相手が他の人を選んでも、嫉妬もせずに祝福しろって？ 自分ではない誰かが傍にすることを、笑いながら見守るべきって？」

カミラはフェアラートに顔を近づける。冷や汗を浮かべる彼女の瞳を、カミラは据えた目で見つめた。

「本当に好きな相手に、自分が選ばれなくても、あなたは笑っていただけるのね。でも、そんなきれいな恋なんて、私にはできないわ！」

フェアラートの顔ごしに、王宮の令嬢たちの顔が浮かぶ。叶わぬ恋に呆れ、嘲るような瞳。同じようにユリアン王子に恋をしていたくせに、いつの間にかみんな諦めてしまった。

だけどカミラだけは諦められなかった。

フェアラートは震えている。相手はただの、貴族に怯える力ない

庶民。八つ当たりだとわかっている。いや、わかっていない。ここがどこで、どういう状況だったのかさえ、今のカミラには思い出せない。思考よりも先に感情がカミラを突き動かす。

本当に好きだった。だからカミラは見苦しくなったのだ。

「見苦しくても、醜くても、私は好かれたかったもの！」

ユリアンさま。

夢中で追いかけ続けた背中が、カミラの脳裏に浮かぶ。どうにかしてカミラを見て欲しかったけれど、彼はついで、カミラに振り返ってはくれなかった。

思い出すのは背中ばかりだ。

「あの人の目に映りたかったの！ 私が殿下の支えになりたかった！ 傍に立つのが私であってほしかった！ あなたはこんな気持ちを、わからないまま恋をすることができたのね　！！」

「やめなさい！」

フェアライトに詰め寄るカミラを、強い力が引き離れた。カミラの夢中な声よりも、さらに響く一喝が、地下室に響く。

カミラの腕を、アロイスが掴んでいる。カミラをフェアライトから引き離し、自分の元へ引き寄せようとしている。

視線を向ければ、険しい顔のアロイスが目映る。カミラはくしやりと表情をゆがめた。それが、笑っているのか泣き顔なのか、あるいは怒りの形相なのかも、自分ではわからない。

「アロイス様！ 私は！！」

「出ましょう。外の風にあたるべきです」

「でも！」

「今のあなたは冷静ではありません。出ましょう」

アロイスにしては珍しい、有無を言わせぬ口調だった。熱くなったカミラに対し、アロイスの手はひどく冷たい。顔をこわばらせたまま、黙ってカミラの手を引く。

「アロイス様！」

反論は聞かない。アロイスはカミラの声に返事をせず、半ば強制

的にカミラを地下から引きずり出そうとする。

「……アロイス様？　この方が？」

「じゃあ奥様って、まさか……」

背後から、なにも知らない若者たちの、恐怖にかすれた声が聞こえる。隠れて音楽をするよりも、ずっと恐ろしいことをしてしまつたと悟つたのだらう。

だけど今さらだ。知らなかったで許せるほど、今のカミラは寛容ではない。

ぐつと奥歯を噛みしめる。知らず、感情に震える手のひらを握りしめる。自分を拘束するアロイスの背中を、カミラはくしゃくしゃの顔で睨んだ。

なにもかも腹が立って。腹が立って腹が立って腹が立って仕方がない。

地下階段の鉄扉を抜け、廃墟となつた店を出て、陽が傾き始めた空の下に出る。

路地には風が吹き、ユリアン王子とリーゼロッテの讃美歌を運んでくる。背後から、ニコルが慌てて付いてきていたが、アロイスは立ち止らなかつた。

「アロイス様！　離してください！　私はまだ、言つてやらないといけないことが！」

「いけません。彼らの表情が、あなたには見えていましたか」

目には映っていた。怯えていたのもわかる。カミラの怒りに戸惑い、知らずに犯していた不敬に気が付き震えていた。

「だから、なんだつて言ふんです！」

「あなたが憤るのも当然です。でも、彼らに悪気はありませんでした。こうなつてしまったのは、すぐに彼らを制止しなかつた私の責任です」

「だから、悪気がないからなんだって言うのよ!!」

アロイスの手を振り払おうと、カミラはもがいた。肉のついた体のくせに、ただアロイスの力は強い。どれほど暴れても、離さない意思が込められている。

「悪気がないから、傷つけられても良いって言うの!? 黙って聞いてるって言うつもり!?」

「良いとは言っていないません」

カミラの腕をつかんだまま、アロイスはようやく立ち止まった。

薄く雪の積もる路地。周囲には誰もいない。雪の上には、カミラとアロイスの足跡だけがある。

いまだ逃れようと暴れるカミラに、アロイスは振り返った。穏やかないつもの笑みは、浮かんでいない。静かな表情に激情を隠したカミラと似た顔つきをしている。

「だから、私はあなたを止めました。あの青年たちのためだけではなく、私のために」

「……なによ」

アロイスの強い視線に、カミラは低い声を出した。気圧されたつもりはないが、それ以上の言葉は出てこない。逃げ出そうともがいていた腕も、今は力なく、アロイスに握られるままだった。

「カミラさん、あなたにも悪気はなかったでしょう。私はあなたが誰を想っているかも知っています。あなたが傷つくことが想像できたのに、すぐに止められなかった私には、あなたの行動を咎める資格はありません」

でも。そう言って、アロイスが白い息を吐く。強い自制心に隠された、わずかに固い表情は、腹を立てているように見えた。だけど、たぶん違う。

瞬きをする赤い目は、悲しそうで、寂しそうだった。

ユリアン様なら、こんな表情はしないわ。

「カミラさん。それでも私は、あれ以上あなたの話を聞いていたくはありませんでした」

カミラを見据えたまま、アロイスは柔らかく、囁くような言葉を落とす。

「あなたの言葉に、私も傷ついています」

言葉と共に吐き出される息が、白くけぶり、冬の町に消えていく。アロイスはそれ以上なにも言わず、カミラも口を閉ざしたまま。立ち尽くす体が冷えていく。

ユリアン様なら。

アロイスと向かい合ったまま、カミラはぽつりと心に呟く。同じ銀髪で、同じ赤い瞳でもアロイスとユリアン王子はどこまでも違う。ユリアン様なら、こんなこと言わないわ。ユリアン様なら、嘘でも私を慰めてくれるもの。ユリアン様なら傷つかない。ユリアン様なら。

空しい比較が、カミラの胸にくすぶり続ける。

比べたところでどうにもならないのは、カミラだってわかっている。なのに気まずい沈黙の中で、カミラは二人の違いを探すように、アロイスとユリアン王子を重ねていた。

讃美歌が遠く聞こえる。

ユリアン王子と聞きたいと、カミラが何度も何度も願ってきた、祝婚歌だ。

結局、カミラはアロイスに連れられて、レルリヒ家の屋敷へと帰ってきた。

歓待と称して、レルリヒ家の面々と囲む晩餐会は気まずかった。ゲルダがいるのも落ち着かないし、レルリヒ家同士での嫌味の応酬は、部外者には居心地が悪かった。

だけど、なによりも気まずい相手はアロイスだ。晩餐会では、互いに妙によそよしく、必要以上の会話をしなかった。その会話だって、上手くできていたかわからない。カミラはきちんと受け答えができていただろうか。アロイスへ向けて、表情を作ることができていただろうか。外見だけでも、取り繕えていただろうか。

どうしてこうなるのかしら。

晩餐会も終わり、それぞれが自室に帰っていったあと。カミラは一人、夜風にあたっていた。

レルリヒ家二階にあるバルコニー。白い欄干は雪に埋もれ、空気は凍り付くように冷たい。肩掛けを羽織ってきたものの、そんなものでは防ぎきれなくらいに寒い。

冬の夜に、外に出るものではなかった。感傷に浸るなら、暖炉の前でもできたはずだ。などと内心後悔しつつも、その冷たさがカミラの頭を覚ましてくれる。昼間よりは、いくらか冷静さを取り戻していた。

たしかに、やり過ぎたとは思っわ。

相手は無知なだけの平民。カミラという存在を、噂の中だけでしか知らなかったのだ。

顔も知らず、性格も知らない。彼らにとってのカミラは、脚色された噂の中の悪役でしかなかった。

目の前にいるのが、カミラであることも知らなかった。ヒキガエルから変わり過ぎてしまったせいか、領主であるアロイスさえもわかっていなかった。本人の前で侮辱していることなど、夢にも思っていないかった。

それに、カミラがリーゼロッテと対立していたのは事実。リーゼロッテとユリアン王子の恋においては、悪役の立ち位置であったのも事実。敗北が見えていながら、王子に追いすがったカミラの姿は、確かに見苦しかっただろう。リーゼロッテを憎む姿は、醜いと言われても仕方がないのかもしれない。

いいえ、でも。

「だからって、私が悪いわけじゃないわ」

若者たちは悪くない。カミラだって同じ立場なら、笑い話の種としていたかもしれない。

カミラも悪くない。腹を立てるのは当然だ。

それでカミラの言った言葉に、今度はアロイスが傷ついた。けどそれも、アロイスが悪いわけではない。

それなら、なにが悪かったのだろう？

「もう　　どうしろっていうのよ！」

バルコニーの欄干まで歩み寄り、カミラは手すりに手をかけた。冷たい雪に指が沈み、凍り付くような心地がする。目の前に広がるのは、暗い中庭と、その先にある町あかり。地平線と入り混じる、藍色の空の端。ここからずっと南に王都があるが、見えるはずもない。

王都では。王宮では、ユリアン王子とリーゼロッテが幸せな結婚式を待っているはずだ。

カミラが望んで望んで仕方がなかったユリアン王子の隣に、リーゼロッテがいるはずだ。

二人のことを、誰もが祝福しているだろう。ユリアン王子もリーゼロッテも幸福で、遠く寒空の下にいるカミラなど、思い出すこともない。

「悔しい……！」

どうしてカミラは上手くいかないのだろう。カミラのなにがけなかったのだろう。恋がかなわないと知ったら、早々に見切りをつけるべきだったのだろうか。十年の恋を、賢く切り捨てるべきだったのだろうか。

「悔しい！」

息苦しさに、カミラは唇を噛む。冷静だなんて嘘だ。手すりを軋むほどに強く握りしめ、荒い呼吸を絞り出す。

「絶対に見返してやるんだから……！」

負けるものか。悔しい。悔しい。腹が立つ。悔しい。息苦しい。悔しい。

誰も彼も、見返してやらなきゃ気が済まない。カミラを捨てたことを、後悔させてやりたい。

だから泣いてたまるものか。

弱い自分など、誰に見せてやるものか。

「……………あれ？ 先客？」

外を睨むカミラの背中に、軽い口調の声がかかる。振り向かなくてもクラウスだとわかる。

カミラは深呼吸をすると、一度強く目を閉じた。冷たい夜の闇に感情を捨てると、クラウスに振り返る。

「なんでこんなところに？ こんな寒い夜に外にいたら、風邪ひくよ」

「あなたこそ、なにしに来たの」

「俺はたそがれに来たの」

妙に気取った様子で、クラウスは口を曲げた。それから、断りもなくカミラの隣までやってきて、欄干に背中を預ける。

「君は？ …………… 大丈夫？」

「なにがよ」

横目で伺うクラウドスの視線に、カミラは「ふん」と鼻で息を吐いて見せた。クラウドスに心配される筋合いはない。

強気なカミラの態度に、クラウドスは小さく首を振った。話題を変えるように、明るい調子で口を開く。

「結局、騒音の真相はたいしたことじゃなかったね。化け物とか、怪しい組織とか期待したんだけどさ」

「そんなものよ。王宮でも幽霊騒ぎがあっただけど、きっと似たようなもののね」

一時は社交界をにぎわせた、夜な夜な王宮を歩く青白い幽霊の噂を、カミラは記憶から掘り返す。目撃者が何人もいて、王家を恨む貴族の霊だとか、大昔に処刑された王族だとか、勝手な噂がいくつも飛んでいたものだ。

好奇心旺盛な貴族の不肖息子たちが、幽霊の正体を暴いてみようとあれこれ馬鹿なことをやっていたが、結局真相はわからずじまい。済ました令嬢たちは、面白おかしい失敗談だけを聞いたものだ。

懐かしい。もう遠い昔のことみたいだね。

あの頃はまだ、カミラと表面上だけでも親しむ者たちがいた。リ―ゼロツテと対立してから今までで、ずいぶんと変わってしまったものだ。

笑うように頬を緩ませ、目を伏せるカミラを、クラウドスは覗き込む。

「……………君ってさ、音楽出来るの？」

「はあ？」

突然の質問に、カミラは思わず低い声を返した。藪から棒に、どうしたというのだ。

いぶかしむカミラの視線を受け、クラウドスは肩をすくませた。軽薄な笑いを浮かべつつ、白い息を吐き出す。

「地下で、楽器についてあれこれ言ってたからさ。ここって土地柄、音楽の話ができるあんまり人間っていないんだよね。もし楽器ができるならさ」

「できないわよ」

「は」

「やったこともないわ」

クラウスの言葉を切り捨て、カミラは当然のごとく言った。クラウスが、失望やら苦々しさを混ぜたような、なんとも言えない渋い顔をする。

でも、できないものはできないのだ。

「こつちじゃどうかは知らないけど、王都では音楽は音楽家が奏でるものよ。貴族はそれを聞くのが仕事。鼻歌くらいなら歌うけど、楽器なんて触ったこともないもの」

「はあああ!？」

大声を上げるのは、クラウスにしては珍しい。信じられないものを見るような目で、彼はカミラを瞳に映した。目を見開いたその顔さえも整っているのだから、クラウスは相当の美男子である。

「楽器も触ったことないのに、あんなに自信満々で駄目出ししてたの!？ よく言えたな!？」

「自分ができないと、口出しできないなんて理屈はないわ」

カミラは胸を張る。ふん、と鼻で吐き出した息も白い。腰に手を当てる姿には、いつもの気の強さが戻っていた。

「それに、私には耳があるもの。楽器ができなくても、音は聞けるわ」

「たしかにな」

カミラの言葉に、クラウスは噴き出した。夜空に向かって、声を上げて笑う。軟派で軽薄ないつもの様子とは少し違って、素のままで笑っているように思えた。

「あんたのそういうところ、いいね。すごい好き」

「馬鹿にしているの？」

「いいや、褒めてんの!」

涙のにじむ目じりを押え、クラウスはそう言った。カミラは腑に落ちない。不満交じりの目を向ければ、微笑み返されてしまう。

「あんたさ、もう一回あいつらに会ってくれないかな？ 自慢の耳で、あいつらの音を聞いてやってほしいんだ。音楽の指導をつけてやってほしい」

「なんで私が」

「まあまあ、寛容も貴族の義務だと思って。余裕^{じふぐ}綽々の高貴な態度を見せてやってよ。フェアライトとデーターも、謝りたがってたよむ、とカミラは口をつぐんだ。

つまり、音楽の指導とはただの名目であって、本当に必要なのはカミラがまた地下に行くことなのだ。貴族の怒りを買ったと震える庶民のために、もう怒ってないと、態度で示せということだ。

今ごろ、フェアライトたちは生きた心地がしていないだろう。些細なことで権力を振るい、民を傷つける横暴な貴族も、中には存在する。特に今は、レルリヒ家の自警団の話まであるのだ。必要以上に恐れていることだろう。

カミラはまだ、彼らに対して腹を立てている。だからと言ってカミラには、身分を利用して彼らをどうこうしてやろうというつもりはない。だいたい、カミラがどうこうするためには、アロイスの力を頼る必要がある。アロイスが無闇に平民をいたぶることなんて許すはずもないし、実際のところカミラができるのは、文句の一つ二つを言うくらいなものだった。

冷静でなかったことは、自分でもわかっている。頭に血が上って怒鳴りつけて、それでは噂の中の「カミラ」像を強調するだけだ。

誰になんと思われたって、カミラは構わない。カミラが信じるもののためには、嫌われることも、恐れられることも怖くない。少なくとも、モーントン領に来たばかりのころはそう思っていた。

だけど今は、奇妙な自制心がある。

カミラが恐ろしい人物と思われるは きっと、アロイスに
迷惑がかかってしまう。

「……………わかったわよ」

カミラは長い息を吐くと、渋い顔でそう言った。

「ただし、あんな騒音なんて聞く気はないわ。私の耳に堪える音に変えてやるんだから！」

「ありがと。君って本当に素敵！」

「そういう態度……」

現金なクラウドスの言葉に、カミラは眉を寄せた。文句でも言おうと不快感を込めてクラウドスを睨みつける。

クラウドスは、空を見上げていた。雪の欄干に体を沈め、細い頬を寒さに赤く染める。澄んだ冬の星が、青く赤く、瞬いていた。

「……………どうしたのよ」

「ん？」

「元氣ないみたいじゃない」

腰に手を当て、カミラは見下すようにクラウドスを見上げる。その不遜な顔つきに向けて、クラウドスは氣取った流し目を超越す。

「心配してくれるんだ？　自分も落ち込んだのに。その優しさにときめいちゃうなあ」

「落ち込んでなんかないわよ。軽口はいいから、そのしょぼくれた顔をやめなさい。不愉快だわ」

「しょぼくれたって」

は、とクラウドスは楽しそうに息を吐く。それから顔をしかめるように、くくく、と押し殺した声で笑った。

「自分の方がしょぼくれた顔してるくせに」

「誰がしょぼくれてるのよ！　人に向かって、失礼だわ！」

「あんたが俺に言った言葉だよ」

荒く息を吐き出すカミラを見て、クラウドスは肩を震わせた。声を押えて笑うクラウドスに、カミラは両手を握りしめる。せつかく氣にかけてやったのに、馬鹿にされているとしか思えなかった。

「元氣そうじゃない。私が氣にするまでもなかったみたいね！」

「いやいや、あんたのおかげだよ」

先ほどよりも、少し明るい顔つきで、クラウドスは髪を掻き上げた。それから、「よ」と勢いをつけて、もたれかかっていた欄干から離

れる。

そのまま、屋敷へ向かって数歩。バルコニーから出て行くかと思
ったところで、クラウスは立ち止った。

カミラに振り返り、クラウスは口を開く。はじめはなにも言わず
に口を閉じ、一度視線を伏せてから、また開く。

「あのだ、ちよつと時間ある？ 付き合つてほしい場所がある
んだ」

偽物めいた微笑を浮かべ、クラウスはそう言った。

カミラはクラウドに連れられて、レルリヒ家の裏庭にある、小さな離れへやってきた。

外観は白塗りの、特徴のない小屋。物置にしては少し立派で、人が住むにはいささか粗末。窓は多いが位置が高く、外から中の様子は見えない。煙突がないことから、中に暖炉がないだろうということだけはわかった。

だが、寒さを覚悟して入った小屋の中は、思いがけず暖かい。

小屋を昼間のように照らすのは、天井に下がった無数の魔石灯だ。部屋の四隅には、暖を取るための魔道具がある。貴重な魔石を消費して、部屋を暖め続けていた。

惜しげもなく使われる魔石のおかげで、小屋の中はまるで春の陽気だった。暖炉でも生み出せない穏やかな空気に、カミラは面食らう。

しかし、それ以上に驚いたのは、小屋の中に広がる光景だった。

視界を埋める、雪に似た白。みずみずしい、甘い香りが満ちる。入り口近くの壁際に、古びた棚があるほかには、小屋の中にはなにもない。

ただ、一面の白い花畑だけがある。

「ここは……？」

温室。その言葉は知っている。年中、同じ陽気を保つため、魔道具で温められ続ける部屋だ。当然のように魔石の消耗が激しく、草花が必要な研究室や、一部の貴族の道楽でしか存在しない建物だ。「あんたっつてうかつだよなあ。俺だって男なのに、あっさりこんな人気のないところまでついて来て。俺が悪い男だったら大変だよ」

瞬くカミラの背中に、クラウドの軽口が届く。脅すような言葉だが、カミラは振り向きもしなかった。

「相手は選んでいるわよ。あなたなんて、口だけなもの」
「手厳しいなあ」

クラウドは軽快に笑うと、カミラを追い越して小屋の奥へ歩いて行く。そのまま小屋の中央辺りまで足を進めると、おもむろに立ち止った。

「ここね、俺の秘密の場所」

「……はあ」

カミラに背中を見せたまま、クラウドはいつもより、少し高い声で言った。

「小さなころに、親父がなんでもくれるって言ったから、年中咲き続ける花畑をもらったんだ。すごいでしょう」

「そうね」

たしかに、咲き誇る花は見事なものだ。足元を見ていると、ここが建物の中だと忘れてしまいそうになる。

花を彩る白い花弁は、よく見れば付け根がかすかに赤く色づいている。丸い先端に向かうにつれ、赤は色を変え、薄桃色から、真っ白に変わる。

どこかで見た花だわ。

腰をかがめ、近くの花に顔を近づけながら、カミラは眉を寄せた。王都では、あまり見たことのない花だけだ。

「ここにある花、俺の好きな花なんだ。香りがいいでしょう？ ブルーメで作る香水の、原料の一つでさ。『憧れ』の意味を持つ、ゼインズフトの花」

「そう ビスケットをくれたわね」

クラウドとはじめて会った時、ビスケットに描かれていた花だと、カミラはようやく思い出す。

「受け取ってくれなかったでしょう」

「叩き割ったわ」

カミラが言うと、クラウドが笑う。

今日の彼は、妙に良く笑う。その割に、楽しそうでもないのが、カミラには気に食わなかった。

「この花はね、冬の間には芽を出して、雪解けに一斉に咲くんだ。春の町は、本当にすごいよ。町中花だらけ。ゼーンズフトだけじゃなくて、春先に咲く花でいっぱい、色とりどりになる」

町の通り沿い、あちこちに植えられた街路樹。今は雪に埋もれた広場の花壇。町の空き地に作られた花畑。家々に置かれた鉢植え。

春が来れば、それらが一斉に咲き誇る。雪解けを待つ町の人々は、春を乞うように、春の花々を植えているからだ。

春を迎える花々が、今は雪に沈む白い町を覆う。その姿は、どれほど美しいことだろうか。

「春の町は好きだ。窓からでも、花が咲いているのが見えるから。家の白い壁を、花の色が飾るんだ。雪が解けて、町の人たちが外に出て、町の空気が明るくなる。そういうのを見ているのが好きだった」

背中を向けたクラウドが、どこを見てどんな顔をしているのか、カミラにはわからなかった。カミラに向けて話しかけているのかどうかもわからない。

たぶん、クラウドはカミラの返事を期待してはいないだろう、とはわかる。彼は、誰かの答えを聞きたいわけじゃない。壁に向かつて話すのが空しいから、カミラを誘っただけなのだ。

「この町が採掘町になったら、花も咲かなくなるんだろうなあ。伯父さんもフランツも、穴掘りのことばかり。花なんて軟弱で、レリヒ家にはふさわしくないんだって。伯父さんは、昔からアインストに憧れてたからなあ」

生真面目で寡黙な町、アインスト。几帳面な町に似た、几帳面な人々の暮らす町は、町全体が兵隊のように統率されていた。指導者に対して忠実であり、右を向けといえば右を向き、左を向けといえば左を向く。

一人一人を見れば、それぞれにそれぞれの意思があり、感情があるということのカミラは知っている。だが、傍から見た印象はやはり、「一枚岩の統率の取れた町」だ。

「でもさあ、この町のやつらつて、だいたい不真面目なんだよ。会ったやつら見たわかるだろ？ 隠れて遊んでばかり。禁止されていると、逆にやってみたくなる連中ばかり。ばれたら面倒だから隠れてるだけで、禁忌を破っても悪いとも思っていない」

「……そうね」

カミラは、聞いていないだろうと思いつつも相槌を打つ。

町を歩く老若男女、誰もがクラウスの禁忌の「先生」だった。またま「先生」だけが町の外を歩いている、なんて偶然ではないだろう。おそらくは、町の大半の人間がクラウスにとって、なにかしらの「先生」なのだ。

それに、最後に会った若者たち。彼らは自警団に見つかることを恐れてはいたが、自分たちが禁則を破っていることに対する後ろめたさのようなものは、一切語らなかったことを思い出す。

「アインストみたいだったら、たしかに上の立場だとやりやすいと思うよ。でも、向き不向きであるんだ。適当に遊ばせておいた方が上手くいくこともある。この町の香水だって、もともとは誰かの趣味からはじまったんだ」

クラウスは言葉を切ると、天井を見上げた。白く瞬く魔石灯が、彼の茶色い巻き毛を照らしている。

「……この町に、変わってほしくないなあ」

「だったら、あなたが跡を継げばいいじゃない」

カミラは片手を腰に当て、クラウスの背中を見やった。肯定も否定もしない無言の壁役は、カミラには不適だ。解決のしない愚痴なんて、聞いていて気が滅入る。

「長男なんでしょう？ ゲルダが後押ししているんでしょう？ レルリヒ男爵が決めかねているのなら、あなたにだって可能性はあるはずだわ」

「親父はフランツに継がせたがっているよ。もともと、子供のころからフランツを跡継ぎとして育てたんだから」

「なんで弟を跡継ぎとして育てるのよ」

ゾンネリヒトは、基本的に長男が家を継ぐ。厳密な決まりであるわけではないが、先に生まれた方に、跡継ぎの教育をするのは当然だ。その後に生まれた弟は、いわば予備。長男がどうしようもなく不出来であるか、弟がもつたいないほどに出来が良いか、あるいはなんらかの事情で、長男が跡を継げない場合に、弟にお鉢が回ってくるものだ。

カミラの当然の疑問に、クラウドは肩をすくめた。

それから、ようやくカミラに振り返る。白くて細い顔には、苦笑が浮かんでいた。

「俺って、昔は病弱でさ。体力もないし、すぐに倒れるから、家の外にも出られなかった。だから親父も、こんな小屋をくれたんだ。花畑に行く体力もなかったからね」

幼いころのクラウドは体が弱く、十までも生きられないといわれていた。

だからこそ、家族はクラウドを目いっぱい甘やかし、代わりに弟のフランツを、跡継ぎとして厳しく育てたのだ。

フランツは他人よりも優秀であることを望まれ、立ち居振る舞いを厳しくしつけられた。跡継ぎと期待してこそその厳しさだった。なにもできない兄が甘やかされている姿を横目に、毎日が勉強の日々だったフランツの気持ちは、どのようなものであっただろう。

自分は跡継ぎだから。兄はいずれ死ぬのだからと、言い聞かせながら暮らしていたことを、クラウドは知っている。

だが、死ぬはずだったクラウドは死ななかった。

生きられないと言われた十歳を超えたところから、クラウドは少しずつ体力を取り戻し、病気に強くなっていった。

人並みの体力をつけたあたりで、どこからかクラウドを跡継ぎに

推す声が出てくるようになった。

「俺って優秀だからさ、だいたいのは、人よりできるんだよね。フ란ツが一生懸命勉強したことも、半分もかからずに身につけられる。小さなころは、聡明だってよく言われていたよ。人の考えることとか、なにか隠しているなって態度とか、そういうのがすぐに見えた。だから、俺を推したい気持ちもよくわかる。俺なら、間違いないからね」

ため息のように語るクラウドを、カミラは黙って聞いていた。

要領の悪い　なにかとから回りがちなカミラは、クラウドよりもフ란ツの気持ちに寄り添いがちだ。

幼いころから甘やかされて、なにかも持っていて、いつしか自分の存在意義さえも奪われる。カミラにとってのリーゼロッテやテレーゼが、フ란ツから見たクラウドと重なる。

カミラにクラウドの気持ちはわからない。クラウドにはクラウドの悩みがあり、思いつめているのだろうことは理解できる。だが、彼に共感し、慰める言葉は持っていない。

「俺が跡を継いだら、フ란ツにはなにが残る？　跡継ぎとしてだけ育てられたのに、それを取り上げられたらどうなる」

失望するだろう。クラウドを恨むだろう。悔しい。息苦しい。カミラが先ほどまで感じていたことと同じことを、感じるだろう。「あいつは要領が悪いし、性格も捻じれているし、人に対して偉そうだし、当主以外のなんにもできない。俺の下で働くことも、外に出て独立することもできない人間だ。でも、俺は天才だから、どこに行ってもなんでも上手くやれる。俺が当主になる必要なんてないんだ」

そう言い切ると、クラウドはぱん、と手を叩いた。それから、カミラに振り返って「あはは」と笑う。

「これで話はおしまい！　あとはあいつが、アロイスフ란ツを跡継ぎに決めるだけ。付き合ってくれてありがとう」

クラウドは笑いながらそう言うと、入り口に立ったままのカミラへ近寄ってくる。気持ちを切り替えたようにも見えるが、相変わらず覇気のない顔つきのままだ。

「帰ろっか」

なんでもないように促すクラウドを、カミラは黙って睨みつけた。カミラはフランクと同じ立場だ。クラウドの気持ちはわからないし、いつそ妬ましいだけだ。

いいえ、でも、だからこそ腹が立つわ。

カミラは口を曲げると、鼻で息を吐く。腰に手を当て、胸を張り、帰りがかるクラウドに向けて口を開いた。

「まだ話は終わりじゃないわ。私が言いたいことがあるもの」

自分が渴望しているものを手に入れておきながら、甘く見られて、同情されて、譲られて。

馬鹿にするんじゃないわ。

フランスにとってのクラウスは、カミラにとってのリーゼロッテ。カミラはユリアン王子に、ただ恋をしていたわけではない。彼の関心を得るために、必死に努力をしてきたつもりだ。

王子の目に留まりたくて、他人を押しつけ、使えるものはなんでも使った。親の権力、人脈、多少の嘘もついた。王子の好む女性になるために、ドレスを選び、飾りを身に付け、白粉をはたいた。王子の喜ぶ話題を提供できるように、彼の興味を追いかけ、勉強もした。

それでもカミラは得られなかった。どれほど渴望しても、王子の心はリーゼロッテにしか向かない。王子の好む外見ではなくとも、王子の喜ぶ話題を出せなくとも、リーゼロッテは王子を得た。

悔しくて、悔しくて悔しくて、たまらなかった。

どうして私ではいけなかったの？

「あなたの身分は、フランスが欲しくて仕方のないものなのよ？」
つん、と澄まして顎を上げ、カミラはクラウスを睨みつけた。

「必死に努力して、それでも手に入れないものなの。それを、あなたは『弟がかわいそうだから』なんて理由で捨てようとしているのよ」

誰を蹴落としてでも、見苦しいほどに求めたもの。それをクラウスは、簡単に捨てられるのだ。フランスの宝は、クラウスにとって見る価値のない、ゴミに等しい。

「あなたのやっていることは、フランスの望みを馬鹿にしているわ。レルリヒ家の当主の座、この町の行く末、町の人々。全部、無価値だって言っているようなものだわ！」

カミラは息を吸う。

大事なものだからこそ、ゴミのように捨てられる様を見たくもないし、乞食のように拾いたくもない。いつだって勝ち得たかった。望み、望まれるようにこそ、カミラはもがいていた。

「同情で譲られたって、嬉しくなんかないわよ！」

「……そう？」

クラウスは腕を組み、カミラの言葉に首を傾げた。

変化の少ないその表情から、彼の考えていることは読めない。クラウスも アロイスも、こういう時の表情は本当に読みづらい。

「嬉しくないわけじゃないでしょう？ 二番手でもなんでも、自分のものになるんだから」

「二番手なんて！」

「リーゼロッテがあんたのために身を引いたら、王子様はあんたのものになったかもしれない」

淡々とした言葉に、カミラはぐ、と息を呑む。

リーゼロッテさえいなければ。思わなかったわけではない。

「今でも王子様が好きなんでしょう？ 見苦しくても、選ばれたかったんでしょ？」

クラウスはふと、いつもの軽薄な笑みを浮かべる。

自棄^{やけ}になったときの表情なのかもしれない、とカミラは頭の片隅で思った。

「本当に欲しいものは、どんな手を使っても欲しい。『どんな手を』っていうのは、そういうことですよ」

反論の言葉が出ない。

知らずカミラは視線を落とし、頭の中で自問する。

リーゼロッテがカミラを哀れみ、王妃の座を譲ったとしたら？

王子は悲しみ、嘆くだろうが、カミラにはそれを慰めることができる。すぐには二番手のままだって、いつかは一番になれるかもしれない。希望や期待がある。

だけど。

自問する。

リーゼロッテがいなくなったとき、カミラは諸手を上げて喜べるだろうか？

「最初は嫌だと思っても、そのうちなんだかんだと、譲られて良かったと思うようになるよ」

クラウスは、カミラの内心を見透かしたように言った。

悔しいけれど、カミラにはなにも答えられない。きっと、クラウスの言葉通りになるのだらうと、無意識のうちに認めてしまっている。

いつまでも同じ気持ちのままではいられないもの。王子がいずれリーゼロッテを忘れたとき、カミラは無上の喜びを得ることだらう。「俺って頭がいいから、人のそういう気持ちがすぐにわかつちゃうんだよね。俺に対してなにをしてほしいとか、どうなってほしいとか」

おどけたように肩をすくめ、クラウスは笑った。

ひどく不快な笑い方だった。

「それで、俺はだいたいその期待に応えられちゃうの。そういうやつって、道化になりがちなんだよねえ。みんなの期待に応えるために、自分を殺してさ。あいつも同じ性質たちだよ」

「アロイス様とあなたを一緒にしないでちょうだい！」

クラウスの卑下するような言葉を聞いた途端、悶々とした思考を差し置いて声が出た。そのことに、カミラ自身が驚いた。

クラウスに丸め込まれ、気落ちしていた思考が前を向く。リーゼロッテはいなくならない。「もし」も「でも」もない。

そもそもこれは、カミラの話ですらないのだ。

「アロイス様は道化ではないわ。たとえ道化だったとしても、

今は違うもの」

道化という言葉は、かつてのアロイスの容姿を指しているのだらう。

そういう意味では、確かにアロイスは人から笑われる立場だった。王都の貴族の間では、アロイスは『沼地のヒキガエル』として嘲笑を受けていたし、カミラだって眉をひそめていた。王族でありながら、彼は暗く醜い、日陰の存在だった。

でも、アロイスは代わろうとしている。クラウドみたいに、いつまでも立ち止まったまま、おどけているだけではない。

人の望みのために、自分で自分を殺しながら、笑っているクラウドとは違う。

「道化はあなたただけだわ。周りの期待とか、弟ばかりじゃない」

カミラは地面を踏みしめ直すと、再び顔を上げた。

「あなたの望みはなんなの。この町を、変えたくないんじゃないの！」

「……フ란ツの望みと、俺の望みを両方叶える手段はないんだよ」「弟の話じゃないわ！」

クラウドの言葉を切り捨て、カミラは声を荒げる。どう考えても感情的なのはカミラの方なのに、クラウドは瞬間、反論の言葉を失ったようだ。クラウドが口の端を嚙んだところを逃さず、カミラは一歩足を踏み出す。

「あなたはなにをしたいのよ！ 町が大事なんでしょう！？ 諦められないんでしょう！？ じゃなかったら、私に泣き言なんて言わないでしょう！！」

もう一歩。カミラはクラウドの目の前に立つと、心に問いたですように、彼の胸に指を突きつけた。

「あなたにはできることがあるのよ！ どうして力を尽くそうって思わないのよ！！」

カミラの頬が、感情で熱くなる。クラウドに向かって言葉を投げながら、カミラ自身も言い聞かされていた。

リーゼロッテはクラウドのように迷わなかった。誰かに譲ろうとも思わなかった。リーゼロッテもまた、本気だった。カミラと同じ

く、『どんな手を使つてでも』王子を手に入れようとしていた。
リーゼロッテは身を引かない。カミラがどんなに乞うたつて、王子の隣がリーゼロッテからカミラに明け渡されることは起こり得ないのだ。

「……あんたつて、全然論理的じゃない」

クラウスは突きつけられたカミラの手を見下ろしながら、ため息をついた。

「最初にフ란ツの話を出したのはあんたなのにさ。なのに、いつの間にか俺の望みの話になつて……」

「なによ！ 文句あるわけ！？」

「ない。言つてくれてありがと」

さらりと礼を言うクラウスに、カミラは拍子抜けした。聞き間違いかと眉をしかめるが、同じ言葉は二度と聞こえてこない。

代わりに、クラウスの飄々とした視線があるだけだった。

「気の強い子も、いいなあ」

「は？」

「ねえ、俺は王子様よりいい男だよ。頭もいいし、一応は貴族だし。見る目のない王子よりも、俺と結婚しなよ」

いつものクラウスの様子に、カミラは深い息を吐いた。これが本気なのか嘘なのかわからない。おどけて見せているだけなのだとしたら、カミラの言葉なんて、クラウスにまるで届いていないことになる。

「お断りだわ」

「即答かあ」

クラウスはさほど傷ついた様子もなく、小さく頭を振るだけだった。そういうところが、即答される所以なのだ。

「当り前よ。そんな軽い求婚、悩む価値もないわ」

「俺としては、けっこう本気で君がいいと思つただけだよ」

小首をかしげるクラウスの微笑から、本心はうかがえない。軽薄

なようでもあり、深く考えているように見えなくもない。

カミラは少し悩んでから、眉間の皺を深めた。どうせいつもの軽口だろう、とは思いつつ、わかりにくいクラウドスの本心に向けて答える。

「それなら、余計にお断りだわ」

カミラの口調は、断固としたものだった。

「私にその気がないのなら、もったいぶって期待を残す方が残酷でしょう」

「……俺にはその気がないのかあ」

少しくらい悩んでもいいのにな、と呟きながら、クラウドスは重たい息を吐き出した。

びろ、と短いけれど澄んだ音がした。

冷たい地下室に響く、混じりけのないその音に、その場にいた誰もが顔を上げる。

「わ……っ！ ちゃんと音が出た！！」

歓声を上げたのは、その音を出した当の本人 フルートを持ったフィーネだった。

顔には抑えきれない喜びと、それ以上の驚きが滲んでいる。本当に自分が出した音なのだろうか、信じられない様子だった。

「すごいぞ、フィーネ！ お前はやればできると思っていたよ！」

オットーが真つ先に、フィーネの歓声に応える。オットーは、フィーネと同じく管楽器の持ち主だ。未だ、オーボエの音を上手く出せない彼には、フィーネの音は希望に思えたのだろう。

「やるなあ。フルトって、こんなきれいな音だったんだね」

データーが拍手の代わりに、スティックを叩き合わせる。これまで聞いてきた音が、かすれて裏返ったような、悲鳴のような耳障りなものだっただけに、驚きを隠せていないようだった。

「フィーネ、おめでとう」

データーに合わせるように、フェアライトが拍手をする。済ました顔つきに、口元だけを曲げた二ヒルな笑みは、実に彼女らしい表情だ。

「フィーネ、素晴らしいよ！ お前才能があるんじゃないか！？」

しかし、データーとフェアライトの拍手さえも打ち消し、ヴィクトルが強く手を打ち鳴らす。なんだかんだと、誰よりも彼が嬉しうだった。

若者たちは喜びに沸き、口々にフィーネを褒めたたえる。フィー

ネは照れたようにフルートを抱き、頬を赤くする。それでも、拍手は鳴り止まない。感動が、地下室を包み込む。

が　しかし待て。

「まだ音が出ただけでしょう！」

一曲演じきったような喜びぶりの若者たちに、カミラは一喝する。フィーネがしたことは、フルートの音を出したただけ。しかも短い一音だけ。たしかに、これまではろくに音を出すこともできず、出てもやかましくて耳障りなだけの雑音にしかならなかった時に比べればましだろう。

が、彼らは曲を奏でることが目的なのだ。なのに、音一つでこの喜びようである。

まだろくに音も出ないオットーに、バイオリンの調弦もままならないヴィクトル。力加減を知らない騒音ドラマーのデーターと、腹から声が出ないフェアラート。たしかに、フィーネが音を出せるようになったのは、一歩前進であると言える。言えるが　。

「先が思いやられるわ……」

カミラは一人、額に手を当てて首を振った。

○

数日前。夜のバルコニーでクラウスに出くわして以降、カミラは頻繁に地下に足を運んでいた。

理由はいろいろあるが、一番の原因は、クラウスが地下に通うようになったせいだろう。彼は酔狂なことに、地下に潜む五人の不良少年たちに、演奏の仕方を教えたがったのだ。

「楽器は一通り触ったことがある」

とクラウス本人が言った通り、彼はなんでもできた。さすがに楽隊の演奏とまではいかないが、カミラをもつてしても、そこそこ上手いと思えるくらいの腕前だ。基礎を知らない素人に教えるには、十分だった。

どうやら楽器の演奏も、町にはびこる『先生』に教えてもらったらしい。それぞれの楽器の先生がいるあたり、不良なのはヴィクトルたちだけではなく、町全体がそうなのだろう。なんとも呆れた町である。

クラウドが出かければ、監視をしている　らしいアロイスも、彼について町に出る。一人で屋敷に残されることが嫌なカミラも、それに便乗してついていく。

そうこうするうちに、若者たちはすっかりカミラたちになじんでいた。

○

「まあまあ。それでもやつと音が出たんだし、喜ばせてやれよ」
そう言ってカミラを宥めるのは、相も変わらずへらへらとしたクラウドだった。

「こうやって、ちょっとずつできるようになるのが楽しいんだ。なんだって楽しくなくちゃ続けられないだろ、カミラ」
反論の余地がなく、カミラは「む」と口を曲げた。

その横で、傍に立っていたアロイスとニコルが、驚きに顔をこわばらせる。

当たり前のようにクラウドが口にした、「カミラ」という言葉。誰も呼ばないその呼称を、二人ははじめて聞いたのだ。

クラウドはここ最近、カミラのことを名前で呼ぶようになっていた。

原因は、カミラにも想像がついている。バルコニーで出会った夜、クラウドの身の上話を聞いたせいだろう。どうやらあれ以来、彼はカミラに対し、それなりに親しみを覚えてくれているらしい。

その結果が、「あんた」から「カミラ」への格上げである。

カミラはこれでも、クラウドよりも上の身分。彼の態度はどう考えても無礼ではあるが、「あんた」と呼ばれるよりはましだろう。それに、クラウドがカミラに「様」を付ける姿は想像ができない。「カミラ様」などと呼ばれても、嫌味か裏があるか勘ぐってしまうことだろう。

そういうわけで、不服ではあるが、カミラはクラウドの呼ぶがままにさせていたのだが。

そのことを、二人は知るよしもない。

「奥様に対して、馴れ馴れしく名前を呼ぶなんて！」

真っ先に声を上げたのはニコルだ。

彼女はカミラの背中から前に進み出ると、クラウドを睨みつけた。「アロイス様だって、呼び捨てになんてなさらないのに！ あんまりにも失礼ですよ！」

広い地下に、ニコルの声が反響する。普段のニコルの声はさほど大きくはないのに、こういうときの声は良く響いた。

ふむ、とクラウドは腕を組んだ。彼の胸には、ニコルの怒りなどみじんも響いていないらしい。けろりとした顔で、ニコルを見つめるだけだ。

「なんですかその態度！ 改めてください！」

小さな体からあふれる、良く通る声を聞きながら、クラウドは思案するように首をかしげた。

「ちびちゃん」

「ちびって言わないでください！」

「いい声してるね。ちゃんと腹から出てるし、喉を傷めない声の出し方だ。滑舌もいい」

「……はい？」

思いがけないクラウドの言葉に、ニコルは呆氣にとられたようだった。怒りの言葉さえも飲み込んで、目を瞬かせている。

そんなニコルの様子を、クラウドはまるで気にしない。おもむろにニコルに歩み寄ると、彼女の腕を強引につかんだ。

「歌ってまない？ フェアライトに手本を見せてみてよ」

「えっ、わ、私は歌なんて……！ は、話を聞いてください！」

戸惑うニコルを無視して、クラウドは彼女をフェアライトの傍まで引つ張っていく。クラウドに引かれながら、ニコルは救いを求めるような視線をカミラに向けた。

「奥様……」

「いいじゃない。いつてらっしゃい」

「おくさまああ……」

さらわれていくニコルを、カミラは笑いながら見送った。真面目なニコルには少しかわいそうだけれど、歌って悪いことがあるわけでもあるまい。

「カミラさん。クラウドと親しくなったんですね」

手を振るカミラに、落ち着いた声が向けられる。常に変わらず柔らかな、アロイスの声だ。

聞いた途端、カミラの笑顔がぎこちなくないものになる。ニコルやクラウドがいるときは平気なのに、アロイスと二人きりになると、どうしても穏やかではいられなかった。

「アロイス様、あれはクラウドが勝手に呼んでいるだけで……」

「ああ、いえ、責めるわけではありません。単純に、意外だったのだ」

言い訳めいたカミラに対し、アロイスは慌てて首を振る。

「カミラさんにとって、親しい人間が増えるのは、良いことだと思っ
ています。対等に話せるのであれば、なおさら」

カミラに向けられた言葉は、声以上に柔らかい。それがますます、カミラの気持ちを沈ませる。

アロイスの言葉は重い。アロイスの親切は辛い。アロイスがなにを言っても、まだカミラの中には、消化しきれないユリアン王子へ

の気持ちが残っている。

視線を落とすカミラに、アロイスは苦笑した。その表情には、優しいけれど、優しいだけではいられないアロイスの感情がある。

「ただ、少し彼が羨ましいと思っただけですから」

カミラは顔を上げられない。どんな顔を向けるのか、自分でもわからないからだ。

フェアラートもディータも許した。

ニコルやクラウドスの前でなら、平気でいられる。

王子の結婚を祝う讃美歌があふれる町を、なんでもないように歩いていられる。

だけどどうしても、アロイスの前では罪悪感が先に立つ。

どうして。

どうして恋に落ちたのがユリアン王子だったのだろう。

頭の中で、カミラは自分自身に問いかける。

どうして叶わない恋をしてしまったのだろう。どうしてアロイスの気持ちに応えられないのだろう。どうして彼の気持ちに、同じだけのものを返せないのだろう。

どうして、最初に出会えたのがこの人ではなかったのだろう。

答えのない問いが、頭の奥に渦を巻く。後ろ暗さと、自分でもどうにもできない感情が、カミラの表情を凍り付かせる。

いつの間にかカミラは、アロイスの前で上手く笑えなくなってしまった。

アロイスとの関係になんら改善はないまま、ヴィクトルたちの腕前だけが上がっていった。

オットーとフィーネは音が出せるようになり、とりあえず音階を順に弾けるようになった。ディータは強弱を覚え、フェアライトは喉から声を出すのをやめた。ヴィクトルに至っては、簡単な曲なら弾けるようになった。

誰か一人、一つできることが増えるたび、仲間全員で喜ぶ。そして、負けてたまるかといっそう練習に力を入れる。いい仲間たちだと、カミラは思った。クラウドが教えなくなるのも、わかるような気がする。

だが、そんな平和な あるいは逃避的な日々は、突然に終わった。

よく晴れた、しかし凍るように空気の冷たい日。クラウドたちと連れ立って、いつものように町に出たとき、カミラは大通りが騒がしいことに気が付いた。

冬の寒さもあって、めったに外に出ない人々が集まっている。ざわめき声は明るいものではなく、なにか不穏な気配を感じさせた。行ってみよう、と言うクラウドを否定する者はなく、全員で大通りの騒ぎに駆けつけた。

騒ぎの中心にいたのは、武装した身なりの良い男たちだった。いかにも屈強そうな男たちと、泣き叫ぶ声。凍り付いた地面に倒れる 見覚えのある青年たち。

「 ヴィクトル！！ 」

カミラの声は、周囲のざわめきにかき消された。「 可愛いそうに」「 馬鹿だねえ」「 自業自得だ」「 いや、やり過ぎだ」

無数の野次馬の声に囲まれながら、カミラは呆然とした。

倒れているのはヴィクトルとオットー、それにディータだろうか。オットーとディータは男たちの手によって、地面に体を押し付けられ呻いている。ヴィクトルだけが拘束されず、半身を起こすことを許されている。おかげで、彼の顔に殴打の跡があるのが良く見えた。フィーネとフェアラートは、倒れるヴィクトルたちの傍で、後ろから羽交い絞めにされていた。さすがに殴られてはいないらしい。羽交い絞めにされたままフェアラートはうつむき、フィーネはすすり泣いている。彼女らの足元にあるのは、破り捨てられた紙の束。おそらくは、楽譜だろう。

「 フランツの自警団だ……！ 」

クラウスがつぶやく。フランツの自警団といえば、ヴィクトルたちが恐れる、悪名高い私刑集団だ。娯楽を取り締まり、見せしめに暴行を加えるという。

ならばヴィクトルたちは、地下のことを知られてしまったのだろう。たしかに彼らは、町で禁止されていた音楽をしていた。

どうして見つかったの！？

誰かの密告か。そう考えかけて、カミラはすぐに首を振る。

もともと、騒音の噂も立っていた。うかつな青年たちは、ときどき地下室の入り口を閉め忘れることもあった。自警団が怪しみ、捜査する余地はある。

密告であるならば、ヴィクトルたち五人か、カミラたち四人の中に犯人がいることになってしまう。仲の良い五人が仲間を裏切るとは思えない。となると、カミラたちのうちの誰か。

アロイスはクラウスの父ドルフに頼まれ、クラウスの監視をしていた。監視ならば、報告が必要だ。地下室のことを漏らす可能性が一番あるのは、アロイスだろう。

いいえ。

だからこそ、カミラは密告の可能性を否定する。

アロイス様がそんなことをするはずがないわ。

今は気まずくても、対面して言葉を交わせずとも、人となりは変わらない。カミラはアロイスを信じられる。

「だ、だめだ！ やめてくれー！」

ざわめきの中心で、悲鳴のようなヴィクトルの声が上がる。

カミラははっと顔を上げた。視線の先には、膝をついたヴィクトルと、自警団の男がいる。男の手には、ヴィクトルの使っていたバイオリン。その首を掴み、振り下すところだった。

無遠慮な力で、バイオリンが地面に打ち付けられる。乾いた木の音が、痛みすら感じるほど悲痛に響く。

ヴィクトルの悲鳴を聞くよりも早く、カミラは野次馬の輪から駆けだしていた。

「カミラさん！？」

アロイスの慌てた声が背後から聞こえる。だが、それでカミラが立ち止ったことなんてない。

「なんてことするの！」

突然飛び出してきたカミラに、自警団の男が振り返る。

「誰だ いや」

男はいぶかしげにカミラに視線を向けると、まじまじと見つめた。それから、少し驚いたように目を見開く。

「あなたは……カミラ様で？」

「私がわかるのね」

「ああ、いや、有名なお方ですから」

男は失言を誤魔化すようにそう言った。

名前は知れても、カミラの顔形までは、庶民の間には知られていない。せいぜい黒髪の、きつい顔立ちの女であることくらいだろう

か。ヴィクトルたちも、カミラの顔は知らなかったのだ。

「ところで、いったいなんのご用でしょう。こんな騒ぎに首を突っ込まれるのは、あまり推奨いたしません」

「彼らを離さない」

「できかねます。この者たちは、娯楽という町の禁則を犯しました」

カミラの断固とした言葉にも、男は澄ました顔だった。カミラをカミラと知っても、恐れているようには見えない。堂々とした態度でいられるのは、後ろ盾があるからだろうか。

「人を殺したわけでもないでしょう！ 地面に押し付ける必要も、殴る必要もないわ！」

「決まりを破ることは、ナイフで刺すよりずっと多くの人を殺します」

「ただの音楽よ！？ 演奏することがそんなに悪いの！？ 軍隊の規律を破ったわけでもないのに！」

噛みつくようなカミラに、男はふと口を曲げた。笑い顔にしては、不愉快な表情だ。

「どうやらカミラ様は、娯楽に対してご理解があるようですね」

「なによ」

「さすがは、恋という娯楽に身を捧げたご令嬢です。それでこの者たちをお庇いになるのでしょうか。お優しい方だ」

褒めるように男は言った。だが、明確な嫌味だった。

「ですが、娯楽は浸かりすぎれば、正常な判断ができなくなるもの。カミラ様の優しさには感服いたしますが、この町の火種はこの町で処理しなければなりません。さもなければ、要らぬ争いが起きる恐れがあります」

「こんなことで、あなたの町は争いが起こるってどういうの！？」

「ええ」

持て余したようにバイオリンを握りなおしながら、男は表情も変えずに言った。

「珍しくはない話でしょう。恋に溺れて、罪のない人間を陥れよう

とした令嬢だつて、世間にはいらつしやるのですから」

「……………なに」

「罪を暴かれてもなお、未だに恋しい相手が忘れられずにいる。代わりにあてがわれた結婚相手を利用して、恋する相手を再び、力づくで奪い取るうとしている　なんて噂のある方もいらつしやるくらいです」

男が呼んだカミラの名前が、周囲を取り巻く群衆の耳に、少しずつ広まっていく。

カミラ・シュトルム。

ユリアン王子に懸想し、清廉潔白なりーゼロッテを貶めた最低の悪女。

罰としてモントン領に押し付けられた厄介者。

さざ波のように、不名誉なカミラの評判が伝わっていく。

「……………私のことを言っているの？」

「いえ。ただ、よくある一例として、昔からあるお話をしただけです。まさか、心当たりがあたりで？」

底意地の悪い話しぶりに、頭が熱くなる。ひどい辱めだ。はずかし

たしかに、男は一言もそれがカミラであるとは言っていない。世間一般に転がる、よくある愛憎劇だと言われればそれまでだ。

反論をすれば、男の語る令嬢がカミラであると認めることになる。黙っていれば、男は迂遠に、いつまでもカミラを貶めるだろう。

「そんなみじめな醜態をさらす前に、叶わぬ恋は早々に捨てること。それと同じです。禁じられた娯楽は、諦めること」

周囲には人だけがある。アロイスだっているはずだ。王子を忘れられないカミラに、傷つくと言ったアロイスを思い出すと、反発の言葉が喉の奥で止まってしまう。

悔しくてたまらないのに、頭の一点で、妙な自制心がカミラを引き留めてしまう。

「恋も娯楽も、早々に忘れてしまふのが賢い人間です。そうでしょう、カミラ様？」

忘れられるくらいなら。

カミラは両手を握りしめた。唇を噛んで男を睨むが、言葉は出ない。

アロイスさえいなければ、カミラはいくらだって言い返していた。叶わぬ恋も醜態も、未だにユリアン王子を忘れられないことだって、この男に恥じる必要はどこにもない。胸を張って、だからどうしたと言ってやれるのに。

アロイスさえ　　そう思いながら、カミラは周囲の人々に視線を向けた。

無意識にアロイスを探していたが　　いない。アロイスがいたはずの場所には、クラウスとニコルだけが、妙に慌てた様子で立っていた。

アロイス様？

抱きかけた一瞬の疑問はすぐに消える。

アロイスがどこに行ったのか、カミラには探す必要はなかった。

「彼女への侮辱を、それ以上口にするな」

カミラの肩に手が掛けられる。

後ろに強く引かれ、思わず足を引くカミラの代わりに、見知った背中が前に出る。

「彼らも開放してやれ。町中での暴力沙汰も、許されてはいないはずだろう」

「今度は……アロイス様ですか。野次馬は感心いたしかねます」

自警団の男が、いくぶんかこわばった顔でそう言った。カミラ一人程度なら、いくらでも対処のしようはあっただろうが、さすがの領主となると怖気付いたようだ。他の自警団たちも、拘束の手が緩んだらしい。ディータやオットーが顔を上げ、不安そうに成り行きを見守っているのが見えた。

「それに、これは暴力沙汰ではなく、規則を破ったものへの指導です。あまり口をお出しになりませんように。ブルームのことは、ブルームで解決いたしますので」

「そうもいくまい。ブルームはモントン領の一部だ。なによりお前は、彼女を侮辱した」

カミラを背に隠しながら、アロイスはそう言った。言われた男は、少しかり動揺したように首を振る。アロイスがカミラをかばうとは、思っていないかったのだろう。

「カミラ様を侮辱など。私はただ、一般論を言っていただけで……。それともアロイス様は、いずれは奥方になられるカミラ様が、未だユリアン殿下に懸想していらっしやるとお思いで？」

男の言い方は卑怯だ。認めてしまえば、アロイスは妻 となる予定の女の心を得られない、情けない男と知らしめることになる。

世間にはもちろん、そんな夫婦などありふれているが、それを他人に悟られることは、貴族にとっての恥である。

アロイスは首を曲げ、カミラを一目見やった。まぎれもなく腹を立て、男を睨むカミラを見て、短く息を吐き出す。

それから、「その通りだ」と頷いた。

「彼女は王都を追放されても、殿下を忘れられない、愛情深い人だ。それをみじめと言い捨てることは、彼女の心をあまりにも貶めている」

「本気でおっしゃっていますが、アロイス様……！」

男は困惑したようにつぶやいた。信じられないものを見るような目で、アロイスを見つめる。

世間一般の噂では、カミラは悪女。モントン領に来てからも、アロイスの容姿を理由に結婚を先延ばしにしているような、わがままな女だ。使用人たちからの評判も悪い。

そんな女をどうしてかばうのか、男は理解できずにいるらしい。

「叶わぬ恋を早々に捨てられないのは、私も同じこと。そう言う意味では、私は娯楽を捨てられない彼らと同罪。彼らを罰するならば、

私にも罰が必要だろう」

「まさか、アロイス様を罰するなんて……」

「ならば、彼らを解放することだ」

ぐ、と男はうなった。他の自警団たちが、おろおろした様子で男に目を向ける。どうやら彼が、この場の指導者だったらしい。

男は顔をしかめ、目を閉じた。それから深く息を吐き、屈辱的な声を絞り出す。

「……仰せの通りに　解放しろ！」

男が言つと、自警団員たちがそれぞれ、ディータたちの拘束を解いた。

○

自警団たちが去っていくと、人だかりも少しずつ減っていった。

「……あの、ありがとうございます」

ヴィクトルは、アロイスとカミラに向けて、絞り出すような声でそう言った。

好青年めいた顔つきに青あざが付き、色男が台無しだ。それに、殴られたのはヴィクトルだけではないようで、ディータやオットーにも傷がある。

「いや。助けるのが遅れてすまなかった」

「いえ」

アロイスの謝罪に、ヴィクトルは力なく首を振った。

視線は折れたバイオリンに向かっていた。ネックが折られ、もう直すこともできない。弦も切れ、木片が雪の中に散らばっている。壊れたバイオリンの上に、雪が冷たく積もっていく。

「こうなる運命だったんです。結局みんなに迷惑もかけて、家族だつてこの話を聞いたなら……これなら、はじめから音楽なんてしなればよかった……」

ヴィクトルの言葉を否定する者は、誰もいなかった。

傷ついた五人の若者たちは、それぞれがうつむき、暗い目を足元に向けているだけだった。

カミラはアロイスに礼も言っていない。

五人を解放し、別れた後、カミラは一言も言葉を発した記憶がない。ニコルがひどく心配をしていたが、大丈夫だと答える気力はなかった。

ただ、一人になりたかった。

レルリヒ家の屋敷についてから、カミラは一人になれる場所を探していた。

与えられた自室はニコルがいる。出入りの自由なバルコニーは、誰が来るかわからない。屋敷の中で、一番人目に付かない場所はどこだろうか。

早足で歩きながら、カミラはあふれ出しそうな感情を持て余していた。

世間から、カミラは自分がどう見られているのかは知っていた。馬鹿な恋をした、馬鹿な女だとカミラ自身で自覚している。

この恋がもう叶わないことも、感づいている。

それでもカミラは胸を張って居られた。この恋が本物だと信じていたからだ。

なのに、今のカミラはひどく弱い。ふとした瞬間、心が揺らぐのがわかる。

どうして。

疑問がカミラの体をすくませることがある。

どうしてアロイス様は、私に優しくしてくれるの。

アロイスがカミラに好意を持つてくれていることもわかる。

最初は醜くいヒキガエルで、カミラをぞんざいに扱う嫌な男だと思っていた。それでも、しばらく暮らすうち、話し合うようになるにつれ、彼が悪い男ではないことがわかった。

きつとアロイスはカミラを大切にしてくれるだろう。ユリアン王子よりも、ずっと幸せにしてくれるだろう。

わかってる。

どうして恋をした相手がアロイス様ではなかったの。

それでも、感情はどうしようもない。ユリアン王子への、十年以上の恋心が、カミラに絡みついてほだけない。

これなら。

息を吐き出す。カミラの恋心は、ヴィクトルの壊れたバイオリンに似ている。

最初から、恋なんてしなければよかったのに。

一人になりたかった。

○

アロイスがカミラの部屋から出ると、待ち構えていたようにクラウスが立っていた。

「やあ。カミラはいなかったでしょ」

「よくわかるな……」

ちようどニコルに、カミラが部屋にいないと聞かされたばかりだ。快活なカミラが終始暗い顔をしていたことを、ニコルも心配していたようだ。しかし、カミラはニコルの心配をよそに、一人でどこかへ行ってしまったという。

「そりゃね。会いたいの？」

クラウスに言われて、アロイスは少し視線を伏せた。

カミラは心配だし、会って様子を見たいと思っている。ただ、今のアロイスはカミラに避けられている身。顔を合わせれば、余計に

落ち込ませてしまいかねない。

それにアロイスは、大衆の面前でカミラに恥をかかせてしまった。ユリアン王子への恋心を責められ、返答に窮していた彼女の代わりに、肯定を返してしまったのだ。

アロイスはカミラに会いたい。だが、カミラはアロイスに会いたくないかもしれない。

「あんたのそんな態度が見られるようになるなんてなあ」

うつむくアロイスに向けて、クラウスはからかうように言った。

「いつも妙にわかった顔で、いけ好かないやつだったのに。なんでもかんでも事なかれって感じでさ。誰にも期待しないし、人生諦めてますって態度だったじゃん。今日だって、前なら絶対に止めに入らなかったでしょ」

「……………そうか？」

「ブルームの内情に介入して、娯楽の擁護。これって伯父さんやフランツに、真っ向から対立したってことでしょ。わざわざ自分から波風立てるなんてさ」

たしかに、とアロイスは思う。まだクラウスとフランツのどちらが当主になるかわからない状態。無闇にフランツの反感を買うのは得策ではない。そうではなくとも、あれほど人のいる前で、自ら名乗りを上げることは、いらぬ敵を作る行為だろう。

だが、敵ができたぶんだけ、味方も得られることがある。それはもしかしたら、カミラが教えてくれたのかもしれない。

「それなら、お前が当主になればいいだけだろう、クラウス」
アロイスは顔を上げると、当たり前のように言った。

「私は町の私刑を許すつもりもなければ、強権を持った自警団の存在を許すつもりもない。フランツが当主となるのであれば、私はブルームと対立し続けることになる。ブルームは想像よりも、ずっと不安定になるだろう。お前が当主にならなければな」

アロイスの言葉に、クラウスが面白くなさそうに口を曲げた。けつと吐き出すと、「どうせそんなことだろうと思った」と苦々しく

言い捨てる。

「みーんな俺に期待ばかりして。人の気も知らず、なんでも押し付けてさ」

「そう言うな。お前が、好い男だから期待しているんだ」

「男に言われてもね」

アロイスとしては本心から褒めたつもりだが、クラウドはますますへそを曲げたらしい。深く息を吐くと同時に肩を落とし、頭を軽く振る。

それから、ひどく不服そうに、小さくつぶやいた。

「……………しょうがないなあ。まあ、天才の俺に期待するなっ方が無理だったんだよな」

片手で頭を荒く掻くと、クラウドは上目でアロイスを見やった。遊びっぽくて、少し意地が悪そうなその視線の奥に、真面目な彼の根底がうかがえる。

「カミラの居場所を教えてやるよ」

「知っているのか！」

言葉を食い気味に、アロイスはクラウドに問い返した。口をついて出た思いがけない声音に、アロイスは自分自身で戸惑い、誤魔化すように咳払いをする。

感情の制御には、アロイスはそれなりに自信があった。なのに、カミラに関することとなると、ときどき自制が効かなくなってしまう。うかつに晒したおのれの感情に、アロイスはばつの悪さを感じていた。

そんなアロイスの様子を、クラウドは面白くなさそうに眺めた。

「あんたはいいよな」

「……………急になんだ？」

「なんでもない。居場所だったな？ 一人になれる場所なんて、この屋敷の中じゃそうそうない」

クラウドは少し前までの表情を消し、いたずらっぽく目を細めた。そして、自嘲気味に、だけど妙に気取った態度で吐き出した。

「どうせ俺が行っても、慰めにはならないだろうし。行ってこいよ
カミラは真っ白な、真冬の花園にいる」

日が暮れても、小さな温室は昼間のように明るい。

白い花が咲き誇る温室で、カミラは一人うずくまっていた。

ここはクラウスの秘密の場所だと言っていた。だから、少なくともクラウス以外の人間が来ることはないだろう。あの男も、あれで妙に察しがいい。おそらく、カミラのいる中に踏み込むような、無粋な真似はするまい。

足元には、白い可憐な花が咲いている。その愛らしい姿に、カミラは息を吐いた。こんな花のような女であれば、もっと違った未来があったのかもしれない。ユリアン王子も、父も母も、カミラをもっと違った目で見えてくれたかもしれない。

妬んだって仕方がない。カミラは怖じずに胸を張れる自分を誇っている。それでも妬ましい。悔しい。悔しい。悔しい。なにもかも憎らしい。目の前の花に触れ、その花びらを撫でる。踏みつぶすのもためらわれる白い花、お前のようにあれたなら　そう思う自身が惨めで、情けない。悔しい。頭の中がぐちゃぐちゃに乱れる。ユリアン王子は、どうしてカミラを見てくれなかったのだろう。

ふと、冷たい風が温室に流れ込んだ。

空気が揺らぐ。誰かが入ってきたのだと、振り返らなくともわかった。

「……………カミラさん？」

扉に背を向け、花畑に埋もれるカミラに、遠慮がちな声がかけられる。気遣うように慎重に、そっと近づいてくる足音がする。

足音は、カミラの真後ろで止まる。どう声をかけるべきか迷っているのだろう。しばらくの沈黙ののち、背後の誰かは口を開く。

「カミラさ　」

「慰めならやめてください。私だって、わかっているんです」

かけられた言葉をさえぎり、カミラはそう言った。ここで慰められてもしたら、自分の余りの惨めさに、耐えられなくなるだろう。「私の恋は、もうとつくに破れたもの。早く忘れるべきなんです。縋りつくだけ、愚かなことだって」

慰められるのも惨めだけど、失くした恋を追い続けるカミラも、また惨めだ。諦めが悪く、自分の立場を理解しないカミラが嘲笑を受けるのも当然のこと。ユリアン王子を見返すことで、自分の価値を認めてもらいたいなんて、振られた女の哀れな妄想なのだ。

「でも」

カミラはぼんやりと、地面を覆う花を見つめる。雪みたいに白い。「忘れられるなら、はじめから好きになんかならないわ」

背後の気配が、そっと動く。カミラの様子を見ながら、隣に座り込んだのがわかる。カミラはそちらを見ずに、ただ花の姿を眺めていた。

花びらを撫でる。小さな子供を撫でるように、やわらかく。視線は花に向かっていても、カミラが見つめるのは、自分の遠い過去だった。

「ユリアン殿下とはじめて会ったのは、七歳のころだったわ。父と母と王宮に見参したとき、私、ひどく腹を立てていたの」

カミラが王宮を訪ねたのも、この時がはじめてだった。王宮で開かれる あれはたしか、第二妃の盛大な葬儀の日だった。国中の貴族が集まって、第二妃へ別れの言葉を手向ける日。そして、第二妃への言葉もそこそこに、貴族たちがつまらない駆け引きをする日だった。

そんな日のカミラの不機嫌は、両親の不興を買った。だが、それほど叱られたって、カミラは機嫌を直すことはなかった。理由も覚えていない。カミラがドレスの袖にこっそり隠した、布にくるんだビスケットのせいだ。

「ちょうどその前の日、ディアナ 侍女のディアナに誘われて、

私、はじめてお菓子を作ったのよ。生まれてはじめて自分で作ったの。楽しくて、嬉しくて、父と母に食べてもらいたかったの。でも

ー

ゾンネリヒトでは、料理は貴族のすることではない。子供の作った不格好なビスケットを、父は一瞥だけして眉をしかめ、母は「はしたない」とくず入れに捨てた。それで、ずっと腹を立てていたのだ。

せつかく作ったものが無価値に思えて、だけどそれでも捨てきれずに持ち歩いていた。大切なものを隠しているような、ゴミを抱えているような気持だった。どうして持ち歩いたのかは覚えていない。たぶん、両親の見えないところで捨てるつもりだったのだろう。

「ユリアン殿下に会ったのは、そのとき。父と母に反発して、一人で王宮を歩いていたときに、中庭の影でうつむいている男の子に会ったの」

中庭の風。冷たい冬のおいも覚えている。思えばあるときも寒い日だった。モントンとは違い雪は降らないが、草木も枯れる冷たさは同じだ。

「はじめは、ユリアン殿下だって気が付かなかったわ。だって、目は赤くなかったし、髪は茶色くて、普通の男の子みたいだったもの。着ているものだけが、立派な 喪服だったわ」

ユリアン王子は、強い魔力を持って生まれた。その瞳を見ると、周りの人間を魅了してしまう。

だから彼の母親である第二妃は、彼の姿を魔法で偽っていた。本来とは異なる瞳の色、異なる顔かたち、異なる体となるよう、常に魔法をかけていた。第二妃の魔力でユリアン王子を覆い、彼本来の魔力が流れ出ないようにしていたのだという。ゾンネリヒトでは、有名な話だった。

「殿下だったら、きっと声をかけられなかったわ。でも、普通の男の子に見えたから、声をかけたの。元気がないから、『どうしたの？』って。『ビスケット食べる？』って。思えば私も、押し付けよ

うとしていたのね」

くすくすと笑いながら、カミラは懐かしい日を思い出す。男の子は驚いたようにカミラを見ていた。声をかけられたことも、ビスケットを押し付けられたことも、信じられないような顔だった。

でも。

「ユリアン殿下は、黙ってビスケットを受け取って食べてくれたわ。私、その横顔をずっと見ていたの。美味しそうに食べてほしいと思ったけど、上手いかわからないものね。殿下は逆に、目を潤ませて、泣き始めてしまった」

当時は、どうして泣いたのかわからなかった。でも、今ならわかる。

彼は母の死を悼んでいたのだ。

「私、びつくりして、『美味しくない？』って聞いたの。殿下は『美味しい』って言うてくださって、言いながらも泣いていたわ。変な話だけど、その泣き顔が、すごくきれいで」

花びらを撫でる手が止まる。カミラの肩が震える。

隣に座る『誰か』は、それさえも黙って聞いていた。

「泣きながらビスケットを食べるユリアンさまを、私、ずっと見つめていたの。泣いているユリアンさまを見ると、私も……なんでもかしら、泣けてきて。父と母に、泣いてはいけないって言われてきたのに。物心ついてから、泣いたことなんてなかったのに」

カミラの両親は、カミラが弱音を吐くことを許さなかった。『もっと大変な人がいる』と、『父と母がいて、豊かな暮らしができて、お前は恵まれている』と言い聞かせられてきた。

事実、カミラは恵まれていた。わがママを許され、贅沢も認められてきた。その代わり、涙をずっと禁じられてきた。呆れるほどに強くあることだけを望まれてきた。

「ユリアンさまと隣り合って、しばらく泣いていたわ。言葉なんてほとんど交わさなかったけど、それでもよかったの」

声の震えを隠し、溢れそうになる思いを押しとどめ、カミラは息

を吐き出した。頭を振り、目の奥の熱を冷ますように、強く目をつぶる。

それからようやく顔を上げた。隣に座る、優しい男の姿を見る。「すみません、アロイス様。また、ユリアン殿下の話をしてしまっ
て」

「いえ」

苦笑しながら言ったカミラの言葉を、アロイスは端的に否定した。カミラをまつすぐに見るその表情は、気後れがするほどに真摯だった。

「構いません。お話しください　いえ」

アロイスはそう言ってから、生真面目な顔で首を振る。視線はカミラから逸らさない。王家の証である銀の髪が、白い花畑に映え、ひどく　きれいだった。

「お聞かせください。あなたのした恋のこと」

カミラを見る視線は、苦しいくらいに優しい。

「あなたのことを知りたいんです」

カミラは息を呑んだ。息苦しい。アロイスの顔が見ていられずに、また視線を伏せた。

目の奥が熱い。吐く息も熱い。白い花がきれいだ。素直になれない感情が、素直になりたくて暴れている。

「私……私、今も料理をすることが好きなの」

「存じております」

絞り出すようなカミラの声に、アロイスはそつと答えた。花のささやきよりも、小さな言葉のやりとりだった。

「ユリアンさまがいたから、まだ好きでいられるのよ。ユリアンさまが居なかったら、ビスケットなんて捨てて、もう二度と作らなかつたわ」

父にも母にも否定され、誰にも認められないままだったら、カミラは料理が大嫌いになっていただろう。あの日、あのときユリアン王子に会えたから、カミラは料理をすることを、ずっとずっと好き

でいられる。

「お菓子を作らないのは、ユリアンさまに食べてほしかったから。子供のころと同じ味のままでいたかったの。もう一度作ったら、味も変わってしまう気がする。ユリアンさま以外には、作らないって決めていたの」

はい、とアロイスは相槌を打つ。相槌なんてどうでもいいけど、頷くアロイスの姿は、なぜか安堵した。

「でも、ユリアンさまは、すっかり忘れてしまわれていたわ。小さなときの、たった一日のことだもの。当たり前だわ。さみしいけれど、構わなかった」

「はい」

「私が覚えていればよかったの。それだけでユリアンさまが好きなんだもの。私を忘れていても、優しくなくても、ひどい人だったとしても、私は好きだった」

アロイスが頷いている。瞳にカミラと、白い花畑が映っている。

咲き誇る花はきれいだ。アロイスの瞳もきれいだ。

「私以外の誰かを好きになっても、私を疎んでいても、どんな仕打ちを受けても、好きだったわ。好きだったの」

リーゼロッテの手を取っても、カミラを王都から追放しても、それでもカミラは好きだった。けっして振り返らない背中を追いかけていた。最後まで振り返らなくても、いつまでも期待を捨てきれずに追いかけていた。

だけでもう、認めないといけない。ユリアン王子はカミラを見ることはなかった。カミラの恋は叶わなかった。この後、叶うこともない。

「ユリアンさま、好きだったの」

ぽつりとつぶやく。目の前の花の色がにじんで見える。こらえきれない涙が、目の端からあふれだす。

「本当に好きだったの」

頬を伝い、涙がこぼれる。一度こぼれだすと止まらず、あとから

あとから流れ出す。アロイスは、笑いもせず哀れみもせず、カミラを見つめていてくれた。

「好きだったわ。ユリアンさま、好きでした。好きでした。ずっと、好きでした」

喉の奥から嗚咽が漏れる。咳き込むように息を吐くと、カミラは涙を手で拭った。拭っても拭っても、少しも収まる気配がない。

涙が花畑を濡らす。花が涙を受け止める。カミラとアロイスの二人きり。静かな、小さな真冬の花園。

「ユリアンさま、ずっとずっと、好きでした」

カミラはその中心で、声を上げて泣いた。

4
(2) - 14 (後書き)

4
(2) 終わり

翌日はよく晴れていた。

雲一つなく、冬の太陽が町を照らす。窓から差す日差しは暖かく、冬の終わりが近づいていることを感じさせた。

あとひと月ほどすれば、季節は春に変わる。今は雪に覆われたブルームの町も、花々で明るく色づくのだと、クラウドは言っていた。
早く見てみたいわ。

レルリヒ家の自室。朝の町並みを眺めながら、カミラは思った。
きつと、ため息が出るほど美しいのだろう。

「……奥様、もしかして、元気になりましたか？」

朝一番、カミラを起こしに来たニコルが言った。起こされる前に目覚め、窓辺に立っているカミラを、ニコルは眩しそうに見ている。おずおずとしたニコルの言葉に、カミラは少し面食らった。それから、たった一人の侍女の気遣いに、思わず口元が緩んだ。ニコルはよく、カミラを見てくれている。

「ごめんなさい、ニコル。心配かけたわね」

ニコルに振り返ると、カミラは苦笑した。気遣ってくれることの嬉しさと、気遣わせてしまっていた自分自身に対する恥ずかしさがある。自分でも気が付かないうちに、カミラはどれほどため息をつき、俯いてしまっていたのだろうか。

苦々しさに視線を伏せかけ、慌ててカミラは顔を上げた。

今はきちんと背筋を伸ばし、前を向いていられる。胸の中にあつた黒い渦のような感情は、完全に消えたわけではないけれど　もう、大丈夫。

「ニコルが言った通りね。ここしばらくの私は、たしかに私らしくなかったわ。思い悩むなんて、性にあつてないものね」

「いえ、いえ！」

両手を握り合わせ、ニコルは安堵と喜びの入り混じった表情をカミラに向けた。

「私は奥様が元気であれば、それが一番です！」

力んだニコルの言葉は思いがけず大きく、いささかうるさいくらいに部屋に響き渡る。そばかすの浮かぶ頬は、力んだせいか、大声を出してしまった恥ずかしさのせいか、ほのかに赤くなっていた。

カミラはそんなニコルに対し、軽快な笑い声を上げた。

「ありがとう、ニコル」

ニコルの言葉が、今は素直に嬉しい。

○

アロイスが跡継ぎにクラウドを推したことで、レルリヒ家はちょっとした騒ぎになった。

アロイスは、フランツを跡継ぎと目していた人間たちに連日説得をされ続け、外出もままならない。一方でクラウドの元には、フランツ派から鞍替えした人間たちが代わる代わる媚を売りに来る。現当主のルドルフは、息子のフランツと兄のルーカスから散々責められ、弱り切っていた。

現在のレルリヒ家で、涼しい顔をしていられるのは、きっとゲルダだけだろう。

そういうわけで、ここ数日カミラはほとんど外出ができなかった。外に出られたのはただ一度。どうしても頼み込んで、クラウドを案内に、例の地下へ行つたときだけだ。

五人が騒音を鳴らしていた地下は、すっかり変わり果てていた。地下にあった楽器や楽譜はすべて片付けられ、空の棚だけが空虚

に並ぶ。

五人の姿も、当然ない。人のいない地下室はいつも以上に冷たかった。

きつと五人はもう、地下へは来ることはないだろう。

散々殴られ、大衆晒し者にされ、目の前で楽器も壊されたのだ。懲りてしまうのも無理はない。もともと、音楽へ強い情熱を持っているようにも見えなかった。ただみんなと楽しく祝婚歌を奏でたいだけ。そういう人間たちにとって、今回の件は堪えただろう。

あるいは懲りていなくとも、彼らの親は許さないとはいえずだ。

五人とも、それなりに裕福そうな身なりをしていた。それに、字を読み楽譜を理解するだけの教養もある。おそらくは平民の中でもなかなか地位のある家柄の者なのだ。

身分あるものにとつて、今回の件は汚点に他ならない。不本意ながら、娯楽は町の禁止事項。破った五人の方に非があるのだ。二度と同じことをさせるまいと、家族なら思うだろう。

それでもせめて、もう一言くらい、カミラは五人と言葉を交わしておきたかった。このまま二度と会わなくなるなんて、あまりに後味が悪すぎる。

そう思えども、カミラ一人の力では、町のどこに五人が暮らしているかも知らない。頼りのアロイスもクラウス忙しい。

なにもできないまま、カミラだけが退屈な日々がしばらく続いた。

○

「や」

珍しくカミラの部屋を訪ねてきたクラウスが、開口一番、手短さぎる挨拶を述べた。

なにかと忙しいだろうに、クラウスの顔つきに変わりはない。飄々とした軽率な笑みを浮かべ、気取った様子で髪をかく。あまりに

気安すぎる態度にニコルが威嚇しているが、クラウドは気にも留めていないようだった。

「カミラ、ちょっと時間いいかな？　ちょっと付き合っただけでほしいんだけど」

「はあ？」

唐突に告げられた言葉に、カミラは眉をしかめた。

「付き合っただけに？　また愚痴でも言っつもり？」

カミラがクラウドに、なにかしらで付き合っただけなことなど、温室での一件くらいだった。ここ数日で生活の一変した彼のこと。多少なりとも気疲れしているのかもしれない。

まあ、カミラもそれなりに世話になった身。愚痴くらいなら付き合うのもやぶさかではない。

「いやいや。そういうのじゃなくて」

しかし、クラウドは慌てたようにカミラの言葉を否定する。気恥ずかしそうにしているあたり、あの夜カミラに弱音を吐いたことは、彼の本意ではなかったのだろう。

「ちょっと散歩に、町まで行こう。アロイスも誘った。俺としては、カミラと二人でも構わないんだけど」

「町に？　そんな時間あるの？」

「構います！」と叫ぶニコルを無視して、カミラは尋ねた。

二人とも、今が一番忙しいときだろう。カミラのような、媚びる価値のない暇人とは違う。話したい人間も話し足りない人間も山ほどいるのだ。

カミラとしては外に出るのは歓迎だが、そうもいかないことくらいは理解しているつもりだった。

だが、クラウドはなんてことないように、肩をすくめて見せるだけだ。

「時間なんていいの。『先生』からのありがたいご命令だからね」
「ああ、そう……」

安易なクラウドの言い分に、カミラは溜息のようにつぶやいた。

たいした不良息子である。

この道楽者にとって大切なのは、家の中での権力争いより、町中に潜む悪い『先生』たちが与える雑用の方なのだ。いっそ、外に出たがっていたのは、カミラよりもクラウスの方なのかもしれない

いや待て、『先生』の命令を受けているあたり、すでに何度も脱走済ではないだろうか。

呆れた顔のカミラに向けて、クラウスは片目を閉じて見せた。

気取り屋の色男は、口元に指を当て、いたずらっぽく笑う。

「例の、作曲の先生からのお達し ここ最近、また騒音が鳴りはじめたから、調べて来いってさ」

乾いた高い音が、空の地下に響いた。

明るい音色のはずなのに、どこか物寂しい。つたないながら、やっと最後まで奏でられるようになったけれど、それを一緒に喜んでくれる人も、音を合わせて奏でってくれる人もいない。

一人の地下で、フィーネはフルートから唇を離した。もう練習したってどうにもならないのに、どうして自分はまた、この地下へ来てしまうのだろう。

他に、誰が来るはずもないのに。

「や、上手くなっただじゃん」

ため息をつくフィーネの背後から、思いがけない拍手が響いた。

「いつの間に最後まで吹けるようになったんだ？ やるじゃん！」

「上手くないわよ。リズムも悪いし、音は途切れるし、そもそも高音がぜんぜん出てないじゃない！」

「ちよつとそれは、要求が大きすぎるなあ」

甘い声音の褒め言葉と、叱咤する厳しい声。聞き覚えのあるその音に、フィーネは振り返った。

「久しぶり。地下の騒音の正体はフィーネだったかあ」

意外そうに肩をすくめるクラウスが、真っ先に目に入る。次いで、鋭い目つきのカミラの姿。二人から少し遅れて、アロイスと、カミラの侍女であるニコルが、地下室の階段を下りてきている。

思いがけない人物の登場に、フィーネは瞬いた。驚きよりも、安堵よりも先に、賑やかさが心に響く。

孤独で空虚な地下室が、にわかに騒がしくなる。

○

フィーネはここ数日、家族の目を盗んで、一人地下室へと訪れていたらしい。

「他の四人には、会えていません。家族に『悪い仲間と付き合うな』って反対されてしまつて……」

ここ最近の様子を聞いたクラウスに対し、フィーネは沈んだ調子でそう言った。

「たぶん、他のみんなも似たような感じだと思います。特にヴィクトルは、婚約者がミアだから　あまり裕福な家の子じゃないから、当たりが強く。あたしたちの親の間では、ミアがそそのかしたんじゃないか、って噂されているみたいなんです」

「なによそれ」

カミラが眉をひそめると、フィーネは暗い顔のまま頷いた。

「あたしたちが勝手にやり始めたんですけどね。ミアって、もともとなんでもやってみたがる子だったから、疑われちゃって。婚約の話も揉めちゃっているみたいです。あたしも、家族から聞いただけですけど……」

不愉快な話に、カミラは渋い顔を浮かべた。祝婚歌を奏でるためにしていたことが、結婚自体を危うくさせるなんて、笑い話にもならない。

「やつぱり、クラウス様たちに見つかったときに、やめておけば良かったんですね。危ないことだつて、わかつていたんだから」

フィーネはうつむき、自嘲するように言った。思えばカミラが最初に地下へ来たとき、『やめよう』と言ったのはフィーネだった。

あのとき、フィーネの言う通りに止めていれば、自警団に見つけることもなかったかもしれない。五人が付き合いを禁じられることもなく、ヴィクトルとミアの結婚も危ぶまれることはなかった。

悔いる気持ちはよくわかる。

だけどカミラには、だからこそ疑問がある。

「それなら、どうしてあなた、またここへ来たのよ」

「……えっ」

「フルートなんて吹いて、また見つかったら大変よ。今度は叱られるだけじゃすまないかもしれないわ」

一度目なら『気の迷い』で済んでも、二度目となるとそうはいかない。しかもフィーネは、家族の目を盗んでまで地下へ来ているのだ。見つければ、今度は自宅に軟禁か、あるいは自由を奪うため、強引に誰かと結婚をさせられるかもしれない。

「そう……そうですね」

フィーネはカミラに言われてはじめて、自分のおかしな行動に気が付いたような顔をした。意表を突かれたように瞬きをし、無意識にか、自分のフルートを抱きしめる。

「なんででしょう………なんだか、忘れられなくて。はじめて音が出せたときのうれしさや………みんなで喜んだときの楽しさが」

フィーネがはじめてフルートの音を出したとき。仲間たちは口々に歓声を上げ、思いきり喜んだ。カミラは「まだ音が出ただけだ」と叱咤したけれど、フィーネにとってはそれだけではなかったのだ。カミラはばつの悪さに口を曲げると、そつとフィーネを窺い見た。一人きりの彼女には、今は一緒に喜ぶ相手もない。クラウスの褒める言葉さえ、カミラ自身が即座に否定してしまったのだ。

「……ねえ、もう一度、吹いてみてちょうだい。あなたの音は嫌いじゃないわ」

「上手くないですよ」

フィーネは少し驚いたように、いささか嫌味っぽくそう言った。大人しそうな顔からの、思いがけない意趣返しに、カミラは思わずむっとする。

が、すぐに苛立ちごと息を吐き出した。

「上手さと好き嫌いは別よ。　誰も聞かない音なんて寂しいでしょう、私に聞かせてみなさい」

胸を反らすカミラに、フィーネは苦笑した。「ありがとうござい

ます」と囁くように言うと、彼女は抱きしめていたフルートを構えなおす。

歌口に唇を当て、フィーネは目を閉じた。

つたない音色が、寂しげに地下に響く。

嫌いじゃない、と言ったのは本心だ。

フィーネの心そのままの、素直なその音が、カミラは好ましいと思う。

物悲しいフィーネの音色は、無粋な声にさえぎられた。

「 げっ、フィーネ！ なんか聞こえると思ったら、お前か」

唐突に割り込んできたその声に、フィーネは思わず、フルートから口を離した。

顔を上げれば、見覚えのある少年が、階段から下りてくる姿が映る。

細身で、少し神経質そうな顔立ちには、苦々しい表情が浮かんでいる。皮の丈夫そうな鞆を肩から下げ、その少年は地下へと駆け込んできた。

「オットー！」

信じられない気持ちで、フィーネは声を上げた。オットーは不機嫌そうにフィーネの顔を一瞥すると、「おう」と短く、返事にもならない返事をする。

「クラウス様たちまで。なんだ、絶対誰もいないと思ったのに」
オットーは眉をしかめると、慣れた足取りで地下の隅まで行き、腰を下ろす。地下の隅は、いつもの練習でオットーが陣取っている場所だ。彼はそこで、久しぶりの挨拶もなく、感慨もなく、いつものように鞆を広げ、楽器を取り出した。

だが、フィーネはいつも通りとはいかない。この数日間、地下はフィーネただ一人だったのだ。

「オットー、どうして？ もう誰も来ないと思ったのに……！」

「はあ？ そうしたら、またお前に差を付けられるだろうが！」

負けず嫌いな目が、フィーネを睨みつける。そうまで言われても、ピンとこない顔のフィーネに、オットーは頭を掻いた。

「音を出せるようになったのも、音階を吹けるようになったのも、いつもお前が先だっただろ。だから、外出が許されてすぐに来たんだ。なのに、またお前が先にいるんだから……」

口をとがらせるオットーに、フィーネは瞬いた。思わず頬をおさえる。なぜだろう、笑ってしまいそうだ。

なのに、笑い声を上げようとしたフィーネを、また別の声が邪魔する。

「ほら、フェアライト、おいでって」

「ディータ、ちよつと、私は別に……」

ためらうような女の声と、明るいお調子者の声。眉をしかめるフェアライトと、その腕を引くディータだ。

頬に手を当てたまま、見つめるフィーネの視線に気が付くと、ディータはちよつと照れたように頭を掻いた。

「いやあ……なんか、みんな入っていくのが見えたから。俺も気になって、ちよくちよく様子見にきてただけど、一人じゃ勇気出なくてさ」

大きな体をすくませながら、ディータは頬を赤くする。口元がむずむずと動かしながら、足先は軽快にリズムをとるように、床を叩く。

「自警団は怖いけど、なんかこう、落ち着かなくて。気が付いたらいろんなものを叩いちゃってるんだ」

「……あなたたち、馬鹿ばっかりだわ!」

ディータの手を払い、フェアライトは腕を組んでそう言った。つんと澄ましたその横顔を見て、ディータはにやりと笑う。

「そんなこと言って、フェアライトだって気になって様子を見に来てたじゃん? ずつといたの、俺知ってるよ。俺も何度も来てたからね」

にやにや笑いのディータの言葉を否定せず、フェアライトは「ふん」と鼻を鳴らした。居心地の悪そうな顔をしていても、彼女が素

直でないことを、フィーネもみんなも知っている。

フィーネのおさえた頬が、ぽかぽかと暖かくなる。冷たい地下は、こんなに狭くて、温かかったかしら？

「ああ、やっぱり。みんな来てる！」

最後に飛び込んだのは、今日一番に明るい声だった。

「ヴィクトル、私の言った通りだったでしょう！」

「ミア、ま、待って。……本当に？」

「私が嘘をついたことがある？」

軽快なその声と共に現れたのは、ヴィクトルの婚約者であるミアだ。彼女は満足そうに地下の人々を見回すと、階上へ向けて声を上げた。

「降りてくればわかるよ。あなたの友達なんだから、自信を持ちなさい！」

ミアの呼び声に誘われて、おずおずと下りてくるのはヴィクトルだ。大きめの四角い箱を小脇に抱え、肩を縮めるヴィクトルの背を、ミアは強く叩いた。

「しっかり！」

「う、うん。ええと」

そう言って、ヴィクトルは地下にいる人々を、順に眺める。フィーネ、オットー、ディータにフェアライト。それからクラウドたち。不安の入り混じるその顔には、痛々しい殴打の跡が残っている。

「……みんな、来てくれたんだな。正直、あんなことがあって、誰も来ないと思った」

ヴィクトルは視線を伏せ、息を吐く。肩は重たげで、頭はうつむきっぱなしだ。

「もともと俺の祝婚歌だったし、責任感じてたんだ。親父にも殴られたし　迷惑かけてごめん」

思いがけず殊勝なヴィクトルの様子に、フィーネたちは顔を見合わせた。

「迷惑だなんて」

「それでさ」

言いかけたフィーネの言葉をさえぎり、ヴィクトルは続けた。うつむいたまま地面に膝をつき、抱えていた箱を下ろす。

自然、注目が箱に集まる。黒く塗られた革張りの箱は、見るからに高級そうだった。箱の側面には、仰々しいくらいの立派な留め具が二つ付いている。

「親父に言われたんだ。『見つかったら、迷惑を被るのはお前だけじゃない。人に迷惑をかけるようなことは二度とするな』って」

ヴィクトルは、その留め具を慎重に外す。それから、どこか恭しい仕草で、黒い箱をそっと開けた。

「『こういうことは、ばれないようにやるもんだ』って」
木箱の中に入っているのは、見るからに使い込まれた。しかし、よく手入れされたバイオリンだった。

ヴィクトルはバイオリンを取り出すと、ようやく顔を上げた。
「次はもつと上手くやる。もう迷惑はかけない。……だから、また一緒にやってくれるか？」

その顔に浮かぶのは、いかにもブルームの町の人間らしい。不敵で、いたずらっぽい表情だった。

「本当に、呆れた町だわ」

わつと盛り上がる、ミアを含めた六人の様子を、カミラは苦笑しながら眺めていた。

そもそもこの店は、ヴィクトルの実家のものなのだ。その地下に、ヴィクトルたちが来る前から楽器が置かれていた、というのも妙な話。その楽器は、いったい誰のものだったのか。この地下は誰が使っていたのか。考えてみれば、すぐにたどり着くことだった。

呆れるけれど、面白い町だ。きっとヴィクトルたちだけではな

い。町の誰もが、どこかに秘密を抱えているのだろう。

この町だから、クラウドみたいな人間が育つわけね。

良くも悪くも。そんなことを考えながら、カミラはなにげなくクラウドに目を向け。

その表情にぎよつとした。

クラウドは、六人の姿に目を奪われていた。

日頃は軽薄で、無気力そうな瞳が輝いている。感情が昂っているのか、頬も少し赤い。その横顔は、嬉しそうで　どこか羨ましそうだ。

「俺、ちよつと感動してる」

誰に言うでもなく、クラウドはそう言った。

それから、顔を引き締めるように、一度ぎゅつと目を閉じる。それでも、表情はあまり変わらない。

「こんなの、隠しておくのはもつたいないでしょ」

「クラウド？」

いぶかしむカミラを差し置いて、クラウドは一人息を吐く。それから息を吸い込んで、「おーい！」と六人に向けて声を上げた。

「せつかくなんだから、『ばれないように』なんて言うなよ！」

クラウドの声は、ひどく楽しそうだった。それでいて　いかにも悪い事を考えていそうだった。ヴィクトルなど目ではないくらいに不敵なその表情は、いたずらを考える子供そのものだ。

「どうせなら、演奏会をしようぜ！　みんなに聞かせてやろう！」

俺の、跡継ぎ決定記念だ。盛大な祝祭をしよう！！」

それはまさしく、モーントン領の禁忌。あの温和なアロイスでさえ目を剥き、険しい顔でクラウドを見ている。

本当に、呆れた男である。

「クラウド、お前はなにを考えているんだ！」

地下からレルリヒ家の屋敷へ帰った後。クラウドの部屋で、アロイスは叱るようにそう言った。

「自分がどういう立場にいるか、分からないわけではないだろう？
それなのに、お前は無防備に一人であっちこっち歩き回って……
！」

言いながら、アロイスは頭に手を当てる。眉間にしわが寄っていることが、自分自身でもわかった。

「ああ、あんたが今日ついてきたのって、そういうこと」

しかし、当のクラウドは涼しい顔である。余裕めいた表情を崩さず、お気に入りの長椅子に深く腰を掛け、足を組む。

不遜な態度から向けられる視線は、嘲笑にも似ていた。

「責任を感じているんだな。俺が死んだら寝覚めが悪いから。お優しくして、立派な領主様なこと」

む、とアロイスは口をつぐむ。凶星だった。

アロイスは、クラウドを跡継ぎに推したことを後悔していない。能力を見ても、人柄を見ても、彼がその座に就くのは当然だと思っていた。

だが、アロイスの選択は、優勢だったはずのフランツの立場を危うくした。

モーントンの領主であり、レルリヒ家の主人でもあるアロイスの意思なのだ。レルリヒ家の現当主・ルドルフには、その意志に逆らうことはできない。クラウドの時期当主の座は、ほぼ確定と言っていいだろう。

フランツを次期当主と見て、彼と懇意にしていた者たちにとって、

この情勢の変化は痛手だった。今さらクラウドに寝返ることもできない。そもそも、つかみどころのないクラウドは、取り入ることの難しい相手だ。

御しにくいクラウドより、どうかしてフランスを頭に据えたい。そう思う連中が、連日アロイスの元へ押しかけては、説得を試みていた。

だが、フランス派の人間は、そういう行儀のよい者たちばかりでもない。説得をするよりも、単純でわかりやすい方法を取りたがる人間はいるものだ。

特に、クラウドとフランスの伯父であるルーカスは、『知より武』というアインストの思想に傾倒している。力技は望むところだろう。

だというのに。

「お前は、どうしてわざわざ目立つような真似をしたんだ。それも、『跡継ぎ決定記念』の祝祭なんて、挑発しているようなものだろう」「そりゃあね。挑発してるんだもん」

当たり前のように告げられた言葉に、アロイスはますます眉間の皺を深める。

「このままだと、この先ずっと狙われ続けそうだからね。早めにけりをつけたいでしょ」

「お前はまったく……なんて命知らずな」

「そんなことないよ。俺はあんたと違って、命が惜しくないわけじゃない。ちゃんと考えてる」

「しかし……」

考えて身が守れるわけでもあるまい。相手は同じ家の身内だ。どこにいたって何をしていたって、監視されているようなものだろう。自警団の問題だってある。レルリヒ家は知恵者が多い分、力には弱い。自警団という私兵を持つルーカスとフランスに、ともに当たっては勝てないだろう。

心配するアロイスを、クラウドはしかし鼻で笑った。彼は自らの

頭を指先で小突くと、「大丈夫」と不敵に言ってみせる。

「安心しろよ。俺はあんたより頭いいからさ」

クラウスの言葉は、あまりにも自信家で、アロイスに向けるには、あまりにも無礼だった。

だが、それ以上に 奇妙なくらい説得力があった。

少しの沈黙のあと、アロイスは諦めにも似た息を吐いた。

「 そうだな。お前の言う通りだ」

そうまで言われては、もうアロイスには苦笑するほかにない。

馬鹿馬鹿しさにも似た気持ちで額に手を当て、頭を振ったとき。

アロイスは眉間の皺が消えていることに気が付いた。

「お前を信じよう、クラウス。私もできる限り協力する」

「言ったな？ 限界まで扱き使ってやるよ」

からかうようなクラウスの言葉に、アロイスは生真面目に頷いた。

「かまわない。ただ」

アロイスは一度、クラウスから視線を外す。どこを見るわけでもない。強いて言うなら、地下からの帰り道。記憶の中にある、足取りの軽いカミラの姿を眺めていた。

「祭りをするなら、台無しにするような真似はしないでくれ。ヴィクトルたちを落胆させることになるし 彼女も、楽しみにしていた」

「……他人^{ひと}のことばかりだな、あんたは」

クラウスは鼻白んだ様子でそう言うと、呆れ交じりの息を吐いた。

○

そんな男たちのやり取りなどつゆ知らず、カミラは浮かっていた。

祭りなんて久しぶりだ。モーントン領では祝祭の類が禁じられているから、王都にいたとき以降 半年以上ぶりの祭りということ

になる。

クラウスの祝祭というのが気に食わないが、それを差し引いても
楽しみで仕方がなかった。

王都で開かれる祝祭は、建国祭に、春の到来や収穫の宴。王や王妃の誕生日に、偉大なる歴代王の生誕も祝ってきた。

偉大なる歴代の王たちの生誕は、少しばかり仰々しくて堅苦しい。だいたいが武勲を立てた王だからか、どことなく物々しい雰囲気がある。広場で剣の試合が開かれ、剣舞が披露されるその祭りは、少年たちが好んでいたのを覚えている。

王家の誰かの誕生日であれば、もっと雰囲気は明るい。カミラは特に、王妃のような女性の王族の生誕祭が好きだった。女性の王族の生誕には、彼女たちの好きなもので町を飾る。歌が好きなら楽隊がそこかしこに立ち、踊りが好きなら町中が舞踏会になる。見た目にも華やかで、色とりどりの鮮やかな花や布が、町中を飾り立てていた。

とはいえもちろん、カミラのような貴族の娘は、町中の庶民の祭りに堂々と出かけるわけにはいかなかった。騒ぐ町並みを、いつも馬車の中から眺めるだけ。笑い声を上げる人々の姿を羨みながら、王宮へ向かったことを思い出す。

王宮でも、もちろん祝祭は開かれている。生誕祭の主役である王族がいて、直接に祝辞を述べ、褒めたたえることを許される。同じ場所で生誕を祝えるのは、貴族だけの特権だ。

だけどそれは儀礼的で、厳かでかしこまったもの。他の貴族の目を気にし、言葉一つに気を遣う、華やかだけれど胃が痛むものだった。

だけど今度は、カミラも町中の祭りに行けるのだ。

しかも、その祭りを作り上げる側だなんて、それはもう楽しみで楽しみでたまらない。

娯楽を禁ずるモーントン領。クラウドから祭りの話が出たとき、領主たるアロイスは、祭りと聞いて顔をしかめたが、「駄目だ」とは言わなかった。

それはつまり、「目をつむる」ということに他ならない。これはもはや、領主公認と言っている。要するに、好き勝手にやっていいということだ。とカミラは都合よく解釈した。

「そんなに楽しいものなんですか？」

部屋に戻っても、浮足立ったまま戻らないカミラを、ニコルはピンとこない様子で眺めていた。

生まれてこの方、ニコルは祭りというものを知らなかった。ニコルの出身であるファルシュの町は、山間の隔絶された土地にあり、外から娯楽が流れ込んでくることもない。ブルーメみたいな呆れた享楽主義者もいなければ、娯楽に触れる機会さえなかった。

ニコルだって、『楽しい』という気持ちがないわけではない。兄弟と話をすることは『楽しい』。カミラの髪を思い通りに編めているときも『楽しい』。だけど、それと娯楽の違いはよくわからない。

珍しく鼻歌なんて歌うカミラが、ニコルには不思議で仕方がなかったのだ。

首をかしげるニコルを見ても、カミラは浮かれっぱなしだった。

「楽しいわよ。見ているだけでわくわくするの。楽隊がいて、道化がいて、食べ物（食べ物）の屋台が並んでね」

楽隊も道化も、王宮にもいる。食べ物（食べ物）の屋台はないけれど、王宮ではもつと高級な料理がふるまわれる。

それでも、町の祭りの方がきつと、ずっと楽しい。

「それで、みんな楽しんでいるの。きつと、みんなで大騒ぎするのが楽しいのよ」

大騒ぎの準備をするのも楽しい。想像するのも楽しい。アインストならいざ知らず、道楽者だらけのブルームの町。誰もが後先考えずに楽しんでくれそうで、余計に楽しくなってくる。

お祭りに必要なものって、どんなものかしら。

屋台のためには、町の料理屋に協力を求めるべきだろう。飾り付けには、花や布がたくさんいる。そもそものきっかけとなった、楽隊のことも忘れてはいけない。ヴィクトルたちがそれっぽく見えるよう、揃いの衣装を作ってみるのはどうだろう。

考えるほど、やりたいことが浮かんでくる。

知らず知らず緩む頬に気がついて、カミラは慌ててぱちんと叩いた。

引き締まらない。

祭りのために必要なもの。

花、音楽、食べ物に服。たくさんの屋台。

「ずいぶん人手が要りそうだなあ」

ブルームの町を歩きながら、クラウドはうなった。

上天氣の冬の朝。カミラはいつものように、アロイス、ニコル、クラウドと連れ立って、町の広場を見て回っていた。

目的は、祭り会場の下見である。

ブルームで最も大きな広場は、花壇に縁どられた左右非対称のいびつな形をしていた。緩やかな高低差のある町の中央に位置しているせいか、広場の中にも段差があり、階段の踊り場を組み合わせたような造りになっている。

段差沿いには、水が流れるようになっていた。一段ずつ水が段差を流れ落ち、下の階層へと流れ、広場の最下層の泉に集まるのだ。今は水路に雪が積もり、泉も凍ってしまっているが、それでもなお美しいその広場の姿にカミラは啞然とする。

娯楽を禁じ、質実を尊ぶモントン領では、建物や人々の服装も華々しいものは避けられる。アインストは言わずもがな。ブルームだって、町の壁は単調な白塗りだ。噴水のような目に鮮やかなものも控えられる。

だというのに、ブルームの町は美しい。一見すれば質素で、華やかさはどこにもないのに、建物の一つ一つが優美であった。

「広場の一番下なら店も出せるかな？ 大通りとも直結しているし、屋台も並べやすそうだ」

見惚れるカミラをさておいて、クラウドは着々と広場を見立てて

いく。アロイスと二人で、「楽隊はどこに置くか」だの「屋台の配置はどうする」だの、らしくもないまじめな話をしていた。

「食い物はこれから町の店を当たるとして、力仕事をする人間がいるな。男手……男かあ……」

「警備に割く人間もいるだろう。クラウド、お前の家の者は使えないのか？」

「俺に付いてくれる人間がどれくらいいるかな？ 筋肉^{バカ}とは相性が悪いし。まあ、そのへんは伯母さんに相談してみるか」

「……ふむ」

アロイスは腕を組み、考えるように息を吐いた。クラウドが跡継ぎとして有力になったとはいえ、まだフ란ツとルーカスに与する人間も多い。

自警団に属する者たちは特にそうだ。武を偏重するルーカスの下に付けば、自分たちが重用される期待も持てよう。だが、クラウド自身でも言った通り、クラウドは武との相性が悪い。そういった人間にとって、クラウドに付く利点がまったくないと言えるだろう。

考え込むアロイスに、クラウドはうんざりしたように首を振ってみせた

「ああ、やめやめ！ 辛気臭い！」

わざとらしくいらいに大きな声でそう言うと、クラウドはアロイスから顔を逸らした。それから、当初の目的を忘れ、興味深く広場を見て回るカミラとニコルに手を振って見せる。

「次行こう！ 次！ 飯と服！ あとは花！」

○

「衣装なら、私が作りますよ」

町の食事屋を回り、色よい返事がもらえないままに来た地下。気落ちするカミラたちに向けて、さざりと言ったのはミアだった。

「私一人では無理でも、父に頼めばなにかと用意できるかと思いま

す。服職人なので、うちの家族」

地下ではいつものように、五人がそれぞれ練習をしていた。

町の権力者であるクラウドスが、全面的に支援をすることになったおかげで、もう彼らの練習を咎める人間たちはいない。内心では眉をひそめているとしても、少なくとも表立って非難をすることはできなくなった。

さすがの自警団も、おおっぴらに手出しはできない。隠れる必要のなくなったヴィクトルたちは、のびのびとしているように見えた。演奏自体は、まだ上手いと言い難い。だけど、以前の騒音に比べたらだいぶ音楽に近くなった。このまま練習を続ければ、祭りの日までには、どうにか人に聞かせられるものくらいにはなるだろう。

そんな五人につきあっているのが、ヴィクトルの婚約者であるミアだった。

聞き役になったり、五人のために食事を用意したり、なにかと献身的に支援してきた彼女だが、自分が参加できないことを齒がゆく思っていたらしい。衣装の話を持ちかけられると、カミラたちが面食らうくらいに快諾してくれた。

「私も見ていただけでなく、なにか力になりたいと思っていたんです。服なら、楽譜が読めない私でもヴィクトルたちの力になれますね」

「ミア……！ 君はいてくれるだけで俺の力になっているよ。でも、ミアが服を作ってくれるなら、もっと頑張れるなあ」

ミアの言葉を聞いて、傍で手を休めていたヴィクトルがやに下がる。喜びと自慢の入り混じった表情は、いかにも幸福そうで、胸焼けしそうだっただ。

「馬鹿なこと言っていないで、練習しなよ」

のろけるヴィクトルの背中を、ミアはそっけない言葉とともに叩く。そのつれない態度にも、ヴィクトルはにやにやとしたままだ。

呆れた目で二人を見ながら、カミラは息を吐いた。

「食べ物のほうも、このくらい上手くいってほしかったわ」

地下に来る前に回った店々の、渋い返事を思い出す。興味が無いわけではないが、どこの店も、『自分が一番乗りになる』ということに抵抗を感じているようだった。祭り自体もはじめてだし、どれほど人が来るかもわからない。参加することで、自警団に目を付けられるのではないかということも危惧している。それに、もしクラウスが失脚でもすれば、クラウスに加担した店には破滅しかない。

店側の気持ちも、カミラはわからないわけではない。一番に名乗りを上げるのは不安だろう。同情もする。

が、それと不満を覚えないのは別物である。

「せっかくの商機だっていうのに、みんな腰抜けだわ！」

「まあ、そう言うなって」

いら立つカミラを宥めるように、クラウスはそう言った。

「料理長あつさんがいれば、もう少し話は通しやすかったんだろうけどなあ」
む、とカミラは口を結ぶ。クラウスの言う「おっさん」は、モンテナハト家の料理長であるギュンターだ。ブルームの旅までも同行してきたが、長らくカミラを避け続けるために、近頃は顔も見えない。

本当は、今日の外出でもギュンターに声はかかっていたのだ。だけれど彼は、「カミラがいるなら行かない」と言って、レルリヒの屋敷で留守番中である。

「私のせいだって言うの」

カミラは不服さも露わに、口を尖らせた。

ギュンターがカミラを避けるのは、ひとえにカミラの失言が原因だ。「ユリアン王子が好き」と言ってしまったからこっち、アロイスを敬愛するギュンターは、カミラと口もきこうとしなかった。

カミラはギュンターから、料理を習っている身。モンテナハト邸の中では、カミラにとってかなり親しい人間の一人だ。それなのに、

言葉も交わせない現状は、カミラ自身にも思うつころはある。

余計なことを言うんじゃないわ。

だけど、人の心なんてどうにもならないもの。ユリアン王子が好きなのは偽らざる事実。たとえアロイスの結婚相手としてモーントン領に来ていたとしても、だからすぐにアロイスに恋せよというのが無理なこと。

ただ、まあ、言わなくても良かった。カミラ側にも悪いところがあった。そう思うから、いささか責任を感じている。おかげで祭りの準備も滞るのだ。

「しょんぼりしちゃった」

つんとあごを逸らすカミラを見て、クラウドが笑った。それから、慰めるつもりか知らないが、カミラの傍ににじり寄る。

「いいのいいの、気にしなくて。あの料理長、おっさん拗ねているだけだから」

「はあ？」

眉をしかめるカミラに、クラウドは顔を近づけた。ぎょつとして身を引くが、クラウドは逃がさない。彼はさらに近づいてくると、口元を隠しつつ、カミラの耳に囁きかけた。距離が近い。

「あいつの代わりに拗ねているんだよ。あいつは気持ち悪いくらい、不満を示さないだろう？」

あいつ、と言いながら、クラウドは横目でアロイスを見た。クラウドの視線に誘われるように、カミラもまたアロイスに目を向ける。「腹も立てない。文句もほとんど言わない。嫌なことでも笑っているだけだろ。好きな女に、男が付いていても」

アロイスは、カミラとクラウドの視線に気が付いたらしい。耳打ちをする二人の、傍から見れば親密そうなその様子に、驚いた顔で一度瞬いた。が、すぐに穏やかな苦笑に変わる。

「どうかされましたか？」

「な？」

柔らかいアロイスの呼びかけに、クラウドは嘲笑めいた声で言っ

た。突き放そうとしたカミラの手も避け、本人は悠々と、練習するヴィクトルたちの元へと向かって行く。

去っていったクラウドに変わり、近づいてきたのはアロイスだ。彼はクラウドの背中を見やると、申し訳なさそうに眉をしかめた。

「お邪魔をしてしまいましたか？」

「……いえ」

カミラはアロイスを見ながら、少し低い声で答えた。言いたいことだけ言ったクラウドには腹が立つが　確かにその通りだ、とも思う。

アロイスはめったに腹を立てない。声を荒げることはある。強い言葉を向けることもある。だけどそれは、怒るというよりは　叱りつけるという方が近い。

悲しんだり、喜んだりもする。感情がないわけではない、とはわかる。

だけど、とカミラは思う。

「アロイス様、あの……なんとも思いません？ 私とクラウドが、親しくしているのを」

親しく　というのは、つまり、距離が近すぎないかということだ。

クラウドはアロイスに見せつけるため、わざとあんな態度をとったのだろうが、それにしただってやりすぎだ。カミラはアロイスにだって、息がかかるほどの耳打ちなど許したことはない。もちろん、クラウドに許すつもりもなかったわけで、それはそれで腹が立つが、この際は後回しだ。

「ああ」

カミラの言葉に、アロイスは笑みを深めた。

楽しさからでもなく、喜びからでもない、いつもの感情のない笑顔だ。

「カミラさんにとって親しい人が増えるのは、とても良いことだと思います」

アロイスは笑顔のまま、落ち着きのある低い声でそう言った。
その態度が、なぜだかカミラは不満だった。

誰も傷つけない、誰に対しても優しい態度。厳しくするのも相手のため。言うことをきちんと言っているように見せておきながら、その実わがままはほとんど言わず、不満もろくに口にしない。

誰にも心配をかけない。よくできた人間、だけど。

カミラは、いつかアロイスに対して抱いたものと、まったく同じ感想を抱いていた。

『良い子』すぎるんだわ。

地下を出た後、カミラはアロイスと共に、今度は花屋へ向かって
いた。

クラウスとニコルは、地下へ居残りである。クラウスはヴィクト
ルたちに指導を付けるため。ニコルはその指導に付き合うよう、ク
ラウスに強要されたためである。

どうにもクラウスは、ニコルに歌わせたいらしい。ニコルは典型
的なモントン領の人間で、娯楽のたぐいに抵抗を感じているよう
だが、クラウスの手練手管な口車に乗せられて、ここ最近はよく付
き合わされていた。

そというわけで、久々のアロイスと二人きりである。

町では相変わらず、遠くから下手な讃美歌が聞こえてくる。

雪道に人通りは少ない。アロイスと二人並びながら、カミラはい
くらか気まずい思いで、雪の上に足跡を残していた。

ブルームは花と香水の町。ただし、名産はあくまでも香水のほう
なので、花はその原材料に過ぎない。花単品を扱う店もそう多くな
く、その中でも祭りに協力してくれそうな店は、クラウスが目星を
つけてくれた数件だけだった。

そもそも、目に鮮やかな花自体も、娯楽ではないかと言う人間も
いる。道端の花や、植木の花まではそこまでうるさく言われなくと
も、花束や花輪を編む花屋は、あまり良い顔をされない。

それを言うなら、香水ももちろん嗜好品なのだが、ブルームで作
る香水は、ブルームには卸されない。ほとんどは領外に売られ、モ
ントン領内では、一部の貴族や豪商しか手に取らない という
建前になっている。

要は、大っぴらに商売ができないというわけだ。

その数少ない店までは、いましばらくの距離がある。

並んで歩いている間、アロイスも言葉をかけかねているらしく、少しの無言が続いていた。

思えば、アロイスと二人きりになるのは、温室以来である。ひどい泣き顔を見せてしまったカミラのばつが悪いのはもちろん、アロイスの方も、なにかと思うところがあるのだろう。

なにせ、アロイスは現在カミラに求婚中だ。婚約を考えてほしいと言った相手が、別の男のために泣いている姿を見て、なにも考えずにはいられないだろう。アロイスはよく、カミラの泣き言に付き合ってくれたと思う。

だからカミラは、アロイスのその優しさに、きちんと誠意を返さねばならない。

「……………アロイス様」

「はい」

カミラの遠慮がちな呼びかけに、アロイスは答えた。歩きながら自分を見上げてくるカミラの渋い顔に、アロイスは少し戸惑っているらしい。

「どうかされましたか？」

「ええとですね。先日はありがとうございました。お見苦しいところをお見せして……………」

「ああ、いえ」

そう答えながら、アロイスは視線を逸らす。なんと答えるべきか迷うように、雪の町を遠く眺めた。

「私、ユリアン殿下のことが好きでした」

「ええ。存じております」

「アロイス様との結婚も、不本意でした。なんで私が、よりによって殿下の命で、と」

「……………存じております」

カミラの言葉を、アロイスは無機質な声で受け止める。

態度からして、あからさまだっただろう。カミラは最初から、アロイスとの結婚を拒んでいた。容姿だけではなく、アロイスとユリアン王子以外の人間と結婚することが気に食わなかった。

「見返してやろうと思っていました。殿下や、私を追放した人たちを。そのために、アロイス様を利用する気でいました。……謝らないといけません」

「……………そうだろうと思っていました」

アロイスは息を吐くと、小さな声でそう言った。それから、アロイスを見上げるカミラに、安心させるように柔らかく笑んで見せる。「だから私を、痩せさせようとしていたんですね。なんとなく、わかっていました」

「責めないんですか？」

恐る恐る尋ねるカミラに、アロイスは首を振る。

「カミラさんがそう思うのも、無理はないことです。それに、お話ししてくださったということは、今は違うのでしょうか？」

優しい言葉に、カミラは口を引き結ぶ。アロイスは腹を立てるそぶりもなく、わずかに悲しそうに、眉を寄せるだけだ。

今は　　どうなのだろうか、とカミラは思う。

今もまだ、カミラはアロイスを痩せさせたい。

以前よりずっと痩せたとはいえ、まだまだ贅肉は多い。肌荒れも、アインストで軟膏をもらって以降は、かなりましになった。吹き出物の跡が残るかと思っていたが、意外とそういうこともなく、かなりきれいに治っている。食事は濃すぎる味付けのままで、食べる量も人並みか、それよりいくらか多いくらいにまでなった。

濃い味付けは止めて、きちんと美味しいものを食べさせたい。贅肉は筋肉に変えたい。肌をきれいに治したい。服装は、もう少しだけ洒落たものを着せたい。

そう思うのは、誰のためなのだろう。

「アロイス様、私、もう一つ謝らないといけなことがあります」

わからないまま、カミラはため息のようにつぶやいた。

「婚約の話。もうしばらく返事を待っていただきたいんです」

そう言いながら、罪悪感でもってアロイスを見れば、彼もまた居心地の悪そうな顔だった。お互いに眉をしかめあい、どこか困ったような顔をしている。

「……春に、殿下が結婚するまで。それまでに、きちんと考えますから。自分のことや、これからのことも」

「ええ」

アロイスは困った顔のまま、苦笑するように顔をゆがめた。自制心の強いその表情は、なにか思うところがあるだろうに、感情を悟らせない。

「いつまでもお待ちします。カミラさんの、満足の行くようにお考えください。私にはそれが一番です」

それは、カミラにとってひどくありがたい言葉のはずだった。

カミラのこれまでの身勝手を許して、返答を待たせるカミラのわがままも認めて、責める言葉の一つもない。

ありがたいのに　息苦しい。抑圧的なアロイスの顔に、カミラは既視感がある。

いつだったか、クラウドを見たときに、アロイスに似ていると思った。その理由がこれだ。

他人本位がすぎるんだわ。

クラウドにとっては、自分よりもフランクが。アロイスにとっては、自分以外の　もしかしたら、誰もが。自分よりも大切になっ

てしまっている。他人のために、我慢をする。他人のために、自分の犠牲は惜しまない。他人を困らせるようなわがままも、不満も、だからこそ口にしない。

そんな印象を受けてしまった。

む、とカミラは唇を噛む。両手を握りしめる。

そして、アロイスの感情を殺した顔を、睨むように見た。

「わかりました！」

カミラの思いがけない表情に、アロイスが面食らう。「どうしました？」と尋ねる

「私の謝罪はここまでです。ここからは、別の話！」

ぱちんと手を叩くと、カミラは沈んだ空気を断ち切るように、強い声で言った。アロイスが戸惑っている。

「アロイス様、お祭りは楽しいものなんです」

「は……はい？」

「成功させましょう！ アロイス様にも、必ず楽しんでいただきます！」

アロイスは瞬く。突然のカミラの言葉が、なんのためなのかかわかりかねているのだ。

「楽しくて仕方がなくて、後でもう一回やりたいって、わがままを言わせてみせますわ！」

アロイスに顔を向け、指を突きつけて見せる。そんなカミラを、アロイスは呆氣にとられたように見ていた。

カミラは自分勝手だ。さんざんアロイスを利用しようとして置いて、親しくなると罪悪感も抱く。悪いと思ったら謝ってしまえるし、許してくれる相手の好意も、簡単に受け取ってしまう。それでいて自分の好意も、強引に押し付けることができる。

すぐに腹を立てる。すぐに反省する。懲りずに同じことをやらかす。反発されて、うっとうしがられて、敵対しても、変わることはできない。

カミラはわがままだ。

だからこそ、アロイスにももっと自分の望みを言えるようになってほしい。

「カミラさん」

アロイスは困ったように笑った。遠回しなカミラの内心を、見透かしているようだ。その苦笑が、本心なのかどうかはわからない。ただ、少しだけ、眩しそうに見えた。

「あなたは、春の日差しのようにです。雪を解かす、太陽のよう」「えっ」

気取らないアロイスの言葉に、今度はカミラが面食らう。

「まばゆくて、とても強い。私のわがままは、きっとあなたなんです」

ぐ、とカミラは喉を詰まらせる。ぐぐぐ、と少しうなづいてから、カミラはアロイスから顔を逸らした。無意識に、歩幅が大きくなる。「そういう言葉を、どこで覚えてきたんですか」

まるで、口説き文句のような。クラウスが口にすれば、鼻で笑うような言葉なのに、まじめな顔でアロイスが言うのは、少しばかり卑怯だ。

「お嫌でしたか？」

早足で進むカミラに、アロイスが慌てて付いてくる。

カミラは険しい顔で前を向きつつも、頑として答えなかった。

花屋は修羅場だった。

「フ란ツ様からのお達しである！ 決して、祭りなどという不屈きな騒ぎに協力しないように！ 花を売る場合は、フ란ツ様からの依頼のみとするように！」

「知ったこっちゃないよ！ そんなことで商売ができるか！」

「不屈き者が！ フ란ツ様のお達しであると聞こえなかったのか！」

「聞いていたさ！ フ란ツ様が花を買ってくれたことなんて一度もないだろう！ うちの店に潰れるっていうのか！」

「買う者がなければ潰れるのも道理。潰れるようであれば、そもそも花などという軟弱なものは、このブルームには不要だったということだ！」

店の外にも聞こえる大声で、店の主らしき恰幅の良い女と、数人の男たちが言い合っていた。カミラとアロイスが店に入ったことにも気が付いていないようだ。彼らは振り返りもせず、いがみ合いを続けている。

嫌でも目に付く言い争いはさておき、店の中は妙に殺風景だった。原因は、冬場で花がないせいだろうか。がらんと広い店内には、空の植木鉢と、冬でも枯れないわずかな草木があるばかりだ。雑多に置かれた鉢を見るに、もしかしたら本来、冬は営業外なのかもしれない。

先客である男たちも、花を買いに来たわけではないだろう。ブルームらしくない、堅苦しい兵隊めいた服装に、腰に下げた剣。物々しい口調の男たちに、カミラは見覚えがあった。

自警団だわ。

元々町にあった、若者たちの自治集団ではない。フランスが作った　ヴィクトルたちを捕まえ、人前でカミラを侮辱した自警団だ。忌々しい記憶がよみがえり、カミラは思わず顔をしかめる。

しかもよくよく見れば、その顔ぶれにも覚えがある。特に、前面に立って胸を反らし、店主を責める男の顔は忘れがたい。済ました顔の偉そうな男こそ、まさにカミラを侮辱したその人物だ。

「やめなさい！」

男の姿を認めるや否や、カミラは後先考えずに叫んだ。「誰だ！」と男たちはそろって振り返り、カミラの顔を睨みつける。

そしてカミラ　　の隣にいるアロイスに気付くと、驚きと戸

惑いに顔をしかめた。

「あ、アロイス様！？　こ、これはまたこんなところへ、どうされましたか」

中でももつとも慌てふためいているのは、いつかカミラを侮辱した男である。以前にもアロイスと対立したせいだろうか。二度目はないと思ったのかもしれない。

「花屋に用があつて来たが……フランスにしか花を売ってはいけないのであれば、私も例外ではないのだろうな」

アロイスは澄ました顔でそう言った。あまりにさりと口にしたため、カミラにはその言葉が、嫌味であるのか本気であるのか、瞬時に判断ができなかった。

「い、いえ、まさかアロイス様に物を売れないなんてことは」

だが、男はしっかり嫌味と受け取ったようだ。　先ほどの威勢は消え、すっかり尻込みしてしまっている。肩を縮ませる男の姿に、彼の手下らしい他の自警団も戸惑っているらしい。なんだかんだ言っても、やはりアロイスは領主。モートン領においては絶対的な影響力があるのだ。

男は小さくなりながらも、自分の手下たちを見回した。それから、さっと手を上げて、外へ出るように促す。

「お前たち、引き上げるぞ！ アロイス様、我々どもはこれにて……」
媚びるように頭を下げると、男は手下を引き連れ、逃げるように店を去っていった。

その後姿を、アロイスは澄ました顔で見送りながら、「ふむ」と一人腕を組んだ。

「信念のある者たちというわけでもないのか」

つぶやくアロイスの横顔を、カミラは眉をしかめて見上げた。

なにか企んでいる顔だわ。

良い子であつても利他主義者であつても、これまたなんだかんだで、やはりアロイスは領主なのだ。

○

なりゆきで自警団を退けたせいもあるのだろう。花屋の協力は、存外簡単に仰ぐことができた。

花屋曰く。

「町のあっちこっちに花があるせいで、花屋が軽んじられている。花束や花飾りみたいな、人の手で摘まれた花の美しさをしっかり宣伝するように　ですって」

すっかり集合場所になつてゐる地下で、カミラはここ数日の成果を話していた。町を回つて、いくつかの花屋にも声をかけてみたが、おおむね祭りについて好意的に受け入れられているらしい。

理由は、もともとフランス派閥から目を付けられていたせいだろう。彼らには、参加を拒みフランスに義理立てをしたところで、なんら有益なことはない。だったらさつさと、クラウドに尻尾を振るうということなのだ。

一方で料理屋となると話が違ふ。食はモーショントンに許された唯一の娯楽。フランス派の人間たちだつて大事な客となる。

「こっちは、料理長おっさんに話をつけてきた。アロイスのためなら協力するってよ」

だが、これもクラウドがどうにかしてきてくれたらしい。ギンターに声をかけるのは、もっぱらアロイスとクラウドの仕事だった。というのも、未だにカミラとギンターは絶縁中だからである。

悪いのはカミラであるが、いつまでも拗ねたままのギンターには、いい加減腹が立つてくる。

「あとは、町のやつらにも話を通してくれるってさ。やっぱ、ブランド家の名前は強いね。怖いくらいに横につながっている」
むすつとしているカミラはさておき、クラウドの語る成果は上々だ。

いつだったか、ギンターが自負していた「俺の一声で飯屋が動く」という言葉に偽りはなかったらしい。没落貴族であるブランド家の一党は、今やモントントン領の各地に散り、料理人としてそれぞれ身を立っている。

このブルームの町も例外ではない。『美味い店には赤毛の料理人ブランド家がいる』と言われるくらいには、町に入り込んでいるのだ。

ブランド家は没落後も　いや、没落したからこそ、横のつながりが強い。他家から目を付けられ、苦しい生活を強いられてきた彼らは、互いに協力し合うことを惜しまない。特に、当主の血筋であるギンターの影響力は強い。ギンターがアロイスの下にいるおかげで、料理屋でのアロイスの評判はすこぶる良いのだとか。

「それで、男手の方はどうなった？」

クラウドは次に、ヴィクトルに目を向けた。現在はバイオリンを置き、練習は一時中断。事務報告会に参加中の彼は、クラウドの言葉に親指を立てる。

「ばっちりですよ。自警団　もとの自警団の連中に話したら、力仕事を引き受けてくれるって。最近はブランド様のところの連中が幅を利かせていて、不満がたまっていたみたいです。……ただ、そのぶん警備の方が手薄になりそうです」

「大丈夫。警備の方も心当たりができた。これで人の方は足りそうだな」

クラウスはそう言って、満足そうにうなずいた。それから、屋台の基礎はどうするだの、いつから準備をするだのと話し合っている。

順調だわ。

障害らしい障害はなく、着々と計画が進んでいく。態度にそぐわず、クラウスのかじ取りがしっかりしているおかげだろうか。どうやって丸め込んだのか、反対すると思われた当主のルドルフさえ、いつの間にか黙認の姿勢に変わっていた。

町の人々も、クラウスに協力的だった。もともとの町の気質が、それともクラウスへの期待や信頼なのか。禁じられた娯楽をしようというのに、たいした抵抗もない。

もしかしたら、内心ではみんな望んでいたのかもしれない。人目をはばかり、隠れるだけではない楽しみを。

伝統と歴史にがんじがらめな、モーションが変わることを。

季節が変わり、春になるまであと半月程度。新年の歓待を受ける、という名目で訪れたブルーメだ。年明けと同時に訪れる春を祝えば、カミラとアロイスは領都へと戻る。

長い滞在の最後を彩る祝祭は、楽しいものになる。

カミラはそう信じている。

ギュンターは、屋台で肉を焼くと言っていた。

道行く人の足を止めるため、匂いの強い食べ物に決めたらしい。

他の屋台はパンだったり芋だったり。果実や菓子や、甘いものも並ぶのだという。

カミラとしては自分でも料理をする側に回りたいが、どうやら今回ばかりは出番がなさそう。ギュンターは相変わらずだし、ギュンターの身内であるブラント家に割って入るのは、さすがのカミラにも難しそう。

かといって、カミラは歌も楽器もできないし、力仕事も当然のようにはできない。当日になれば、カミラは偉そうにふんぞり返る暇人になってしまう。

嫌だわ。

どうせクラウスとアロイスは、当日も忙しくするのだろう。今もたまに、二人きりで話をしているし、カミラに隠れている考えでもいるに違いない。あの二人は、余計なことまで難しく考え過ぎなのだ。と、単純なカミラはつぶね思っていた。

気苦労の絶えない二人はさておき。ニコルと一緒に歩き回るのもいいけれど、それでは結局いつも通りだ。

ならばどうするか。

花冠を編もうかしら。

そんなことが浮かんだのは、カミラが回った花屋で、さんざん宣伝をするように言われてきたせいだろうか。春の花を編んで、来た人々に配るのは、悪くない考えに思えた。力仕事でもないし、華やかだし、なにより。

見ているだけより、自分でもなにかした方が、絶対楽しいもの！

カミラは楽しみで、いてもたってもいられないのだ。

○

冬の中に、春の気配が混ざり始める。雪の量が減り始めたところに、力仕事を任せる自警団の若者たちと顔を合わせた。

雪をかぶる街路樹の枝に、固いつばみが見え始めたころ、屋台を組むための木材が集まった。

雪の下、町中に置かれた鉢植えから芽が覗き始める。

雪が溶けだす。

吐く息は白くなく、日差しの暖かさを感じるようになったころ、忙しい祭りの準備に、ようやく終わりが見えはじめた。

○

「動かないで。もうちょっと調整するから」

ミアはヴィクトルの服の裾を引きながら、真剣な口調で言った。針を持つミアに、ヴィクトルも緊張した様子だ。

ヴィクトルが着ているのは、ミアの作った楽隊の服だ。目を引く赤のジャケットに、真っ白なシャツ。ジャケットの袖と襟には、鮮やかな金の刺繍が施されている。同じ色の赤いズボンは膝半ばまで膝から下は、赤みを買った黒いブーツを履いている。

「馬子にも衣裳だな」

冷やかすのは、彼の仲間たちだ。試着として揃いの服を着ながら、彼らは互いに笑い合っている。

「似合っているって言えよ。ミアが作ったんだ」

腹を立てたようにヴィクトルが言う。もちろん、みんな本気で怒っているなんて思っていない。茶化すように笑っているが、みんななどことなく誇らしげだ。

「もうすぐなのね」

フィーネが赤いドレスを揺らしながら、そわそわとした調子で言った。男たちと異なり、女性陣は色合いをそろえたドレス姿だ。動きやすさを第一にしたのだろう。腰を締め付けず、肩や腕の曲げやすい、ゆるりとしたものになっている。

「失敗しないかしら。なんだか、どきどきしちゃうわ」

「大丈夫だよ、あんなに練習したんだから」

心配するフィーネに、ヴィクトルは言った。ミアに裾を詰められ、緊張した面持ちのまま。それでも浮足立つ心が隠せない様子で、彼は仲間たちを見回した。

「それよりさ、これが終わったらどうする？ 俺、次は新しい楽譜でやってみたいな」

「気が早い！」

針を置いたミアが、諫めるようにヴィクトルの背を叩く。まだ本番も迎えていないのに、心はずいぶんと前のめりになっていたようだ。

だが、ヴィクトルはそれでも前を向いたままだ。

「俺、これで終わりにしたくない。今回は俺の祝婚歌だったけど、次はもっと別の曲を弾いてみたい。もっとたくさん弾いてみたい。みんなもそう思わないか？」

そう言って、ヴィクトルは順に仲間たちを見回す。データー、オットー、フィーネにフェアラート。

鮮やかな赤い衣装につられたように、みんな明るい表情を浮かべている。

いや。

「フェアラート？ どうかしたのか？」

一人。フェアラートだけが、ドレスの裾をつまんだまま俯いていた。思い悩むような横顔に声をかけてみれば、はっとしたようにフェアラートが顔を上げる。

「そう、そうね。次……次があれば」

彼女にしては珍しい、歯切れの悪い物言いに、ヴィクトルは首を傾げた。だが、どうかしたのかと尋ねるよりも先に、彼女はいつも通りの、人を寄せ付けない澄ました表情に変わっていた。

本番まで、あと数日。

ヴィクトルの抱いた疑念は、忙しなさの中に消えていった。

「アロイス様を見なかった？」

カミラの問いかけに、答えられる人間はいなかった。

ブルームの広場は、朝から祭りの準備に騒がしい。

ヴィクトルたちが自分たちの演奏する、飾り付けられた舞台を見ながら、ああだこうだと言いつけている。

広場の片隅には、着替えやら物置やらで使ったための、簡易なテントが作られている。その中では今、ミアが衣装の最終調整中だ。ニコルはその手伝いで今は姿が見えない。

クラウスは広場の中央で、自警団の若者たちへ指示を出している。屋台が軋むだの、荷物を運んでほしいだの、力仕事を言いつけられた若者たちが、あっちこっちへ走り回っていた。

大通りでは、ギンターを中心に、食材の運び込みやら仕込みやらで忙しない。

その忙しい人々の中の、どこにもアロイスの姿はなかった。

どこかで指揮を執っているのだろうと、あちらこちらに聞きまわっても、アロイスの行方を知っている人間がいない。早朝、準備に集まったときには確かにいたはずなのに、慌ただしくなってからあと、いつの間にかいなくなってしまうていたらしい。

花冠、編むの手伝ってもらおうと思ったのに。

花屋から届いた花は、祭りの飾りつけをしてもなお、大量に余っていた。テントの中で黙々と編むのにも飽き、どうにかして楽しようとアロイスを探していたものだが、当てが外れてしまったようだ。

なにをやっているのかしら。

すこすことテントに戻りながら、カミラはアロイスの行方を悶々と考えていた。用足しにしては長いし、誰も行方を知らないのもおかしい。

だけど、アロイスは無闇に姿をくらますような人間でもない。出かけるときは必ず言付けを残し、護衛を一人二人連れて行くはずだ。それなのに、無言でいなくなるなんて、彼らしくもない。まさか事故にでも遭ったのか、あるいは。

嫌な予感がするわ。

クラウドに搜索を依頼するべきか。いやいや、もう一度周囲を探してみるべきか。案外、すぐ近くにいて、運悪くすれ違っていただけかもしれない。でも。

テントの中、ミアとニコルが一生懸命に衣装の皺を伸ばす横。

一人眉をしかめるカミラの不安は、大通りから響く爆音にかき消された。

○

突如響いた爆音に、カミラは慌ててテントから飛び出した。ミアやニコルも目を丸くし、何事かとテントを出す。

広場にいた他の者たちも同様だ。カミラがテントを出たのとほぼ同時に、ヴィクトルたち楽団も、楽器を投げ出し舞台から駆け降りてきていた。「どうした」「なにがあつた」と、広場がにわかに騒がしくなる。

大通りにいる人々もまた、ざわめいていた。幸いと言うべきか、見える範囲の屋台に被害はないらしい。しかしだからこそ、誰も彼もなにが起きたのかわからず、戸惑っていた。

「た、大変！ 大変よ！」

そんな人々を割って、鋭い悲鳴じみた声が響いた。

ざわめく中にもよく響く声は、カミラも良く知ったものだった。

声と共に、通りから広場へ飛び出してきた人の姿に、カミラは目を見張る。

「フェアライト!?」

思えばたしかに、楽団が舞台を見ているときにも、フェアライトの姿はなかった。アロイスを探すことに夢中だったせいで、気に留めていなかったのだろう。

なぜ、彼女一人だけ広場を離れていたのだろう。当たり前前の疑問も、フェアライトの続く言葉に忘れてしまう。

「裏通りの空き地で爆発が起きたの！ 資材がめちゃくちゃになって、人手がいるわ！ みんな、手を貸して!!」

裏通りの空き地は、大通りを少し横道に入った先にある。大通りにも近く、誰も使用していないため、屋台づくりのために集めた木材や、テントには置ききれなかった花や布、屋台で使う調理道具など、雑多なものの置き場になっていた場所だ。

「誰か巻き込まれているかもしれないわ！ お願い、早くみんな、空地へ行って！」

必死なフェアライトの声に、カミラは迷わなかった。真つ先に広場を飛びだすと、大通りの先へと駆けていく。

少し遅れて、クラウスやヴィクトルたちがカミラを追いかける。

問題なんて起こさせないわ！

爆発の原因がなんなのか。事故なのか、事件なのか、そんなことはカミラにはどうでもいい。

絶対に成功させてやるんだから！

カミラ自身のためにも アロイスのためにも

強い気持ちを噛みしめ、カミラは通りを駆け抜けた。

○

男手の半数近くを引き連れてまでやって来た、裏通りの空き地は

一言でいうなら、たいしたことはなかった。

たしかに爆発は起きたのだろう。細い木材は折れているし、板は割れている。せっかくの花も散らばり、調理道具も軽いものは吹き飛ばされている。

爆心地らしい地面は、土がえぐれている。ニコルがしばらくその地面を眺め、魔力の大きな暴発らしいと告げた。

「魔石の魔力が暴走したのかもしれませんが。……普通はないことですけど。意図的にやれば、できないことじゃないです」

「意図的？」

「はい。魔石つてすぐ魔力が安定しているんですけど、外側から魔力を与え続けると不安定になって、そのうち形が保てなくなるんです。……ええと、めったにやることじゃないですけど、やろうと思えば、一応誰にでもできるはずですよ」

人間には、最低限の魔力が必ずある。強さ弱さはあるものの、魔力を流すこと自体は必ず誰にでも可能だ。

そして、魔力自体は魔石があれば補うことができる。二つ魔石があり、片側から魔力を吸い、もう片側に魔力を注ぐ。こうすることで、誰にでも暴発を引き起こすことは可能だ。

もっとも、高価な魔石を消費してまでやる価値のあることではない。二つの魔石を浪費して、制御不能の暴発を起こすより、その魔力を魔法を使える人間に与えた方が、よほど効率がいいからだ。

ニコルの説明に、カミラは顔をしかめた。要するに　これは意図的に引き起こされた爆発で、犯人がいるということだ。

誰が。

カミラの疑問より早く、クラウドが頭を掻いた。笑うように目を細めると、少しも面白くなさそうに、空地へ集まった人々を見回す。「フェアライトはどうした」

その言葉にはっとする。慌てて周囲を見回すが、空地へ来るようにと訴えた張本人、フェアライトの姿がない。

「なるほどね。誘導されたかあ」

クラウスが顔をしかめ、えぐれた地面を一瞥した。ヴィクトルたちが青ざめる。連れてきた心配そうに大通りに振り返った。

戻らないと。

カミラがそう思ったとき。今度は広場の方角から、騒々しいいくつかの怒声が響いた。

仕掛けてくるのは予想通り。

内通者も、一人二人はいることは想定内。花屋の一件で自警団が先回りしていたあたり、早いうちに情報が出回っているということは予測できていた。

時期や流出した情報から見て、素人楽団か、その身内であるミア。六人のうちの誰かだろうとも目星がついていた。

内通者は一人だけなのか、それ以上いるのかまでは、さすがに判断がつかなかった。あるいは全員が、フランツたちの手がかかっていることも覚悟していた。

地下へはよく潜っていたが、いつだって気を抜くことはできなかった。五人の友情や熱意に感動したのも嘘ではない。それでも心のどこかで、常に疑惑を抱き続けてしまうのは、レルリヒ家に生まれた性^{さが}だろう。

あの中で信頼しても問題ない相手は、アロイスかカミラ、それにニコルくらいだった。

なにかと言いつけを付け、必ず三人のうちの誰かを傍に置いていたのは、そのためだ。

ここしばらく、クラウドは慎重に慎重を重ねてきた。

決して一人にならないようにした。短い時間も単独行動は避け、できるだけ人の多い場所にいるようにした。伯父からの誘いには決して乗らなかった。部屋へ呼びつけられても、なにかと理由を付けて避けてきた。

フランツとだけは、会話をした覚えがある。それだって、『一人

で来るように』という言葉を真っ向から破って、護衛を何人も引き連れていった。

守りの固さに、叔父たちは辟易していただろう。だが、彼らとしては、今日の祝祭を成功させるわけにはいかない。『クラウスの跡継ぎ決定を祝う』という名目なのだ。町の住人に、クラウスの優位性が決定的に知れ渡ってしまうし、なによりも彼らの自尊心が許すまい。

クラウスがわざとらしく、伯父たちとは正反対の『楽しさ』や『明るさ』を打ち出してきたのも、あの短気な伯父を挑発するためだ。さぞかし焦れたかっただろう。歯痒かっただろう。目障りなクラウスを、早く始末したかっただろう。

そろそろ、しびれを切らすころだと思っていた。

想定は、ここまでだ。

○

聞こえてくるのは、誰かが怒鳴り合うような喧騒と、物をひっくり返したような騒音だ。自警団の若者たちやヴィクトルが、慌てて元来た道を駆け戻る。

クラウスもまた、彼らを追って広場へ戻ろうとした。真っ先に空地へ入ったせい、出て行くのは最後尾。どうやらカミラも同じ状況らしく、ほぼ同時に空地を出るところだった。

「クラウス！」

カミラはクラウスに気が付くと、焦りを含んだ声で呼びかけた。

「アロイス様を知らない！？　ずっと見てないの！　ここにも来なかったし、まさか、巻き込まれているんじゃない……！」

自分でそう言いながら、カミラは青くなっていく。純粋にアロイスの身を心配しているのだ。

思えば少し前まで、広場でアロイスを探すカミラの姿を見かけて

いた。いつもいつも一緒にいるわけでもなし。別々の行動も多い二人だ。多少引き離しても問題ないと思っていたが　カミラは思いのほか、見ている。

「カミラ、あいつは　」

裏表なく、カミラに身を案じられるアロイスが羨ましくもあり、必死なカミラへの罪悪感もあり、クラウドはカミラから視線を逸らしつつ口を開く。

逃げるような視線の先は、どこに向かうでもない。ただ、当てもなくさまよわせたただけだ。

だが、そこでクラウドの言葉は途切れる。思わず息を呑み、それを誤魔化すようにため息をついた。

「カミラ」

クラウドはカミラを見ないまま言った。視線は空き地へ向けられ、物陰を注意深く見つめている。

「あんたは先に行ってくれ」

「……なに？」

「俺はここで、もうちょっと調べたいことがある」

クラウドの口調が、彼らしくもなくまじめなことに、カミラは気が付いたのだろう。彼女は大通りへは行かず、いぶかしげにクラウドを見やった。

「どうしたの」

「いいから。あんたは広場の方を見てやってくれ。あっちはあっちで大変なことになっている」

横目でカミラに視線を流すと、クラウドは神妙な声で言った。

「広場はあんたが解決してくれ、カミラ。あんたの他に任せられる人間がいないんだ」

卑怯な言い方だとは、クラウド自信も自覚している。こう言えばカミラは、察しもあるし、責任も負ってくれるだろう。

実際、カミラは忌々しげにクラウドを睨むと、唇を噛みつつもうなずいた。

「なに考えているのかわからないけど……わかったわ」

「ありがと」

クラウスの軽率な礼に、カミラは顔をしかめるだけだった。けどそれ以上追及することもなく、振り向くこともなく空地を去り、大通りへと走っていく。

その背中を、クラウスは笑うように顔をしかめて見送った。動きにくいドレス姿で、高慢そうにドレスの端をつまみながら、泥臭く走る彼女の姿がおかしかった。

くすりと小さく笑みをこぼすと、クラウスは息を吐く。それから息を吸う。

「フ란ツ、はかりごとが上手くなったな」

いつものように軽率に言うと、クラウスは肩をすくめた。雑多なものであふれた空地の影から、フ란ツの自警団たちが現れる。

要するに、誘い出したのはクラウスだったのだ。広場にいるクラウスを、どうにかして人気のない場所まで連れ出したい。人気のない場所で、クラウスを一人残したい。だから二度、騒ぎを起こす必要があったということ。

もちろん、広場の方で騒ぐことにも意味はある。そもそもフ란ツたちは、祭りの実行自体を許すわけにはいかないのだ。

ただ、祭りを邪魔するだけではない。大げさに騒ぎ、大きな音を立てるのは、祭りの準備をめちゃくちゃにするとともに、町の人々に恐怖を植え付けるためだ。せつかくの準備を水の泡とすることで、参加者側も懲りる。もう祭りをしようなんて人間はいなくなるだろう。

腹が立つ。だがこの状況で、今さらどうしようもない。カミラを追いついてよかったと自己満足に浸るか。

「愚直なお前にしてはやるじゃん。回りくどくて、俺好みだ」
せいぜい、強がってみせるくらいだ。

意地悪く笑いながら、クラウスは自らを囲む人間たちに顔を向け

た。

クラウスを取り囲むのは、ほんの五人程度だ。

大通りの騒ぎの方に人を割いたせいだ。それとも他に隠れているのか。さほど多いとは言いがたい。

だが、武術の心得がないクラウスには、五人は絶望的な人数だ。まっとうにやって勝てるはずはないし、こうも正面から相対すれば、卑怯な手を使っても勝つことは難しい。空地の出口もいつの間にかふさがれている。逃げることもさえもできそうにない。

クラウスは頭を振ると、五人の中の一人に目を向けた。目に映るのは、長年顔を合わせてきた、よく知った男だ。

クラウスによく似た、明るい茶色の巻き毛の男。だが、クラウスよりも背が高く、肩幅も広い。無骨さの中に垣間見える、どこか神経質そうな表情は、彼のすっかりひねくれきった性格を表しているのだろう。

「兄貴、相変わらずの減らず口だな」

フランツはそう言って、にやりとねじれた笑みを浮かべた。それから、おもむろにクラウスに向かって歩いてくる。

「その口」

クラウスは反射的に身構えた。殺されまい、と思ったのは、身の甘えだろうか。ろくなことを考えてないだろうと想像しつつも、フランツが目の前に来るまで、クラウスは逃げようとしなかった。それが良くなかった。

「ずっと塞いでやりたかった」

フランツはクラウスの前で立ち止ると、息を吐くようにクラウスの頬を殴りつけた。

不意に横っ面にぶつけられた力に、クラウスは立ってられない。受け身も取れずに倒れたクラウスに、フランツは馬乗りになると、襟首をつかみ上げた。

無理矢理顔を突き合わされ、憎悪のこもった視線を真正面から向けられる。

「なんでまだ生きてんだよ、あんた」

「お前への嫌がらせのためだよ」

冷たく吐き捨てるフ란ツの言葉に、クラウスが嘲笑を返した。

フ란ツが生まれてから十九年。クラウスが死に損なってから十年。

こじれた二人の生まれてはじめての兄弟喧嘩は、ひどくいびつで剣呑なものだった。

大通りはひどいありさまだった。

「ふざけるな！ なにが自警団だ！ 後からきてでかい面しやがつて！！」

「レルリヒ家の後援のある我らこそが正当だ！ ガキのままことは家でやってろ！」

「うるせえ！ 町をめちゃめちゃにしてるのはお前らだ！」

「娯楽なんぞに傾倒した、有害な連中を排除したまで！ これこそ真の自警だろうが！」

血気盛んな若者たちと、知より武を選んだ手の早い男たち。二つの自警団がぶつかれば、こうなるのも必然だったのかもしれない。

カミラが大通りへ飛び出たときには、すでにどちらがどちらの自警団ともわからない惨状だった。自警団同士が入り乱れ、声を荒げて殴り合う。周囲の屋台は巻き込まれ、傾ぎ、倒壊しているものもある。料理人たちはほとんど逃げているようだが、中には一緒になつて殴り合う、これまた血の気の多い者もちらほら見えた。

「や、やめなさい！ やめなさい！！」

カミラが声を張り上げて、大通りの喧騒は止む気配がない。そもそもこの騒ぎの中で、カミラの声が誰かに届いているのだろうか。誰も彼も、カミラの叫びに目を向けることさえない。

叫びながらも周囲を見回せば、不自然に壊れた屋台が見えた。おそらく、もともとはフランスの自警団の方が、屋台を壊していたのだろう。若者たちの自警団は、それを止めようとしていたに違いない。

だが、今となつてはどちらも壊して回るばかりだ。店のために用意した看板が割れ、鍋がゆがみ、器が割れる。花が踏みにじられる

さまに、カミラは頭の奥が熱くなった。

なにが、『警備の心当たりができた』よ！

今後、二度とクラウスの言葉を信用するまい。

腹立たしさに頭を掻き、クラウスへの恨みを込め、カミラは荒く息を吐く。それからぎゅっと目を閉じ、頭を振った。

声も届かないこの惨状。もはやカミラ一人の力ではどうすることもできない。止めに入ったところで、非力なカミラでは弾き飛ばされるだけだろう。

任せるって言われたのに。解決するように頼まれたのに。

カミラには、この場を収める方法がなにも浮かばない。味方の一人もいない今のカミラは、ひどく無力だった。

アロイス様……。

成功させると言ったのに。楽しいものになると誓ったのに。

なにもかも、もうめちゃくちやになっちゃった。視線を伏せれば、悔しさがこみ上げる。唇を噛み、両手を握りしめ、カミラは顔をしかめた。

「ぐ……」

噛みしめた口の奥から、声が漏れ出る。押し殺した声は、弱気な泣き声にも似ていた。

「ぐぐぐ……」

地面を踏む足に力がこもる。力を入れないと、その場に崩れ落ちてしまいそうだった。

楽しみにしていた。楽しいと思わせたかった。そのためにずっと準備をしてきた。それさえも楽しかったのに、結末はあまりにも呆気ないものだった。

心が折れてしまいそうだった。

地面を睨み、息を吐き、カミラは息を吸う。

それから、涙の代わりに思い切り吐き出した。

「ぐう、く、く……悔しい　　！」

叫ぶカミラの言葉など、誰に聞こえているわけでもない。けつこ
う。カミラは誰かに聞かせているわけではない。

「諦めないわよ！ 人手！ アロイス様は！ ヴィクトルたちは！
？」

いない。見渡す限りどこにもいない。

アロイスやヴィクトルなら、カミラの言葉を聞くだろう。まずは
人を増やして、あとは 暴れまわる連中に、水でも被せていこう。
もしかしたらアロイスたちもこの騒動に巻き込まれ、痛い目にあっ
ているかもしれない。それならそれで、助け出す必要もあるだろう。
一人空地に残ったクラウスも心配だが、まずはとにかく目の前の
ことだ。

ぱちんと自分の頬を叩くと、カミラは見知った顔を探し、大通り
を駆けだした。

○

ヴィクトルが好きだった。

ヴィクトルの幸せを願っていた。嘘ではない。

ヴィクトルが自分を選ばなくても、彼が幸せであれば構わなかつ
た。済ました顔で「おめでとう」と言える、格好良い自分を誇って
いた。

でも、ミアが相手ならば、ヴィクトルは幸せになれないかもしれ
ない。

ミアは貧乏な職人の娘だ。育ちが悪く、教養もなく、口ぶりも男
みたいに素っ気ない。職人たちは品がないと、もっぱらの評判でも
あった。

ヴィクトルの家柄であれば、もっと裕福な家の娘が似合いだろう。

その方が、互いの家にとっても幸福だ。裕福であれば家同士で助け合えるし、縁も広がる。商家の息子であるヴィクトルならなおさら、縁はそれだけ価値がある。

ヴィクトルの幸せを願っていた。

だからこれは、ヴィクトルのため。

お前は正しい。

お前はなにも悪くないと、自警団の人たちはみんな、フェアライトに言ってくれた。

○

広場に作り上げられた、楽団のための小さな舞台。

花よりも鮮やかに舞台を飾るのは、引き裂かれた真っ赤なドレスだ。

ドラムの膜は破られ、スティックは折られている。フルートとオーボエを折るのは難儀した。鉄でできたその二つは、広場の段差に叩きつけ、どうにかこうにか傷がつく程度。だが、キーがいくつか飛んだおかげで、まともに吹くのはもう難しい。

後はバイオリンだけだった。

木製のバイオリンを、叩き折るのは難しくない。女の力でも、地面に叩きつければ簡単に壊すことができる。

これで最後と振り上げて、振り上げて　振り上げたまま下せないでいるうちに、ヴィクトルたちが駆けつけてきた。

「フェアライト！ やめてくれ！」

ヴィクトルの叫び声に、思わず手が止まる。だが、そのすぐ横にミアがいるのを見つけてしまった。

「どうしてこんなことをしたんだ！」

嘆くような悲鳴に、フェアライトは顔をゆがめた。どうして。理由は簡単。すべてヴィクトルのためだ。

笑うように息を吐くと、やっと決意が固まった。フェアライトはいつそ穏やかな気持ちで、振り上げたままだったバイオリンを振り下ろし。

「やめなさい！」

バイオリンが地面にあたるよりも先に、ヴィクトルの声よりもずっと近くで、鋭い女の怒声を聞いた。

同時に、体が強い衝撃を受ける。

女の体当たりを喰らい、地面に転がされたのだと、少し遅れて気がついた。自分の体に馬乗りになるその女に、フェアライトは覚えがある。

きつい目つきに険しい顔つき。高圧的な視線をフェアライトに寄せるのは、誰もが知っている悪役女　　カミラだ。

ヴィクトルたちを探して飛び込んだ広場。バイオリンを掲げるフェアライトに、カミラはすぐに気がついた。

壊れた舞台と、嘆くヴィクトルたちを見て、彼女がなにをしようとしているのかもわかった。

あとはもう、後先を考えなかった。

「あなた、なにしているかわかっているの!？」

フェアライトを下敷きにしながら、カミラは怒鳴りつけた。

普段の彼女のすまし顔は見ると影もない。ひどく不安定な表情が、おののいたようにカミラを見上げた。

ヴィクトルのバイオリンは、カミラが押し倒した拍子に、フェアライトの手から離れたらしい。少し離れた場所に落ちているが、拾う者はいなかった。ヴィクトルもミアも、彼の仲間たちも、みんな呆然としたように、カミラとフェアライトを見ている。

「……離して」

表情とは裏腹に、フェアライトの声はひどく落ち着いていた。感情を殺しきったような口調で、肩を押えるカミラの腕を掴む。

「ヴィクトルのためなのよ」

「なにを言っているの」

顔をしかめるカミラに、フェアライトは一瞥をくれた。しかしすぐに逸らし、落ちたバイオリンに視線を移す。

「ヴィクトルにミアはふさわしくないの。だからミアが全部悪いのよ。ヴィクトルに、音楽なんて教えたミアが」

淡々とフェアライトは語る。さほど大きな声でもなく、大通りの喧騒はいまだやかましいのに、妙に鮮明に思えた。

語る内容にも、その口調にも、カミラは違和感があった。

「……祝婚歌をやると言い出したのは、あなたなんだろう?」
「そうよ。でもミアが悪いの。それで終わりのはずだったのよ」
へっ、とフェアラートは投げやりに笑う。

歪んだその笑みに、カミラはようやく察しがついた。

以前、ヴィクトルたちが自警団に捕まったとき、カミラは密告者がいることを疑った。あのときカミラは、アロイスが一番疑わしく

だからこそ、密告者の存在を否定した。

だけどそう、カミラの疑念は半分正解だったのだ。

「あなたが、自警団に教えたのね。あの地下のこと」

フェアラートは答えない。それは肯定と同じことだ。

ヴィクトルが自警団から解放された後、ミアとの婚約が危うい話を聞いたことがあった。裕福な商家の息子の不祥事は、誰かが責任を負わなければならない。貧しい職人の子であるミアならば、押し付けやすいとフェアラートは踏んだのだろう。

フェアラートにとって、ヴィクトルの家族の反応は意外だったに違いない。ミアとの婚約解消どころか、音楽を推奨さえしたのだから。

「ヴィクトルの幸せのためよ。ミアは相応しくない。別れた方がいいって、みんな言っていたわ」

「……みんなって誰よ」

フェアラートは薄笑いを浮かべている。それがひどく不気味だった。

「あなた、本気でそう思っているの?」

カミラはくしゃりと顔をゆがめる。たまらなく不愉快だった。フェアラートの口から出た言葉だということが、輪をかけて不快だった。

「こんなことが」

言いながら、カミラは周囲を見渡す。

夢を見るように語った舞台。一人一人に合わせて作った衣装。今ではすっかり手になじんだ楽器たち。何度も集まり、いつまでも練習し、待ち望んだ今日という日。

すべて壊れ、乱れた舞台はもう戻らない。フェアラートの仲間たちはうつむき、声もなく立ち尽くす。誰も彼も悲しみ、傷ついている。

ともに集まり、笑い、練習してきたフェアラートが、なにかも自分の手でしたことだ。

「これの、どこがヴィクトルのためよ……！　こんなことして、ヴィクトルが辛い思いをすることくらい、わかっているでしょう！？」
フェアラートの肩を掴む手に、知らず力が入る。その力の強さに、フェアラートはぎよっとしたようだ。無機質な表情に、わずかに人間味が戻ってくる。

「これが人のためだっていうの！？　本気で言っているなら、あんた最低だわ！」

「……私だって」

カミラの怒声に、フェアラートは呟いた。

「私だって、ヴィクトルが傷つくのは見たくないわ。でも、私だけじゃなくて、みんながこうするべきだって言うんだもの」

「だから、みんなって誰のことよ！」

「自警団の人たちが言うのよ、全部ヴィクトルのためだって！　私だってこんな事したくなかったけど！　でも、ヴィクトルのためなもの！」

フェアラートの手が、上に乗るカミラのドレスの胸元を掴んだ。強い力でカミラを引き寄せれば、互いに正面から顔を向ける形になる。

「ヴィクトルに幸せになってほしいの！　だからやりたくなくても、必要なことだったのよ！！　仕方ないじゃない！」

半身を浮かせ、髪を振り乱し、必死の形相でフェアラートは叫ぶ。その姿は、常に凜としたフェアラートの面影もなく、ひどく

見苦しかった。

「私が望んだんじゃないわ！ でも好きな人のためなの！ あなたならわかるでしょう！？」

「わからないわ！」

フェアラートを見据えながら、カミラは突き放すように断じた。

「私は自分の意思で、自分のために行動してきたもの。仕方がないことなんて、なにもなかったわ！」

その結果が王都の追放でも、不本意な悪評でも、受けるべくして受けたこと。不満はある。納得がいけないこともある。恨み、妬み、腹を立てても、けれど他人を言い訳にはしない。誰に強要されたわけでもない、カミラが選んだ行為の結果だからだ。

ユリアン王子の幸せを願ってきた。それさえも、誰でもないカミラ自身の意思だった。

「誰かに言われたから？ 誰かのためだから？ 脅されたのでもないのなら、そんなただの言い訳じゃない。これだけのことをして自分は悪くないって言うつもり！？」

「だって、みんなが！」

「みんなじゃない！ あんたのことよ！」

胸元を掴むフェアラートの腕を、カミラは逆に掴み返した。自分でも異様なほどに力んでいるのがわかる。フェアラートはカミラの勢いにのまれたように、されるがままだった。

「自分がなにしているのか、本当にわかってるの！？ 言い訳して、人のせいにして 見苦しい女になりたくないって言ったのは、あんたでしょう！？」

見苦しい女にはなりたくない。醜い姿を晒したくない。きれいでありたい。

はらわたが煮えくり返る言葉をカミラに投げたのは、フェアラート自身だった。

だけど、自らが語る言葉通りに、いつも凜としていて格好良かったのも、フェアラートだった。カミラにはできない恋をして、潔く

恋の終わりを受け入れた。そう思えた彼女だからこそ、カミラは腹立たしくて、悔しくてたまらない。

「自分の意思で決めたことでしょう！ 自分でしたことくらい、自分で受け止めなさい！」

自分が悪いと思うのなら、償えばよい。悪くないと思うのであれば、それでも構わない。自分に向けられる視線を受けても、胸を張ればよいだろう。

だが、今のフェアライトにはどちらもできない。カミラを掴む手には力なく、すすり泣くように俯いた。

「だって……でも、私だけのせいじゃないわ。みんなこうした方がいいって言って……そのかされたの。そう、誰にも言われなければ、私だってこんなこと」

「もういいわ」

呟くように言い訳を続けるフェアライトを一瞥すると、カミラは短く言った。

「今のあなた、最低に格好悪いわ。 周りを見なさい。自分の仲間がどんな顔をしているかわかるわよ」

荒く息を吐くと、カミラはあたりを見回した。その視線に誘われるように、フェアライトもまた、周囲に視線を彷徨わせる。

壊れた舞台の上。遠巻きにカミラたちを見守るのは、フェアライトの仲間たちだ。

ヴィクトル、ディータ、フィーネにオットー。フェアライトを責めることも、カミラを止めることもできず、暗い瞳を伏せている。

誰よりも今日を楽しみにしていた者たちだからこそ、その失望も大きい。踏みにじったのはフェアライトだ。

ああ とフェアライトは呻いた。

うつろな瞳を瞬かせ、一人一人順に視界におさめていく。フェアライトにとって、誰よりも長く過ごした仲間たちだ。笑い合い、喜

び合い、励まし合って迎えた今日を、なのによりによって、フェアライト自身が台無しにした。

こうなることは、フェアライト自身わかっていた。仲間たちがどんな顔をするか、想像ができたはずだった。

でもヴィクトルのため。みんながそうした方が良いと言っから。

だから悪くない。そう言って胸を張ることはできなかった。

ただ、みんなの失望が痛かった。

自分よりも大きな体から振り下ろされる拳は、愚直なほどに単調だった。

馬鹿の一つ覚えみたいに、ただ力任せに殴られる。だが、瑕疵のない良き体であれば、それだけで十分な威力を持つ。

「あんたは！」

顔をかばう腕の上に、フランツが殴りつける。弟の力に、クラウドの細い腕は折れるのではないかと思うほど軋んだ。

「あんたは、いつだって俺の欲しいものを奪っていく！」

幼い日の愛情。親の期待。周囲の信頼。好きな娘を奪ったこともあっただろう。

顔も良くて、教養もあり、知恵が回る。才能にあふれた兄の姿を、弟がどういう目で見ていたのかも、クラウドはよく知っている。

「これ以上、なにが欲しいんだよ！　どれだけ俺から取り上げれば気が済む！？」

フランツは、決して劣った人間ではない。健康な体と、勤勉さを持つ。よく努力をする凡人だった。少しばかり性格はひねくれているが、それさえも極端にゆがんでいるわけではない。常識的であり、まんべんなく優秀で、だからこそ突出したところのない男だ。

「もう、十分だろう！？　あんた、なんでも持つてるだろう！？　俺には、これしかないのに！」

フランツがクラウドに勝るのは、その健康な体くらいだった。幼いころからずっと「逆だったらよかったのに」とささやかれていた。十まで生きられないはずのクラウドと、病氣一つしないフランツ。

二人の体が、逆ならよいと思われ続けてきた。

それでも、フランツが兄を憎み切らず、耐えることができたのは、クラウドが十で死ぬと思っていたからだ。今はクラウドに向いてい

る視線が、いずれは自身に移るだろうと、思うことができたからだ。
なのに。

「なんで生きているんだよ！ どうして今さら現れた！ どうして！！」

恨みを叫びながら、フランツはクラウスを殴りつける。感情任せのその声は、悲鳴のようにも思われた。

「俺がこのために、どれだけのことをしてきたと思っっているんだ！
どれだけ必死になってきたと持っているんだ！ それさえもかつ
さらうのか 兄貴イ！！」

クラウスの代用として跡継ぎに据えられ、クラウスに見劣りしないよう、フランツは必死に努力をしてきた。だが、どれだけ努力を重ねても、フランツがクラウスに追いつくことはできない。両親だって親族だって、使用人たちでさえ、みんなクラウスばかりを見る。フランツの懸命さに気付きもしない。あくまでも彼は、クラウスの身代わりに過ぎなかった。

それでも、フランツは跡継ぎに固執しないわけにはいかない。それだけが、幼少期の彼へ与えられた両親の目であり、ただ一つの自尊心なのだから。

フランツはクラウスへの劣等感のかたまりだ。クラウスを羨み、妬み、ある種憧れ、憎んできた。

そんな哀れな弟の姿を、クラウスはよく知っている。
クラウスもまた、同じだからだ。

「俺だって、望んで天才になったんじゃないやねえよ」

吐き出すようにクラウスは言った。顔をかばう腕をどければ、興奮したフランツの顔が見える。フランツは、ああむけに倒れたクラウスに馬乗りになり、もう何度殴ったかわからない拳を握っていた。フランツの腕は筋張っている。程よい筋肉に引き締まっており、健康的な血色をしている。クラウスの襟首をつかむもう一方の手は、

若者らしく力強い。

その襟首を、クラウドスは掴み返す。クラウドスの腕は細く、女性的
と言えは聞こえはいいが、言ってしまえば貧弱だった。肌は白く、
血の気は少ない。体力とも腕力とも、無縁だった。

「才能が欲しかったわけじゃない。やれるんだったら、いくらだっ
てお前にくれてやったさ……！」

口の中に血の味を感じる。喧嘩をしたのも、殴られたのも、クラ
ウスにとってははじめてだ。ずっと深窓で、大切にされ続けてきた
せいで。

「羨んでるのが自分だけだと思ふなよ……！ 俺がどんな目でお前
を見てきたか知っているか！」

長く歩くことのできない体。十まで生きられない貧弱な命。フラ
ンツには、あつという間に身長を抜かされた。クラウドスの体は、死
を乗り越えた今でも弱いまま。食べても太れず、筋肉も付かず、病
にもすぐに倒れる。

「外を走り回るお前が！ 死を恐れずにいられるお前が！ 寝る前
にいつも、『明日は目覚めないんじゃないか』と怯えずに済むお前
が、どれほど羨ましかったかわかるか……！」

「知ったことか！」

フランツが拳を振り上げる。一撃一撃は重くとも、大振りで単調
なその殴打の軌跡は 予測するにたやすい。特に、何度も殴られ
た今ならば、なおさらだ。

「才能なんて捨てても、俺は健康な体が欲しかった！ 外を歩きた
かった。本物の花を見たかった。自分の町を、窓からじゃなく、そ
の場で見ていたかった！」

フランツの拳は空を切る。手ごたえのない空振りによるめいた隙
をつき、クラウドスはフランツの体を横に倒した。馬乗りになつてい
たフランツが倒れ、形勢が逆転する。倒れた拍子に頭を打ったのだ
ろう、フランツは痛みに顔をしかめ、しばし呆気にとられたように
瞬いた。

「お前が外を駆ける姿を、窓からずっと見ていたよ」

同じ兄弟なのに。どうしてこれほど違うのか。恨んだ。妬んだ。自分を妬むフランツを、ことさら憎んだ。幸いにして生き残ったけれど、あの十年の日々は、クラウスもフランツも歪ませたままだ。「羨ましくて、羨ましくて仕方がなかった。自分がどれほど恵まれているか気が付かないお前が妬ましかった。窓から見るお前に憧れていた」

窓の外。窓越しの太陽。外の空気を感じることもできず、ベッドの上に横たわってみている日々。父と母に連れられて、ブルームの町へ視察に下りるフランツを、クラウスは何度も何度も見送った。彼らの向かう町は、春一番の花が咲き誇る。真っ白な花吹雪。クラウスの憧れを映す白い花。

「俺にとつての憧れゼンズフトの花は、ずっとお前だったんだ　　！」

「……だから、どうした」

クラウスの下。のしかかられたまま、フランツが押し殺した声で言った。打ち所が悪かったのか、形勢を返されたことに驚いたのか。クラウスを睨む視線は代わらないものの、先ほどまでより少しだけ冷静になっているようだ。

「お前、親父たちに認められなかったんだろう？　自分のしてきたこと、褒められたかったんだろう？」

「だから、どうした！」

「俺が認めてやるよ」

フランツの怒声に怯まず、クラウスは言った。

「お前を羨んで、お前をずっと見てきたんだ。お前がどれほど頑張ってきたか、俺は知っている。良いところも悪いところもわかってる。お前の力が発揮できる場を作ってやる」

フランツはクラウスを睨みながら、口を開く。だが、何か言いたげなその口は、なにも発することなく閉じられた。言葉にならない感情が、荒い呼気として吐き出されるだけだ。

「伯父さんなんてやめて、俺の下につけよ。伯父さんには、お前はもったいない。あの人、お前を駒としか見てないぜ」

野心家で無謀な伯父のこと。彼は、フランツを自分の傀儡とするつもりだろう。もしもフランツが跡継ぎになれば、もう用済みである。

それでも、フランツにとっては自身の存在意義を見出してくれる相手であった。だからこそ、伯父の手足となっていたのだ。たとえ不本意だとしても。

「お前もこの町が好きだろう？ 伯父さんと一緒だと、アインストに作り変えられてしまうぜ。そんなの、お前だって望んでないだろ」

「……兄貴」

「俺の片腕になれよ、フランツ。お前には、俺にできないことができるんだ」

深い息を吐き、フランツを見ながらクラウドはそう言った。

フランツは唇を結び、クラウドの真意を探るように見つめ返すが、それも一瞬のことだった。

フランツの目が、驚きに見開かれる。同時にクラウドは、自信の首筋に、ひやりと冷たいものが当たるのを感じた。

「そこまでだ、クラウド」

苦々しい老いた声が、空き地に響く。

「まったくお前は、どこまでも邪魔な男だ」

空地に足を踏み入れたのは、尊大で大柄な、レルリヒらしくない武骨な男。

むき出しの野心の顔に浮かべた、忌々しい伯父ルーカスの姿を、しかしクラウドは見ることはできない。フランツに馬乗りになったまま、首をひねることさえ難しかった。

理由は簡単。

空地にいた自警団の一人が、クラウドの首筋に剣を突きつけてい

るからだ。

刃が無防備なクラウドの首筋に触れる。

その気になれば、この剣はすぐにでもクラウドの首を落とすことができるだろう。

自警団は、クラウドに剣を突きつけている一人だけではない。もともと空き地にいた者たちに加え、ルーカスが背後に数人率いている。

フランツと違い、ルーカスは直接クラウドに手を出すつもりはならしい。クラウドに一矢報いさせるだけの距離さえ与えず、駄目押しとばかりに自警団の男で身を固めている。

いや、もはや自警団ではなく、ルーカスの私兵と言った方が良いだろう。この道楽の町には不釣り合いな男たちは、ブルームではなくルーカスのための手足だ。

「……やっと出てきたな、伯父さん。最後まで部屋でふんぞり返っているかと思っただに」

「フランツまで惑わされてはたまらん。お前という男は、よくもまあ人をたぶらかす。ゲルダの嫌なところばかり似ているな」

「人間的魅力ってやつだよ」

減らず口を叩きながら、クラウドは口を曲げる。なるほど、フランツが落ちたときの保険として、ルーカスが控えていたわけだ。フランツがつつがなくクラウドを仕留められれば、今もルーカスの姿が表に出ることはなかったのだろう。

用心深いのは、ルーカスの数少ない取り柄だ。自警団もクラウドとの対立も、あくまで表向きはフランツのしたこと。この男が背後にいたことがわかっていても、決定的なものを掴めないままここまで来た。

だが、今の圧倒的な優位性に、彼は少し気をよくしているらしい。

クラウドの命はルーカスの手の中。命令一つですべてが終わる。

「その口の上手さで、モンテナハト卿も丸め込んだのか。まったく無欲なように見せかけて、とんでもなく強欲なやつだ。そんなに当主の座が欲しいのか」

「それは伯父さんでしょう。俺を殺してまで、そんなにレルリヒの家が欲しいのか」

レルリヒ家は、ブルームの町で絶大な力を誇るとはいえ、所詮はモンテナハト公爵家の家臣。領地すらもない田舎の下級貴族に過ぎない。

『レルリヒ家の跡継ぎ』という立場自体に固執するフ란ツならばまだしも、権力そのものを求めるルーカスには、満足のいくものとは到底思えなかった。

「それに、俺がアロイスを丸め込んだのも知っているんだろう？俺が死んだら、モンテナハト家と敵対することになるよ」

クラウドが言うと、ルーカスは「はっ」と鼻で笑った。ルーカスに背を向けたクラウドには、その表情は見えないが、想像するのは難しくない。きっと、心底クラウドを見下しているのだろう。

「モンテナハト家など、おそるるに足らん」

「……相手は公爵家だぞ？」

「だからどうした。公爵家など、私が飲み込んでくれよう。あの愚鈍な『沼地のヒキガエル』など、簡単に懐柔できる。ゲルダにだってできることだ。私にできないはずがない」

首に触れている剣が、ぴくりと動く。それは、剣が動いただけかもしれないし、クラウドが首を傾けたせいかもしれない。

ルーカスの姿が見えるように、クラウドはわずかに首をひねる。「今日の伯父さんは饒舌だな？ とんでもないことを言っているとわかってるのか？」

苦々しいクラウドの視線に、ルーカスは片眉をひそめた。が、すぐに不敵な笑みに変わる。どうせ、この劣勢は覆せまい。クラウドの首は、ルーカスが命じれば簡単に落とすことができるのだ。

大通りでは、まだ喧騒が続いている。そもそも、この裏通りから目を逸らすために大通りで暴れさせているのだ。クラウドを案じて誰かが戻ってくることはないし、そうさせないように厳命をしている。

「饒舌にもなろう。今日は記念すべき日だ。不幸な事故でクラウドを失い、フランツがレルリヒ家の当主に決まるのだから」

「それで、モンテナハト家への足掛かりにするってわけ？　そう簡単に思い通りに行くわけないだろ。アロイスはあれで、そこまで馬鹿じゃないぞ」

「思い通りにいかなければ　力づくで思い通りにすればいい。そのために集めてきた兵だ。カエル一匹殺す程度、わけがない」

クラウドの忠告にも、ルーカスは鼻で笑う。

「モンテナハト家も足掛かりにすぎん。私の目的は、こんな田舎にはとどまらん。いずれは王都をも手に入れるつもりだ」

「……そりゃ、夢がでかいや」

不遜な伯父の言葉に、クラウドは顔をしかめた。

それはまるで、まるで　笑うような表情だった。

「でも、夢は夢のままってね。言質取ったぜ、伯父さん　あ　んたは、反逆者だ」

ルーカスは腕を組み、目を細めてクラウドを見た。薄笑いを浮かべるクラウドに、いつそ憐れみさえもはらんだ視線を向ける。

「今さら言質など取ってどうする。お前は、まだ自分が生き延びられると思っているのか？　軟弱な連中は、これだから困る。誰も殺したくないと、人を切りたくないという、この町の連中は」

言いながら、ルーカスは片手を上げる。その手の動きを、兵たちはじっと見つめた。まるで、指揮棒を持つ指揮者のようだ。彼の手が、兵を動かす意思となる。

「私はそれほど甘くない。秘密を誰に打ち明けることもできず、お前はここで死ぬのだ、クラウド」

一挙手一投足。クラウドの怪しい動きを見逃すまいと、ルーカス

は彼を注視する。

なにかを隠し持っているそぶりはない。反撃のために身構えるわけでもない。細いクラウスの首を落とすことは、わけのないこと。「命乞いは聞かん。死に際に言葉を交わしてやったことが、血縁の情と思え。だが、これでしまいだ」

ルーカスは無慈悲にそう言つと、上げた手をゆつくりと下ろす。

「殺せ」

ルーカスの指先が、クラウスを指し示す。

それを合図に、クラウスの首にあてられた剣が動いた。兵が剣を握りなおす。

この祭りで、仕掛けてくるだろうとは予想していた。

内通者も想定通り。これまで、さんざんルーカスの手を焼かせてきたのだ。彼は確実にクラウスを殺しにかかるだろう。

万が一にも、取り逃がすことがあつてはならない。クラウスは口が上手い。下手な人間をけしかければ、丸め込まれてしまうかもしれない、とルーカスと思うはずだ。

そうはさせないためにも、ルーカスは、自分以外の人間に任せきりにはしないだろう。

ルーカスは必ず出てくる。それも、クラウスの死を確かめるために。

自身の安全が確保された　すなわち、クラウスの敗北が決まった後に。

想定したのは、祭りで仕掛けてくるところまで。

彼らが行動を起こした後は、こちらの狙い通りに動かすだけ。すべては作戦の内だった。

クラウスに剣を突きつけていたはずの兵は、当然のようにその刃を鞘に納めた。

瞬くルーカスを横目に、クラウスはようやく立ち上がる。

「……どうということだ」

目の前の状況が信じられないように、ルーカスは呟いた。クラウスは肩をすくめると、薄ら笑いのまま、自分に剣を当てていた兵の肩を叩く。

「こういうことだよ」

クラウスの言葉を合図としたように、兵は息を吐いた。同時に、息を呑むほどの魔力が溢れ出す。魔力のろくにないルーカスにも、その濃さを肌で感じられる。これだけの力を持つ人間に、彼は一人しか思い当たらなかった。

「……さすがに、半日近くも姿を変えるのは堪える」

「いやいや、さすが。見た目も完璧だし、魔力も漏れてなかったし、ほんと、魔法に関しちゃう化け物だなあんたは」

「おかげでもうほとんど魔力が残っていない。もう少し長引いたら危なかったぞ、クラウス」

疲弊した顔で立っているのは、ルーカスの兵ではない。だが、ルーカスにも見知った男だ。

白銀の髪。赤い瞳。王族の特徴を持つその男の存在に、ルーカスは呆然とした。

「アロイス、様」

「ルーカス、残念だ。さすがに先の言葉を見逃すことはできない」
アロイスはルーカスを見据えたまま、深く息を吐いた。アロイスは寛容な領主であるが、さすがに領地に仇なす人間を見逃せるほど寛容ではない。

「どうして……いや、私は……いや。いや」

ルーカスは言い訳の言葉に少し迷ったようだった。なにかを言い

かけ、すぐに自ら否定をする。が、それも長い時間ではない。素早く感情を切り替えると、彼は周囲の兵たちを見回した。

「いや　構わん。いずれはこうなることだった。二人まとめ、殺してしまえ！」

アロイスとクラウスに向けて指を突きつけ、ルーカスは叫ぶ。

だが、彼の兵は誰も動かない。無言のまま、視線をルーカスに向けるだけだ。

「どうした？　私の言うことが聞けないのか！　命令だぞ！　やつらを殺せ！」

ルーカスの声は、空き地に響き渡るだけだ。表通りの喧騒も静まり始めた今、彼の声は滑稽なくらいに良く響いた。

兵たちは動かない。代わりに動いたのは、クラウスの口だ。

「馬鹿だなあ伯父さん。金で釣った相手を懐に入れるなんて」

ルーカスの私兵は、知より武を推す彼の理念に共感し、集っていたわけではない。

そのことに気が付いたのは、花屋で出くわした自警団のおかげだ。アロイスと相対し、フ란ツの命令を捨てて逃げて行った男たち。

強い理想を持ってアロイスを説き伏せるでもなく、怯え、媚びた姿が教えてくれた。

彼らには、理想があるわけではない。利点があるからルーカスに従うだけであり、それよりももっと価値のある相手であれば、身を乗り換えることもやぶさかではない。

ならばルーカスに付く利点はなにか。

金や立場だ。特に、町の外から雇った連中は、ただ金のために動いていたといってよかった。

それさえわかれば、難しいことはなにもない。

「同じことを相手にされるって思わなかったの？　男爵家よりも公爵家の方が、金払いが良いに決まっているじゃん」

「……クラウス。お前が胸を張ることではないだろう」

呆れたアロイスの視線に、クラウスは肩をすくめる。

愕然としているのはルーカスだけだ。自らを囲む兵たちは、味方なんかではない。兵の視線は命令を待っていたのではなく、ルーカスを監視していたのだ。

「く……」

追い詰めたつもりで、最初から追い詰められていたのはルーカスだった。剣を突きつけられたとき、ルーカスが現れたとき、彼の自白を聞いたとき。クラウドはずっと　　ほくそ笑んでいたのだ。

「くそ……！」

悔しさに、ルーカスの顔が赤くなる。憤りが体をわななかせる。

自らの危機よりも、ひどい恥をかかされたことに屈辱を覚えていた。

「くそっ！　ならば私は、あいつの倍は払うぞ！」

怒りの中、ルーカスは叫んだ。思考するよりも先に、声が出る。

アロイスとクラウドを指し示し、大声でわめきたてた。

「殺せ！　金なら望むだけやろう！　どうした！？　早くあの男たちを殺せ！！」

兵たちは動かない。怒りに我を忘れた伯父の姿に、クラウドはため息をついた。

「伯父さん、レルリヒの人間のくせに頭が悪いな」

薄ら笑いを浮かべたまま、クラウドは挑発するように、自らの頭を小突いた。

「もう、あんたに払うことのできる金はないんだよ。あんたにあるのは、あとは長い休みだけだ。野心を忘れて、ゆっくり休むと良いよ」

「……ぐ」

ルーカスは呻いた。自らを取り巻く視線に顔をゆがめ、憎々しげに唇を噛むと、「くそおおおお」と叫び、そのままその場に崩れ落ちた。

兵たちは、もとの雇い主であったルーカスとフランツを空き地から連行した。

彼ら二人は、ひとまずはレルリヒの屋敷へ返され、そのちに処遇を決めることになる。

去り際、フランツがクラウドに低く声をかけた。

「俺に言った言葉も、全部作戦通りだったのか、兄貴」

フランツの表情は読めない。悔しがってはいないようだが、怒っているように見える。クラウドへ向ける恨みの視線は変わらず、それでいてどこか、悲しそうにも思えた。

「本心ではなかったってことが。こう言えば、俺は黙ると思ったから、それらしいことを言っただけなのか」

「俺は、お前に嘘を言ったことはないよ」

クラウドはフランツの視線を受け、彼らしくもないまじめな声で言った。

「俺はお前が努力してきたことも、お前の得手不得手も、俺にはできないことができることも知っている。お前が俺についてくれたらいいと、本気で思っている」

フランツは口をつぐみ、黙ってクラウドを見下ろした。

笑っていないときのクラウドは、フランツとよく似ている。ひねくれた性格であっても、根が真面目なところも、二人は兄弟だと思われた。

「信じられないなら、傍で確かめてみるよ。一年くらい試してみて、それでも信じられないならまた考えればいい。伯父さん二十何年も尽くしたんだ、俺に一年くらい預けてくれてもいいだろう？」

「……………考えておく」

小さな声でそう言くと、フランツは兵に連れられ、裏通りを去っていった。

ルーカスもフランツもいなくなると、空き地に残るのは数人の兵と、アロイスとクラウスだけになる。

大通りの騒ぎは、もう収まったらしい。喧騒は聞こえなくなり、興奮の後の静けさだけが残る。

「おい」

クラウスは、息を吐くアロイスに呼びかけた。

「付き合わせて悪かったな。さすがに、首に剣を当てる相手は、誰でもいいってわけにいなかったから」

「いや。これもモーントンのためだ」

そう言いつつも、アロイスは大通りが気にかかるらしい。どこか落ち着かない様子で、空き地から外に視線を流す。

いや。気にかかるのは大通りではないのだろう。想像した以上の大騒動の中、カミラが無事であることを心配しているのだ。

さすがに、領主の結婚予定相手に手を出すほど胆力のある人間は、あの中にはいないだろう。カミラ自身も殴り合いに割って入るほど無謀ではないし、ヴィクトルたちと合流すれば、万が一もない。

それを分かっている、アロイスは気がかりなのだろう。

「……あんだ、変わったな」

静かな声でつぶやくと、クラウスはひねくれ切った視線をアロイスに向けた。捻じれた視線には、不服さと不満さと微かな親しみが隠れている。

そのことに自分自身で気が付くと、クラウスは苦々しく口を曲げた。それから、おもむろにアロイスへ呼びかける。

「おい、ちよつと手を出せ。軽く上げる」

アロイスは不思議そうに瞬いた。が、素直にクラウスに従う。子供じみた従順さだった。

こいつ、友達なんていたことがないんだろうな。

片手を上げ、なにごとか首をかしげるアロイスに、クラウスは内心毒づく。領地第一で、自己犠牲のかたまりで、無感情なこの男が嫌いだった。

でも今は、たぶん、そうでもない。

クラウスは自身の手もアロイスと同じ高さまで掲げると、いたずらっぽく不敵に笑った。

それから、自分の手のひらを、アロイスの手に叩き合わせた。

ぱあん、と乾いた音がする。

跡取り騒動の終わりを告げる、軽快なその音は、春の空に響き渡った。

もちろん、そんな男どもの結末など、祭りの後始末をしていたカミラには知ったことではない。

フェアラートを黙らせた後。うずくまったまま動かない彼女をフイーネに任せ、カミラはヴィクトルたちを率いて祭りに騒ぐ無法者どもに、水をかけて回った。都合よく、広場には水の流れる泉がある。汲んで頭に被せていけば、半分くらいは冷静さを取り戻した。半分の半分は、逆上してきたが、まあそこは男手である。ヴィクトル、オットー、データーの三人は、軟弱な貴族の男どもと違い、なかなか頼りになった。

残り半分の半分は、最初から昏倒していた。こういう連中には、意識を戻すために水をかけた。

そんなこんなで、どうにかこうにか大通りの騒動が落ち着いてくる、罪深いアロイスとクラウスが帰ってきたのである。

○

凄惨な大通りを目にして、アロイスは言葉を失くしていた。クラウスはさすがというべきか、軽率な表情を崩さない。

カミラは広場の中央で、疲弊しきっていた。カミラと共に騒動を治めたヴィクトルたちも同様である。喧騒が失せ、静けさを取り戻したからこそ、むなしさが彼女たちの体を重たくした。

大通りには、人っ子一人いない。怪我人を運ばせたため、残った自警団員も少ない。踏み荒らされた祭りの後に、崩れた屋台と壊れた舞台。楽器も無事に残ったのは、ヴィクトルのバイオリンだけだ。悲しみに暮れる楽団員と、自責の念に駆られる自警団たち。フェ

アラートは広場の隅でうずくまり、気丈なカミラさえ、言葉を紡ぐことができなかった。

これ以上にならない最悪の顛末に、アロイスは息を呑んだ。

「か、カミラさん、ええと……」

アロイスはカミラに駆け寄ると、どうにかしてかける言葉を探していた。

だが、どう考えても言い訳のしようはない。レルリヒの跡継ぎ問題を解消するために、犠牲にした結果だった。

「あの」

ためらいがちな言葉の先は出てこず、代わりにアロイスは息を吐く。

作戦上、大通りの祭りで騒ぎが起こることはわかっていた。

もちろん、アロイスにとって騒ぎが大きくなることは本意ではない。ヴィクトルたちがどれほどこの日のために尽くしてきたかを知っているし、カミラが楽しみにしていたのも知っている。だから、できれば、さほど被害は出ずに済むように祈っていた。

だが、結局は想像する中で、最悪の状況を引き当てた。

逆に言えば、アロイスにはこの現状を、最悪の展開として想像ができていたわけだ。

「……この状況は、すべて私の責任です」

後ろ暗さが、アロイスに真実を吐かせた。

「私はこうなることを知っていました。知っていて、見逃していました。……カミラさん、私があなたの楽しみを奪ったのです」

「そうでしょうね」

カミラは静かに答えた。カミラの言葉の真意がわからず、アロイスはおろおろと彼女の顔を覗き込む。

カミラはうつむいていた。手のひらを握りしめていた。少し、肩がわなないていた。

「あの。私が原因なんです。跡継ぎで揉めていたのはご存知でしょう？　それで、祭りを利用したんです」

「そうでしょうね……！」

震える怒りの声と共に、カミラは顔を上げた。カミラの強い視線を受け、アロイスは戸惑いと驚きにのけぞった。

「そんなことだろうと、思っていました！　ずっとクラウドと二人で、ここそこそこそしているんですから！」

「……気が付いていらっしやったんですか？」

アロイスは目を見開き、カミラを見下ろす。怒りに震え、カミラの頬は赤く染まっている。眉間にしわを寄せ、唇を噛み、悔しさを握りしめて憤る姿は、かえってカミラの悲しみを強調させていた。

「なにをする気か知りませんでしたけど！　また変なことを考えているだろうって！　どうせ、こんな日にも純粹に楽しめない人たちなんだろうって、わかっていました！　だから！」

声を上げながら、カミラはアロイスを睨みつけた。癪癢めいた声は、アロイスに向けられているようでもあり、カミラ自身に向けられているようでもあった。

「だから！　せめて戻ってきたときに、気兼ねせずにいられるようにしてさしあげたかった！」

みんながアロイスを責めないように。アロイスが責められないように。この日のために努力した人が報われて、誰もが楽しみ、自分が楽しめる日を守りたかった。

でも、とカミラは続ける。

でも、結局はこの惨状。たぶんこれがクラウドなら、もっとうまくやるのだろう。アロイスなら、もっと的確だっただろう。

「でも、私はなにもできませんでした。それが、悔しくて、悔しくてたまらないんです……！」

カミラは無力だった。蹂躪されていく祭りを前に、一人でどうすることもできなかった。

元凶であるアロイスやクラウドたちにも腹は立っている。だけどもなにより、『祭りを成功させたい』という、自分の願いさえも叶え

られないことが許せなかったのだ。

アロイスは、震えるカミラの姿を愕然と見下ろした。瞬時に、カミラの非難の意味を理解することができなかった。ただ、その勢いにのまれ、声を失った。

「……私は」

目の前で、カミラは傷ついている。泣き出しそうな思いを、怒りに変えてアロイスを睨んでいる。その痛ましい姿が、なによりアロイスをすくませた。

アロイスは立ち尽くし、瞬き、息を吐く。長いことカミラを見つめる。

そうしてようやく、彼はカミラの激情を理解した。

「……………私は、大変なことをしてしまっただけですね」

顔をくしゃりと歪めると、アロイスは頭に手を当てた。カミラは下を向いたままだ。

地面には、踏みにじられた花の跡。カミラを見ていることができず、アロイスは頭を振った。

「埋め合わせを　いえ、後日また……………」
いや。

こののと同じ祭りを開いたところで、カミラの気持ちは報われない。カミラが守ろうとしたものは、今日のこの日に他ならないのだ。滑稽なほどに動揺しながら、アロイスは糸口を探すように辺りを見回した。絶望的な広場。疲れ切った人々。この日のために努力しながら、なにもかも失った楽団員たち。カミラと、カミラを気遣うニコル。

それから　。

「　クラウド」

「あいあい」

アロイスの呼びかけに、クラウドは軽妙な返事をした。すぐるような彼の視線を受け、クラウドは顔をゆがめて笑う。

「まったく、手のかかる領主様だ。お前のその情けない顔に免じて、手を貸してやるよ。この色男に任せなさい」

めったに見せないアロイスの表情に、クラウスは気をよくしているらしい。この状況にもかかわらず、彼は歌うように言った。

「そもそも、俺のための祝祭だったしな。しゃーねーな！」

それから、クラウスはおもむろに歩き出す。カミラたちのいる場所からほど近い、段差を登った先にある舞台に一人上がると、そこかしこに転がる壊れた楽器を一瞥する。

フルート、オーボエ、ドラム。バイオリンの姿はない。これだけ唯一壊れていないため、きちんと箱にしまわれていることを、クラウスは知らない。

バイオリンがないことは特段気にせず、クラウスは落ちているスティックを拾った。半分に折られた哀れなスティックに、膜の破れたドラムを見つけ、彼はその場に座り込む。そうして、試すようにドラムのふちを叩いてみてから、中央に向けて声を上げた。

「ちびちゃん、おいでおいで」

「私ですか？」

手招きするクラウスに、ニコルが目を丸くした。戸惑いの瞳をカミラに向けるが、カミラだって見られてもどうしようもない。困惑しつつも、クラウスに応じるように言えば、ニコルは不審そうな顔で舞台上がった。

折れたスティック。壊れたドラム。そこらへんに転がっていた鍋を一つ。屋台の設営で余った、大きめの木片を一つ。

「なにをするつもりですか」

ガラクタを並べるクラウスに、ニコルは問いかけた。食えない男の考えることが、ニコルにはさっぱりわからない。この男は「任せろ」と言っただけで、いったいなにができるというのだろうか。

「お祭り騒ぎだよ」

言いながら、クラウドはガラクタの前に座り込み、スティックでそれらを軽く叩く。確かめるように一つずつ順に叩いてから、彼は口を曲げてニコルを見た。

「よし、ちびちゃん。歌え」

「はい？」

「ずっと練習に付き合っていたらう。祝婚歌は歌えるな？」

ニコルは瞬く。理解しがたいクラウドの言葉をゆつくりと頭でかみ砕き、言葉の意味がわかったところで、猛烈に首を振った。

「む、む、無理です！ 歌えませんよ！ しかも、こんな目立つところで！」

「大丈夫、大丈夫。心配なら、俺と一緒に歌ってやるよ」

「そういうことじゃありません！ だいたい、どうして私なんですか！？ フェアラートさん は」

だめだ。フェアラートはすっかり沈み込み、仲間たちの呼び掛けにも答えない。

「ええと、わ、私じゃなくても、ヴィクトルさんとか、ディータさんとか……」

「男の声なんて誰が聞きたいんだよ」

「でも、じゃあ他の女の人に」

カミラとか、フィーネとか、ミアとか。広場の女性を見やるニコルに、クラウドは肩をすくめた。

「他じゃなくて、ちびちゃんがいいんだよ。言っただろ？ あんた、いい声してるの。俺はその声が好きなんだ」

さりげない言い草に、ニコルはぐ、と唇を噛んだ。当の本人は、ニコルの反応を見もせず、並べたガラクタを叩き出す。カン、キン、ゴン。不揃いな音が、クラウドの手で軽快なリズムを刻む。

「どうしても嫌なら、仕方ないけどな。そうでもなければ、あんたの声を聞かせてくれ、ニコル」

クラウドはどこまでも勝手な男だ。

好き勝手に言い捨てる、一人ガラクタを叩きながら、息を吸い

込み歌い出す。男性にしては少し高い歌声は、朗々として美しいけれど　一人きりだと少し寂しい。だって、もともとは五人で奏でるはずの歌なのだ。

ぐ、とニコルは両手を握り合わせる。何度も聞いた、何度も歌った祝婚歌は、まるで誘い水だ。地下でフェアライトに付き合つて、練習をしてきた日々がよみがえる。明るいクラウスの歌声が、ニコルの声を誘っている。

「うう　　お、奥様の！　奥様のためですからね！」

クラウスは、アロイスに任された。このよくわからない歌も、きつと意味のあること。落ち込むカミラを元気づけるようなことのはず。だからクラウスに手を貸すことは、カミラのためになる、はず。決して、自分が歌いたいからとか、声を褒められて嬉しかったからではない。はず。

「奥様のために、歌うんですからね！」

色づきかけた頬をはたき、ニコルはクラウスの褒めた、よく通る声で叫ぶ。

クラウスはそれを見て、端正な顔に、心底気に食わない花咲くような笑みを浮かべた。

○

ニコルとクラウスの歌声が、舞台上から響きわたる。

今さら歌ったところで……。

広場で聞いていたカミラは、唇を噛みしめる。クラウスがなにをする気か知らないが、歌一つが壊滅的な現在の状況を取り戻せるとは思わなかった。

むしろ、二人の歌声が明るいほどに、今のどうにもならなさを実際立たせる。

やめやめ！　せっかくニコルも歌ってくれているのに。

忍び寄る暗い気持ちに、カミラは頭を振った。二人は、どうにか

しようと思ってくれているはずだ。カミラばかりが暗い気持ちにな
ってはいけない。

奮起するように、俯きがちだった顔を上げたとき。

歌声に誘われたのだろうか。

カミラは、大通りから広場を覗き込む少女の姿に気がついた。

少女は不思議そうに、舞台上を見上げている。

年のころは十歳そこそこ。少女の他に、誰かがいる様子はない。

親や友達とはぐれてしまったのか。それとも一人で、ふらふらと迷い込んでしまったのか。

カミラは少し迷ってから、大通りの少女に近付いた。

「どうしたの。あなた迷子？」

カミラが声をかけると、少女の肩がびくりと跳ねた。音に夢中で近付いてきたカミラに気がつかなかっただけらしい。丸い瞳でカミラを見上げ、うろたえている。

「あの、えと、ごめんなさい。勝手に見ちゃって」

「いいわよそれは。見たいなら、もっと近くに行ってもいいわ。あなたが迷子じゃないならね」

「迷子じゃないです！」

むっとしたように、少女は頬を膨らませた。

「あたしは友だちと待ち合わせちゅうだけです。おうちだって、一人でかえれますもん！」

「わかった、悪かったわ。じゃあ、ゆっくり聞いて行って。……あ、いえ　　ちよつと待って」

そうだ、と呟くと、カミラは大通りを見回した。通りに連なる崩れた屋台。その中にあるはずの、ギョウターの屋台を探す。

広場に近い良い位置に、ギョウターの屋台はあった。運よく崩れてもいない。ギョウターが守ったのだろう、調理器具も無事らしい。それを確認するや否や、カミラは屋台に駆けだした。

屋台の傍には、ギョウターが一人。これもまた疲れたようにたたずんでいた。ぼんやりと広場の方に目を向けて、ため息なんぞをつ

いている。

そんなところへ、カミラがものすごい勢いで割り込んできたのだ。ギョンターはぎょっと目を剥き、もともと厳しい顔をしかめる。

「おい、なんだお前。どうした」

「ちよつと借りるわ」

「は？」

呆氣にとられるギョンターには目もくれず、カミラは屋台の中へともぐりこんだ。

屋台の中はきれいに整えられていた。屋外でも使える簡易なかまど。屋台が燃えないように、火を囲うような造りになっているのが特徴だ。かまどの上には網が敷かれ、端には串と、ソースの入った瓶がある。

肉は、地面に置かれた石櫃の中。冷却の魔道具と共に詰め込まれている。

火打石は　かまどの傍だ。見つけるとすぐ、カミラはかまどに火を入れる。肉を串に刺し、火が大きくなるのを待つと、網の上に肉を乗せる。

「なにをやってんだお前」

じゅう、と肉の焼ける音に、ギョンターは困惑の声を上げた。無理もない。祭りだと浮かれていたら、いきなりどこの誰とも知らないやつらに強襲され、やつと引いて行っただと思えば、今度は自分の屋台が乗っ取られたのだ。

「見ればわかるでしょう」

だが、カミラの答えはつれない。振り返りもせず、めいっぱいの強火で肉を焼き続ける。

肉は火にあぶられ、表面に網模様の焦げ目がつく。肉汁がしたたり落ち、かまどから灰色の煙を上げさせた。赤みがかった生焼けの肉汁は、まだまだ生焼けの証だ。

「見ればわかるってなあ　おい、お前火が強すぎだ！　外ばっかり焦げるだろう！　網に押し付けるな！　だいたい、ちゃんと

下味は付けたのか!？」

「知らないわ!」

「ああちくしょう!　なんて大味な女なんだ!」

ギョウターはいら立ったように頭を掻きむしる。そんな男はさておいて、カミラはじうじうと焼き続ける。

煙が風に流れ、香りを運んだのだろう。広場を覗いていた少女が、今はカミラのいる屋台に視線をよこしている。これもまた、不思議そうに首を傾げ、それから小走りに駆け寄ってきた。

「なあにそれ」

少女は背伸びをし、屋台を覗き込む。ちょうど、ちょっと焦げすぎた肉が焼けたところだ。カミラは串を火から離し、ふふんと笑った。

「おいしそうですね」

「うん」

少女の目が、カミラの手を追いかける。

カミラは見せつけるように、ソースの入った瓶を取り、肉に垂らした。ソースはほんのり甘い香りで、肉の香ばしさと相まって、ひどく食欲を刺激する。

さすがは、客引きのために選んだだけのことはある。少女の視線は釘づけだった。

「銅の旧リヒト硬貨五枚」

カミラが告げたのは、ゾンネリヒトで流通する、一番価値の低い硬貨だった。五枚程度なら、庶民にとってもそれほど高いものではない。子供でも手が出せる金額だ。

だが、少女はその言葉に肩を落とす。

「……おかね持っていないです」

「　　本当は、五枚。でも子供は特別に無料^{タダ}」

少女はカミラを見上げた。きらめく瞳に見つめられ、カミラは頬を緩める。

人の店ではあるけれど、これくらいの横暴は許してほしい。どう

せ、誰にも食べさせることなく占める予定だったのだ。

「ありがとう、最初のお客さん」

カミラはそう言うと、少女に焼きたての串を差し出した。

少女は串を受け取ると、それで満足したのか、広場へも戻らずに走り去っていった。

「……最初で最後のお客さんだったかもしれないわね」

少女がいなくなったことで、広場にも通りにも、結局また誰もいなくなってしまった。

まあ、でも、誰も来ないよりはましだっただろう。一人だけでもいてくれたことで、少しだけ報われた気がした。

煙の上がる屋台の中。道具の使い方に文句を言うギョントーを聞き流し、カミラはひとり苦々しく笑った。

ところがどっこい。子供というのは、ずる賢いものである。

しばらくして、なんと少女は戻って来た 友達を、たくさん連れて。

「子供はタダって聞いたんですけど」

十歳前後の子供たちの集団。その中で、おそらく一番年齢が高いであろう少年が、利発で生意気な口をきいた。

「何人いてもタダですよ。全員分、ください」

集団は、十人以上はいるだろう。もしかしたら、ブルームの町に住む、同世代の子供を全員集めてきたのかもしれない。串焼きを十数本も無料で配るなんて、赤字もいいところだ。

「いい度胸だわ」

屋台の中で、カミラは「ふん」と腕を組んだ。

カミラには、いたずらっぽい少年の顔に見覚えがある。ブルームの町に来たばかりの時、クラウスが声をかけていた『先生』の一人

だ。

「あなた、クラウドの『いたずらの先生』ね。想像通りの悪童だわ
クラウドに、来いって言われていたのかしら？」

不審な瞳を少年に向ければ、少年もまた、不遜な顔でカミラを見
つめ返す。この食えない態度がいかにもブルームの住人らしく、幼
いくせに可愛げがない。

「お客さんに対してそういう態度、お店の人としてどうなんですか。
タダって言ったのに、嘘だったんですか？」

「嘘じゃないわ。いいわよ、全員分、タダで売ってあげる。 た

だし！ 代わりに、広場で一曲聞いて行きなさい！」

カミラが声を張れば、子供たちがわっと歓声を上げた。

手を叩き合い、してやったりと喜ぶ姿が小憎らしい。

踏み荒らされた祭りの跡に、子供たちの笑い声が響く。それはも
しかしたら、カミラが最初に思い描いていた、理想の姿なのかもし
れない。

それからは、なんだか妙に慌ただしかった。

子供たちの全員分の串を焼くのに四苦八苦。そうこうするうちに、ギョンターが「見ていらねえ！」と乗り込んできて、カミラの隣で一緒に焼き出した。

「このがさつ女！ お前は どうして こう、繊細さつてものがないんだ！」

「私 が がさつ ですつて！？ 見る目がないにもほどがあるわ！」

「こんな豪快に肉をあぶつて、どこ が がさつ じゃないつて言うんだ！ ああ、ちくしょう！ 鍛え直してやる！！」

「この方が美味しそうじゃない！ もうあなたに鍛えられることなんてないわ！！」

「生意気なことは俺より腕が上がってから言いやがれ！ 屋敷に戻つたら覚えてろよ！！」

などと喚きながら子供たちの分を焼き上げると、子供たちは串を手 に、騒ぎながら広場へ向かつて行った。

代わりに少しして、今度は子供の母親が来た。

遊びに出た子供を探しにでも来たのだろう。広場で騒ぐ自分の子供を捕まえると、我が子の持つ串と香りに誘われるように、屋台の方まで寄つて来た。

「お祭りするつて本当だったんですね。なんだかちよつと、想像と違つたけれど」

言いながら、彼女は困惑した様子で大通りを見回した。荒らされたとは思えない通りの様子に、しかしこういうものなのかもしれないと、納得をしているようでもある。

「……美味しそうですね。うちの子も持っていましたけど……ええ

と」

「おとなは五枚だよ。子供はタダだけどね」

母の手を引いて、子供が胸を張って言う。母親はしばし迷ったようだけれど、好奇心に負けて一本だけ買うことを決めた。

それを焼いている間に、また別の誰かが寄ってくる。ギョウターのもくろみ通り、香りが人を呼びよせたのだらう。

寄ってきた人々は、興味深そうに屋台をのぞき込む。しばらくすると、のぞき込むうちの誰かが買っていく。不思議と客足が途絶えなかった。

「一本」

端的な言葉に、カミラはもう何度も繰り返した、一本の値段を告げる。

「旧リヒト硬貨五枚よ」

「なんだ、金をとるのか」

渋い声に顔を上げれば、店をのぞく見知った顔が目映る。性根にいささか癖のありそうな顔つきの、痩せた老人だ。白い蓬髪、ぼろをまとったような服。貧しさを表した老人に、カミラは思わず声を上げた。

「あなた、クラウスの 詩歌の先生ね」

諸悪の根源である。彼が地下の騒音に悩まされ、クラウスに解決を依頼したことが、そもその発端だったのだ。

「見覚えがある。クラウスと一緒にいたな？ 三枚しかない。まけてくれ」

「お金ないのね？ 三枚しかないって、それもあなたには安くないでしょう。タダでいいわよ」

老人が困窮していることは、見ればわかる。趣味で生きる人間は、得てして金がないものだ。娯楽の禁じられたモーション領ではなおのこと、趣味を金に換える手段がない。

「わしは物乞いではない。前金で三枚だ。残り二枚はどうにかする」
そして得てして、頑固でもある。

「面倒な人だわ！ それなら、そうね 現物でもいいわよ。
あなたの作った歌を一つ。それと交換で、好きなだけ焼いてあげる
わ」

「わしの歌か。いいだろう。もう一曲くれてやる」

老人はそう言うのと、広場に一瞥を投げかけた。

子供たちの騒ぐ広場は、今は少し沈黙している。どうやらクラウドが歌いつかれたらしい。ひいひい言いながら、その立ち位置を譲る姿が見えた。

代わりに立つのは ヴィクトルだ。彼は息を吸い、胸を張り、バイオリンを構える。

「あの騒音がどの程度になったものか」

老人はカミラから串を受け取ると、頑固な顔に少しだけ楽しげな笑みを浮かべ、広場へと向かって行った。

○

ヴィクトルは、舞台の上に行ってしまった。

ディータやフィーネ、オットーも、みんないなくなってしまった。

広場の片隅にあるテントの中にいるのは、フェアライトとミアの二人だけになってしまった。

膝を抱えたまま、フェアライトは静かに呼吸を繰り返す。

俺は行くよ。

ずっと歌い通しだったクラウドに誘われ、ヴィクトルが舞台に立つと決めたとき。顔も上げないフェアライトに、彼はそう声をかけた。

バイオリン、壊さないでいてくれてありがとう。……気持ちに応えられなくて、ごめん。でも、ありがとう。

ヴィクトルが言っても、フェアラートは顔を上げられなかった。ヴィクトルに続いて、ディータたちが出て行くときも、ずっとうづくまっていた。

フェア、俺たちも行くけどさ。

ディータは最後まで、フェアラートに声をかけた。

お前も来なくなったら来てくれよ。ほら、ニコルさんも疲れちゃうだろうし……それに、俺たちみんな、お前の歌が好きだから、誰もフェアラートを責めはしなかった。楽しみを奪ったことも、楽器を壊したことも、彼らは何も言わなかった。

慰められるだけなのに、フェアラートは誰の顔も見ることができなかった。

すぐそばで、ため息の気配がした。

顔を上げるまでもなく、ミアだとわかる。他に、テントの中に人はいないのだ。ミアがいま、自分をどんな目で見ているか、フェアラートは知りたくなかった。

遠く、ヴィクトルたちのバイオリンが聞こえる。広場の騒ぎ声も、どこか遠い。

「……………私は同情しないよ」

外から隔絶されたようなテントの中、ミアは独り言のようにぼつりと言った。

「あなたがヴィクトルを好きだって知っていたし、ずっと好きなままなのも知っていた。でも、譲ってやろうとは思わない。だって、私もヴィクトルが好きなんだ」

うつむいていても、ミアの視線を感じた。突き放すような彼女の言葉に、仲間たちがフェアラートに向けるような優しさはない。

「あなたのしたこと、最低だと思ってる。そんなことをして、ヴィクトルの心が得られるはずがないのに。傷つけるだけ傷つけて、自分だけかわいそうな態度で、ずっとうつむいて」

ぎゅ、とフェアラートは自分の体を抱いた。返す言葉はなににもな

かった。聞いているのも辛かった。

「傷ついた相手に慰められて、それでもずっといじけていて、格好悪い。本当に格好悪い。あなたに不安になってた自分が、馬鹿みたい」

吐き捨てるようにミアが言う。格好悪い。その言葉に、フェアライトはびくりとする。ずっと誇ってきた自分自身を、蔑まれているような気がするのだ。

胸を張ることを誇ってきた。格好良くあれる自分が好きだった。ヴィクトルがミアと婚約したと知ったときも、うろたえるでもなく祝福した。

嫉妬なんて醜い。追いつがるなんて情けない。噂のカミラみたいにはなりたくなかった。いつだって潔く、格好良く、憧れられる自分でいたかった。

でもそれは、本当のフェアライトではなかった。

「ヴィクトルの音楽仲間で、特別な友達で、私には絶対になれない存在だって、羨んでいた自分に呆れる。こんなに情けなかったんだ」
「……私だって、傷つくのよ」

生きている。感情がある。だから傷つくこともある。フェアライトは絞り出すように言った。

「そんなこと、わかってる。人間なんだから、当たり前でしょう」
ミアは息を吐く。フェアライトを見ている。

それが、羨望のまなざしであることに、フェアライトは気が付かない。

「だからあなたは格好良かったんだ。傷ついても、ちゃんと立って、平気な顔で澄ましていられるから、ヴィクトルもあなたに憧れ、私は嫉妬したんだ」

恋をするのも、傷つくのも、悲しむのも、恨むのも妬むのも、みんな当たり前の感情だ。それを消すことなんてできない。誰も向き合い、自分の中で解消していかなければならない。

見苦しく追いつがることも、うじうじと悩むことも、嫉妬にから

れることも、悪意に染まることもある。

フェアラートはその中で、悩みをおくびにも出さず、堂々としていることを選んだ。他人の同情を寄せ付けず、苦しみを人に漏らさずにいた。

それが、傍から　ミアから見たフェアラートの格好良さだった。「ずっと格好悪いままでいるの？」

ミアが問いかける。

フェアラートは膝を抱えたまま、唇を噛みしめた。膝の中で見開いた目から、いくつもの涙があふれだす。

泣いている自分は、格好悪い。

でも、仲間から逃げて涙を隠す自分は、もっと格好悪い。

○

子供たちを呼び水に、通りに人が集まり出すと、逃げて行った屋台の店主たちが戻り出した。

自警団の若者たちが、自分たちで壊した屋台を申し訳なさそうに組み直せば、そこに人が入り、物を売り始める。それでまた、人が集まり始める。

おかげでカミラの店も、ずっと忙しいままだった。

知らぬ間に、通리には人があふれていた。

子供たちの騒ぎ声がある。ニコルはいつの間にもやら舞台を降り、壊れた楽器たちが、キーを外した音を奏でる。

伸びやかな、強い歌声が響き渡る。誰も知らないその歌に向けて、どこからともなく拍手の音が湧く。

広場の一角で、浮かれた誰かが踊り出す。楽団に合わせて、物好きな誰かが歌いだす。楽しい声が、春を迎えたばかりの空に響く。

そのことに、ギョンターと喧嘩しながら煙にまみれて串を焼く力ミラは、気が付いていなかった。

4 - 終章

結局、我慢できなくなったギョンターに、カミラは屋台から追いつ出されてしまった。

「覚えてなさいよ！」

と捨て台詞を残し、混雑した大通りに出た後。あれよあれよと色々な人に捕まって、もみくちゃにされて。

広場の片隅へ逃れ、カミラはようやく一息つくことができた。

広場から見上げる舞台では、楽団たちが明るい音楽を奏でている。その舞台の下で、子供が跳ねるように踊っている。演奏を聴いて、野次なのか激励なのか、よくわからない声を投げかける人がある。広場の入り口近くでは、余った花を使って、小さな女の子たちが花冠を編んでいる。

そんな中で、屋台の影に隠れた広場の一角など、誰も気にかける人間はいなかった。

広場を縁取る花壇の角に、カミラは腰を掛けた。花壇には、香水の原料にもなるといって、真っ白で可憐な『憧れの花』が咲いている。顔を上げれば、大通りに沿って植えられた街路樹に、これまた白い花が咲いている。風が吹くと、あちらこちらの花が揺れ、花びらが舞った。

本当に、花だらけの町だ。

風に流れる花びらを見上げ、一つ息を吐くと、カミラは隣にいた人影に顔を向けた。カミラが来るよりも前からいたその人物は、この明るい場所にありながら、一人物思いに沈んでいるようだった。

「アロイス様もお休み中ですか？」

遠くを見つめるアロイスに、カミラはそう呼びかけた。

今日のアロイスは、いつもかつちりとした貴族服の彼にしては珍しく、庶民的な動きやすい格好をしている。それがルーカスの私兵の制服だとは、さすがのカミラも気が付かない。制服の目印であるジャケットは脱いでしまっているし、シャツも着崩しているせいだろう。

「私もあつちこつち追い出されてきたところです。みんな勝手だわ！いきなり捕まえられるし、手伝いをさせられたと思ったら、すぐに追い出されて！」

む、と口を曲げるカミラに、アロイスは無言で目を向けた。無機質なその様子に、カミラは気が付いた様子もない。

「屋台はギョウターにとられちゃうし、それなら、最初に考えていたようにお花を配ろうと思っていたんですよ。花冠を　ほら、あの子たちも載せているでしょう。でもそれも！あの花屋に取られてしまったんです！　ほら！」

カミラが指さすのは、広場の一角を陣取る花屋の女主人だ。子供を集め、花冠の作り方を教えている。もともとはカミラがしていたのに、編み方にはもっとコツがあるだとかなんとかで、場所を取られてしまった。

代わりに、花屋の編んだ立派な冠が、カミラの頭には載っている。色とりどりの冠は鮮やかで、悔しいけれどたしかにカミラよりずっと上手だった。

「そのあとは、ミアに破れた衣装の縫い直しの手伝いをさせられました。って言うても、私が縫うわけではなくてですね、着た時の形を見たいらしくて、人形がわりにずっと着せ替えられて。そのあとは、自警団につかまったり、屋台の店主につかまったり！」

謝罪を受けたり、礼がわりに売り物をもらったり。カミラの腕には、押し付けられた菓子や果実が抱えられている。一人ではこれ以上抱えきれず、ニコルを探してしばらくさまよい歩き、結局見つからずにあきらめて戻ってきたところだった。

腹を立てるように語るカミラを、アロイスはやはり黙って見てい

た。何か言いたげな口元は、開きかけてすぐに閉じる。

「それから、クラウドスの『先生』たちもたくさん会いました。いたずらの先生に詩歌の先生に、舞台の下で子供たちに踊りを教えているの、あれって踊りの先生でしょう？ 通りでも劇作家の先生にも会いましたわ！ 暇そうだったから問い詰めてみたら、やっぱり！ 人寄せにクラウドスが声をかけていたんですって！」

大通りの騒ぎが落ち着いたら、客に見せかけて祭りに来てほしいと。カミラの凄みに負け、洗いざらい吐き出した劇作家の言葉を思い出す。クラウドスははじめから、祭りを失敗に終わらせるつもりなんかなかったのだ。

自分でしでかし、自分で始末をつける。そう言えば聞こえがいいが、振り回されるほうはたまったものではない。

それでも、今日という日があるのはクラウドスのおかげであり。だからこそ余計に、カミラには気に食わなかった。

「本当に腹が立つわ！ あの抜け目のなさったら！ ヴィクトルと水をかけて回っているときは、どうしてやろうかと思ったのに

これじゃあ、文句も言いにくいわ！」

大通りを落ち着かせ、アロイスとクラウドスが戻ってくるまでの間。それはもう、いたたまれない時間だった。

フェアライトはずっと膝を抱えているし、ヴィクトルたちはしよげ返っていた。自警団たちも、守るべきものを自ら壊したことに落ち込んで、屋台の店主たちは踏み荒らされた商売道具と商品を嘆いていた。

後はただ、祭りの跡を片付けるほかになかった。きっとヴィクトルたちは、もう楽器を持たないだろう。フェアライトは罰せられ、祭りをしたいと言い出すものは、今後二度と出てこない。そう思っていた。

だけど今、ヴィクトルたちは舞台上で、壊れた楽器を奏でている。大急ぎで縫い直した衣装の上着だけを着て、広場の観客たちを前に胸を張っている。涙の跡を隠さず、フェアライトが歌っている。屋

台には人が戻り、人が集まり、みんな楽しげに騒いでいる。

不服だけれど カミラが望んだ姿がある。

ふん、とカミラは鼻で息を吐くと、つんと顎を上げた。そして、高慢そうなその態度のまま、横目でアロイスを見やる。

「でも、なかったことにはできませんからね」

文句を言いくいとは言ったが、言わないわけではない。

祭りが一度台無しになったのは事実。

フェアラートがクラウスの名に傷をつけ、多くの人々に被害を出したのも事実。彼女のせいで痛い目を見た人間がいる限り、フェアラートを無罪放免で許すわけにはいかない。のちのち、彼女には追って沙汰があるだろう。

それをカミラは同情しない。彼女が自分の意思で行った結果である限り、当然の始末だ。きちんと責任を取って、それから堂々と、仲間たちに顔向けをしてほしいと思っている。

アロイスだって同じだ。

「……カミラさん」

「はい」

静かなアロイスの呼びかけに、カミラは澄ましたまま答えた。カミラを見つめるアロイスに、いつもの穏やかな笑みはない。無機質なまでの無表情だった。

だが、その表情の影には、言葉にしがたいわだかまりが覗いている。

「アロイス様、私、今日を本当に楽しみにしていたんです」

恨み言のように言えば、アロイスは素直に頷く。

「存じております」

「アロイス様にも楽しんでいただきたかった。言いましたよね」

「はい」

「でも、必死になっていたのは私だけだったみたいですね」

終わりが良ければ、なにかも許すほどカミラは寛容ではない。どちらかといえば、カミラは恨み深いほうだ。やられたことは忘れ

ないし、納得がいかなければ長らく根に持つ。さもなければ、アロイスを痩せさせて見返してやりたい、などと考えたりはしないのだ。「アロイス様、私、怒っているんですよ」

たぶん、アロイスが思っている以上に怒っている。アロイスとクラウスは、カミラの楽しみを知っていて、ヴィクトルたちの練習の日々を知っていて、おそらくそれさえ利用したのだ。

あとあと、埋め合わせができるとわかっていても、心を踏みにじったことには変わりない。

「なにか、言うことはありませんか？」

「……………はい」

アロイスはカミラを見つめながら、囁くようにうなずいた。

大の大人のくせに、叱られた子供のような、寄る辺ない所作だった。

アロイスは少しの間、言葉を悩むように口を押えた。

「……………僕は」

視線はカミラから逸れ、地面に向かう。なにを考えているのか、横から見るカミラにはよくわからなかった。

「カミラさん。僕は、人の心に疎いんです」

「そうですね」

「人の考えていることは、なんとなくわかるんです。相手がどう思っているのか、なにを望んでいるのか」

おそらくは、人よりも敏いくらいだ。声音から、表情から、普段とは違う態度から、アロイスは人の思考を想像することができる。

喜びも悲しみも理解できる。なにを期待し、なにを期待されているのかわかっている。

「ですが、それを踏みにじることにはためらいがないんです。今回も、わかってはいました。カミラさんのことも、楽団の青年たちのことも。おそらく僕は、フェアライトの心情さえも察していました」

アロイスは膝の上で、両手を握り合わせる。すぐ近くで聞こえる

明るい騒ぎ声が、アロイスの淡々とした口調を強調させた。

「それでも、僕は犠牲にすることを選びました。その方が、このモントンのためになると思ったからです。この機会を逃すよりも、数人の犠牲を払ったほうが、より多くの益になると」

実際、アロイスの考えは正しいのだろう。カミラはアロイスが隠れて何をやっていたかを知らないが、アロイスが無益なことをする人間でないとは知っている。厳密に価値を計り、天秤にかけ、重たい方を正確に選び取る。そういう性格だと理解している。

「領地のため、より多くの領民のためになるのであれば、僕はためらいません。きつと、犠牲にするのがあなたでも、クラウスでも、僕自身だとしても、それに価値があるのであれば、死すら厭わないでしょう。僕に大切なものは、父と母の残した、この領地そのものなのですから。……きつと、そういうところを見抜いていたから、クラウスは僕を嫌っているでしょうね」

「……でも、アロイス様はクラウスのことを気に入っていたんでしょ？」

「それは彼が好い男だから、頭が良く、人に好かれる方法を知っている。この土地にとって有益な人間だからこそ、好感を持っていたんです」

あんまりだわ。

アロイスの言い草に、カミラは言葉を失くした。

有益だから、無益だから、こちらの方が役に立つから。それでは道具を選ぶのと変わりない。泣いても悲しんでも、道具が傷んだだけ。理解はしても、共感性があまりに欠けている。あまりに無味乾燥としていて、人間味がなさすぎるのではないだろうか。

「カミラさん　僕はこれまで、腹を立てたことはなかったんです」

「……ええ？」

「人を好きになるのはじめてでした」

はあ、とカミラは相槌を打つ。あんまりにも飾らない言葉すぎて、

なんだか座りが悪い。アロイスがこうして、包み隠さず好意を示すのも、感情に疎いゆえなのかもしれない。

「これまで、他人に対して強い感情を抱くことはありませんでした。誰かを傷つけることを望みはしませんでした。必要なことであれば、仕方がないと納得していました。でも」

アロイスはそこで言葉を切る。そして、地面から顔を上げ、再びカミラに顔を向けた。

「今は後悔しています」

アロイスの視線は、まっすぐカミラに向けられた。笑みのない顔には、あふれ出しそうな罪悪感がある。

「今日のこと。今までの日々すべて。僕はきつと、僕が思うよりもずっと、あなたを傷つけてきたのですね」

「アロイス様」

「やり直せるのであれば、やり直したい。あなたを哀れみ、上辺だけで同情し、そのくせ厄介に思っていました。あなたの楽しみを知りながら、僕は今日のこの場を踏みにじりました。クラウドが居なければ、僕はあなたに再び笑っていただくこともできませんでした。すべて、後悔しています」

む、とカミラは口を結ぶ。アロイスは視線をそらさない。逆に見つめられるカミラの方が、耐えられなくなってしまいそうだった。

腹立たしいわ。

カミラは唇を噛み、逃れるように一度、強く目を閉じた。それからひととき大きく息を吐き出すと、意を決してアロイスに向き直る。

「アロイス様」

「はい」

「謝っていただけますか？」

「はい。今日のこと、これまでのことも。あなたを傷つけたすべてに謝罪いたします」

「今後、領地のために犠牲にしようと思いませんか？ 私だけではなく、クラウドスや他の人も」

「……………善処します」

即答できないのは致し方ない。アロイスは領主なのだ。領地を守ることは、それはそれで立派な仕事である。

だから、悩んでくれるだけでよい。ためらうだけでよい。それがきつと、今後のアロイスの選択を変えてくれるだろう。

「わかりました！」

カミラは偉そうに頷くと、勢いよく立ち上がった。

「今日のところは勘弁して差し上げましょう！ 謝っていただいたので、この話はこれでおしまい！」

胸を張るカミラを、アロイスは座ったまま驚き半分、安堵半分に見上げていた。そのアロイスの手を、カミラはおもむろに掴む。

「あとは楽しみましょう！ 今日はそのための日なんですから！」

「ええと、カミラさん」

カミラに手を引かれ、アロイスもなし崩しに立ち上がる。妙に強引なその手に、アロイスは逆らえなかった。

「楽しいことを増やしましょう。大切なものも増やしましょう。そうしたらきっと、この土地がもっと大事になるわ」

そうしたら 犠牲にするのではなく、悲しむ人を見捨てるのではなく、その人たちさえ救いたくなるはずだ。

領地が大切なのではなく。大切なものがあるから、領地を守りたくなるはずだ。

「踊りましょう、アロイス様。せつかなんですから」

「でも、私は踊ったことは……」

「はじめての子供でも踊れるんですよ。こんの、音に合わせて跳ねるだけですもの！」

カミラの細い手を、アロイスは振り払うことができなかった。

日陰から連れ出され、明るい広場の中央に、カミラと二人で立つ。子供たちがカミラを見て、「肉女！」だのと騒ぎ立て、「黙りなさい！」とカミラが一周する。それが親しみの言葉だと、感情に疎いアロイスでもわかった。

壊れた楽器が、音を外した音楽を奏でる。上手いとは言えないが、底抜けに明るい祝婚歌だ。カミラがアロイスの手を取って、音に合わせて回り出す。

アロイスは振り回されるばかりだ。つないだ手に、カミラの足踏みに、はやし立てるような子供たちの声。通りに響く、いくつもの楽しい笑い声。

春の風が吹き、花を揺らす。風に乗って花びらが舞う中、カミラがアロイスを見て笑った。

黒い髪に、白い花の冠が映える。揺れる長い髪が美しかった。

泣きぬれていた少女の顔が、明るい笑顔に重なる。

憂いのない鮮やかな笑顔に、アロイスは戸惑った。

春の空はあまりに澄んでいて、まばゆかった。

本当にこれで良かったのだろうか。

モートン領は禁欲の土地。華やかさを遠ざけ、喜びや楽しみを戒め、ただ実直に、勤勉であることのみを認めてきた。

享樂とはすなわち墮落であり、歡喜とはすなわち裏切りであり、満ち足りるとはすなわち停滞である。

クラウドのしたことは、過去への反逆だ。モートンに祝福はない。だというのに、祝祭など。それも、『クラウドの跡継ぎ決定祝い』など、許されるはずがない。

少なくとも、これまでのレルリヒ家当主の誰ひとり、祝祭の開催をしたことはない。他の町よりも楽に流れがちな人間が多いとはいえ、それでもモートンの人間。耐え、忍び続けてきた。

これまでの積み重ねを、クラウドはあの無謀さで、簡単に崩し去ってしまった。

よりによつてクラウドが。よりによつて。

我が息子が。

「クラウドを選んだのが、間違いだったんじゃないか」

ルドルフは、息子のしでかしたことの大きさに震えていた。

レルリヒ家の祖が受け継いできた伝統を、まさか自分の生きていくときに崩されるとは思わなかった。このまま何事もなく、次代に後を引き継がせるものだと思っていた。

なのに、よりによつて自分の代で。自分自身が祭りの許可を出す羽目になるなど。

「あれは賢い子だが、甘やかしすぎたんだ。わがまま勝手で、怖い

もの知らず過ぎる」

そわそわと落ち着かず、ルドルフは瞬きを繰り返した。

こんなことをして、他の町の連中はなんと言うだろう。ブランド家のように、レルリヒを陥れるだろうか。ルドルフを追放し、爵位を取り上げ、モートンで影のように生きていくことを強いられるのだろうか。

マイヤーハイム家も、エンデ家も、モートンが変わることを許さない。ルドルフを罪人と指さし、嗤うだろうか。

「やっぱり、フランツにしておいた方がよかったんじゃないか。ああ、でも、そうしたら兄さんが」

ルドルフと、兄のルーカスの仲は、すこぶる悪い。ルーカスは弟を憎み、ルドルフは兄に怯えている。原因は単純で、本来ならば長男であるルーカスが継ぐはずだった家督を、ルドルフが奪ったためだ。

気の弱いルドルフが、なぜ家督などを求めてしまったのか。昔から気性が荒く、ルドルフを虐げていた兄の鼻を明かしたかったからかもしれない。ただ単に、当主という地位が欲しかっただけかもしれない。

あるいは。

「姉さん」

ルドルフは、信頼を込めて彼女を呼んだ。

「姉さん、僕はどうすればよかった？　いつもみたいに、教えてほしいんだ」

「あなたは間違っていないわ、ルドルフ。大丈夫よ」

日の暮れかけたルドルフの私室。暖炉を前に、隣同士で座るゲルダが、ルドルフの手を取った。

「フランツを当主にすれば、愚兄ルーカスの口出しは免れない。フランツはあの男にそそのかされ、きっとあなたを、この家を追い出してしまっていたわ」

彼女の手は、老いてなおも澁刺とした力が宿っている。彼女の迷

いない言葉は、優柔不断なルドルフへ道筋を示す。

「大丈夫」

彼女の目は、いつだってルドルフをまっすぐに見つめてくれている。幼いころから変わらない。彼女は兄ではなくルドルフを選び、この当主の座まで導いてくれた。

「これまで、私の言うことに間違ったことがあつて？」

ゲルダの視線に、ルドルフは頷いた。彼女の言葉に励まされる。安心する。彼女はずっと、ルドルフの味方だ。

兄に向けるような侮蔑の視線を、彼女はルドルフには向けない。モンテナハト卿に向けるような冷徹さもない。

クラウスや、他の人間たちに向ける無機質さもない。

自分だけに、親身な目を向けてくれるのだ。ルドルフはそう信じていた。

「……姉さん、そうだね。姉さんが言うんだ。これで間違つてなかったんだ」

縋るようにゲルダの手を握り返すと、ルドルフは囁くように言った。

大丈夫。姉さんがいるんだ。

恐れることはない。心配はない。自分たちが失脚することなんてない。

姉さんが言うのだから、間違いない。これまでずっと、そうだったのだから。

4・5・2（終）

とんでもないものを見てしまったわ。

明日はブルーメの長い滞在を終え、領都へと帰る日。ヴィクトルたちへの挨拶もすませ、帰り支度も終え、あとは明日を待つばかりというとき。なんとなく落ち着かないから、バルコニーで風にでもあたろうかと部屋を抜け出した矢先。

レルリヒ家の廊下に出たところで、カミラは信じがたいものを見た。

視線の先には、同階にあるレルリヒ家当主ルドルフの部屋。その部屋の前に立ち、言葉を交わすルドルフとゲルダの姿がある。

ゲルダも明日は、カミラたちと共にモンテナハト邸へ帰る身だ。どうやら姉弟で、別れのあいさつでも交わしているところらしい。

これだけなら、特段驚くには値しない。ゲルダとルドルフが義務的に言葉を交わすだけならば、カミラもこれまで何度も見てきた。

だが、ルドルフに向けたゲルダの表情に笑みが浮かび、まなざしに優しさが滲んでいるのであれば話は別だ。

ゲルダはルドルフと、しばらくの間談笑していた。

少し距離があるせいか、二人はカミラに気がついてはいないらしい。カミラからも、二人の会話はよく聞こえない。

だが、そのぶん穏やかな二人の横顔が際立って見えた。

無感情と無機質を併せ持ったような鉄の女が、今は見る影もない。ルドルフが何か言えば、ゲルダは苦笑し、優しい瞳でなにごとか答える。その姿は姉というよりも、いつそ母のようだった。

身内には優しいんだわ。

ごくごく当たり前の感想のようできて、ゲルダに限っては天地がひっくり返るような衝撃だった。

ブルーメにいる間、彼女が身内に優しくしている姿を、カミラは一度としてみたことがなかった。クラウスに対してもフ란ツに対しても、使用人への態度と接し方は変わらない。ルドルフとも必要最低限の言葉しか交わさず、唯一感情らしい感情を見せたのが、彼女の兄であるルーカスに向けた嫌悪くらいだった。

けどもちろん、あのゲルダにも弟に対する愛情があり、優しさを持って接し、笑うこともあるのだ。普段は冷たくふるまっているのも、もしかしたらただの対外的な姿勢ポーズに過ぎないのかもしれない人として当然のことだ。どんなに冷たい態度でいても、感情がないなんてありえない。わかつてはいる。わかつてはいるのだが。

「びっくりしたでしょ」

びっくりした。唐突に背後からかけられたその声にびっくりしてカミラは危うく悲鳴を上げるところだった。

すんでのところで悲鳴を飲み込むと、カミラは慌てて声に目を向けた。相手が誰であるかは、もちろんわかつていた。

「クラウス！ 驚かせないでちょうだい！」

声量控えめに怒れば、背後にいたクラウスが肩をすくめた。

相変わらずの整った顔に、フ란ツの残した殴打の跡が生々しいが、本人は気にした様子もなく、いつもの通りの軽薄さでカミラに笑いかけた。

「まあまあ。伯母さんのことが気になってたんでしょ？ 普段のあの人は、血も涙もなさそうだもんなあ」

カミラは肯定も否定もせず、「む」とだけ唸った。カミラの天敵たるゲルダとは言え、クラウスにとっては伯母。さすがに、目の前で身内をけなすことに気が引けたのだ。

しかし、当のクラウスは勝手なものだ。カミラの反応を意に介さず、愚痴でも言うようにうんざりと語る。

「だからこそかえって、優しくされたときにぐつとくるのかもね。ま、人心掌握はレルリヒ家の得意分野だし。おかげで親父は、すっかり伯母さんの言いなり」

人の心を知り、人の心を動かす。大衆の扇動にレルリヒは昔から長けていた。とはいえ、その得意技を身内同士で使うというのは、あんまりな皮肉だろう。

「本当、あの人は怖い人だよ」

自嘲気味に口を曲げ、クラウスはゲルダたちに視線を向けた。妄信的なルドルフの姿に顔をしかめると、クラウスはカミラにも聞こえない小声でつぶやいた。

「モンテナハト家を狙っているのは、あの人の方じゃないかと睨んでただけだなあ。でも、それなら伯父さんと対立する必要はないし、考え過ぎだったかな……」

口元に手を当て、渋い顔でつぶやくクラウスを、カミラはそれ以上には渋い顔で見やった。

突然出てきて声をかけてきたくせに、一人小難しい顔で悩みこまれている、カミラも居場所がないというもの。ルドルフとゲルダも去っていった今、居心地が悪いのはカミラだけだ。

思考に沈むクラウスに、カミラは低く声をかけた。

「あなた、なにしに來たのよ」

不機嫌なカミラの声に、クラウスは苦笑した。色男らしからぬ失態だと気が付いたのだろう。彼にしては珍しく、少し照れたように頭を掻いた。

「ああ。あんたに会いに來たんだ。別れの挨拶をしようと思って」

「……………別れの？」

「明日、帰るんだろう？」

カミラは頷いた。

明日の朝一番に出立し、馬車で二日かけて領都へと戻る。頻繁に

来ることのできる距離でもないため、ブルームとはしばらくの別れとなるだろう。

「あなたは帰らないの？」

「俺の町はここだからな。跡継ぎになった以上、そうそう離れるわけにはいかないよ」

クラウドは明るく言った。カミラは少し瞬き、それから「ああ」と呟いた。考えてみれば、当たり前のことだ。クラウドはもとより、領都にいたべき人間ではなかった。

「……寂しくなるわね」

「そう言ってくれると嬉しいね。ま、そもそも、あつちで料理人をやった方がおかしかったんだからな。あいつが余計なことをしなけりゃ、王都で一旗揚げたものを」

冗談めかした口ぶりだが、クラウドはきつと、アロイスがなぜ領都に引き留めたのかを理解しているのだろう。

クラウドが生きている限り、いずれは命を狙われていた。アロイスが領都の自分の屋敷に置いたのは、彼を守るためだ。モンテナハト家の膝元であれば、ルーカスとて簡単に手出しはできない。料理人なんて傍に置くための題目であり、サボろうがなにしようが構わなかったのだ。

「素直じゃないわ。その割には意外と、料理人していたみたいじゃない」

料理人なんてただの名義だけで、実際には彼は、厨房に入る必要すらなかったはずだ。だが、意外にも彼は、サボリ魔とはいえきちんと料理人をこなしていた。案外、領都での暮らしも悪いとは思っていないかったのかもしれない。

「まあ、俺もモーントンの男だから、料理は嫌いじゃなかったし」カミラの指摘に、クラウドはばつが悪そうに言った。

「……それに、あいつの食べるものがちよつと怖くてな」
「怖い？」

「なんでもない。さすがにただの考え過ぎだよ。レルリヒの悪い癖

だな」

カミラの問いに、クラウドは頭を振った。それから、切り替えるように口を曲げ、カミラに向けてにやりと笑う。

「あとは、料理人は得することもあってね。モーションって料理くらしいしか娯楽がないからさ。女の子を口説きやすいんだ　　こんな風に」

そう言うと、クラウドはどこからともなく白い小箱を取り出した。手のひらくらいの四角い箱を、彼はそのままカミラに向けて差し出す。

「……なに？」

「あげるよ。開けてみて」

カミラは少し戸惑い、しかし意を決してクラウドから小箱を受け取った。装飾の施された箱は、小さな宝石箱にも似ていた。だけどひどく軽い。中を開けてみて、その理由が分かった。

箱の中には、白い花が詰まっていた。白い花の、砂糖漬けだ。細い花びらまで欠けることなく、形を保ったままきれいに漬けられている。花の香りなのか、砂糖の香りなのか。ほのかな甘い香りに、カミラは覚えがあった。

「きれいな、すごいわ……！　これ、ゼーンズフトの花よね！」

冬は温室にだけ咲き、今は町中に咲いている白い花。幾重にも重なる花びらは、砂糖漬けには向かないだろうに、よくもこんなに鮮やかに漬けられたものである。思わずカミラも、素直に称賛を送ってしまう。

「あなたって本当、腕がいいのね。あんまり繊細で、きれいで、食べるのももったいなくなるわ。本当にもらっていいの？」

「ああ。あんたにもらってほしいんだ」

喜ぶカミラに、クラウドは目を細める。

「憧れの砂糖漬け。」

ゼーンズフト　　あんたも、俺にとっての憧れだったよ」

でも、まあ、さすがに　　友が本気で惚れた女を奪うほど、性格は悪くない。だから憧れは憧れのまま。永遠に砂糖の中だ。

内心の言葉はおくびにも出さず、クラウドはカミラに向けて笑いかけた。

「アロイスを頼むよ。落ち着いたら、またちょっかい出しに行くからな」

「減らず口だわ」

片目を閉じ、不敵に笑う色男に、カミラは顔をしかめた。軽薄で軽率。自信過剰で、最初に会った時から、カミラはこの男が気に食わなかった。

「だけど、クラウドは間違いなく好い男だ。」

「天才なら、すぐに落ち着かせなさい。待っていてあげるわ!」

偉そうに胸を張るカミラに、クラウドは噴き出した。なんて失礼な男だろうか。

憤慨するカミラをよそに、クラウドは腹を抱えて笑い、笑いながら尻をぬぐった。

シュトルム伯爵家令嬢、カミラ・シュトルムは破滅を呼ぶ女である。

モンテナハト卿の心を惑わし、アインストを陥落させたのみならず、ついにブルームまでも毒手を伸ばした。

かの悪女はブルームの人々に甘言を吹き込み、暴動を起こし、禁忌に染めさせた。禁欲と敬虔のモントンの伝統は、悪女カミラの前に破り捨てられたのだ。

正しかった人々は古い誓いを忘れ、その場限りの楽しみに溺れた。そしてそれを、悪とすら思わないほど狂わされた。

人々は安易な道に堕ちやすいもの。カミラの示すはりばての享樂に、モントンの人々は心惹かれ始めている。

もはや捨て置けはしない。

やはり、最初からあの女のたわ言など聞かなければ良かったのだ。

○

食堂と厨房をつなぐ配膳所。半地下に位置する物置じみたその空間には、食器棚が隙間なく並ぶ。見るからに高価な食器や無数のグラスは、見るものを圧倒する。慣れない年若いメイドにとってはなおさらだ。

真白く精錬された塩や砂糖が、ただの砂袋のようにまとめられ、部屋の片隅に置かれている。珍しい香辛料、辛子にジャムに蜂蜜の瓶。厨房から出された料理は、ここで味付けを追加され、屋敷の主人であるアロイスに供されるのだという。

アロイスへ食事を供するのは、もつと上の身分の者たちの仕事だ。配膳所をおずおずと眺める、新米メイドの少女の仕事は、メイド頭から言いつけられたとおりの皿を探し出すことだった。

目当ては青みがかった無地の深皿。大きく丈夫だが、高貴な人の食卓に上がるには、いささか貧相と言えよう。しかしこのたび、良いい絵付け師が見つかったということで、皿のいくつかに装飾を施してもらったことになった。

少女が探している皿も、その絵付けをされるうちの一つだった。

割つては大変と、少女は恐る恐る探し回り、どうにかしてその皿を見つけ出した。

長らく使われずにいたせいだろう。皿は食器棚の上段。彼女が手を伸ばしても届かない場所に鎮座していた。

背伸びをしても、指先がどうにか触れる程度。踏み台らしいものも見つからない。

どうしようかと途方に暮れていた時、少女の背後から誰かが手を伸ばした。

少女が必死に掴もうとした皿をやすやすと手に取ると、その誰かは少女に向けて声をかけた。

「どうぞ」

言いながら、誰かは少女に皿を差し出す。少女は皿を受け取ると、慌てて頭を下げた。

「あ……ありがとうございます」

「たいしたことじゃないわ」

ふ、と笑うように声に、少女は顔を上げた。

親切な人を目に映し、少女は一瞬、呼吸を忘れた。危うく、受け取ったばかりの皿を取り落とすところだった。

「カミラ様!？」

目の前にいるのは、モーントン領では珍しい黒髪の女。細く背が高く、目つきのきついその姿は、間違えるはずもない。誰もが知る

恋物語の悪役にして、屋敷の主人であるアロイスの花嫁候補。未来の女主人たる、カミラ・シュトルムである。

「せっかく取ってあげたんだから、落とさないでちょうだい」
つんとした声でそう言うと、カミラは少女を睨みつけた。少女がこくこくと頷けば、それで気が済んだらしい。少女から顔を背け、一人厨房に入っけいってしまった。

やっぱり、噂どおりだ……。

少女は一人、渡された皿を抱きしめたまま、消えていったカミラの背中を呆然と眺めていた。

声音は鋭く、突き放すようだし、顔つきも不機嫌そうで、威圧感がある。高慢そうで、意地悪そうで、気の弱い人間には近寄りがたい。どうしてもしり込みしてしまう怖さがある。

王都では王子の恋人リーゼロッテを苛め抜き、王子に取り入ろうとした卑劣な悪女。モーントン領へ来ると聞いたときは、誰もが恐れ、忌み嫌ったものだった。

モンテナハト邸でも同じ。カミラがなにかするたびに、すぐさま使用人たちの間に噂が広まった。

そしてここ数か月、彼女には新たな噂がある。

噂どおり、噂ほど恐ろしい人じゃないんだ。

○

不慣れなメイドの少女を後にして、厨房へなにをするかと言えば決まっている。

「私に菓子作りを教えなさい」

「人に物を頼む態度じゃねえな」

不遜な力ミラに、ギョンターは苦々しさをあらわにした。夕食の仕込みをする手は止めないまま、カミラに険しい顔を向ける。

しかし、カミラの態度は変わらない。腰に手を当て胸を張り、自信より背の高いギョントーを見下ろすように見上げている。

「頭を下げて胸を張っても、やってもらうことは変わらないもの。それに、もしも教えてもらえないのなら、頭だって下げ損じゃない」「その性格どうにかならねえのかよ。だいたい、お前菓子は作らないって、前に言ったじゃねえか」

「前は前だわ。今は気分が変わったのよ」

やはり料理をする身として、菓子の一つも作れないのは肩身が狭い。それに冷静に考えてみれば、わざと下手な味のまま誰かに食べさせようだなんて、料理人の風上にも置けない行為だ。どうせなら腕を上げて、食べた相手を驚かせてみせたいではないか。

とまあ、そういう理屈なのである。

「……菓子作りなら、クラウスの方が向いているだろう」

「あいつに教わるのは癪だわ！」

ギョントーの言葉に、カミラは断固首を振る。

「それに、あれはちょっと上手すぎるわ。あんまり実力に差があると、教わるのも難しいでしょう。あなたくらいがちょうどいいのよ」「ああ？」

聞き捨てならない言葉に、ギョントーの手が止まる。野菜を切っていたナイフを握りしめ、凄むようにカミラを見た。完全に喧嘩の構えである。

「お前、俺が料理長だつてことを忘れてるな？ 菓子はクラウスに任せていたが、料理長が作れないと思うなよ。吠え面かかせてやる！」

「あなたこそ、私の身分を忘れてるわ！ 偉そうに、そんな武骨な手で、どんな菓子が作れるっていうの！」

「ほざいてろ！ 目に物を見せてやる！ 来い！ 一から十まででめえの見本だ！」

ギョントーはカミラを手招くと、夕食の仕込みもそこそこに、菓子作りの道具を取り出した。

荒っぽい菓子の修行になりそうだが、もちろんカミラは受けて立つ。

アロイスに、不味いものを食べさせるわけにはいかないのだから。

妙に遅い時間に、急遽豪勢な茶会が開かれることになったのは、つまりそういうわけである。

日も暮れかけ、もうじき夕食となる時間。夕日の差し込む中庭で、カミラはアロイスと白い丸テーブルを囲んでいた。

テーブルの上には、ギンターがむきになって作った山のような菓子がある。生クリームで真っ白に飾られたケーキ。キイチゴの鮮やかな赤いタルト。一口サイズのチェリーパイに、石畳に似た正確無比なビスケット。

クラウスのような芸術的で気まぐれな菓子と違い、ギンターの作るものは、まるで歯車みたいに狂いが無い。均整の取れた菓子は見た目通り、味に一点の狂いもなく、まさに職人の技だった。

が、もちろんアロイスに差し出される前に、砂糖漬けに処されている。 unnecessary 甘いクリームを足され、シロップや蜂蜜、甘すぎるジャムを乗せられれば、もう元の味もわからない。

伝説だからって、あんまりだわ。

厨房でギンターが作ったものを見ていただけに、テーブルに並べられた菓子たちの惨状は胸が痛む。

「どうされましたか？」

渋い顔のカミラを見やり、アロイスは首を傾げた。どうやら少し疲れているらしく、表情には覇気がない。さすがのアロイスも、ブルーメ滞在で溜め切った仕事を片付けるのは骨が折れるのか。執務室にこもりきりの日も珍しくない。

「……なんでもありませんわ」

そう言って首を振れば、彼は「そうですか」と答え、カミラでは飲み込めないほど甘い菓子を口にする。

「こんなに食べるのは久々ですよ」

律儀に食べながら、アロイスは困ったように笑った。

たしかに、ここしばらくアロイスの食事は一般男性程度にまで落ち着いていた。茶会の代わりに散歩を始めたこともあって、軽食を取ることも減った。

ブルームから戻ってきて以降、アロイスは運動がわりに乗馬も始めたと聞いている。「今さら武術などは、少し気が重いですから」と言つて、実用的な馬術を選んだのはアロイスらしい選択だ。仕事に忙しいにもかかわらず、時間を見繕つては馬に触れているらしい。疲れているのは、そのあたりもあるのだろう。

もともと馬車は操れたわけだし、馬の扱いは知っている。問題は、アロイスを乗せられるだけの馬力のある馬が居なかっただけ。それももう解消された。

なかなか……似合っているとは思つわ。

甘い菓子に手を付ける気になれず、紅茶だけを口にしながら、カミラはアロイスを見やった。

馬に乗って颯爽と駆けるアロイスは　　たぶん、そんなに悪くないと思う。

カミラがモントン領に来たのは、夏の終わりごろ。もう、十か月以上も前のことだ。

今は春のさかり。アロイスの二十四の誕生日も近い。アロイスが誕生日を迎えれば、次はカミラが十九になる。

もうじき、モントン領へ来てから一年。この間に、アロイスはすっかり厚い肉を削ぎ落した。

食事も減り、運動も自発的にはじめた。アインストで買った軟膏で、肌の荒れも収まりはじめた。

それでも、アロイスは痩せ切らず、肌は治りきらない。肉に埋も

れた本当の顔を、残った肉と肌荒れが今も隠そうとする。目鼻立ちが整っていることはわかるのに、肌の痛ましさに目がいつて、どうしても美男子と認められないのが現状だ。

あとちよつとなのに。

その一手が届かず、カミラはどうにももどかしい。

アロイスを利用して、王都を見返す目的のなくなった今、彼を美男子にする理由はない。しかしここまで来た以上、責任をもって色男に仕上げたいのが人情。本人もやる気であるのに、カミラだけが投げ出すわけにはいかないのだ。

美男子になった後　アロイスと結婚するにしても、しないにしても。

……別問題だわ。

内心でかぶりを振ると、カミラは食事を続けるアロイスを見やっ

た。

食べ方は品が良く、味についての文句を一切口にしない。甘すぎるクリームは避けて、シロップはこぼさず、慣れたように口に運ぶ。朝、昼、晩。ずっとアロイスはこんな調子だ。濃すぎる味付けの料理を、出された分だけ平らげる。味がわかるくせに、味がわからないかのように、美味しそうに食べるのだ。

この食事は、モンテナハト家の長い伝統。先祖代々からの積み重ね。いきなり来たカミラがないがしろにしてよいものではない。

わかつている。わかつているわ……。

塩や砂糖が富の証。権威のための豊かな食事も、なるほど理屈は理解できる。

でも、変わるべきものは変わるべきだわ！

どう考えても体に悪い。時代遅れの伝統は、見直されるべきなのだ。

それに、アロイスの痩せ切らない原因も、ここにあると思えなかった。

「食事を変えましょう!」

カミラはおもむろにテーブルを叩くと、声を張り上げた。アロイスが驚き、顔を上げる。

「急に、いかがされました?」

「急ではなく、ずっと思っていたんです。伝統とはいえ、アロイス様のお食事、あんまり味付けが濃すぎます! ご自覚されていますでしょう!」

アロイスは否定も肯定もせず、無言で瞬いた。

「こんな甘ったるいものばかりでは、いくら食事を減らしたって痩せられませんわ! 胸焼けだつてしますでしょう。アロイス様だって、無理に食べられているではありません?」

「カミラさん、いえ」

「きちんと、美味しいものを食べたいじゃないですか。せつかく、良い舌をお持ちで

「カミラさん」

静かな声が、カミラの言葉を遮った。声を荒げたわけでもないのに、妙に力のある音に、思わずカミラは口を閉ざす。

目の前には、咎めるようなアロイスの顔があつた。いつも温和な彼にしては珍しく、少し険しい。思わずカミラは、前のめりの体を引いて、椅子に座りなおした。

「……すみません、熱くなつてしまいました」

「いいえ。……カミラさんのおっしゃる通りです。この味が、体に悪いだろうとも自覚はしていますので」

アロイスは息を吐くと、そうは言いつつまた一口、いかにも美味しそくにケーキを食べる。

「伝統……伝統ですか。そろそろ、向き合わなければいけないのかもしれません」

「アロイス様?」

一人ごちるアロイスに、カミラは眉根を寄せた。アロイスは顔をカミラに向け、安心させるように穏やかに笑う。それから、不意に

顔を空に向けた。

斜めの日差しが消えかけ、空は藍色が滲みはじめている。風が、中庭の木々を揺らし、雲を流した。神を撫でる夜の風は、春でもまだ冷たい。

「風が出てきましたね。冷えますでしょう。そろそろ戻りましょうか」

「……………はい」

素直にうなずきはしたものの、どうにも不信感がぬぐえない。味がわかるはずなのに、体に悪いと自覚もしているくせに。どうして無理にさえざるように、会話を切り上げたのだろう。

なにか隠しているわ。

カミラの胡乱な目つきにも、アロイスはいつもの笑みを崩さない。カミラに歩み寄っているようでいて、この男の秘密主義は相変わらず。踏み込むことを拒むように、感情のない表情を浮かべるのだ。

相談の一つも、してくれなかったいいのに。

疲れも秘密も押し隠したアロイスの顔を、カミラは不機嫌に見やっただ。

好きだと言って、婚約を申し出ておきながら、彼はカミラを寄せ付けない。アインストでもブルームでも、大切なことはいつもカミラには告げないまま。すべてが明らかになってから語り出す。悪意でもって隠しているわけではないと知っているが、カミラにとってはそういう問題ではないのだ。

なにもかもさらけ出せというわけではないけれど。言いたくないことがあるのもわかるけれど。

アロイスの態度が、カミラにはひどく不満だった。

ブルームの一件は、アロイスの明確な不始末だった。

暴動を誘導し、けが人を多数出したのは事実。アロイスが噛んでいたのも事実。結果として、ルーカスの罪を暴くことになったが、それはあくまで結果論。アロイスのしでかしたことの正当性にはならない。

ブルームで祝祭を開いたことも、アロイスの責任問題だった。モントンの伝統を、領主であるアロイス自身が先導して破ったことの責任は大きい。そうでなくともアロイスは、グレンツェで一度やらかしているのだ。グレンツェを開拓し、発展させ、他国との交易を盛んにした結果、かの土地はモントンにふさわしくない、奔放な土地となり果てた。

加えて、昨年はアインストの災害があった。アインストの甚大な被害は、モントンの収支に大きな痛手を与えた。

これもまた、アロイスの責任である。もっと迅速に対応できていれば、被害は軽減できただろう。復興にかかる支出も大きすぎで、もっと安価に、もっと速やかに町の機能を回復させることができたはずだ。

というのが、モントン領を統べる三つの貴族たちの言い分だった。

もちろん、詭弁である。

○

マイヤーハイム家を筆頭とした、モントン領の貴族の長達との会合は、領都に戻って早々に行われた。

レルリヒ家は事情が事情だけに欠席し、参加したのはマイヤーハイム家とエンデ家のみだった。慇懃無礼に責められるのも慣れたものだが、心情的に参ってしまうのはどうしようもない。

ブルームの件はレルリヒ家も一枚噛んでいるのだが、欠席と言う名の逃亡により、自然と矛先がアロイスの身に向かうことになってしまった。

いや、搦め手の得意なレルリヒ家がいなかったことは、むしろ幸運だっただろう。言葉を返すのに、さほど気を遣わなくて済んだのだから。

その、気の重い会合が終わってからおよそひと月。

貴族たちはいまだに納得をせず、手紙や使いの者を寄越し、アロイスを責め立てる。これもすっかり慣れたもの。アロイスが領主の座についてからずっと、彼らはアロイスの粗を探し続けているのだ。

先代様の時代には、こんなことは起こらなかった。

それが、彼らの口癖だった。

アロイスの父である先代モンテナハト卿が亡くなったのは八年前。だというのに、彼らは今も先代を持ちだして、ことあるごとにアロイスと比較した。

先代様が、亡くなられていなければ。

貴族たちに慕われた偉大なる先代は、死んでなおもアロイスを追い詰める。

父上。

重たい思考に、アロイスは思わず執務の手を止めた。頭に手を当てると深く息を吐き出す。

夕方ごろの茶会では、カミラにも気を遣わせてしまった。だが、これはカミラの知らなくてよい苦労だ。

いや、むしろ知らないほうがいいだろう。

アロイスを責める老人たちの言葉の中に、近頃はカミラへの言及が含まれるようになった。

モントン領へ来た時から評判の悪かったカミラだ。そのうえ、アインストにもブルーメにも彼女の存在がある。もしや彼女が場を乱しているのではないか。騒動を引き起こしているのではないかと、老人たちは疑いを向けている。

『例のご婦人が、貴方様へ良くない影響を与えているのではないですか？』

老獪な眼差しは、思い出すだけで憂鬱になる。無礼であると言で断じられれば気が楽だろうに、そうするだけの力はアロイスにはない。この土地における貴族たちの影響力は強く、アロイスと手無下にすることはできない。

そも、手練れの老貴族たちに対して、アロイスはまだ若造すぎるのだ。グレンツェ以降、決定的な失態を犯さず、些事のみをつつかせていただけでも、上出来だったと言えよう。

アロイスはそれなりに経験を積み、それなりに身をかわす術を身に着けている。

だが、カミラはどうだろう。

カミラがもしもアロイスの申し出を受け入れれば、いずれは同じように責められることになる。あまり気の長くない彼女のことだ。おそらくは、正面から受け止め、ぶつかることになるはずだ。

彼女の短気は、アロイスにとっては今でこそ小気味がいいが、そう受け取るのは少数派だ。まず間違いなく老人たちの機嫌を損ね、彼らの統べる町との関係を悪くする。その結果として、今回のルークスのような人間がまた現れるかもしれない。そうでなくとも、領民の不満はたまる。アロイスの領主としての能力は疑われ、『良き領主』ではいられなくなるだろう。

さもないければ、アロイスはカミラに我慢を強いることになる。それもカミラにとっては不幸なことだ。

彼女にとって、この土地に残ることは幸福なのか？

額を押えたまま、アロイスは自問した。

答えは出ない。それでも、他に行く当てのない彼女であれば、苦
労を吞んでもらおうと思えたかもしれないが。

今はそれさえも言えない。

アロイスは執務机の引き出しから、一枚の封書を取り出した。簡
素なその手紙の封を押すのは、見まごうはずもない。王家の印だっ
た。

封の中にあるのは、ひと月後に執り行われるユリアン王子とリー
ゼロッテ嬢の結婚式への招待状。それから、もののついでのように
付け加えられた簡素な言葉だ。

『カミラ・シュトルムへも恩赦として、王都の追放を取り消し、参
列を許可する。』

手紙は二日前に届いた。

アロイスはまだ、カミラへこの事実を告げることができていない。

○

執務室の戸を叩く音で、アロイスは我に返った。

誰かと問えば、メイド頭が名を告げる。

「お夜食をお持ちしました」

そう言っ、メイド頭は部屋の中に、料理の乗った台車を運び入
れた。カミラがこの土地へ来る前には、よく見た光景だ。が、ここ
数か月の間に途絶えていたはずだ。

「頼んだ覚えはない」

アロイスは首を振り、メイド頭に下がるように告げる。だが、彼
女は下がらない。怖じる様子もなく台車をアロイスの前まで運び、

執務机の上に、大きな深い皿を置いた。

アロイスは眉をしかめる。

「不要だ」

「いいえ。これはアロイス様に必要なもの。食の細いアロイス様のため、旦那様が必要と定めた食事です」

メイド頭にとっての『旦那様』は、先代モンテナハト卿　アロイスの父を指し示す。彼女は先代からモンテナハト家に仕えていた、古い使用人の一人だ。

「目覚めに一皿、朝に二皿、昼前に一皿、昼に二皿、間食にまた一皿。夜は三皿、夜食の一皿。旦那様は、厳密に定められました。ならば私は忠実に、アロイス様に供さねばなりません」

一日に七食。今から思えば信じられない量を、アロイスの父は定めた。まぎれもない事実だ。使用人たちは忠実にそれを守り、アロイスもまた、与えられるがままに食べていた。

だが、それも昔のことだ。

「なぜ、今さら」

アロイスはそう言いながら皿に目を向け、そのまま言葉を飲み込んだ。

脂ぎった夜食の乗る大皿は、うつすらと青く、ひどく装飾的だった。皿の色より濃い青と、金の模様が幾何学的に描かれる。麗しいその皿に、アロイスは嫌になるほど見覚えがあった。

「旦那様の言いつけをお忘れであると。マイヤーハイム家のご当主様より申し付けりましたゆえ」

にこりとみせず、生真面目に語るメイド頭の髪の色は、マイヤーハイム家の特徴を映した栗毛色だった。

「……この皿は」

アロイスにはしかし、彼女の声は聞こえていない。皿に目を奪われたまま、離すことができなかった。

「どこで手に入れた。この皿は」

忘れもしない。アロイスが隠した、誰の立ち入りも禁じた部屋の

中にあつたはず。

三枚あつたうちの、一枚は割れた。二枚はまだ、誰の目にも触れさせていない。記憶と共に奥底に消えたはずの。

僕の。

「父上の皿だ」

「どうか、旦那様の言いつけを、お守りくださいますように」

メイド頭はそう言うと、スカートの裾をつまみ、一礼して部屋を出て行った。

部屋にあるのは、皿の上の胸の焼けるような料理と、アロイスだけだ。

父上。

誰もアロイスを見てはいない。誰もアロイスを咎めない。だといふのに、アロイスの手は皿に伸びる。

食べなければ。

どんな味でも、どんな量でも、食べざることには許されない。良き領主として、良き息子として。教え込まれた記憶は、半ば喪失し、途切れ途切れになった今でも、アロイスをさいなめる。

死してなお変わることなく。

死したからこそ、より強く。

まるで亡霊のように。

クラウスからもらった小箱がない。

茶会の翌日。カミラは自分の部屋に置いておいたはずの白い小箱がないことに気が付いた。

もらいものだからそれなりに大事に、しかし一応は男からの贈り物ということで、若干後ろ暗さもあり、棚の雑多なものの中に紛れ込ませていたはずだった。

「カミラ様、どういたしました？」

白塗りの飾り棚を見つめるカミラに、水を換えに来たニコルが問いかけた。彼女はベッドの横の水差しを取り換えると、首をかしげてカミラを見やる。

「ニコル、ここにあった白い箱、知らない？ このくらいの」

カミラはニコルに振り返ると、親指と人差し指で、小さな長方形を示した。花やら人形やら手紙やらの中に、さりげなく置かれたそれを、ニコルも見ることがあるはずだ。

だが、ニコルは心当たりがないというように首を振った。

「そういえば、なくなっていますね。ちよつと前に掃除をしに来たときは、置いてあった覚えがあるんですが」

「そう。……どこかに置き忘れたのかしらね」

いつもは部屋に置いている箱だが、まれに厨房に持って行くこともあった。砂糖漬けの参考にしようと思ったのだ。実際には、あまりに精巧すぎて、カミラの実力では到底参考にもならなかったのだが。

「まあいいわ。厨房に行こうと思っていたところだもの。ついでに少し探してみるわ」

これからしばらく、カミラはギュンターの菓子弟子である。ク

ラウスに対抗心を燃やしてか、カミラの態度に腹を立ててか、ギュンターは妙にやる気だった。しかしカミラとしても望むところ。暴走気味の二人は、時折こうして妙に波長が合うことがあった。

美味しい菓子が作れるようになれば、アロイスにも食べさせてやる。カミラは自分の料理を汚すことを許さない。シロップやら蜂蜜やらにひたされてたまるものか。

そうして、カミラが作るものを食べれば、アロイスもあの食生活から抜け出せるのではないだろうか。最初はまず、様子見に菓子。それから徐々に、日々の食事を変えていく。これがカミラの緻密にして周到、そしてあまりに迂遠な計画なのであった。

○

「なんのことかわかりかねます」

聞きなれた、聞きたくない声を耳にして、カミラは思わず足を止めた。

厨房へ向かう道すがら。モンテナハト邸の廊下の先で、誰かが話し合っている。柱の影に隠れ、そっと覗き見てみれば、向かい合うゲルダとアロイスの姿がある。

二人が話し合う姿は、さほど珍しくない。ゲルダは屋敷のほぼすべてを取り仕切る上級使用人。モンテナハト家の使用人の中でも、特に長く働いており、彼女以上に屋敷に詳しい人間はいないくらいなのだ。

だが、目に見えて対立する二人というのは、少し珍しい。

「わからないはずはないだろう。お前の他に、あの皿を誰が持ち出せる？」

「メイド頭が勝手にしたことでしょう。彼女には屋敷の清掃を一任しています。どこかで見つけ出してもおかしくはありません」

「それを取り出し、私に供することか」

アロイスが陰しい声で言っても、ゲルダは氷のように無表情だ。

アロイスの表情も、固くはあるが平静さを装っている。声は互いに抑え、カミラの様に怒り任せに荒げることはない。それでも、二人の間の空気が険悪であることは、周りにつぶさに伝わっているらしい。近くを掃除していたメイドが、恐れるようにそそくさと、その場を離れるのが見えた。

「メイド頭あれにそれほど度の胸があるはずもない。お前の入れ知恵だろう。ゲルダ」

「存じ上げません。彼女も旦那様の代から仕えていた身。現状に危機感を覚えての行動だとすれば、特段おかしいことではないかと」
「現状に危機だと？」

「ええ」

ゲルダは恐れもせずに肯定した。

彼女は相手が公爵であることも、自身の主人であることも、まるで意に介さない。ためらいなく淀みない口ぶりは、たとえアロイスが短気な主人で、腹立ちの余り首をはねられたとしても、このまま話し続けるだろうとさえ思えてくる。

「旦那様の言いつけを破り、先のブルームでも騒動を起こし、モントンの人々は混乱しています。初代様から旦那様までが代々築き上げてきた伝統を破壊するアロイス様のお姿に、メイド頭も胸を痛めたのでしょうか。いったい誰の影響か、ここ最近はとみに、アロイス様はお変わりになられてしまわれました。ご自覚はおありで？」

アロイスは口をつぐみ、ゲルダを見据える。『誰の影響か』とゲルダは問うが、その答えは彼女自身が持つている。カミラのせいだと言いたいのだ。

「元のアロイス様を思い出していたきたいと、皿を取り出したのであれば、私から言うことはありません。アロイス様。今のモントンにも、アロイス様にも、必要なものは変革ではありません。すでに完成されたこの地を維持し、旦那様の、そして初代様のお志を守ることだけが重要なのです。なにより――」

そこで、ゲルダははじめて目を伏せる。一瞬の、悼むような視線。

見たことのない表情だった。

「それが、あなたが殺めたお二人への手向けとなりました。」

ゲルダ。

愕然と、アロイスが呟こうとした声は、突如割って入った声にかき消された。

「なんですって!？」

聞き捨てならない言葉に、カミラは思わず飛び出した。

ゲルダがカミラを一瞥し、アロイスが目を見開く。

「どういことです？ 今の言葉……」

殺めた、とゲルダは間違いなく言った。口振りから、領主として誰かを犠牲にしたとか、処刑したとかいう話ではないのだろう。

でも、アロイスが誰かを殺めるなど。そんなこと、カミラにはとうてい信じられなかった。

だが、カミラを見るアロイスの目は、明らかに怯えている。血の気のひいた顔で、どうにか平静を装おうと唇を結んでいた。

「なんでもありません。カミラさん、今は」

「いいえ、アロイス様。このお方はいずれあなたの妻となる身であれば、すべて話しておくべきでしょう。いつまでも隠し続けることなどできないのですから」

「ゲルダ、しかし」

「この方は真実を望まれています。教えて差し上げるのが、誠実な対応というものでしょう」

カミラは、ゲルダとアロイスの姿を見比べる。普段は憎らしいゲルダだが、今回ばかりは彼女の言うことに賛成だ。立ち聞きとは言え、ここまで聞いてしまったのだ。なにこともなかったことにはできないし、洗いざらい話してもらわなければ気が済まない。

「アロイス様、教えてください。ゲルダの言ったことは、本当なんですか？」

アロイスは唇を噛み、迷うように視線を伏せる。それから、しば

しの沈黙が流れた。人の寄り付かない廊下を、春にしては冷たい風が流れる。

「アロイス様の口から話していくのであれば、私からお伝えいたしましょう。よろしいですか？」

ゲルダはカミラを見やり、眉一つ動かさずに言った。カミラとしては、誰から伝えられても同じだ。

ゲルダに顔を向け、うなずこうとしたとき、しかしアロイスが首を振る。

「……いや。私から話そう。カミラさん、少しお時間をいただけますか？」

そう言って、アロイスはカミラを手招いた。

もはやすっかり、小箱どころではなくなる。一も二もなくうなずくと、カミラはアロイスに招かれるままに、彼の後をついて行った。

アロイスの両親が亡くなったのは、彼が十五の時。
今から八年前のことだった。

原因は事故。

魔力の暴発による、事故だったと言われている。

○

「私の魔力が人より強いことは、カミラさんもご存知ですね？」

人払いを済ませたアロイスの自室。じりじり燃える暖炉の前で向かい合い、アロイスはカミラに問いかけた。

「知っています」

カミラはそう答えた。カミラが彼の魔力の強さを目の当たりにしたことはない。せいぜい、ニコルの魔法を解いたことと、アインストで地下に魔力を示し続けたことくらいだろうか。

だが、実際に目にはしなくとも、目を見れば強さはわかる。色鮮やかな赤い瞳は、その身に潜む魔力量を、なによりも物語っている。「かつての私は、この力を持て余していました。……いえ、今も持て余してしまっている。私が本来持つ魔力を、今も扱えるのであれば」

「どういうことです？」

「私の力は、大部分が封じられています。今の私は、身の内に眠る魔力のかけらほどもしか使えません」

カミラは眉を寄せる。そうは言えども、アロイスはその魔力を買われて、魔石の鉱脈探しに繰り出していたはずだ。強い魔力があるからこそ、魔石の鉱脈も探し出せるというもの。つまりは今だって、

十分に強いはず。それがかけら程度と言うのであれば、本当の力はどれほどのものかというのだろう。

「いつかニコルが起こした魔力の暴走も、私は経験があります。小さなものであればたびたび。大きいものは、一度だけ。他人の魔力に触れ、ひどく暴走したことがあります」

アロイスは椅子に深く腰を掛け、膝の上で両手を組む。伏せた瞳は、自分自身の握りしめた手に向けられているようだ。無表情の代わりに、組み合わせた手が忙しく動く。

「それが八年間。私が人を殺した日であり、両親の死んだ日でもあります」

アロイスは息を吐く。両手をもう一度強く握り合わせると、彼は無感情な顔でカミラを見た。

「当時の記憶は、ほとんどありません。その事件がきっかけなのか、それ以前の記憶も抜け落ちていきます。きっと、私が忘れたかったからなのでしょう。もう、両親の顔さえほとんど思い出せません」

カミラは息を呑む。アロイスに表情はない。暖炉の火のせいで、暗い影が落ちて見える。語る口は淡々として、まるで他人事みたいだった。

「ですが、覚えていることはあります。父と母の姿と、私に向けられた魔力。あとで、私の力を封じるための魔法だったと聞きました。ですが、私はその魔法に反発し、跳ね返しました。父と母ごと」

それから、アロイスは少しだけ、顔をゆがめた。くしゃりと眉を寄せ、口を曲げたその表情は、笑い顔にも似ていた。

「私は親殺しなんです」

「……でも、それは事故だわ。だって、どうしようもないじゃない」
「私の力が起こしたことです。私の力が殺めた命です。事故ではあっても、私の過失であり、私のせいで死んだことには変わりありません」

だからこそ、旧い使用人たちは誰一人、アロイスを『旦那様』と

は呼ばない。彼らにとっての主人は、まだアロイスの父でなければならぬのだ。

敬愛する主人を奪ったアロイスを、誰も許しはしない。それと共に、アロイスの罪をあらわにする。

「でも！」

「この力が命を刈り取る瞬間を、私は鮮明に覚えています。自分の力なので。指先で撫でるように、二人に魔力が触れ、そうして動かなくなりました。感覚もまだ、覚えています」

アロイスは自分の手の先を眺め、うつすらと目を細めた。笑うようなのに、笑ってはいない。過去を語るようで、アロイスは過去を見ていない。八年経過した今でも、彼にとってはまだ、現在の出来事なのだ。

「あれ以来、私の魔力は封じられたまま。きっと、父と母の最期の魔法が残っているでしょう。今でも、体の内に二人の魔力を感じます。戒めのように」

でも、とカミラが言っても、アロイスは聞き入れない。不幸な事故であるとしても、アロイス自身が認めようとしなかった。

アロイスはなにを言っても表情を崩さない。椅子に深く腰掛け、手を握り合わせたまま、姿勢さえも変えない。秘密を語る彼は、いつもよりもいつそう壁を作り、カミラを拒んでいた。

かたくなすぎるわ。

アロイスの立場に立ってみれば、カミラだって気持ちはわかる。カミラが同じ立場だとしたら、罪の意識に溺れるか、「自分はなにも悪くない」となにもかも正当化するかの、どちらかになるだろう。真面目なこの男は、正当化することを許せなかったのだ。仕方がない事だった、事故だった、自分は悪くない。そう言って逃げることを認められなかった。

慰めを拒み、許しを拒み、誰も彼もを遠ざけて。そうして、自分一人で抱え込んで、一人だけ苦しんでいく。

ああ、とカミラは心の中でつぶやいた。そうだったんだ。

罪滅ぼしなんだわ。

他人本位で自己犠牲的な彼の性格は、ここからきていたのだ。わがままも、望みもなく、良き領主たろうとする。

それはきつと、失った父と母への償いのため。

でも、本当にそれだけ？

告白するアロイスの態度に、微かな違和感がある。

秘密を明かしながらも、カミラを拒み、さらに心の守りを固める理由。彼の心は、まだ守りたいものがあるはずだ。

誰の言葉も届かず、誰にも開かれない心の奥底にあるものは、なに？

「カミラさん」

アロイスに呼びかけられ、カミラは顔を上げた。アロイスは少し椅子から身を乗り出し、カミラの顔を見つめている。先ほどまでとは違う様子に、カミラは首を傾げた。

「カミラさん、王都へ戻りたくはありませんか？」

「……はい？ どうしました、急に」

いぶかしむカミラにも、アロイスは引かない。同じ質問を繰り返す。

「もう一度戻れるとしたら、どうしたいですか？」

「どうしたんです。王都なんて今は」

「お答えください」

カミラの疑問など意に介さず、アロイスは強引に聞き出そうとする。珍しい押しの強さに、カミラはちよつと身を引いた。

王都へ戻りたいかと言えば、それは……。

「戻りたくないわけではないですけど」

王都でやりたいことは無数にある。アロイスを利用して見返してやりたい、とは今さら言わないが、それでもやっぱり貴族たちやり

「ゼロツテは許しがたい。テレーゼにだって何か言ってやらなければ気が済まないし、カミラの両親にだって同じだ。本当にテレーゼを養子に迎えたのか、問いたださねばなるまい。侍女のディアナにも会いたいし、通っていた孤児院の子供たちも気になる。」

ユリアン王子にも　もう一度見て、諦めたいと思うくらいの未練はある。

しかし、それはそれ。

「今の話とは別の問題です」

「そう。戻りたい。そうですね。わかりました」

アロイスは不思議なくらい人の話を聞かない。カミラの返答に一人、なにもかも悟ったように頷いた。

「戻りましょう、カミラさん。あなたはもう、王都へ帰ることができるのですから」

「え」

「ユリアン殿下から書簡が届きました。殿下の結婚を機に、あなたが王都へ戻ることを許すと」

「な……」

「殿下の結婚式に、私はあなたを王都へ送り届けます。そこから、あなたは自由です。モーションに戻る必要ありません。私との結婚も、白紙に戻しましょう」

な。

「なんですって　　！！？」

カミラは思わず、椅子から立ち上がって叫んだ。

王都に戻る？　許される？　結婚が白紙？　いえいえ、今はそんな話じゃないわ！

頭の中が混乱している。どれから処理をすればいいのか。立ち上がったのはいいものの、続く言葉が出てこない。

目の前ではアロイスが、心の壁めいた穏やかな表情を浮かべてい

る。カミラが王都へ帰ることに、結婚を白紙にすることにも、今まさに驚いているカミラの存在にも、彼は鉄の表情を崩さない。内心がまるで見えなかった。

対するカミラは、自分でも驚くほどわかりやすく困惑していた。

「で、でも、私との婚約は？ 二十四になる前には答えるって、約束しましたでしょう！」

「忘れてくださって構いません」

「いいんですか？ 私と結婚したいんじゃないんですか？ そのために痩せて、運動だつて始めたのに！」

「私はいいんです」

当たり前のようにアロイスは答えた。なにがいいのか、カミラにはさっぱりわからない。

「私のことが好きなのでしょう！ 諦めるんですか！？ その程度なんですか！？」

「あなたを想う気持ちに変わりはありません。ですが、この方がきつとあなたのためです」

「私のためって！」

激昂するカミラと、落ち着き払ったアロイスは対照的だ。どうしてもアロイスがこんなに落ち着いていられるのかわからないし、どうして自分がこんなに憤っているのかも、カミラ自身わからない。

ただ、まるで未練を見せないアロイスに、どうしようもなく腹が立つ。

「私は罪人です。罪人の土地、罪人の妻に、あなたは似合いません」アロイスは諭すように、ゆっくりと話す。

「それに私は、自分で操ることのできない危険な力を持っています。いつ、あなたを傷つけるともしれません」

「だからどうしたっていうんです！」

「あなたを傷つけたことはありません。あなたが傷つくのを見たくもありません。私でなくとも、この土地にはあなたを傷つきたい人間が多くいます」

「だから、なんだっていうのよ！」

そんなことはどうでもいいのだ。王都にだって、カミラを傷つきたい人間は無数いた。この土地にだって、カミラと喜び合った人間がたくさんいる。そんなことでアロイスに心配されるほど、カミラは傷つきやすくも、打たれ弱くもない。

魔力の暴走だって、そもそもカミラはろくに魔力を持たない。ぶつかり合って暴走なんて起こるはずもないではないか。

「私のことじゃないわ！ アロイス様はどうしたいの！ 私が居なくてもいいっていうんです！？」

「私は、あなたがより居心地の良い場所にいてくだされば、それでいいんです」

だから王都へ戻れと。

アロイスの薄い笑顔が、カミラをひどく苛立たせた。自分のことは語らずに、寄せ付けずに、人のためだと口にする。

変わったと思っていたけれど、この男の本質はなにも変わらない。表面的に人に触れ、相手が誰でも変わらない、お手本みたいな優しさを撒く。一見すれば真摯で誠実。だけどその実態は血の通わない、ただのはりぼてだ。

カミラは両手を握りしめた。怒りで表情が、どうなっているのかわからない。頭が熱く、しかし胸はひやりと冷たい。

唇が震える。息を吸い込むと、腹の底から激情が溢れてきた。

「ふざけないでちょうだい！ この 小心者！！」

今のアロイスには、カミラ渾身の叫びさえも届かない。

カミラは怒っていた。

当然である。あれから十日もたったのに、カミラはアロイスとろくに言葉も交わせていないのだ。

アロイスはほとんど部屋にこもりきり、外にもろくに出てこない。部屋を訪ねても追い返されるし、廊下で声をかけても「忙しいから」と逃げられる。これで怒りがおさまる方がおかしいというものだ。

閉じこもって何をしているのかといえば、どうやらずっと仕事をしているらしい。食事も部屋に運び入れ、わき目もふらずに書類をさばいているのだとか。

現実逃避だわ！

ふざけるな、の気持ちを込めて、カミラはビスケットの生地を叩きつけた。この腹立ちをどれほど製菓にぶつけても、まるで鎮まる気配がない。カミラの鬼気迫る様相に、厨房の生意気な料理人たちも怯え、ここ数日は縮こまっている。

おかげでカミラの作ったビスケット生地は、結構な量になっていた。最初は焼いてみたりもしたが、焼くより力任せにこねる方が今のカミラには向いているらしく、結局生地ばかりが増えていく。

人の話くらい聞きなさいよ！ 逃げるんじゃないわよ！ やけ食いなんてもってのほかだわ！

厨房にいと、アロイスの食事情も聞こえてくるものだ。最近のアロイスは、すっかり前の食欲を取り戻してしまっているらしい。一日に何食も、あのおかしな料理を食べ続ける。これでは、せつかくのカミラの努力も台無しだ。

やっと人並みに痩せて、運動もはじめて、これから味付けだって

変えていこうというところだったというのに。

アロイスはきつと、このままカミラに対面することなく、王都に返すつもりだ。それがカミラにとって良い事なのだと、彼は本当に思っているのだ。

臆病者！ 小心者！ そんなの、ただ怖くて逃げているだけだわ！！

アロイスは出てこないし、小箱だって見つからないし、菓子作りも上手くないし。ニコルは相変わらず、瘴気が濃いとすぐに肌を掻く。ギウンターはカミラの腕を認めないし、ゲルダは忌々しいままだ。

なにもかも腹立たしい。それもこれも、全部アロイスのせいだ。

「相変わらず、荒れてんなあ」

カミラに怯える料理人たちの中。恐れもせずにそう言ったのは、呆れた顔のギウンターだ。

「当り前だわ！」

噛みつくようにカミラが言えば、ギウンターが顔をしかめる。厨房を荒らすカミラを咎めるでもないあたり、もしかしたらカミラに共感しているのかもしれない。

が、それでも彼は、アロイスの味方だ。

「まあ、坊ちゃんの気持ちもわかってくれ。自分から話をしただけでも、坊ちゃんにとっては勇気のいることだったはずだ」

ふん、とカミラは鼻で息を吐く。訳知り顔のギウンターは、最初からアロイスの後ろ暗さを、何もかも知っていたのだ。「公然の秘密ってやつだ」と、この男は言っていた。屋敷の中でも、古株の用人はだいたいみんな知っているのだとか。

もちろん、わざわざ公言するようなことでもない。ギウンターが黙っていたのも当然なのだが、それでも気に食わないものは気に食わないから仕方がない。

「話すだけなら誰でもできるわ！ 相手と二度と関わらないつもりなら、なおさらよ！」

相手の反応も顧みず、言葉を吐くだけなら簡単だ。そんなもの、壁に向かって話すのと大差ない。

「二度と関わらないって言っても、それはお前のためなんだろう？ お前だって、王都に未練があるんだろ？ …… ユリアン王子もいるしな」

「私のためってなによ！ 自分はいつでもいいって言うの？ アロイス様は、簡単に私を諦められるわけ！？」

ギューンターは顔をしかめる。カミラが、ユリアン王子を諦められなかったことを知っているからだ。アロイスを敬愛する彼は、アロイスに向かないカミラの視線を、いまだ苦々しく思っている。

「……みんながみんな、お前と同じ考えじゃねえんだ。相手のためだからこそ、身を引くこともあるだろう」

「私のためだって言うのなら！」

「ばちん、とカミラが生地を平手でたたく。

「私は、諦めてなんてほしくなかったわ！ アロイス様の過去に怖気づくとも、簡単に諦められる相手とも、思われたくはなかったわ！」

ユリアン王子に恋をしたとき。カミラはずっと彼の力になりたいと思っていた。重荷を預かりたかった。自分が彼の支えになりたいかった。

「だけどアロイスは、カミラに支えを望まなかった。怯え、突き放し、拒んだ。カミラが、心を預けるに足る人間だと思っていなかったからだ。臆病な男は、カミラを信じることができず、逃げ出すことを選んでしまった。

「それが許せない。どうしようもなく悔しい。腹が立って仕方がない。それでいて、苦しい。」

「アロイス様にとって私は、その程度の人間だったんだわ……！」

荒く息を吐き出し、カミラは怒る。居ても立っても居られない。落ち着かないカミラの様子を、ギューンターはいぶかしげに見やった。

「……………お前、それ。その言い方」

半信半疑の視線がカミラを捉える。カミラの怒りに気圧されつつも、彼の表情はどこか、不思議そうだった。

「それって いや、お前がユリアン王子を好きだってことは知っているし、俺が言うようなことじゃねえんだが……もしかして」「なによ」

はつきりしない口ぶりに、カミラは苛立った。言葉を濁すのは、ギョンターにしては珍しい。カミラに詰められても、彼はどうにもためらいがちだった。

だが、一度首を振ると、彼は意を決したように口を開く。

「ああ いや、言っちゃまうぞ！ 女に縁のない俺だけから、自信ねえがな」

ギョンターは頭を掻くと、カミラに顔を向ける。

今度はカミラが、彼に気圧される番だった。自信がないと口では言いつつ、敵つい顔に妙な気迫を湛え、彼はカミラに言つてのけた。「お前、その言い方だと、まるで まるで、アロイス様のことが好きみたいじゃねえか！」

カミラはきよとした。

まったく、まったく思いがけない言葉だった。

ギョンターの視線に、カミラはしばし瞬きだけを返す。言われた言葉をかみ砕き、頭の中で反芻する。生地をこねる手も止まり、息さえも止まりそうな静寂。ギョンターがひとり、居心地の悪そうな顔をするのが見えた。

長い間のあと、やっと返した言葉は、ひどく間の抜けたものだった。

「……………考えたこともなかったわ」

アロイスの人となり考えたことはある。婚約の話も、結婚のこととも考えた。アロイスと夫婦になることを、上手く想像はできずとも、思い浮かべたこともある。

だけどそう。不思議と。

私が、アロイス様を好き？

カミラの心に、ずっとユリアン王子がいたからだろうか。最初のアロイスの印象から、恋などできないと、無意識に避けていたのだろうか。あるいは自分自身の心変わりを恐れていたのかもしれない。カミラ自身が、アロイスを好きになる。

そんな、一番大切に単純なことを、カミラは想像すらもしなかった。

「……私、アロイス様ともう一度話をするわ」

きゅつと手を握りしめ、カミラは宣言した。また逃げられるかもしれない。拒まれるかもしれない。それでも、いても立ってもいられない。

「このままじゃ終われないわ！」

自分自身の気持ちはわからない。アロイスをどう思っているのか、カミラは確かめなければならない。アロイスが逃げるなら、カミラはそれ以上に追いかけるまでだ。

だって、こんな中途半端なまま、王都へ帰れるものですか！

「食べなさい」

華美な装飾の青い深皿に、山のような料理を乗せて、父はそう言った。

アロイスは逆らえなかった。

アロイスが良い息子であるため。良い領主となるため。良い人間となるために、必要なことだった。

それ以外の価値はアロイスにはなかった。与えられるがままに食べ、与えられた言いつけを守り、出しゃばらず、口ごたえをせず、期待を裏切らず、しかし期待を超えてもならない。

変革は不要である。しかし悪化させてはならない。ただ守り、ただ維持する。意思のない歯車であることだけを望まれた。

両親の死後もそれは変わらない。

父の意思は人々の中に生き続け、アロイスの変化を叩く。道を外れれば正そうとする。一切の乱れのないように。歯車のゆがみを削るように。

「食べなさい」

あるいはこれは、アロイスの妄想なのかもしれない。

両親が息づいているのは、自らの心の中。罪悪感の中に住まうものかもしれない。カミラと出会い、前を向こうとしたことを、自身に諫めているのだろうか。

罪人に喜びは不要。娯楽を禁じるモーントン領は、アロイスそのものである。

「食べなさい、アロイス。残すことは許さない。私の息子であれば、これくらいたやすいこと」

カミラがいれば変われると思った。彼女の力強さがあれば、先に進めると思った。

だけど足を踏み出そうとしたアロイスの意思を、両親の記憶が簡単に挫く。

たった皿一枚に怯え、過去にとらわれ、立ちすくむ。罪深さに震え、逃げざるを得ない情けない自分自身への、カミラの失望が怖かった。

「それでいい」

記憶の中の父が言う。それでこそ、モンテナハト家が一人息子。モントンの領主にふさわしい。罪人に救いはない。沼底のような暗闇の中、淡々と与えられた仕事をこなし、悔いながら生きることが贖罪である。

「食べなさい、アロイス。良き息子であるために」

父上。

すっかり日は落ち、暗い執務室。部屋にいるのはアロイス一人だ。少し前に女中頭が来て、青い深皿を一枚置いて行ったきり。聞こえる声は、すべて過去の幻聴だ。

それでもアロイスは逆らえない。父が指定した、青地に金の装飾を施した皿の上。脂に浸った肉の塊が乗っている。料理を鮮やかにするためだろう。添えられている野菜も、飾り用の白い花も、すべて脂の中に落ちている。

食べなければ。

胸の焼ける料理に、アロイスは手を伸ばす。フォークで肉を刺し、口元へ運び

一瞬だけためらったのは、白い花に見覚えがあ

ったからだ。

ブルームでカミラがうずくまっていた花畑。カミラが頭に抱いた白い花冠。ゼーンズフトの可憐な花が、カミラを思い起こさせる。アロイスが逃げても、カミラは今も追いかけてきてくれる。弱いアロイスに彼女は呆れただろうけれど、もう一度。もう一度くらい、話をすることを許されるだろうか。逃げる自分自身を奮い立たせることはできるだろうか。

迷いは、脂を口に含んだ瞬間に失せた。

「う

」

甘い。塩辛く、蜜のように甘い。それでいて、かすかに苦い。濃すぎる味の中。見逃してしまいそうなほどさりげなく紛れ込んだ違和に、アロイスは吐き出した。口の中に痺れが走る。すぐに吐き出したはずなのに、指先から痺れていく。

誰か。

声が上がらない。体に力が入らない。意識が遠のいていく。人を呼ばなければ。

視界がかすむ。強い。強い毒だ。

おぼろになり始めた彼の瞳に、飾られた白い花が映る。アロイスは反射的に花を握りつぶすと、最後の力を振り絞り、皿を床に落とした。

乾いた音が、夜の屋敷に響き渡る。

誰かが駆けつけてくる足音を最後に、アロイスは意識を失った。

躍起になってアロイスを追いかけてまわすこと数日。

逃げ続ける彼と、カミラは思いがけない形で顔を合わせることになった。

「アロイス様！ ご、ご無事ですか！？」

夜更けだと言うのに大きな声を上げながら、カミラは転がるようにアロイスの部屋へ駆け込んだ。

部屋には大きなベッドが一つ。本の入った棚が一つ。暖炉と椅子。他には、ほとんど何もない。何度訪れても、息が詰まるほど簡素な部屋だった。

そのベッドの上に、アロイスが横たわっている。侍医がひとり傍に付き、使用人たちが数人、ベッドを囲んで立っている。家令のウィルマーに、侍女長ゲルダ、執事や女中頭など、長いことモンテナハト家に仕える上級の使用人ばかりだ。

彼らは、慌ただしく部屋に飛び込んだカミラに一瞥をくれた。一斉にカミラを見、それ以上反応することなく、アロイスに視線を戻す。示し合わせたかのような人々動きに不快感を覚えるが、今はそれどころではない。

カミラは、使用人たちの間を割ってベッドへ駆け寄った。少し遅れて、カミラに急を告げに来たニコルもついてくる。彼女は部屋の雰囲気恐縮し、入り口近くで縮こまっているが、それももう気にならない。

「毒……毒を盛られたって本当ですか！ お体に障りはありませんか！？」

「大丈夫です。カミラさん。すみません、ご心配をおかけして」
アロイスはベッドの上で、半身を起こした。着ているのは、病人

めいた白い服。声はすっかりしているが、顔色はひどく悪い。見るからに無理をしていた。

「たいしたことではありません。ほとんど飲み込むこともできませんでした。安静にするのも念のためだと、医者も言ってくれてます」

「たいしたことじゃないって！」

「騒ぎ立てるほどのものではありません。私はこの通り、無事なのですから」

「アロイス様!？」

なんということはない、とでも言うようにアロイスは首を振る。

その姿が、カミラには信じられなかった。だって、アロイスは領主だ。王家の血を引く公爵だ。その彼が、何者かに毒を盛られた。無事だから良い、というものでは断じてない。

誰かが、アロイスを亡き者にしようとしたのだ。命を狙っている輩がいるのだ。大騒ぎをしてしかるべきだろう。

そう思ったのは、カミラだけではなかったようだ。

「そうはまいりません。アロイス様」

口をはさんだのはゲルダだった。ベッドからは少し離れ、他の使用人たちに紛れて彼女は立っていた。

「毒を盛った犯人を探する必要があります。すみやかに調べ、見つけ出す必要があるでしょう」

「不要だ。私に大事はない。この件はこれでしまいとする。屋敷の外への口外も禁止だ。他の物たちにも伝えておけ」

アロイスのかたくな言葉を受け、ゲルダがかすかに片目を細める。二人がにらみ合う間、他の誰も口を開くことはできなかった。

これだけの人がいると言うのに、息をひそめるような沈黙が流れた。「アロイス様を危機に晒した人間を探すのです。なぜ止めるのですか」

先に声を上げたのは、ゲルダの方だった。

ゲルダの当然の問いに、アロイスは答えない。感情の消えた顔が、

ただ彼女の姿を見つめている。

「誰かをかばっているのですか。犯人に心当たりでも？」

アロイスはやはり無言のままだ。かすかに息を呑み、瞬きをする。それだけが彼の動きのすべてだった。

「かばいたくなる相手なのですね。良いでしょう。」

毒の出

所を探しなさい。まずは食事を運んだメイドたちに話を」

「はい」

ゲルダに命じられ、女中頭は険しい顔で頷いた。それから、数人の使用人を率いて部屋を出て行く。彼女はアロイスではなく、ゲルダの言葉の方に従ったのだ。

「ゲルダ」

アロイスは顔をしかめ、ゲルダの名を呼んだ。非難を含んだその声にも、ゲルダは怖じない。

「いかにアロイス様の命といえども、このままにはしておけません。犯人は必ず、私どもで見つけ出しましょう。アロイス様がなにかする必要はありません」

両手を体の前に重ね、背筋を伸ばし、ゲルダは無機質に言った。

「なんの憂慮もありません。あなたはただ、旦那様のお言いつけを守るだけでよろしいのです。これまでも、これから変わらず」

そして、一礼。よくできた使用人らしい一糸乱れ仕草だった。

「お夜食は、お部屋に用意してございますので。『食べなさい。残すことは許されない』、旦那様のお言葉を、違えることのなきように」

ゲルダの言葉に、カミラは瞬いた。アロイスは青ざめた。先ほどまでの鉄の表情が嘘のように崩れ、唇を震わせる。

「では、失礼いたします」

だが、その様子を見ることもなく、ゲルダは部屋を出ていった。他の使用人たちもまた後に続く。

そうして、アロイスと侍医、おろおろするニコル。そしてカミラだけが残った。

広くなった部屋で、カミラは一人つぶやいた。

「
夜食？」

毒を盛られたばかりだというのに、今のアロイスがそんなものを口にできるはずがない。カミラも人のことを言えた義理ではないが、あまりにも無神経ではないだろうか。

それに、アロイスに「なにもしなくてもいい」なんて言い草も気に食わない。

これまでもゲルダは、厳格な使用人らしい風体とは裏腹に、アロイスに対してかなり出過ぎた態度をとってきたが、さすがに言い過ぎである。

そりゃあ、犯人を見つけた方がいいとは思っけど。

言っている内容自体は、カミラはゲルダに賛成だ。むしろ、毒を盛られても、このまま終わりにしようとするアロイスには疑問がある。きちんと犯人を捕まえなければ、また同じことが起こるに違いない。

でも、それにしたってあんな言い方！

聞いているカミラの方が腹が立つてくる。いくら古株の使用人でも、いくら屋敷の大半を取り仕切る権力を持っていても、いくら威圧感があつて、ちょっと口出すのがためらわれるほど怖くても、あの態度はあんまりだ。

「アロイス様！ 夜食なんて！」

「食べないと」

「……はい！？」

小さなアロイスのつぶやきは、カミラにとって信じられないものだった。驚いてアロイスを見やれば、彼はかすかにふるえていた。「残すことは許されないのに、どうして僕は吐き出してしまったのだろう」

「アロイス様……？」

アロイスは両手で体を抱き、視線を伏せている。カミラの声が聞

こえていないのか、呼びかけに反応しない。

「どうして飲み込めなかったんだろう……」

自らを抱く手に、アロイスは力を籠める。カミラは反射的に後ずさった。なにかがぞつと肌を撫でる。視界の端で、ニコルが「ひつ」と怯えるのが見えた。

この感覚に覚えがある。

アインストと同じだわ。

カミラを撫でつけ、肌を痺れさせるのは、強い魔力だ。不安定なアロイスの心が、身の内の魔力を抑えきれず、暴発寸前の濃さとなつて部屋に満ちていた。

「食べないと……吐いた分だけ、食べないと」

おののくカミラたちには目をくれず、アロイスは立ち上がった。侍医も震え、止めることを忘れている。カミラもニコルも、彼に言葉をかけられない。

アロイスはふらふらと、一人部屋を出て行く。扉を開け、扉を閉め、姿が見えなくなつてやつと、カミラは息をすることができた。魔力が徐々に引いていくのがわかる。

「……つて、アロイス様！ 行っちゃったわ！」

追いかけないと、と駆けだそうとするカミラの腕を、誰かが掴んだ。振り向けば、怯えた顔のニコルが見える。しがみつくようにカミラの腕を掴み、彼女は血の気のひいた顔で訴えた。

「だめです！ 今のアロイス様を刺激したらいけません！ 爆発しちゃいます！」

魔力の強いニコルのことだ。カミラよりも正確に、アロイスから漏れ出す魔力の量を計ることができたのだろう。

「あんなの、ひとたまりもないです！ 落ち着くまで待たないと！」

「ニコル……」

カミラは引き留めるニコルの懸命な瞳を見た。

必死な様子は、逆に言えばそれほど危険ということ。カミラの身

を案じてくれているのだ。

「ごめんなさい。でも、あんなアロイス様は放っておけないわ」

カミラが見てきたアロイスは、常に穏やかだった。感情をほとんど動かさず、怒ることも嘆くこともめったにない。自分を律し続けてきた男が、自分の魔力も操れないほど揺れているのだ。

アロイスに寄り添う人間は、おそらく屋敷のどこにもいない。明日になれば、アロイスのこと。いつも通りに装うことができるのだらう。

だけど、それでは今日のアロイスはどうなる？ 限界を迎えても押し殺し、誰の助けもないまま朝を迎えることになる。それはあまりにも、苦しい。

「ちよつと様子を見るだけよ。行ってくるわ」

ふふんと笑って胸を張ると、カミラはニコルの髪を撫でた。

それから、不安な瞳のニコルを置いて、部屋を飛び出した。

アロイスはどこにいるだらう？

アロイスがいたのは、私室の隣にある物置だった。

いつだったか、ニコルが忍び込み、皿を割ってしまった秘密の部屋だ。いったいどういふつもりで、この部屋に食事を用意したのだろう。古い家族の肖像画の前で、アロイスはひとり。古びたテーブルに向かい、カミラに背中を見せ、なにかに食べている。

部屋に足を踏み入れると、肌がひりついた。魔力のほとんどないカミラでもわかるくらいに、この部屋には魔力が満ちている。

一瞬ためらいそうになる足を叩き、カミラは部屋に踏み出した。

「アロイス様！」

「すみませんが、放っておいてください」

しかし、勇気を出したカミラをくじくように、アロイスが端的に告げる。カミラには振り返りもしない。

「私は大丈夫ですから。今日はもう、一人にしてください」

突き放す言葉に、カミラはむっとする。こうやってこの男は、いつだって人を寄せ付けようとしない。

「期待させないでください。カミラさん。どうか、このままお戻りください」

「そうはいくもんですか！」

アロイスの静止を無視し、カミラは部屋へ踏み込んでいく。カミラの足音と、静かに食事をするアロイスの物音だけが部屋に響く。食べても食べても、食べきれない。

「アロイス様、なにを食べていらっしやるんです!？」

歩きながら叱るように言えば、案外素直に答えが返ってきた。

「……なにを食べているんでしょうね、僕は」

「アロイス様？」

「僕が口にいるのは、いったいなんなのでしょう」

カミラから見えるのは、アロイスの背中だけだ。アロイスの食卓には影が落ち、先代モンテナハト公爵が、その様子を見ている。

「味もわからない。量も知れない。飲み込むことしか許されない。毒を混ぜてもわからない料理を、僕は何年食べ続けてきたでしょう。あるいは僕はずっと、毒を食べ続けてきたのかもしれない」

「アロイス様！」

「僕はいずれ、こうなることがわかっていました。父も母も、誰も僕の変化を許しません。人を寄せることを許さず、前を向くことを許さず、停滞することのみを認めました。父の意にそわぬ僕には、価値がありませんから」

「なにを言ってるんです！？」

一人つぶやくアロイスの言葉が理解できない。カミラが制するように声を上げて、彼は言葉を止めなかった。

「この料理は両親の悪意であり、僕への戒めであり、保険でもあります。わからないのは僕が、どうしてまだ生きているのかということ」

部屋の中。埃だろうか。魔力を帯びてばちばちとはじける。言葉と共に、アロイスの感情も揺れているのだ。

「どうして僕は飲み込めなかったのだろう。どうして吐き出してしまったのだろう。父も母も、そんなこと許すはずがないのに」

あの花を見たから、死にたくない、無意識に思ってしまったんだ」

「アロイス様！」

言葉は無意味だ。カミラはアロイスの背後に立つと、その肩を掴んだ。

こんなときでも行儀よく持っていたナイフとフォークを、アロイスは取り落とす。かちやりと落ちる音はどうでもいい。アロイスに触れた手のひらに、ばちりと痛みを伴う魔力を感じたのも、たいしたことではない。

「しっかりしてください！ アロイス様！」

「しっかりしていますよ、カミラさん。僕はいつでも」

アロイスは、カミラの力に抵抗することなく振り返った。

「いつでも、良き息子でした。あなたに会うまでは」

両親の言いつけ通りに食事を取り、両親の望むままに肥え太り、
いつ毒を混ぜてもわからない料理を食べ、毒を食べてもわからない
舌に変え、いつでも殺せる準備を整えた。

アロイスは文句ひとつ言わず、周囲の期待に応え続けた。死にた
くなかったからではない。ただ、両親にとって『良き息子』である
ために。

なのに。

「でも、もう父上は僕を許さない。母上は僕を見ない。毒は人の手
を介し、父の手で盛られたものだ。もう、僕は悪い息子です

カミラさん」

アロイスがカミラを見る。いつもの押し殺した、無表情めいた温
和な顔つきとは違う。

笑うように顔をゆがめ、赤い瞳が苦しげに光る。

それは繊細で、危うく、傷つきやすい。今にも泣き出しそうな

少年の顔だった。

「父上が、母上が、僕を見ているんです。僕を責める。死んだはず
なのに　確かに僕の手で、死んだはずなのに！」

アロイスは、肩をつかむカミラの腕を、逆に握り返した。両手で
カミラの腕を取り、必死の形相で訴える。

「良き領主であるように！　良き息子であるように！　さもなけれ
ば死ねと！　僕の内から、今も僕を呪い続けるんだ！」

魔力が渦を巻く。部屋にある陶器が一つ、ぱちんと音を立てて砕
けた。どこか遠い音のようにそれを聞きながら、カミラはアロイス
を見やる。

良い子すぎるんだわ。

かつて、何度となくアロイスに抱いた印象を、カミラは思い出した。

良い人でもなく、良い男でもなく、『良い子』と思った。その理由がわかった。

アロイスはまだ、子供なのだ。両親に縛られ、自立を許されない少年のまま。父と母を恐れ、気に入られることを期待し、自分自身を築き上げる。わがママを知らない子供のまま、時が止まってしまっている。

これが、アロイス・モンテナハトという男の正体。柔和な外観に隠した心の奥底。誰も彼も遠ざけて、触れさせようとしなかった、傷つきやすい真の姿だ。

そしておそらくは、アロイス自身、自分の歪さに気づいている。彼はきつと、昔から聡い子供だったのだらう。聡いからこそ、失敗をしない。聡いからこそ、上手くやれてしまうからこそ、かえって重荷を背負ってしまったのだ。

「僕は変わりがかった」

カミラの両腕をつかみながら、アロイスは訴えた。

「変わることが怖かった。でも、あなたがいれば変われると思った。なのに、くじけてしまった。僕は怖いんだ。裏切られることが、怖いんだ！」

「……裏切り？」

「父上が、母上が僕を溺めとる。虐げる。苦い記憶の中に見え隠れする、優しい母の記憶に期待する。苦しいだけなら良かったのに、おぼろげな記憶が僕を惑わす。本当は、愛してくれていたのではないかと！」

両親の死は、アロイスに安堵をもたらした。その一方で、安堵を抱くこと自体がアロイスをさいなめた。かすかに残る、顔も思い出せない母の優しい記憶が、アロイスの冷徹さを責める。

アロイスは期待する。期待するたび裏切られる。それでも縋るように、面影に期待する。母を求める幼児のように。

「この記憶はいつたいなに。両親は、僕を愛したことなんてないのに。僕はいつたいなんだ？ どうしてこんな記憶がある？」

失った記憶はアロイスを惑わせる。そこから、一步も動けない。失った分だけ、アロイスは子供のまま。沼の底で溺れたままだ。

「……………助けてください」

囁くように、アロイスは呟いた。アロイスの怯えをそのまま映すように、部屋の魔力が揺れる。震える。カミラの肌を撫でる。

「助けてください、カミラさん。僕を救ってください」

親にすぎるように、アロイスは訴えた。我慢強い子供の顔に、はじめての涙が浮かぶ。赤い目に溜め、こらえ、堪えきれずに流れ落ちる。

「僕は変わりたい。父と母に怯えずにすむように」

涙が頬を伝う。それと同時に、カミラを掴む腕にも力がこもる。痛いくらいだ。

「逃れたい。乗り越えたい。心から願っているのに。勇気が出ない

……………！」

アロイスの変化を、両親もモーションの人々は許さない。毒を盛っても、変化を止めなければならない。変わるくらいなら死ねと。それでもこのままではいけない。アロイスは本心から変わった。恐れを乗り越えるだけの力が欲しい。

「カミラさん、どうか、僕を連れ出してください。ここから

」

助けて、という言葉は、頬を打つ乾いた音に消えた。

アロイスはカミラから手を離し、自身の頬を押える。痛むのだから、微かに赤く色づいている。

「私はあなたの母親じゃないわ」

痛むのは、カミラの手も同じだ。
はじめて人を叩いた感触で、手のひらがじんじんした。

渦巻く魔力は、衝撃に戸惑ったのか、傷ついたのか、めちゃくちゃに暴れまわる。

ぱん、と簡素な音で皿が碎ける。碎けた破片が飛んで肌を裂いても、カミラは気にしなかった。

「優しい言葉なんてかけないわ。あなたを救ってもあげない。アロイス様、あなた、いまおいくつです？」

アロイスは黙ってカミラを見やる。縋りついた母から手を払われたような、傷ついたような目つきだ。

「もうすぐ、二十四になるでしょう。ご両親が亡くなって、九年近くすぎたんです。いい大人なんです。誰があなたを責めるというのですか」

無言のアロイスの代わりに、魔力が感情を表す。彼らしくもなく、まるで制御できず、棚を倒し、カミラの肌を裂く。ばちばちばち。絶え間なく魔力のはじける音がする。

そのことに、アロイス自身が怯えている。かつて、自分の両親が死んだときのことを思い出してしまっているのかもしれない。

「あなたの変化を咎める権利は、もう誰にもありません。代わりに、無条件に褒めたり慰めたりもしない。私に期待したって無駄だわ。私はあなたの母でもないし、母になる気もないんだもの」

「……カミラさん」

「苦しみは自分で乗り越えるものだし、自分を救うのは自分自身だわ。限界を見定めるのも自分。耐えられなくなる前に、逃げるのも自分の判断。それが大人っていうものよ！」

「僕は……」

「変わりたいなら、自分で変わるしかないの。痩せるのだってそうでしょう！ 食事の量は自分で決めるの。運動は自分の意思でするもの。子供じゃないんだから！」

カミラはそう言うと、アロイスの頬を両手で叩いた。叩くようにして、挟んだ。うつむきがちで弱気な顔を、そのまま前に向けるためだ。

「私は慰めないし、優しくもしないし、言われたくないだろうことも言うわ！　それでもよければ、話くらい聞くわよ！　ため込んでため込んで、誰にも話さないなんて薄情だわ、あなたの周りに、誰もいないってわけでもないのに！」

カミラでなくとも、ギンターやクラウスならば、アロイスの話を聞いてくれるだろう。一緒に考えてくれるし、力になるうとしてくれるはず。

なのにアロイスは、自分から誰かの手を振り払い続けてきた。恐怖が、過去への罪悪感が、両親の呪縛が、アロイスを誰も彼もから遠ざけてきた。

少し顔を上げればわかるはずのことなのに。アロイスの両親はもういない。彼の周りには、彼を見てくれる人がいる。アロイスが、自分で得てきた信頼だ。

「カミラさん」

アロイスは、不意にカミラに腕を伸ばした。そうしながら、再び目に涙を浮かべる。こらえようもなく、零れ落ちる。しかし喘ぐように息を吐き、嗚咽を飲み込む。

「僕は変わりたい」

唇を噛み、顔をゆがめながら、アロイスはつぶやいた。

「このままではいられない。僕は変わりたい。変わりたい。カミラさん」

カミラの体を、アロイスはぐっと引き寄せる。背中の手を回し、きつく抱きしめられていることに、カミラは少し遅れて気が付いた。「な、なんです」

目を見開き、慌てて逃れようとしても、アロイスは離さない。唇を引き結び、涙を流すアロイスの顔がすぐ傍にある。

九年。あるいはもっと長い間。アロイスの耐え続けてきた涙だ。

「カミラさん」

アロイスはかたく目を閉じる。銀のまつ毛に涙がたまる。声を上げず、涙だけが零れる姿に、カミラはそれ以上、なにも言えなかった。

黙って、カミラはアロイスの横顔を見る。抱きしめられていることさえも忘れて、息を呑んで見つめる。

少年から大人へと変わるための涙は、透き通っていて、燭台の火にかすかにきらめく。まるで羽化をする蝶のようだった。

「カミラさん、傍にいてください。王都へ戻らないでください。僕の周りは危険が溢れています。ここは清い地ではありません。あなたを傷つけるものがたくさんあります。それでも」

かすれた声で、アロイスは静かに、しかし確かに言った。

「傍にいてほしい。あなたの傍で、僕は変わりたい！」

魔力は、いつの間にか収束していた。

荒れ果てた過去の遺品だけが、部屋に痕跡を残す。

なにかが抜け落ちたような空虚さの中。

ただ、カミラを抱く力だけが、鮮明だった。

「お恥ずかしいことをお見せしてしまいました」

少し気持ちが落ち着いたのだろう。アロイスが、ばつが悪そうにそう言った。

「あなたには、恥ずかしいところを見せてばかりです」

言いながら、アロイスは抱きしめていたカミラを解放する。ようやく失せた近すぎる他人の感触に、カミラはほっと息を吐いた。

悪女の噂とは裏腹に、カミラは父と叔父の以外の異性に抱きしめられたことはない。カミラにとって長らくユリアン王子以外は眼中になかったのだから、当然である。

おかげで、生きた心地がしなかった。今でも妙な気分だ。

「いえ。まあ、私も少し前に似たようなことをしましたし……」

アロイスから若干離れつつ、カミラはそう言った。ブルーメでの花畑で、カミラとアロイスは全く逆の立場だった。

あのとき、アロイスは話を聞いてくれたのだ。だから、今回カミラが話を聞く番だったのだろう。

距離を取るカミラに、アロイスは苦笑した。涙のあとの残るその顔は、憑き物が落ちたように、どこかすっきりとして見えた。

その表情のまま、アロイスは思い出したかのように顔を上げた。カミラから視線を逸らし、苦々しく見つめる先は、部屋に飾られた肖像画だった。

「……僕はきつと、両親の忌み子なんです」

色褪せた家族の肖像。アロイスの暴れた魔力は、たった一枚しかない肖像画にも爪痕を残していた。斜めに大きく引き裂かれ、修復もこんなだろう。

それがかえって、彼の気持ちの整理を付けたのかもしれない。

「不義の子か、あるいはそもそも、血のつながりもなかったのかも

しれません。うすうす、感づいていることでした」

肖像画のモンテナハト卿は、瘦身で病的に青い。近親婚を繰り返した故、体も強くなかったという。痩せたアロイスとは、髪色くらいしか似ていない。

夫人は、繊細でなやかな女性だった。優雅で品がある。柔和な雰囲気はアロイスに似ているかもしれないが、あくまでもそれは雰囲気だ。

「だからこそ、認められたいと必死になっていました。両親の死後は、余計に。罪悪感もあるのでしょうか。僕の場合はきつと、もつと幼い感情でした。子供の気持ちのまま、両親に認められたいと考えていたのです」

いつだったか、カミラはアロイスに家族の話聞いたことがあった。彼の語る両親の姿は、優しいものではなかった。それでも愛情を探して、肖像画を飾り、過去の記憶を守るこの部屋を生み出したのだ。

その過去は、今はもう、アロイスの魔力で崩れてしまっている。

「でも、父も母もつくにいませんでした。僕を縛り付けているのは、僕自身。僕の魔力は、僕の意味で封じたものです。自業自得、って言うんでしょうか」

アロイスはそういうと、軽く頭を振った。それから不意にカミラの顔を見て、痛ましそうに眉をしかめる。

「すみません、カミラさん。あなたを傷つけてしまいました」

「こんなもの、傷にも入らないわ」

カミラは顔に付いた傷を撫で、ふん、と鼻を鳴らした。だが、アロイスの表情は晴れない。

「……………不安なんです。またあなたを傷つけてしまうのではないかと。僕の魔力も、僕を取り巻く環境も、安全であるとは言えませんが。きつとこの先、あなたの身を脅かすことも起こるでしょう」

「だから、やっぱり帰れって言うんですか」

カミラが言えば、アロイスが口ごもる。迷いに満ちたその表情が、

カミラはじれったかった。

「あああ！ もう！」

アロイスがなにか答えるよりも先に、カミラの我慢が持たなかった。かかとで床を叩くと、カミラは立ち上がる。そうして、驚き見上げるアロイスに詰め寄ってこう言った。

「じゃあ、私のとっておき！ おまじないをしてあげます！」

「……………はい？」

「呪いを解く魔法です。私がたった一つだけ使える、秘密のおまじない。これでアロイス様の過去の呪縛と、心配性を解いてあげましょう！」

そう言つと、カミラはアロイスに向けて指を突きつけた。

指先に、カミラの乏しい魔力が集まる。魔法と言うには力が足りず、本当に、おまじない程度にしか役に立たないものだ。

けれどこれは特別。カミラがこれを、人に見せたということが特別なのだ。

カミラの描く魔法は解呪。いつか、アロイスがニコルの魔法を解くために見せたものと、寸分たがわず全く同じ。

描かれた魔法はアロイスに向かい、なにを起こすでもなく消えていった。

「……………今のは」

アロイスは瞬き、向けられた魔法の行方を確かめるように、自分の胸に手を当てた。

続けて、カミラの指先を見た。さすがは魔法に精通した人間、すぐに気が付いたらしい。

「王家の術式ですね。どうしてカミラさんがそれを？」

そう。解呪の魔法は数あれど、その魔法の組み立ては一つ一つ異なる。広く知られた魔法もあれば、その血族にしか伝わらない、門外不出の魔法もある。

王家の術式はその一つ。魔力の出し方、描く文様は、王家だけの独自の癖があり、一度見ただけでまねできるものではない。

「教えてもらっただけです、子供のころ」

アロイスは、「誰に」とは尋ねなかった。

「ユリアン殿下に、ですね」

「ええ。最初に魔法を使った相手も殿下でした。はじめは普通の男の子みたいだったのに、殿下の母君様からかけられていた魔法を解いてみたら、銀の髪に赤い目なんですよ。それで私は、相手が殿下だったと気が付いたんですよ」

あんなに驚いたことは、後にも先にもない。魔法をかけられたときの姿でさえ、きれいな男の子だと思っていたのに、本当の姿はそれをさらに上回る美貌だった。瞳に魅了の魔法があるとされていたが、そこには多少なりとも、容姿による補正があったのではないかと思われる。第二王妃が彼の容姿を隠したのは、そういう理由だったのではないだろうか。

もつとも、カミラには本当の姿なんて、たいしたことではなかった。その姿を見る前から、彼がビスケットを美味しいと言ってくれた時から、カミラは魅了されていたのだ。

「『どんな姿になっていても、自分だとわかるように』と殿下は魔法を教えてくださいました。だから私は、この魔法は殿下だけにって決めていました。本当に、内緒の魔法なんですよ」

「内緒……それを、僕に？」

「そう。アロイス様に。これで、私の秘密はすべてお話ししました。私の胸に秘めたユリアンさまのことも、ぜんぶ。　　どうです、このおまじない」

カミラが言えば、アロイスが笑った。カミラのおまじないは、解呪の魔法だけではない。彼女の過去まで含めた、『とっておき』なのだ。

これは、アロイスだけの魔法ではない。カミラの過去もほどく魔法だ。王都での思い出。王都への未練。カミラにしがみついた過去を遠いものにするための、たった一度しか使えないもの。

「ありがとうございます。僕は

私は、それに応えなければ

いけませんね」

その意味を受け止め、アロイスは目を細める。

「『変わりたい』ではなく、変わらなければなりませんね。あなたを傷つけず、きちんと守れるように」

それはいつも通りの柔和で、穏やかな それでいて、いつもと違う。大人びた男の表情だった。

カミラはしばしのあいだ視線を受け、妙な照れくささに顔を逸らしかけ それが悔しくて、かえってアロイスを睨み返した。内心で自分の頬を叩くと、腰に手を当てて胸を反らす。

見下ろすようにアロイスを見上げ、カミラは強気な声で言った。

「当前だわ！ 妻を守れもしない相手と、結婚なんてできないもの！」

「はい。努力します。あなたの結婚相手に、ふさわしいように」

カミラの強がりに、アロイスは素直にうなずいた。

細められた赤い瞳は優しく、偽りなく、どこまでも真摯だった。

物置に用意されていた料理は、魔力の暴走の中でいつの間にか皿ごと割れていた。

ひどく散らかった物置は、他の壊れたものとともに、翌朝までにはメイドが片付けたらしい。

執務室も同じだ。アロイスが割った皿も、料理の痕跡も消えている。

とはいえ、あの騒動だ。細やかに掃除をする余裕はなかったのだろう。棚の下や物陰などに、割れ物の破片が残っている。そのことを、アロイスは咎めるつもりはない。

あれから一晩。朝の日の差す執務室で、アロイスは一人考えていた。

散々な醜態をさらしたせい、かえって頭はすっきりとしている。今朝、朝食として出された料理に、父の皿が使われていても、もう戸惑うことはなかった。自分の胸の中にある、父と母の幻影が、薄れていくのを感じていた。

一方で、アロイスの中に眠る魔力が目覚め始めているのも感じていた。自分で封をしていた魔力が、内側からあふれだそうとしている。だが、制御できないものではない。いずれは体にもなじむのだろう。

変化への不安はある。反発を受けることは間違いない。けど今は惑わされず、目の前のことを一つ片付けようと思うことができる。それはきつと、カミラのおかげだ。

まずはひとつ、今まさに直面している問題を考えよう。
アロイス自身に盛られた、毒のことだ。

○

「アロイス様！ お部屋にいないと思ったら、こんなところで！」
執務机を前にして、椅子に座るアロイスを見つけると、カミラは叱りつけた。アロイスの執務室。カミラは入室の許可を取るなんてまだるっこしいことはせず、扉を開けるなり部屋に足を踏み入れた。
「もう歩き回って大丈夫なんですか。こんなときに、まだ仕事をするつもりですか！」

安静とはなんだったのか。念のためとはいえ、医者に言われた昨日の今日で、アロイスは朝早くからベッドを出て、こんなところにいる。朝一番に見舞いに行き、もぬけの殻のベッドを見て、慌てて探していた自分が馬鹿みたいだ。

「朝食だって口にされていないって、聞きましたよ！ まあ、お食事はあれですが！」

アロイスの朝食は、毒を警戒うんぬん以前の問題として、安静が必要な人間に出すような代物ではない。相変わらず油だらけの塩だらけで、おまけに砂糖も山のようにある。今まで、食べ続けてきたのが異常なのだ。

アロイスは苦笑する。言い訳めいた顔で口を開き、立ち上がろうとした。

が、彼の口が言葉を紡ぐことはなかった。

「アロイス様、その女からお離れください！」

それよりも先に、メイド頭が険しい顔で飛び込んできたからだ。

メイド頭の背後には、数人のメイドが控えている。他にも上級使用人である従僕が何人か、護衛めいた様子で、彼女について執務室に入ってきた。

みな、一様に表情が険しい。特にカミラを見る目は、冷たい敵意に満ちていた。

アロイスに離れるように告げた、『その女』とは、間違いなくカミラのことを示している。メイド頭の傍に控えた男たちは、カミラを警戒しているようだった。

「なによ」

身に覚えのないカミラは、メイド頭を睨みつけた。だが、彼女はカミラに見向きもしない。視線はアロイスにだけ向かい、彼にだけ訴える。

「あなたに毒を盛ったのはその女です！ あなたを亡き者にして、モンテナハト家乗っ取るつもりだったでしょう！ やはり噂通りの毒婦でした、汚らしい！」

「……………どうということだ？」

アロイスが眉間にしわを寄せ、低く尋ねる。メイド頭はその反応も心得たりと、大きく一つ頷いた。

「証拠が見つかったのです！ この女が、あなたの料理に毒を盛ったという証拠が！」

そう言つて、メイド頭は懷から一つ、小さな白い箱を取り出した。カミラは思わず、あつと声を上げる。

彼女の手収まるのは、装飾の施された繊細な箱。見間違えるはずがない。ずっと探していたのだ。

「それ、私のだわ！」

クラウスからのもらいもの。砂糖漬けのゼーンスフトの花が入った、白いお菓子箱だ。いつのまにかなくなっていたはずなのに、今はなぜか、メイド頭の手の中にある。

「そう。白状するのですね。この箱が自分のものだ！」

「私のものだけど……白状ってなによ」

「箱の中身は言えますか」

「中身って……ただの砂糖漬けの花よ」

カミラの答えに、メイド頭たちは目配せをする。予想通りだった

らしい。驚きはなく、神妙な様子だった。

「……私は昨晚、アロイス様の元へ料理を運びました」
不意に、メイド頭はそう告げた。

「厨房から出た料理は、従僕たちが味付けします。私はお飲み物と共に、料理をここににいるメイドたちと共に運びました。そうですね？」

メイド頭がそう言えば、彼女の傍にいたメイドの内の二人が頷く。二人とも、まだ若いメイドだ。本来であれば、アロイスへの給仕ができるような身分ではないはず。眉をしかめるカミラの一方で、二人のメイドもまた、このただならぬ雰囲気怯えているようだった。

「どんな料理であつたか話さない」

メイド頭に言われ、メイドたちは顔を見合わせた。怯えた様子の二人の内、背の高い方がおずおずと歩み出る。

「……お肉のお料理でした。お皿にいっぱいのお肉と、付け合わせの野菜と、飾りのお花。お花は、お皿の中の脂 スープに沈んでいました。色あせて、色が抜けたのか……私には白っぽく見えました」

「そう。花」

メイドの言葉に、メイド頭は頷く。それから、今度は上級使用人の一人に顔を向けた。

「この花はどこで盛られましたか？ 話さない」

命じられて語り出すのは、中年の従僕だ。彼はメイドとは異なり、物怖じすることなく話し始めた。

「私が味付けをするとき 厨房から料理が出されたときには、すでに飾られておりました。間違いありません。私はその花ごと、旦那様の皿に盛りつけをし直し、味を調えました。そしてそれを、メイド頭に引き渡したのです」

「……花がなんだって言うのよ」

いらいらしながらカミラは言った。遠回しなメイド頭のやり方が

気に障る。花があるからなんだと言うのだ。だいたい、どうしてカミラの砂糖漬けが、アロイスの料理に関わるのだろうか？

「しらじらしい！」

カミラの反応に、メイド頭は吐き捨てた。そのくせ、我が意を得たりと言いたげな、隠しきれない自信が見える。

「これを見なさい！」

メイド頭は声を上げ、小箱のふたを開けた。そして、中身をアロイスとカミラに見えるように傾ける。

「この花こそが毒！ スープに浸し、料理を劇薬に変えた原因です！」

中にあるのは、カミラの知る砂糖漬けの白い花ではない。

花の形だけは、ゼーンズフトに少し似ている。だが、色は鮮やかで蠱惑的な赤。

血の滴にも似た、毒花だった。

小箱に詰まった毒は、一見すればただの花。

しかし、実際には、花には加工が施されている。表面に赤い毒を塗り、水に浸して溶け出すようになっていたのだ。

小箱の中身を見つけたとき、メイド頭はすぐにピンと来た。見た目の毒々しさ、甘ったるい奇妙な香り、そしてなにより、カミラが持っていたと言うこと。

すぐに毒に詳しい従僕に調べさせ、その真偽は判明した。

「やはり、噂通りの女でした」

メイド頭は汚らわしそうに小箱を閉じつつ、そう語った。それから従僕たちを見回し、息を吸うと、断固とした声で命じた。

「捕らえなさい。すぐに牢へ閉じ込めるのです！」

「待て」

アロイスは椅子から立ち上がり、動き出した男たちに制止の声を上げる。が、それよりももちろん、カミラの我慢の限界が早かった。「勝手なこと言うんじゃないわ！ 私がアロイス様に毒を盛ったですって！？」

アロイスの声もかき消して、カミラはメイド頭に怒鳴る。

「私のじゃないわよ！ 知らないわ、そんなもの！」

「あなた自らが、これを自分のものだと言ったのです！ しらを切り通せるとお思いですか！」

「中身が入れ替わっているのよ！ だいたい、その箱は失くしていったはずなのよ！」

カミラが箱を失くしたことに気が付いたのは、アロイスが毒に倒れる少し前。誰かが盗み、中身を入れ替えるには十分な時間がある。では、なぜ、中身が入れ替えられている？ 難しいことではない。毒を盛ることはなくとも、王都にいたころは、似たようなことがい

くらでもあった。

「誰かが、私を犯人に仕立て上げようとしているんだわ！」

「いけしゃあしゃあと！　いったい誰が、あなたを犯人にしようなんて言うのです！」

メイド頭がその声を上げた時だった。

「これは一体、なんの騒ぎですか」

騒然とする執務室に、冷徹な声が響く。無感情な癖に吸引力のある声に、メイド頭もカミラも、他の使用人たちも、一斉に声に顔を向けた。

「アロイス様のお部屋です。慎みなさい」

鋭い視線で使用人たちを見回したのは、鉄のような無表情。侍女長であるゲルダだ。

彼女の威圧に、メイド頭は肩をこわばらせ、しかし頑として口を閉じなかった。

「ゲルダ様！　お聞きください！　この女こそが犯人です！　この女が、アロイス様に毒を盛ったのです！」

「違うわ！　私はなにもしていないわよ！」

「証拠も証人もいます！　この女、料理に添える花に細工していたんですわ！　毒の花に変えていたんです！」

「そんなことしないわ！　だいたい、どうして私がアロイス様に毒を盛らなきゃいけないのよ！！」

ゲルダは、大声で喚く二人の女を交互に見やった。こんなときにも彼女の顔に驚きはなく、ただ淡々と言葉を受け付けるだけだ。

「なるほど、事情は分かりました。毒は見つかったのですね。料理に添えられた花と。たしかにその花は、アロイス様が倒れられた際に、私も見つけていました」

ゲルダはメイド頭に頷いて見せる。メイド頭は安堵したようにゲルダを見やり、微かに頬を緩めた。ゲルダがどちら側に付いたのか、

言葉からわかったのだろう。

「お部屋を汚すわけにもいかず、すぐに片付けるように命じましたが、あの時調べておくべきでした。私の失態です。いえ、そもそもこの女をアロイス様の傍に置いたことこそが、過ちでした」

「ま、待ちなさい！ 私じゃないわ！ 勝手に決めないでよ！！」

話をまとめようとするゲルダの声を、カミラはさえぎった。ゲルダの口ぶりは、もうカミラを犯人と断じている。考えてみれば当然で、彼女がカミラの味方をするはずがなかったのだ。

「そもそも、理由がないじゃない！！ アロイス様を害して、私になんの得があるって言うのよ！！」

「理由はあるでしょう。アロイス様はここしばらく、あなたを避けられていました。あなたとの結婚を白紙とし、王都へ送り返すという話も聞いています」

激昂するカミラとは対照的に、ゲルダの声は低く、落ち着き過ぎていた。

「公爵家との結婚がなくなることが、怖かったのでしょうか？ 殿下はあなたを嫌悪し、シュトルム伯爵夫妻はあなたと縁を切り、養子を取られたと聞きます。王都には、あなたの帰る場所などありません。だから躍起になって、嫌がるアロイス様を追いかけて続けたのでしょうか」

「ゲルダ、誤解だ。私が彼女を避けていたのは、単に私の気が滅入っていただけだ。彼女を王都に帰すつもりも、今はない」

口を挟むアロイスに、ゲルダは首を振る。アロイスの反論は、彼女の推測になんの瑕疵かしも与えない。

「アロイス様のお考えは関係ありません。アロイス様にその気がなくとも、この女がそう受け取ったのであれば、それが彼女の真実。彼女はアロイス様に捨てられると思い、毒を盛ったのです」

「……私を殺しては、結婚もできないだろう」

「ええ。ですが、生きていらしても結婚はできない。それなら殺してしまった方がよいと考えたのかも知れません。もし生き延びるこ

とができたのであれば、弱ったあなたの支えとなり、あなたのお気持ちを変えることができます」

アロイスは眉間にしわを寄せ、口をつぐんだ。腕を組み、思案の瞳でゲルダの語りを見つめる。

「実際に、あなたは今、彼女の思惑に嵌ろうとしているのです。この女こそが毒そのもの。あなたに盛られた真つ赤な毒の花とは、まさにカミラ・シュトルムのこと。王都を乱した、狡猾な手腕なのです」

ゲルダはアロイスに歩み寄り、断固とした様子で言った。背筋は伸び、顔は高く前を向き、その瞳はけつして揺らがない。言葉には力があり、理知的な顔は決して間違いないと思わせる。陥れられようとしている張本人でなければ、カミラだって信じてしまったかもしれない。

実際、使用人たちはゲルダの言い分に納得をしているようだ。頷き合い、カミラへ恐れるような、嫌悪するような暗い視線を送っている。

「アロイス様……」

違う、と言うつもりで、カミラはアロイスを仰ぎ見た。だが、彼はカミラを一瞥しただけで、すぐにゲルダに視線を戻す。

その固い表情には、押し殺した悲しみが見える。まるで、裏切りを突きつけられたような、失望にも似た表情だ。

出しかけた言葉を、カミラは思わず飲み込んだ。黙ったカミラに代わり、アロイスがゲルダに問う。

「……毒は、厨房から出された料理には、すでに添えられていたと聞いた。厨房には料理人たちがいたはずだろう。見とがめられないはずがない」

「いいえ。この女は、長らく厨房へ出入りしていました。料理長とも懇意だったと聞きます。飾りの花を添える程度、見逃されてもおかしくはありません。思えば、最初からそのつもりで、厨房に出入りしていたのかもしれませんが。周到な女です」

「なるほど」

アロイスは一度目を閉じ、腕を組んだまま頷いた。

「筋は通っている」

「アロイス様！？ 私はそんなこと

」

するはずがない。アロイスなら分かってくれるはずだ。カミラがアロイスの立場なら、どんな状況でも絶対に信じない。

「動機もある。毒を盛る機会もある。なにより証拠が揃っている。たしかに、あまりに疑わしい。お前の言い分はよくわかった」

だが、アロイスは違ったのだ。彼はゲルダに肯定を返す。ゲルダは素直に、その反応を受け止める。

長年、主人と使用人として勤めてきた絆とでも言うのだろうか。愕然とするカミラの前で、アロイスは深く息を吐き、なにかも諦めたように口を開いた。

「だが、ひとつ気になることがある。ゲルダ」

失望と、悲しみと、裏切りと、奇妙な確信をないまぜにした表情。その表情を、彼はゲルダに向けていた。

「お前はなぜ、花の色を知っている？」

ゲルダはたしかに、『真つ赤な毒の花』と口にした。

だが、メイド頭の持つ小箱は、ゲルダが来る前に閉じられているのだ。

「花の色？」

アロイスの言葉を、ゲルダは繰り返した。ゲルダは片眉を上げただけで、その顔には驚きも戸惑いもない。

「私が知っていることの、なにがおかしいと言うのです。アロイス様が倒れた際に、私も見たと言ったはずです」

澄ましたゲルダの代わりに、メイド頭と、彼女の連れた従僕の一人在が青ざめる。調味をしたと証言した、あの男だ。

アロイスの視線から逃れるためか、二人は顔を隠すようにうつむいている。

アロイスにまっすぐ顔を向けたままの、ゲルダの表情だけが変わらない。花の色は赤。それを彼女は疑っていないのだ。

「……私が倒れたときか」

食事に盛られた花を思い出しながら、アロイスは静かに息を吐く。「あのとき、私はとつさに、花を隠した。毒だと思ったわけではないが　連想を避けるためだった」

アロイスは、花にカミラの面影を見ていた。直近で花の町ブルーメに行ったこともあり、カミラと結びつけやすい。当時、そこまで考えていたかどうかは思い出せないが、カミラをかばう意図があったのは覚えている。

花はアロイスの手の中で面影を失くした。加工された花はもろく、手の中で砕け、一見しても花とは判別がつかない姿になった。

それをゲルダは、命じてすぐに片付けさせたと言ったのだ。

「お前は本当に、あの場で花を見たのか？」

「……おそらく、隠し損ねたのでしょう。私は、たしかにこの目で花を見ました。あなたを害した毒の花を」

「あくまでも言い張るのだな？」

アロイスは確かめるようにそう言うと、ゲルダから視線を逸らした。

彼の目は次に、メイド頭に連れられてきた、年若いメイドたちに向けられる。

「先ほどの話をしてくれるか」

二人のメイドは顔を見合わせた。迷うようなメイドたちを、メイド頭が言葉もなく睨みつける。メイドたちは怯えたように体をすくませるが、それがかえって決意を刺せたらしい。互いに頷き合うとはっきりと告げた。

「私たちがアロイス様の元へ料理を運ぶとき　赤い花はありませんでした。添えられていたのは、色褪せたような白い花だけ。間違いないありません！」

「そういうことだ。おそらくは、毒の花は途中で色が抜けるのだろう。私が見たときも、すでに色は白くなっていた」

だからこそ、ブルーメでのカミラを思い出させたのだ。白い花畑。白い花冠。彼女はアロイスの中で、あれからずっと白い花だった。

「ゲルダ、もう一度聞く　お前は本当に花を見たのか？」

ゲルダは答えない。

黙って背筋を伸ばし、アロイスを見据えている。表情は　かすかに強張っている。

「見ていないのであれば、なぜ花を見たなどと言った？　なぜお前は、見ていないはずの本来の色を知っている？」

口には出さずとも、アロイスの意図はゲルダ　ゲルダたちに伝わっているだろう。ゲルダは毒の色しか知らない。それはすなわち、彼女自身がアロイスに毒を盛ったわけではないということだ。

協力者がいるのだろう。ゲルダの代わりに毒を盛り、ゲルダの身代わりを作り上げる人間が。

「ゲルダ様　」

メイド頭が、微かな声でゲルダを呼ぶ。その声を消すように、ゲルダは口を開いた。

「色など些末なこと。きつと記憶違いです。毒という事実から、赤を連想し、そう思い込んでしまった。よくあることでしょう」

声は確かで、相手を一喝するような響きだった。

「これだけの証拠があり、これだけの証人がいるのです。私の誤りひとつで、なにが変わりましょう」

「記憶違いを認めるのであれば、他の者たちにも同じことが言えるはずだろう」

他の者たち。アロイスは誰とは言わず、カミラにとって不利な証言をした二人を順に見やる。

「小箱はどこで見つけた？」

最初は、メイド頭だ。アロイスの問いかけに、彼女はほんの一瞬だけためらい、それから台本を読むようによどみなく答えた。

「あの女の部屋にございます。小箱が部屋にあることは、掃除をするメイドたちはみんな知っております」

「そんなはずはないわ！ その箱は失くしたのだもの！ アロイス様が倒られる、何日前に！」

とつさにカミラは、メイド頭の言葉に反論する。

「ニコルだつて一緒に確認したのよ！ 嘘だと思ふのなら、ニコルに聞いてみなさい！」

「ニコルなど、屋敷に来たばかりの出来の悪い新人ではないですか！ あなたに親身な小娘の言葉など、信憑性はありません！」

「いや」

二人の言い合いを止めたのはアロイスだ。

「有能な侍女長でさえ、記憶は誤るものだと認めた。ならば、信憑性は人に寄らないということ。若い侍女の言葉も、お前の言葉も等価値だ」

「アロイス様……！」

信じられない、と言いたげにメイド頭はアロイスを見やった。メイド頭は屋敷の使用人の中でも、高い地位を築き上げてきた者の一人。未熟な元部下メイドと同じと言われ、誇りを傷つけられたのだろう。

「箱は彼女の部屋ではなく、まったく別のところから見つけてきたものだ。それを『記憶違い』で、彼女の部屋から見つけ出したと言ってしまったのかもしれない」

「そんな……！」

傷ついたメイド頭から、アロイスは目を逸らす。次は従僕だ。視線を向けられ、従僕はぎくりとしたように体を強張らせる。

「厨房から出た料理に、すでに花が乗っていた。これも『見間違い』かもしれない。一人の言葉だけではなく、厨房の者たちにも話を聞いてみるべきだろうな」

「あんな、ならず者どもを信じると!?」

従僕は悲鳴じみた声を上げる。厨房は、アロイスが見出したギュンターをはじめ、ブランド家の人間が多い。ブランド家は他家に疎まれ、没落した貴族家。料理の腕は高くとも、他家にとっては唾棄すべき一族だった。

「彼らの記憶の方が正しいこともあるだろう」

ゲルダが言葉をひるがえすとは、すなわちそういうことだ。『たしかに見た』とまで言いながら、それを言葉尻と言い、記憶違いと流せるのであれば、他の者の言葉も同様だ。信憑性など塵に等しい。「アロイス様。私の記憶違いで惑わせてしまいました、その女の疑わしさが失われたわけではありません」

口をつぐんだメイド頭と侍従に変わり、ゲルダは再び口を開いた。「私どもは、長年屋敷に仕えてきました。モンテナハト家に忠誠を誓い、尽くしてきたのです。まだ互いも知らない相手と、どちらの言葉が信ずるに値するか　賢明なご判断をくださいませ」

手を前にして、ゲルダはアロイスに一礼する。その仕草だけで、彼女が折り目正しい、素晴らしい使用人だとわかるだろう。

「……確かに、お前は忠実だった」

モンテナハト家のために尽力し、モンテナハト家を第一と考え、休みなく働いた。屋敷の管理を取り仕切り、余すことなく目を配り、使用人一人ひとり、備品の一つに至るまで、ゲルダの知らぬことは

なかった。

ゲルダは若いアロイスにとって、頼りになる人間だった。彼女のかたくなさ、閉じた思考は厄介であっても、屋敷を担う手腕に間違いはなかった。だからこそ、彼女は今も屋敷を任され続けているのだ。

「だが、お前が忠実であつたのは、『モンテナハト家』だ」

彼女の主人は、あくまでも家。モンテナハト家のためであれば、アロイスを殺すことさえ厭わないだろう。

「私はお前への疑惑を消すことができない。お前の話は、確かに筋が通るのだろう。だが、お前が私に毒を盛ったと考えても、筋を通すことはできる」

赤い花は今、カミラの証拠にも、ゲルダの証拠にもなりうる。確定的な判断材料が無くなった今、残っているのは二人へ向かう疑念だけだった。

カミラか、ゲルダか。あるいは弱気に、不問にするか。

ゲルダは決定をアロイスにゆだねた。この場の結末は、アロイスの心ひとつで決まる。

「短い間でも、私は彼女という人間を見た」

ゲルダの言う通り、カミラがアロイスに毒を盛ることはできただろう。

だけど、カミラはそんなことをしない。根拠はどこにもない。ただ、アロイスが見てきたカミラの人物像だけが、そう思わせるのだ。グレンツェで、アインストで、ブルームで。この屋敷の中で。アロイスは様々なカミラを見てきた。

短気で、怖いもの知らずで、高慢かと思えば、花のように清い。感情豊かで、よく怒り、よく傷つき、よく笑う。清濁を併せ持った、アロイスにとって誰よりも人間らしい人間だった。

この屋敷で、感情を殺し、表情を隠し、優しさも厳しさも飲み込んだアロイスとは、正反対の人間だった。

アロイスは顔を上げた。しがみついた過去。古い記憶。恐れ、迷い、ためらいを払う。

ゲルダこそは、この屋敷における父の象徴だ。父を今も『旦那様』と慕い続ける使用人たちのとりまとめ。苦痛の過去にして、アロイスの支えの一つだった。

だが、それも捨て去るときだ。アロイスは過去の呪縛に、長くとられ過ぎていた。

「彼女とお前たち。どちらかを選ばなければならないのであれば、私は彼女を信じよう」

古い時代はとくに終わった。

今はアロイスこそが、モンテナハト公爵なのだ。

5 - 終章

メイド頭がカミラを捕まえるために連れてきた従僕たちは、逆にゲルダたちを捕らえることになった。

愕然とするメイド頭と中年従僕とは対照的に、ゲルダはこんな状況でも、落ち着き払っていた。

ただ、アロイスを見据える視線だけが、彼女の感情を感じさせる。時折カミラに向けるものと同じ、憎悪と嫌悪を孕んだ視線だった。

「愚かな 愚かな選択です」

ゲルダの言葉は静かだった。捕らえられながらも一切の抵抗をしない様子が、かえって不気味だった。

「私がどれほどモンテナハト家に忠実であつたか、いずれ知ることになるでしょう」

執務室の外には、騒ぎを聞きつけた使用人たちが集まっていた。

使用人を束ねるゲルダの捕縛に、誰もが戸惑っているようだ。

従僕に引かれ、ゲルダは大人しく執務室を出る。彼女はそのまま、領内の別邸に軟禁されることになる。だが、それも罪が確定するまでのこと。十分な証拠や証言を集めたのち、彼女は領内の裁判にかけられることになるだろう。その先は、彼女のしてきたこと次第だ。そのことを悲観するでもなく受け入れ、彼女は去っていく。

物見高い野次馬にも、ゲルダはほとんど目を向けなかった。だが一人だけ、一度だけ、彼女は足を止めた。

「あとのことは、すべて任せます」

相手は、ゲルダと同じだけ長い使用人歴を持つ、家令のウィルマ―だ。短く視線を交わし、端的にそれだけを言うと、もう彼女は振り向くことも、足を止めることもなかった。

○

そういうわけで、それから数日間、屋敷は大変な状態だった。

侍女長もメイド頭もいなくなったのだ。女性使用人を束ねる二つの頭がいなくなり、使用人たちの困惑も計り知れない。アロイスはおかしくなったのではないか、とまで囁く人間がいるくらいだ。

だが、二人の抜けた穴を、そのアロイス自身が埋めていれば、誰も文句は言えまい。彼は今、使用人たちを一人ひとり見て回っているらしい。

「一度、屋敷の者たちを見直す必要がありますね」

ゲルダの捕縛騒動の翌日、久々に食事を共にした際に、アロイスはカミラにそう漏らしていた。

「父の代からいる人間は特に。骨は折れますが、長年放っておいた自分の責任です」

アロイスは見るからに疲れていた。もはや安静する気も暇もなく、働き続けているのだから当然だ。

手伝いたい　と思えども、カミラの身分は未だモンテナハト家の客人である。客人に口出しする権利はない。

ならばどうするか。

その答えは、たぶんずいぶん前から出ていたのだと思う。

問題は、どうやって告げるかだ。

○

「上手くならねえなあ」

いつもの厨房。カミラの焼いたビスケットを手に、ギョンターは呆れた声で言った。

「私は好きですけど。素朴な味で」

ここしばらく、すっかりカミラのビスケット消費係となったニコルが、さくさくと食べながらそう言った。あまりの量にさすがに食べきれず、ニコルは元メイド仲間にも配っているらしいが、それもなかなか好評らしい。

が。

「素朴な味じゃ駄目なのよ」

ニコルの感想に、カミラは渋い顔をする。素朴な味。それはつまり、素人の味に等しい。

アロイスは過去を乗り越えた。最後のしこりを捨てるかのように、体に残った贅肉をそぎ落とし、アロイスはここ最近のうちに、みるみる痩せていた。屋敷の人々の見る目も、変わったように思う。アロイスを『旦那様の息子』ではなく、『旦那様』として認めはじめているのだ。使用人の選別を断行には反発もあるが、それがかえって、アロイスが主人であることを人々に認識させていた。

それなら、カミラだって過去を置いてきたことを示さねばならない。

アロイス様のビスケットを作るのよ。

美味しいものを作って、昔とは違う証を示す。そこが、カミラが長らく待たせ続けた返事を告げるときだ。

というのは、建前かもしれない。

平凡なものなんて、食べさせられるわけないじゃない！

それなりに料理ができると自負するカミラだ。菓子だけが素人だなんて、自尊心が傷ついてたまらない。

「美味しいものを作るのよ！ もっとしっかり教えなさい！」

「教えられる身でこんな態度のでかいやつ、見たことねえよ」

「それなら、はじめて見るのが私であることを、光栄に思いなさい！」

ふてぶてしく笑うカミラに、ギンターは頭を掻いた。ニコルはくすくすと笑う。休まないアロイスとは裏腹に、厨房は平和だった。もともと、厨房はギンターを筆頭に、アロイスへの信頼度が高い。ゲルダの投獄も、アロイスの決定であるならばと、さほど動揺することなく受け入れられていた。

おかげでカミラはますます厨房に入り浸り、ビスケットの生地を余らせているのである。

だが、平和はここまでだった。

○

ゲルダの捕縛から、半月も経たないころ。急を告げる早馬が走った。

アロイスの統治に不満を抱き、領民が蜂起したのだという。主導しているのはマイヤーハイム家だ。レルリヒ家とエンデ家が同調し、マイヤーハイム家の支配域を中心に、グレンツェを除くすべての都市が、モンテナハト家への反旗を翻した。反乱である。

5 - 終章（後書き）

次の更新は年明け1月半ば以降を予定しています。
5・5話を挟んで次が最終章です。

5・5・1 テレーゼからの手紙

親愛なるお姉さまへ。

カミラお姉さま、ご機嫌いかがでしょうか。あなたのテレーゼです。何度もお手紙を出しているのにお返事がいただけいてないので心配しております。

お体に障りはありませんか？ お元気で暮らしていますか？ 困ったことはありませんか？ お姉さまの様子がわからなくて、私は不安でしかたがありません。

まさか、沼地に浸かりすぎて居心地が悪くなってしまった、なんてことはありませんよね？ ヒキガエルの妻となつたきり、家族も忘れ、手紙も返さないなんて、あまりに薄情すぎるもの。

ああ、いえ、お姉さまならそのくらい、平気でなされるかもしれません。だって、お姉さまが家族を捨てるのは、これがはじめてではありませんものね。

でも、私はお姉さまとは違うわ。

だからきちんと、警告して差し上げます。

これから、お姉さまに危機が訪れます。お姉さま一人の力では、どうにもならないことですわ。いつもみたいにわがママを叫んでも、人に当たり散らしても、誰もお姉さまを守ってはくありません。お父さまやお母さまだって、お姉さまの味方なんてなさらない。みんながみんな、お姉さまの敵になりますでしょう。

でも、私だけは違います。お姉さまが私を妹と呼んで、私の手を取るのであれば、私はお姉さまだけは助けて差し上げます。

だって、家族ですもの。苦しいときに助け合うのが、本当の家族というものでしょう？

私はリーゼロッテさんと親しいから、お姉さまを守って差し上げられます。

かつて、私の手を振り払ったお姉さま。

お姉さまが頼る手は、もうここにしかありません。

そのことを、覚えておいてくださいませ。

あなたのかわいい妹　テレーゼより

5・5・2 遠い記憶

母の愛が、ユリアンを冷たい塔に閉じ込めた。

塔を訪れるものは、ほとんどなかった。父と義母兄が、時折訪ねてくるくらいだ。

塔は母の胎内のようなだった。外の世界を遠ざけ、ユリアンになにも与えず、ただ守り続けた。同じ年頃の子が持つものを与えず、痛みも苦しみも教えない。それはたしかに愛であったのだろう。ただ、どあまりにも、独善的だった。

永遠にも似た母との世界で、ユリアンはずっと、弱りながら死に向かう母の姿を見続けた。母が喪われたとき、ユリアンが悲しみと共に感じたのは、もしかしたら安堵だったのかもしれない。

母の死後、ユリアンは塔を出た。

周囲の視線は、優しいものではなかった。無数の好奇の目は、塔から産まれ出たばかりのユリアンには、あまりに息苦しかった。だけでも、ユリアンの目を覆い隠す母は、もう世界のどこにもいなかった。

○

手作りのビスケットは、素朴な味がした。

食べると、なぜか涙が出てきた。

隣では、ユリアンと同じように泣いている少女がいた。自分よりもずっと小さな子と二人、そろって泣いているのがおかしくて、泣きながら妙に笑えてしまった。

外の世界で、ユリアンははじめて呼吸ができたような気がした。

ビスケットをくれた少女の名前を、ユリアンは知らない。

少女もまた、ユリアンが何者かを知らない。それどころか、少女の目に映るユリアンは、本当の姿でさえもなかった。

魔力を制御できない限り、ユリアンの姿は変わり続ける。母がいなくなれば、誰かが代わりをするのだろう。義母兄や父だって、魔法にかかったユリアンしか見たことがないのだ。ユリアンの真の姿を知る人間は、驚くほどに少ない。

だから 誰かに、覚えていてほしかったのかもしれない。

「もう一度会える？」

そう言った少女に、ユリアンはひとつの魔法を教えた。王家の術式で描く、王家直属の解呪の魔法だ。

少女の描く魔法を、ユリアンは自分自身にかけさせた。

母がかけた魔法のろいが解けていく。

白銀の髪。赤い瞳。王家の特徴を映す顔立ち。

驚く少女に、ユリアンは微笑みかけた。

「きつと、また会えるよ」

ユリアンは立ち上がる。

周囲からは、ユリアンを探す声がした。母の葬儀を抜け出してから、ずいぶんと時間が経つ。ユリアンを呼ぶ声にも焦りが見られた。そろそろ、戻らなくてはならないだろう。

「だから、どんな姿になっても また、僕を見つけ出してね」

そう言つと、ユリアンは少女を置いて、声に向かって駆けだした。

もう、息苦しくはなかった。

5・5・3（終）

「おいおい、親父……それ、正気かよ」

ブルームにあるレルリヒの屋敷。人払いをした当主の部屋で、クラウスはどうにか言葉を吐き出した。

春に似つかわしくない寒気が、クラウスの肩を震わせる。陽の傾いた時間、窓から差し込む斜光が、暗い影を落とした。

クラウスに向かい合うのは、レルリヒ家の現当主。クラウスの父でもあるルドルフだ。青ざめたクラウスよりもなお青白い顔で、彼は怯えたように目を伏せる。

「いきなり軍備を始めたかと思えば、これかよ。伯父さんの野望なんて比較にならないぜ。あんた、自分でなにを言っているのか、わかってんのか？」

きつい口調のクラウスに、ルドルフは小さく首を振る。

「わかっている。これは、モンテナハト家に仕える三家の当主と、それに近いごく一部の人間しか知らない事実だ。我々は、この秘密をなんとしても守り抜かなければならない。と、姉さんはそう言っていた」

「そりゃ、そうだろうな。こんなもん、誰にも言えるわけねえよ……！」

頭を押さえるクラウスを、ルドルフは見上げた。その視線に微かな安堵が含まれているのは、抱き続けた重責をクラウスに押し付けたせいだろう。だが、押し付けられた方はたまらない。

「なんでこんなこと、今になって俺に言うんだよ。ああクソ、どうりで」

どうりで　思い当たる節がクラウスにはある。ずっと疑問に思っていた、ルーカスとゲルダの対立だ。

ルーカスは感情的で癖があるが、御せない相手ではない。野望の

ためには前のめりに動く彼は、むしろ扱いやすい捨て駒だ。ゲルダが適当な知恵を与えてやれば、ルーカスは思い通りに動くだろう。熱意と行動力だけは人一倍あるのだから、利用する価値はありそんなものを、ゲルダは不思議なくらい正面からぶつかり合っていた。扱いにくさで言うのなら、ゲルダが次期当主にと擁立したクラウスの方がずっと上だろう。クラウスはゲルダの言うことを聞く気はないし、彼女の望みをかなえるつもりもない。クラウスには、彼自身にとっての良い町、理想がある。それはおそらく、ゲルダと相対するものだ。

それでもゲルダは、クラウスを選ばざるを得なかった。
「伯父さんは王家も狙っていたからな。絶対に秘密を知られるわけにはいかないってことかよ」

クラウスには分不相応な野望はない。盲目的な熱意もない。大切なものと正義感をはかりにかけ、口をつぐむべきことがあることも知っている。

そしてこの秘密は、隠すべきことだった。レルリヒのために、ブルームのために、そして自分自身のためにも。

「……なあ、クラウス。私はこれからどうすればいい？」

奥歯を噛むクラウスを、ルドルフはぼんやりとした顔で見つめた。子供みたいな口調の父に、クラウスの表情がゆがむ。

ルドルフはさすがのように、子供が親に乞うように、自身の子であるクラウスに呼びかける。

「姉さんがいなくなつて、私はもうどうすればいいかわからないんだ。お前ならきつと、わかるんだろう？　だつてお前は、姉さんが選んだんだから……」

ルドルフの姉、クラウスの伯母であるゲルダは、半月ほど前に捕まった。領主であるアロイスに毒を盛ったのだと、すぐにこのブルームにも伝わった。

レルリヒ家の実際の支配者であるゲルダの喪失。それは意外なくらい、レルリヒ家を乱さなかった。ルドルフは姉が捕らえられると、

騒ぎ立てることもなく、淡々と兵をかき集め始めた。解散させればかりのルーカスの傭兵や、町の人間を捕まえて即席の兵団を作ると、彼は他家と足並みをそろえ、モンテナハト家に反旗を翻した。

反対の声は聞かず、クラウスの静止も聞かずに、わずか十数日でここまでを成し遂げた後。彼は今、途方に暮れていた。

「姉さんは、ここまでしかやることを教えてくれなかった。あとはどうすればいい？ 私はこのまま戦うのか？ それとも何もしなくていいのか？ マイヤーハイムが総攻撃を仕掛けると言っているが、そんなこととして姉さんに、叱られないか？」

ルドルフは、言いつけをよく守る男だった。ゲルダの無茶な言いつけも、難題も、どうにかしてこなしてしまう。能力があり、小器用で、そつがない。傍から見れば、彼はそれなりに立派な貴族の当主であった。

だが、それも今や見る影もない。ルドルフがここまで情けない男だとは、息子であるクラウス自身も知らなかった。傀儡には向いていたが、操るものがなければ、ただの抜け殻だ。

目の前の父の姿は、アロイスを連想させた。

ルドルフは、いつかなるはずだった理想のアロイスだ。カミラに出会うことなく、クラウスが嫌いだったアロイスのまま育ち、自我が消え、思い通りに動く。ゲルダにとつての理想の人間だ。

「クラウス、教えてくれ。お前はきつと、正しい道を選ぶのだろうか？ だから姉さんは、お前を選んだのだろうか？」

ルドルフが弱々しく手を伸ばし、クラウスの両手を握った。

「姉さんはいつも正しかった。私はそれに従うだけで良かった」

「……正しいってなんだよ」

クラウスは握り返すことはせず、震える声を出した。自らの父のことが理解できなかった。

「許されないことだって、わかってんのかよ！ あんたらがしたことは反逆だ！ この国の平和を乱す、罪深いことなんだ！！」

「姉さんが、これが正しいと言ったんだ！ ずっと間違えなかった

姉さんが、間違えるはずがない！」

「そのせいで、俺たちまで危機に晒してんだぞ！ レルリヒだけの問題じゃねえ！ ブルーメも、モートン領も全部、なくなっただけでおかしくないことをしたんだ！」

「私じゃない！！」

ルドルフが、握りしめたクラウスの手の甲に爪を立てる。血が滲んでも、興奮が痛みを感じさせなかった。

「姉さんが考えたことだ！ マイヤーハイム家が指示を出し、エンデ家がそれを実行した！ 私はただ、モートンの伝統に従っただけだ！！」

「だけど、当主はあんただろうが！」

「私は当主だったただけだ！！」

擦り切れるほどの声を上げると、はっとしたようにルドルフは口をつぐんだ。恐れるように周囲を見渡すが、部屋の中には誰もいない。すっかり日の暮れた暗闇の中、クラウスがいるだけだ。

「……仕方のないことだろう？」

ルドルフは息を吐くと、打って変わって媚びるような甘えた声を出す。

「だって、逆らえば我々もブラント家と同じ目に遭う。地位を失くし、町を追われ、隠れるように生きなければならぬ。そんなこと、当主として、父としてさせるわけにはいかないだろう？」

「親父」

自らを握る父の手の強さに、クラウスはめまいがした。

「なあ、クラウス。私にはもうお前しかいないんだ」

暗闇に落ちるルドルフの声は静かで、柔らかい。

「私を導いてくれ。お前の言うことをなんでも聞こう」

クラウスは笑うように顔をゆがめた。きっと本当に、この男はクラウスの言葉通りに動くのだろう。そのために、良いことも悪いことも、すべて正しいと信じてこなす。

それはきつと、幸せなことだ。

「クラウド……」

ルドルフの目は期待に満ちていた。

ゲルダが選んだクラウドは間違えない。

ゲルダの意思を正しく受け継ぎ、ルドルフを幸福な傀儡としてくれる。レルリヒを、ルドルフを破滅から遠ざけてくれる。

そう信じている。

「　　買いかぶりすぎだ、親父」

だけどこの男はわかっていない。おそらくは、クラウド自身も理解していない。

普段から小馬鹿にしている伯父のルーカスと、クラウドは意外と似ている。

「俺が伯母さんの思い通りになるわけないだろう」

クラウドは、自分で思うよりもずっと短絡的で、感情的なのだ。

ルドルフの手を振り払うと、クラウドは手近な飾り棚を蹴り倒し

た。雑貨が音を立てて転げ落ち、飾られていた壺が割れる。落ちた

壺の破片を取ると、クラウドはそのまま、自分の顔を切りつけた。

赤い血が吹き、痛みが走る。こめかみから頬にかけて、慣れない

手は思いのほか深く自分自身を傷つけたらしい。

突然の奇行に、ルドルフは啞然としていた。そのルドルフに、ク

ラウスは自分を切った破片を放る。ルドルフは戸惑いつつも、反射のように破片を手にした。

「クラウド……なにを……」

言いかけたルドルフの言葉を、無数の足音がさえぎった。異常な物音に駆けつけた使用人たちが、勢いよく部屋の扉を開く。

部屋の中にいるのは、傷ついたクラウドと、凶器を持つルドルフだ。なにごとかとざわめく使用人たちに、クラウドは叫んだ。

「こいつを捕まえろ！　いきなり襲い掛かってきたんだ！　気が狂ってやがる！」

クラウドの言葉を、ルドルフはすぐに理解ができないようだった。クラウドの言葉に使用人たちが反応し、一斉に取り押さえる。その間も、彼は無抵抗に瞬き続けるだけだった。

クラウドは手のひらで傷を押えながら、床に押さえつけられたルドルフを見下ろした。こんな状況になっても、彼は否定の言葉一つ発しない。ただ命令してくれる誰かを探して視線をさまよわせるだけの、まぎれもない狂人だった。

「レルリヒは俺が引き受けてやる。後始末をしてやるよ」

自我のないルドルフに、クラウドは吐き捨てるように告げた。

「だけどあんたを楽隠居なんてさせてやらない。自分の罪の重さを知りやがれ！」

たとえ父親だとしても、クラウドはルドルフのしたことを許せない。

それは正義感かもしれない。ルドルフへの失望ゆえかもしれない。一族郎党を危機に巻き込んだことへの怒りかもしれない。

あるいはもっと純粋な 友情のためかもしれない。

○

「兄貴 あんた、自分で傷つけたんだろう」

騒動の翌日。自室で荷物をまとめるクラウドに、勝手に部屋に入ってきたフランツが言った。

「よくわかるな」

クラウドは振り返らずに返す。傷は一通りの手当てが済み、今は血も止まった。だけど口を動かせば、やはり痛む。

「見ればわかる。他人が作る傷は、そうはならない」

「ふうん。……伯父さんに付き合って剣を習っていたときの知識か？ 案外役に立つんだな」

「なんでそんなことしたんだ」

クラウドの軽口を無視して、フ란ツは詰め寄るように言った。それでもクラウドは手を止めない。部屋中をひっくり返しなから、荷物に放り込むのは、傷に塗る薬、痛み止め、簡単な食糧。着替えはいらない。できるだけ荷物は小さいほうがいい。

「これが一番穏便な方法だからだよ」

「穏便？」

フ란ツがいぶかしげに問い返す。クラウドのしたことは、穏便とは程遠い。自ら顔を切り付け、父親を狂人に貶めたのだ。

その父であるルドルフは、現在は屋敷の一室に見張り付きで閉じ込められている。丸一日経った今でも、文句や抵抗をするそぶりは見せず、ただ魂が抜けたように茫然と、部屋で過ごし続けていた。

唐突過ぎる軍備と、意図のわからないモンテナハト家への反逆もあつたおかげで、今や屋敷の人間はクラウドの言い分を信じ、ルドルフを狂人とみなしている。

「手っ取り早く家督を譲り受けるためには、穏便だろう。親父が冷静じゃ、納得しないやつも出てくる。親父のたわ言に耳を貸す人間でも出てきてもいけない。見張りもつけておきたかつたし」

そもそも、まっとうに相続をするためには、時間が足りなすぎた。今すぐ家督を得ること。ルドルフの権力を無にすること。ルドルフを見張ること。すべてまとめて行うには、これが一番早かつた。

「あんた、なにを……」

「俺はこれから、領都に行く」

荷物をまとめると、クラウドはやつとフ란ツに振り返った。クラウドの服は、動きやすい旅装だ。今すぐにでも飛び出していける。「俺がいない間、留守を任せる。親父はしっかり見ておけ。そんな勇氣はないだろうが、万一にでも首をつらせたり、舌を噛ませるな。あいつは証人だ」

「兄貴、なに言っただよ。任せる？ 俺は謹慎中だぞ」

フ란ツは、数か月前に起こした事件のせいで、今もなお謹慎中だ。外出も禁じ、人との接触も極力控えられている。せいぜい言葉

を交わすのは、身の回りを世話するメイドか、クラウドくらいだった。

「謹慎は俺が解く。お前はできるだけ、ブルームのやつらを傷つけないようにしろ。モンテナハト家の人間と戦わせるな。できるだろう？」

クラウドはフ란ツの疑問には答えない。言いたいことだけを言うクラウドに、フ란ツは疑惑の目を向ける。

クラウドも視線を返す。しばらくにらみ合ったのち、フ란ツは口を開いた。

「わかった。あんたがそこまで言うなら、理由があるんだろう」

「悪いな。お前が一番頼りになるんだ」

そう言って、クラウドはフ란ツの肩を叩いた。

後は振り返らず、部屋を飛び出す。

ブルームから領都まで、早駆けの馬で丸一日。クラウドの体力では、もったかかるはずだ。

気が急ぐ。きつともう、時間がない。

アロイスにとっても、ゲルダたちにとっても。

シュトルム伯爵家令嬢、カミラ・シュトルムは悪役である。

ゾンネリヒト王国の第二王子ユリアンと、男爵令嬢リーゼロッテとの恋仲を引き裂いた嫌われ者であり、蛇のように執念深い恐ろしい女。権力に固執し、公爵をたぶらかした、危険で破滅的な女。

こんな滑稽なことつてあるかしら。最高の皮肉だと思わない？

あの女の言葉に納得した。それが最初の間違いだった。

あんなたわ言など聞かず、やはりあのとき処分しておくべきだったのだ。

カミラ・シュトルムは悪役でなければいけない。

○

「ゲルダが逃げた!？」

領民の蜂起から三日。

対応に追われるアロイスに、聞きたくない報告が飛び込んできた。領都の別邸が襲撃され、軟禁していたはずのゲルダがさらわれたのだという。同じく軟禁していたメイド頭と従僕の姿もない。彼らも同様に、逃がされてしまったのだろう。

「警備は増やしていただろう!? 狙われやすい場所だと言っていたはずだ!」

執務室まで報告に来た従僕に、アロイスはそう言った。

反乱の理由は、アロイスによる統治への不満。特に、他家重鎮に對する不当な扱いだ。

確たる証拠もなく、レルリヒ家当主の姉であるゲルダを罪人扱いしたこと。マイヤーハイム家の従妹にあたるメイド頭を、ゲルダの協力者として糾弾したこと。それ以外にも、アロイスの断行により多くの人間が解雇されたこと。

中でも、マイヤーハイム家当主の次男にあたる、家令のウィルマーの解雇には納得がいていないらしい。マイヤーハイム家はウィルマーを前面に押し出し、アロイスの統治能力をなじっていた。

だからこそ、『不当に拘留されている』ゲルダは狙われやすいと思っていた。まだ安全な領都内部であっても、万が一に備えて警備を固めていたのだ。

「は、た、たしかに、そ、その通りではありますが……」

荒い声を上げてしまったことに、おののく若い従僕の姿でようやくアロイスは気が付く。自分が思うよりも追い詰められていたのだ。深く息を吐くと、彼は意識して声を落とし、もう一度呼びかけた。

「……ゲルダは領都内部の屋敷にいたはずだ。町は警備兵が守っているし、町中に侵攻されてはいないだろう？　どうやってゲルダを奪うことができた？」

「はい。それが　内部の人間のしわざのようで……。屋敷の襲撃前後で、何名かいなかったものが」

アロイスは腕を組む。答えるべき言葉がすぐに出ず、悔しさにただ唇を噛む。

ゲルダとウィルマーは、曲がりなりにも長らくモンテナハト家を支えてきた人間だ。その二人の排除に首をかしげる人間は、領都の中にも存在する。ゲルダがアロイスに毒を盛ったことが知れ渡ってもなお、信じていない人間もいる。

本当の犯人は、カミラだったのではないかというのだ。カミラが毒を盛り、ゲルダに罪を着せた。アロイスは、カミラが来てからおかしくなった。だから、カミラを追い出し、ゲルダたちを元の座に戻せば、この騒動も収まるのではないか、と。そういう人間が、領都内にさえ少なからず存在する。

だがこれも、理由があつてしたことだ。反発はあつても、理解を得られると思つていたのは、甘い考えだったのだろう。現実には反乱が起き、直轄地である領都の民ですらアロイスに疑惑を抱いている。良き領主であろうと、これまで自らが積み上げてきたものの脆さに気が付かされる。

領民にとつてアロイスの存在は、ゲルダやウィルマーにも劣るもの。信頼を得ることのできなかつた自分自身に、アロイスは失望した。

カミラがアロイスにさんざん言つていたとおり、アロイスは表面的で、不誠実で、相手と正面から向き合わない。はりぼてめいた彼の存在は、人の心を動かさない。カミラに触れ、変わりたいと願つても、すぐに変わるわけではない。変わろうとするアロイスを、誰もが気付き、認めてくれるわけではない。

ひどく歯がゆいけれど、それもまたアロイスのしてきたことだ。

「アロイス様、どうかされましたか？」

押し黙るアロイスに、従僕は心配そうに声をかける。

「やはりお疲れなのでしょうか。お休みを取られた方が……」

ここ数日、アロイスは寝る時間もなくにとれないまま、反乱に对应していた。精神的にも肉体的にも参つているのは間違いない。

それでもアロイスは領主だ。安心させるように笑みを作ると、アロイスは首を振った。

「いや、なんでもない」

過去のことは、思い悩んだところで現状を換えられない。

反乱側の要求は、解雇した人間たちの復帰と、ゲルダの冤罪を晴らし、元の地位に戻すこと。そして、『真の犯人』であるカミラを罪に問うことだ。

要はカミラを排斥し、ゲルダの前にもう一度首を差し出せという。彼らの要求を、アロイスには認められるはずがない。せめて交渉をしようと思つた使者も追い返される。

ならば、あとは向き合うほかにない。アロイスが挫けてしまえば、

危機に陥るのはカミラなのだ。

「ゲルダのことだったな。まだ遠くには行っていないはずだ。すぐに彼女の行方を捜してくれ。あとは、いなくなった警備兵の身元の確認と、それから」

○

アロイスは休みなく働いている。もともと働きづめの人間だったが、ここ数日はなおさらだ。

ひっきりなしに報告が入り、ひっきりなしに指示を求められる。寝る時間も食事の時間もない。カミラと顔を合わせる時間も、当然ない。状況が状況だけに、理解はしている。

力になりたい。

アロイスのために、なにか自分にできることはないのだろうか。ずっと考えていた。

カミラのその願いは、思いがけず叶えられることになる。

ゲルダの逃亡が知れ渡ったその日の晩。王家から送られてきた、火急の使者たちの手によって。

陽が落ち、魔石灯の光がほのかに照らす、モンテナハト邸正門。夜半過ぎに王都から来た使者は、邸内に足を踏み入れることもなく、アロイスを呼びつけ、その目的を告げた。

「カミラさんを王都へ返せ、だと」

二人の使者を見据えながら、アロイスは息を呑んだ。ただならぬ雰囲気誘われて、屋敷の人間たちが集まってくるのがわかる。アロイスと使者のやりとりを覗き見る中に、きっとカミラもいるのだろう。だが、それを探すために振り返る余裕は、今のアロイスにはなかった。

開け放たれたままの正門に立つ使者は二人。服装から、王城に勤める武官だと見て取れる。壮年の二人は、覗き見をする幾多の目を気にすることもなく、胸を張ったまま頷いた。

「いかにも。王命である。内乱が起き、戦地となったモーントン領に、シュトルム家の令嬢を預けてはおけない。すぐに王都へ返すようにとの敕命だ」

そう言ってから、使者の一人がアロイスへ書簡を差し出した。丸めて紐で結ばれたそれを、アロイスはその場で解き、中を確認する。王家の紋が刻まれた紙。走り書きの文字。文字の終わりに、赤い印。内容は使者たちが告げた通り、カミラの返還の命令だ。

「……字が違う」

王からの書簡は、これまで何度か受け取ったことがある。紙も印も、結んだ紐さえも、王家のもので間違いない。

だが、字だけは見覚えがなかった。

「王の印があるのに、陛下の手のものではない。なぜだ」

「手紙を書かれたのは、ユリアン殿下だ。床に伏せっている陛下に

変わり、殿下がご命令をくだされた」

「床に？ そんな話は聞いたことがない」

アロイスは手紙から顔を上げた。王都とは頻繁に手紙のやり取りを交わしているが、王の具合が悪いという記述は見覚えがない。床に伏したのが最近のことだとしても、すぐさまユリアン王子が代わりをするなど、ありうるだろうか。

「だいたい、エツカルト殿下はどうされた。陛下の代理であるならば、あの方が命じるのが筋のはずだ」

王位継承権は、王家の長子であるエツカルトが持っている。王がいくら床に伏したとはいえ、第二王子であるユリアンに王命をくだす理由はない。

だが、使者は疑問には答えない。背筋を伸ばし、表情一つ変えずにアロイスの疑問をはねのける。

「今は内密のことにつき、控えられよ。この手紙が王命であることは、まぎれもない事実」

王家から差し出され、王の印が押されていれば、それは王の言葉に等しい。分家とはいえ、いち臣下に過ぎないモンテナハト家にとって、王の命令は絶対だ。逆らうことなどできるはずがない。

だからといって、王家の　ユリアン王子の言い分を素直に飲み込むことも、アロイスにはできなかった。

「……自ら追い出しておきながら、今度は返せと？」

カミラを王都から追放したのも、アロイスに押し付けたのも、もとはといえばユリアン王子自身だ。『沼地のヒキガエル』と呼ばれ、誰にも望まれなかったアロイスを、ユリアン王子はカミラの結婚相手と定めた。そこに、ユリアン王子からカミラへの情は感じられない。

なのになぜ、今になって呼び戻そうとする？　まさか、今さら罪悪感でも覚えたわけではないだろう。

それに、まだ疑問は尽きない。

「そもそも

なぜ殿下は、今のモーントン領の状況を知って

いる？」

ゾンネリヒトの南部にある王都から、北端に位置するモーントンの領都まで、馬車なら五日。早馬で駆けても三日はかかるはず。反乱がおきたのは三日前。王都にいるユリアン王子に伝わるはずがない。

なのに、なぜユリアン王子からの使者はここにいます？

「エンデ家か」

ユリアン王子の傍には、リーゼロッテがいる。リーゼロッテ・エнде。首謀者の一人である、エンデ男爵の娘の一人。

「リーゼロッテ・エンデ嬢。彼女が殿下をそそのかしたのだな……

！」

「モンテナハト卿、口を慎まれよ」

「はじめから、エンデ家と殿下は通じていたのか。殿下はこの内乱が起きることを知っていて、止めるでもなく諫めるでもなく、カミラさんの排斥に乗った。エンデ家に与すると決めたのだらう！」

「内乱は貴殿の不徳のいたすところであろう。この王命は、巻き込まれたシュトルム伯令嬢を救うためのもの。まさかこの慈悲深い王命が聞けないとは言えないな？」

使者が冷たい瞳をアロイスに向ける。

王命に逆らえば、王家と対立することにもなりうる。せめて、あまりに不条理な命令であったならば、断る理由も立つだろうに、一見して理にかなっているのが厄介だった。

それでもアロイスは、エンデ家の影が見えるこの命令に従うわけにはいかない。慈悲深いと思うには、あまりに疑惑がありすぎるのだ。

頷くことができないアロイスと、二人の使者が視線を交わす。カミラを差し出すか、王命に逆らうか。

息を呑むような沈黙を破ったのは、カミラだった。

「いいわ。私が行けばいいんでしょう？」

遠巻きの輪の中、カミラは意を決して足を踏み出した。

傍にいたニコルが、不安そうにカミラを見上げている。引き留めるようなニコルの視線に一瞥を返すと、カミラは使者たちの元へとまっすぐに向かった。

「カミラさん」

眉をしかめるアロイスに、カミラはつんと澄ました顔を向ける。

「王都に帰ることくらい、なんてことないわ」

「あなたを嵌める罠ですよ」

「そんなの、昔からたくさん嵌まってきたわ」

カミラは腰に手を当て、胸を張る。昔から、罠の避け方なんて知らなかった。いろいろ嵌められてきたし、いくつかはやり返してきた。

「人質に行くようなものです。あなたの身の安全も保障できません」
「だからって王命に逆らったら、アロイス様の方が大変なことになるわ」

不安げなアロイスを見やると、カミラは口の端を曲げる。

ユリアン王子からの突然の帰還命令。愚直なカミラでさえ、こんなもの素直に信じられるはずがない。なにか裏があるに決まっている。

それがどんなものか想像がつかない。怖いと思う。行きたくないと思う。それでも足を踏み出すのは、アロイスのためだ。

力になりたい。支えになりたい。

かつて、ユリアンに抱いていた感情だ。

あのときみたいに苛烈な感情ではなかったけれど 同じ思いを、

カミラは今、アロイスに抱いている。

「アロイス様、大丈夫。私、あなたを信じているもの」

カミラの言葉に、アロイスは一度だけゆっくりと瞬いた。

それから、すぐに唇を引き結ぶ。意を決したような強い視線が、カミラを見据えていた。

「……すぐに、あなたを迎えに行きます」

カミラが王都へ戻されるのは、モーントン領が危機にあるからだ。この騒動を収めれば、カミラを王都に置く理由はない。

だから、すぐにこの反乱を鎮めると、アロイスは言っているのだ。

赤く澄んだ真摯な目に、カミラは少し笑ってしまった。

はじめはあんなに帰りたいかったのに、今は不思議と、真逆のことを思っている。

クラウドが領都の屋敷へ駆けつけたのは、使者がカミラを連れて行ったあとだった。

カミラの身支度さえも待たず、その場で彼女を連れ去ったあと。ほとんど入れ替わる形で駆けこんだクラウドが目にしたのは、ざわめく人々と、俯くアロイスの姿だった。

これほど人が集まっているのに、屋敷は妙に静かで、寂しかった。人々の顔は暗い。かすかな声で、絶望を囁き合っている。もうモンテナハト家はおしまいだ。王家でさえ、敵に回ってしまったのだ、と。

なにがあつたのか、クラウドにはそれでだいたい想像がついた。遅かったのだ。カミラはもうここにはいないだろうし、おそらくは伯母のゲルダもいないだろう。

「おい、おい、クラウド。お前どうしてここに……！」

エントランスに立つクラウドに、真っ先に声をかけてきたのは、かつての上司であるギンターだった。彼は感情豊かな角ばった顔をゆがめ、信じられないものを見るような目でクラウドを見た。

当然だろう。クラウドはレルリヒ家の人間である。そしてレルリヒ家は今、マイヤーハイム家やエンデ家とともに、アロイスに反逆しているのだ。

飛び込んできたクラウドに気が付いた人々の目も、歓迎ばかりではない。驚きや戸惑いが見て取れた。

「なにしに來た　　いいや、待て。お前、その顔どうした」

「色男が増しただろう」

傷跡の残る顔で不敵に笑えば、ギンターが啞然とする。

そのギンターを置いて、クラウドはアロイスに近付いた。

うつむくアロイスの髪が垂れ、顔に影を落としている。視線は地面を見据えたまま、ゆっくりと瞬きをしているらしい。口元に手を当て、彼は深く呼吸をしていた。

「おい、アロイス」

落ち込んでいるのだろうと思った。いや、そんな言葉では済まないだろうか。前を向くたびに折られてきたアロイスの心は、クラウスにも想像がしがたい。かけるべき言葉も、上手く見つけられずにいた。

「アロイス、諦めるなよ。終わったわけじゃない。カミラはまだ

」

「……わかっている」

アロイスは視線を伏せたまま答えた。思いがけず落ち着いた声に、クラウスの方が驚いた。

「彼女は、王命をもって『保護のために』連れて行かれた。理屈が通っている」

王命をもってすれば、エンデ家の望む結末を命ずることもできただろう。カミラを連れ去るのにも、名目はいらぬ。反発や非難を恐れず、王の強権を行使すればよかったのだ。

だというのに、一見すればまっとうな『理由』を用意した。アロイスには断りがたく、周りの人間が正しいと思うような理由。

それはなぜか。自らの正当性を保つためだ。相手はまだ、相手はまだ『筋を通す』つもりでいる。正しい理屈で、正しい順序で、成し遂げるためだ。

ならば、カミラの身にはまだ、猶予があるはず。王の書簡はアロイスの元に残されたまま。王都に帰る前にカミラの身になにかがあれば、誹^{そし}りを受けるのは王家の方だ。

「相手が冷静であるうちは、時間がある。ならば私は、諦めはしない」

アロイスは言葉を吐き出すと、その顔を上げた。静かな熱のこもる瞳で、そのまま集まってきた屋敷の人々を見回す。

クラウドは無意識に息を飲んだ。視線が奪われる。喉まで出かけた慰めの言葉も忘れてしまった。

「私は家臣に背かれ、ゲルダに逃げられ、大切な人まで奪われた、ふがない男だ。苦境を覆すだけの知恵や力もない。後手にばかりまわって、お前たちも不安にさせてしまっただろう」

紡ぐ言葉とは裏腹に、アロイスの声に弱さはない。胸を張り、前を向き、固い意思を瞳に宿す。

「不利な状況に変わりはない。それでも、私は屈するつもりはない。彼女が信じて、私を待っていてくれる限り」

反乱が起こってから、早々に屋敷から逃げ出した人間もいる。マイヤーハイム家やエンデ家の血を引く人間も多い。アロイスは寛容の一方で、甘くみられがちな主人だ。危機を共にするには頼りないと、不安がるものもある。

そんな人々を、アロイスは一人ひとり見つめる。

「私に力を貸してほしい。私が、このモントンの領主でいるために」

恐れ知らずで真摯な眼差し。夜風にゆれる気高い白銀の髪。なんの力もないくせに、なんでもできると信じてしまいそうな横顔。無防備なくらいにすべてをさらけ出す、愚直な姿。

瞳に宿るのは、夜を照らす、太陽のような光。

アロイスに慰めは必要ない。迷わない彼の姿こそが、人々の慰めになるのだ。

アロイスの後姿に、クラウドは顔をしかめた。

アロイスよりもクラウドの方が、ずっと頭が回る。なんだって器用にこなす。人に好かれるのも得意だ。

ただクラウドは、きつとアロイスを追い越せない。この男に力を尽くしたい。彼の望みを叶えたいと思ってしまった時点で、クラウドの負けなのだ。

「俺は、またあんたが嫌いになりそうだよ」

笑うように言うクラウドに、アロイスが顔を向けた。不思議そうに首をかしげるこの男は、聡いようで鈍い。それもまた、クラウドには腹が立つ。

「地図を見せろ。状況はどうだ？ 兵は何人くらい逃げた。どうせ平和主義のあんたは、軍略なんて知らないだろう」

アロイスが瞬く。それから、今度はさほど不思議でもなさそうに口元を緩めた。

「レルリヒはあちら側だろう。ルドルフもいるだろうに、いいのか？」

「いい。レルリヒは俺が奪^とってきた。もう俺のもんだ」

ふん、とクラウドは鼻を鳴らす。そもそも、レルリヒがアロイスと敵対するなんてありえない。なにせレルリヒの配下は、ブルームなのだ。

「ブルームの人間が、あんたらに剣を向けられるわけがないだろう。あんなバカ騒ぎを起こしておいて、殺し合えだって？ 冗談じゃない！」

ブルームはアロイスとカミラとともに、駆け回って、騒いで、笑い合った。その記憶も薄れないうちに、戦い合うなんてできるはずがない。

クラウドだってそうだ。歪んだ自分自身の心。ねじれた弟との関係。晴らすことができたのは、アロイスがいて、カミラがいたからだ。

不利な状況はわかっている。だけど馬鹿な騒ぎが己を救ったのであれば、今度は自身が馬鹿になる番だろう。

「俺はあんたに乗った！ このクラウド・レルリヒ！ レルリヒ男爵家とブルームの名にかけて、俺はあんたの力になるぞ、アロイス！」

「……クラウド」

何か言いたげに呼びかけた、かすれたアロイスの言葉は、野太い声にさえぎられた。

「俺もですぜ！俺たちは、いつだって坊ちゃんの味方だ！」

ギョントーだ。クラウスに張り合うように声を上げ、彼はアロイスの元へ駆け寄る。

「ずっと日陰者だったブランド家を、あんたが引きずり出してくれたんです。坊ちゃん　いや、アロイス様。俺はかけるような家柄はねえけど、代わりにこの腕に誓いましょう」

繊細な料理を生み出す、たくましい腕を叩き、ギョントーはアロイスを見つめた。アロイスがまだ領主になったばかりのころから、ずっとギョントーはアロイスの味方だった。それはどんな苦境にあっても、変わらない。

「あんたがなにをして、どう生きてきたか知っている。俺たちは、みんなアロイス様を信じている。娯楽のないこの土地に、飯屋がどれほどあると思ってやがる。全部、あんたの力になりますぜ、アロイス様！」

「ギョントー……」

ギョントーの言葉を後押しするように、集まってきた料理人たちが声を上げる。彼らはアロイスだけではない。厨房にいるカミラも見てきた人間たちだ。

「アロイス様。私も、逃げません」

取り巻く人々の中から声がする。見上げれば、エントランスのアロイスたちを階上から見下ろす、ニコルだった。ニコルは青ざめた顔で、両手を握りしめながら、震える声を絞り出す。

「私は奥様の侍女ですもの。奥様を、必ず取り戻しましょう……！」

「ニコル」

ぼつり、ぼつりとあちらこちらから声上がる。

誰も彼もがアロイスを信用しているわけではない。それでも、この手のひらに収まるほどの小さな信頼でも、アロイスを領主として認めてくれる人々がいる。

「ありがとう」

だからアロイスは、折れるわけにはいかない。

領民の信頼に報いるのは、領主の務めだ。

「……アロイス、後で時間を取れないか？」

人々が部屋に戻りはじめ、閑散としたエントランスで、クラウスはアロイスを呼び止めた。

振り返ったアロイスの顔色は悪い。無理もない。領民に裏切られ、追い詰められたこの状況で、精神的な支えであっただろうカミラも失ったのだ。

心折れ、氣力を失ってもおかしくない。悲嘆し、なにかも投げ出したくなるだろう。

実際、あちら側にとってはそれが目的なのだ。よく前を向いていられるものだと思う。

「構わないが……どうした？」

気の張った顔のまま、アロイスはクラウスに首をかしげてみせた。疲労を押し隠すその表情に、クラウスはわずかに迷う。

「少し、話があるんだ」

言ってしまったから、口から出した言葉を飲み込むように、クラウスは口元を押えた。

アロイスに、言っていていいものだろうか。クラウスが告げようとしているのは、アロイスを惑わせることだ。

クラウスの話を聞けば、アロイスは王都へ行きたいと思うだろう。王都にはカミラがいる。本当は手放したくなかっただろう。すぐにも追いかけていきたいだろうカミラに、手が届くかもしれない。

だが、アロイスには、今この場を離れてもらうわけにはいかない。目の前の危機に背を向ければ、アロイスを信じる者たちが瓦解する。守るべき領地を背にした不誠実な領主には、従う者など誰もいないのだ。

いや。

信じる。アロイスは自分のやるべきことを分かっている。

「あんたに関わることだ。立ち話で済む話でもない。悪いが、心してくれ」

神妙なクラウスの言葉に、アロイスがいぶかしそうに眉をしかめた。

しかし、アロイスが何か言うより先に、エントランスに慌ただしい足音が飛び込んできた。「報告いたします！ 東部よりエンデ家、ファルシュの町の魔術師たちが攻撃を仕掛けてきました！ 現在応戦中ですが、魔法を防ぐ手立てが」

そう叫んだのは、領都を守る警備兵だった。アロイスがクラウスから視線を外し、報告の兵を見て顔を強張らせる。

「クラウス、話はもう少し待ってください 魔法はどういったものだ。被害を教えてください」

アロイスは足早に兵に向かって行く。離れていくアロイスの背を睨み、クラウスは舌打ちした。

話すべき時は、いずれ必ず来る。まずは目の前のことが最優先だ。息を一つ吐き出すと、クラウスは思考を切り替える。

今の彼は、『モンテナハト家の頭脳』だ。

○

モーントン領を出てから五日。

カミラは思いのほかあっさりと王都へたどり着いた。

旅の最中に、命でも狙われるのではないかと気を張り続けていたが、不要な心配だったらしい。使者たちは淡々とカミラを王都へ運び、そのまま王都のシュトルム伯爵邸へと連れて行った。

シュトルム伯爵邸は、カミラが出て行った頃と変わらない。春の庭には、モーントンでは咲かない花が咲き、瘴気のない風が植木を

揺らす。使用人の数は、そう多くはない。すれ違う人々は、カミラの姿を見ると恐れるように目を伏せた。

屋敷の客室で、カミラはシュトルム伯爵夫妻　カミラの両親に引き渡された。簡易な言葉と書面を交わすと、それで使者たちの仕事は終わりだ。伯爵夫妻に一礼すると、彼らは呆気なく去っていった。

客室には、カミラと夫妻が残された。

空は嫌味なくらいに明るい青空だった。白い雲が流れ、鳥が空を飛ぶ。窓から見える王都の通りは賑やかで、あちこちに祝いの花が飾られていた。

ユリアン王子とリーゼロッテの、結婚を祝福する花だ。間もなく訪れる祝福の日を待ち望み、都は喜びに満ちていた。

だがその喜びに、カミラの存在が影を落とす。

外の明るさとは裏腹に、一年ぶりに見る父と母の顔は暗い。カミラを見る目は、娘を懐かしむものでは決してなかった。

「カミラ　お前は……お前というやつは……！」

カミラの父、パトリック・シュトルム伯爵は、声を震わせてそう言った。温厚で人好きのする顔が、今は怒りにゆがんでいる。この一年で苦労も増したのだらう。カミラと同じ黒髪に、白髪が目立つようになっていた。

「なんということをしてくれたんだ……どうしてこんな……！」

パトリックの横で、母のカタリナが目伏せる。青い顔で、まるで自分の罪を責められているかのように怯えていた。

歓迎されていないことは、屋敷に足を踏み入れた時からわかっていた。

「いったいなにが不満だったんだ！　どこまで私たちを裏切るつもりなんだ！」

「裏切るって、なによ」

「私たちはお前を愛していた。お前に苦労をさせず、わがままを許

し、良いことと悪いことを教えてきた。なのにお前は、またしても私たちの期待を裏切った！」

強く拳を握りしめ、パトリックは唇を噛みしめる。悔しそうで、苦しそうで、悲しげだった。その顔に浮かぶ失望は、子供カミラの心を引き裂くものだった。

「殿下の慈悲で、お前はモーントンでやり直す機会を得た。なのに、私たちはお前に反省を教えることはできなかったのだな。殿下の優しさを踏みにじり、私たちのことなど忘れ、お前は」

パトリックは喘ぐように息を吸う。それから、怒りと共に言葉を吐き捨てた。

「お前は、モーントン領でモンテナハト卿を惑わせ、道を誤らせ、反乱を引き起こした」

「そんなこと、していないわ！」

「この期に及んで、まだ嘘を吐くのか！ 証人だっているのだぞ！」

「証人って誰よ！ 私は嘘なんて吐かないわ！」

「見苦しい！ どうしてお前は昔から、素直に謝ることができないんだー！」

どうして。

カミラは顔をゆがめる。

どうして、この人たちは子供カミラの言葉を信じないのだろう。

昔からそうだった。カミラとテレゼがいれば、二人はいつだってテレゼを信じた。泣いている誰かと、泣かない勝ち気なカミラを見て、お前が悪いと責めるのだ。

もっと苦しい人がいるから、たいへんな人がいるから、お前は恵まれているのだから。だから泣いては駄目だ。そう言って、カミラの涙を封じたのは、父と母だというのに。

「お前には豊かで、自由な暮らしをさせたはずだ。なのに、どうしてこんなに歪んでしまったんだ！ どうして私たちの愛を裏切ることができなんだー！」

「やめて！ あなた！ もうやめてー！」

カタリナがパトリックの体に身を寄せて、泣きながら首を振った。パトリックがかばうように、カタリナの肩を抱く。それから、どうか平靜になろうとするように、深く息を吐き出した。

「……三日後に、お前の裁判が行われる。それまではここで最後に家族で過ごせるようにと、お慈悲をいただけた」

予感はしていた。

旅の中。カミラを運ぶ使者たちは、慇懃ではあったものの、まるで犯罪者に接するような態度だった。

「反省してくれ、カミラ。最後は家族四人で、穏やかに過ごせるように。お願いだから、これ以上、親を悲しませないでくれ」

カタリナのすすり泣きの中、パトリックが静かに告げた。

怒鳴り返す言葉もなく、カミラは奥歯を噛みしめた。王都を去るときも、王都へ戻ってきてても、両親は変わらず。

今も昔も、カミラのことをひとかけらも信じてはくれない。

カミラの両親は、根っから善良な人間だった。

適度に頭がよく、適度に要領がよく、悪辣ではない程度に小狡く、人間の善性を心から信じている。世の中に悪意があることを知っていても、それが自分たちを傷つけるなどと考えたこともない。悪意から身を躲す小器用さがあるからこそ、悪意を知らずに生きてくることができた。

王国東南部にある、シュトルム伯爵領は部下に任せきり。王都に居を構え、趣味で始めた船舶事業は順風で、伯爵家にもう一つの財を成した。人の好さと親切さで周囲からは慕われ、健康で堅実な妻を持ち、貴族たちとの交流も深い。一人娘の不祥事も、伯爵夫妻への同情を誘うだけ。優しい人々に助けられ、彼ら自身は傷つくことなく、一年という日々を過ごした。

娘を失う痛みさえ、彼らは味わうことはなかった。カミラの代わりに、可愛いもう一人の娘が来てくれたおかげだ。

善き人間には、必ず救いは訪れるもの。誰かに責められる人間は、それ相応の理由がある。

詐欺師が悪いと知っている。だけど騙されるほうも悪いのだ。だって自分たちは、騙されたことなどないのだから　　そういう人間だった。

○

「カミラの馬鹿！　なんで戻ってきたのよ！！」

かつてカミラの使っていた部屋は、もうテレエゼがいるからと、あてがわれたシュトルム家の空き部屋。

その部屋に入った途端、カミラは罵声を浴びせられた。

部屋の中は、空き部屋とは思えないくらいに整っていた。ベッドのシーツは真新しく、窓辺には花が活けられて、床には埃一つない王都にいたところにカミラが使っていた椅子や衣装棚も運ばれていて、懐かしさにほつとする。

「考えなしなあんだだってわかるでしょう！ 戻ってきたら駄目だって！！」

だけどそれ以上に、カミラを安堵させたのは、その声だ。

部屋にいたのは、勝ち気な顔をゆがませた、カミラの悪い侍女だった。カミラに料理を教え、こっそり孤児院に通わせて、王都を追いつ出されるときに、付いて行くと行ってきかなかった。カミラの姉のような人。

「ディアナ」

慕わしさにカミラが名を呼べば、ディアナが駆け寄ってくる。そして、猫のようにしなやかな腕で、カミラの体を抱きしめた。

「あんた、本当に馬鹿よ！ 大人しく沼地にいればよかったのに！ 陥れられるために帰ってきたのよ！」

「わかつているわ」

ディアナを抱き返し、カミラは囁いた。柔らかくも強いディアナの力に泣きそうになる。だけど唇を噛み、涙を堪えてしまうのは、両親がカミラに与えた呪いのせいだ。

ぎゅっと一度目を閉じると、カミラは息を吐き出した。泣いたりなんかしない。この先なにがあっても、悔いない。それだけの覚悟がある。

「わかつていて、自分で戻ってきたのよ」

「……どうしようもない馬鹿だわ」

涙交じりの呆れ声で、ディアナはため息を落とした。

「モーションは、あんたに合っていたのね。良かった……」

ディアナは泣きながら、笑いながら、カミラの髪を撫でる。その優しい手が、くすぐったかった。

○

荷物を解き、旅装から着替えると、昔のようにディアナがカミラの髪を結う。器用な彼女の手は、カミラの髪を絡ませない。怒らせてばかりのニコルとは大違いだ。

ニコル、元気でいるかしら。

あんなにがみがみ言っていたくせに、今はニコルの不器用さが恋しい。思わず視線を伏せかけて、カミラはあわてて顔を上げた。顔を上げれば、窓の外。明るい空と都の街並みが見える。町を飾る祝花が、間近に迫ったユリアン王子とリーゼロッテの結婚式を告げていた。

「あんたは利用されたのよ。ユリアン殿下の人気取りのために」カミラの髪を結いながら、ディアナは静かに語りかけた。

ユリアン王子の名を聞いて、まだ少し胸が痛む。あきらめはついていても、長い間恋をしていた相手だ。心から好きだったのに、相手に気持ちが届くことはなく、彼は無情にカミラを陥れようとしている。

「だからやめろって言ったのに。あんな嘘くさい男。絶対不幸になるって思っていたわ」

唇をかむカミラを、しかしディアナは気にも留めない。昔から変わらず、彼女は他人のために言葉を選んだりしなかった。そういう悪いところばかり、カミラは真似してしまっている。

「ねえ、今の王都の状況、聞いている？ 陛下が病気に伏せられて、後継者争いがはじまっているって話」

「……後継者争い？」

予期しない言葉に、カミラは眉をしかめた。

王家の跡継ぎは最初から決まっていたはずだ。正妃の子で、長男

でもあるエツカルトの他に、跡継ぎなどいない。ユリアン王子は確かに王の子ではあるが、彼の母は第二妃のうえ、次男である。後継者として名が挙がることすらなかった。

「ユリアン殿下の方が、国民からの人気が高いのよ。あたしは大っ嫌いだけど、担ぎ上げる人間は出てくるわ。エツカルト殿下は真面目すぎるというか、大衆受けはしない方だから」

「……そうね」

カミラが見てきたエツカルトという人物は、優秀で公平ではあるけれど、遊びがあまりに少なすぎた。ユリアン王子がリーゼロッテと結婚しようというとき、カミラが悪人として追放されたとき、最後まで反対をしていたのは彼だった。だけど世間はそれを、現実主義すぎる、愛や夢を認めず、狭量すぎると受け取った。

国の王になるには、人心の掌握も必須だ。その点、面白みのないエツカルトと、リーゼロッテとの恋で世間を沸かしたユリアンには圧倒的な差がある。

「殿下はあんたを叩きのめして、リーゼロッテと結婚して、人気を絶対的なものにするつもりよ。陛下の容態も良くないって聞くし、早めにどうにかしようって腹なのね」

「陛下のお体、そんなに悪いの？」

「あたしは噂でしか知らないけど、相当らしいわね。王都では陛下の傍で死神を見た、なんて人もいる。こんなのは噂だけ。急な話だから、王宮の幽霊に呪われたんじゃないかって話もあるわ」

そこまで言うと、ディアナはカミラの肩を叩いた。

「はい、おしまい。気合い入れなさい、カミラ」

裁判の日まで、カミラは屋敷の外に出てはいけない。両親から、そうきつく言いつけられていた。だけどディアナが結ったのは、よそ行き用の、華やかで人を威嚇する類のものだった。

髪に手を当ていぶかしむカミラに、ディアナは険しい顔を向けた。「夕方にはテレーゼが戻ってくるわ。あの性悪、あんたのこと毛嫌いしてるんだから。負かされるんじゃないわよ！」

ずっと幼いころ。カミラはテレゼと、それなりに仲が良かった記憶がある。

テレゼの父であるノイマン子爵と、カミラの父であるパトリック・シュトルム伯爵は親しい兄弟だ。頻繁にこの伯爵邸にも訪ねて来ていた。

子爵夫妻が訪れるときは、いつもテレゼと一緒にだった。昔のテレゼは素直にカミラを慕っていたし、カミラもテレゼを妹のようにかわいがっていた。別れ際には帰りたくない駄々をこねるくらいには、カミラに懐いていた。

二人の関係が変わったのは、カミラが七つか八つになったあたり。きっかけは、カミラにはわからない。

いつものようにテレゼと出会い、いつものように別れて行った。違うのは、次第に帰り際の駄々が大きくなっていったことくらいだろうか。だんだんと帰るのを拒むようになり、それでも無理に子爵夫妻が連れ帰り。

あるとき、ふと嫌がらなくなった。テレゼがカミラを嫌うようになったのは、それと同じ時期だ。

あのととき、テレゼの心境になんの変化があったのか、カミラには想像することもできない。

ただ、ひどく悲しかった。それだけだ。

○

カミラと同じ黒い髪。

カミラと似たつり目がちな顔。だけど表情が柔らかいせいか、カ

ミラのようなきつい印象は与えない。

笑うと花がほころぶように愛らしく、目を伏せ、沈んだ顔を見れば守りたくなる。甘え上手で誰もが愛するテレゼは、夕刻、シュトルム伯爵家に戻ってきた。

「おかえり、テレゼ。リーゼロッテさんのお茶会はどうだったかい？」

「ただいま、お父さま。とても楽しかったわ。たくさんお話をしたんです」

「テレゼ、リーゼロッテさんはお変わりなかったかしら」

「ええ、お母さま。変わらずよ。ご結婚を控えられて、とても幸せそうでしたわ。リーゼロッテさんも、お父さまとお母さまによろしくって」

帰ったばかりのテレゼをカミラの父と母はエントランスまで出迎えた。

テレゼはやや疲れた顔で、しかし微笑みながら、当然のようにそれを受け入れる。親しげに言葉を交わす三人は、傍から見ればなんの変哲もない家族のようだ。

娘であるはずのカミラは、壁際に身をひそめ、遠巻きにその光景を眺めていた。

テレゼの帰宅の報を聞き、様子をうかがいにエントランスまで出てきたものの、来たことを後悔する。

カミラのいないシュトルム家は、なんてことはない。ただ娘の挿げ替えられただけの、変わらない生活が続いていただけだ。カミラでもテレゼでも、両親にとっては大差ない。

いいえ。

テレゼに接する両親は、カミラに対するよりもずっと穏やかで、柔らかい。反発と問題ばかりの娘よりも、要領が良くて、人に愛されるテレゼの方が、ずっとシュトルム家の娘にふさわしいように

思えた。

カミラは目を伏せると、両手を握りしめた。見ていられなかった。

……戻りましょう。

このまま気が付かれる前に、立ち去ろう。そう思ったカミラの心さえ、しかしテレーゼは踏みにじるのだ。

「お父さまもお母さまも、わたしが留守の間、なにもありませんでしたか？」

テレーゼの高い声が、エントランスに響き渡る。

「見ないお方がいらっしゃるようですけど……そこにいらっしゃるのは、どなたでしょうか？」

少しだけ音量を上げ、テレーゼはとぼけたようにそう言った。彼女の視線は、覗き見をするカミラにまっすぐに向けられている。父と母に向けていた笑みをゆがめ、彼女は嬉しそうに目を細めた。

「お客様かしら？」

なんということのない口調。だけどまぎれもない嫌味だと、言葉を向けられたカミラにはすぐにわかった。

部屋に戻ろうとした足が逆を向く。頭の奥が白くなる。

思考するよりも先に、カミラは声を上げていた。

「ここは私の家よ」

隠れていた壁から歩み出ると、カミラはテレーゼを睨みつけた。

「私がいてなにが悪いの。どなたですって？ しらじらしい！」

「しらじらしいだなんて……わたし、そんなつもりじゃありませんでした」

両親に囲まれたテレーゼは、カミラの剣幕に気圧されたように体を縮め、カタリナに縋りつく。カタリナはテレーゼを守るように肩を抱いた。

昔からよく見た光景だ。正義感のあるカミラの両親は、いつだって弱いものの味方。かわいそうなテレーゼをかばい、責めるカミラを咎めてきた。

「ごめんなさい、お姉さま。まさかお姉さまが、覗き見なさって

るなんて思わなかったの。まるで罪人みたいにこそこそしていらしたから　　いえ」

カタリナの腕の中で、テレゼがくすりと笑う。

「本当の罪人でいらっしやいましたね。すみません、わたし、本当に考え足らずで」

「罪人、ですって？」

一歩踏み出し、カミラは低い声を吐き出した。

「よくも　よくもそんなことが言えたわね！　私が罪人なら、あなたはなんなのよ！　私がない間に、こんな……」

　　こんな。

声が震える。肩を怒らせるカミラを、屋敷の使用人たちが息をひそめて見つめていた。その視線の中に、カミラへの同情もいくつかはあったかもしれない。だけど大半は、悪を責める、無責任な非難の目だ。

カミラがない間に、シュトルム家の娘はテレゼになった。カミラの部屋にはテレゼが入り、カミラと親しかった使用人もほとんどいなくなっていた。屋敷はテレゼの味方だ。

今この場で、異物であるのはカミラのほうだった。

「あんたは泥棒じゃない！　昔からずっと、私のものばかり盗ってきたくせに！！」

お気に入りのおもちゃ、懐いた使用人。父、母、友人たち。カミラの大切なものばかり、テレゼはかすめ取ってきた。

「私の家を返してよ！　私の家族を返しなさいよ！！」

なのに、それを責めるカミラは、弱い者いじめの悪役でしかなかった。ずっと。ずっとずっと。

「……返せなんて。わたしも家族とは、認めてはくださらないのね」
テレゼがしおらしく目を伏せれば、かわりにパトリックが歩み出る。

パトリックの顔には正義感が浮かぶ。弱い者を守らなければならぬ。理不尽に責める娘を、叱らねばならない。そんな善良な人間

の、善良さの発露だ。

パトリックの影に隠れたテレゼは、きつと内心でほくそ笑んでいることだろう。けれど、パトリックもカタリナもそのことに気が付いてしまうほど、馬鹿正直な愚か者ではない。

「やめなさい、カミラ」

たしなめるようにパトリックが言った。

「テレゼもお前同様、私たちの家族だ。お前がない間、テレゼがどれほどこの家のために尽くしてくれたか知らないだろう」

カミラは顔を上げ、ぎつとパトリックを睨みつける。娘の強い視線など、何度もパトリックは受けてきた。彼にとって、カミラの態度はただのわがままの癪癪だ。叱って、言い聞かせ、たしなめればわかると思っている。

「お前のでかしたことで、失いかけた信用を繋いでくれたのはテレゼだ。テレゼがリーゼロッテさんの友人として間を取り持ってくれたおかげで、シュトルム家が非難を受けることもなく、変わらず暮らしていけるんだ。だから

「リーゼロッテ？」

パトリックの言葉を遮り、カミラは口元をゆがめた。

「どうしてテレゼが、リーゼロッテと仲良くしているのよ」

あの女が私を陥れたことを、テレゼは知っているはずなのに。

そう言いかけて、カミラは口をつぐむ。どうして二人の仲が良いかなんて、明白だった。

テレゼとリーゼロッテは、よく似ている。その性質も、カミラを敵視していることも。

「リーゼロッテさんとは、一年ほど前から親しくさせていただいていますわ」

パトリックに庇われながら、テレゼはか細い声でそう言った。

「お姉さまのことを相談したことがきっかけで、それ以来の付き合い입니다。お姉さまがリーゼロッテさんのことを嫉妬していらっし

やるのは知っていますが、恨まないでくださいませ。あの方は、お姉さまを守ってくださいだったのですから」

「守った？ よくもそんな大嘘がつけるわね！」

カミラが一步足を踏み出せば、テレーゼが震える。怯えた様子でカタリナに体を寄せ、彼女の手をあざとく握りしめた。庇護を誘う小動物のようなテレーゼを、愛らしいとも思ったのだろ。カタリナが咎めるようにカミラを見やる。

「本当ですわ。お怒りにならないでくださいませ、お姉さま。すべてわたしが悪いのです。わたしが、お姉さまの罪を胸に秘めたままにできず、リーゼロッテさんに話したときから」

「……なにを言っているの」

「リーゼロッテさんをいじめた犯人も、根も葉もない噂を流したのも、悪人に襲わせたのも、全部お姉さまの仕業だと、わたしが言ってしまったのです。それが、殿下の耳にまでお入りになって」

テレーゼの言葉が、リーゼロッテからユリアン王子に伝わったとき、王子は怒り心頭だったという。即刻カミラの首を刎ねると言い出したユリアン王子を止めたのは、リーゼロッテだった。殺してしまふのはかわいそうだと言うリーゼロッテの説得で、王子はどうにか平静さを取り戻してくれた。

「モンテナハト卿に嫁げというのも、リーゼロッテさんが決められたこと。死んでしまうよりは、沼地のヒキガエルに嫁ぐほうがずっと良いでしょう？ どんなに相手が醜く、陰気で、嫌われ者であつたとしても。だから、リーゼロッテさんのことを悪くお言ひにならないでください」

カミラは瞬いた。テレーゼの言葉を理解するために、少しの時間が必要だった。

つまり。

つまりはすべて

。

「あんたの、せいだったのね」

カミラが王都を追放されたとき。身に覚えのない罪も、身に覚えはある誇張された罪も、すべて反論の余地もないほどの証拠で固められていた。カミラの行動ひとつ、言葉ひとつに至るまで、なにもかもがリーゼロッテいじめの証左だった。

今にして思えば、おかしい話だった。カミラの身の辺の逐一を知らなければ、どこかで矛盾が生じたはずなのに。

「あんたが私を売ったのね」

カミラの声は静かだった。だけど体中が煮えたぎるようだった。

指先は血の気が引いているくせに、頭の奥はひどく熱い。驚愕と、怒りと、悲しみに染まる。

従妹として、幼いころの仲の良さをどこかで信じていた。だけどそれは、あまりにも幸せな幻想だったのだ。

「売ったなんて……ごめんなさい。お姉さまにこれ以上、罪を重ねてほしくなかったの」

テレーゼがすすり泣く。だけど本当はほくそ笑んでいる。
「罪」

言葉を落としながら、カミラはテレーゼに近付いた。笑いたくなるほど、自分自身が滑稽だった。

「よくもまあ、平気な顔で嘘が吐けるわね」

テレーゼの泣き声と、カミラの足音だけが伯爵邸に響く。息をひそめる人々。テレーゼをかばう両親。ひどい茶番だ。

テレーゼは泣きながら、内心嬉しくて仕方がないのだ。なにもかも思い通りになったのだから。

「そうやって、私の居場所を奪って満足？ 私に苦しむのが楽しいの？」

「いいえ。いいえ、満足なんて。わたしはお姉さまを救いたくて仕方がないの」

「救う どの口が言うのよー！」

近付いてくるカミラを見ながら、テレーゼはそつと自らの唇に手

を当てた。こぼす言葉は、誰にも聞こえないほど小さな小さな声だった。

「この口で」

語る唇が、こらえきれないようにゆがめられる。楽しくて、楽しくて仕方がないというように。

「わたし、今日のお茶会も、リーゼロッテさんにお願いをするために行ったんです。お姉さまを助けてくださいって。どんなに意地悪でも、薄情でも、かつてわたしを見捨てた方だとしても。大事な大事な、たったひとりの姉なのですから」

「姉じゃないわ!」

「いいえ、お姉さま。わたしのカミラお姉さま。わたしはあなたの妹で、わたしたちは家族。家族だから、助けるの。わたしはお姉さまとは違うもの」

「黙りなさい!」

テレーゼの正面で足を止めると、カミラはテレーゼに手を伸ばした。カタリナがカミラを遠ざけるように、テレーゼを抱きしめる。まるで本当の母娘みたいだった。

「大丈夫よ、テレーゼ。カミラは興奮しているの」

「まあ、お母さま」

カタリナの呼びかけに、テレーゼが答える。その姿がカミラの胸をかき乱した。

これまで一度だって、カミラがカタリナにかばってもらえたことがどれほどあっただろうか。

記憶を探しても見当たらない。彼女は優しい母の顔で、いつもこう言っていた。あなたは恵まれているのだから、もっと大変な人がいるのだから

だから我慢しなさいと。

そうやってカミラを突き放してばかり。

「私のお母様よ!」

顔をゆがめて、声をからしてカミラが叫ぶ。目の奥が熱い。でも泣いたら駄目だ。

お父様もお母様も、泣くのはわがままだって叱るから。

満たされたカミラが、なにかを求めて泣いてはいけけない。両親がいて、守られていて、不自由ない暮らしができるのだから。

だけど満たされるってなんだろう？ 昔からカミラはいつだって、唇を噛みしめて堪えているだけだった。

「私のもの、取らないでよ！ あんたなんか妹じゃない！ 私の、私だけのお母様と、お父様よ！」

喉が裂けるほどに声を上げ、カミラはテレーゼに掴みかかった。その襟首を掴んでやりたかった。卑怯者のテレーゼを安全な場所から、引きずり出してやりたかった。その化けの皮を剥がしたかった。それなのに、カミラの手はテレーゼには届かない。その前に、なにかがカミラの腕を掴む。

「やめなさい！」

低く鋭い声は、パトリックのものだった。

今さら父親の顔をして、親らしい厳格な怒りをカミラに向けている。娘を守る、立派な父親の顔だった。

「今の言葉を取り消しなさい、カミラ。私はお前の父であり、テレーゼの父でもある。お前たちは本当に姉妹なんだぞ！」

パトリックは、残酷な言葉を吐いたカミラを睨みつけている。

「教えなかった私たちも悪かった。だが、今の言葉は聞き捨てならない。謝りなさい、カミラ。その言葉はテレーゼを傷つける」

テレーゼはカタリナにしがみついている。カタリナはテレーゼを強く抱きしめている。

パトリックはテレーゼとカタリナの前に立ち、カミラの腕を掴んでいる。

カミラは口を開いた。

なにか言おうとしたのに、言葉は出なかった。

ああ。

そういうこと。

テレーゼの母、ノイマン子爵夫人は体が弱かった。子供を産むことは難しいと言われていた。

それなのに、奇跡的に授かったといわれている、一人娘のテレーゼ。それは奇跡なんかではなかった。

なんてことはない、ノイマン子爵の兄夫婦。パトリックとカタリナが、子供を一人あげただけなのだ。

ノイマン子爵にとって、目の中に入れても痛くないほどかわいいテレーゼ。彼をシュトルム家に取り上げたのも、さほど難しい話ではない。カミラを失くしたシュトルム家が、本当の娘を取り戻しただけだった。

なにもかも、単純な話だった。

ノイマン家は爵位が低く、経済的にも安定しない。シュトルム家の援助がなければ存続も難しかった。

テレーゼはシュトルム家の娘。なのに貧しい生活を強要され、たった一つ違いの姉は贅沢に暮らしている。

パトリックとカタリナがテレーゼをかばうのは、後ろめたさの表れだ。カミラが豊かな暮らしをしている一方で、もう一人の娘は明日の生活も危ぶまれる。かわいそうに。お前は恵まれているのに。もっと不幸な人がいるのに。

なんの悪気もない。すべては純粋な親切から始まった結果。優しく、善良なシュトルム夫妻らしい真実だ。

「わかったわ」

パトリックの手を振り払うと、カミラは静かにつぶやいた。

頭の奥が冷めていく。今まで張り続けていた意地は、いつたいな
んだったのだろう。

苦しいとき、悲しいとき。泣き出しそうなとき。カミラは唇を噛
みしめて、孤児院に通った。

もっとかわいそうな人、もっと大変な人のために、豊かで恵まれ
た自分を差し出した。

それは他人のためではない。自分自身が耐えるため。涙を飲み込
むためだった。

だけど、カミラの両親にとっては、あまりに無価値な意地だった。
カミラが孤児院に尽くしても、彼らは少しも心を動かさない。

パトリックとカタリナの『かわいそうな人』は、たった一人しか
いないのだから。

「私は、お父様とお母様の後ろめたさを押し付けられただけなのね」

泣いてしまいそうだった。

それでもカミラは唇を噛む。

こんなことで自分が傷ついてきたのだと、認めたくなかったのだ。

テレーゼがシュトルム家の本当の娘だと知ったのは、まだ六つ
ときだった。

ノイマン子爵家は火の車。いつ没落するとも知れなかった。

父と母は、このころからよくテレーゼに謝罪をするようになった。
苦勞をかけて、辛い思いをさせて、大変な暮らして、ごめんな。ご
めんね。

そんな言葉は聞きたくなかった。本当にみじめになってしまつた。

テレーゼの素性は、その謝罪の言葉の中にあつた。はつきりと告
げたわけではないけれど、聡明なテレーゼには理解できた。

他人なんだ。だから謝るんだ。家族じゃないんだ。そう思うと苦
しかった。みじめだった。誰かに救ってほしかった。耐え切れな
かった。

だけどシュトルム家の本当の両親は、なにもかも知っていて、帰
りたくないとぐずるテレーゼを追い出した。当たり前だ。だって彼
らはすでに、テレーゼを捨てた者たちだ。

助けてほしい。

いつもテレーゼの手を引いてくれた、お従姉^{ねえ}さま。本当のお父さ
まとお母さまは、テレーゼのことを捨てたけれど。お姉さまなら。

行かないで。

そう思ったテレーゼの手を、カミラはなにも知らず、悪いと思
わずに振り払った。最後の最後にすがりついたテレーゼを、カミラ
は裏切ったのだ。

どうして。

家族なのに。姉妹なのに。本当の姉妹なのに。

わたしなら、絶対に見捨てないのに。

相手がどんな苦境にあっても、すぐりつく手を離しはしない。カミラが捨てた手で、テレーゼはカミラを救うだろう。カミラが、テレーゼに救いを求める限り。

わたしは、お姉さまとは違うもの。

ただ、それだけのことだった。

○

テレーゼはカタリナの体を押し返し、パトリックの背中を押しつけて、カミラの傍まで駆け寄った。

驚く両親には見向きもしない。カミラに顔を近づけて、カミラだけに聞こえる声で囁いた。

「かわいそうなお姉さま」

甘い声に、カミラは視線を向ける。カミラに囁くテレーゼは、満ち足りた顔をしていた。

「一度娘を捨てた親ですもの。また捨てるなんてわけがないわ。なのにいつまでも追いつがっていたのね」

「テレーゼ……！」

声とは裏腹に、毒を含んだ言葉だ。そのくせ、おそらくテレーゼは、カミラが記憶している限りで、一番素直な言葉を選んでいる。迂遠な嫌味も皮肉も、今はどこにもない。

「わたしはお姉さまを捨てたりはしないわ。お姉さまがわたしに救いを求めれば、どんな綱渡りだってしてみせる。家族だもの、当然でしょう？」

「あなたの救いなんていらないわ！」

カミラはテレーゼの体を押し返す。パトリックとカタリナが眉をしかめるが、知ったことではなかった。

「意地をお張りにならないで、お姉さま。ご自分のことをもう少し

冷静に考えてみてください。今のお姉さまのお立場では、誰かにするほかにありませんでしょう？ わたしなら、リーゼロッテさんにお話を通すことができますの。お姉さまの罪を軽くすることができますわ」

「結構よ！ 私は悪いことなんてしていないもの！」

断固としたカミラの拒絶にも、テレーゼは答えない。憐れむような視線を向け、頭を振るだけだった。

「意固地なお方。あなたの味方はわたししかないのに。でも、構わないわ。辛くなったらいつでも頼ってくださいっていいの。わたしはずっと、お姉さまに手を差し伸べていますわ」

テレーゼが微笑みながら、カミラに向けて手を差し出した。

カミラは黙ったまま、テレーゼのその手を睨みつけた。

カミラはテレーゼの手を取ることはできない。

テレーゼが妹だから、だから彼女のしたことが変わるわけではない。彼女がカミラを傷つけ続け、陥れてきたのは紛れもない事実。それを許し、あるいは飲み込んで、救いを求めるだけの度量。そんなものはカミラのどこにも存在していない。

それに、カミラは裁かれに王都へ来たわけではない。自分だけが助かりたいとも思わない。

カミラは今、騒乱の最中にあるモーントン。その領土と、アロイスのためにここにいるのだ。

恥じることはなにもない。怖気づいたりしない。だからといって、尊い自己犠牲のつもりもない。

カミラはただ、自分のしてきたことと、アロイスを信じている。

だから裁判の行われる日も、カミラは顔を上げていた。

無数の視線に囲まれても、周りのすべてが敵だとしても。胸を張り、顎を上げ、前を向く。
後悔なんてしていない。

○

もうそろそろ、カミラが王都へつくころだろうか。
今はいない彼女のことを浮かべると、アロイスは疲弊した頭を抱えて息を吐いた。

ウィルマーがエンデ家の統治する、ファルシュの町へ向かったとの報告が入ったのは昨日のこと。それと同時に、反乱する領民たちの動きが少し変わった。繰り返されてきた細かな衝突が、突如として引いて行ったのだ。

クラウスは、攻撃の合図だと言っていた。アインストの戦士を、一斉に放つつもりなのだ。

指揮を執るウィルマーは、手薄になるアインストから離れてファルシュの守りの中へ。エンデ家の重鎮たちと作戦を確認し、領都へ一気に攻撃を仕掛ける腹だろう。

アインストは、モーントンの中でもっとも優秀な戦士たちの町だ。まともにぶつかれば、領都の警備兵でも太刀打ちはできない。ブルーメの町の人間も期待はできない。彼らの大半は享乐的な芸術家であり、戦いを望まない。せいぜい、自警団が自分たちの町を守るだけで手いっぱいだ。

志願兵を集めてもいるが、こちらもあり期待はできないだろう。グレンツェもブルーメも戦いに向いた町ではなく、アインストを相

手取るには無謀すぎる。

アインストとファルシュが敵に回った今、モーントンの戦力のほとんが相手側にあると断っている。誰もがアロイスの不利を理解しているだろう。

この劣勢の中で人を呼び集めるには、アロイスの領主としての希望は不足していた。

優しくて穏やかなだけの、無機質な領主のために、どれほどの人々は命を懸けることができるだろうか？ 長く領主の座にいても、傀儡のアロイスは多くの領民と信頼を築いていくことができなかった。そのことを、アロイス自身が痛いほど自覚する。

カミラさん。

行かせたくはなかった。繰り返す後悔を、アロイスは頭を振って振り払う。今は目の前にある問題を解決し、手を尽くすほかにない。誰が諦めても、アロイスが諦めるわけにはいかない。カミラを守るため、領地を守るため、背を背けずに前を見据える。それが、不誠実だったアロイスの誠実さだ。

とはいえ、さすがに少し、疲れた。

カミラが出立してから五日目、間もなく朝日が昇るころ。アロイスは一人、私室で休んでいた。

アインストとの戦闘になれば、今以上に走り回ることになる。その前に少しでも休憩をとるようと、無理矢理クラウスに部屋に押し込まれたのだ。

クラウスはまだ、アロイスの代わりに人々をまとめている。話したいと言っていたが、ひっきりなしの報告を前に、先延ばし先延ばしになり断っていた。この後、どうにか時間を作ると断っていたが、この調子では断しいだろう。

早く戻らなければと思うのだが、体は重く、鈍い。クラウスの言

うとおり、倒れる前に一度休むべきなのかもしれない。

アロイスは額に手を当てたまま、椅子に深く腰掛けた。熟睡できるほど肝は太くないが、背もたれに体を預けて目を閉じれば、浅い眠りが襲ってくる。

そのまま数刻だけでも眠ろうとしたとき、誰かが部屋の戸を叩いた。

「アロイス様、よろしいでしょうか」

ニコルの声だ。遠慮がちな声に許可を返せば、そっと扉が開かれた。

「お休みのところ、申し訳ありません。どうしてもお渡ししたいものがあつて……」

そう言うニコルの手には、小さなかごが抱えられていた。

かこの中には、不揃いなビスケットが数枚入っている。

「それは……？」

アロイスは椅子に座ったまま、ニコルの持つかごを見やった。ニコルは恐縮した様子で体を縮める。

「あの、これ……奥様のビスケットなんです」

「カミラさんの？」

「はい　ええと、本当は生地だけで、焼いたのは私なんですけど」カミラが王都へ発つ前。練習で作られたきり、焼いていなかったカミラのビスケット生地は、ギョントーの手によって保存されていた。冷蔵の魔道具を最大出力にして、腐らないようにしていたのだと、ニコルは語った。

「ブランド料理長にお願いして、少しお譲りいただいたんです。あの、勝手なことをしているのは、わかっています。上手に焼けるまで、アロイス様には食べさせられないって奥様も言っていたのに」でも、と言ってニコルはビスケットに目を落とした。伏せられた目には、不安と焦燥が滲んでいる。

「奥様は、きっとアロイス様に食べてほしいと思っていたはずですから」

ニコルはきつと、このモントン領で誰よりもカミラの傍にいた人間だ。

カミラに救われ、カミラを慕い、ずっと尽くすつもりでいた。それなのに、今はカミラ一人が遠くにいる。

ニコルは一介の侍女にすぎない。カミラを救う力もなければ、アロイスたちの力にもなれない。それでもなにかをしたくて、居てもたってもいらなかったのだ。

「ええと、ビスケット、置いておきますね。朝早くにお邪魔して申し訳ありませんでした」

ニコルは付した瞳を閉じると、切り替えるようにそう言った。ビスケット入りのかごを手近なテーブルに置くと、そのまま一礼して部屋を出て行く。

ばたばたと駆けていく足音が消えれば、ビスケットとアロイスだけが部屋に残された。

アロイスは一人、重たい体を起こした。

それから、ニコルが置いて行つたビスケットのかごに歩み寄る。

浅いかごの中には、白い布が敷かれている。その上に、丸く成形されたビスケット無造作に放り込まれている。

食欲があつたわけではない。だけどカミラが作つたと聞いたせいだろうか。ほとんど無意識にアロイスは一枚手に取り、口に運んだ。

ビスケットは素朴で、やわらかな味だった。

どこかで食べたような気がする。料理人が作るよりも洗練されていないけれど、ひどく好ましい。この味は。

グレンツェの孤児院で作られたビスケットに似ていた。

違う。

グレンツェの孤児院で作られたビスケットが、似ていたのだ。

遠い昔にアロイスが口にした、忘れられない味に。

顔も知れない不遇の王子。罪人の集う北の流刑地。親に愛されない子供。言いなりの中唯一求めた、変哲のないビスケット。

両親の死と、死に際の魔法。とっておきのおまじない。カミラが

かけた、ささやかな解呪の魔法。
体の奥からなにかが溢れ出す。忌まわしい魔力と、封じられた記憶。

アロイスは立ち尽くす。バスケットを手にしたまま、呼吸さえ忘れた。

「カミラさん」

喘ぐようにその名前を呼ぶ。カミラの黒髪が、名前も知らない、泣き顔の少女と重なる。

「あなたは、また」

見つけ出してくれたのだ。

どれほどそうしていただろうか。

「アロイス、いいか？」

約束通り時間を作ってくることができたのか。クラウドがそう言いながら、許可を待たずに部屋に入ってくる気配がした。

背中に、クラウドが近づいてくる気配がする。だけど彼は、少し距離を置いた場所で立ち止った。

「アロイス？」

その呼び声に、アロイスは振り返る。呆けた顔のアロイスが目にしたのは、クラウドの驚愕だった。

クラウドは目を見開いてアロイスを見つめ、それから顔をしかめ、慌てて顔を逸らした。

「アロイス お前、その目を隠せ」

言われて、アロイスは自分の目元に手を当てる。

目元は濡れていた。頬をしずくが伝い落ちる。これが自分の涙だと、アロイスは少しの間気がつかなかった。

涙が落ちるほどに、人の身には余る魔力が溢れ出る。それは無意

識のうちに、忌まわしき魅了の魔法を形作っていた。

アロイスは胸に手を当て、懐かしい　不慣れな魔力を体に抑え込む。その傍らで、クラウスはいまだアロイスから目を逸らしたまま、かすれた声でつぶやいた。

「思い出したんだな。自分が、本当は誰なのか」

アロイスは無言のまま、微かに顎を引いた。

横目でその様子を見るクラウスの顔には、どこか苦々しさが滲んでいた。

「……王都に行きたいか？」

クラウスの問いに、アロイスは少し返答をためらった。
「……結局は、素直に頷く。」

「ああ」

王都にはカミラがいる。今なら彼女を、取り返せるかもしれない。
「行きたい」

偽らざる本心だ。本当はずっと、追いかけて行きたかった。

クラウスの表情がゆがむ。息苦しそうな顔で髪をかき、残酷な決断をためらっている。

アロイスには、クラウスの気持ちもわかる。ためらうのはクラウスの、どうしようもない人の好きさだ。

「許可はできない」

クラウスは痛ましいほどの渋面で、魔力を隠したアロイスを見やった。苦しげだが、断固とした表情だった。

「さっき、ファルシュ方面から伝令が来た。攻撃の合図が、アインストとファルシュに出たらしい。ファルシュの魔術師はもう動き出している。これから、本格的な戦闘がはじまるんだ」

「……そうか」

「今の俺たちは圧倒的に不利だ。それでも人がまだ残っているのは、正当な領主がお前だと信じているからだ。相手は反乱軍、こっちに

正当性があると示すのは、お前の存在なんだ」

静かな朝。窓の外から鳥の音がする。クラウドの声は、静かな部屋に良く響いた。

「王都へ行きたい気持ちはわかる。俺がお前の立場だったら、なにを捨てても王都へ行くさ！ だってこの土地には、お前を縛るものなんか本当はなにもないんだからな！」

本当は、アロイスにはモーションへの責任はなにもない。民を見捨てて王都へ行っても、モーションの民以外は誰も咎めないだろう。むしろモーションこそが、アロイスを不当に押さえつけてきたのだと、そしられることになる。

「でも駄目だ。今お前がいなくなったらどうなる？ 兵も足りない、士気も足りない。相手の力が圧倒的な状況で、戦いがはじまるんだ」
「クラウド」

「俺だって本当は行かせてやりたい。だけど俺には認めてやることはできない。行くんだとしたら、力づくでも止めてやる！」

「クラウド、わかってる」

掴みかかりそうなクラウドに、アロイスは小さく頭を振った。

この男は、どこまでも好い男だ。体の弱いクラウドは、力づくではアロイスに勝てない。それを知っていて、こんなことを言う。

アロイスは良い友人を得た。数は多くなくとも、アロイスを慕ってくれる者もいる。アロイスが去れば、彼らがどれほど苦境に立たされるかも、わかってしまう。

今すぐ王都へ行きたい。だけどこのモーションもまた、カミラが守ろうとしたものだ。背中を向けることはできない。たとえ、アロイスの土地ではなかったとしても、アロイスにとっては守るべきものののだ。

「私は、お前たちを置いて行くことはできない」

目元をぬぐうと、アロイスはそう言った。努めて平静に、落ち着いた声を出したつもりだ。

安心させるつもりという言葉に、しかしクラウドは悲痛な顔を向ける。

いったい自分は、どんな顔をクラウドに向けているのだろう。アロイス自身にも知れなかった。

「アロイス、すまない」

アロイスの顔を見上げ、クラウドは絞り出すように言った。

「せめてあと少し　状況が少しでも好転するまで待ってくれ。二日か、いや一日でもあれば　」

厳しい状況の中、どうにかして光を見出そうと、クラウドは頭を掻きむしる。

だけど光は遠く、いまだ見えない。

「アロイス様！　お休みのところ申し訳ありません！　急ぎ、お伝えすることがあります！！」

荒々しい声とともに部屋に飛び込んできたのは、一人の兵士だった。よほど急いでいたのだろう。荒い呼吸に、興奮した赤い顔。異常事態だと、すぐに悟る。

嫌な予感に、クラウドもアロイスも表情をこわばらせた。

「報告いたします！　ファルシュからの戦闘指示を受け、アインス

トが　」

王都の中心部に位置する裁判所には、多くの貴族が集まっていた。悪女カミラの末路を見るため。ユリアン王子とエツカルト王子の趨勢をはかるため。裁判には王都の貴族たちの関心が寄せられていた。

裁判所の傍聴席は満員だった。広い王立裁判所の傍聴席を、貴族たちがぐるりと囲む。裁判所の外では、鼻の利く記者たちが一目でも様子を見ようと、裏口や窓に押しかけた。

裁判を見守る人々の中には、カミラの両親であるシュトルム伯爵夫妻もいた。ディアナが二人の付き添いとして控え、テレーゼが意固地なカミラの折れる瞬間を待っていた。

テレーゼの両親であるノイマン子爵夫妻も、不安そうに見守っている。

裁判所のひとときわ高い席に、神に公正を誓った裁判官がいる。その裁判官にほど近い位置に、エツカルト王子が腕を組み、生真面目な顔をさらに固くする。

裁判官を挟んで反対側には、カミラを告発する二人
ユリアン王子とテレーゼの姿があった。

線の細い儂げな美貌。夢中で追いかけた銀の髪。いくら恋して手を伸ばしても、最後までカミラを見てはくれなかった、麗しの赤い瞳。

今、その瞳が冷たくカミラを見下ろしている。

ユリアン王子の隣には、テレーゼが座っている。エンデ家の特徴である金の髪に、王子と揃いの魔力を宿した赤い瞳。恐れと怯え、そしてどこか哀れみを孕む彼女の表情は、嘘か本当か。そんなことはカミラには些細なことだった。

かつて恋した、今も忘れられない相手。ユリアン王子の視線を受けても、もうカミラの心が揺らぐことはない。

王子の告発するカミラの罪は、モーンTONの反乱を引き起こしたことだ。

勤勉で無欲だったモンテナハト卿をたぶらかし、その心を狂わせたこと。カミラに狂ったモンテナハト卿を率いて、領地を荒らし回ったこと。

忠実な使用人たちのおかげで、モンテナハト卿が正気を取り戻し、カミラを遠ざけようとする、今度はモンテナハト卿に毒を盛り、亡き者にしようとしたこと。その罪を、よりによって真にモーンTONを想う忠実な使用人に押し付けたこと。

使用人たちがいなくなれば、モンテナハト卿は再び狂いだす。カミラに操られたモンテナハト卿の奇行に、耐え忍んでいた領民たちも、ついに立ち上がったのだ。

「違うわ」

断固としたカミラの否定に、王子は眉一つ動かさない。腕を組み、一段高いところからカミラを見下ろして、息を吐く。

「違うと証明できるか？」

「アロイス様ならすべてご存じよ」

「……よりによって、気の狂った男を出してくるとはな」

カミラの愚かしさを唾棄するように、ユリアン王子は吐き出した。それから、小さく首を振る。

「モンテナハト卿は今、モーンTONの鎮静化に勤めている。領地を投げ出し、お前の妄言を証明することはできない。対してこちらには、お前の罪を暴く人間がいる」

王子はそう言つと、視線で裁判所の警備兵に合図をした。彼はすぐさま法廷を出て、しばらくしてから一人の人間を連れてきた。

白髪の混じる明るい茶髪はレルリヒの特徴。無機質めいた冷たい表情は、今は見る影もない。

彼女はカミラを見つけると、「ああ！」と悲鳴にも似た声を上げた。

「この女です！ この女がアロイス様を惑わせ、殺そうとした魔女です！ なんと恐ろしい……！」

怯えたように震え、彼女は顔を手で覆う。か弱き老いた女の姿は、人々の同情を誘うには十分だった。

「ゲルダ！」

「間違いありません。ユリアン殿下にはお伝えしました通り、この女が私たちを陥れたのです！ 私の顔を見忘れたとは言わせません。あの蒼白な顔こそ、罪を負う者の証でしょう！」

細い指がカミラを指さす。その指先につられて、法廷にいる人間たちの目がカミラに向けられた。

「モントンの民は、あの女を許しません。それこそが反乱の理由。モントンの総意です。どうかあの罪人に、裁きを……！」

震える声でゲルダが叫ぶ中、カミラは言葉を失くしていた。幽霊でも見るような視線をゲルダに向ける。彼女がどうしてここにいるか、理解できなかった。今までの冷たい仮面を捨て、哀れな老女を演じる彼女が、さらにカミラを混乱させた。

ゲルダの言う通り、カミラは蒼白だっただろう。反論もないカミラを見て、人々はそれを後ろめたさと受け取ったかもしれない。

「この者は、モンテナハト家の侍女長。先代モンテナハト卿から数十年を仕えた忠義者にして、誇り高きレルリヒ男爵家の血の者だ。彼女の言葉に偽りはあるまい」

怯えるゲルダと、立ち尽くすカミラの代わりに、ユリアン王子が立ち上がった。

「異論はあるまいな。この忠臣と、王都を追われた者の言葉、どちらが真か。それは今のモントン領が示している。カミラが真に無実であり、モンテナハト卿が正気であつたのなら、今のモント

ン領に内乱は起きていないはずだ」

ユリアン王子が法廷を見渡す。

「もう明らかだろう。この女は、追放だけでは生ぬるい。私も甘い処罰を反省しよう。さあ、判決を下してやれ」

「待て、ユリアン！ こんな判決は馬鹿げている！」

裁判を終えようとするユリアン王子に、声を上げたのはエツカルトだ。彼は荒々しく立ち上がると、険しい顔をユリアン王子に向けた。

「その女が本当に罪を押し付けられた使用人だというのなら、どうしてここにいる？ モーントンの危機にありながら、どうしてその女だけが王都に來ているんだ！」

「彼女は私が助け出したのですよ。領都に、カミラ・シュトルムを迎えに行く際にね。どうにもおかしいと思ったものですから」

「おかしい？ そんなことで領地の罪人を引き受けたのか？」

「もう少し言えば、リーゼロッテから話を聞いていたからですよ。彼女はモーントン領の出身ですからね。ゲルダという人物像も知っていた。それでも公平を期して、裁判の場で明らかにしようと思ったのです」

「裁判！ これが裁判か！ 彼女には考える間も与えずに、なにが裁判だ！」

エツカルトの怒声にも、ユリアン王子は涼しい顔を崩さない。呆れたように肩をすくめ、首を振るだけだった。

「兄上、興奮しすぎて、自分でなにを言っているかお分かりですか？ 罪人に言い訳を考える時間を与えるなどと、正気の発言とは思えません。ここには確かな論拠があり、証人がいるのです。彼女一人ではありません。カミラの罪を証言する者はまだ控えています」

それから、ユリアン王子は少しだけ声を潜めた。囁くような、しかし法廷に響く声だった。

「今のうちに、裁判に慣れておいた方がいいですよ。いずれは兄上も、あの場に立つかもしれないのですから」

「貴様……！」

「みつともない真似はおやめください。理性のない言葉では、なにも覆りはしませんよ」

ユリアン王子はエッカルトに侮蔑の目を向ける。二人の差は歴然としていた。激昂するエッカルトの言葉を受け流す、悠然としたユリアン王子。態度が、仕草が、声が、ユリアン王子に分があると示している。

口をつぐんだエッカルトから目を逸らすと、ユリアン王子はカミラに向き直った。

「……お前も哀れな女だ。王都を追われ、除け者同士の傷の舐めあい。それさえも断ち切られる」

静かな声で、紡ぐ言葉は冷たい。冷徹なユリアン王子らしい表情。その中に、ほんのわずかにだけ覗く哀れみに、誰が気付くことができるだろう。

「どこにも味方はなく、誰もお前を認めない。罪人の地さえ、お前たちの居場所ではなかった」

追い詰められ、利用され、裏切られ。自分たちも知らぬままに虐げられてきた二人。あがいてもあがいても居場所はなく、認められることもない。守ろうとしたモーントン領さえも、彼らの味方にはなり得ない。

踏み台として押しつぶされ、もうじき消えていくカミラへ向けた、ユリアン王子の哀れみの目。

その目をカミラは睨み返す。

「いいえ」

なんとも言えばいいわ。

娘の愚かさを恨む両親。カミラを蔑む大衆の目。破滅を望む妹に、カミラを陥れるゲルダ。カミラの周りは敵だらけだ。

それでも。

「哀れなんかじゃないわ」

今まで自分のしてきたこと。自分の歩いてきた道。

カミラの恋。出会ってきた人々。

領地で過ごしてきた日々は、カミラにとって確かなものだった。

「……いいだろう」

わずかな同情も消えうせ、ユリアン王子は冷ややかに言い放った。

「では判決をくだせ。」

他に、異論はあるまいな？」

「報告いたします！ ファルシュからの戦闘指示を受け、アインストが」

息を切らせ、兵が声を上げる。
血相を変え、信じられないと言うように。

「アインスト、動きません！すでに動いている一部の兵を除き、そのほとんどが沈黙を保ったままです！」
「なんだと？」

アロイスより先に、クラウスがいぶかしげに問い返した。だが、返答の間もなく次の報告が駆け込んでくる。

「アロイス様！報告します！昨日から続いていたアインストの一部とブルームとの衝突ですが、撃退したそうです！」

「はあ！？あのブルームが！？どうやって！」

「ど、どうにも優秀な指揮があるようで……」

「指揮……」

クラウスが腕を組む。なにか思い当たる節があるのだろう。呆けた顔で、彼は一人息を呑む。

「アロイス様、た、大変です！先日から集め始めていた志願兵ですが、予想以上に集まっていて、支給する装備が不足していると報告が！」

かわるがわるの報告に、アロイスは瞬いた。耳に入る言葉を理解するのに、少しの時間が必要だった。

指先が、体が、心の奥が震える。言葉は出ない。代わりに短い呼吸が漏れた。

思い浮かぶのは、カミラとともに訪れた町々だった。

○

まだ不仲だったころ、はじめてカミラを連れて旅をした。
カミラを知った秋のグレンツェ。

あの時アロイスはきつと、生まれて初めて感情的に怒り、恥じた。

○

「いやだ！ 俺も剣を取るんだ！！」

「馬鹿なこと言うんじゃありません！」

孤児院の老婆がロルフの頭を叩く。血気盛んな跳ねっ返りは、すぐに飛び出そうとする。

「あなたが行っても、迷惑をかけるだけでしょう！ 兵士の方に食事を提供するのも、立派な仕事です！」

「でもお……！」

「でもじゃありません！ あなたになにかあったら、アロイス様もカミラ様も悲しむでしょう。心を込めて、食事を作って、送り出す人間も必要なんですよ」

む、とロルフは口を曲げるが、結局は折れて黙々と手を動かす。孤児院の子供たちが作るのは、グレンツェの兵に差し出す食事と、携行用のビスケットだ。

恩のあるアロイスとカミラのため、戦えない彼らは兵たちの食事係に志願した。少しでも力になれるよう、少しでも役に立てるよう。祈りながら食事を作る。

子供たちの作った不格好なビスケットを、兵士たちはいつも、笑いながら受け取ってくれた。

○

「ねえ聞いた？ この戦い、あの悪役女のせいなんだって」

「聞いた聞いた。あの女がゲルダ様を追い出したせいで、貴族家が怒って反乱したんだって」

グレンツェにあるモンテナハト家別邸。侍女たちが密かに囁き合っている。

「アロイス様もあの女のせいで頭がおかしくなっちゃったって噂。あの力ミラならやりかねないわよ」

「本当だったら私たち、まずいんじゃない？ 早めに身の振り決めないと ねえ、あなたもそう思うでしょ？」

侍女の一人が、背の低い栗毛色の少女に水を向ける。気弱で、臆病で、気が昂るとすぐに泣き出す。いつも誰かに話を合わせてばかりの彼女だが、今は頑として首を振った。

「お……お、思わないわ」

侍女たちは、おや、と少女に目を向けた。

「なに言ってるのよ、あなた。あんなに悪口言ってたくせに。今さらい子ぶるの？」

「言っただけど……今は言ってないわ」

少女はすでに泣き出しそうだ。潤む目元を拭いながら赤い顔を侍女たちに向ける。

「カミラ様はそんな人じゃないわ。わ、私は信じてるから……！」

涙交じりに言い切る少女に、侍女たちは顔を見合わせた。

いつも泣いて押し黙る彼女らしくもない。彼女の強い意思に、侍女たちは軽率な口をおさえた。

○

冬に向かう寒い日々。魔石暴発の轟音と瘴気の中、カミラの無事を祈った。

なのに彼女は、アロイスの心配さえも凌駕して、アインストの町を救い、アインストの人々の心を動かした。

カミラの強さに憧れ、嫉妬した。アロイスを変えたアインスト。

○

アインストは動かない。

もつずいぶんと復興の進む町を眺めながら、マルタはマイヤーハイム家からの指令を握りつぶした。

老いた体は、イルマとフリーダの二人の侍女が支えている。フリーダは最近、ようやく歩けるようになったばかり。彼女のおぼつかない足取りが、冬の災害を思い起こさせた。

アインストは一枚岩ではない。気の早い者たちは、すでに剣を持って飛び出して行ってしまった。訓練された兵である彼らは、モンテナハト家の厄介な敵になるだろう。

だが、アインストの大半はまだここにいる。モーントンの勢力図を決定づける戦力ほとんどが、この町にとどまり沈黙することを選んだ。

アインストはマイヤーハイム家の配下。長く仕えてきた義理がある。

だが、アインストの人間は受けた恩を忘れない。アロイスとカミラ。この町を救った恩人たちに、剣を向けることなどできるはずがなかった。

アインストは沈黙する。切り札は伏せられたまま、表に上がることはない。

それがアインストの、恩への報いだった。

もともと、アインストを出て行った人間までは、責任を負うつもりはないが。

アインストは動かない。だが、アインストを捨てた人間は別だ。町に男たちの姿は少ない。

剣を取った彼らがどこに向かおうが、マルタには知ったことではない。

○

「あんたたち、強いなあ」

窮地を助けられた警備兵が、二人の男に感嘆の声を漏らした。同じ剣を持つているはずなのに、二人の技はすば抜けていた。戦いにも慣れているらしく、判断が早く無駄がない。二人が傍にいるだけで、安心感が桁違いだった。

「やっぱり、アインストの人間は練度が違うな、すげえや」

警備兵は二人の髪色を眺め、改まって頷く。栗毛色の髪は、マイヤーハイム家の血筋の証。本来なら敵に回るはずのアインストの人間だ。

だが、彼らは奇妙なことに、領都の志願兵だった。名前はテオとレオン。わざわざ激戦区に配置を希望する、物好き中の物好きだ。おまけにこの二人の他にも、アインストからの物好きが何人もいるらしい。

「でも、こんなところにいていいのか？ アロイス様の味方したら、アインストに戻れなくなるんじゃないか？」

警備兵の言葉に、テオとレオンは顔を見合わせる。思い悩むような顔ではない。にやりと笑みを交わすような、不敵な表情だった。

「いいんですよ。アインストにいたらなんもできなかったですし」

「あの人に、力になると言った。ここでならずして、いつ力になれ

ると言うんだ」

ぽつりと語るレオンの背後。敵兵が声を張り上げ突進してくる。おののく警備兵とは裏腹に、戦士たちは鋭く目を細め、剣を握りなおした。

○

人々の笑い声が響く、花びらの舞うブルーム。

楽しかった。美しかった。アロイスが見たのと同じ世界を、ブルームの人々も見たのだろう。

雪解けめいた騒動は、モートンの行く先を照らす光だった。

○

伯父の教えも、案外役に立つ。

撃退の報告を聞きながら、フランツは皮肉気に笑った。

アインストに傾倒し、武力に注力した伯父の元、兵のなんたるか、戦いのなんたるかをフランツは教え込まれてきた。こればかりは、クラウスよりもフランツに分があるだろう。

伯父の残した傭兵たち。今度こそ守ると息巻く自警団。これなら、戦いに慣れない志願兵を前に押し出すこともない。

最小の被害でアインストを押し返したと知れば、クラウスはどう思うだろうか。目を丸くするクラウスの姿を想像し、フランツは不敵に笑む。

どうだ兄貴。俺にだって一つくらい、あんたに勝つことはあるんだ。

○

卑怯者？

褒め言葉だ。

小者だつて？

いくらでも言え。

「信念なんて必要ない！ 俺たちは傭兵だ！ 誰がなにを言つたつて、言われたとおりに戦うだけだ！」

はじめはブルームでルーカスに雇われ、金の力でアロイスに鞍替え。仕事が無くなればブルームで管を巻いていた。いつだったか、花屋でアロイスと対峙した男が、今は声を上げて戦場に乗り出す。

「俺たちは卑怯な小心者だ！ だけど勝ち馬を見る目はある！ 戦え！ 今のうちに公爵家に、うんと恩を売っておけ！ 自警団のアホどもには先を越されるなよ！」

わはははは、と笑えば、その自警団のアホに頭を叩かれる。共に酒を酌み交わしたばかり。

犬猿の仲の二つの組織は、入り混じって同じ敵に向かっている。

○

「だからさあ！ 楽隊つてあるだろ？ そついうので志願できないかな」

なにかしたいけど、戦えない。剣など握ったこともないヴィクトルが、仲間たちに訴えていた。

「戦場に出たつて邪魔になるだけだし……いや、怖いって言うんじやなくてさ！」

「この、臆病者」

そんなヴィクトルに、澄ました声を向けるのは、フェアライトだった。

「怖いならじつとしていなさい。結婚を控えた腑抜けに出る幕なん

てないわ」

「し、辛辣……」

肩をすくめるヴィクトルを一瞥して、フェアライトは仲間たちを見回した。バイオリンのヴィクトル。オーボエのオットー。フルートのフィーネに、ドラムのデーター。それから、ヴィクトルの婚約者であるミア。

「あんたたち全員、手を怪我したら楽器が持てないでしょう。その点私は、口があれば歌えるもの。怖ければ引っ込んでいればいいわ。私一人でも十分よ」

兵として、女の力でできることはなにがあろう。

フェアライトに戦う力はない。それでも数合わせにはなるだろう。まかり間違って前線に配置された時を思うと、怖くないわけではない。

だけどフェアライトは、怖いと怯える姿は見せない。平気な顔で、なんてことないように澄ましたまま。泥臭い姿なんて絶対に見せない。フェアライトにとっての格好良さは、そういうものだった。

格好悪い姿なんて見せられないもの。

モーントンの危機。アロイスとカミラの窮地に怯えたままなんて格好悪い。一度くらいは、あの腹の立つ領主の妻に、いいところを見せてやってやりたいのだ。

「……刺繍をしようか」

つんと澄ましたフェアライトに、ミアが言った。

「あなたが無事に帰ってくるように。怪我の一つもしないように。格好いい貴方に似合いの、針を入れるよ」

○

カミラと過ごした一年。

カミラと歩いてきたモーントンの町。

二人の足跡が新しい道を作る。空回りし、腹を立て、怒り、傷つき、悲しみ、喜び、笑った。多くの人に触れ、無数の感情を生み出した。

すべてが今を作り出す。

窓からは、夜を払う朝日が射す。瘴気を含んだ、痛みにも似た風が吹く。

それは暗く冷たい罪人の地。百年以上をかけて踏み固められた土地を変える、新しい風だった。

「いいだろう！」

握りこぶしを打ち合わせ、クラウドが声を上げた。震えるアロイスを見据え、彼はまじめくさって顔を強張らせる。けれど、内心の興奮は抑えきれず、表情は笑みに近かった。

「ここまぜお膳立てされて、固いことなんて言っていられるか！後は俺がどうにかしてやらあ！」

「……クラウド」

「大将のわがままを聞くのも、参謀の仕事だからな。代わりに、必ず連れ戻して来いよ！ あんたひとりだけ戻ったとしても、もうこの土地の人間は誰も納得しないぞ！」

アロイスは頷いた。

アインスト、ブルーム、領都に集う多くの志願兵。アロイス一人では、これだけの人を動かすことはできなかった。

カミラがこの土地にいた。カミラと共に歩んできた。それが今のアロイスを形作る。ハリボテめいた無機質な男を、彼女との日々が本当の領主に変えてくれたのだ。

「カミラあつてのあんた。あんたあつてのカミラだ！ 行つて、帰つてこい。俺たちが、あんたらの帰る場所を守つてやる！」

「　　ありがとう」

自然と口をついて出た。その言葉は、誰に向けた礼なのか。絶え間ない瘴気に満ちたモントンの風。春でも冷たい北の土地。忌み嫌われる魔石の沼。アロイスの守るべき、愛しい領地すべてに向けられたものかもしれない。

「行け、アロイス！　馬車で五日の道程も、あんたひとりなら三日で行ける！」

アロイスは口を引き結ぶ。

疲れた体に力が戻る。今のアロイスに、恐れるものはなにもなかった。

他に異論はあるまいな？

ユリアン王子の言葉に、法廷は静まり返る。

異論を上げるものはいない。シュトルム伯爵は苦々しい諦念をカミラに向け、テレーゼが期待をしている。ディアナはなにもできないもどかしさに顔をゆがめ、エツカルト王子が唇を噛む。

悪役カミラの処断の瞬間に、人々は興奮し、覗き見る記者たちが目を輝かせる。

判決をくだすため、裁判官が口を開く。そのとき。

「待て」

静かな法廷に、低い声が響いた。

「異論なら、ここにある」

カミラの背後で、ざわめきが広まった。

満員の人々が、割り込んできた声に目を向ける。法廷の中心へ向かう声の主に、驚きのまま道を開けた。

乱れた白銀の髪がなびく。男の背の高さが、その髪色をいつそう目立たせた。端正な横顔は少しばかり汗ばんでいて、呼吸は荒い。急ぎ駆けつけてきたのだろうか。顔には疲れがにじんでいるが、澄んだ赤い瞳の力は失せず、人の心を惹きつけた。

突然の乱入者に、誰も彼もが目を奪われた。その美貌以上に、男には視線を集める理由がある。

あの男は誰だ。

男の容貌は、王家の特徴を示している。ユリアン王子でもエツカルトでもない第三の王族に、無遠慮な驚愕と好奇が集まるが、男は

そんな人々に見向きもしない。迷いない足で、ただまっすぐに前に行く。

近づいてくる男の姿に、ユリアン王子が目を見開いた。リーゼロットが視線を伏せ、ゲルダが顔を引きつらせる。エッカルトがはつとしたように身を乗り出し

カミラは振り返った。

こちらへまっすぐに歩いてくる男の姿に、息が止まる。

幻だろうか。なぜここに。遠いモントンにいるはずなのに。

浮かんでくる疑問よりも先に、その名前が口を出た。

「アロイス様！」

カミラの叫びに、ざわめきが大きくなる。

アロイス　アロイス・モンテナハト。悪女カミラが嫁がされた、醜悪なる沼地のヒキガエル。王都で広く知られる噂の醜男と、今の男の姿が結びつかない。

あの姿はまるで　まさしく、王家のそれだ。

「カミラさん」

困惑する人々を背に、アロイスはカミラの前で立ち止った。判決を待つカミラは、法廷の中央、裁判官から見下ろされる位置にいる。裁判官の両脇には、二人の王子。アロイスはユリアン王子に目を向けた。ユリアン王子は顔を強張らせ、憎々しげにアロイスを睨む。「誰か、この胡乱な男をつまみ出せ。これがアロイス・モンテナハト卿であるはずがない。卿とは容姿が明らかに異なる。おおかた、カミラの用意した共犯者なのだろう」

ユリアン王子は、努めて冷静にそう言った。憎しみの表情も一瞬で、すぐに厳正なる王子の顔に戻る。

「それに、万が一本物だったとして、それは女を追いかけて荒れた領

地を捨てるような男だ。そんな男の言葉が信頼に足ると思うか！」

人々へ向けて、ユリアン王子は一喝する。たしかに王子の言う通り。今のアロイスは謎の人物だ。身元も知れない男の言葉が、なんの証言になるというのだろうか？

それでも、ざわめきは収まらない。彼を無下に追い出すには、その白銀の髪はあまりに高貴すぎた。

白銀の髪は、王家の血にしか許されない色だ。王家の遠縁であるモンテナハト卿でないならば、あの髪色はなんなのか。たとえモンテナハト卿であつたとしても、あの姿はなんなのか。

好奇の中心で、アロイスはユリアン王子に呼びかける。

「殿下。まずは私に話を。信頼に足るかどうかのご判断は、その後でも遅くはないはずです」

ユリアン王子が眉を寄せる。却下を告げようと口を開くが、それより先にエツカルトが声を上げた。

「……いいだろう」

「兄上！」

「モンテナハト卿　卿の話を聞こう。なにか確信があるのだろうか？」

ユリアン王子の声を無視し、エツカルトはアロイスを見下ろした。その顔に、体に、なにかの面影を探すように、彼はアロイスの全身を眺める。

「私は卿の話が聞きたい。先に異論を問うたのはユリアンだ。語りたい者に語らせることに、不満はあるまい」

ぐ、とユリアン王子が唇を噛む。この場、この注目の中。エツカルトの言い分まで無視してアロイスを追い返すのは、あまりにも心象が悪い。人気を武器とするユリアン王子にとって、人々の期待を裏切る行為は痛手すぎる。

ユリアン王子は悔しそうに俯くと、誰にも気がつかないように、隣のリーゼロッテに目配せをした。リーゼロッテは不安そうな顔のまま、黙って頷く。

それでユリアン王子の心も決まったらしい。

「……兄上がそこまでおっしゃるのでしたら。いいでしょう。無駄な時間を割いて差し上げます」

「ありがとうございます」

アロイスはユリアンとエツカルトに一礼をすると、背後で経過を見守る人々に向き直った。

人々が侮蔑し、目を逸らしてきた体を晒し、彼は息を吸う。

「私はアロイス・モンテナハト。彼女の無実を知る人間です」
よく通る声で、アロイスは告げた。やはりという声。信じられないというざわめきの中、アロイスの声が響き渡る。

「ですが私の話の前に、ひとつだけ。お見せするべきことがあります」

言葉を切ると、アロイスはカミラに目を向けた。戸惑うカミラに、彼は安心させるように目を細める。

「カミラさん」

カミラを促すように、彼はカミラからユリアン王子に視線を移す。つられて視線を追うカミラに、アロイスは言葉を続けた。

「カミラさん、あなたの魔法を」

視界から消えたアロイスが、傍でささやきかける。柔らかく落ち着いた、何度も聞いてきた声だ。

「あなたの手で暴いてください。足りない魔力は、私が補います」

「……魔法？ なんの魔法です？」

カミラの問いかけに、背後のアロイスが微笑む気配がした。何度も聞いた、優しく

どこか、聞き覚えのある口調。

「かつて、僕があなたに教えた魔法を」

カミラは瞬いた。

なんの確信もないままに、指が自然とひとつの魔法を描き出す。王族のみに知られた、王家の術式。カミラのとっておきのおまじ

ない。真実を暴く、解呪の魔法。

遠い昔。幼い指先が描いた、カミラの特別な恋の魔法。

ユリアンさま……？

カミラの魔法が、アロイスの魔力を受け、ユリアン王子を包みこむ。

リーゼロッテが予期していたかのように、すぐさま別の魔法を描いた。が、赤い瞳を持つ彼女の力も、アロイスには敵わない。わずかな抵抗もむなく、圧倒的な力がリーゼロッテの魔法を巻き取り、ユリアンにかけられた強力な術を剥がし取っていく。

強い魔力の衝突に、瘴気めいた肌を刺す風が巻き上がった。

一瞬の白い光が、人々の目を覆い隠す。

そして光が消えたとき。

王宮さえも眩ませた、長い長い魔法が解ける。

あらわになった視界の中。リーゼロッテの隣に立つのは、ユリアン王子ではなかった。

銀の髪はない。赤い目もない。光沢のない白髪に、赤みがかった茶色の目。少し細すぎるきらいのある、王族とは風貌の異なる美貌の青年。

突如として姿を現したその青年に、カミラには見覚えがあった。

王都にいたころ。カミラが見た、リーゼロッテと歩いていた男だけではない。

「モンテナハト卿……！」

いつだったか肖像画で見た、先代モンテナハト卿。死んだはずの彼に瓜二つの男が、ユリアン王子がいた場所に立っていた。

おののくカミラの背後。カミラのつぶやく声よりも、さらに大きな悲鳴が響いた。

誰かがユリアン王子だった男を指さして、金切り声を上げる。

「王宮の幽霊！ あれは、王宮の幽霊だわ ！！」

長らく王宮を騒がせた、『沼地のヒキガエル』に並ぶ怖い話。王家に恨み持つ貴族の霊だとか、大昔の処刑された王属だとか噂され、今では王に毒を盛ったとさえ言われる存在。美しくもはかなげな、青白い顔のその男は、まさしく王宮の幽霊と呼ばれるにふさわしい容貌だった。

なぜ。

なぜ、王族であつた初代モンテナハト卿は罪人の地へ行つたのか。
なぜ、モーントンの貴族家は近親婚を繰り返したのか。
なぜ、あの地は喜びを禁じ、ただ耐え忍ぶことだけを許したのか。

王家の影。長い歴史。無数の伝統。不可解なしきたり。
真相は知らずとも、想像には難くない。

○

王族が罪人として裁かれるとき。

その多くに、政治的な意図が隠されている。彼は兄弟での政争に負け、無実のまま罪人の土地へ流された。彼を慕う四つの家は、その無実を信じ、瘴気の立ち込める忌むべき沼地まで従つた。

そこから、モンテナハト家は王家の影となる。

かつて、まだゾンネリヒトが他国との戦争を繰り返してきたころ、国境にあるモーントンは常に他国の侵略に晒されていた。グレンツエにある砦。アインストの兵士たち。戦うために魔法研究を重ねたエンデ家。ゾンネリヒトの壁となり、戦争を真正面から受け止めたモーントンは、王家にはできない裏の仕事を重ねてきた。

残酷な実験をした。悲惨な戦地となつた。そしてモンテナハト家は人前から隠され、王家の身代わりとなつた。

だが、それが人々に語られることはない。王家の闇は秘匿され、影は影のまま、戦争の終結と共にその役割を終えた。

そして、モーントンには傷跡だけが残る。

光になりたいと願うようになったのは、いつのころからだろう。モンテナハト家を中心とする貴族家は、これ以上罪人の血を入れることを禁じた。

自らの潔白の証明として、罪人と交わず、その血筋を保ち続けてきた。

不当な追放を認めず、この地を終着点とはしなかった。ここは本来いるべき場所ではない。耐えるだけの土地。罪人の地で満ち足りることのないように、娯楽を禁じ、欲を封じて自らを律してきた。この先、モンテナハト家があるべき場所に帰るまで、彼らには喜びも楽しみも必要ない。

ただ長い年月、機を待ち続けた。

百年を経て、王家に一人の王子が生まれる。誰からも秘匿され、誰にも知られぬ不遇の王子。

同じ年、モンテナハト家にも男児が生まれた。

待ちわびた時がきた。

今こそ、光と影が入れ替わる時。

第二妃の死後、王子は真の姿を知られぬままに、モンテナハト家の男児とすり替えられた。

そうして、男児は魔法で髪と目の色を変え、ユリアン王子となる。王子は北の地で、記憶を封じられて生きていく。

真実を知るのはモントンの貴族家のごく一部。そしてモンテナハト家の使用人の内、特に忠実な者たちだけだ。

あとの者はなにも知らない。なにも知らないからこそ、思い通りに動かせる。

すべては計画通りだった。

転機は二つ。

一つはモンテナハト卿の死。

モンテナハト家は王家の傍流だけあって、強い魔力を持つ一族だ。モーントン開拓の黎明期に混ざった罪人の血や、他家の血をあわせたことで、魔力量は多少減ったが、それでも十分な量だった。

だが、そんな彼らの力でも、王子の持つ魔力には及ばない。先代モンテナハト公爵夫妻二人の力を合わせても、王子の記憶を封じきることはできなかった。

その結果が、魔力の暴発事故だった。夫妻の魔法が王子の反発を受けて跳ね返り、その命を奪ったのだ。

幸いなことに、王子はその事件以降、自ら魔力を封じることができるようになった。夫妻がかけた最後の魔法は、命と引き換えに最高の結果を生み出した。

もう一つは、入れ替えられた『ユリアン王子』の成長だ。

幼いころは髪と目の色だけで誤魔化した容貌も、成長するにつれて、隠しきれない先代モンテナハト卿の面差しを抱くようになる。人前にめつたに姿を見せないモンテナハト家とはいえ、王家には知られた顔だ。偽らなければならない。

容姿を変える魔法は、一部を誤魔化すだけの魔法とは、使用する魔力量が桁違いだった。長らく、王子一人の魔力と、モーントンから支援される魔石で繋いできたが、それもいつしか限界を迎える。

姿を保ちきれなくなるたび、王子は王宮の影でその魔法を解いた。出来得る限り人に見られないようにと注意をしてきたが、その頻度が高まれば、自然と誰かが気付き始める。

青白い顔。死んだモンテナハト卿の姿。突如現れては消える、影のような存在。王宮の幽霊の噂が頻繁に聞かれるようになったのは、

この時期からだった。

しばらくして、エンデ家から最も優れた魔術師が、王子の元へ寄越された。

王子の不足した魔力を補うため、不自然なく、常に王子の傍にいたるために選び出された人間。それが、リーゼロッテ・エンデという存在だ。

二人が傍にいたるために、作り出された偽りの恋物語。
カミラを巻き込んだその嘘が、最初の綻びだった。

○

「卿。お前が」

エッカルトは息を呑み、アロイスを見つめた。その顔に、今は亡き第二妃の面影を見る。

「お前が、本物のユリアンなんだな」

アロイスに語る言葉は必要なかった。なにより、目に映るすべてが真実を告げている。

姿を変えた王子。王家の特徴を示す、アロイス・モンテナハトという男。魔法の気配が残る中、誰もが言葉を失った。

アロイスはエッカルトを見上げた。その目が、懐かしさに細められる。

エッカルトは弟の本当の姿を知らないが、アロイスは彼を知っている。閉じ込められた弟に同情し、母の目を盗んで会いに来てくれた。優しく偉大な腹違いの兄を覚えている。

「兄上。お久しぶりです」

「ユリアン……！」

エッカルトは席を立ち、アロイスの元へ駆け寄ろうと身を乗り出す。

が、その前に静止の声が上がった。

「お、お待ちください！」

焦燥を孕んだ声は、『ユリアン王子』のものだった。彼は手で顔を隠しつつ、エッカルトに呼びかける。

「兄上、よりによってあの男を『ユリアン』ですって？　今の魔法で、目が眩まされたのですか！」

顔を隠すのは、その表情を隠すためかもしれない。抑えきれない情動が、彼の言葉の端々に滲んでいた。

「あの胡乱な魔法が、私の姿を変えたのです！　王族に魔法をかける不遜な男を、まさか誰も信じるはずがない！」

「……………ユリアン　いや、モンテナハト卿」

エッカルトは『ユリアン王子』に視線を向けた。その表情は険しく、確信に満ちている。

「今の魔法を知らぬとは言わせぬ」

カミラが使った解呪の魔法。それは、扱える者は少なくとも、見たことのある人間は少なくない。魔法に精通したものであれば、一目で理解してしまう程度にはよく知られた。

「あれは紛れもなく、王家の術式で紡がれた解呪の魔法だ」

エッカルトのみではない。この場にいる中にも、あの魔法がなにかを知る者はいるだろう。

秘匿されぬ魔法であるからこそ、真実を暴くことができる。彼の姿が偽りであったことの、ゆるぎない証拠であった。

『ユリアン王子』は唇を噛む。この場を逃れる言葉を探し、視線をさまよわせる。

「で、ですが……………」

彼の目が群衆を見る。

好奇にまみれた無数の目。今まで彼が利用し続けてきた、多くの人間の無責任な関心。浮足立つ記者たちに、正義感めいた嫌悪の表情。

「ですが」

一挙手一投足、人の目が見張る。好意的な目は少ない。失望、同

情、義憤。ユリアン王子に与していた者たちの落胆。それから、吐き気を催す好奇心。カミラにずっと与えられてきたものたち。

「……ぐ」

それ以上言葉は出ない。

口を開いたまま、彼は喘ぐように息を吐いた。

「アロイス様」

喘ぐ彼の手を、リーゼロッテが握りしめた。すべてを悟った諦念の瞳で、彼女は『ユリアン王子』に体を寄せる。

「力及ばず、申し訳ありません。あなたのお力になりたかったのに」

「……リーゼロッテ」

「そんな顔をなさらないで。不肖な魔術師ではありますが、私は最期までお傍にいます」

手で隠した彼の表情は、リーゼロッテにしか見えない。リーゼロッテだけが知る本当の顔を見て、彼女は微笑んだ。

それが彼の、無駄なあがきを止める一手。『ユリアン王子』はリーゼロッテの体を抱き、静かに目を閉じた。

○

『ユリアン王子』とリーゼロッテ、ゲルダ。三人は無抵抗のまま、王家の兵に捕らえられた。

そのまま法廷を去ろうというとき。

カミラとすれ違う瞬間、リーゼロッテが足を止めた。

「きつと、あなたたちのことを『運命』って言うのね」

リーゼロッテは笑うようにそう言った。運命。それはユリアン王子とリーゼロッテの恋を示す言葉だ。今となつては、ひどい皮肉めいている。

「あなたを沼地に送ると決めたのは私。だけどなんとなく、こうなる気はしていたわ」

自嘲気味に語るリーゼロッテの腕を、早くしろ、と言いたげに兵が引く。だけどリーゼロッテは動かない。長年の友人に接するように、彼女はカミラに語り掛けた。

「どうして私が、あなたをユリアン様　本物のユリアン様の元へ送ったかわかる？」

カミラは首を横に振る。ずっと、いやがらせだと思っていた。醜い男へ嫁ぐカミラを、笑い者にするつもりだと思っていた。

でも、今は違う気がしている。

「私も、アロイス様が好きだったから」

リーゼロッテは目を細めた。苦しげで悲しげ、親しみがある。胸のいたくなるような笑みだった。

「私たち、光と影みたいね。だけどあなたはユリアン様を変えて、私はアロイス様を変えなかった。それが光と影の差なのね」

『アロイス』と『ユリアン』。二人の進む道は、どちらも茨の邪道だった。カミラはその手を引いて、時にはその頬を叩いてでも正しい道に進ませて、リーゼロッテは邪道を進む彼のため、茨をはらうことを選んだ。

どちらも表裏。光と影。

リーゼロッテもカミラも変わらない。ただ恋をした。その心を支え、力を尽くしたかっただけ。

「悔しいけれど、仕方ないわ。私の恋も、運命だったもの」

兵がリーゼロッテの肩をつかむ。罪を暴いたカミラを恨み、無体をするのではないかと警戒しているのだ。強引にでも連れて行こうとする。

兵の力に、リーゼロッテは敵わない。彼女はカミラから引きはがされていく。

「私、あなたと友だちになりたかった。恋の話、いっぱいしたかった。あなたって、馬鹿で単純で、すごく一途で、嫌いじゃなかったわ」

離れていくリーゼロッテは笑っていた。無数の感情の宿る笑顔の中に、隠された真意はわからない。

だけどカミラには、本心なのではないかと思えた。

「さよなら！」

カミラが聞いた彼女の最後の声は、明るいものだった。

ユリアン王子を奪ったリーゼロッテが憎かった。

自分を嵌めたことを恨んでいた。

狡猾な癖に弱いふりをして、周りを味方に付けるリーゼロッテのやり口に腹が立った。

だけどなぜだろう。きっと きっとカミラもまた、リーゼロッテのことを嫌いではなかった。

同じように誰かを好きになって、同じように追いかけて、どんな手だつて使つてみせた。諦めなかった。悔いなかった。その背中だけを見ていた。

二人はもしかしたら、よく似ていたのかもしれない。

「……………さようなら」

かすれた声で、カミラは去っていくリーゼロッテの背に呼びかける。

それは永遠の別れにはふわさしくない、簡素な言葉だった。ただこれ以外に、言うべき言葉が見つからない。

二人の立場が違えば。この時代ではないならば。別の形で会えたなら。意味ない『もしかしたら』の感情。

短い音に含まれた、言葉にならないカミラの心に、リーゼロッテは振り向かないまま小さく手を振った。

リーゼロッテたちが去り、兵たちも引いた裁判所。

エッカルトは裁判の終わりを告げ、人々に解散を命じた。

記者たちの半数は生き生きとした顔で飛び出し、半数はまだ何かがあることを期待して残っている。

観衆の興奮は冷めない。人々の目は、まだ法廷の中央。裁判をひっくり返したカミラとアロイスに向いている。

「ユリアン、カミラ嬢、お前たちももう退け。ここでは落ち着かないだろう」

エッカルトがカミラたちの元まで歩み寄り、氣遣うように言った。「部屋を用意しよう。積もる話もある。聞かねばならないこともある。だがその前に、少し休むがいい」

アロイスの顔には疲労がある。モントンの反乱から今まで、ずっと気を張り詰め続けてきたのだ。

モントンの反乱はエッカルトも知っている。そこに至るまで、この不遇の弟がどれほど苦労してきたのか。あまりにも痛ましい。「兄上」

エッカルトの労わりの視線に、アロイスが答えた。少し言葉をためらった後、一歩足を引き、首を横に振る。

「申し訳ありません。私はこれからまた、すぐにモントンに戻らなくてはなりません」

「ユリアン？」

「王都へ来たのは、ただカミラさんを迎えるためです。ろくな挨拶もできない無礼をお許しください。積もる話は、またいずれ」

目礼するアロイスに、エッカルトは眉をしかめた。腑に落ちないと言いたげな顔で、彼はアロイスとカミラを見やる。

「戻る……………必要があるのか？」

エッカルトの言葉に、アロイスは苦笑めいた表情を浮かべる。

モントンの反乱は、アロイスを嵌めるために起こされたものだ。あわよくばアロイスを亡き者に、そうでなくとも、その心を折ることが目的だろう。

アロイスの魔力は、アロイス自身が封じたもの。それは彼のくじけた心の象徴。後悔と罪悪感の表れである。

彼らはアロイスの魔力を取り戻させるわけにはいかなかった。主人である先代モンテナハト卿が、命を懸けた記憶の封印。それを凌駕するだけの力が、アロイスの中にあるからだ。

だからゲルダは、あの機にアロイスに毒を盛らねばならなかった。だからカミラと引き離さなければならなかった。守っていたはずの領民による、反乱という裏切りをする必要があった。

モントンのすべては、アロイスへの悪意に満ちていた。人に忌み嫌われる容貌を作り出し、貴族たちは言いがかりめいた理屈でアロイスを責め、力ある使用人たちは慇懃にアロイスを抑え込んだ。

辛く苦しく、今にして思えば理不尽な仕打ちだった。

「お前はモンテナハト家の人間ではない。あの土地に、お前の責任はないだろう。本物のモンテナハト卿を捕らえた今、反乱もじきに沈静化するはずだ」

アロイスの受けてきた苦痛の一端を、エッカルトも想像はできる。あの土地がモンテナハト家の支配下であれば、今アロイスが戻ったところで、誰も歓迎はするまい。むしろ、主家を捕らえたことへの逆恨みで、危機に晒されかねないのだ。

「カミラ嬢も連れては、余計に危険だ。様子が気になるなら、こちらから人をやる。わざわざお前が戻る必要はないだろう？」

アロイスはもう一度首を振る。

エッカルトがアロイスを気遣ってくれているのはわかる。エッカルトの言う通り、反乱ももう長くはないだろう。もしかしたら、アロイスが急ぎ戻る必要はないのかもしれない。

それでも、アロイスには戻る理由がある。

「あの土地には、私のために戦ってくれている者たちがいます」

はじめからアロイスの味方をしてくれていた、グレンツェの民。

不利を承知でアロイスに付くと決めた、クラウスとブルーメの人々。反乱の首謀、マイヤーハイム家の配下でありながら、その意に背いたアインストの決断。

そして、ずっと傍で支えてくれた領都の人々がいる。

「危機の中、彼らは私を王都へ送り出してくれました」

アロイスがカミラのために王都に行くとき、領都の人々はアロイスを引き留めなかった。

クラウスはアロイスの帰る場所を守ると言った。

ギウンターが任せると胸を張り、料理人たちがカミラのいない厨房を『物足りない』と笑った。

ニコルがカミラの帰還をアロイスに託し、使用人たちが旅立ちを見送った。

去り際のアロイスに、領外へ出るまで護衛をしていた兵たちが、敬礼をして言った。

無事のお戻りを、お待ちしております。

「私は、この身の半分をアロイスとして生きました」

エッカルトに向けるアロイスの表情は穏やかだ。だけどそこには、確かな決意がある。

「モントンの領主、アロイス・モンテナハト。あの地には、私を領主として認めてくれる人々がいます」

クラウスは、アロイスの留守を預かる。

彼はアロイスに、行って、『帰ってこい』と言ったのだ。

「私には、帰りを待つ者たちがいます。私の帰る場所を、守る者た

ちがいます。私が守るべき地があります」

誰もが忌み嫌う北の地。罪人の土地モーントン。

瘴気の立ち込める沼地こそ、アロイスの帰るべき場所だった。

「私は『ユリアン』には戻れません。『アロイス』の名を捨てるには、あまりに多くを受け取り過ぎてしまいました」

「ユリアン……」

エツカルトが嘆息する。それから、悩むように少し口をつぐんだ。
「……いいだろう」

しばらくの間のこと、彼は眉間にしわを寄せ、硬質な顔でアロイスを見据えた。

「戻するための馬車を用意しよう。護衛として何人が兵をやる。お前の領地だ。片を付けてこい、モンテナハト卿」

エツカルトの言葉には、アロイスへの誠実さが滲んでいた。アロイスの意をくみ、認めてくれている。

真面目で、実直で、遊びがない。それでいて真摯な、アロイスによく似た男だ。

「殿下 ありがとうございます」

「……落ち着いたらまた、王都に来ることを約束してくれ。今はそれでいい」

アロイスの礼に、エツカルトは少しだけ口の端を曲げると、それだけを言い残し、馬車と兵の手配のために法廷を出て行った。

エツカルトが去った後。カミラはようやくというように息を吐くと、アロイスの胸倉をつかむ勢いで問い詰めた。

「 やっぱり！ まだあっちでは戦いが続いているんですね！？」

「は、はい」

戸惑うアロイスをさておき、カミラは青ざめる。カミラには、アロイスがどうして王都まで来たかの事情なんて知らないのだ。

「アロイス様がここにいていいんですか！ みんな無事です！？」

今、どうなっています!？」

カミラはモントンのために、一人王都へ来た。それなのに、当のモントンになにかあつては立つ瀬がない。

「お屋敷の人たちは!？ グレンツェは、アインストは、ブルーメは!？」

ニコルやギュンター。腹の立つ厨房の料理人ども。カミラが訪れ、出会ってきた町の人々。みんな無事だろうか。

エッカルトのいる間、口を挟む隙が無かった分だけカミラは饒舌だった。あるいは、アロイスがいて安堵しているのかもしれない。張り詰めていた不安が、口について出てくる。

「すぐに戻らないと……! 留守中になにかあつたら、後悔だつてしきれないわ!」

「カミラさん」

勢いづいたカミラを、アロイスが制する。はつとするような声音には、カミラへの信頼と、微かな不安が混じっていた。

「カミラさん。また危険の中にお連れすることになりますが、よろしいでしょうか」

カミラを取り戻すために、王都まで来た。だけどそれは、カミラの身を守るためだ。

真実が暴かれた今、王都に危機はない。エッカルトに頼めば、きっとカミラを丁寧に保護してくれるだろう。

モントンへ連れ戻すより、こちらにいた方が安全かもしれない。そんなアロイスのかすかな不安を、間髪入れないカミラの言葉が叩き崩す。

「当たり前です!」

ぎゅっと両手を握り合わせ、断ることなど微塵も考えずにカミラは言った。

その力強さに、アロイスはなぜだか笑ってしまう。慎重で、考え過ぎで、いつも一歩ためらうアロイスと、彼女は正反対だ。

だからこそ、心地よいのかもしれない。だからこそ、彼女はアロ

イスを変えられたのかもしれない。

だからこそ、こんなに心惹かれるのかもしれない。

「帰りましょう、カミラさん。あなたの帰りを、みんな待っています」

アロイスは目を細め、カミラに向けて手を差し出した。

カミラもためらわず、差し出された手に自身の手を伸ばす。

だが、手を重なるよりも先に、まだ人であふれる傍聴席から声が上がった。

「待って！」

悲鳴にも似た声に、カミラは顔を上げる。

「渡さないわ！ お姉さまの手を取るのは、わたし。わたしが、お姉さまを救うのよ！」

その場の視線が、一斉に彼女に向かう。

視線の先には、傍聴席から人をかき分け、カミラの元へ駆けつける、痛ましいほど必死なテレーゼの姿があった。

「わたしのお姉さまよ！ わたしのお姉さまの手よ！ 勝手に取らないでよ！」

転げ落ちるように、テレーゼはカミラの前へ躍り出る。

「そんな男の手なんて取らないで！ なによ、正体は醜い沼地のヒキガエルじゃない！ そんな男の、どこがいいのよ！！」

テレーゼに向けられる人々の目は冷たい。

ユリアン王子とリーゼロッテの正体が暴かれたことで、王都追放劇でのカミラの立場もひっくり返る。今のカミラは、悪人に嵌められた悲劇の少女だ。

対するテレーゼは、カミラのありもしない罪を吹聴して回っていたことを知られている。カミラを孤立させ、陥れる手腕にかけては、テレーゼはリーゼロッテをしのいでいた。

テレーゼが、カミラ追放後にリーゼロッテと親しくしていたことも、その立場を危くする。テレーゼはリーゼロッテの共犯者。カミラの冤罪の立役者。

彼女は今、カミラを陥れた悪女の一人だ。

「わたしを選んで」

だけど、テレーゼにとってはそんなことはどうでもいい。

自分が救うはずだったカミラの窮地に駆けつけ、かすめ取っていったという男がいる。それがなによりの、テレーゼにとっての危機だった。

「沼地になんか行かないで。そんな穢れた地、お姉さまだって嫌がつていたくせに！」

「テレーゼ」

咎めるようなカミラの言葉を、テレーゼは聞かない。駄々をこねる子供のようにな、くしゃりと顔をゆがめて首を振る。

「行かないでお姉さま」

それは、生まれて初めて見るテレーゼの不安だ。誰の手も取らなかったカミラが、誰かを選んでしまう。嫌われるよりも憎まれるよりも確かな、カミラの喪失に怯えている。

カミラを奪う憎い男が隣にいるのに、テレーゼは戸惑うアロイスを見もしない。彼女の目に映るのは、ただカミラ一人だった。

「わたしの手を取って。わたしがお姉さまを救うの。どんなときだって！」

テレーゼはカミラに手を差し出す。アロイスに張り合うように示された手は、小さくて頼りない。誰も守れない手だ。

「だって家族だもの！　どんなときも寄り添うわ！　苦しいとき、悲しいとき、辛いとき。同じ苦しみを味わいたい。同じ悲しみを受けたいの！　同じ痛みを分かち合いたい！」

家族。

悲鳴じみたテレーゼの声に、ノイマン夫妻が顔を上げる。そんなことを、夢中のテレーゼは気が付かない。

歪んだ顔で、目を潤ませて、頬を赤らめ、幼い日のように泣いている。誰かを求め、誰も取らなかった手を差し出しながら。

「捨てないで、お姉さま。わたしを捨てないで。謝らないで。離さないで。わたしだったら、どんなときでも離さないのに！！」

捨てないで。

謝らないで。遠ざけないで。家族なのに。

同じ重荷を持ちたいの。同じ苦労を分け合いたい。貧乏でもよかったの。苦しくたって平気だったの。

一緒に苦労して、一緒に乗り越えて、一緒に日々を喜びたかったの。家族なんだもの。

謝らないで、お父さま。悲しまないで、お母さま。わたしを捨てないで、本当のお父さまとお母さま。

どんな苦労も平気なの。貧しさなんてどうでもいいの。一緒にいられるのならば、わたしはなんでも我慢できたのに。

誰も本当の家族にはなれなかった。わたしは捨てられた子。生まれてすぐに、家族に捨てられたいらない子。

幼い日からずっと、テレゼは泣き続けていた。

「捨てないで、捨てないで、捨てないで、もう捨てないで、わたしを置いて行かないで！」

すがりつくテレゼを、カミラは見下ろす。

彼女を哀れに思わないわけではない。

気持ちを理解できないわけではない。カミラもずっと、家族を求めている。

だけど、カミラはテレゼには同情しない。彼女はずっと、カミラの欲しいものを持っていた。

「お姉さま」

泣きはらした目で、テレゼは手を突き出す。子供のわがままだ。カミラは少しの間その手を見つめ、息を吸う。

それから、一瞬のためらいのあと　差し出された彼女の手のひらを振り払った。

「その手は、私を救わないわ」

冷たいくらいの確たる声。泣きじゃくる『子供』に向けるには、少し残酷すぎるだろう。

だけどテレゼは子供ではない。かわいそうだと慰めて、仕方ないと許すには、彼女はあまりに多くのことを成しすぎた。

「救うなら、あなた自身を救いなさい、テレゼ！」

「……お姉さま」

強い拒絶の言葉に、テレゼは愕然とする。

すがりつく力も失い、彼女はその場に膝をついた。

そうして小さくうずくまり、静かに嗚咽を響かせる。

最後に求めた姉でさえ、彼女の手を取ってはくれなかったのだ。

テレゼがうずくまると、また誰かが傍聴席から降りてくる。

駆け降りてくるのは、二組の男女。ノイマン子爵夫妻と、シュトルム伯爵夫妻だ。

まっすぐにテレゼに向かうのは、カミラの伯父であるノイマン子爵夫妻。立ち止らずにカミラの元へやってくるのは、シュトルム伯爵夫妻だった。

「カミラ！」

カミラの父、パトリックが、テレゼを拒んだカミラの手を取る。「お前は……お前は本当に無実だったんだな……！」

カミラの空いているもう一方の手を取るのは、母のカタリナだった。長いこと、繋いだことのなかった手の感触に、カミラは息を呑む。母の柔らかい手は、ほんの幼いころにしか知らない。あとはずっと、カミラを叱るただけにあった。

「ごめんなさい、カミラ。信じてあげられなくて……」

泣き出しそうな二人の後ろで、ノイマン子爵夫妻が同じようにテレゼの手を取る。

カミラの代わりに立場を追われたテレゼ。誰にも顧みられなくなったテレゼを、二人は見つめている。

「すまない　　いや」

ノイマン子爵が、口にした言葉を否定する。

「謝罪はするまい。お前も私には謝るな。お前が咎を受けるなら、私も同じ罪を負おう」

「あなたを手放すべきではなかったわ」

体が弱いくせにテレゼのために走り、死にそうなほどに青ざめたノイマン夫人。

彼女は弱々しい手で、しっかりとテレゼを抱きしめる。

「あなたは、私たちの娘だもの」

ああ。

ずっと憧れていた。

カミラが本当に欲しかったもの。

「 私たちは騙されていた！ テレーゼがあんなことをする子だとは思わなかったんだ！」

だけど、永遠に手に入らないもの。それを思い知らされる。

「お父様」

「テレーゼのせいで、お前は苦しんでいたんだな。ああ、すまない……哀れな子だと、甘やかすすぎたんだ。まさか実の姉に、こんな仕打ちをするなんて……」

パトリックの声は、すぐ後ろにいるテレーゼの耳にも届くだろう。泣きぬれて、聞こえていないのは幸いかもしれない。そんなこと、彼は考えもしないのだろうけれど。

「あなた一人を悲しませてしまったわ。ごめんなさい、気が付いてあげられなくて」

「お母様」

「ずっと一緒にいた、一人娘なのに。ああ……嘘に踊らされて、私たちが間違っていたんだわ。あなたをずっと見てきたはずなのに」
はらはらと泣くカタリナを、カミラは見下ろした。カミラとテレーゼ。二人とも、同じ娘だ。自分たちの言葉の向き先を、彼らは考えたことはあるだろうか。

「お父様、お母様」

カミラは強張った顔で二人に呼びかけた。平気な顔をしようとしているのに、どうしても上手くいかない。腹の中には煮えるような声にならない感情がある。なのに二人への熱は、奇妙なほどに冷めていた。

夢から覚める瞬間に、似ているかもしれない。

「私はずっと、違っつて言い続けてきたわ」

「そうだろう。事実、お前は無実だった」

パトリックが頷く。彼はカミラの否定を聞き続けてきた。誰よりも多く、聞いてきたはずだった。

「無実だった　それを、一度でも信じてくれたことがあった？」

パトリックは瞬いた。それから少しして、自分が責められているのだと気が付く。

どうして、信じてくれなかったの？

カミラがそう言おうとしているのだと、理解した。

「……私だって、お前を信じたかった。実の娘だ、信じたいに決まっている！　だけど、あまりにお前に不利な証拠が溢れていた。嘘に騙され、それを信じて……私たちが愚かだった」

相手は国すらも騙そうとした巨悪。翻弄されたパトリックは愚かだったかもしれない。だけど、あまりに強大すぎたのだ。ただ、不幸な出来事に巻き込まれたのだ。

「許してくれ……お前は私たちの、本当の娘。愛しているんだ、わかってくれ……」

愛している。

だから許せと。水に流せと。

カミラには理解できなかった。

愛ゆえにテレーゼをかわいがり、愛ゆえにカミラに許しを請う。

テレーゼを愛する間の、カミラへの愛は。カミラに許しを求めている間の、テレーゼへの愛は、どこにあるのだろうか。

愛がすべてを許す免罪符たりえると、彼らは思っているのだろうか。

カミラとテレーゼを、二人とも引き裂いておきながら。

「行きましょう、カミラさん」

うつむくカミラの背に、低い男の声がかけられる。

アロイスだ。彼は険しい顔でカミラを見やっている。

「お話はもういいでしょう。こちら時間もありません」

「アロイス様」

カミラはアロイスに振り返る。だが、両親はカミラの手を離さない。

まだ、カミラから望みの言葉を聞いていないのだ。

許す。その一言を。

「行かないでくれ、カミラ。私たちの娘。私たちの子供は、お前しかいないんだ」

「耳をお貸しになる必要はありません、カミラさん。行きますよ」

「……あんまりですわ、モンテナハト卿！ 私たちの大切な娘なのですよ！」

カタリナが悲鳴を上げる。アロイスが口にしたのは、家族を引き離す酷薄な言葉だ。信じられない、と言いたげに、カタリナが震えた。

「カミラ、あなたは私たちを見捨てないでしょう？ 愛娘を二人も失えば、私たちは生きてはいけないわ！」

「お前はシュトルム家の娘。もう二度と苦労はかけるまい。シュトルム家のすべてでお前を幸せにしよう。多少なりとも、モンテナハト家の力にもなれるだろう。だから

「いえ」

許しを乞うパトリックの言葉を、アロイスは短く遮った。

アロイスはいつもの、優しい顔ではない。穏やかな表情も浮かべない。冷徹な無表情が、パトリックとカタリナに向けられる。

「必要ありません。カミラさん、私にシュトルム家の力は不要です」

アロイスが再び手を差し出す。見たことのないアロイスの姿に、カミラは戸惑った。

温和な彼の口から、ここまで冷たい声が出たことなど、かつて一度もない。いつかカミラと言い争いをしたときさえ、もう少し相手への気遣いがあったはずだ。

「行きましよう。シュトルムの名など、捨ててしまいなさい。あなたは今もう、モンテナハト家の人間です」

カミラはアロイスを見て、両親を見た。

行かないでくれ、とパトリックが叫ぶ。愛しているのよ、とカタリナが涙する。お前だけなんだ。たった一人の娘なんだ。そう嘆く彼らの背後に、泣き続けるテレーゼがいる。

顧みられないテレーゼの姿を、彼らは振り返りもしない。テレーゼは、罪人に加担しカミラを陥れた悪女。シュトルムの名を穢す娘。そんな娘はいらないのだ。かつてのカミラと、同じように。

「お父様、お母様」

すがりつく二人の手を、カミラは振り払った。王都へ戻ったとき、テレーゼが言った言葉を思い出す。

彼女の言うとおり。彼らは何度でも、きつと同じことを繰り返す。悪いなんて、ひとかけらる感じることもなく。

「また、娘を捨てるの？」

失われた娘の手に、二人は束の間、呆けた。その手がもう、二度と彼らの元に戻らないことに、きつと二人は気が付いていないだろう。

「捨てる？」

心当たりは、彼らにはない。二人とも娘を愛していた。カミラもテレーゼも、どちらも生まれてから今まで、愛し続けてきた。

「お前を捨てたことなんてない。なんてひどいことを言っただ……！ 見捨てようとしているのは、お前のほうじゃないか……！」

パトリックは愕然としていた。カミラの言葉が信じられない。自分たちが、愛する娘を捨てるはずがない。大切に大切に育ててきたのに、娘たちにはその思いが通じない。親にとって、これほど悲しいことはないだろう。

「どうしてわかってくれないんだ、こんなに愛しているのに！」

パトリックの嘆きが法廷に響く。哀れなその響きに、同情をする優しい者もいるだろう。親の心の通じぬことに、苦しむ者は彼らだけではない。共感し、気の毒がり、慰めるだろう。

いずれカミラは、また「ひどい娘」だと言われるようになるかもしれない。テレーゼも同じだ。二人の娘は親を裏切った、ひどい娘。そうなればシュトルム夫妻は、薄情な娘たちに裏切られた、哀れな二人となる。

そうやってずっと、同情されて生きていくのだ。愛しい二人の娘を、永遠に取り戻せないまま。

カミラは首を振った。

好きにすればいいと思う。カミラを薄情者と呼べばいい。親の愛に報いない、悪い娘と呼べばいい。もしかしたら、やはり悪女だったと思われるかもしれない。

でも、知ったことじゃないわ！

心の中で叫ぶと、カミラは顔を上げた。

誰がなんと言っても構わない。自分の選択を後悔はしない。

カミラの前に差し出されたいくつもの手。取るべき手を、カミラは知っている。

だからカミラは胸を反らし、いつものようにつんと顎を上げた。

「さようなら、お父様、お母様。お元気で」

決別の覚悟を込め、それだけを告げると、カミラは二人に背を向けた。

「待つて！ 今度こそ、あたしも一緒に行くわ！」

アロイスと共に法廷を去るカミラの背に、ディアナの声が響いた。呆然と結末を見守る人々の中、ためらわずに追いかけてくる彼女の足音に、カミラは少し笑った。

父より母より親しんだ、カミラの姉みたいな人。

ディアナこそがきっと、カミラにとっての家族だったのだ。

6 - 終章

「アロイス様。アロイス様！ 待ってください！」

足早に歩くアロイスに、カミラは何度目かわからない静止の声をかけた。

カミラの手を引き裁判所を出た後も、アロイスはカミラの手を離さなかった。そのまま城下町を歩き、王都を囲う街壁へ向かう。そこに、エツカルトが馬車を手配してくれているはずだった。

昼から始まった裁判も、騒動の中でずいぶん時間が経っていたらしい。陽はすでに暮れかけていた。王都の路地に西日が差し、夜の気配を孕んだ風が、町々を飾る祝福の花を散らした。

こんな時間に、街壁へ向かう人は少ない。町の中心部を外れ、建物もまばらになった通りには、すれ違う人もほとんどいなかった。

「アロイス様！」

その静かな通りで、アロイスはようやく足を止めた。痛いくらいに握りしめていた手も、ようやく離してくれる。

「どうしたんですか、アロイス様。あなたらしくもない！」

カミラの声を聞かないのも、力加減ができないのも、いつも合わせてくれる歩幅を合わせないのも、すべてアロイスらしくない。追いかけてくるディアナにも気を遣った様子がないことも、普段のアロイスとはかけ離れていた。

思えば、裁判所でカミラの両親に対面したときからずっと、彼は様子がおかしかった。

「怒っていらつしやるんです？ あんなの、私は平気ですのに！」

「すみません、カミラさん」

アロイスはそう言うと、ためらいがちにカミラに振り返った。ばつの悪そうな、それでいて、まだ昂りが収まらないような、どうにも渋い顔である。

「人前で、あなたの両親を貶めてしまいました」

「あんなの、貶めるうちに入りません！　だいたい、アロイス様があんなこと人前で言わなくなつて、私、自分で言い返せましたわ！　」

カミラは小さい子供ではない。親が怖い年は過ぎた。腹が立つて、許せなくて、認められないとき。今のカミラはきちんと言いたいことを言える。

アロイスがカミラのために、不要な後悔する必要なんてなかったのだ。

「わかつています」

アロイスの表情は苦々しい。渋い顔のまま、抑えきれないように吐き出した。

「でも、私の腹が立つたんです！」

不機嫌なアロイスの声に、カミラは面食らった。

誰のためでもなく、自分のため。彼は自分の腹が立つたから、人前で強固な態度を取り、強引にカミラを連れ出したのだと言う。

「みつともないところをお見せしてしまいました」

「いえ……」

恥じるアロイスに、カミラは首を振る。穏やかならざるアロイスの顔を、しばし見上げた。

アロイスは、腹を立てたことがなかった。

誰かに強い感情を抱くことがなかった。

いつも穏やかで、感情を揺らすことは少なかった。泣いたり、笑ったり、怒ったり、悲しんだり。いくつもの自分の感情を抑え込み、他人を優先するばかりだった。

「アロイス様」

他人本位で、感情を殺し、人の言葉ばかりを聞く「良い子」だった。

そんなアロイスを、カミラは知っている。

「わがままになられましたね」

アロイスの眉間には、しわが寄っていた。カミラの視線に口を引き結び、どことなく居心地が悪そうだった。

ずっと見つめるカミラを、アロイスは窺うように見やり、やはり彼らしからぬ素っ気ない口調で言った。

「あなたがいるからですよ」

ふ、と笑い出したのはどちらからだっただろう。

なんだか妙におかしかった。

苦々しさと、痛ましさと、喪失と、重荷を下ろしたような解放感があった。息苦しさが波のように引いて行く。失った代わりにカミラが得たのは、自分で選んだ新しい道だ。

笑って、笑って、笑ってから、少し目の端が滲んだ。

「カミラさん」

気づかわしげなアロイスの声に、カミラは慌てて目元をぬぐった。知らない間に涙が出るなんて初めてだ。苦しいとき、悲しいときであれば、いつも歯を食いしばって耐えることができたのに。

「すみません。なんだか、安心してしまっただけ」

妙に気が抜けてしまったのだ。アロイスが来てくれたことに安堵した。自分で思うよりずっと、カミラは怖かったのだろう。それでもうつむかないために、カんでいた感情が、アロイスのせいではころんでしまった。

そういうときにも泣けるということ、カミラははじめて知った。「ありがとうございます、アロイス様。来てただけで、嬉しかったです」

涙をぬぐって、カミラはまた笑う。まだまだ安心するには早いけれど、少しくらいはいいだろう。ずっと気を張り詰め続けてきたのだ。

「……カミラさん」

アロイスは、そんなカミラの泣き笑いを、しばし呆けたように見ていた。

瞬き、口ごもり、一度目を伏せ、息を吐く。手を上げかけて、一度引く。落ち着かない仕草だった。

「もう一つ、わがままを言ってもいいでしょうか」

「はい？」

「あなたがよろしければ、ですけど」

カミラには、アロイスの意図がすぐに読み取れなかった。

アロイスはカミラを見つめている。はじめに会ったときと比べ、すっかり痩せた体。高い背丈は変わらず、銀糸の髪が風に流れる。

西日を受けて、長い影が伸びる。影がそつと、カミラの頬に触れた。肌荒れはもうない。肉厚な手は、すっかり骨ばった男のものになった。今の彼を見て、沼地のヒキガエルと呼ぶ人間はいないだろう。

「私は、あなたに認めていただけの容姿になれたでしょうか」

端正な顔が、不安そうにカミラを見やる。優しい赤い瞳が、かな欲を隠している。感情を殺しきれない、カミラに見せたことのない男の顔だった。

そこで、ようやくカミラも気が付いた。

おののき、俯き、反射的に足を引く。

離れていくカミラに、アロイスは悲しげに眉を寄せた。拒絶と受け取り、傷ついたのかもしれない。

だとしても、カミラには言っておかなければならないことがある。

「わ、私は！ 私は、あなたがユリアン様だとわかったから認めるではありません！」

ユリアンだから、恋をしたわけではない。ユリアンだから、受け入れるわけではない。

「あなたがアロイス様だからです」

ぐつと手を握りしめ、俯かないように力を込める。頬が赤くても、耳まで赤くても、カミラはアロイスから目を逸らさない。

「あなたが本当は誰であってもいいんです。顔も、姿も、本当は関係ないんだわ。……そりゃあ、もちろん良い方がいいけれど！ でも、それは大事なことでなくて！」

もしもアロイスがまた太ったとしたら、カミラは必死になって痩せさせるだろう。だけどそう。尻を叩いて肉を引っ張り、痩せさせたいと思うのは、この先きつとアロイスだけ。そういうことなのだ。口がめちゃくちゃなことを言う。言いたいことは伝わっているだろうか。額から妙な汗がにじむ。動悸がして、熱を持って、目の前が眩むような心地だった。

「私と一年を過ごした、アロイス様だから………いいんです!」カミラが恋をしたのは、醜い『沼地のヒキガエル』と呼ばれた男腹を立て、衝突し、歩み寄り、手を取った。

笑って、泣いて、触れ合った。ここまで共に歩んできた。すべての相手はアロイスだった。

「わかっています」

アロイスは笑った。光の下。屈託のないその笑みは、誰よりも美しく魅力的だった。

それから、もう一度カミラに手を伸ばす。もうじき暮れる西日の下、やわらかい風が吹く。

祝福の花が舞う。北に向かう春の風に乗って、花びらが黄昏の空を彩った。

近付いてくるアロイスの影に、カミラは戸惑った。嫌なわけではない。きつと嬉しいのだ。だけど、どうすればいいのかわからない。困惑の中、ぎゅっと目を閉じるカミラに、アロイスは愛しさを込めて口づけた。

6 - 終章（後書き）

6 章 終わり

次回でエピソードです。

ディアナは空気を読んで、少し距離を置いています。

終章

「お、帰ってきた」

早朝。領都にあるモンテナハト邸の窓から、見覚えのない馬車が向かってくるのが見えた。

領境で報告を受けた通り。王家の紋のある幌馬車だ。

クラウスのつぶやきに、たまたま傍にいたニコルとギユンターが顔を上げる。競うように窓辺に向かい、外に身を乗り出した。

「本当だ！　おい！！」

ギユンターが手を振るが、まだ遠い馬車はもちろん気が付かない。
「奥様！　アロイス様　　！！」

ニコルも隣で声を上げる。アホな二人だと嘆息していると、声につられて他の使用人までそわそわしだした。
屋敷全体が、にわかに活気づく。

○

瘴気を含んだ南風の中、カミラとアロイスは屋敷の人々に出迎えられた。

敬礼する兵たちに、無事を喜ぶ従僕たち。そわそわしているメイドに、ご馳走を作ると息巻く料理人。人々の顔は明るい。

「奥様！」

取り巻く人の輪からニコルが駆け出て、馬車を降りたカミラに近付いた。

「ご、ご無事でなによりです……！！」

半泣きのニコルに、カミラは言葉を返せなかった。慰めがわりに頭を撫でつつ、周囲の顔ぶれを見回す。

カミラが出たときは、誰も彼もが神妙な顔をしていたはずなのに。

想像していた領都の姿と、ずいぶん違う。

「反乱は？ 戦いは？ マイヤーハイム家とエンデ家の謀反は！？」
王都で死ぬ思いをしていたのに、拍子抜けである。裏があるのではないかとさえ思えてくる。

「あー、それ。なしなし。おしまい！」

一人青ざめるカミラに、軽薄な声がかけられる。聞き覚えのあるその響きに、カミラはぎよっとした。

「クラウス！ なんでここに！？」

レルリヒ家は、モンテナハト家に敵対していたはずだ。はっとして周囲を見回せば、兵の中にも見知った顔がいる。栗毛色の髪の、体格のいい二人の青年は。

「テオ！ レオン！ あなたたちアインストはいいの！？」

カミラの視線に、レオンが生真面目に会釈をし、テオがいたずらっぽく片目を閉じた。

「どういうこと……」

「自分たちの人望に感謝するんだな。お前らはモーントンの半分以上を味方につけ、孤立したファルシュが降参した。それが、今朝のこと」

口を開いたまま、カミラは息だけを吐き出した。唐突のことに、頭の整理が追い付かない。三家が敵に回っていたはずなのに、いつの間に構図が変わっていたのだろう。

それに、ファルシュの降参。ちょうどカミラたちが戻るのと同じころとは、どういう偶然だろうか。

いや。

偶然ではないのか。カミラが王都から戻ると同じころ、本物のモンテナハト卿の結末がファルシュに知られたのだろう。彼らは主家を失い、戦う理由を失くしてしまったのだ。

「細けえことはいいだろうが！ 祝勝会だ！ いいときに戻ってきた！」

クラウスを押しつけ、ギュンターが浮かれた顔で割り込んでくる。

腕によりをかけると言いながら、たくましい腕をめぐりあげた。

それから、ふとカミラの後ろに目をやる。

「なんだ、見たことのない姉ちゃんがいるな？」

ギョンターが見ているのは、今度こそカミラとともに来てくれたディアナだ。興味深そうに窺う彼女の姿に、ギョンターは少しばかり呆けたようだった。

「美人だなあ」

「見る目あるわ」

あはは、と笑うと、彼女は怖じる様子もなく前に出て、カミラの肩を叩いた。

「こんなところで暮らすことができたのね」

ディアナは横目でカミラを見やると、微かにその目を細めた。にやりとした笑みは、しかしすぐにカミラから逸れる。カミラを囲むギョンターやクラウスを見て、ニコルに目を向ければ、彼女は怯えるようにびくりと跳ねた。

「ど、どなたですか、あなた」

「あたしはディアナ。カミラの侍女っぽいことをしているわ」

「侍女！？ お、奥様の侍女は私です！」

「知っているわ。不器用な子犬っぽい子がいるって、さんざん聞いているもの！」

「犬 ！？」

悲鳴じみたニコルの声。少し恨めしそうな顔。

クラウスがけらけら笑っている。ギョンターが苦笑しながら不得手そうに慰めて、それを見て「似合わない」厨房の仲間たちがまた笑う。それがまわりに広がって、いつの間にか妙に賑やかになった。

カミラはそれを、一步離れて見つめる。

目に映る景色は、少し不思議だった。ブラント家のギョンター、レルリヒ家のクラウス、エンデ家のニコルに、マイヤーハイム家のテオとレオン。それに、領都の人たち。モーントン中の人たちがこ

ここにいる。百年以上が過ぎた今も、モンテナハト家の下に集まってくれている。

今この場にいなくとも、力を尽くしてくれた人々が、もっとたくさんいるのだろう。それが不思議で
嬉しかった。

「カミラさん」

いつの間にか、カミラの傍にアロイスが並んだ。彼もまた、人々の騒がしさに入らずに、カミラと共に眺めている。

「カミラさん。私はこの土地で、大切なものが増えました。たくさんの人に触れ、友ができ、私を慕ってくれる人々を得ました」

「アロイス様」

「帰りを守ってくれる者がいました。帰りを待つってくれる者がいました。あなたに出会い、あなたを知りました。
だからなん
です」

アロイスは前を向いたまま、目を細めた。肌に触れる空気は、王都に比べてまだ冷たい。冬は雪に閉ざされて、年中瘴気の渦巻く地。風が吹くたびに、アロイスの肌はちくりと痛む。

それすらも。

「私は愛しい。あなたが。あなたのいる、この場所が」

カミラはアロイスを見上げた。アロイスもカミラを見やる。どちらともなく、手がつながれる。

なにかもが解決したわけではない。領地にも犠牲が出た。アロイスに反発するものも、まだ少なくはないだろう。

だけど、アロイスの大きな手は。カミラの迷わない手は。きっとこの先、どんなことでも乗り越えていける。

「愛するものを、守らせてください。カミラさん
あなたの
傍で、ずっと」

風が吹き、雲が流れる。笑いさざめく声。朝の光が眩しい。風の中できらめいている。

影であつたモーションを照らす、夜明けの光だ。

おわり

終章（後書き）

ここまでお読みいただきありがとうございました。

思いがけず多くの方に読んでいただけて、たいへん光栄でした。
番外編や後日談など、いつか書きたいなあとは思っていますが、今作で真つ当な人間たちを書きすぎたせいかな、今は頭のおかしな話を書きたくて仕方ありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<https://ncode.syosetu.com/n8091eb/>

悪役令嬢は旦那様を痩せさせたい

2018年3月11日14時09分発行